妄想戦記2nd Mission

QOL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ１７５２Ｎ

【作者名】
ＱＯＬ

【あらすじ】
転生した先は異世界。
しかもリリカルとフロントミッションの要素が渦巻く戦争まっただ中の世界だった。
これはその世界に生き、跳ばされ、ただひたすら戦い続けた男の物語である。

前作「妄想戦記」の続編

「新スキル、陣地設営前編」（前書き）

指摘があった為少し修正

「新スキル、陣地設営前編」

「新スキル、陣地設営前編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅなのは

フェン君が帰ってきてから、気が付けばすでに3週間近くが経過しました。その間にもフェン君は、時空管理局に小さいけど次元震を起してしまった事情を説明しに、アースラへと行ってリンディさんに説明をしに行きました。

次元断層は起きなかったけど、次元震をおこしちゃったので、リンディさん達は頭を抱えたそうです。だけどそれにはちゃんとした理由があったし、キチンと自首に近い形での自己申告をしたので、リンディさんにじょーじょーのしゃくりょーのよちがあるという事で、無料奉仕をしばらくするという事で纏まったらしいです。

うんと、言葉の意味は難しくて良く解らなかったけど、お手伝いする事で罪を軽くするんだってユーノくんがいってたの・・・時々ユーノくんの方が日本語に詳しい時があるんだよね。

そんな訳でフェン君は今もはやてちゃんの家に住んでいます。
時たま民間協力の魔導師として違う世界に出動している以外は基本家に居るんだそうです。
あと、フェン君が家に居ると、何故か動物たちがはやてちゃん家に集まってきます。
不思議な事にフェン君の元に来る動物たちは吠えたりとか騒いだりしません。

はやてちゃん家にくる動物たちは皆不思議と礼儀正しいコ達が多いの。
この間はオレンジ色のネコさんが自分の子供の子猫を見せに来てくれてたんだって。
はやてちゃん達にも触らせてくれたと、電話ではやてちゃんが話していたのを聞いたの。

その話の中で、ヴィータちゃんが庭でオレンジ猫さんが、二本足で立って歩いてたのを見たって言ってるのを聞いたって、はやてちゃんが言っていたけど・・・そんな筈ないよね？
ネコは二本足じゃ立てないし、歩けないもの。
ソレが出来るなら、きっとその猫さんも誰かの使い魔だよ。

＊＊＊

さて、今日は久々にユーノくんとはやてちゃん家に遊びに来まし

た。
考えてみたらフェン君が戻って来た日に泊ったあの日から来てない気がする。
だから、この家に来るのも久しぶりな気がするの。

「こんにちはー、遊びに来たよー！はやてちゃん」

「こんにちわー」

「お、いらっしゃーい。二人ともゆっくりしてってやー」

まだ松葉杖だけど、はやてちゃんが出迎えてくれた。
あれ？でも、他の人達は？

「ねぇはやてちゃん」

「ん？なんや？」

「他の皆は？」

「ん？家におるで～、いまちょっと出て来れへんけどなぁ」

「「？？？」」

家に居るけど出て来れないってどういう事なんだろう？
ユーノくんと思わず顔を見合わせたけど、ユーノくんも良く解ら

ないって顔してた。

「とりあえず玄関やとアレやから、あがってもええで～」

「あ、まってよはやてちゃん！」

すたすた先にすすんじゃうはやてちゃんに、続いて私たちもあがらせてもらう。

他の人達も家に居るって聞いていたから、てっきり奥に居るのかと思ってたけど・・・。

「あ、ヴィータちゃん。こんちわ」

「おッス。ユーノとにゃ・・・なのは、久しぶり」

「にゃはは、後少しだね」

「でも最初よりかは大分なのはの名前言えてるんじゃないかな？」

「練習したからな。あとユーノ、一言余計だっての」

ヴィータちゃんは居たけど、他の人達は見当たらない。

どうなってるんだろう？

……

……

……

とりあえず、外にはまだ余り出られないはやてちゃんが居るので、みんなでＴＶゲームをする。

なんかインドアな感じだけど、外は暑いから気にしない。

今ココには４人居るから対戦系のゲームをしようって事になり、そして――――

「ちょ！Ａ－１０でストールターンやって！？――しもた！あー、私のトーネードＡＤＶが・・・」

「うわ！僕のグリペンがすれ違った一瞬で穴だらけ！？」

「・・・なんで攻撃機で戦闘機動取れるんだよ。しかもチョイ避けするから攻撃当たんねぇ」

「えっと、この飛行機飛行が安定してて当てやすいの」

「「「・・・・（ぱねぇ）」」」

皆でやるこのテレビゲーム、確かエースコンバットＶＳだったけ？機体の動きのリアルさがウリのゲームで、世界の戦闘機で最大四人まで対戦可能。

ハードにもよるけど、操作出来るどの機体にも結構癖があるの。

ちなみに私が選んだのはＡ－１０Ａサンダーボルト?。
重装甲と強力な武器が魅力の戦闘機で、実際攻撃機だから結構機動性は悪い機体。
だけど、その分飛行は安定する機体だから、長距離からでも機銃を当てやすいの。

「まったく、ゲーム歴が長いはやてさんが負けるとは思わんかったで。このゲームで負けたんは二度目や」

「はやてが負けたの?誰に?」

「それはなユーノクン、フェン君や。ちなみに使われた機体はＦ－４Ｅ、地上用ロケットランチャーを空中で戦闘機に当てるとか反則やろ・・・」

「「「うわぁー」」」

ロケットは射線が機銃とほぼ同じだけど、速度が遅いから当てづらいのに・・・。
流石はフェン君、ゲームでも普通じゃない事をやってのけるの。
あ、そう言えば、今日フェン君に会って無い様な・・・。

「さて、そろそろおやつ時やし、みんなを呼ぶから待っといてな」

「あ、うん」

はやてちゃんはそう言うと、ポケットから何やら小さな四角い箱みたいなモノを取り出した。
ソレに付いているボタンみたいなモノを押して「おやつやでー皆」と喋った。
何してるんだろうって思ったんだけど、はやてちゃんはコレで良しって言って、そのまま手に持ったモノをポケットにしまったの。

「・・・・ん？」

「どうしたの？ユーノくん」

「いや、なんだか足元が微弱に振動している様な」

そう言えば何かが振動している様な・・・そう思った瞬間、いきなりリビングの床板が開いた。
え？なになに？何が起こってるのと驚いていると、カパっていう音とで床が開く。

そしてリビングに聞いたことのある声が――――

『フェンたんｉｎしたお！』

「やめいバカ」

――本当に、はやてちゃん家はどうなっちゃったんだろう・・・・。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

――時間は少し巻き戻り、俺が次元震の説明の為に管理局に訪れていた時の事。

アースラに滞在中、俺はこっちに戻って来てからあることをすると決めていた。

ソレは八神家の防衛力の強化及び改造を行うという事。

ジェニスに襲われたあの日の事を教訓に今まで考えていた事だ。

今までもグレアムさんがかけたと思われる認識阻害系術式を利用した結界。

リインフォースが張った侵入者探知の術式など、魔法的な防衛力はある。

だが、如何せん拠点としては普通の家だった。

元々普通の家であるから、防犯はともかく侵入者に対して非常にもろい。

そんな訳で、俺は八神家の防衛力強化を図ろうと思った訳である。
以前みたくはやてがさらわれてしまうとかそう言うのが嫌だったのだ。

しかし、一つ問題があった。
確かに強化は行えるが、余りに露骨に強化すると目立つ事この上ない。
かと言って何もしないというのは論外であるし、どうすればいいか考えた。

とはいえ、そうそうにいい案が浮かぶ訳も無く、俺はアースラ内を歩いていた。
一応次元震を“起した際に近くに居た”という事になっている俺は拘束とかはされていない。
いやまぁ、勿論アースラに乗った時点でヴィズは取り上げられてはいるけど、それ以外は自由だ。

「お、いたいた。フェン、ちょっといいか？」

とはいえ、メンテナンススタッフのマリーさんが、
純正ＵＳＮ式でもあるヴィズを見て怪しげな笑いをしていたので、
今頃解体されて無いか心配だが・・・。
ヴィズは自分を守る為の魔法壁くらい生み出せるから大丈夫かな？

「おい、無視するなフェン」

「なんかようか？クロノ」

「何だ。やっぱり聞こえているじゃないか」

「いや、考え事をしていたから、気がついたのはさっきだよ」

目の前にクロノくんが居て、俺ぁちょっち驚いていたりする。
気が付けば俺が滞在しているアースラの区画から随分と離れた所に来ていたようだ。

「また書類整理でも手伝えってか？」

「うむ、ソレもあるが」

「・・・（あるんかい）」

何でだか知らんが、俺は時たまコイツの手伝いをしていたりする。
コレも奉仕の一環らしい、なんつーか、アンタあった時より強かになってませんか？

「まぁちょっと来てもらいたいんだが、大丈夫かな？」

「ん、大丈夫だ。どちらにしろヒマを持て余してたし」

「それじゃついて来てくれ」

「Ｙｅｓ，ｓｉｒ」

ま、大方エイミィさん辺りに呼ばれたのかと思い、素直に彼の後に付いて行った。

だが、彼に案内された部屋に入ると――

「ふむ、キミがフェン・ラーダーくんかね？初めまして、私はギル・グレアム。時空管理局では提督の地位にいる男だ」

「・・・・・」

そこに居たのは一見物腰静かな老紳士。

だが、内包している雰囲気はたたき上げの人間といった感じ。

管理局員では珍しい類の気を放つ人間に、少しばかり戸惑いを見せてしまう。

「？おいフェン」

「・・・ハッ！申し訳ありません。元ＵＳＮ軍、特殊機構強襲魔導師連隊ストライクワイヴァーンズ所属、フェン・ラーダー中尉で有ります」

沈黙していた俺を不審に思ったのか、隣に居たクロノに肘で小突かれた。

どうにも相手の雰囲気に呑まれてたいたらしく、俺はＵＳＮ軍式

敬礼を行っていた。
というか、何で貴方がココに居るんですか、ギル・グレアム提督さんよ？

「ふむ、楽にしたまえ」

「感謝します」

ともあれ来たからには仕方がない、無視する訳にもいかないしな。
そう言う訳で俺はグレアム氏とＯＨＡＮＡＳＩ・・じゃなくてお話をする事になった。

まぁ表向きは将来有望な人間を管理局にっていうスカウトが目的らしい。
クロノがグレアム氏の使い魔に弄られているのに苦笑しつつも色々と話しをした。

そう言えばあの使い魔姉妹、リーゼ姉妹だったか？
なんか妙に好意的な目で見られてたのはなぜだろうか？
あった事は無い筈だったのだが・・・はて？

しばらく話していると会話の中で非常にあっさりとだが、はやて

についての話題を暗喩で出された。話し方からするに、どうやら今までの俺の行動は完全に監視されていたらしい。まさかねぇ、闇の書からバグを吸い取った所まで知られてたとは思わんかった。その事を話したのはヌコ姉妹だけだったんだがなぁ・・・。

とりあえず一回目の接触で、グレアム氏には闇の書の封印を諦めたという事はわかった。正確には闇の書が無くなってしまい、また今のはやて達の生活、交友関係やその他を考慮した。その場合デメリットが大きすぎるという考えに至ったらしい。

本心でははやて達を心配しているのだが、私情とは別の客観的な視点で物事を多少冷酷に考えられる辺り、凄い人だと感じた。

人間と言うのはその性質上、そうそう物ごとを割り切れるモノでは無い。

グレアム氏は八神はやての孤独を知る人間でもある。

だが逆に闇の書がもたらした災厄についての当事者でもあるのだ。

管理局員として、はやてに罪の意識を感じつつも、闇の書から被害を受けた人々を知る者として行動した。そう言った意味で、グレアム氏はとても強く高潔な精神を持つ人間であり信用に足る人間であると言えるだろう。

この人は管理局員ってよりかは、軍人とかに近いのかもしれない。

もっとも闇に書に関してはまだ思う所もあるみたいだが・・・。

彼の場合これまでの闇の書との関係を考えれば仕方がないと言える。

ともあれグレアム氏はもうすぐ管理局を自主退職し、これからもはやての生活面の援助もそのまま続行してくれるつもりであるらしい。コイツはある意味頭が上がらねぇな・・・また話をしたいと思ったが、彼とはあんまり接触しない方が良いだろう。そんな訳でこの話はそこで終わった。

表向きのスカウトの話しは家族を心配させたくは無いという事で断り、この最初で最後の対面は終わりを告げる事になる。とりあえずグレアム氏の連絡先を貰えたのはありがたかった。ソレも魔法系通信とグレアム氏が地球で使われている場所への連絡先の二つ。

つまりはもし何かあれば頼っても良いという事なのだろう。
クロノが見ていた為、口には出さなかったが連絡先を渡される時に軽く頷かれた。
流石はイギリス出身の紳士、メッチャ様になってるぜ。

部屋から出る際、グレアム氏から念話ではやてを頼むとも言われた。
俺はそれに軽く会釈する事で返し、その場を後にしていた。

「・・・・・って、問題解決してない」

ふと帰り際に、今俺を悩ませている問題思い出し、どうしようかと思った。
とりあえずグレアム氏に了解は取っておくことにしよう。

まぁ八神家の警備の強化の一環ってことにすれば許可くらい貰えるさ。

そんな訳で俺はグレアム氏に渡された連絡先にさっそく連絡を取った。

さっき別れたのに通信を入れられて驚いていたが、俺は要件をすぐに説明した。

この時は時間が惜しいと感じていた為である。

そして結果だけ言えば、ＯＫは貰えた。むしろガンガンやりたまえとまで言われた。

期待されていると見て良いのかもしれないと考え、俺は決意を固めたのだった。

……

……

さて、決意を固めた俺は、出し惜しみ無しで思いっきりやってしまう事にした。

但し家自体の改造は止めることにした。流石にソレはヤバいと思ったからだ。ご近所の眼もあるしな。

だからパニックルームというかシェルター？そんな感じの設備を建設しようと考えた。

無料奉仕については追って連絡するという事でアースラを降ろされた。
その後、俺はその足でちょいと違う世界に向かった。
簡単に言えば資材を集めに行った訳である。そしてその資材とは・・・・。

『外気温、マイナス７８，３度、比較的暖か。座標は設定された地点です。廃棄世界に転移完了しました』

「・・・ヒデェ世界。だが、“資源”はたっぷりとあるな」

『ええ、本当に・・・』

管理世界のナンバリングは無く、世界名すらつけられていない公には存在しない世界。
通称廃棄世界、簡単に言えば世界規模のゴミ捨て場である。
世界が発展すればするほど、廃棄しなければならないモンは増加していく。
いくつもの世界を統括しているミッドだが、あの世界が綺麗なのはゴミを違う世界に捨てているからなのだ。

そしてこの世界は無人世界であり、生物も何も居ない。
世界自体が氷で覆われ、キチンとした装備でないと魔導師ですら凍死する。
無人で静かな氷の世界は、ゴミを投棄していくには丁度良い世界でもあった。

そして時たま転移魔法により、定期的に不要になったモノや色んな物が捨てられる。
稀に軍事兵器的なモノや、生物まで捨てられるのだが、この世界自体が生物の生存に適さない世界なため、大抵はそこら辺で凍って放置されている。
・・・・・流石に竜種と思われる死骸にはビックリだったけどな。

ちなみにこの世界の事を知ったのは、以前ジェニスが来る前にやっていた傭兵稼業の時。
様々な世界からゴミが投棄される世界の噂を聞いたことがあったのだ。
公には知られてはいないが、案外裏では有名な世界なため、金さえ払えば場所は特定できた。

何せ、何を捨てても良いのだ。そりゃ次元犯罪組織とかには都合が良い世界だろう。
自分たちが手に掛けた被害者、管理局員、その他もろもろ。全部捨てられる。
魔法の世界は綺麗でも何でもない、只単に住み分けがキチンとされているだけの世界だ。

美しく、また穢れの無い世界なんてもんは、少なくても管理世界には存在しない。
もしそんな世界があるとするのなら、ソレは彼岸とかあの世とかの別名が付きそうだぜ。
さて、話がそれたので、そろそろ本線に戻ろうと思う。

「多重シールドはどれくらい持つかな?」

『この天候が続けば、およそ丸二日は活動出来るでしょう。全天候対応は伊達ではありません』

「そうか・・・まぁココに居る時間は半日が関の山だからな。とっとと見つけよう」

『了解、各種センサーを起動します・・・・』

さて、とりあえず投棄された廃棄物の残がいから使えそうなモノを集める作業だ。

集めたモノは格納領域の圧縮空間へと収納していく。

別に壊れていても問題は無い。あくまでも資源だから壊れていても良いのだ。

『ふふ、二人っきりで出歩くのも久しぶりですねマスター』

「だな」

ま、そのお陰で俺としてはありがたいんだけどね。

実を言うとな?足元に一杯倒れてるんですわ・・・・人間の遺体が。

殆どが凍りついた冷凍肉で、半分以上はフリーズドライのミイラ状態。

稀に何があったか氷の中に閉じ込められているのも存在してたりする。

はい、ある意味とてもショッキングな光景です。
ヴォルケンズならともかく、小さい子たちには見せられません。
リンも戦争には耐性ついてるけど、多分こう言うのの耐性は無いからな。
また気絶とかされたら敵わないぜ。

ちなみに放棄された遺体は著しい損傷の個所が見られる管理局員が一番多い。
大方単体で犯罪組織と交戦、行方不明になっている人間だろう。
次元犯罪者にとっても、この世界は自分の犯罪を隠蔽するには丁度良い世界なのだ。
この世界調べれば、これまでの管理局の行方不明者が沢山見つかるだろうなぁ。

「・・・お、壊れてるけどデバイス見っけ。回収回収」

『なんか墓場ドロボーみたいですね』

「違う、コレは資源の有効活用だ。問題無い」

『でも下手したら呪われそう』

「？何言ってんだ？」

『あはは、まぁそんな非科学的なオカルトで何か起きるとは――』

「ちゃんと了承得てるから平気だ」

『え？――――――ちょ！どういう意味ですか！？マスター？！』

言っただろう？俺“見える”んだって。伊達に綺麗なお花畑と石河原は見ていない。

特にハルケギニアに行ってから、その傾向が顕著になったのは言うまでも無い。

更に、この世界の雪には不思議な作用があって、思念が残りやすいんだそうな。

そう言うのが多い世界だから、呪われない様にキチンとお伺いと立ててますよ？

『もしかして、さっきから偶に何もない所にお辞儀とか敬礼してたのって・・・』

「一応の挨拶してた」

魔力持ちじゃないと輪郭はっきりしないけど、絶対思念だけじゃなくて“いる”。

つーか実際、気配的なモンが解るし、意思疎通とか出来る奴も居たりするみたいだしな。

リニスの二の舞はゴメンだから魔力渡したりしないけど・・・リニスの時は不可抗力さ。

「まぁ、気にせずガンガンいこうぜ」

『え、いやあの・・・なんかとっても怖いんですけど？』

「大丈夫、基本的に何か出来る程の奴はいないから」

『や、やっぱり“いる”んだ！いやぁーーー！！怖いいいいい！！！』

「・・・なんでデバイスが幽霊を怖がるんだよ？」

その時、何やら黒っぽいモノが俺の背後に立っていた。

大方取り憑こうって所だろうけど、俺に憑くと消滅・・・って遅かったぜ。

【――――ウヴァァァァ・・・】

『今何か聞こえた！？』

「はっは、気のせいだ」

なまじ魔力がデカく、精神防壁の類も展開しているからだろうか？

俺に取り憑こうとする輩は大抵自滅の道を歩む。

文字通り触れようとしてウボァァァってな感じで煙が消える様に消える。

まったく、もう少し賢ければ良いんだけどなぁ。ソレはそれで面白そうだから。

・・・とはいえ流石にラスボスクラス的な霊は簡便な？

一応念のために精神防壁は最大レベルに設定してあるし、魔力で干渉出来るからな。
簡単に吹き飛ばすことくらいは出来る。でも話し相手がもう一人くらい欲しい気もするぜ。

「・・・・ハルケギニア式で使い魔召喚してみようかな？」

『マスター、何か言いました？私早くこの世界から逃げたいんですけど？』

「いや、何でも無い」

肉体強化魔法で強化して、瓦礫を掘り起こしながらふとそう思った。
そう言えば何気にハルケギニア式で使えるんだよな俺。
エミュレート大変だったけど、その分色々と面白いしなアレ。
特に錬金がチートすぐる。

「――――おう？！コイツは無人機の残がいか？」

『ＵＳＮ・ＯＣＵのどちらにも該当しませんから、別の次元世界のモノですね』

瓦礫掘ってたら何やらロボットらしき残がいが出て来た。
ヴィズのデータにも一致しないし、俺の世界系統の技術は感じない。

完全オリジナルの様だが・・・中身はなかなか凄いな。

かなり技術力が高い人間が設計したのかほぼ無駄がない。

それなのに拡張性があるのは、かなりの技術力を持っている証拠だ。

設計した人物は天才か、はたまた奇才か・・・俺にもその才能を分けて欲しいぜ。

「・・・・丸い」

『丸いですね』

フォルムはほぼ球体、腕もなくあるのは・・・・触手かこれ？

それに魔導反重力ユニットが付いてるから浮かぶんだなコレ。

センサー類や武装は・・・ふむ武装は無いがセンサーはかなり高精度か。

「探査用か何かの実験機だな」

俺はそう結論付けて、その丸い無人機を放置した。

壊れてたし、欲しい素材が入って無かったからである。

何処か脳裏に引っ掛かる何かを感じたが、気のせいだろうか？

その後も時間が許すギリギリまで、廃棄世界を調べて回る。

この世界は本当に静かだ。時たま転送魔法で廃棄物が来る以外、風の音しかしない。

ある意味止まっている世界なのだから、ソレも当然と言えば当然なんだろうな。

クサイ話しになるが、光りがあれば闇がある。表と裏ってのは何処にでも存在する。

この廃棄世界も魔法の世界の裏側だ。誰も知らない世界の裏側。

そんなところで資材をあさっている俺は何じゃろうね？

「・・・お、コイツは次元航行炉系の試作機か、部品だけ貰っておこう」

そして俺はひょいひょいッと廃棄世界を散策する。

資材になりそうなモノを片っ端から、圧縮空間へと詰め込んだ。

結構な量を手に入れて、満足した俺はそのままこの世界を後にした。

――――また、あさりに来るかもな。資源の有効活用ってモンよ。

そして俺は次元転送魔法を起動させ、海鳴へと戻ったのだった。

「新スキル、陣地設営前編」（後書き）

始めたは良いが、妄想が溜まらない・・・誰かオイラに電波を分けてくれ！
失礼しました。

「新スキル、陣地設営後編」

「新スキル、陣地設営後編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅはやて

最近フェン君の様子がおかしい――。

あ、前々からおかしいっていう指摘は無しや。

本人結構繊細やから、そんなこと言ったらズーンと落ち込むこと受け合いや。

ソレはさて置き、異世界から帰還してから、フェン君の様子がおかしゅうなった。

普段、日中はコソコソと何処かに消える様になったんや。

家からは出てないことは、シャマルやリニスに聞いて確認しとる。

せやけど、朝食が済むと忽然と姿を消してしまう。

なんや隠し取るなぁって思って、一度問い詰めた事があるんやけど。

そん時は笑ってはぐらかされてしもうた。

家族同士隠し事があるのはあかんと思うんやけど。
まさかフェン君、エッチぃ秘密でもあるんか！？
やっぱりフェン君もオトコノコなんや。
おねーさんは悲しいで・・・。

「――そう言う訳で、フェン君の秘密を探ろうと思うんや」

「はぁ？」×ヴォルケンズ＋リインフォース＋リニス。

ある日の八神家、フェン君とリン抜きの家族会議や。
リニスはフェン君の使い魔らしいけど、事情は知らされてへんみたいやったから誘った。
ふっふっふ、秘密にしたがるものほど知りたくなるのは世の常なのだよ。

せやけど――

「主、あまりそういった事はなさらない方がいいと思います」

ザフィーラは反対派にまわり

「う～ん、フェンくんの事だから何かを考えてやってるとおもうけど・・・」

シャマルは決めかねているって感じで

「隠しごとをされるのはあんまり良い気分じゃない。だけどあたしはフェンを信じたい」

ヴィータはフェン君を信じると言い

「アヤツの事です。無理に聞きだそうとすれば態度を硬化させるでしょう。ココは話すのを待った方が得策かと思います」

「同じく」

「私もそう思います」

シグナムとリインフォースとリニスは話してくれるのを待つという方針。

なんやこれ？これやと例え多数決とってもあかんやん。

「あ～あ、みんな反対やったらしゃ～ないわ。ま、私かてヒマつぶしのつもりやったからいいんだけどね」

「・・・ヒマつぶしだったのですか？」

「ああん、そんな呆れた様な目で見んといてや、シグナム」

「失礼しました」

「ふぅ、でも話してくれるまで待つ、か・・・う～」

あかん、ダメやダメやと言われれば言われるほど覗いて見たくなる。

でもだめか、みんな反対みたいやし、ココで主として強権発動しても嫌われるだけや。

・・・・・ちぇ、何だかなぁ。

「なんだか、信用されてへんみたいで、ちょっと悲しゅうなるなぁ・・・」

「信頼はともかく、信用はされてはいないのでは?」

「・・・・シグナムが私の事どう思ってるのかがよ～く解ったわ」

「あ!いえ!そう言うつもりでは!?」

「ええもん、後で“あの時”見たくリインにちょっと設定を弄くってもらうから」

「そ、ソレだけはご勘弁を!!あのような姿は私には!!!」

「ふ～んだ、主の事をそないな風にないがしろにする家臣はＯＫＩや」

「諦めろシグナム、口は災いのもとだ――ふふ」

「リイン！ならばなぜ貴様は笑っている！」

「それは――――プクク、言わなくても理解できるだろう？烈火の将よ」

「謀ったなァァァァ！！リインフォォォスゥゥゥゥ！！！」

シグナム、リインフォースは謀ったんやなくて、シグナムをからかったんや。

むふふ、ミニマムシグナムがええか？それとも小学生サイズ程度に縮めるか？

胸？胸は勿論そのままやで？ソレが縮んだらシグナムとちゃうもん。

そしてロリ巨乳・・・ふふ、なんかソレはそれでお風呂の時が楽しみや。

「シグナム、哀れな」

「そう思うなら助ければザフィーラ」

「・・・男の俺に口出しが出来る訳無いだろう」

「あらあら、はやてちゃんったら・・・シグナムに合う服を探しておかないと」

「大丈夫よシャマル。私が既にある程度見つくろって置いたわ」

「あら、手際が良いわねリニス」

「だって身を呈して話題を変えてくれたんですもの。お礼も兼ねて、ね」

「「たのしみだわー♪」」

「「（コイツらは・・・）」」

まぁ冗談はともかく、結局この場に居る皆が乗り気じゃない為、フェン君の秘密を暴こうの会はお開きになってしまった。でも私は諦めきれんかった為、自分一人でも探ることを決意する。

・・・でもソレがまさかあんな事になろうとは、この時の私は夢にも思ってへんかった。

……

……

……

「ごちそうさま」

「はい、お粗末でした」

さて、いつものように食事を終えた後、急にフェン君が“消えた”。

いや、それは正確な表現やない。消えたってよりかは薄ぅなった感じやろか？

そこに居るって言う感じがせぇへん、まるで背景と溶け込んでしまうような感じ。

普段は気がつかへんかったんやけど、徐々にそうやっている事に今気付いた。

余りにも自然にそうなるもんやから、注意して見てへんとわからへんわ。

「・・・・・・」

「はやて、どうしたんだ？」

「ん？なんでもあらへんよヴィータ」

「？？そう、なのか？」

「うん、何でもあらへん。洗いモノするから手伝ってな？」

「わかった」

気配は薄くなったけど、まだフェン君は居間の方におる。私はようやく歩けるくらいまでになった身体を動かしテーブルを片づけつ

つ、フェン君の様子を探っていた。

せやけどフェン君はツワモノやった。

私がほんの少し目を離した隙に、何時の間にか消えとったんや。

思わず目をこすってしまった程やった。フェン君どんだけ秘密にしたいねん。

まるで忍者な件について小一時間ほど問い詰め（ｒｙ

コホン、ソレはさて置き、とにかく私はさっきまでフェン君が居た場所を調べてみた。

人間がいきなり消えるなんて・・・・フェン君なら出来そうやけど、普通は無い。

魔法を使った気配も感じひんかった。て事は何処かに秘密がある筈や。

そう思い、ごそごそと居間の方を捜索していると――――

「ん？なんやこれ？」

本棚の中に一つだけ動かせない本があった。どう考えても怪しい。

しかも表紙に書かれている言葉は、英語や無くて良く見たら違う言葉やった。

伊達に図書館っ子してた訳やないからある程度英語くらい読めるんやで。

「うーん、何の本なんやろうか？」

何で動かないのかと思ったら、本棚に何時の間にか造られていた台座に固定されていた。
ほんの少し押すとスイッチが入り本が外れる仕組みらしい。
・・・・フェン君、人ん家の本棚に勝手に仕掛け造ったらあかんよ。

「はやてー、何してんだ?」

「あ、ヴィータ。コレ読める?」

「え?どれどれ・・・なんじゃこりゃ?」

私と違い魔導師で色んな世界に行ったことがあるヴィータにならわかるかとおもい、
手にした本を渡したんやけど、ヴィータも本を開いて見た途端首をひねっていた。

「う~ん、なんかの術式だとは思う。見た事もある気がするし・・・あれ?でもコレどこで手に入れたんだはやて?」

「ふーん、やっぱり魔法関連なんや。ちなみにコレがあったのはウチの本棚や」

「本棚?ここの?」

「そやよ。ココにあったんや。ちなみに私は買った覚えは無いで」

目に付きそうで、実は周りの風景に溶け込むような地味な装丁の本。

ソレを眺めながら、ぴこーんといい考えが浮かんだ。

「そや！リィンフォースに聞けばいいんちゃう？」

「あ！なるほど！確かにあいつならあたしよりも専門家だ！流石はやてあったまいい！」

「ふふふ、褒めるな褒めるな・・・てな訳でリィンおいで～」

「およびでしょうか？」

いきなり背後から声が聞こえて、私もヴィータもビクンってなった。

というかリインフォース、さっきからおったん？

「はい、ずっと聞いておりました。解析ならこのリインフォースめにお任せあれ」

そう言うとリインは本に魔法を使った。

なんか妙に張り切ってるんやけど・・・久々の出番やからやろか？

ちょいとメタなことを考えていると、意外と早く解析が終わった。

・・・ところでリインは何時からココにおったんやろ？

「解りました。コレはフェンのものです」

「ソレは薄々わかっとった。問題はそれが何かってことや」

「実は、大変申し訳何のですが、フェンのモノであるという事以外解りません」

「何だ？管制人格のお前でも解らないのか？」

ヴィータが驚いてリインフォースに聞き返した。ソレもそうやろうな。

幾千の魔法が記録された魔導書の管制人格であるリインにすら解らないなんて思わへんもん。

リインはヴィータの言葉に少し眉を細めとった。

「ヴィータ、勘違いするな。私は確かに夜天の書の管制人格だが、全ての魔法を知っている訳ではない。特に独特の形態に枝分かれしたＵＳＮ式の様な魔法は範疇の外だ」

「「そうなのかー」んやー」

リインフォースでも解らへん事もあるんやね。そんなこんなで話しを聞くと、どうやらこの本はフェン君の国の言葉で『シェルターム』と言う題名が付けられた本らしいんや。

なんだかけったいな名前が付けられた本やね。でも中身は魔導書らしいから余計に訳解らんわ。

「せやけどホント意外やわ。リィンフォースですら解らないなんて」

「実は魔法で解析しようとしたのですが、魔法が通らなくて・・・何かしらシール処理が為されているらしいのですが、これはＵＳＮとも既存の魔法とも違う未知の魔法です。どうやらフェンは異世界に行ってまた成長していた様です」

ある意味感心したといった感じで、リインはフェン君を褒めとった。

リインの強さは知ってるし、フェン君が師事するくらいやって事も知っている。

そのリインが褒めるくらいやし、相当凄いんやろうなと思った。

「ふふふ、今度是非とも蒐集しなければ・・・・」

でもな?ぼそりと家族を苦しめる様な事は行ったらあかんと思うんよ?リイン。

・・・・

……

さて、とりあえずフェン君のモンやって事はわかった。
せやけど、どうしてソレがココにあってフェン君が消えたのかが解らん。

どうしたもんやろうかと、リインから返してもらった本をパラパラめくる。
見ると魔導書ってよりかは、なんかの術式回路を刻んだ本って感じや。

まぁ私だって少しずつ魔法に関しては教えてもらっている。
だからある程度は“まぁこんなんやろ”程度でわかるんや。

「・・・・“隠れる”やろか？」

「どうかしましたか？後その文字は“かくれんぼ”ですよ？」

部分的に読める個所があるので、そこを読んでみた。
やけど、その途端本から光りが溢れて、私たちは光りに包まれたんや。

「うっわ！眩し！」

「げぇ！なんかヤバめな感じなんやけど、私の所為！？」

「多分その通りかと」

「・・・冷静に返されると、なんか辛いわぁ」

てなこと言っている間に光りに呑みこまれた私たちは――――

「・・・どこやろうねココ」

「見た感じ施設の様ですが・・・どうやら転移させられたようです」

「というか、何で本を開いて違う場所に行くんだよ・・・」

――――何故か見たこともないような、なんていうか宇宙基地の通路みたいな所に居た。

ヴィータの疑問ももっともや・・・だけど絶対にコレはあれやね。

「どう考えてもフェン君の仕業です。ホンマにありがとうございました！」

何がどうなっているのか分からず、立ち尽くすしかない私たち。

前も後ろも無機質な金属製の通路があるだけで、他には特に何もない。

しかも手に持っていた筈の本は消えてるし・・・一体ココはどこ

なんやろうか？

「困りました。転移魔法が使えません」

「ゲ！閉じ込められたってことか！？」

「ヴィータ、女の子がゲッとか言ったらあかんで？」

とは言うモノの、そう言う私自身が混乱していた。

あかんあかん、こう言った時は焦ったらあかん。論理的に考えるんや。

Q．ココはどこですか？

A．何処かの建物？の中です。

Q．どうしてこうなったのですか？

A．フェン君が造ったと思われる謎の本を調べていた所為。

Q．では何をすべきでしょうか？

A．・・・フェン君にお仕置きや。

よし、お仕置きや・・・じゃなくて、コレじゃ論理的ですら無いやん。

只の現状確認やないかい！――まぁお陰で少しは落ち着いてきたけどな。

というか、なんでこんなモン造ったのかフェン君に説明して貰わ

んといかん。

ホウレンソウを怠ったフェン君には、お仕置き必須やね。

うん、今決定した。お仕置きや。家族に秘密作ったらあかん。

そう言う訳で、私はこんなことをしでかしてくれたフェン君を探す為、

他の二人を引き連れてこの施設の中を探索する事にした。

でも何故か若干リインもヴィータも怖がっとった気がしたけど・・・

・何でやろか？

まぁええわ。とにかくフェン君、まっといてなぁ～♪

「・・・ん？はやて！止まって！」

「下がってください主！」

「え？どうしたん二人と・・・も？」

二人の平常じゃない声に振り返った私は、思わず固まってしまった。

何故なら振り返った先に居たのは――

≪――ギュイン、ガシュ≫

【侵入者を発見、警告します。現在当施設は関係者以外の立ち入り

が禁止されています】

【可及的速やかに投降してください】

【また魔法発動等の敵対行動を取られた場合、命の保証は出来かねますので注意してください】

【投降する意思がある場合は両手を上げていただけると助かります】

――クモみたいな多脚をもつロボットさん達やった。

見れば何時の間にかそのロボットさん達に囲まれとった。

・・・・一体全体何がどうなっとるん？

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

――――？？？建設区域――――

「む、何だ？今一瞬ものすごい悪寒を感じたぞ？」

『はいはい、作業の手が止まってますから、早くノルマをやっちゃいましょう』

「ン、了解」

何やらやな予感がするが、今は建設作業の方が重要だ。

とりあえずヴィズにそう応えると、俺は錬金用デバイス・ヘルメスを構える。

魔法を起動させ、デバイスの補助が加わり高速で術式が駆け巡っていく。

格納領域から取り出されたガラクタ達、廃材に近いソレらに錬金をかけた。

予めプログラムした形に至る様に魔力制御をおこなえば、僅か数秒で廃材はその姿を変える。

錬金における魔力発光現象が収まった後、そこにあったのは鉄筋や金属板等の建材であった。

「材料完成・・・それじゃシラン達、頼んだよ」

【【【【わっかりました～♪】】】】

プロトより一回り小さい正式採用タイプの、４体のノーマルシラン達が、量産タイプに指示を出して建材を担がせ、それぞれの受け持ちの場所へと散っていく。彼らはいわば工兵みたいなもので、この「シェルタールーム」を建築している量産型達を指揮するのが仕

事だ。

量産型と正式採用型の最大の違いは、感情を持っているか否かに尽きる。

ノーマルシランはほぼプロトと同設計なため（と言うかプロトのダウンサイズ版）

プロトと同じ様に経験蓄積型の学習ＡＩを使用している。ちょいと高価なのが偶に傷だ。

そして量産型は更なるコストダウンを図る為に、構成素材を変えたり、固定武装すら取り外した最低限稼働出来る機能しか持っていない機体である。勿論ＡＩも簡易ＡＩに換装されており、基本感情等は芽生えない様な機体である。

いわばノーマルシラン達が指揮官機であり、量産型はそれに従う兵隊の様なものなのだ。そして量産型もノーマルも換装機構を有しており、汎用性を高めた結果でもある。コイツらは、特にノーマルシラン達はハルケギニアに居た段階で構想を終えていのだが、材料が無くて造れなかった奴らだ。

量産型については簡易化した機構のお陰で、一応十数体ハルケギニアでロールアウトしており、ヴァンツァーのマザーマシン防衛に当たっている。元が高機動戦車とも呼べる機体で有った事もあり、高機動で撹乱して集団戦を行う彼らに勝てるメイジは恐らくごくわずかであると思っているぜ・・・と話しがズレちまった。失敬。

【少佐～、これは何処に使うんですか？】

「それは壁に貼り付けて、鉄筋で補強しておけ。後、少佐じゃない

と何度言えば解る」

【わっかりましたー！皆に指示出してきまーす】

「だから少佐じゃないってば・・・」

彼らの手に当たる部分は機銃では無く、ビス打ち機やバーナーに換装してあった。

これにより「シェルタールーム」の建設を行っているのである。

俺が指示を出し、ノーマル達が量産型を指揮して建築、最後に俺が固定化&硬化を掛ける。

ソレだけで難しい建築作業もすぐに完了してしまうのである。

ソレはさて置き、どういう訳だかノーマル連中は俺の事を“少佐”と呼ぶ。

確かに元の階級は中尉だし、あの世界から消えた状況を考えればＫＩＡになる。

ともなれば俺は二階級特進しているから、ある意味少佐は間違ってはいない。

・・・・彼らのゴーストにインプットされているんだろうか。

元が元だしな。

【報告、予定の工程を3割増しで終わらせました。コレで重要区画の建築はほぼ終了です】

「ん、次は格納庫及び訓練室等の建造に移ってくれ」

【了解しました少佐、ヴィズ様に今後必要とされるであろう建材の

リストを添付しておきます】

「了解した。・・・・スイセンは真面目すぎるぞ。もう少し崩れても構わん」

【はぁ、しかしわたくしの個性みたいなものですので・・・】

ま、そうだよな。４機のノーマル達のＡＩに、それぞれ個性を付けたのは俺だし・・・。

ちなみに俺に報告に来たこのノーマルはスイセン、非常にまじめな性格である。

ある意味ノーマル達の参謀役であり、とても演算機能が発達している（様な気がする）

先程建材をどうするのか聞いてきたのはボタンという名で非常にノリが良い。

ある意味プロトの基本となった機体の性格そのままで、好奇心もとても強い子である。

その為集中力が他の４機に比べて底辺だが、命令はキチンと実行できるいい子だ。

――――さて、序でだし他の二体についても述べておこう。

今ココにはいないが、ノーマル達の一機にアイリスという特徴が無い普通の性格の子がいる。

一番最初に造った子であり、スイセンほどではないが真面目でボタンほどではないがノリは良い。

一応４ノーマル達のリーダー的な役割を担っているが、個性が無い事がコンプレックスの模様。

最後はダリアという名前が付いた良くも悪くもお嬢様系の性格をしたシラン。
優雅さを求める子らしく、“エレガント”とか“ですわ”が口癖。
設定したのは俺だが、いささかやり過ぎた感も否めなくは無い。

まぁ４機とも基本俺に従順だから、特に問題は無いけどね。――閑話休題。

「ふむ、作業工程も大分はかどっているし、完成する日も間近だな」

『ふふ、リンやリニスにまで秘密にして私たちだけでやってきましたものね』

「だけどそろそろ限界らしい。この間からはやてに目をつけられてるしな。早めにバラした方が良い様な気もするんだなコレが」

『このままのペースですと、後3日もあれば完成しますよ。それ程急がなくても良いのでは？大体いきなり驚かせてやろうって言いだしたのはマスターですよ？』

うぐ、ソレを言われるとその通り何だけどね？
なんか勘が囁くんだヨ、このままだとマジで怒られるっていう勘がな。

「さてと、お昼までにこの部屋を完成【大変です】――ッ！どうし

たスイセン?」

【報告します少佐。当施設内に侵入者が現れました。現在量産型達が拘束しています】

「侵入者?外への入口はまだそれ程造ってはいない筈なんだが・・・」

ココでふと、ある可能性に気がついた為、血がサーと落ちる音を聞いた。

はた目から見れば今の俺は顔を真っ青にしている事であろう。

【データリンク、侵入者の姿を投影出来ますが?】

「た、頼む」

有り得ない事だと感じつつも、表面上は冷静を保ちつつ侵入者とやらを見ることにした。

外れて欲しい予想ってのは、これまで幾度も経験している俺。

だが、ソレが外れた試しは殆ど無い、そして今回もソレに含まれていた。

「・・・スイセン、彼女等は侵入者じゃ無い。すぐに解放して此方に案内させろ」

【は?解放して、こちらに案内させる・・・のですか?】

「そうだ、急いで準備しろ。くそ、予定外の事態だ」

そう言うと俺は慌ててはやて達を迎える為に、既に建造が終わった区域へと急いだ。

ありゃ多分怒っているだろうけど、何もしないよりかは良い。

急ぎ足で建造が終わったいくと、丁度はやてたちも量産型に連れられて到着したところだった。

「フェ～ンく～ん♪せ、つ、め、い、してもらえるんやろうなぁ？」

――――そしてあえて言おう、そこには修羅が待っていた。

笑顔のはやてと同じく笑顔のリインフォース、ちなみに目は笑っていない。

そしてヴィータ姉はあからさまに不機嫌そうだった。

笑って・・・むしろワラっている二人から怒りに染まった魔力が流れているのを感じる。

ああ、ここで虚付いたら最後だな――俺はふとそう思ったのだった。

……

……

「――――んで、ココ一体なんなん？」

「・・・ここは「シェルタールーム」八神家の地下に造った避難用施設だ」

「「「避難用施設？」」」

――――とりあえず俺は、彼女等にココを作った理由を説明していた。

以前ジェニスに襲われた時から、この家の防御に不満があった事。

かと言って家自体を弄くるのは、外観が変化するから問題あるだろう事。

だったら、そう言った施設を作ればいいんじゃないと思った事。

よーし、お兄さん頑張っちゃうぞ☆みたいな気持でついつい地下に作っちゃった事。

……

途中まで建造して、コレ別に違うところでもよかったんじゃと気がついた事。

今更造り直しも効かないので、まぁ良いやと思い建造を続けた事。

後で驚かせようと思って、建造していた事は秘密にしていた事。

――――などなど、洗いざらい全部喋りました。

だって顔のすぐ横にグラーフとかが揺れていたら・・・まぁそう言う訳ですハイ。

そりゃね？いきなり訳のわからない所に出た途端、武器付きつけられて脅されたら怒りますよね？

ちなみに何で彼女たちがココに来れたのかと言うと、本棚に設置したあの本が原因だ。

あの本は人間をココへ送る為のゲートを開く為のカギなのである。

今回ちゃんと動かせるかどうか本棚に設置して、それを使って俺はシェルターに降りたのだ。

まさかその後すぐにはやて達があの本を調べ、設定しておいたキーワードを使ってこっちに来るとは（試験的な運用だった為、簡易的なキーワードを設定しており、あの時は“隠れる”だった）、こちらとしても予想外の事態だったのだ。すぐに回収する予定だったしな。

「・・・それでフェン、私らに内緒で家を勝手に改造した申し開き

はあるか？」

「えっと、その・・・セキュリティ強化を目指しました」

「――主、判決を」

「きまってるやろ？――ギルティや」

「そ、そんな！お代官様！御慈悲を！」

「ゆるさへんよ。勝手に家改造して、おまけにこんな面白い事を私に教えないとかどういうことや！」

あ、気にする所そこなんだ。

「そう言う訳で、フェン君は帰ったら家族皆に説明して貰うで。それと、まぁココまで作っちゃったもんはしゃー無いから取り壊せとは言わへん。その代わりきちんと完成させぇな――返事は？」

「サ、サーイエスマム！」

こうしてうっかりではやて達にバレて、他の皆にこってり絞られた。

当然お仕置き込みで・・・シグ姉さん、本当に真剣で斬るのは止めてください。

ソレとリニスさん、猫モードの爪でひっかくのも地味に痛いの・・・。

シャマル先生はリインと共謀して、何やらニヤニヤしてる。
何やら良からぬ事を考えられている様な気がしてならない。
ザフィーラもしばらくモフモフさせてくれないらしいし・・・鬱になりそうさ。

尚リンだけが俺を気遣って回復魔法をかけてくれたが、それに涙したのは秘密である。
ヴィズに至っては主の危機に爆笑してたからなぁ・・・なんて奴だ、まったく。

そして結局地下シェルターは、他の皆も使用可能なように造る事になった。
元々籠る様に造ったモンだから、そう言った事も考慮してあった為問題無い。
特にシグ姉さんからの要望で、訓練設備の大幅な増強が求められた。

魔法の使用に際限なく動ける訓練場所が欲しかったんだとさ。
足りないスペースはＵＳＮお家芸の圧縮空間で代用しました。
当然使用者第一号は、俺とシグ姉さん＋ヴィータ姉です。ちなみに俺は的役な？

こうして完成した地下シェルターは、殆ど八神家の遊び場と化していく事になる。
あれ？シェルタールームは緊急時用に造ったモンだったんだがな

？・・・まぁ良いか。
固定化と硬化の魔法を重ね掛けしてあるから、頑丈さだけならピカイチだもんな。

そして今日はなのは達が遊びに来るらしい。
ウチの主どのは彼女等にもばらす気満々の様だ。

『おやつやでー皆』

お、はやてからのコールだ。

「んじゃ皆、行きますか？」

ヴォルケンズ＋俺とリニスが八神家居間に通じるエレベーターに乗る。
ふふ、なのはやユーノが驚く顔が目に浮かぶぜ。
そしてエレベーターは上昇を開始するのであった。

「新スキル、陣地設営後編」（後書き）

何時もお読み下さり感謝です皆さま。
話しの中で、フェンが八神家リビングから消えた時にはやてが「魔法の気配を感じなかった」とありますが。
これはフェン君が魔法が発動した事を隠蔽させたからです。
なんか後付けみたいでいやですが、ココくらいでしか説明の場が無いので説明しました。

――以上長々失礼しましたノシ

「腐敗ってやーね」（前書き）

※作者は英語できませんので、英文は主にグーグル先生です。変な訳でも気にしないように！

「腐敗ってやーね」

「腐敗ってやーね」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

さて、俺は以前起した次元震の罰で、現在違う世界において奉仕活動を行っていた。
どうせ今更小学校行く気無いし、俺としては好都合であった。
本当なら地下シェルターの改造をやりたいところだが、まぁまだ時間はたっぷりある。
焦らずのんびりと、地下ドックくらい建造してやろうではないか。

ソレはさて置き、俺はアースラにひっ付いて、違う次元世界へと来ていた。
場所は第２８無人世界、世界名は「カリファ」という世界だった。
この世界は年間を通して気候の変化が乏しく、１年中湿潤な熱帯気候である。

大気組成が地球で言う所の石炭紀に非常に似通っているので、メッチャアツイ。
一応人間が呼吸できるだけの空気ではあるがＢＡの中にまで滲みこんできそうな大気だ。

簡単に言えば湿っぽいって事、梅雨なんか目じゃねぇな。

「――Ｐｏａｃｈｉｎｇ　ｈｉｓ　ｔｅａｍ　ｒｅａｄｙ　ｎｏｗ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ．　Ｓｅａｒｃｈ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｓ．」
（――密猟犯の姿、確認出来ず。探索を続けます）

『（Ｃｏｐｙ　ｔｈａｔ．　Ａｂｎｏｒｍａｌｌｙ　ｌｏｗ　ｐｒｅｓｓｕｒｅ　ｉｓ　ａｐｐｒｏａｃｈｉｎｇ　ｔｈｅｒｅ　ｎｏｗ．　Ｂｅ　ｃａｒｅｆｕｌ）』
（了解。現在そちらに異常低気圧が近づいている。注意されたし）

「Ｒｅｄ　Ｃｌｉｆｆ．　Ｃｏｐｙ」
（レッドクリフ、了解）

さて、俺のお仕事は人手が足りない現地の基地の手助けとしての見回りだ。
この世界は樹木が多く、魔力伝導体となる特殊な樹木もある事から、林業が行われている。
だがしかし、当然のことながら金にあるモノがあると犯罪が起きるのが人の世の常。

秘密裏にこの世界の樹木を輸出している非合法組織が存在しているらしい。
まぁ俺らはそれを見つけて、管制塔に報告を入れれば良いだけだ。
どうせ無料奉仕だから、責任とか無くて楽でいいネ。

「Ｐｏｉｎｔ－Ｄ，　ｎｏ　ａｂｎｏｒｍａｌｉｔｙ．　Ｇｏｔ

ｏ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｐｏｉｎｔ．」
（ポイントＩＤ異常無し。次のポイントへ移動する）
『（Ｔｏｗｅｒ，ｃｏｐｙ）』
（管制塔、了解）

基地の管制塔に定期観測報告の通信を行い、目を眼下のジャングルに向ける。
レーダーやセンサー類から目を離さないように気をつけてジャングル上空を飛び続ける。

それにしても、低高度での偵察はなんかＢＡ内にまでジメジメしてきそうだな。
さっきも低気圧接近中だって言ってたし、早い所確認して戻りたいぜ。

『対人レーダー、及び魔力反応検知出来ず、熱量もありませんね』
「ここら辺は巡回区域だからな。ここでやる馬鹿も居ないだろう」
【チャートによれば、後はオコニロ川上流のアキナグア湖を巡回すれば終わりですぅ】

アキナグア湖か、確か量子回路コアに利用できるギョクカシの生育地だったな。
資料によればあれは高く売れるらしいが・・・まぁ一番見張りが多い区画だからな。

違法伐採しにくる輩はいないだろう。常に監視されてるし。
でも報酬として一本貰えないかな?デバイス材料として欲しいぜ。

そんなこと考えている内に、次のポイント上空に到達した。
やることはさっきからやっていた事と同じく、センサーで周辺をスキャンする事。
てな訳で、ポイント上空を飛びまわるぜ。ぶーーーん。

『現在高度３００m、対人レーダー、及び魔力反応検知できませんね』

【私たちのノルマはこのポイントで終了です。お疲れさまでした】

やーれやれ、コレでようやくクソ退屈な仕事が終了か。後は戻って簡単な報告書ね。
しかし素人に出来る簡単な仕事って言うが、正直退屈で溜まらんなぁ。

＊＊＊

さて、適当に仕事を終えて基地へと戻って来た。
まぁ基地と言っても転送ポートと宿舎と小さな管制塔があるだけの補給基地みたいなモンだ。
定員が数十名行くか行かないか程度だから、基地と呼べるかも怪しいな。
どちらかと言えば監視所とか言う方がピンと来るかも知んない。

それでも、こういった辺境の次元世界では大きめの施設なのだそうな。
普通重要では無い所を監視する時は低ランクの魔導師が1人か2人らしい。
それに比べれば単純計算で規模は十倍という事になる。
だが、やはり小さな基地という感じは否めないな。

つーか、まさか最初の仕事で、こんな僻地に置いてかれるとは思わなかった。
奉仕っていうから、てっきりアースラ付きの魔導師をすると思っていたんだが。
リンディ艦長にココで3週間程奉仕活動ね♪とかにっこり告げられた時はおでれーた。

でも多分大分骨削ってくれたんだよなぁ。次元震起すのって重罪だし。
あくまで“巻き込まれた”という事と年齢を考慮して奉仕程度で収まってんだろうな。
まぁ俺は管理局の法律がどうなってんのかなんて詳しい事はしらねぇけどな。

嘱託魔導師試験を受ければ、嘱託として雀の涙ほどの賃金が出たらしい。
とはいえ筆記や儀式魔法四種、戦闘試験を受けなきゃならん。
どうせそれ程奉仕期間は長くは無いし、嘱託よか傭兵やＰＭＣの方が稼ぎは良い。
そして本音としては試験が面倒臭い。これに尽きるぜ。

兎に角、そんな訳で俺は辺境世界でご奉仕活動してるって訳だ。
しかし魔導師になれる人間って貴重なのに、よく世界を管理しようとか考えるよな。
魔導師と言っても人間、人間に出来る事なんざ高が知れてるってのによ。
自分の手が回る所だけ管理とかにしとかないと、ドンドン自分の首を絞める事になるんじゃね？

≪ドン≫

「イテッ」

アイタタ。歩いてたら頭に軽い衝撃が来た。どうやら誰かに当たったらしい。
すみませんと言いつつ後ろを振り返ると、この基地に勤める管理局員の制服が見えるぜ。

「おっとすまないね。あんまりに小さいモンで見え無かったよ」

「ほら、どいてくれよ。ココは子供の遊び場じゃないんだからさ」

「・・・・」

言い方は丁寧だけど、実際侮蔑が入ってるよなぁ。
ソレはさて置き、俺はある意味ココでは浮いた存在となっている。
そりゃね？年齢一ケタの存在が魔導師で、こんな辺境で奉仕活動。

幾ら独立するが早い魔導師の中に居ても異様だ。

他の人間が最低１０歳を超えているのに、見た目だけ見ればいまだ８歳程度。

肉体の成長が遅くなっている所為で、見ようによってはさらに幼く見えるやもしれん。

ココに努めている魔導師の平均が２４，５と比較的若いとはいえ、異様にもほどがある。

その所為か、一部の連中からは、ガキの来るところじゃないという風な態度を取られる。

とはいえ、俺は元々ＵＳＮで試験的に造られた最年少魔法士官である。

俺以外は全員年上のベテラン魔導師達の上官をしていたのだ。

その所為か、こういった事には既に慣れちまってるから気にならねぇんだよな。

「何だい、その眼は？」

「――――いえ、別に」

「ふん、魔導師ランクなんてＢ程度の癖に・・・むかつくね」

最後のムカつくねという言葉は、俺に聞こえないように小声にしたのだろう。

だが、残念ながら、俺にはかなりはっきりと聞いていたぜ。ワザとそうしたのかもな。

そしてそのままズンズンと歩いて行く管理局員。

大体ぶつかったのはそっちだってのに、なんで俺だけあやまんの？
でもまぁ、この程度で要らぬ事を言って、波風立てる必要もある巻いて。
どうせ長くいる訳じゃないんだから怒る必要も無い。それに――

『まったく、管理局員って言うのはああいう手合いの人間の方が多いんですかね？』

【アースラの人達に比べると、随分といやな感じですぅ。失礼しちゃうです】

ウチのデバイスが二人とも怒ってくれるからな。それだけで十分だ。
ともあれ、末端の兵士・・・いやさ管理局員ってのはこんな感じなのかねぇ？
魔導師資質に拘る傾向も顕著だし、いやだねぇ魔法至上主義者ってのはさ。

あと、気になっていると思うが、俺の魔導師ランクが何故Ｂなのかって言うとだな？
元々ＵＳＮだと俺は陸戦Ｓやらいろいろと高ランク保持者ではあった。
だが、こっちに来て色々とあった。特に肉体の変化というものが関わっている。
まず魔力量の測定に関して、俺は詳細なデータが取れなかったら

しい。

レアスキルのリサイクルは常時発動型なため、魔力量の増減が異常に激しかったのだ。

瞬間魔力発揮量なら最大値でＳＳ行くかって思ったら、次の瞬間にはＤ－。

もしくは測定不可にまで落ち込んだら、データとして信用が置けないだろう。

アースラで測定した時なんか、技術士官の人達が頭を抱えてた程だ。

実技はほぼパーフェクト、筆記も精神鑑定もほぼ問題無し。

空も無理矢理飛べるし、希少技能持ちで総合的にならＡＡ＋でもおかしく無い。

だがやはりネックになったのが安定しない魔力量だ。

魔力の安定値が解らないと、データ上での意味が無いらしい。

お陰で陸戦が異常に高いが、魔力関係の値（あたい）が全てすっぽり抜けている。

その所為か管理局の測定方法だと、今の俺は総合Ｂランク何だそうな。

なにこのイジメ、失礼にもほどがあるぞ。俺はもっと上だと言いたい。

まぁ肉体の変化云々は、実際俺の所為だが・・・。

これまでの苦労がなんかただの紙切れ一枚に否定された様な気分であった。

いや、実際思い出すとマジで鬱だわー。泣いても良いだろうか？

「まったく、ますます煙管が手放せんわ」

慣れていると言っても居心地が悪い事に変わりは無い。
薬草に関しては成分分析を終えているから、ゴミからでも錬金出来る。
そんな訳で、とっとと出張が終わってくれればええなぁと思う今日この頃だった。

＊＊＊

さて、昼間の仕事も終わり、午後は割り当てられた個室にて休息を取っていた。
夜間シフトもなにも入って無いので、ある意味気楽ではある。

奉仕、つまりはボランティアとして、俺はこの基地に滞在している。
異例の個室を与えられているのは、やはり年齢を配慮した結果か・・・。

ともあれ、いくら年齢を考慮したと言っても、ソレは周りからすれば面白くは無い。
ボランティア風情が、何で個室なんか与えられてるんだと思うだろう。
配慮された所為で、別方面で波風が立っているのは本末転倒ではないだろうか？

「むむ、使い捨てとはいえ、構成が・・・」

『ここら辺はこうした方がいいのでは？』

「それだと変換効率で負荷が増加しちゃって、暴発するですよー？」

「『ソレは怖い』」

考えても既にそう言う処遇だから仕方が無い。

こんな僻地となると、暇をつぶせる娯楽なんてもんは全くない。

一応宿舎にはサロンの様な公共設備がある。

だが前述のあれの所為で、俺にとっては居心地が悪いので利用できない。

故に仕方なく、部屋に籠って怪しい装置の開発をしている俺。

非常に精神衛生に悪い気もしないでもないが、一人じゃないから多分大丈夫だろう。

さて機械を弄くり回して時間を潰していると、ふと思った事があった。

「フェイトの裁判って、確か6月くらいだったな」

『はい、それが初公判で、結果が出るのは恐らく11月に入ってからだと思われます』

「・・・俺も参考人って事で呼ばれるんだろうか？」

『ソレは無いかと、呼ばれるとしたらユーノ辺りでしょう』

あくまでマスターはあの事件に関しては巻き込まれた立場ですし――とはヴィズの談。

そういやそうだったなぁ。体感時間では既に一年近く前の出来ごとだから忘れてたぜ。

「11月かぁ・・・フェイさんも俺と同じ様に、嘱託として無料奉仕か」

『一応私たちもアースラ預かりという事になってますから、案外同じ仕事をするかもしれませんね』

まぁ俺らの場合ボランティア・アーミーだけどな。

「・・・だけど、何で私たちはこっちに来ちゃってるんですぅ？」

「『ん？人手不足』」

人手不足とはいえ、アースラは最低限運用できる人員は整っているんだよな。

そうじゃないと次元航行艦としては致命的だし。

それに俺の場合は、辺境で誰もしたがらない様な仕事を無料で奉仕させる名目がある。

この程度の無料奉仕で済むようにしてくれたリンディさんにゃ感謝だぜ、いやホント。

『そう言えば、闇の書の事をリンディさん達には教えないのですか？』

「あれ？言って無かったか？その件は既にリンディさんには話しを通してあるぞ？」

『へ！？私初耳ですよ！？一体いつ！？』

「何時って、お前さんが技術官のマリーさんと一緒に“やめろショッカー！”ごっこやってる時」

『止めて止めて、レーザーは勘弁してください。私はブラックボックス化されてるんですぅ』

ウチのデバイスがトラウマスイッチ起動させやがった。

でも、実際リンディさんにばらしたというのは本当の事である。

正確には問い埋められて話したといった感じなんだけどな。

俺が無料奉仕を了承した時、リンディさんは俺の現在の状況を調べたらしい。

そして俺が現在住んでいる場所は八神家である。

簡易的にでも調べればあの家の異質さに気が付く筈だ。

そんな訳で、アースラに居た時に艦長室に呼ばれて白状させられたってのがある。

事前にかなり調べあげられていた事もあり、言い逃れが出来なかったのだ。
下手に誤魔化しても、聡明なリンディさんの事だから自力で気が付くだろう。

しかし、闇の書関連にリンディさん達と関わりがあった事何て忘れていたぜ。
原作は知っていたが、もう十年は前の話しだ。
それにココ最近の濃いイベント満載生活のお陰で、過去の記憶はドンドン薄れていく。
ハラオウン家が闇の書の被害者遺族とかなんて原作にあったけか？

ソレはともかくとして、俺は闇の書がどうなったかの顛末を説明した。
つーか、何故に俺がしなければならんのだとか思いつつも一応隠すことなく説明した。
大事なことなので二度言った。

当然説明した内容には、俺の身体の事も含まれている。
全て隠さず説明したお陰で理解くらいはして貰えた。
だが、古来からよく言われる様に、頭で理解するのと心で理解するのは違う。

こういった問題はかなりの時間を要する事は確実だろう。
そしてこの事で出来れば敵対する事にならないといいという風に纏まったのは言うまでも無い。

ちなみに闇の書云々をリンディさんにバラしていいかってのは、ちゃんとリインに聞いたぜ？

じゃないと後が怖かったからな。
主に魔法の標的にされる的な意味で。

「はへぇー、そんな事があったのですか？」

「そういやリンもいなかったけ？」

「はいです。リンはお家でお留守番してましたぁ」

『その時の私は、興奮してマッドなスイッチが入りかけたエンジニアに解体されかけてたんですけど？』

「ははは、ヴィズなら大丈夫だと信用してたのさ・・・（多分壊せないし）」

冗談抜きで解体されかけたのは怖かったと、珍しく真剣に語るヴィズ。
技術官のマリーさん、デバイスが怖がるって何したんスか？
トラウマ持ちのデバイスなんて聞いた事が無いぞオイ。

「それにしても・・・あふ～、暇ですぅ」

「ま、ほんの数週間の辛抱だ。どうせ辺境すぎて何も起きやしない」

『ま、マスター！ソレはフラグですよ！』

「ふぁ～、こういった事を言うと何かが起きるって言うのは常識で

すねぇ」

「いやいやリンよ。常識にとらわれてはいけないのだぞ？」

「じゃあ非常識を目指すですぅ」

「『ちょっ！おまっ！』」

こんな感じに意味の無いバカ話で盛り上がる俺ら。
どうせこのまま日が沈んで、何事も無く一日が終わると思っていたその時だった。

≪コンコン≫

（・・・ノック？ノックってのは、つまり誰か来たのか？）

ココでは俺を訪ねてくる人間なんていないと思うんだが・・・。
そんなことを思いつつ、部屋のドアを開けると、そこには――。

「今日は、ボランティアのラーダーくん。ちょっといいかな」

人にぶつかって来ておいて謝りもしなかったあの局員が、笑顔で立っていた。
くせぇ！コイツはクセェぞ！――と脳内で警鐘が鳴り続けていた。
面倒臭い事になりそうだ。うん。

……

……

……

「では今回の模擬戦について説明しますよ？ボランティアくん」

「了解、セヴィル殿」

「まずは――――」

さて、この基地所属の管理局員であるセヴィル・キャデラックさんだったか？

その人にやらないか？と聞かれて、俺はホイホイ付いて行って・・・。

冗談はさて置き、模擬戦をしないかと持ちかけられた為、俺はそれを了承した。

本人いわく、己は管理局でも少ないＡＡランクを持っているらしい。

んで、一応書類上で俺はＢランク、鍛錬を付けてあげるってのが建前って感じだ。

どうやら、表面上ニコニコと話しているが、俺は舐められている

ようだ。

つーかＡＡランクだったら、武装隊員で普通に隊長張れるレベルじゃねぇか。

それが普通Ｂランク程度を相手にするか？訓練校でもないのに？無い無い。

少なくても彼の言う鍛錬を云々は嘘だろう・・・俺の勘だけどな。

奴さん、現在の自分の待遇が気にくわないらしい。

高魔力持ちで魔法だってうまいのに、何で昇格出来ないんだ、高魔力持ちは人の上に立つべきだろうとかの愚痴をペラペラと聞いてもいないのに俺に話してくれた。

どうもこの人は魔法至上主義な人らしい。

ンで表面上礼儀正しいが、自分よりランクが低いヤツは見下すタイプの様だ。

いたなぁ、そんな士官、ワイズ教官に言わせればクソ以下のボンボンってヤツ。

大方、ランクが低く、所属がボランティアとなっている俺を叩きのめす腹だろう。

ストレス発散の為のサンドバック役をやらせる気の様だ。

んで例え俺がその事に文句を言おうものなら、魔法で黙らせる気満々らしい。

高ランク持ち故の弊害か？はたまた、元々そう言った性格か？

魔導師が少ないから、入るだけなら魔導資質持ってるとすぐに入れる管理局。

勿論、上に行くにはかなりの努力と労力が必要な訳だが、それを理解していない。
どっちにしても面倒臭い奴に目をつけられちまったなぁ。

さて、すぐさま模擬戦を始めるのかと思っていたんだけど、その前にセヴィルさんからの、一応のルール説明があるようだった。

内容としては、射撃魔法を使う事は可だが、広範囲系の魔法は禁止で、儀式魔法なんてもってのほからしい。それも近隣の自然環境に悪影響が出るから・・が理由だそうだ。

魔法事態も基本は非殺傷設定だけで、物理破壊を使ったら即失格。そして一応戦闘地域というのも決めてあるらしく、そこから出ても失格である。
ＢＡ？を使えばショートレンジの方が戦いやすいので、デメリットにはならないかな。

つまりはオートクレールとかを主流にして戦えばいい訳である。しかも相手は比較的高ランクだがミッド式、近距離戦は若干不利な魔法だ。

また通信も繋ぎっぱなしでも構わないらしい。
コレはお互いに逃げ隠れ出来なくすると言う意味では有効だろう。相手の声が入るとか、ちょっとうるさいんじゃないかと思うが黙っていよう。

「――――と言う訳だが、何か質問はあるかい？」

「いいえ、まったく」

いいから早くやろうぜぇ、ココ最近暇だったからいい運動になるしさ。

「ふふ、なんだったら弾丸回避訓練（シュートイベーション）に変えてあげようか？」

「いいえー、大丈夫ですよ」

「そうかい、それじゃ状況開始まで後３０秒、制限時間一杯まで戦おうか？」

「・・・・フッ、時代が変わった様だ」

あんたみたいに戦う前から相手を舐める人間が管理局とはねぇ？

「何を訳のわからない事を――――３，２，１、状況開始！」

その言葉共に模擬戦がスタートする。

魔法で一気に距離を取るセヴィルさん・・・もうさん付けはいいや。

ミッド式はミドルからロングの方が戦い安いから、遠距離で戦うんだろう。

対して、俺も的にはなりたく無い為、飛行術式を展開して舞い上

がった。

――――運動に、なればいいなぁ。

……

……

……

『そこだ！』

≪ドシュシュシュシュ！≫

「おっと・・・」

『多重シールドに接触、展開率１０％低下、戦闘に支障なし』

模擬戦開始から数分後。

俺は弾幕を張りつつも地上を駆けて、セヴィルの魔法をさばいていた。

相手の魔法の威力はそれなりの癖に、保有魔力の多さを見せつける為か弾幕の密度が高い。

とはいえアルアッソー無しで弾幕張るのってキツイな。

『クッ！ちょこまかと――』

「実に正確な射撃魔法だ。だが、それゆえに読みやすい」

至近距離に着弾するシュートバレットの群をひらりと回避し、
先程まで俺が立っていた場所から土ぼこりが舞いあがる。

しっかし、確かに高ランク魔導師と自称するだけあり、魔法威力が通常とはけた外れだ。
むしろ何でこんな辺境に居るんだと突っ込みたくなってくるぞ？
まぁ興味ないから突っ込まないけどな。

「せいやッ！」

『くぅ！あ、あぶない！』

ソレはそうとお返しにエリアル・エッジ飛ばした所、
相手は防御魔法張ったまま吹き飛ばされ、更に距離が空いてしまった。
むむ、近距離戦しようと思ってＢＡ？にしたのに距離が空くとはこれいかに？

≪ドパパパパパ――ンッ！！≫

爆発するスフィアと飛ぶ斬撃を伴うヴォイド・クラスターを軽く放つ。
迎え撃とうとしたのかシュートバレットで幾つかのスフィアが撃ち落とされたが、
その際の爆発を見て、相手は当たるのは危険と判断し地上へと降りた。

ココで飛行魔法で一気に距離を詰めて切りかかればいいのだが・・・。
幾らなんでもソレではあっけなさ過ぎて、可哀そうだと思った。

『何なんだ・・・何なんだよッ！たかがBランクの筈だろうが！』

「嘆かわしい。情報とは自分で確認したモノが一番信用できる。それすらしなかったとなれば、管理局員とは随分と迂闊な連中だ」

どうも自分の持つ魔力による絶対有利が崩されて、仮面が剥がれて来たらしい。
通信に入る声が非常にイラついているのが手に取るように分かる。
まぁそりゃ格下だと思っていたら、実は格下じゃ無かったとかストレスたまるよねー。
サプライズ成功と内心ほくそ笑むのはイケナイ事でしょうか？

『う、うるさい！お前にそんな事言われる筋合い等無い！』

「だろうな」

そりゃまぁそうだろうなぁ・・・とか思いつつ、飛行魔法吹かして突っ込んだ。
そして水平に剣を構えて、押しつけるように相手に叩きつける。
セヴィルはラウンドシールドを張るが、そのシールドごと剣の腹で殴られ後ろに吹き飛ばされた。

だが相手は腐ってもＡＡランク、飛ばされながらも射撃魔法を放ってきた。
放った射撃魔法は何と多重シールドを貫通して炸裂する。
普通なら汎用性が低くて覚えている人間が少ない多重弾殻弾とは恐れ入ったぜ。

とはいえそれ以上喰らってやるつもりも無いので、追撃の弾丸を回避しつつ後退する。
奴さんも俺が後退したのを見て、今度は砲撃魔法でこちらの追撃を阻もうとしてきた。
流石にシールド無しだと、あの威力の砲撃喰らったら不味いなぁ。

いやまぁ本当ランクが一つ上がるだけで戦いにくさってダンチなんだな。
以前武装局員の隊長さんと一回模擬戦したことあるけど、
あの時相手のランクがＡだったから、それより一個上って事になる。

しかし、シグ姉さんやヴィータ姉とかと比べたら、ため息が出るほど弱い。
・・・まぁプログラム生命体の彼女等と比べたら酷だろうなぁ。

『この！ただのBランクじゃないのかよぉ！』

「知らんのか？ランクなんざ只の目安でしか無いんだよ。大体俺とアンタじゃスタンスが違う」

『スタンス？どういう意味だ！？』

さて、そろそろ使っても良いよな？
せっかく仕掛けたんだし使わないのももったいない。

「――――アンタは管理局員。対して俺はあくまで兵士何だよっ」

『へ、兵士？！魔導師が何を？！また訳のわからない事を！！』

広義的に見れば、お前らも兵士に近いんだけどな。
管理局て警察と軍と法的機関がごっちゃ煮な訳だし。

そんな問答しながら、こちらからもシュートバレットを放つ。
レールブラスターでも良いが、アレは早すぎるからな。

『チッ！ラウンドシー』

「貰った！“弾幕結界”！！」

≪キュイーン≫

後退したり逃げ回っている間に設置した隠匿術式を作動させる。
奴さんは周辺に突如として現れたスフィアに、さらに囲まれていた事に驚愕している。
だがそんな事お構いなしに、スフィアから大量の弾頭が放たれる。

『な、なんだ!?』

「弾幕の結界、防ぎきれるかな?」

手加減してそれ程密度の無いガルヴァドスによる弾幕だが、通常ならパニックになるだろう。
気が付けば周りを囲まれていて、見た感じ逃げ道が無いというのは非常に恐ろしい。
セヴィルは自らに殺到する弾頭を回避し、撃ち落とし、シールドで防いでいく。
だが流石に多すぎたらしい。

『しまっ――』

≪チュドォォンッ!!!≫

着弾、そして轟音。
魔力爆発によってキラキラとした残留魔力片が辺りに散らばって

いく。
そしてドサッという音が、土煙がいまだ舞う所から小さく響いていた。
その音のを発したのは、魔力爆発の圧力で完全に気絶したセヴィルだった。

『あーれま、コレは完全に伸びてますね？』

【あれれ？やりすぎちゃったのかな！？】

「いや、只単に気絶しているだけだ。じきに目を覚ますだろう」

とはいえ・・・・なんか不完全燃焼気味である。
なんともはや、こちらとしては本気すら出していない。
こんなつまらん辺境で少しは骨があるヤツかと思いきや期待外れもいいとこか。
まぁ元々魔法至上主義に凝り固まってる人間だったから、期待何ぞして無かったけど。

「・・・早く帰りたい」

『【同感】』

ヘルメットを外し煙管をくわえて、思わずそう呟いても良いだろう。
ああ、残りあと2週間、しかも報酬なし・・・鬱だぜ。

そう思いつつ、気絶したヤツを放置し、俺はその場を後にした。

「腐敗ってやーね」（後書き）

＊なんとなく末端の腐敗を書きたくて書いて見たけど・・・なんか変。

とりあえず対戦したオリキャラは今回のみ出演の予定。咬ませ犬役哀れｗ

ソレでは失礼ノシ

「復讐とかくだらねぇ・・・やられた方はやってられねぇ」

「復讐とかくだらねぇ・・・やられた方はやってられねぇ」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

――――――ドン。

突き飛ばされた。この音を聞いた時に咄嗟に思ったのはコレである。

その次に見えたのは、上下が反転した世界であった。

水蒸気で乳褐色になっていた森林地帯と、それとは対照的に澄んだ青空。

己が現状を理解する間もなく、己の身体は世の物理法則に従い落下していく。

周囲が加速していく中でふと俺の視界に写ったのは・・・

仲間に取り押さえられながらも、俺に対しドヤ顔をしているあのバカの姿。

「ヤロー！テメー！ぶっころーす！！」

思わずそう叫んで、そのまま森林に向けて落ちていく俺。

結局、飛行魔法を使う暇もなく、霧の海の中を落下していった。

そして、森林地帯を横断する川に、俺は跳びこんだ。

＊＊＊

≪――――ざぱぁ≫

「ぷは・・・し、死ぬかと思った」

『まさかあんな手段に打って出るなんて・・・人間って本当に解りません』

【主殿ずぶ濡れですぅ。早く自ら出ないと風邪引くですよ】

リンにそう言われ、飛行魔法を組み空中へと浮かぶ。

この周辺はワニの様な肉食動物はいないのだが、ボアの様な大蛇は多くいる。
俺なんか一呑みで丸のみ出来るくらいでかいのだから、急がないとヤバい。

『岸はココから12m先です。・・・完全において行かれましたね』

「まったく、ヒデェ話しだ」

さて、一体何が起こったのかと言えば、その答えは非常に簡単（シンプル）だ。
俺はジャングルに落っことされたのである。この間ノシた管理局員の手によって。

【魔導師があの程度の高さから落下したところで死ぬわけないのに・・・】

「よっぽど悔しかったんだろうさ。“格下”にやられるのを許容できない狭義な男だったんだろう」

岸に向かいゆっくりと飛行しながら、濡れた煙管の薬草を取り変える。
炎熱魔法で軽く火をつけて、薬草の薬煙を思いっきり肺に吸い込んだ。
紫煙が俺の周りを包み、スーッとした気分になってくる。
鎮静作用もあるので、こんな状況にはうってつけであろう。

この日、俺は第２８無人世界カリファの伐採林から、大量に運び出される木材を輸送する船の護衛を務める為、輸送船に乗り合わせていた。

この世界の樹木には浮遊木と呼ばれる、乾燥する事で軽くなり、しまいにゃ宙に浮く面白い特性を持った木材が存在し、今回はそれを運ぶのが主な仕事だった。

乾燥させると軽くなると言う性質を生かして、晴れている時に大量に浮遊木を輸送船に積み込み、そのまま雲の上に出る。

そして湿気の無い上空を通り、管理局に指定された転送ポイントへと向かい、そこから各管理世界へと移送される。

俺や管理局員は輸送船が、その転送ポイントまで移動して無事に転送されるまで護衛するのが仕事であった。偶に貴重な樹木を狙う海賊が出るからである。

そんな訳で、俺は輸送船に乗りこんでいたんだが、俺の他に乗り込んだ現地管理局員の内、なんと先日の模擬戦でコテンパンにしたばかりのあの局員が含まれていたのだ。

元々プライドが高いのか、はたまた恨みを根深く持ち続ける性格なのかは知らんが、乗り合わせた当初から俺の事を睨み続けていた。一応格下に気絶させられたら、本人のプライドが許さんだろうなぁ・・・という程度に、俺は認識していたのである。

つーか、この手の視線に慣れていたと言う事もある。

まだ俺が訓練兵だった時、母上からの濃厚な訓練を受けた事のある俺は、周囲の訓練兵よりも抜きん出ていた。

当時、一緒に訓練を受けていたのは１３～から１６までの比較的若い連中ではあった。
だが、そこを行くと俺は年齢一ケタである訳だ。

自分よりも年下であるにもかかわらず、異常な程の力を持っていた俺は最初の間とある感情が籠った目で見られ続けていた。ソレは嫉妬であり妬みであり憎悪の視線である。
同世代が子供らしく生きていた時、既にサバイバルや命の危機を経験していた為か、魔法の力がその年齢にしては異常に強くなっていた。

だが、連中はそんなことは知らない。俺が血反吐を吐いて到達したなんて事を、見ず知らずの人間が知る由も無い。あるのは年下の癖に生意気なんだよという子供らしい感情による憎悪である。

そんな環境であったからか、何時しか俺は連中から怖がられるまでずっとこの手の視線にさらされていた為、こういった事に慣れっこになっていたのだろう。
あの時、シフトで輸送船に乗り合わせていたセヴィルとかいう管理局員が、俺に対し何を考えていたのかを類推することなんて、出来る訳も無かった。

――――――そして、先の事態である。ホント警戒をしていなかった自分が恨めしい。

幾ら慣れているとはいえ、あの手の視線にさらされ続けて気分が良いとは言える状態では無い。

乗り合わせた時からずっとその視線である。辟易くらいしてくるものだ。

輸送船が材木を積みこみ、霧が出る前に上空に出た辺りだった。

俺は輸送船の甲板の隅っこに避難していたのである。

流石に仕事中と言う事もあり、煙管の薬煙を吸う事は自重していた。

ボランティアみたいなもんであったが、ボランティアにはボランティアとしての責任があると俺は思っていたし、仕事は真面目にこなすたちだった。

まぁ非常に吸いたいと言うイライラ感に苛まれはしたが、眼下に広がる乳海とも言うべきジャングルの様子を眺めて心を落ち着かせていた。

この時、いつものように臨戦態勢になっていればよかったのだろう。

だが、この時の俺はこれまでのココでの仕事によって、若干気が緩んでしまっていた。

護衛とはいうが実質材木狙うバカはそうそう現れないと聞いていたからである。

特に管理局の魔導師が護衛に付いているという時に狙うヤツはまずいない。

あろう事か、俺はこの時聞かされた内容を鵜呑みにしていたのである。

敵は出ない＝安全という公式が無意識で立ち上がっていたのだろう。

霧の乳海の上はいい天気でぽかぽかしていた。平和な気分になり

警戒心が非常に薄れてしまっていたのだ。だからだろう、俺の背後に近寄ってくるあのバカに気が付かなかったのは。

まさか生粋の管理局員がこんな馬鹿な真似はしないであろうと思っていた俺がバカであった。あくまで俺は管理局にとってはお手伝い程度で仲間では無い。

あのバカだけがそうなのかもしれなかったが、だからと言ってボランティアの人間を、かなりの上空から眼下の霧が漂う雲海に突き落とすなんてことは、決して許される事では無い。

「・・・・絶対落し前だけはつけさせてやる」

脳内でどんな復讐をしてやろうかと思いつつ、岸に上がった俺は基地に連絡を取る為に通信を入れようとした。

だが、どういう訳だか通信機がウンともスンとも反応が無い。

何時もなら見慣れた管制局員が映る筈の空間ウィンドウは砂嵐表示であった。

おかしいなと思い、何度か接続を試みたモノの、砂嵐は解除されなかった。

こりゃアカンと思い次元間通信まで為したのだが、あろう事か次元間通信も入らない。

「どうなってるんだ?」

『どうやら、ここいらは管理世界でも珍しい空間多層次元干渉地帯

の様ですね。目にも映らないし肉体でも知覚は出来ませんが、空間自体が折りたたまれるかのように――』

「詳しい説明はいい。結果だけを言え」

【ようは通信も何も出来ない地帯のことですー。地球で言うならバミューダトライアングルの様な所でしょうか？】

おうＳｈｉｔ！なんつー理不尽な。

『一応警告ですが、次元間転送系の魔法なんて使用すれば転送先でミンチになりますよ？』

【ちなみにこの一帯は空間多層次元干渉地帯ですから、転送ポイント付近まで出ないと脱出はムリですよぉ】

「解った。ココを抜けるまでは飛ぶか徒歩何だな・・・はぁ」

流石の俺もこんな状況下に陥れば溜息も出る。

輸送船は俺が落ちたのにも関わらず、空中で止まる事はなかった。

まぁ目的地ギリギリまでの燃料しか搭載していなかったらしいしな。ソレは仕方ない。

でも、この霧の中を飛ぶのは正直遠慮したいが、ゆっくりと飛んでいくかねぇ。

「世界は何時も・・・こんなはずじゃなかった事ばっかりだ」

友人である執務官が何時か言っていた言葉を口ずさみ、俺はＢＡを展開して宙へと浮いた。
次もしこんな辺境に回される仕事だったら、シラン達を持ってこよう。
待機状態にすれば小さな宝石の大きさしか無いから、サバイバルキット装備を一機付けとけば楽だ。

――そして濃い霧がある中、上空へ出る為にゆっくりと上昇していったのであった。

＊＊＊

さて、現状としては俺は取り残されたという状況だ。
そして、この特殊な地域の特性からか衛星関連にアクセスが効かない。
おまけに魔法関連の通信も機械関連の通信も出来ない完全な魔境地帯だ。

一応地図があるからいいモノの、ジャングルを覆う様に発生している霧のお陰で目印が無い。太陽は出ているが、方位磁針がグルグル回ってたらどうにもならん。時間と太陽の位置からなんとか方角は割り出せたが、おおよその地点しか到底出来なかった。

お陰で雲海の上をごくゆっくりとした低速で飛行する羽目になった。

あんまり早く移動しても余計に解らなくなってしまう所為だ。
本当に洒落にならん。後一週間程度でここでの仕事も終わるってのにな。
あの大バカ野郎、マジでどうしてくれようか。

『――――・・・ん？』

「どうした？」

『いえ、いや、なんて言いましょうか？』

帰ったら絶対折檻とかしてやると、ちょっと危険な思想に染まっていた俺は、ヴィズの戸惑った様な声で現実に引き戻された。
どうも俺達が進む進路上に、何かは知らないが人工物の反応を探知したらしい。
だが、ここら辺は地図によれば無人地帯の筈。管理局の地図だから正確だと思うんだが・・・。

「建造物とかか？」

『いえ、反応は地下からです』

・・・地下だって？

【スキャン中――――・・・ヴィズねぇの言う通りですぅ。地下２０

０ｍあたりに人工的な構造物があるのが解るですぅ】

『この先に行くにつれてだんだん地上に近づいている所を見ると、入口があるのかもしれません』

ふむ、地図に表記されていない建造物らしき反応か・・・。

「もしかしたら密輸団のアジトかもしれん。魔法使えばこんな場所でも簡単に建築できるからな。一応調べておこう」

『【わかりました】』

本当は管理局と合流した方が良いんだろうが、どうせ通信も通じないしな。

多少寄り道しても問題は無かろう・・・ストレス発散位出来るかもしれないし。

そんな訳で飛び続ける事、約２０分。反応が一番強くなった辺りに降下し、周辺を捜索してみると、ジャングルにぽっかり穴が空いていた。

いや正確にはとても深い泉であろう。直径が５ｍ四方にも満たないのに、水深は優に８０ｍを超えている。随分と奥にまで続いている所を見ると、コイツはセノーテと呼ばれる洞窟に水がたまった泉だろう。

「本当にココか？」

『はい、この下に反応は集中しています』

一見すると、このジャングルで見かける普通のセノーテ何だが・・・。

ヴィズが訴えると言う事は何かがあるんだろう。

「・・・・潜って見るか」

幸いＢＡは全天候対応型である。

水深２０００ｍまでなら術式を展開しなくても余裕で行ける。

酸素関連は圧縮空間内に収められるし、水を分解して取り出しても良い。

・・・・大概に便利な防護鎧だよなぁと思いつつ、俺はセノーテに潜った。

＊＊＊

普通の湖や泉と違い、非常に深い水深を持つセノーテは対流が起き辛い。

また冷たい地下水がわき出しているからか、非常に水質が澄んでいる。

水心４０ｍ近くまで降りたが、薄暗い程度で済んでいる辺り、かなり透過率が高いだろう。

そんなセノーテに潜ってから見回すと、恐らくは水中洞窟の入り口らしきものが見えた。
太陽光で蒼く照らされたセノーテの壁に、ぽっかりと空いた暗い穴。

まるで大きな生き物が口をあけて待ち構えているかのような錯覚にとらわれる。
俺は殺傷力は無いが、光が強く出るスフィアを形成して、その横穴に入っていった。
ヴィズが示した反応は、この横穴の先にある事が解っていたからである。

大体横穴の大きさは３ｍ弱だろうか？人が2人か3人程度なら余裕でくぐり抜けられそうだ。
天井からは水中なのに鍾乳石がぶら下がっている。
大きさからしてかなり長い間、この洞窟一度は水の無い時期があったと予想される。

それにしても、幾らＢＡを装着しているとはいえ、この手のダイビングは初めてだ。
広めとはいえ、周りに壁があって薄暗く、更に水の中だと思うと、ことさら不安に感じる。
周囲の岩壁に押しつぶされるのではという感覚が非常に恐ろしい。
洞窟が奥にまで続き、その先が見えないと言うのも不安感を煽っている原因だろう。

何よりも、長年堆積したと思われる砂や泥が沈殿している。
早めに抜けられるかと思ったが、あまり水流を起すと土砂が舞い

上がりそうだ。
そうなれば恐怖である。只でさえ今は視界が限定されている状況なのである。

それなのに、土砂が舞い上がれば完璧に視界は遮られてしまう事だろう。
当然視界が遮られれば、方向感覚と上下感を失ってしまう。
ココはゆっくりと進み、土砂を巻き上げない様にするのが得策だと判断した。

『マスター、３０ｍに人工物反応』

「望遠装置作動」

ＢＡについたカメラアイがキュンと言う音を立ててピントを合わせる。
スフィアに照らされて薄暗いが、暗視装置を使えば奥まで見渡せる。

「・・・・コイツは」

『いわゆるコンクリート壁ですね。劣化具合から考えると、およそ２０年くらい前のモノでしょうか』

驚いた事に、ココまでずっと自然の洞窟だったのに、そこだけ明らかに場違いなコンクリ製の壁が造られていた。周りがデコボコな

のに、そこだけヌルっと言った感じのコンクリ壁は、何処か妖怪塗り壁を連想させてくれる。

「人工物の反応ってのは・・・これか？」

【間違いないですぅ。ちなみにこんな所に施設があるなんて情報は、地図には記録されて無いですぅ】

あやしい、こんな僻地な世界において地図に示されていない建造物。

よく見ると入口らしきものが見えたので、調査の為に入って見る事にした。

先程の洞窟とは打って変わって、パイプの様なコンクリートの道。

ある程度奥に進むと、今度は垂直の穴に到達した。

「（下は何もなし・・・なら上か・・・）」

光が何一つない通路を、スフィアの光だけが照らし出している。

上にまだ続いているらしく、俺は浮上を開始し、行けるところまで行ってみた。

竪穴はすり鉢状だったのか、上に浮かぶほどドンドン広くなっていった。

そして――――

≪――――ザパァッ≫

――浮上した先は、何かの港の様に見える地下湖であった。

「・・・・驚いた。こりゃ地下基地か？」

周辺を見回しつつ、俺はそう漏らす。
港と思わしき所には幾つかの倉庫と発電施設らしき建物、タンクなどが見える。
どう考えても、コレは人の手が入ったモノだろう。
造りから察するに、遺跡の類では無いと思うし。

『――酸素あり、ガス及び人体に影響の出る物質は検出できません』

【魔力素子の濃度は若干低い程度ですが、正常値ですぅ】

相棒達の挙げる報告を聞きつつ、俺は水から上がる。
スフィアが暗く淀んだこの空間の内部を照らし出す。
人が居なくなって・・・一年から数年って所だろうか？

床などは舗装されているが、場所によっては岩壁むき出しである。
とりあえず港らしき場所から上がり、周囲をより入念に見回してみた。
発電施設と思われる建物からは、ブーンという音が聞こえる事から、まだ稼働しているようだ。

船は一隻も停泊してはいないが、俺が入ってきた地下水路とは違う大きな地下水路があった所を見ると、中型クラスの輸送船なら一隻程度入れる規模である事は解る。
何をしていた施設なのかは分からないが、港から奥へと続くレールが見える為、結構頻繁にモノや人が行き来していたと推測した。

奥の方に目をやれば、パイプやコード等が集中して一本の坑道へと通じている。
先のレールもその坑道から伸びているらしく、坑道は電源が落とされているのか真っ暗だった。

「・・・電源はどこだろうか?」

あたりを見回すモノの、奥の坑道の灯りを付ける電源は見受けられない。
仕方ないので、スフィアの灯りを頼りに進むしか無さそうだった。
その前に一応周辺の倉庫や発電施設も調べてみる事にした。

倉庫はカギが掛っておらず、一応全部見たが中は空っぽであった。
港近くにある数基あるタンクは、燃料かはたまた水か何かを補給。もしくは供給できる構造をしていた。中身が無い為、詳しい事は不明である。

補助電源を作っている発電施設は、ドアに鍵が掛っていては入れない。
恐らくは上から続くパイプを見るに、水力発電系である事は解ったがそれ以外不明。

まぁ、せっかく稼働していて、灯りを確保できるモノを壊す必要も無いので放置だ。
後は特に見る物が無い、あって数個のドラム缶が散乱している程度だった。

補助電源があるとはいえ、港も足元が照らされる程度のモノである。
しかも、オートで作動するらしい、そうなると何時消えるか解らんな。
どちらにしろ、スフィアによる灯りは点けっ放しにしておいた方が無難だろう。

しかし、密輸団アジトって割にはこじんまりとしている気がする。
これ程の施設を廃棄するなら、何かしら原因がある筈だと思う。
だが見た感じ、ここら辺には損傷の跡が見受けられない。
使えない位に壊されていたなら、廃棄したという理由にもなるんだがな。

要は、なんでこれ程の施設群が無傷のまま廃棄されたのかが全く持って不明って事だ。
発電機は今だ稼働し、補助電源が付くと言う事は主電源もつけようと思えばつけられると言う事だろう。
まるで、必要が無くなったから、唐突に閉鎖したかのような印象を受ける。

「この坑道・・・何処まで続いてるんだ？」

『とりあえずこの近辺一帯ってことは確かです』

確かにかなり地下にあるもんなココ。
案外、ココはなにかの秘密の研究施設か何かだったりするかも知れない。
とりあえず奥へと進む扉はある。・・・もうすこし調べてみるかな。

そして俺は――――これまた理不尽なモノを見る羽目になるのだった。

「誘い込まれてた」

「誘い込まれてた」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

熱帯系でジメっとした空気とは打って変わり、この施設の中は非常にひんやりとしていた。
職業柄ＢＡは外してはいないが、外気温が異常に低い値を示している。
そして停滞した冷たい空気と言う事は、この施設は使われなくなって久しいと言う事を表していた。

薄暗い中、スフィアの灯りだけを頼りに奥に進んでいく。
まるで冥府へと続いているかのような暗い通路と言うのは、精神的に辛いものがある。
基本的には幽霊バケモン何でも来いな俺だが、何つーかこういう雰囲気は弱い。
お化けよりもお化け屋敷の雰囲気の方が嫌いって言う様なものだろう。

≪――ピッ、ピッ、ビー。パシュ≫

『ドアロック、解除』

完全に機能を停止していたと思っていたのだが、部分的には生きているらしい。

コレで通算何度めかの電子式ロックの扉をヴィズが解除し、更に奥へと足を踏み入れる。

電子ロック式が外せると言う事は、補助電源はまだ生きていると言う事だろう。

そして小さなトロッコの様な電車と、人間がやっと通れる坑道を進んでいくと、何か大きな扉の様なものが見えてきた。

奥にはまだ坑道が続いており、壁にドーンと構えられた金属製のエアロックだった。

「・・・コイツは、やはり電子ロックか・・・ヴィズ」

『了解、横の端末に私を近づけてくださいマスター』

とりあえず部屋か何かだろうと思い、調べる為に扉をヴィズにあけさせる事にした。

ヴィズを扉の横に設置されていたターミナルと思わしき端末に近づけ接続させる。

しばらくヴィズの出す電子音だけが、薄暗い坑道の中に響いていた。

流石にその間、只黙っているのもアレだったので、リンと念話で

他愛のないおしゃべりをしていると、いつもよりもかなり時間が掛って、エアロックが解除される音が聞えて来た。

「遅かったなヴィズ」

『いやー、中々手ごわいウォールでしたけど、押し切ってなんとか。これならリンにやらせた方が早かったかもしれませんね。あ、それと補助電源でロックは外れたんですが、この扉を動かすモーターは主電源から供給されているので、手動で開けてください』

「解った」

手動なら仕方が無い。俺は肉体強化の魔法を用いて、金属製の隔壁をこじ開ける。

≪――――ギ、ギギ、ガガガガガ≫

金属同士が擦れる音が、静寂であった坑道内に凄くよく響く。

≪ガガガガガ、ガコォォォォォォン――――≫

そして大きな音と共に扉は開かれた。扉の先には――――

【き、きゃぁぁぁぁぁ！！――はぅ・・・】

「――――ッ！これは」

『あちゃー、そう言う系の施設でしたか・・・』

俺の中で、リンが悲鳴を上げて気絶してしまった。
扉の先にあったのは、いくつもの巨大試験管であり、その中には・・・。
恐らくは俺よりも小さな子供と思わしきサイズの、死体が浮かんでいた。

部分的に皮膚が崩れ、骨が見えている死体である。
ちゃちなＢ級ホラーの映画の様だが、薄暗い光に照らされたソレらはあまりにもリアル。
否応に、この所業が現実のモノであることを俺に訴えて来ていた。

そして、この試験管は一つでは無かった。
部屋には同じような試験管が大量に並んでいた。
勿論、ソレら全部、中には子供と思わしきモノが浮かんでいる・・・
・胸糞が悪い。

「どれもこれも、補助電源で稼働していたが、手入れが来なくなった所為って所か・・・南無三」

俺は更に調べる為に、部屋の奥へと侵入した。
カツン、カツンとリノリウム製の床と俺の脚部ＢＡが当たり、冷

たい音を出す。
普通の精神の持ち主なら、この光景みたら、まず胃の中身とご対面だろう。

まっとうな精神の持ち主は、この光景には耐えられまい。
生憎俺はそこら辺の感覚は、とっくに常人のソレとはかけ離れている。
こんなものは要はなれてしまえば問題無いのだ。

ソレはさて置き、原型をとどめている遺体も幾つか見受けられた。
言っては悪いが、非常に綺麗なまま眠る様な遺体もいくつかある。
もしや、補助電源が生きているのだし、どれか一人は生きているのでは？

そう思いかなり奥行きがある部屋を進むが、死体、死体、死体の行列。
試験管の隣にあるコンパネには、どれも死亡という文字がならんでいた。
主電源が来なくなり、循環系や生体維持システムが停止した結果だろう。

骨と皮だけになった少女、枯れ枝と見紛うばかりにやせ細った少年。
もう、女の子だったのか、それとも男の子だったのかも解らない遺体。
中には四肢の一部が外れて、試験管の底に沈殿しているのすらある。

補助電源により足元の非常灯だけが付いたこの部屋で、不気味に浮かび上がる子供の遺体。
誰にも知られる事なく、放置されていた子供たち・・・・。
その光景は、あまりにも惨い・・・廃棄された直後だったなら、いや止めよう。

その凄惨な様子に、俺はある種の怒りにも似た感情を感じていた。
コレは人間のしたことなのかと、人間というのはこうも愚かしいのかと。
そう考えておいて、すぐさま実に青臭い感情だと自嘲する。

こんなのは世界で当たり前にある光景の一つでしか無い。
この世界は綺麗なんてのは上っ面だけだ。根底にはドロドロとしたモンが渦巻いている。
それにかかわる事は、己にとって非常に不利益な事だろう。

――――ともあれ、現物を見たばっかりだと、流石にそう言う気分にはなれんが。

「・・・・どの死体も、リンカーコアのある位置に、何かセンサーが付けられてるな」

『・・・・生命維持の装置、と言う訳でも無さそうですね。・・・あの、マスター』

まぁ魔法技術が使われた研究所なら、この手のセンサーを取りつ

けることは当たり前か。
とにかく、感情に流されないよう自らを自制し、冷静に観察を続ける。
そして、気絶してしまったリンとのユニゾンを解除しつつ、俺はこの部屋の奥にある端末に近づいた。

「解ってる。ターミナルからホストコンピュータにアクセスして来い」

『了解です。すぐ戻ります』

ヴィズにデータを取ってこいと指示を出した後、俺は部屋の壁際に腰かけた。
周りには、沢山の、小さな小さな命だったモノの残照だけが見える。
どれもこれも漂うだけで・・・何の敵反応は無い、か。

≪――――カシュ≫

俺はヘルメットを外し、煙管をくわえ火を付け、思いっ切り吸い込んだ。
そうでもしないと遣る瀬ない気持ちで、やってられ無くなりそうだったから・・・。
口に含んだ薬煙が、ざわつく心を鎮静化させてくれる。

ココが何の施設であるかは知らない。

だが、どう考えても真っ当な研究がされていた筈は無い。
人間を使った人体実験を行う研究の類で真っ当なモノなんて殆ど無いのだ。

腐敗こそしていないが、殆どが骨と皮だけになった子供の遺体を眺める。
目を堅くつぶった子、半開きの子、もう識別できない位にふやけてドロドロになっている子。
胸が、ザワザワするな・・・コレは人間がやる所業だろうか？

目につく子供たちが、一体どんな気分でココに居たのだろうか？
こういった施設が世界の闇として存在する事は知ってはいた。
現にＵＳＮでもそう言った研究があった事を、両親に聞かされた事もある。

しかし、知っているのと、実際に目にするのとでは、やはり勝手が違う。
俺だって、一応人間である。一度は壊れたりしたが、やはり人間だ。
こういった光景に、何も感じないなんてことは有り得ない。
・・・・だけど、やはり摩耗しているんだろうなぁ。

「・・・・ふ～・・・・置き去りにされて、お前らは寂しかったのかな」

思わず、そう口から洩れていた。
馬鹿らしい話だ、試験管に入っていたのだから、意識なんて無か

った事だろう。
一体なんの研究施設だったのか・・・彼らがそんな事を知る由もない。
それにコレだけの数の人間、恐らくはクローンか何かだとは思う。
もしくは孤児として買い取られたとか、人身売買の被害者か・・・。
そんな子らが、こんな場所で何かを思ったり感じたり出来たのだろうか?。
・・・いや、考えても無意味なことだな。

俺はもう一度、煙管から薬煙を吸った――その時だった。

≪――ひっく・・・ひっく・・・≫

「ッ!だれだ!?」

誰もいない筈の施設、ココに居るのは死者だけの筈。
それなのに、かすかだったが確かに啜り泣く声が聞えた気がした。

俺はすぐに立てかけてあったジリーノを手に取り、周辺を警戒する。
だが、周りには何もない・・・あるのは子供らの死体だけ。

――動くモノは・・・何一つ、無い。

≪――――クスン、クスン≫

≪――――え～んえ～ん≫

≪――――あぁぁぁぁ・・・≫

だが、感じる。先程までは感じなかった沢山の・・・子供の気配を。

悲鳴とか、そういったモノでは無い、ただの子供の泣き声が頭に響いてくる。

狂おしいくらいの・・・心が、絞め付けられるような、ただ泣いているだけの声。

「ちっ、精神感応か？」

この気配は、以前廃棄世界で感じたアレらの気配と酷似していた。

俺は咄嗟にＢＡのヘルメットを掛け直し、精神防壁を最大値に変更していく。

だが、この声は精神の奥底に揺さぶりを駆けるかの様に、徐々に俺の精神を摩耗させていった。

ヘルメットの遮音機能を入れても、まるで頭の中で泣いているかのような声は消えない。

精神防壁を最大値に上げたのに、多少声が薄れただけだった。

ココに居る“連中”はそれほどまでに強い思いを持っていたのだろうか？
生憎俺はその手の専門家では無いので何とも言えなかった。

「・・・ッ！く、そ・・・重い」

自分たちを知覚できる存在と言うのが解ったとでも言うのか。
感じる重圧が増した。ヒタヒタと、背中にのしかかるかのような・・・。

何をバカな・・・俺は“壁”を背に座っているというに、誰が乗る？
ココの連中は物理的な干渉も出来る？・・・いや、俺がそう感じているだけか？

頭がぼーっとしていく、冷静な思考を保ちたくても、泣き声が響いて役に立たない。
それにぎゅうぎゅうと圧し掛かられるかのような、今にも押し潰すかのような感覚。

だがしかし、これには敵意や悪意といった悪感情が微塵も感じられない。
あの廃棄世界にいた連中とちがい、もっと無垢な・・・なにか。

しいて言うなら、子供がじゃれついているかのような感覚が近いのだ。
とはいえ、だからと言って警戒を解く理由にはならない。

警戒を解いた瞬間、全身を乗っ取られそうな恐怖があったからだ。
次第に強くなる泣き声、すがりつくかの様な重み・・・。
幻術系対策として精神防御は高い筈なのに、敵意が無いからか余り関係無いらしい。

だがそれは少しずつだが、俺の精神力を摩耗させていく。
ドンドン重くなり、動けなくなっていく身体。

「未練でも、ある・・・のか？」

既にかなりの重圧をこの身に感じていた俺は、咄嗟に思い付いた言葉を言っていた。
本当に押しつぶされるのではないかと思うほど、ミシミシという重さを感じていたのだ。

だからこそ、重さに耐えかねてそう言ったのだが・・・。
するとどうだろう？突然俺に掛かっていた圧力が消えてしまった。

今まで数十人分の人間を乗せていた様な感じであったのが、嘘の様だった。
ボーっとした頭で、その事に驚いていると、更に驚く事が起きる。

≪――カシュー≫

突然、圧搾空気が抜ける音が聞こえる。

音のした方へと振り向くと、閉まっていた筈の扉が空いていた。
周囲の靄は、その扉の方へと流れていき、そしてその靄の一部は、俺の手に巻きついている。

「ついて来い、と？」

ぐいぐい引っ張られるかのような感覚に、俺は何時の間にかその場を立ち上がり、靄に引っ張られるがまま、フラフラと試験管の部屋を後にしていた。

＊＊＊

不思議な感覚だった・・・。

起きている筈なのに、眠っているかのような・・・。

宙に足が付いていないと例えればいいのだろうか？

坑道に出た俺はそのまま坑道の奥へと進まされる。

靄達に先導されて、連れて来られたのは、小さな部屋だった。

倉庫だと思われる小さな部屋、靄は扉を突きぬけて中に入っていく。

そして俺もその扉に手をかけ――――

『マスター！！』

「――――は！？」

――――手にかけようとした時、急激に引き戻される感覚と共に、元の部屋に居た。

・・・・え？なに？どういう事なの？

「俺は・・一体？」

『もう！呼びかけに全然応えてくれなくて驚いたんですよ！』

もしかして、俺ってば意識持ってかれてた？
ちょっとまて、どこら辺からそうなったのか、本当に記憶にない。

いや待てよ？覚えている事もあるぞ。――敵意は感じなかった――これに尽きる。
・・・・冗談抜きで本気で怖いんだが・・・母上、俺はどうすればいいですか？

（落ちつけ俺、冷静に・・・冷静に・・・）

ちょいと混乱してしまったが、兎に角冷静に対処しないといけない。
もう一度煙管を使い薬煙を吸う。・・・・良し、落ちついてきた。

「なぁヴィズ、俺が茫然としていた時間はどれくらいだ？」

『えっと、おおよそ5分程度です』

――――5分も意識を持って行かれてたのか・・・もっとシールドした方が良いな。

「その間、俺のバイタルはどうなってた？特に脳波は？」

『お待ちください――――・・・夢を見ている状態と酷似してますね』

「成程、アレは夢だったか」

夢ね。道理で道順が微妙に曖昧だったってワケか。

しかし悪意の無い無垢な精神波は恐ろしいな。こう見えて結構廃棄世界に出かけてたから、精神防御には自信があったんだが・・・。

まぁつまりは、連中は俺にあの場所に行けって言っているという事なんだろうな。

「ヴィズ、ちょっ行く所が出来た」

『え？マスター何処に行くんですか！ちょっとー！』

――――俺はそのまま試験管室を出て、そのまま坑道の奥へと進む道に入った。

＊＊＊

――――カツン、カツン、カツン・・・・

『マスター、道解るんですか？』

「・・・・・」

『ねぇマスター・・・・聞いてますかぁ？』

「・・・・・」

『はぁ・・・・・』

「・・・・・・・・ここだ」

道は、あの夢のままに歩く、そしてその通りに来たら本当に倉庫があった。

その倉庫の中には、小さな箱が一つあるだけ・・・そんなイメージが脳裏に浮かぶ。

・・・・コレも夢の続きとか言わねぇだろうな？

『――？ここに何か？』

「先程、俺は夢を見ていたと言ったな？」

『え、ええ。先程のバイタルデータでは――――』

「その夢で案内されたのがココ何だよ」

『・・・・・・・・・・・・・・マジですか？』

「うん、本気と書いてマジと読むくらい」

こいつは・・・本当にココに来てほしかったのか・・・。
それとも破滅の罠か・・・いずれにしても確かめねばならんかな。
“彼ら”には本当に悪意が無かったと言う事を信じたいな。

【・・・・あれ?リンは何故ここに?はれ?】

「お、気が付いたか眠り姫」

【やーん、リンはお姫さまじゃないですよぉ】

「いや、そう言う意味じゃなくて・・・」

その時、先程から気絶し続けていたリンが目覚めた。
頭にはてなマークを浮かべるリンのイメージが脳内に現れる。
可愛い仕草に微妙に癒されるぜ。

う~ん、それにしても、まさか俺の精神にコレだけ影響を与えるとはなぁ。
帰ったらリインとリニスに協力して貰って、もっと強力な精神防壁術式を作ろう。
それと、やはり自力で精神鍛錬重ねておこう・・・見える分怖いし。

とりあえずヴィズに倉庫のエアロックを解除させる事にした。
ここも電子ロック式だが、一応補助電源で作動できるらしいから大丈夫だろう。

『・・・ロック解除完了。・・・・開きますよ？』

「ああ、やってくれ」

はたして蛇が出るか、竜が出るか・・・どちらにしても厄介だろうな。

そして倉庫の扉が圧搾空気が抜ける音をたてながら、数年ぶりに開かれていく。

その中には――――

『・・・・箱？』

「箱だな」

【可愛らしい箱ですぅ。ところで、なんでわたしたちこんな所に居るですか？】

『「（・・・いまさら気が付いたのか？）」』

ウチのこのマイペースさすら、可愛く見える俺は重傷だろうか？

とりあえず、ヴィズに説明を頼んだ俺は、部屋の棚にぽつんと置かれた箱を手に取る。

これまで無機質な物しか無かったこの施設には場違いな、花柄の箱。

しいて言うなら、子供のおもちゃ箱といった感じだろうか。

手に持って見ると意外と重たく、じゃらじゃら言う事から中に何

かが詰まっている。

（実験機材？・・・なんて訳も無いだろうし・・・なんだろうか？）

俺は箱を手に取ると、何も仕掛けが無い事を確認し、箱を開けた。
その中には――――

「・・・・」

『何ですかコレ？がらくた？』

水晶のかけら、おもちゃの杖、瓶のふた小石屑、小さな色鉛筆。
普通の人間が見れば、只のゴミやがらくただと思うであろうソレら。
子供が持っている様なおもちゃ・・・なるほど、確かに宝だなぁ。

「違う」

『え？』

「コレは・・・“宝物”」

『宝ぁ？』

【どう見てもがらくたにしか見えないですぅ・・・は！もしやこれには凄い魔法処理でも！？】

俺の言葉にそう勘違いするリン。

「いや、これ自体は見たまんまのモンだよ」

『えと、それじゃ、どうしてコレが宝だと？』

ヴィズは不思議そうにそう聞いてきた。
いや、まぁ、俺自身確証は持てないっていうか、半分確証はあるって言うか。

「・・・そう、感じたんだ。なぁ？コレは“お前たち”の“宝物”なんだろう？」

俺は自身の背後に話しかける。
すごく薄いが、さっきからず～っと“見ている”だろう？
なぁ、靄くんたちよ・・・。

『――――！！』

【あれぇ？なんで室内で霧がでてるです？】

ヴィズは俺の背後に居た存在に気が付いたが、驚いて声を上げられないようだ。
ソレもそうだ。恐らく科学的なセンサーや魔力感知には一切引っ掛かっていない。

一番最初にリニスと出会った時と同じ様な状態だからだろう。
リンは只単に目に映る物を見ているようであるが・・。

「・・・コイツを地上に持って行けばいいんだな？」

俺がそう言うと、靄はかすかに震えていた。
まるで俺の言った事に了承しているかの様な反応だ。
箱を圧縮空間に収めて、倉庫を出ても何もして来ない所を見ると、ソレで良いらしい。

とりあえず、一度地下港へと戻った俺は、この施設がなんなのかをヴィズに聞いた。
色々と無駄なデータはあったが、正直何処の誰が何のために造った施設かは不明だった。
肝心のデータベースは感じからするに廃棄されており、データサルベージはそれ専門っではないヴィズでは不可能であった。

正し、正確性には欠けるが、研究員の日誌が残されていたらしく。
流石に研究内容は残されてはいなかったが、日誌の一文に気になる言葉はあった。
曰く、“Ｓ型適応体の量産化とＦとの融合さえ叶えば・・・”と

言う一文である。

S型・・・いや、あの技術は流石に流出してはいない筈だ。
恐らくは違う何かの略語・・・だと思いたい。

そしてF・・・何かを忘れている様な気がするが、原作関連何だろうか？
原作記憶はもはや当てにならんのだが、覚えて無かったのが悔やまれる。

ともあれ、ソレ位しか手がかりとなりえる物は見つからなかった。
それ以外の情報はすべて破壊されていた。

だが、おかしいのはデータは破壊されているのに、この施設が破壊されていない事だ。
後で再利用する気でもあるのだろうか？

それとも緊急事態で何かがあって、廃棄せざるを得なかったか。
思えば奥に行くまで、かなりの数の隔壁が閉じられていた事。
ソレと港には船が一隻も無かった事を考えると、“何か”があった事は解る。

――その何かがなんなのか・・・ソレを考えている間に港についた。

とにかく、この陰湿で暗い空間から外に出たい。
こんな太陽の光もない地下で、おまけに現在進行形で心霊体験すれば気も滅入る。

しかし、この施設を放置していくのもどうかと思い、外に出るのをあぐねいていた。

ココはやはり管理局に報告しておくべきだろうか？
だが、俺を突き落とした様な連中がいる組織だ。
ただでこの施設の事を言うのも癪だ。

輸送船から突き落とされたという現実が、俺に管理局を疑わせる苗床と造っていたと言っても良い。
事実、この時はこの施設の事を報告する気が、全くと言っていいほど起きなかった。
なので、気が向いたらいずれクロノくんあたりに話してやるかと思った。

ココの連中は見つけていない違法施設だ。
クロノくんが見つけた事にすれば、手柄の一つにはなるだろう。
そうだそれで行こう、そう思いセノーテへ通じる地下港に入ろうとしたその時だった。

≪――――・・・・ズズーン≫

「なんだ？」

『遠くで何かが外れた様な音ですね』

突然、この地下空間全域が、微弱に揺れた様な感じを受けた。
しかもズズズと言った振動が、足元から伝わってくるのが解る。
ソレだけでは無く、坑道からまるで突風の様な風が吹きつけてく

るのがわかった。

凄まじく嫌な予感がした俺は、坑道から離れて様子を窺った。

やがてその音は激しさを増し――――

≪ズズズズズ、ズバァァァァッ！！！≫

――――坑道から、大量の水が噴き出してきた。

「・・・・これって、もしかしてヤバい？」

『先の振動で坑道が崩れ始めたみたいです。原因は不明』

マジですか？え？生き埋めとかゴメンなんですが・・・。

冷静になればなるほど、テンパって丁寧な言葉になる俺である。

俺は急いで水に潜ると、まだ崩れていない事を確認し、ココに来た時のトンネルに入る。

しかし、地下港の崩壊は恐ろしく早く、トンネルの途中まで来た時。

≪――――ゴォォォォォ≫

「――――ッ！！」

『げぇ！』【ひゃぁぁぁぁ！！】

大量の水でトンネルの中に激しい水流が起き、俺はそれに巻き込まれてしまった。

あまりの激しさに、抵抗する事は不可能であり、したところで無意味であった。

ガクンガクンと揺さぶられ、グルんグルんと回転し、上下の感覚を失った。

（ぬぉぉぉぉぉぉ！！！ええい！ラグーズ・ウォータル・・・）

俺に出来る事といえば、ハルケギニアで覚えた拙い属性魔法で周りの水流を操り、

流れに逆らわないように、岩にぶつからない様にする程度であった。

そして俺は来た道を逆流して押し出され、そのまま何十年溜まり続けた泥と共に、

ウォータースライダーも真っ青なスピードで押し出される。

洞穴内に大量にある鍾乳石が水流に呑まれて欠け、残った部分は鋭利な刃物になり、

崩れた鍾乳石の残がいが、容赦なく俺のＢＡの装甲を打ちつける。

もし、水流操作で流れに乗っていなければ、最悪洞穴に激突していた筈だ。

そうなればいくらＢＡを着ていても、中の俺は無事では済まなか

った事だろう。
そして入ってきたセノーテまで押し出されて、白濁とした水の中から脱出した。

「・・・・もう、くそ・・・厄いな今日は」

『呪われてるんじゃないですか？お払いしましょうよぉ』

【あわわ、頭がくらんくらんするですぅ】

そんな事を言いつつ、水から上がり、俺はＢＡを解除した。
そして、思いっきり外気を吸いこむ。
この世界特有の濃い樹木の香りだけが、心をいやしてくれていた。

・・・・たく、マジで厄日だぜ。施設は先の崩落で完全に崩れた。もうあの場所に行く事は、地面を掘り返さない限り出来ない事だろう。
知っているのは俺だけだっていうのも、何とも言えんなぁ。はぁ。

水から上がりしばらくして、俺はあの施設から持ちだしたガラクタ。
いやさ“宝物”をセノーテ近くに生える一番デカイ樹の根元に穴を掘って埋めた。

そして、煙管に火を付けて、線香の様に埋めた場所に添えてやる。

「ま、外には出られた訳だし、コレで勘弁してくれや」

そういって手を合わせてやると、今までいた気配が消えていくのがわかった。

見れば何時の間にか来ていた靄達が、最終的に人の形になり薄れて消えていくのが見えた。

≪――――ありがとう≫

最後の靄が消える瞬間、脳裏にそんな言葉が聞え苦笑する。

まったく、俺はあくまでも兵士だってのに、霊媒師の真似ごとはゴメンだぜ。

『マスター、あ、あれらは一体何だったんですか？』

「さて、しらん。廃棄世界に居たのと御同類だろう」

ヴィズに聞かれたモノの、俺にはそう応えるくらいしかない。

大体コレは科学でも魔法でも説明が付かない現象である。

もっとも俺らが使う魔法は原初の魔法では無く、いわば科学の領域に近いモノらしいが・・。

『へぇ!?って事はやっぱり幽霊ですか?幽霊なんですね!?』

「だから知らないって」

ま、あの試験管の部屋に“居た”んだから、あの靄はそう言った連中だったのかもな。

誰にも看取られる事なく死んだ・・・最後くらい外の空気を吸いたかっただろうさ。

あのガラクタは、連中が持っていたモノだったのかもな。

何で残されていたかは知らんが・・・。

――本当はどうなのかは知らないが、まぁそう言う事にしておこうぜ。

【でも、最後にありがとうって言ってましたよ?】

「さて、な。俺は別に何もしてない・・・この話は終わり、基地に戻るぞ」

俺はデバイス二人からの文句を流しつつ、空に飛びあがる。

そして、そのまま基地へ向けて飛び立った。

案外この場所には連中に呼ばれたのかもしれないが・・・。

俺はその手の専門家じゃないし、正直どうでもいい。

とりあえず今しなければならない事は、帰ってあのバカに闇の書の夢（悪夢ｖｅｒ）を見せる事。
リンと協力して深層心理の恐怖を引き摺りだしてやるから覚悟しやがれ。

廃人一歩手前まで追いつめてやる。勿論痕跡は残さずにな・・・。
そんな風に、思考を切り変えて、あの場所で見た事は誰にも言わない事に決めた。

まぁ言ったところで「俺幽霊見たんだ」と真顔で言っているヤツがいたら引くよな。
どうせ信じてもらえないだろうし、証拠となる施設は崩落したのでもうない。
だから、この件は俺の記憶の中だけの事としておくことにしたのであった。

――しかし、何で身体が重いのだろうか・・・。

「仕事に明け暮れるお父さんの気持ち」（前書き）

※だらだらグダグダ日常編です。

「仕事に明け暮れるお父さんの気持ち」

「仕事に明け暮れるお父さんの気持ち」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

さて、フェンが起した騒動から早数カ月。
夏の暑さも徐々に和らぎ、秋の訪れを感じさせるような気候が始まった１０月頃。
フェンの居ない八神家は、何事も怒ることなく平和――

「テートリヒ――シュラァァクッ！！！」

「ぬぅぅぅぅぅぅ！！」

≪ガシィィィン！！≫

「「ハッ！」」

≪ズガガガガーーーンッ！！！≫

「まだまだ行くぞヴィータ！」

「こいよザフィーラ！」

――――・・・・訂正一部を除き平和だった。地下世界の事は気にしない様に・・・・。

地下のシェルタールームに設置された訓練室での模擬戦をしている連中はさて置き、地上の八神家では、はやてがお勉強を行っていた。そのお勉強とは勿論、魔法のお勉強である。以前は肉体的な原因から、魔法の勉強は出来なかったのだが、ようやく肉体的にも精神的にも安定して来た為、基礎知識を教わり始めたのである。

ちなみに講師は現存するベルカ最古の魔導書の管制人格であるリインフォース、基礎教育ならお任せあれ、万能サポート使い魔リニス、そしてもしもの時の為のシャマル先生という超豪華メンバーで、万全の態勢のなか臨まれた。

基本的にはリインが教え、はやてがまだ解らない難しい部分はリニスが噛み砕いて教え、シャマル先生が補足するという、まさに英才教育である。はやてには元々素養もあり、学びたいという意思も持ち合わせていたからか、湯水を吸うかの如く、基礎を会得中である。

まぁこのメンバーで失敗することなど有り得ないので、心配は必要ない事だろう。ちなみにフェンにはこの事は内緒であり、彼が帰還した際に驚かせるつもりであった。そりゃフェンも驚く事だろう。

何せ、実を言えば既に基礎は習得済みで現在応用に入っており、デバイスの使用も前提とした実技にまで発展しているのだ。

彼が帰還する頃には、空を飛べるようになっているかもしれない。ちなみに0から教えてわずか数カ月でコレなので、別の意味でフェンも驚きそうである。

――そんな風に日々を過ごしている八神家に、手紙が届いた。

「あら？次元転送魔法？庭から！？――ってこの感じはフェン君の？！」

その日はリニスが台所の当番で、食器洗いをしていた時だった。庭に何かが転移してきた魔法の反応を感じた為、急いで庭に出て見に行った時に見つけたのだ。どうやら次元転送魔法で何かを送って来たらしく、拾ってきたソレは台所のテーブルの上に置かれている。

それは小さな封筒であった。中を開けてみると、その中には手紙と幾つかの写真が入っていた。コレは多分彼が見て欲しくて送って来たんだろうなぁと思いつつ、彼女はとりあえず八神家を全員呼び、彼が送ってきた手紙と写真を見ることにしたのだった。

……

……

「へぇ、フェン君から手紙ねぇ？わ、一杯入ってるやん」

「つーか、数日に一回は次元間通信してるのにな。まぁ最近は通信がつながらなかったけど」

ヴィータはそう言うと、入っていた写真の幾つかを手に取った。既に居間に集結している八神家メンバーも思い思いに写真を眺めている。

「ふむ、この写真を撮ったのはヴィズだな。どう思うシグナム？」

「リインの言う通りだな。恐らくはサーチャーからの映像を写真に転写したんだろう。無駄に高性能なだけはある」

「うう～ん、フェン君こんなの送って大丈夫なのかしら？」

「そこら辺はアースラスタッフに許可貰ったから大丈夫って手紙に書いてあるぞ？シャマル」

「相変わらず、手際は良いのね」

和気あいあいと、同封されていた写真を見ていく八神家。

恐らくはアースラ内部の写真だと思われる物から、奉仕活動で向かった先の写真が入っていた。どれもこれも空中に浮かんで撮影したかのようなアングルである。ヴィズの高性能さがより際立って解るが・・・明らかに無駄機能だろう。

ちなみに送られてきた写真には、リンは映っていない。彼女はいわば現存するベルカの融合騎、ミッドチルダ式でいうならユニゾンデバイスなので、管理局サイドに見つかっては不味い為、今の所フェンと融合しっぱなしなのだそうだ。

普通はこれ程長く融合し続ければ、融合事故が起こっても不思議ではないのだが、そこはフェンの人外パワーでどうにでもなっているのであろう。調べても解らない為放置である。

「ん？なぁ、この写真おかしくねぇか？」

「どうした？」

その時、ヴィータが送られてきた写真の一枚に、おかしな点がある事に気がついた。

「いや、ほら。多分管理局の連中と一緒に取った集合写真だと思うんだけど・・・」

「どこかおかしいのか？」

リインがそう訪ねると、ヴィータはある部分を指差した。
ソレは写真に写っている人物たちの足元。

「ほら、ここ。足が一本・・・多くないか？」

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

さて、時間は飛んで既に１０月後半。
あのバカのお陰で、俺はアースラで奉仕活動をする事になった。

ソレはある意味僥倖だったのかもしれない。
少なくても、あの基地よりかはアースラは居心地が良い。
俺を突き落そうとするバカ野郎も、いないとは思うしな。

さて、思いだしたら鬱が再発しそうなので話題を変えよう。
アースラ付きとなってから、はや数カ月の月日が流れていた。
世が世なら、食欲やら芸術の秋と浮かれる所なのだが――

「なぁクロノ」

「なんだ？」

執務官室、ＵＳＮ軍風に言うなら士官室と言ったところだろうか？
どういう訳だか俺は今そこに居た。

「俺ってさ？無料奉公する為にアースラ来てるんだよな？」

「若干ニュアンスが違う気もするが、おおむねその通りだ」

そう言うと彼は手元の書類に目を落とした。
だが俺はまだ聞きたい事がある。

「なぁクロノ」

「なんだ？」

「なんで俺が事件簿の資料整理とか手伝ってんの？」

俺がそう言うと、プイッと顔を背けるクロノくん。
あれあれ？なんで顔を背けるのかなぁ？

「・・・コレも立派な社会貢献さ」

「なぁクロノ」

「今度は何だ？」

「一服してきても良い？」

「・・・喫煙室に行ってくれ、この部屋は喫煙可能じゃない」

「アイサー」

何と言う事でしょう。俺はなんと今度はアースラで執務官殿の仕事を手伝っています。

しかも密室で二人っきり・・・薔薇は無いから安心してくれ。

しかし、ついこの間まで密林を監視するよいう簡単な仕事から一転。

クロノくん付きの秘書の真似ごとの様な状態になっていることに戸惑いを隠せない。

つーか、俺はボランティアみたいなもんだぞ。

なんでこれまで担当したの事件の報告書作成を手伝わせる？

重要な内容にタッチして無いけど、これって不味いんじゃないの？

こう言ったのは執務官補佐の人がやる仕事の筈では無いのかエイミィさんよ？

・・・まぁ、そう思っても、彼女もブリッジ勤務であるから忙しいらしいしな。

だからって、ほいほい仕事を請け負う俺も、人が良いんだか使いっぱしりされてると言うか。

「喫煙室、喫煙室・・・あった」

とりあえずクロノくんの部屋から廊下にでて回れ左、この区画から少し上がってトイレの横。

ミッド語で喫煙所と書かれた部屋に入って、懐から小さな煙管と薬草箱を取り出す。

セットして火ぃつけて後は口にくわえるだけ・・・。

「――――ふは～、コレがねぇとやってられないねぇ・・・」

『マスター、吸い過ぎは――』

「解ってる解ってる。そうキツク言うな。大体コレは煙草じゃないって」

薬草を使った煙管です。だから合法だってば。

『見た目が最悪です』

「すみませんした」

我が片腕に怒られても煙管は手放さず。あ～、香草も入れたからいい感じ。

狭い喫煙所に煙が充満していくが、煙草では無いので息苦しさは感じない。
喫煙室で幼児が煙管咥えてる姿って凄まじくシュールだけどな！

さて、ここまでくれば大体予想は付くであろうが、俺はいまだ無料奉仕中である。
意外と次元震を発生させて罪ってのは、俺が思ってたより大分重かったんだよね。
リンディさん曰く嘱託試験やって嘱託になっていればもっと短縮出来たんだと。

あ～、嘱託って報酬が出るだけじゃなくて、刑期の短縮も出来たんだ。
ソレを後から聞かされて、少しぐらついた俺だった。

でも結局、俺は嘱託試験を受けずにボランティアなんだぜ。
・・・最近エイミィさんにパシらされるんだがどうすればいいだろう？

そんな感じで他愛のないことに思考を傾けつつ、宙に消えていく煙を眺めること数分。
ボーっと何もない空間を眺めている・・・あれ？あの滲み顔に見えね？

≪――ガチャ≫

「あら？誰も使わない喫煙室の電気が付いてると思ったらフェン君だったの？」

いきなり喫煙室の戸が開きいたかと思うと、ブリッジに居る筈のエイミィさんがヒョイッと顔をのぞかせた。

「あ、どもエイミィさん。当直終了ですか？」

「さっきね。帰りにクロノくんの顔見てこようかと思って、通りかかったんだけど・・・ダメだよ。煙草を吸うのは身体に・・・」

彼女はそこまで言いかけて、ふと不思議そうな顔をした。何ぞ？

「・・・あれ？煙草かと思ったけど、ちがうんだ？」

「ああ、コレ薬管というか薬草煙管なんですよ。いい匂いでしょう？」

「あ、ホントだ。なんか頭がスーッとするね。煙草だったら“未成年がなにやっとるかー”って怒ってパシり・・・もといお仕置きをするところだったんだけど」

「残念、コイツは合法です」

どうやら意外と好評のようだ。つーか今パシりとか言いかけませんでした？

俺はボランティアだけどパシりとちゃうわい！なんだかとっても

ドチクショー！

・・・落ちつけ俺、こういうときは煙管を吸うんだ。
薬草煙管、コレは私に落ち着きを与えてくれる。
Ｂｅ，Ｋｏｏｌ・・・スーハー・・・・ふぅ。

「んで、エイミィさんこそ何故ここに？」

「ん～？さっきも言ったけど、わたしは偶然通りかかっただけだよ？フェン君こそクロノくんの所で仕事じゃなかったの？」

「一服休憩中です」

「あら？さぼり？」

「人聞きの悪いこと言わんで下さい。ちゃんと執務官殿から許可は得ました。それに自分はボランティアですからね。というか何故ボランティアに執務官の仕事が・・・」

「いやー、楽になったわ」

「あんたの所為か」

元凶はコイツかい。つーか、コレって貴女の仕事と違うんスか？
そしてあんたって言ったら、生意気って言われてチョークスリーパー掛けられた。痛ひ・・。

「だって～、クロノくんって仕事の時って容赦ないんだよー。君も昨日から徹夜でしょう？」

「いやまぁ、貫徹してますが・・・」

只でさえ人手不足なのに、魔導師でない事務員とか乗せて無いから忙しい。

そりゃ俺も一応事務作業とか出来るけど、ＵＳＮと勝手が違うから大変なんだぞ？

「女の子にもソレやらせるとか有り得ないでしょう？」

「いや、ですが・・・だからって部外者である自分に手伝わせるのは不味いんじゃ」

「だいじょーぶ、そこら辺の工作はこのエイミィさんに任せなさい」

そう言ってポンと胸を叩くエイミィさん・・・管理局、これで大丈夫なんだろうか。

まぁ事実人手不足で大変だしなぁ、書類に埋もれて溺死出来る。

それに俺は起した事件についてもリンディさんから弁護を受けている身である。

文句は言えないし、言うつもりも無いが・・・良いのかなぁ？

――――なんとなく感じた一抹の不安を祓う為、おもいっきり薬煙

を吸う俺だった。

＊＊＊

「――お次、管理世界に質量兵器を持ちこもうとした馬鹿達」

「確かソレはアジトに武装局員が一気に突入して確保した筈だ」

ホイホイ、武装達突入で確保っと・・・。

「次、人身売買の手引き、及び斡旋業者」

「現地の駐在管理局員と執務官の連携で組織ごと検挙した」

組織ごと、検挙っと・・・。

「次、竜種の密猟と密売について――」

「お、おい、まだあるのかい？」

あにいってんだ？

「どこぞの誰かさんが張りきりましたからね。検挙数が増えたのは良いとして、当然それに比例して」

「書類も増えた、と？」

「そうだ」

「・・・フェン、そろそろ休憩しよう」

「・・・・その言葉を、待ってイた」

ふぅ、ようやく休憩か。というか本当に人手不足なんだが？
執務官一人にどれだけの事件を任せてるんだよ。手伝いの俺が死にそうなんだけど？
いやまぁ体質的には死なないけどさ・・・本当はエイミィさんがコレやるんと違うん？

「食堂へ行こうクロノ。食事抜きで貫徹とか人間のする事じゃない」

「そう、だな。仮眠したかったが少し胃に入れておいた方がいいか・・・」

「食事を取らないと、人間は大きくなれないからな」

俺がそう言うと、クロノは何とも言えない表情をした。
あれ？俺何か不味い事言った？

「・・・行こうか」

「・・・だな」

口数少なく、足取り重く、俺とクロノは部屋を後にする。
ちなみに上の事件は全部ココ最近起きたモノで、当然俺も参加してたぜ。

どういう訳だか、武装局員と一緒にアジトに突入したし、
売りモノの少女に手を出していた人身売買のクソ売人の股関を蹴り上げたり、
密猟で捕まっていた竜種の子供に懐かれたり・・・、
だけど飼えないから泣く泣く自然保護世界に預けたりした。

・・・あれ？俺って名目上、無料奉仕を行うボランティアだよな？
これだけの事してるとなると、ボランティアじゃなくてボランティア・アーミーだよ。
ボランティア・アーミーって何かって？広義での傭兵の事ですだよ。

つーか、まさか報告書が増えたのって、俺が手伝ってスピード解決させたからか？

もしそうだとしたら、俺自分で自分の首絞めた？うわぁ遣る瀬ない。

そうか、エイミィさんはこうなることを見越して、俺を参加させた訳か。

んで、事件関係者だから、ちょっとした細工で報告書作成も手伝わせられると・・・。

貴女の血はなに色ですかーーー！！！

ソレはさて置き、俺とクロノはほぼ無言でアースラ食堂に到着した。

食券を買い、カウンターに渡し、料理を貰うまでの間も全くの無言。

いやね、暗いとは思うんですけど・・・元気で無いんですよ貫徹明けだから。

「・・・・フェン」

「なに？」

料理をトレイに乗せてあいている席に、クロノと対面する形で座った。

地球に来てからこっちのメニュー増えたなアースラと思いつつ、うどんに箸を付けた時に急にクロノに話しかけられたので顔を上げた。

「手伝いありがとう。アレだけの量が今日中に終わるとは思わなかった」

「なに、リンディさんとかにも頼まれたしな。つーか聞いたぞ。お前さんワーカーホリック気味だってな」

「だれがそんな事を・・」

「ブリッジ付きの人間でエが付く人と言えば解るか？後、本来俺の位置の人」

だから手伝っていた訳だが、まさかそれ作戦だったのかねぇ？
まぁとりあえず、俺もそろそろこの無料奉仕から解放されたいのだがな。

「まったく、あいつときたら・・・そう言えば、そろそろ君の奉仕活動も終わるな」

「なんと」

「数カ月も頑張ったんだ。最前線に行って事件の解決や検挙に協力したという功績もあるしな。今度からは民間協力者として雇いたいけどね」

「・・・条件にもよるが、もう書類仕事は勘弁してくれ」

憑かれた、もとい疲れたようにそう返すと、クロノもそうだなと苦笑して返した。
あの山の様な書類、いや山の書類を一緒に相手にした俺達はもはや戦友。
共にヴァルハラに行こうと思ったことは何度もあったぜ。

「でも、民間協力者って、報酬出るの？」

「お前は・・そこら辺は謝礼の形にすれば大丈夫だとはおもう」

「ほう、なるほど。・・・そういえば、お前さんはしないんだな？」

「何をだ？」

またまた、解ってらっしゃる癖に。

「管理局に俺を勧誘しないのな」

「・・・自分から志して入ってくれるならともかく、その意思が無い人間に無理強いはしないよ」

実を言うと、この無料奉仕の期間中、一度だけリンディさんに聞かれたのだ。
管理局に入らないか？平和を守らないかという感じの話だったかな？確か。
ま、俺としては勝手気ままに生きたいと願ってるからな。

それに管理局だと、俺の場合は有無を言わさず拘束、生体解剖されかねないしね。
何せ俺の中身は文字通り『生きたロストロギア』と言える物になっているのだから。
リンディさんもそれを理解していたのか、その後俺にそう言うことを言う事は無かった。

「そかそか、クロノが友人で良かった」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「褒め言葉だよバーロー」

お互いに苦笑し、そして飯を食い終えた後俺たちは別れた。
もうくたくたのからだを引き摺り、部屋へと戻る為に食堂を出た。
そして、アースラの喫水線（あるかは知らないが）より下の下層に降りる。

俺が貸して貰っている部屋は、以前フェイトが使っていた犯罪者用の収監室だ。
まぁ一応俺も犯罪者に当たる訳だから、ソレも仕方が無いと言える。
でも、手渡されたＩＤキーは、どの階層へも行けるヤツだったから、形だけなのかもな。

実際、見張られている気配も何もないし・・・ソレは置いておこう。

とりあえず　近未来の映画に出て来そうなエアロック式の扉を開く。
そして中に入り、堅くも無いが柔らかくも無いベッドに倒れ込んだ。
考えてみればかなり長いこと生活していた為、何気に愛着もわくと言うものである。
ちなみに、はやて達とは一日一回は次元間通信で会話している。
でも偶には人肌恋しいので、リニスでも一緒に連れて来たかったぜ。

＊＊＊

〜〜――以上が建設が完了した区画です。次はどうしますか？〜〜
「ふむ、ストックしておいた材料は後どれくらいだスイセン？」
〜〜ハッ、リストはヴィズ様の方に送っておきました〜〜

ふむふむ、お、ヴィズ気が効くね。どれどれ？――なるほろねぇ。

「残り数部屋分、スケジュール通りだとドックを作るだけで精いっぱいか」
〜〜はい、プラント建造の際、予想以上に建材を消費してしまいまし

た。このまま順調に進んだとしても、次元航行船を作る場合、竜骨を作り上げた段階で材料が尽きると思われます。申し訳ありません〕

「いや、アレは仕方ない。まさかプラントの植物が異常繁殖して隔壁を天元突破するとは、だれにも予想出来ないからな」

その所為で、予備の建材を使い急いで修理と補強を行ったんだっけな。

ちなみにストックしてある建材には、前もって固定化&硬化処理は施してある。

とはいえ、その魔法が使えるのは現在俺だけだから、補充が効かないのが難点だ。

「・・・しかし、そうなると資材や材料の補充が必要か？」

〔我々シランズの出した計算によると、今回の建設で全部の材料が尽きます。また圧縮空間の空きスペースも埋まりつつあります。まだ広げるのでしたら、いずれ拡張が必要かと――――〕

「いや、今の所その予定は無い。ソレが必要なら必要な時に順次拡張しよう。それよりも、材料不足にならないか心配だ」

〔やはり一度戻れませんか？訓練室をご利用になる騎士の方々が、時折訓練室を破壊してしまい、ソレの修理で建材を消費してしまいます〕

そう言えば解放してたっけ・・・ってうぉい！？ソレマジか！？

魔法訓練室は俺なんてまだ殆ど使ってなかったのにもう壊したのか！？
どうりで予備として別個にストックしておいた建材の減りが早い訳だよ！

｛それに八神家や我々シランズ、それに御庭の動物たちも含めて、少佐の帰還を心待ちにしております｝

「一応もうすぐ無料奉仕期間は終了らしい。そうすれば帰れるさ」

｛なら良いのですが・・・そう言えば、手紙とお写真が届きましたよ？あれには驚きました。普段真面目な少佐も偶にはお茶目なことをなさるのですね｝

・・・？何を言ってるんだろうか？俺は“只の写真”しか送って無いぞ。

｛では、我々一同、少佐のご帰還を心待ちにしております。ソレではそろそろ｝

「おう、報告感謝する。それじゃあ、またなスイセン」

｛はい、失礼します｝

――――ピッ。

やれやれ、アレだけ積んでおいたストックがもう無くなるとはね。
まぁ、アレでギリとは思っていたから、それ程驚かないけど。
ま、ちょうど良かったかもねぇ、もうすぐ戻れるし。

さて、先程から何をしていたのかというと、何のことは無い。
シラン達と秘匿次元間通信を行っていただけである。
一応アースラサイドには秘密という形をとった通信だ。

まぁこのアースラには、凄腕のブリッジスタッフさん達がいるしなぁ。
バレている可能性もあるが・・・まぁそれほど重要な情報のやり取りはしていない。
あくまでもプライベートな内容が多いしな。仮にバレていたとしても、家をリフォームしただけだもんねー。

「コレが終わったら、俺ジャンク屋やるんだ」

『なんか変なフラグ立ちそうですね』

マジでソレ系で食っていけそうな気がする。ハルケギニアに流されて幸運だったぜ。
錬金魔法のお陰で金には絶対に困らないもんな――凄まじく疲れるけど。
とりあえず帰ったら廃棄世界に行って、材料の補充をする事にしようかね。

そう言えば、なんとなくドックも造ったんだし、せっかくだから

次元航行船でも造って見るか。
廃棄世界に行けば、材料になりそうなもんはいくらでも転がってるしな。
どんなのにしようかなぁ・・・なんか面白いもんでも造るかねぇ。

「あの子も合流ってな」

「あの子も合流ってな」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

さて、前回近々帰れそうだと言っていたモノの、まだあと数日はあるらしい。

その日も俺は“ああ、次はマリーさんとこだ”とか考えながらアースラの通路を歩いていた。

俺とクロノを苦しめていたあの報告書やら各部署への書類たち。

その書類関連が連日徹夜のお陰で書類のエベレストはついに消え去った。

俺らが奮闘した所為で大量に出た書類をついに消化したのである。

その時は思わずクロノとよっしゃー！と手を打ち合って喜びの余り叫んだ。

偶々様子を見に来たエイミィさんに、その時の様子を見られて病室送りにされかけたけどな。

そう言う訳で、これで俺も辛い作業から解放されるかと思ったのだが、ところがぎっちょん。

少し休んだらリンディ提督から次の指示、今度は手の足りない部署への手伝いである。

最近思うのだが、何気に俺がアースラの中で一番下働き的な意味で働いている気がする。
どうにもリンディ提督、俺を期限ぎりぎりまでトコトン使ってくれる気らしい。
コレに関して文句を言うと、リンディ提督はにっこりと、どれだけ俺の起した事件をこの程度に済ませるのが大変だったのかを言われそうなので、口が裂けても文句は言いませんがな。

「・・・おろ？あれは――」

廊下を歩いて転送ポートがある部屋の近くを通りかかった時だった。
どこぞで見たことがある金色の髪の娘と、朱色の髪をした女性が転送ポートのある部屋から出てくるのを見た。
この組み合わせ、俺の記憶上では一組しか該当者達がいない。
そして狭い艦内である。向うもすぐに俺に気がついた。

「あ――」

「おや？あんたは確か――」

「お久しぶり、フェイトとアルフ。かれこれ2カ月ってところか？」

本編主人公組の片割れであるフェイト・テスタロッサと、その使い魔のアルフであった。

いや、ホントひさしぶりな気がする。
最後の彼女たちに会ったのは、彼女らがアースラに拘束されていた時だったからな。
そう言えば、俺の体感時間的にはかれこれ1年以上前になる訳かぁ。
懐かしいと感じる訳だぜ。

「ひさしぶりフェン。・・・？どうかしたの？」

「きっと久しぶりにフェイトにあえてうれしいんじゃない？」

「まぁ、確かに本当に久しぶりだからな。――懐かしいってのが一番だけど」

そう呟くように、俺は言葉を紡ぐ。
あの時、別れた日から全く変わってないからある意味安心したよ。
どうやらキチンと立ち直れている様だし、やはり彼女は強い子だ。
使い魔のアルフが支えたと言うのもあるのだろう。
この二人のコンビは、やはり相性が良い。

「「？？」」

「・・・ああ、いや、なんでもないから忘れてくれ。ところで何で二人がココに？」

「それはこっちの台詞だよ。そっちこそ何でアースラにいるのさ？」

「アルフ。――私は嘱託魔導師の資格とったから、色んなところで仕事してたんだ。今日からはアースラで嘱託をやることになったんだけど、フェンはどうして？」

「あー、なんていうか・・・話すとすごーく長くなると言うか」

実際大長編だしなぁ。前のスレの半分がそこでの話しだし・・・っとメタか。

とりあえず転送ポート室を占領しているのは不味いので、二人はリンディさんに挨拶しに行き、俺も俺の仕事をこなしてから、食堂で合流して話すことになった。

「それじゃあ、あとでねフェン」

「またね」

「あいよ、また後でなお二人さん。――――行ったか」

『フェイトさん、立ち直られたみたいですね』

「ま、あの事件からは結構時間も開いたしな。なのはと手紙のやり取りくらいしてるだろうし、本人も前向きに生きようとしている。良い傾向じゃないか」

【主殿、なんだか偶におじさんみたいに年上みたいなこというでしょう】

グハッ！リンの言葉がマイハートにクリティカルだ。
そ、そりゃ中身はもう３０突破してるから、おじさんってのはあながち間違いじゃないけどよ。
むむむ、時折こうやって天然に人を抉ることを言うなんて・・・リン、恐ろしい子！

「・・・ま、肉体年齢はまだ若いから、気にしないけどな」

『――――そう言うと余計に・・・』

「いうな・・・たのむから」

と、兎に角、メンテナンスルームのマリーさんとこ行って、とっとと用事を済ませッぞ！
この話題から一刻も早く逃れたいのか、足早にこの場を去った。

＊＊＊

――――アースラ食堂

さて、何度も来ているのでいい加減見慣れた風景になって来ているアースラの食堂。
何処で学んでいるのやら、最近は洋食の他に中華、和食、ブラジルやらアルゼンチンやらと言った、非常にグローバルなメニューを展開している。

クルーを飽きさせない為に常に努力を惜しまないコック長が、変身魔法やらを駆使し、空いた時間に各国に出向き、現地で学んできたということらしい。コック長パナい。

魔導師とかは己の趣味に全力を傾ける傾向があると言うが、コック長も大概である。

まぁ俺も人の事は言えない人間だから、ある意味コック長と同類だ。

お陰で仲が良いから、よく定食におまけを――ゲフン、えっと何の話だったかな？

「お、フェン！何ボサって突っ立ってんのさ！こっちだよ！」

「ア、アルフ！大きな声出さなくても聞こえるよ」

アルフが周りの眼を気にせず大きな声で俺を呼んだ。

流石はオオカミさん、そう言ったところは気にしないのね。

そうそう、彼女らの事と俺の事を互いに情報交換し合うんだっけな。

「すまん、ちょいと仕事が長引いた。待った？」

「ううん、それほどじゃないよ」

「う～ん、大体２０分くらいかねぇ？フェイトが提督と話して、後は自由にしてい言って事ですぐこっち来たし」

２０分って、結構待ったんじゃないか。

「少し待たせちまったみたいだな。んー、そうだ。侘びと言ってはアレだが、なんか飲むもんでも奢るよ」

そんな訳で飲み物を二人に奢る（一応俺も支給されたカードが食堂で使える）。

フェイトは恐縮してたが、アルフはお構いなしで頼んできた。

むぅ、使い魔って言っても、こうも正反対な性格になるもんかね？

とりあえず適当に買った飲み物を二人に手渡し、俺も二人と対面する形で座った。

「さて、何処から話したものか――二人は確かなのはと連絡を取り合ってたな？どこまで知ってる？」

確かなのはさんが以前この二人と連絡を取り合っていると言っていた。

とすれば、当然話題には身の回りの事を話す機会が多い筈。

偶に遊びに来るくらいだし、俺の事も話している可能性が高い。

そして案の定、なのはさんはフェイトに結構俺らの事を話題に出していたらしい。

だけどな、なのはさんよ・・・幾らなんでも、俺の事を小さなムツゴロウさんは無いと思うぜ。

「――ふむん、じゃ俺がいなくなった時期の話は詳しくは聞いて無い？」

「何かの事件に巻き込まれて、時空管理局もいない時だったから自分たちで解決したって聞いておどろいたよ」

「ああ、いやまぁ。元が俺の世界からの置き土産だったしなぁ」

ホントはなのはやユーノ達にあまり来てほしくは無かった。
相手は無人機、対魔導師用無人機だ。人を殺す為のマシーンだったのだ。
それを聞いても普通に手伝ってくれたあの二人には感謝しても足りないぜ。

「でも、結局詳しい話は聞いて無い。手紙じゃ無理だし、なのはも自分自身良く解ってないから、もし聞きたかったらフェンに出会えた時に聞いて欲しいっていう手紙が来た事があったよ」

「成程（まぁなのはさんは巻き込まれたダケだしな。あの事件の詳しい事情を9歳の女の子が知る由も無いか）――とりあえず、聞く？俺がどうなってたか？」

「うん、知りたいよ。フェンとも・・と、友達だし」

「なんだかんだで世話にはなってるからね。私もフェイトもさ」

「・・・嬉しいこと、言ってくれるじゃないの」

思わず阿部っちまったじゃないか、どうしてくれる？
ソレはさて置き、とりあえず色々と説明する事にした。
今度のは八神家に伝えた時の様な物じゃ無く、より簡潔に、
尚且つ解りやすいように色々と省くべきところは省き、要点だけ
を述べていく。

だが、当然あれだけのことをした訳だから、要点だけつまんでも
かなり長い。
その日は俺ももう仕事が無かったとはいえ、かなり喋ったと思う。
だけど、二人はちゃんと耳を傾けて聞いてくれていた。

「――――んで、最終的に帰って来れたんだけど、その時にロストロ
ギアが暴走して、軽い次元震が発生しちゃったから、その罪を問わ
れて無料奉公していたということだ」

「な、なんていうか・・・」

「大変だったんだねフェン」

「それ程でもある」

「「あるんだ」」

いやだってねぇ？普通あの方法で帰って来れるとは思わんでしょ？
当初の目的では、もう少し滞在して世界を隔てる次元の壁の観測
を行ってからの予定だったし。
まさか戦闘中にW．E．C．R．が暴走して、その反動で世界か

らはじき出されるとか有り得ねぇよ。
はじき出されたってよりかは、無理矢理壁に穴あけて出てきた様なモンだが・・・。

「まったく、お前はよく問題を起してくれるよ。お陰であの後は大変だった」

「いや、ホント面目無いです」

仕方ないじゃないか。こっちにだって――ん？

「クロノ？何時からそこに？」

「つい、さっきだ。僕の勤務時間も過ぎたしな」

驚いた事に何時の間にかクロノが俺の後ろの席に来ていた。
コイツ、何時の間にか気配消しが上手くなりやがった。
ていうかフェイト辺りが驚いていない辺り、気が付いていたのか？

「あれ？クロノが来てるよフェイト」

「あ、ホントだ。何時来たんだろう？」

・・・ああ、気がついてはいなかったのね。把握。

さて、この後はクロノも交えて、お互いの近況報告会の様になった。
どうやらフェイトがアースラに来ることになったのも、やはりリンディさんの手際らしい。
正確には彼女の友人であるレティ・ローラン提督も協力しているのだとか。
結構個人的な要望が通りやすい管理局である。
提督が2人協力すれば、そりゃ部署変えも容易だろう。

フェイト達は俺と仕事が出来ると喜んでいた。
だが、生憎俺の奉仕期間はもうすぐ終わりだから、一緒に働けて一週間程度である。
その事を伝えるとちょっと寂しそうだったが、どう言う訳かクロノがいつでも会えるだろうと彼らしからぬフォローをし始めた為、クロノ熱でもあるんじゃと思ったのは内緒である。
もっとも、何でそんなことを言ったのかの理由は、後で知ることになるのだが・・・。

＊＊＊

さて、フェイトと合流したのは良いが、実質コレと言って事件が起こる事はなかった。
だからなのか、しばらくアースラでは平和な日々が続いた。
無償奉公の俺はいわばパシリな為、アースラが平和だろうが関係が無い。
基本的には雑務の手伝いとかも含まれるからであった。

だからクロノの手伝いが減った分、多少雑務が増えていた。
とはいえ、流石にいずれココを去る俺に全てを任せる訳も無い。
多少雑用が増えても、クロノを手伝っていた時に比べたらむしろ自由時間が増えた程である。

しかし、その空いた時間はすぐに埋まる事になった、その原因となったのはフェイト嬢だ。
嘱託のフェイトは事件が無い時は、特にする事が無い。
その為なのか、偶々見かけたからなのか、俺はよく彼女らに模擬戦を頼まれた。

ちなみに俺のアースラでの立場は無償奉仕。
つまりは基本雑用でありクルーにパシらされるのも仕事の内である。
準職員の様なフェイト達もその範疇に入ると思っていた。

そんな訳で、クロノの手伝いが無くなった分の時間に、彼女との模擬戦が入ることになった。
確かに俺は肉体的にはもはや人では無いから、疲れにくいと言える。
だけど休息も殆どとれないのだ。お願いだから休みを少しください。

しかし嬉々として訓練をしている彼女らにソレを言う勇気は無い。
そのため、俺はフェイトらと相手をすることになった。
それに役得もあった。狼の使い魔アルフさんのことである。

模擬戦の後、彼女が犬形態になりねぎらいの代わりにモフらせてもらえたのだ！
様はペット持ち込み禁止なのよねアースラ。

ここでの生活に不満があるとすれば、まさにその事だけだろう。
リニスなら使い魔と言う事で連れ込んでも問題は無かった。
そうすれば俺は動物分を補充で来たのだ。

まぁその場合、フェイト達になんて説明しようかが大変だが・・・。

ちなみにそこら辺はリニスご本人にゆだねている。
彼女の中で整理が付けば、おのずと会いに行く事だろう。既に許可は出してあるしな。

そんなことよりも今はアルフの話である。凄いよな彼女。
何せ狼形態では、大きさは普通に俺を乗せられる程デカイのだ。
そんなアルフはマジで撫でがいがあり、ブラッシングしていて楽しかった。
いいね、大きな狼と子狼の両方を味わえるなんて、なんてハイブリッドなんだ。
俺のハンドにかかり、最近では自分から撫でるように言われてしまう。
毛づくろいがもう病み付きだと言われてしまった。
そんなこんなで別な意味で苦しい日々であるが、まぁ嫌いでは無い。
出来れば、俺の奉仕期間終了まで、こんな感じで居て欲しかった。
――のだが。

「こちらレッドクリフ、謎の無人機の目撃情報があったポイントに到着した。指示を待つ」

『こちらアースラ。了解です。まもなくハラオウン執務官も到着しますので、待機願います』

『フェン君、いまフェイトさんとクロノも他のポイントを調べているわ。一応クロノ達もすぐにそちらに向かわせるけど、あなたにもその周辺の調査もお願いできるかしら？』

エイミィさんの管制とリンディさんからの通信が入る。
俺は高性能なデバイスを持っているだけに、こういった調査でも使える。
元々は戦闘用なのだが、まぁこう言ったのでも使えなくはない。

「レッドクリフ了解、これより探索を開始します。それと提督、質問の許可を」

『許可します。なんでしょう？』

「仮に無人機と出くわした場合、自分はどう対処しますか？」

『そうね・・・・』

今回、俺の最後の仕事となりそうなのは、無人世界の遺跡周辺における調査任務である。
なにやらスクライアでは無いが、考古学関連からの依頼であるらしい。

どうも、無人世界の遺跡にて何やら機械に襲われたとの事。
襲ってきた相手がミサイル等の質量兵器を所持していたことから、現行の無人機である可能性が高い。

このままでは調査が行えない為、考古学の研究者さんらが管理局に泣きついたらしい。
スクライアに手をつけられていないせっかくの遺跡だから、何としても調査したいんだそうだ。

古代遺跡の発掘、及び調査はスクライア一族が結構シマ這ってるからな。
彼らに属さない考古学者にとって、彼らの手が及んでいない遺跡は貴重なんだろう。
それに、どうもココは古代魔法文明系の遺跡の様である。
学術的価値は計り知れないのだと考えられる。

「・・・しかし、調査といっても何を調べろと？」

【相手が無人機なら、魔力残照が残っている可能性は少なそうです】

『考古学者連中がブチ壊してくれていたらまだマシでしたけど、魔法を一発も撃たずに逃げたらしいですからね。４回ほど』

ちなみに依頼してきた考古学者たちは過去に４度来ているらしい。
その４度とも、正体不明の無人機に追っ払われたのだそうだ。
ちなみにミサイルで撃たれたらしいが、今の所けが人なしなのは素直にすごいと思う。
ミサイルのロックオンシステムがアレだったか、はたまた運が良いのか。

まぁ考えても解らんので、とりあえずこのポイントを散策する。
確かにミサイルは発射されたらしく、誤爆した際に崩れたのであ

ろう遺跡の一部を見つけた。
崩れていると言っても、それ程酷く損傷している訳では無い。
簡単に言えば、部屋の壁紙が剥がれるかの様に薄く表面だけ焦げている様な状態だ。
威力から考えて、対人用ミサイル、対魔導師用には調整されてはいない。
焦げ目から魔力素子は通常以上は感知出来ず。

すなわち、高性能炸薬、及びセムテックスの様な弾頭ではないかと予想される。
また鉄片の様な物が思ったより少ないことから、殺傷目的と言うよりかは、威嚇が目的だろう。
もしかしたら、爆薬搭載ミサイルではなく、只のフラッシュバン搭載のミサイルかもしれん。
・・・・しかし、そうなると余計に目的が解らん。

「・・・・ん？ここも破壊されている？」

『これは最近できた穴みたいですね。あーあ、貴重な学術的遺産になんてこと』

ふと見れば、恐らくは石板にて塞がれていたと思われる穴がそこにあった。
周辺には破壊されて粉々にされた石板の破片が無造作に散らばっている。
だが、ソレはどうやらミサイルの爆発によるものでは無いらしい。

【これ、爆発じゃなくて、掘削機械とかで削ったって感じですぅ】

リンがそう漏らす通り、粉々にされているが、ソレは確かに削り取られたモノだった。

とはいえ、周辺の現状保存等は考えられておらず、貴重な遺跡はボロボロだったが。

「入った形跡はあるが、どうやらこの穴からは出た形跡はないな」

『データによると遺跡内部はそれ程入り組んでいないらしいです。考古学者たちが調べたところだけですから、全体の6~7割が良いところでしょうが』

「・・・ソレだけあれば十分だ。降りてみよう」

【主殿、フェイトさんやクロノさんを待たないですか?】

「一応その穴のある辺りも、俺の調べるポイントの範疇だしな。偵察だ」

そんな訳で、見つけた穴に降りる俺。

真っ暗・・・かと思ったのだが、何やら仕掛けでもあったのか中は予想外に明るい。

魔導遺跡と言う事もあり、魔力による照明が生きているのだろう。

何が出るかは分からないが、とりあえず対処できるようにＢＡ２を展開。

オートクレールを何時でも使えるようにし、遺跡の通路を進んだのだった。

「丸いボディには機能が一杯」

「丸いボディには機能が一杯」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

さて、魔法関連の遺跡と言うのは、ご存じの通りスクライア一族が良く調査を行うことが多い。
そしてスクライア一族は、その殆どが・・・特に遺跡に入る人間は魔導師である事に起因する。
ソレは何故か？魔法技術が用いられた遺跡には、大抵の場合罠が仕掛けられていることが多いからだ。

その為、こう言った類の遺跡を調べる人間は、最低でもＢＪを展開出来る人間が多い。
ＢＪの有ると無しでは、生存率に雲泥の差が出るからである。
んでだ、そう言う訳で普通なら遺跡には罠とかが仕掛けられているのが定石なんだが・・・。

「ふむ、なんていうか」

【モノの見事に破壊されてますねー】

『遺跡そのものには何の興味も無いみたいですね』

【でも、重要そうな場所は壊してないですぅ】

『それはねリン。そんなことしたら遺跡が崩壊して生き埋めになるからよ？』

【い、生き埋め怖いですぅ】

「古代魔法文明の遺跡は侵入者避けなのか、重要そうな部分を壊すと連鎖的に遺跡が崩れ出すところが多いってのが、今の魔法考古学会の定説だっけか？」

【主殿、よく知ってますね。リンは尊敬しますぅ！】

「はっは、それ程でも無い」

まぁその手の知識は、ユーノから耳がタコになるくらい聞いたんだよな。

アイツとだべってたダケなのに、自分の得意分野となると途端ウンチクしやがる。

とはいえ、やはり妙だ。一応考古学会の通説とはいえ、普通は知らない知識である。

だが、破壊痕から察するに、敵はある程度考古学の知識を持つヤツの様だ。

でなければ、態々通行に邪魔な障害物を放っておく訳が無い。
敵の目的は遺跡そのモノでは無い？となると、この遺跡には何かがある？
・・・・やな予感がする。

「・・・・・」≪――カチャ≫

俺は思わず手に持つ近接戦闘用兵装デバイス・オートクレールの柄を強く握っていた。
その事に気が付き、いけないいけないと思い、少し握る手を緩める。
刀剣類に全般に言えることだが、剣を強く握り過ぎると即時対応で遅れを取りやすいのだ。

とりあえず奥に進んでいく、ココまで来て解ってはいたが、敵さん隠すつもりも無いらしい。
ユーノ辺りが見たら卒倒しそうなくらいの破壊痕が、いたるところに残されていた。
しかし、そのどれもが掘削機等で削った様な壊され方であり、何と言うか非常に丁寧に壊されている。

（敵は目的の物のありかを、まだ特定はしていない？）

確か目撃されたのは機械であると聞いている。
無人機械で只壊すのではなく、慎重に調べている辺り、ある程度の判断能力を持っていると推測できる。
破壊された壁や扉の残がいがいたるところにあり、ソレらは今だ埃

をかぶっていないのを見る限り、敵は何かを探し続けていると言う事が窺える。
でも、普通ならこれ程壊さなくても良い筈だ。

――と言う事は・・・。

「ヴィズ、センサーに何か反応は無いか？」

『それが、先程からセンサーが上手く作動しないんです。リン、そっちはどう？』

【うーん、通路部分は解るんですぅ。だけど壁の向うはぼんやりとしか解らないですぅ】

――やっぱりか、この遺跡の材質が特殊なのかも知れん。

敵さんもセンサーか何かで探しているが、センサーが上手く働かない。
だから手探りに近い状態で、壁を壊して進んでいると言う事なのか。

≪――――ズズズン≫

「！・・聞いたか？」

『はい』

【まだ正体不明機さんが居るみたいですね】

遠くの方で何かが崩される音が、ＢＡ？の集音マイクから聞えて来た。
相当良い掘削機を使っているのか、崩れる音以外は聞えなかった。
どんな敵が相手なのだろうか？一応調べるのが目的だが、最悪戦闘も考慮しなければならない。

「音のした方へ行ってみよう。ヴィズ、リン、ナビ頼む」

『【了解！】』

敵がなんなのかは知らないが、確認だけは取らなければ。
俺はそう思い、音が聞こえた方へと先行するのであった。

＊＊＊

奥へ進んだは良いが、この遺跡は大分地下にまで構造体があるらしかった。
進んでも進んでも真新しい破壊痕が目立つ壁ばかりである。
途中にあった部屋等は特に破壊痕が多いことから、敵はやはり何かを探しているのだろう。

だが、破壊痕跡は見つけても肝心の無人機の姿は今だ確認できてい

ない。
偶に響く音を聞く限り、大分近づいているのは解るのだが、まだ目視では見ていないのだ。
遺跡に入って既に1時間、そろそろ上にフェイトやクロノが来る時間だ。

もう少し奥を探して、見つけられなかったら一度戻ろう。
そう考えて、破壊された壁の穴をくぐった時であった。

『（マスター、この先に複数の動体反応を感知しました）』

「（そうか・・・ミラージュハイド展開、行けるところまで行き、データを集める）」

『（了解）』

ヴィズからの報告が上がり、すぐ近くに無人機が居ることがわかった。
見つかるのはゴメンな為、光学迷彩魔法ミラージュハイドを用いて姿を消し俺は更に奥へと進む。
破壊された為、至るところ掛けた照明の所為か、真っ暗闇と言う訳では無いが微妙に迫力がある通路を進み、やがて通路を抜ける。
通路の先にあったのは、二重らせん構造の更に階下に降りる為の階段であった。

そしてその階段を下った先にあったのは、一言で表すのなら井戸と言うべき空間であった。
古来より、水と言うモノは命を紡ぐ為に必要なファクターであると

考えられてきた。
水の神さまと言ったモノが色んな古代文明の宗教観に登場するのもそのためだ。

そして、コレは地球でも言えることだが、古代の遺跡の地下には大抵地下水脈が流れている。
古代人達がいかに水を大切にしていたかと言うことが良く解る事だろう。
この遺跡もその定石の例外に漏れず、遺跡最深部は井戸となっていた。
俺は歴史の専門家では無いのでよくは解らんが、この遺跡を作り上げた人々は水を信仰の対象にしていた可能性もある。

何故なら残されたレリーフには蛇が多く、蛇と言うのは川を表すこともあるからである。
この井戸も案外生活の為だけでは無く、宗教的見地から造られた可能性もあった。
まぁ専門家では無いので、それ以上は流石に不明だ。ユーノが居たら解るんだろうか？

それは兎も角として、俺は破壊された封印が施されていたであろう扉をくぐり、下へと降りる。
音を立てては不味いと感じた為、飛行魔法で浮遊しながらゆっくりと降りた。
魔力探知されない様に、微妙な魔力操作で隠匿しつつなため、歩くよりかは疲れる。

何処までも続きそうな長い階段を下りたその先には、ドーム状の大部屋が広がっていた。
石畳――と言っても、紙が入る隙間も無い程の建築である――が引

かれた広間。
その中央には、水が流れ出る台座の様な祭壇があるのが見て取れた。
よーく眼を凝らして見ると、その台座に安置されている球状の何かかが見えた。
球体は台座に直接安置されている訳では無く、宙に浮かんでいる。
その球体下の台座からは常に水があふれ出していた。
魔力反応を感知した為、恐らくあの球体が水を引き寄せる術式を持つモノなのだろう。

ロストロギアとも考えられるが、ソレは恐らく的中していた。
何故なら、その球体を手に入れたいのか、ココに入りこんだと思われる機械。
すなわち、調査隊を攻撃してきた無人機械たちが、球体に群がっていたからである。

「（・・・・ビンゴ）」

『（数は――この場には計２０機、エネルギーの大きさから考えて武装を施されている可能性大）』

【魔力反応を探知、ですが恐らくは魔力バッテリー駆動方式だと考えられるですぅ】

量産性が高そうな全金属製のカプセル球状タイプのボディ。
恐らくは複合センサーであろう黄色い水晶体が機体の中央に設置されている。

また、その周辺にはサブと思われる小型の複合センサーが二基ついていた。
手足は無く、移動方法は重力制御魔法を応用した浮遊に寄るモノに頼っている。
機動性は不明。だが、細かな動作を見る限り、かなりの動きが出来るモノと判断出来る。

何よりも特徴的なのは、胴体部の両サイドが開き、中から赤いケーブルが伸びていることだ。
ケーブルの先には、金属製の筒がついたモノや、掘削機と思われる箱が付属しているのもある。

どうやらこの連中が遺跡を荒らして回った機械と言うのは間違いないらしい。
一部の無人機――仮呼称として暫定的にドローンとしておこう。
幾つかのドローンには、ケーブルの出ている部分に箱型の何かが付属されていた。

恐らくミサイルポッドが取り付けられた機種だと考えられる。
その内の一機のミサイルポッドには、使われた形跡がはっきりと見て取れた。
調査隊はミサイルで攻撃されたらしい、となれば目の前のドローンがそうである可能性が高い。

「（ヴィズ、アースラに秘匿通信、内容は“我、正体不明の無人機を確認、調査続行”）」

『（了解、秘匿通信でアースラに送ります――通信エラー発生、秘匿通信送信中断）』

【エラー原因解析中・・・・ドローンから妨害信号の発信を確認】

「（気付かれていたか？）」

【いいえ、どうやら常に発信している模様、半径７０ｍ程度ですがこの位置では丁度妨害域に入るです】

奴さんらは台座に乗っているマジックアイテムの球体に夢中らしい。
どうやら防衛システムが働いているらしく、台座周辺には防御シールドが発生していた。
連中はそれを解除しようと、躍起になって台座を囲っている。
今だ気がつかれていないし、しばらくはシールドが持ちそうである。

「（一度戻って、通信可能エリアまで移動しよう）」

【『（了解）』】

アースラに連絡を入れないと不味いだろうと考えた為、その場を一時離脱した。
なんとか上の階にまで戻り、通信可能エリヤのギリギリにまで戻ることが出来た。

「（アースラ、こちらレッドクリフ、応答されたし）」

無人機に感知されないように秘匿回線を開き、念話を用いて連絡を送る。
少しして回線がつながり、向うからも返答が来た。
ただ、この遺跡の性質上ややノイズが入っていたが、まぁ聞く分には問題無い。
ヴィズが気を利かせて、ノイズキャンセラーを作動させたので、徐々に音声が鮮明になった。

『（こちらアースラ――レッドクリフ―現在――置を知らせ――）』

「（現在位置は遺跡中心部、地下階層。指示された通り周辺を捜索。遺跡の中も捜索したところ、敵無人機を確認、現在監視を続けてます）」

とりあえず偵察でわかった事と、正体不明無人機の画像と解析データを送った。
完全な機械式と言う訳でも無く、魔力も使う事から魔導師が造ったモノと思われ、遺跡に残る遺物を狙っている可能性が高いという報告も入れた。

「（リンディ提督、どうします?監視は続行しますか?）」

『（そうねぇ・・・やっぱり一度戻ってクロノ達と合流、出入り口で待ち伏せて、可能ならば捕獲して。その遺跡の出入口は一つしか無いんでしょう?）』

「（ココまではほぼ一方通行でした。ただ、連中遺跡の保護にはあ

んまり気を使って無いので、下手すると壁に穴あけて逃走する可能性が高いと思われます）」

『（だとすると厄介ね。足止めは出来そう？）』

「（数が多いので、逆に複数でこちらが足止めされて、遺物は奪われるかと）」

『（それは更に不味いわね。通報してきた考古学会の人達にはなるべく遺跡を傷つけないで現状維持にしてほしいって言われているのよ）』

・・・リンディ艦長、既にそれは難しいと思われます。
だって遺跡内はあいつ等の所為で結構ボロボロだし、レリーフとか破壊されている。
既に現状保存も難しい上、修復にはかなりの時間と手間がかかることは明白だった。

だが、既にボロボロだからと言って、無視していい訳も無い。
依頼された以上、出来る限りは現状維持に努めなければならない。
社会人の辛いところであろう・・・なので。

「（了解、なるべく壊さない様に心がけます。一度戻って執務官達と合流します）」

『（お願いね。通信終わり）』

俺としてはそう答えるしか無かった。
だって、もう既に遺跡内部はボロボロだったから、そう応えるしかない。

つーか、相手がミサイルとか使用する時点で、遺跡の損壊くらい有り得る話しだろうに・・・。
依頼者側にとってはあまり関係無いのかもしれないが、現場に居る俺らにとっては厄介な話しである事この上ない。

『（マスター！）』

「（！！）」

突然念話による警告が脳内に響き渡った。
見るとあのドローンの何体かが、こちらへとゆっくり浮遊して来ていた。
一瞬見つかったのかと思ったのだが、下に居た数と合わない為、恐らく定期的な巡回がプログラムされているのだと思う。

遺跡内部は老朽化でもろくなっており、魔導師、特に俺みたいな派手な射撃を多用する魔導師にとっては戦いにくい場所だ。
一体程度だったら始末できただろうが、複数体の相手をするのは流石に辛い。
どうせ上にはフェイトやクロノ達がもうすぐ来るのだし、とりあえずこの場はやり過ごして、上にいったん戻り、みんなと合流する事にしよう。

そう思い、俺は通路の壁側に身を寄せて気配を消し、ミラージュハ

イドを展開して隠れた。
ミラージュハイドには機械的なセンサーからも見えなくなるように術式を組んである。
魔導師対無人機戦が多かったＵＳＮでの工夫だった。
流石に動き回るとばれやすくなるが、こうやって動かなければまずバレない。

「（上手いこと、通り過ぎてくれよ・・・）」

【（どきどき・・・どきどき・・・・）】

『（敵機通過まで後５０ｍ）』

歩く様な早さで・・とでも言えばいいのだろうか？
ドローンは人間の歩行速度と同程度、時速５ｋｍ程度の超鈍足で浮遊しながら進んでくる。
まるでじらすかのようなそのスピードが、あまりにもじれったく感じられた。

なんとかしゃがむことでスキマを作り、連中と接触することなくスルー出来そうであった。
兎に角早く進んでくれ、心の中でそう願ったのだが――

≪・・・――バシュン！≫

「ゲッ！」【ふぇ！？なんで！？】

『ミ、ミラージュハイドが強制解除！？どうして？！』

その瞬間、もし弾丸型ヘルメットを付けていなかったら、面白いくらいに歪んだ俺の顔が見えていた事だろう。
自分で解除するか、敵の攻撃でも受けない限り解除される事のない筈の光学迷彩魔法ミラージュハイドが突如としてキャンセルされてしまい、俺の姿が白日の下にさらされてしまったのである。

ＢＡの中は冷や汗だらだらだ。ヘルメットにはまさに漫画汗が出ていると思うぜ。
何せ丁度ドローンが通りかかろうとした矢先に解除されたんだぜ？
当然、直線の通路に突然俺の姿が現れたので、相手も驚きで立ち尽くし――――

≪・・・――ぐぽーん！≫

――――神さま、泣いても良いでしょうか？

恐らくカメラアイと思われる機体中央の水晶体が光ってます。
それは某風使いが住む世界に登場する大きな団子虫が、怒りに我を忘れた時に似ているんです。

そう・・・なんか変な音を立てて、ドローン達のカメラアイが赤い光に染まっていくのである。
見た目が凄まじく怖いのだ。

薄暗い空間でカメラアイの赤い光だけがグポーンと浮かぶ光景が広

がっている。
スペック的には勝てる筈だが、何故か勝てない様なプレッシャーを受けるのはなぜであろうか？

「・・・・・・・」

睨みあう俺ら、いや、奴さんらカメラアイとは言うが、その実ただのセンサーの可能性もあるので、睨みあうという行為は正しい意味では無いかもしれない。
正直、俺は向うが何時動くのか冷や冷やしながら見ていた。
先の突然の魔法解除、理解できない異常事態に恐怖を感じていたのだ。

戦うべきなのだろうか？逃げるべきなのだろうか？隠れるべきなのだろうか？
どれにするか非常に迷ったが、俺は戦いながら逃げることを選択することにした。

立地条件が悪い所で戦っても、大変なだけなのだから、自分の戦いやすい場所に行くのも戦術だと内心叫びつつ、取り回しがしにくいオートクレールではなく、手甲に隠された小型ブレードが何時でも使用可能なように魔力を込めていった。

だが、連中にも魔力センサーがあったのか、気付かれたらしく――――

≪ギュイン――――ガシュン≫

ドローンの胴体から、複数の赤いコードの群が吐き出されメドューサの髪の様に広がっていくのを見た。まるで意思を持つかの如くうねうねと動き回る赤いコード達の姿は、俺にものすごい生理的な嫌悪感を感じさせた。
サバイバルで水中に落ちた時、大量のミミズの群に飛び込んでしまったあの時並にヤバい。
そして、あのコードを見て、俺はあることを考えてしまった、考えてついてしまったのだ！

（・・・・触手みてぇ――――ひぎぃ！）

その考えが浮かんだ瞬間、戦闘前で興奮していた俺の脳が高速思考で余計な想像を浮かべてしまう。そう、あの赤い触手の様なコードにアッ――されてしまうろくでも無いビジョンが、脳内にデジタルハイビジョンよろしく鮮明にイメージされて浮かんでしまったのだ。

・・・・・・・・・俺の頭のバカぁ。グス。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

さて、フェンが地下階層でアーンな事を思い浮かべてしまい冷や汗を流していた頃。

「ココなのか？フェンが報告してきた遺跡は？」

『はい、間違いありません。彼は先行してこの遺跡の中に居るそうです』

他のポイントの探索を終えたクロノとフェイト達が合流し、遺跡の地上構造部を眺めていた。
彼らが調べたところと同じくらいの規模の遺跡ではあったが、損壊率が高かった。
それはドローン達が集団で遺跡に気を掛けず調べた所為である。

フェンが造り出した思考戦車シランズと比べたら、お粗末なＡＩしか搭載されていない無人機が、遺跡の損壊を気にする様な感情を持ち合わせている訳が無いのだ。
まぁシランズの場合は、過剰装備と言えなくもない、あれは完全にフェンの趣味である。

「他の所も破壊痕が酷かったけど、ココはもっとすごいね」

「ほんとだねぇ、今にも崩れそうだよ」

呑気なことを言うフェイトとアルフであるが、実はあながち間違っていない。
タダでさえボロかった遺跡は、無人機達が騒いだ所為であちこちボロボロになっていたのだ。
おまけにそれは遺跡外部にとどまらず、遺跡の内部でも同じことが行われた。
既にこの遺跡、何時崩れてもおかしくは無かったのである。

「ミサイルの爆発跡があるから、コレきっと正体不明の無人機の仕業だ」

「確かに報告では、調査隊が誘導弾の攻撃を受けたとある。そう見て間違いないな」

「んで、フェンはこの中にいるのかい？大丈夫なんだろうか」

「アルフはフェンの事が心配なんだ？」

「そりゃねぇ・・・あのブラッシングは癖になるからねぇ」

何処かうっとりとそう応えるアルフに、フェイトはそ、そうなんだと苦笑して返した。
アルフは彼女の使い魔であり、精神的なリンクを持っている。
その為、お互いの持つ感情やらが解ってしまうのだ。

現にアルフの尻尾はフェンの名前を出してからちぎれんばかりにフィーバーしちゃっている。
すでにアルフもフェンの持つゴッヅハンドの虜となってしまったの

であった。
隠そうともしない嬉しそうなその態度に、自分も偶にはブラッシングしてあげたら喜ぶかな?と、思考が別のとこに行っているフェイトであった。

「あー、まぁとりあえずだ。ここでフェンと合流すればいいのかエイミィ?」

『一応さっき連絡を受けた限りだと、そう言う事になります。もうそろそろ出てくるんじゃないかと思います。彼、移動力高いし』

「そうだな。なら待てば良いか・・・」

クロノはアースラに確認を取り、フェイト達にも待つ様に指示を出した。
報告では２０以上の無人機械が遺跡の中に居るらしい。
そして遺跡の中は結構狭いのだ。４人の人間が戦える様な広さでは無い。
だから、三次元機動が取れる外で合流し、設置術式による罠でも仕掛けよう。
そうクロノは計画を立てていた。しかし、その計画はもろくも崩れ去る事になる。

「・・・――お、どうやら上がってきたみたいだよ」

いち早く気がついたのはアルフだった。

彼女は元が狼なため、気配察知に優れているのだろう。
人間よりも何十倍も意であろう聴覚で、足音を聞きわけフェンが走ってくるのを感知したのだ。

・・・・走ってくる？

「――――おおおおおおおおお！！」

どういう訳か、身体強化魔法まで使って凄まじい速度でこちらへと走ってくるフェン。
かなり早いのに、遺跡の通路に倒れている柱等につまずかないのはさすがだ。

そして普段の彼の様子からかけ離れた、ある意味尋常じゃないその様子に驚く3人。
何かあったのかと思ったのだが、その予想は大当たりであった。
彼の背後に何か光るものが見えたのである。

「ぜ、全員空中に退避ぃ！！！！！！」

「う、うん！」「わかった！」

彼らは思考するのが早い魔導師達である。

フェンが何をやらかしたのかをすぐさまに理解した。
クロノの呼びかけに、フェイトとアルフは空中へと退避する。
彼らが空中に飛び去るのとほぼ同時に、フェンも遺跡の出入り口から飛び出した。

「まったく！何やったんだフェン！！」

「ハァハァ。解らない、何故か、迷彩魔法、解けた。あの空間で、戦闘無理、狭い・・・」

「だ、大丈夫フェン？」

苦しそうに肩で息をしているフェン、遺跡の地下はほぼ一本道であったとはいえ、無人機が無茶した所為で、倒れた柱等で通路がふさがれた為かなり入り組んでおり、狭い為飛行魔法を使わず身体強化だけで走り抜けたのである。
崩れた壁や柱をよじ登ったりくぐり抜けたりした為、普通に走るよりも疲れたのだろう。

それに彼は飛行魔法は一応使えるが、生来ソレ系はあまり得意では無い。
現在使っている飛行魔法は、普通の飛行魔法と違い、無理矢理身体を浮かべ、有り余る魔力を姿勢制御と推進に回すことで宙を飛んでいるのである。
普通の魔導師が飛行機とするなら、フェンのソレはミサイルやロケットの類だろう。
スピードこそ出るが、繊細な動きに関しては非常に難しい。

だから彼は狭い遺跡の中で飛ぶよりも、走る方を選択したのであった。
魔力強化で身体能力の底上げをしてはいたが、肉体的には幼児である。
全力疾走＋魔力ブーストはかなりスタミナを消耗させたと言う事だろう。
もっとも、今回についてはそれだけが原因では無いのだが・・・。

「魔法が解除された？」

「・・・――ああ、最初はミラージュハイドで隠れて過ごそうと思ったんだが・・・っと、説明は後みたいだ」

息を整えたフェンが指差した先。
そこには遺跡の入口から列をなして這い出てくるドローン達がいた。
ドローン達は何かを探すかのようにセンサーを作動させ、フェン達を見つけるとあの赤いコードを展開。
そのコードの幾つかから熱線が発射されフェン達を照らした。
クロノとフェイト達は射線を予想して避けたが、フェンには何故か多くの熱線が集中した為、多重プロテクションを展開する事で防いだ。

「魔力反応検知できず、か。あれは純粋な科学レーザーか？それとも――」

「呑気なこと言ってないで迎撃しろフェン！」

「いやしかし、今の威力・・・メガワットまでは行かないけど、それでもかなりの威力だ。下手するとＢＪじゃヤバいだろうな。俺のは大丈夫だが・・・」

ブツブツ言いながらも、防御魔法を展開している。
その為、今のところフェンにとってあのレーザーはただ眩しいだけである。

周辺の状況を見て行動出来る為、それなりに高度なＡＩを積んでいることは解ったが、攻撃が効かないのに攻撃をし続ける所を見ると、戦術関連についてはお粗末だと、フェンは判断を下した。

だが、フェンは何か得体のしれない嫌な予感と言うモノを感じていた。
いわゆる勘と言うヤツだが、結構な頻度でこの勘はよく当たる為、今まで彼は攻勢に出れなかったのである。

ココで、フェイトとクロノが射撃魔法で牽制して、一度体勢を立て直そうとするのを見たフェンも、格納領域からジリーノを取り出し、スラッグでは無く散弾モードで発射する準備をした。

何気に敵が多かったので、面での制圧力に期待した為である。
牽制の為に発射される魔力弾。だが、ソレらは彼らの予想を大きく裏切る形となった。

「あ！」

「い？」

「うえおってか？・・・つか、魔力弾が消えた、だと？」

「な、何さアレ？シールドで防ぐならわかるけど・・・」

フェイト達が発射したフォトンランサーは、ドローンに接触する前に突然崩れた。

威力は兎も角、貫通性が高いクロノのスティンガーレイも同様だった。

そしてフェンの散弾魔法に至っては、彼らよりももっと手前で魔力弾自体が自壊してしまった。

正直、夢でも見させられているんじゃないかと、彼らは自分の眼を疑った。

この時はまだあまり知られていなかったのだが、このドローン・・・。

後に試作型ガジェットドローンと呼ばれる様になる機体には、とある魔導システムを試験的に配備されていた。

その魔導システムこそ、魔導師にとっては非常に厄介なフィールド魔法。

Ａｎｔｉ－Ｍａｇｉｌｉｎｋ－Ｆｉｅｌｄ、通称ＡＭＦと呼ばれる、魔力結合解除、すなわち魔法を無効化させるジャマーフィールドを展開させる事が出来るＡＡＡランクの魔法防御システムが装備されていたのだ。

だが、後年になって解る様な事を彼らが知る由も無く――――

「来るぞ！フェン、防御魔法を！」

「了解」

「あたしも手伝うよ！」

――ただ困惑しながらも、対処するしか無かったのであった。

「丸いボディには機能が一杯」（後書き）

※以下、本編の登場した作者の妄想無人機。

・試作型ガジェットドローン。
ガジェットドローン?型の試作機ではあるが、設計上では既に完成しており、細部が?型と異なる（センサーの数が違う等）以外は?型と大差ない。性能試験も兼ねて様々な世界に複数がばら撒かれ、各地のロストロギアの回収に回されていた。また、ＡＭＦ発生装置は内蔵式では無く、外装式であるのも本機体の特徴である。

ただ、試作品故かまだＡＩプロトコルや戦術プログラムが完成しておらず、若干実戦においてはバカな行動をしたりすることが目立つ。本機のデータによって数年後には完成された?型が実践投入される事となる。

――以上、ガジェットドローンの試作品でしたぁ。スカさんも試作品くらい作るよね。多分。

「記憶は霞んでいくもんだぜ」（前書き）

※今回やや短め。

「記憶は霞んでいくもんだぜ」

「記憶は霞んでいくもんだぜ」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

イヤイヤ参ったね。

俺も無人機と戦うなんてことには慣れていたと思ってたけど・・・。

≪バシュッ！！！≫

『凝集光がシールドに直撃、シールド減衰率１５％、許容範囲内』

「――こうも光線を撃ち込まれると、身動きが取れないな」

魔法が、攻撃がこうも通用しないと流石に――というか非常に萎える。

撃つ魔法撃つ魔法が悉くかき消されてしまい効果無しだ。

敵の3～4体は全員で魔力弾乱れ撃ちのごり押しでなんとか撃破したんだが、連中が集団で隊列を組んだ途端ソレも効かなくなった。

つーか魔法が消えるとか一体どんな原理が働いているんだろうか？

一応ヴィズやリンに探らせているが、今の所まだ結果が出ない。

まぁ本当はこの時の俺が使っていた魔力弾が通常の弾頭だったのが問題だった。

あのＵＳＮで普段ずっと使っていたあの弾頭なら確実に貫けていた。

だが、この時使っていたのがその弾種が使えないオートマチック式ショットガン型の兵装デバイスであるジリーノだった。

しかし、そんなことに気がつく事も無く、俺は攻撃を続行したのだった。

射撃系は勿論のことバインドもダメ。

おまけにドローンに下手に近づかれると、意識してても防御魔法の展開まであやしくなる。

術式に干渉してくる――――って訳でも無い訳だし、余計に頭がこんがらがった。

しかも、ソレだけじゃないのが厄介であった。

「ッ！なに？今の感覚！？」

「あんまり近づくとバリアジャケットも解除される。常に意識して無いと危険」

こんな効果まで付属している。

ＢＪ及びＢＡも連中に近づかれた際に、集中していないと・・・その、まぁアレだ。

俺の口から言うのは憚られるというか・・あ～う～・・・い、言わなくても解るだろう？

つまり防御力を魔法防護服に依存している魔導師にはキツイ効果だって事だ。

戦場で普通の服に戻されたら目も当てられん。

兎に角、連中が非常に厄介だって事は解ったぜ！

問題はどうするかって事なんだよなぁ。

『警告、レーザー照射に注意してください』

「たく、バカスカとテメェらはどこのケイ素生命だよ」

ヴィズの警告に従い、再度多重シールドを張り直す。

あの光線は一度発射すると冷却の為のインターバルが発生する。

その隙を使って多重シールドの様な防御魔法を張り直す訳だ。

あれで普通の無人機なら、中央に吶喊してブッ潰すんだがなぁ。

ＢＡも近寄り過ぎると影響を受けるらしいから、迂闊に突っ込めないぜ。

「一体や二体倒したくらいじゃ切りが無い――フェン、砲撃魔法とかで蹴散らせないか？」

さて、敵からのレーザーを幾重にも張った多重シールドで防いでいると、俺の張ったシールドに逃げ込んできたクロノからそう聞かれた。

確かに今この場に居る面子の中で、俺が一番強力な砲撃が使えるとは思うが・・・。

「遺跡ぶっ壊して始末書の山を築きたいというなら良いと思うぞ」

俺としては明日帰るのに、その前に仕事を増やさないでほしいと思った。

もう富士の山を超越したK2クラスの書類の山とか勘弁してほしいゼ。

「――ッ！クロノ！」

「質量誘導弾搭載タイプ！？厄介な！」

おっと、ミサイル搭載型まで出て来やがった！

ミサイル自体は問題無い、シールドで十分防げるからな。

問題はそれによって視界が悪くなることだ。

『敵機ミサイル発射！熱源急速接近中！』

「ジャマー打て！」

ヴィズの電子攻撃がミサイルに通用したらしく、こちらに向かって来ていたミサイルは次々と明後日の方向へと雁首そろえて飛んで行ってしまった。

序でにクロノやフェイト達に向かうミサイルにもジャマーを打ち、ミサイルを落してやる。

こう言った質量兵器相手だと、どうもこの面子の中では俺の方に分があるようだった。

だが、だからと言って事態が好転するという訳でも無く――――

「うわっ！また来た！」

「どうするの！？あんなに沢山撃ち落とせないよ！！」

「慌てるな！誘導弾だって有限の筈だ！落ちついて対処するんだ！」

「全員もっと近づいてくれ！動かれるとジャミングするのが大変なんだ！」

――遺跡からまた出て来ちゃったドローンのミサイルを回避するので精いっぱいだった。

＊＊＊

さて、一応データは取れた為、個人的には退避しても良いと思ったのだが甘かった。

リンディ提督に送った映像データの中に、あの井戸の奥にあった遺失物の映像も入っており、依頼主がその遺跡物が奪われていた場合の奪還を指示してきたのだ。

本音を言えば、最初の報告では俺達に聞かされていた情報は無人機が数機と言うことだった。コレだけ沢山の無人機が居ることなんて知らされていなかったのである。

襲われたのが一瞬であったし、依頼主側もこれ程まで沢山の無人機が居るとは思わなかったんだろう。

だがあえて言わせてほしい、知らないからって遺失物の保護まで頼むんじゃねぇ！！

そう、あろう事か遺跡物があった事が判明した途端、依頼主の考古

学者連中が絶対に保護しろと訴えてきたらしいのだ。

コレが果たされない場合、管理局を訴えてやるとか言い始める始末であったらしい。

しかもコレ俺らが戦闘している間に起こってたことだぜ？信じられる？

現状では難しいという報告を入れただけだってのに、やれ依頼主が言ってくることは遺跡を壊すな。遺跡物は守れの一点張りでフザんじゃねぇと怒鳴りたい気分だ。

そこまで言うなら自分でやりやがれって話である。

だが、管理局も古代遺跡の保護等も行っている組織である。

つまりどういう事かと言うと――

『――回転魔法陣展開。撃てます』

「グロウタスク、ファイア！」

――今だ遺跡付近で戦闘は続いているということである。

非常に厄介な事に奴さんら遺跡を背に陣形を取って攻撃してきている。

遺跡保護というのも依頼に含まれている為、こちらは迂闊な攻撃何ぞ出来やしない。

砲撃魔法は強力だが、あれはある意味戦術級魔法だからな。

撃ったら最後、連中を倒せるかもしれないが・・・。

それ以上に周辺の遺跡がヤバい事になる。

『敵機撃破（エネミースプラッシュ）！残り２３機！』

「やっぱり多重弾殻弾は効果があるのか・・・」

だが、新しい発見もあった。多重弾殻弾だとあの忌々しい魔法が解除される謎の現象の影響を受けにくいことが判明したのである。

だが、コレはさらなる負担を俺に強いる事になってしまった。

この多重弾殻射撃、本来はＡＡランク魔導師のスキルで「射撃型の最初の奥義」といえる技術であるらしい。

だがその反面、弾頭となる魔力弾を別の膜上バリアで包み込むとい

う工程を踏む。

その為、非常に制御が難しい上、魔力を通常よりも消費してしまうのだ。

おまけに止めとばかりに使いどころが無い為、奥義でありながら汎用性に欠けるのである。

つまり、どういう事かと言うと、今のメンツの中で多重弾殻弾が撃てるのって俺だけなんだよね。

勿論、俺がコイツを使っていたのは、ある意味でＨＥＩＡＰ弾と同じ様な効果があったからだ。

ＨＥＩＡＰ弾と言うのは徹甲弾と擲弾と焼夷弾を混ぜた複合弾だと考えてくれれば良い。

堅いシールドでも、こういうヤツを使うと普通よりかは貫きやすかった。

おまけに貫いた後爆発させることも出来た為、威力はあったから使っていた。

勿論、貫通性が向上と言っても微々たるもんだったが、その微々たる差が生死を分けるんだから洒落にならん。

まぁ最近は使う機会も無かったから、ついさっきまで通常の魔力弾頭はシュートバレットだったけど。

――閑話休題。

「増援はいないのか。武装局員とか・・・」

「ムリだ。武装局員は本来本局からの出向だ。今は他のフネの所にいるだろう」

攻撃が続く最中、淡い期待を込めてクロノに進言してみた。

だが、現実は厳しいというか理不尽であるのが通常だ。

武装局員という魔導師達は常駐する魔導師達では無い。

だから遺跡調査が名目だった今回は武装局員は借りられなかったのだ。

コレだから人手不足ってやーね。

「どっちにしろ撤退は許可できない」

「だろうなぁ・・・報酬上乗せだ」

「無料奉仕だろ君は？」

「・・・・帰りたいぜ」

牽制にすらならないジリーノからライフル型のグロウタスクに切り替えて敵を迎撃する俺は、クロノからの無情な宣告にそう漏らしつつ、せっせと多重弾殻弾で敵を打ち続けた。

あれ多分量産機だろうから、ココで破壊しても幾らでも出ると思うんだがなぁ。

この場は放棄し、違う世界に居るであろう元締めを探し出して叩いた方が賢明だとおもうが、クロノくんもまだ子供なのねぇ。

あ～あ、しかし俺明日になれば無料奉仕終わる予定だったのにやっぱり厄日かよ。

汚い！さすが無人機汚いよ！ストレスで俺を過労死させるなんて汚ぇぞコラァ！

・・・と少し憤慨してみたが、どうするかねぇ？

――――んで、そんなこんなで戦闘開始から2時間経過。

≪ビシュンッ！！≫

「あっつぅ～！！？？」

「アルフ！大丈夫！？」

「だからカバー命だって言ったろ！頭下げとけアルフ」

「キャイン！もう少し優しくしとくれよ」

「穴開きチーズになりたかったならそれでもいいぞ？」

俺が張っているシールドから少しはみ出ていた耳を狙われたアルフが奇声を上げた。

どうやら毛が少し焦げただけらしいな。良かったなピアス穴が出来無くて。

とりあえずまたシールド範囲からはみ出ていたので、こっちに引き寄せておいたぜ。

忙しくてキセル吸う暇もありゃしない・・・。

「もうそろそろ、深部にいるドローンも来てもおかしくは無いんだが・・・」

「まだ出てくる気配が無いね。フェンが言っていた通りなら、遺跡物を持ちだそうとしている敵が居るんでしょう？」

俺のひとりごとにフェイト嬢がそう返してくれた。

彼女の言う通り、遺跡内にまだ居る筈だと思われる。

だって、あの遺跡物を持っている無人機の姿がないのだ。

あれだけ固執してた事だし、諦めるって可能性は低いだろうしな。

「ああ、少なくてもまだ出て来てはいない」

「・・・ゴメンね。フェンにばっかり負担かけちゃって」

「何だ唐突に・・・別にいい。慣れてるし」

フェイト嬢がすまなそうにそう言ってくれるだけでいいさね。

大体やってることって、マルチタスクでシールド張りつつ、グロウタスクで撃つダケだ。

どちらかと言えば、魔力水増ししたサンダースマッシャーでゴリ押しで一機落したフェイト嬢の方が凄いと思うぜ。

しかしまぁ、敵さんやっぱりＡＩの方も結構悪いみたいだな。

普通ならあれだけ数が居るんだから囮でも立てて逃げるのが上策なんだが、どういうわけなのか敵は俺達を排除するという感じで撃ちまくってくる。

目撃者や邪魔者は徹底的に破壊しろというプログラムなのかもしれない。

今の所、あの地下でみた遺跡物の持ちだしには成功していないみたいだしな。

頭いいんだか悪いんだか・・・誰が造ったんだアレ？

「まったく、赤い触手付きで悪趣味な事で・・・」

「同感だ」

「私もそう思う。なんか近寄りたく無いんだよね」

「うねうねしてて気色悪いしねぇ。なんだかタコを思い出すよ」

とりあえず現在４人で固まって、遺跡近くの倒れた柱を壁にシールド魔法を展開して敵の凝集光による熱線攻撃を防いでいる。

空を飛びまわり飛んで避けた方がまだ幾分いいのかもしれないが、あの量のレーザーを長時間避け続けることは出来ないからな。

威力はそこそこの癖して連射性が高く、おまけに火線を収束させてきやがる

それこそ一点集中されたらＢＡの防御力でも危険域に入ってしまうほどである。

それに、問題はそれだけでは無い。

（う～ん、なんか引っ掛かってるんだが・・・）

そう、何かを俺は忘れている様な気がする。ソレも結構重要なこと。

先程から観察していて、咽の奥に魚の小骨が引っ掛かったような違和感を感じていた。

アレだ、目の前のスクラム組んじゃってるドローン共を見たらこうピキーンてな。

すごく脳裏に浮かびそうで浮かばないようで、引っ掛かり感がスゲ

ェの。

ホント何かが後少しで脳内に浮かびそうなんだが、結局よくわからん。

（う～ん、敵のアレは魔法が無力化・・・いやさ、途中で結合が外される。魔力結合の解除？・・・うにゅ？）

とりあえず試しに多重弾殻では無い通常の魔力弾を撃ち返すしてみる。

そして予想通り、ただの魔力弾は簡単に霧散してしまう。

ありゃ魔法が妨害されているとか、防がれているとかのレベルじゃねぇ。

撃った魔法が“分解”されてしまうと言った方が正しいか？

魔力を結合し、術式で方向性を持たせ制御する。

その根本たる結合が乱され霧散せられる何かって所だ。

後少し、後何かきっかけがあれば思い出せそうなその時だった。

【主殿、解析終わったですぅ。どうやらドローンさん達は魔力結合を妨害するフィールド場を形成して、こちらの魔法攻撃を封じている様ですぅ】

「――――・・・・・・・・・・あっ！そうだ！ＡＭＦ」

コレが漫画なら、ヘルメット越しに俺の頭の上にピカーとした電球が浮かんでいた事だろう。

そう、リンの報告を聞き、経った今思いだしたのである。

この魔法が効かない不思議現象の正体ってヤツのな。

それはＡＭＦ、アンチマギリンクフィールドと呼ばれる上位防御魔法である。

そしてそれを搭載しているということは――――

（つーことは、あれはガジェットか？あれ？ドローンだったっけ？）

――原作でガジェットだかドローンとか呼ばれた無人兵器だ。

いや～、今の今まで全く持って忘れてたわ。道理で通常の魔法が効

きにくい筈だ。

あれはアンチマギリンクの名が示す通り、魔法の魔力結合を解除してしまう特殊なフィールドを発生させられる上位防御魔法だ。

ちなみにＡＭＦは防御魔法に分類されるが、習得している人間は少ない。

何故なら敵味方関係無く魔法が使用できなくなるという欠点が存在するからだ。

自分で張ったフィールドの所為で、自分も魔法が使えないとか非常にシュールだしな。

そりゃ使う人間も少ない事だろう。肉体言語が使えるなら別だけどな。

そのお陰で魔法を研究している人間でも無い限り、あまり知られてはいないマイナー魔法でもある。

しかしＡＭＦ、そう、アンチマギリンクフィールド！

今の今までソレの可能性を失念してたぜ・・・ボケたかな？

とにかく、正体さえ解ればこっちのモンだ。

「三人とも、ちょっと協力して欲しいんだけど――」

とりあえず、少し時間が掛るから、まずは他の三人の協力を得なければ。

待ってろ、今すぐ倒してやるからな。覚悟しとけ。

「記憶は霞んでいくもんだぜ」（後書き）

ようやく主人公思いだしました。ですが記憶の劣化は激しい模様。

そして本格的戦闘は、多分次回ですハイ。

ソレでは失礼。

「そう言うのってありッスか？」

「そう言うのってありッスか？」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

さて、連中を倒す為に行動を開始した俺達。やることは至って簡単。
連中が分散しない様に、一カ所にとどめておくということだ。
各個撃破も捨てがたいが、流石にコレ以上は俺以外の人間の魔力が限界に近いからである。

「ディバイドエナジー」

「――助かった。ありがとうフェン」

「なに、足りなかったら何時でも言ってくれ」

「次はフェイトにも頼むよ。結構消耗しているからね」

「任された」

まぁソレも天然の魔力タンクみたいな俺がいると、ソレ程じゃない。
普段から溢れ気味な魔力を他者に分け与える魔法を習得している俺がいるからだ。
でも長時間の戦闘による疲労は蓄積する一方な為、一気に片をつけたいのも事実である。
そんな訳で、全員分の魔力を補充した後、俺達は行動を開始する。

概略としてはこうだ。まず、オールラウンダーなクロノが前に出る。
連中のＡＩを見ると、一番近い標的に火力を集中させるプログラムがあるようだ。
ソレを利用して、彼には囮となってもらう。

また此方から攻撃を行うと、後退する特性がある事も判明している。
なので、約一名が連中を挟んだクロノとは反対側に回りこませて攻撃させる。

そしてこの面子の中で一番の俊足と言えば、未来の黄色い死神さんが適任であろう。
直線的なスピードなら俺も負けてはいないが、フェイト嬢の機動性は俺よりはるかに上。

ある意味撃墜の危険がある為、追い回す役は回避力が高い人材が望ましいのである。
それに俺も俺でやることがあるしな。

「こちらレッドクリフ、こっちは準備完了。皆はどうだ?」

『こちらクロノ、準備が完了した』

『私とアルフも言われたポイントに到着したよ』

『こちらアースラ了解、作戦フェイズ1、スタートしてください』

アースラにも既に作戦の概要は説明してある。
管制官をしているエイミィさんが戦域管制の代わりをしてくれるそうだ。
そんな訳で連中との戦いに備えて、作戦フェイズ1を執り行うとしよう。

「さて、上手くいくと良いんだが・・・」

俺は号令が来たと同時にマルチタスクを複数並列起動する。
今回使うのは通常のミッド式魔法に非ず、異世界の魔法ハルケ式である。

まずは土系統の魔法で、今いるこの場の足元から地下に向けて小さな亀裂を発生させる。
次に地下水があることは判明しているので、マルチタスクで水魔法を発動させると、地下水を地上にくみ上げた。

「クッ・・・重い」

そしてそれを風系統の魔法で周辺の暖かい空気と混ぜ合わせる。
ポイントとしては暖かく湿った空気と言ったところだ。

こうして発生させた非常にジメっとした空気を、並列起動させておいた風の魔法で周辺に運ぶ。
暖かく湿った空気は俺を中心として瞬く間に半径数十キロに広まっていった。魔法パネェ。

「チッ、次」

しかし、俺はリンからのサポートがあるとはいえ、これ程沢山のマルチタスク同時処理は今まで経験した事のない領域だ。
なのでマルチタスク展開中の間はこの場を動くことは出来ない。
今集中力が途切れたら最悪魔法が暴走する可能性があるからである。
思わず舌打ちをしてしまうのも致し方ない事だろう。

何せ一度暴走してしまえば、この作戦は失敗してしまうからである。
おまけに周辺の環境及び遺跡に多大なる損害が発生する事は確実であり、そうなったら俺は書類に殺される事確実である。なので失敗は許されない。

とりあえずは、魔法が上手く作動しているかを確認する。
幸い動けないとはいえ、常時アースラからの観測データが送られてくるため、
湿った空気が十分この近辺を覆い尽くして広まった事は知ることが出来た。
辺りに湿った空気が広まった事を確認した俺は、その状態を維持した状態で更に風の魔法を使用する。
相変わらず負担が凄いが、ガルヴァドスを３０基設置するよりかはましだ。

そして次にやることは超簡単。
上空約４０ｋｍにある対流圏界面から凄まじく冷たい空気を地上へと降ろすのだ。

とはいえハルケ式の方は専門家では無いので、制御がどうしても甘くなり、
－７０℃近かった冷たい空気は周辺の大気と混ざって若干温度が上昇してしまう。

だがそれで十分。
むしろ制御が甘いお陰でここいら一帯数キロ以上にわたり、
マイナス数十度程度の冷たい空気が一気に広まるのだ。

そしてココからは簡単な理科や科学のお勉強である。
暖かく湿った空気に冷たい空気を当てると一体どうなるでしょうか？

『蒸気霧の発生を確認。かなりの濃霧が発生しました。フェイズ１成功です』

答えは、そう。霧が発生するのである。
しかも雲海に入ったかのようなとても濃い、目の前が視認できなくなるクラスの濃霧が。
凄まじく濃い霧は周辺数十ｋｍを覆い尽くし、目視では危険な程の濃さになっていく。
俺が風の流れを操作し、そこら辺を調整しているからである。

ちなみに俺らは魔導師なため、通常の人間を遥かに超える知覚能力がある上、アースラやデバイスからのサポートもあって、この程度のタダの霧が展開している程度では行動に支障は無い。
ドローン達はそれなりに熱量を発している為、サーモを使えば全体的にどういう風に移動しているかくらい知ることは出来た。
とにかくフェイズ1が成功した為、俺はアースラへと連絡を入れた。

「・・・・アースラへ、フェイズ1は成功した。引き続きフェイズ2へと移行してくれ」

『こちらアースラ了解。作戦フェイズを2に移行します』

作戦フェイズ2、先に述べたクロノとフェイトの連携によるいぶり出し作戦だ。
コレで少しは遺跡から離れた位置へと移動させる事が出来る。
そしてフェイス2が始まると同時に、クロノやフェイトがいる位置に向けていくつもの凝集光が発射され濃霧の中で光を発するのが見て取れた。

だが、ソレら光線はクロノ達に届きはしない。正確には届いてはいるのであるが、光線という性質上、濃霧の中では威力が極端に低下してしまうのである。そしてこの濃霧の吸光率はほぼ１００％であり、余程近寄られない限りクロノ達に到達しないのだ。
よしんば届いたとしてもＢＪで防げる程度にまでレーザーが減衰してしまうのである。

つまりフェイズ1の行動は敵の厄介な兵装であるレーザーを防ぐ為

の広域バリアを発生させる為のモノであった。ドローンはこの環境の変化に対応できないので、知らないで光線を撃ちまくり無駄にエネルギーを消費していくという訳である。

広範囲に広げた上、実質自然界で発生する霧と全く変わらないので害にはならない。
多少視界が遮られる程度なため、魔導師と言う性質上問題はない。
おまけに先程に比べたらずっと安全に行動出来る。今回においてはメリットは大きい。

「・・・・・むぅ」

【主殿、大丈夫ですか?】

「いや、ちょっとクラってきたダケだから大丈夫だ」

とはいえ、マルチタスクの複数展開と魔法同時制御の負担はバカにできないモノがある。
俺はその負担の所為で少しだけめまいを起していた。
何せフェイズ1で使ったハルケ式魔法はいわば全部ドットクラスなのである。
むこうの人間なら、魔法を混ぜ合わせて一つの効果を持つ魔法として使える。

だが、元々ハルケギニア人ではない上、ミッド式にエミュレートした所為か、どうにも混ぜ合わせるのが難しくなってしまった。お陰で今回みたく広範囲に渡り複数並列使用する際は、簡単なドットクラスでしか起動できなかったのだ。

ドットにとどめておいたのに、凄まじい魔力消費と制御の難しさ所為でコレである。
幾らヴィズやリンのサポートがあるからとはいえ、毛色が違う魔法の行使は負担が凄いのだ。

俺がミッド系統の天候操作魔法でも使えれば良かったんだが、生憎そこら辺は覚えてはいない。
フェイトが一応天候操作系で雷を落とすヤツを覚えてはいるのだが、凄まじい集中力と長時間の詠唱が必要らしく、疲労で集中力が落ち始めている今は使うことが出来なかったのだ。

まぁ俺が使った方も結構時間が掛るが、それでも早い方なのである。
何せコレだけ同時に使用しておいて、敵にほぼ気が付かれることなく、モノの数分でやって見せたのだ。
マルチタスク様々である。

まぁ霧を作り出すだけで攻撃力も皆無だから、今回以外で使う気は起きないけどな。
凄まじく疲れるし、何より頭が疲れるぜ。

＊＊＊

「いけ！スティンガーレイ！！」

遠くでクロノがＳ２Ｕを構え、魔法をいくつか発射して引きつけている。

撃っては下がりを繰り返す為、徐々にではあるがドローンはクロノの居る方へと動いていた。

「フォトンランサー！」

逆に反対側ではクロノよりも離れた位置からフェイトが連続攻撃をする為、後退する速度が上がっていた。クロノの方が近い上、攻撃も散発的ではあるがしてくる。

連中のプログラムは近い方の敵性反応を倒すことを優先している為、そう言う風に動く。
所詮は無人機械、人間の様に様々事象に対応できないというセオリー的な弱点だ。

そしてフェイトの相棒たるアルフは犬形態に移行し、空中を走りまわっていた。
・・・犬が空を飛ぶ光景ってのは、何でこうもシュールなんだろうか。
まるで牧羊犬をイメージしてしまった俺は悪くは無――ゴメンアルフ睨まないで。

ソレは兎も角として、アルフはアルフで無人機達がコースから外れないように動き回っていた。
ともあれ、無人機達を遺跡群から引き離すことには成功した。

『こちらアースラ、フェイズ2は予定通り進行中。レッドクリフは

フェイズ3の準備を開始してください』

「レッドクリフ了解」

さて、そろそろ状況は第3段階へと移行する。
この第3段階こそ、今行ってきたことの決め手となる行動と言う事になる。
ソレ即ち、今から無人機共を一掃しようということなのだ。

「――“神の怒りを買い、深き底に沈むは煉獄と現世をさまよう霊魂”」

そして、俺は詠唱を開始する。
一応ヴィズやリンのサポートがあれば、詠唱無しで術式を発動できる。

「――“彼らは警告する。自らと同じ運命を辿らぬようにと行く手に現れる”」

だが、今回は周辺に発生させた霧の維持をリンに頼んでいるのだ。
だから、こう言った制御が難しい魔法は自前で頑張らなくてはならない。

「――“警告に従わない者には、自らが災厄とならんと立ちふさが

る”」

非常に繊細な術式を構築し、決められし詠唱を行う。
ある意味儀式魔法であるが、実際は召喚魔法である。

そして計算していた通り、無人機達が指定されたポイントへと到達した。
その報告が入り、作戦はフェイズ3に完全に移行する！

「――“生と死の狭間より出でよ・・・”」

最後の詠唱の節、発動の為のキーワードを言う直前に、一瞬だけ違和感を感じた。
だが、既に魔法の発動は止められないし、一瞬だけだった為にタダのノイズだと考えた俺は、そのまま詠唱を続けていた。

この時、俺は解らなかったのだが、後でアースラが録画していたサーチャーの映像ログに、何処からともなく現れた白い靄が俺の身体にまとわりつくという異常現象が発生していたらしい。

だが、そんなことをつゆほども知らぬ俺は、魔法を完成させていた。

「――“召喚魔法、フライング・ダッチマン！！”」

無機物召喚最大級、ある意味で無機物召喚の奥義に近い魔法。
召喚魔法フライング・ダッチマンが起動し、俺の足元に巨大な魔法陣が展開される。
そしてそれと同時に凄まじい量の魔力が吸いだされるのを感じ、俺はカートリッジを５つロードした。

だがそれでも足りないらしく、下手したら動けなくなる量の魔力を吸いだされそうになる。
久々に発動させた所為なのか加減が解らず、魔力制御が少しばかりおかしい。
ともあれ無人機達が犇くポイント上空に、音も無く何処か揺らいでいるかの様な複数の巨大な魔法陣が出現した。

・・・・・・・・・・・・え？複数？

「え？な・・・は？」

だが次の瞬間、俺の視界に入った信じられない光景に、思わず唖然とした。
そりゃ確かに、何処かの沈没船を召喚する魔法であるから魔法陣はデカイ。
大体１０ｍはあろうかと言う召喚魔法陣が、召喚先の空間に現れるのである。

だが過去に幾度となく母上が使った際、出現した召喚魔法陣は一つだけだった。
俺自身一度使った際も、召喚魔法陣が現れた数は一つだけだった。

それがどうした事か、いまポイントの上空には大小合わせて１０以上の魔法陣が浮かんでいる。
それも小さいモノは５～６ｍはあり、大きなモノでは最大５０ｍを超えていた。
いやいやまてまて、俺は一体なにを召喚しようとしてんだ？

「（あ、あれがフェンの持つ奥義なんだ）」

「（す、凄いね。何と言うか圧巻って感じだよ）」

「（フェンに関してはもう驚かないつもりだった。流石にコレ以上は無いと思っていた。だけど、フェンはやはり予想を軽く覆してくれるな）」

と、色々と聞えるのは茫然と宙に浮かぶ俺に飛んで来ていた念話での皆さんの言だ。
驚いてくれているのは解るが、俺の方が訳が解らない。
制御も詠唱も記憶の中にある部分では完璧だった。

そして現れる筈の魔法陣は本来一つしか出て来ない筈であった。
しかし現実問題として複数の魔法陣が展開している。

その時の俺の顔は、多分こんな感じ・・・・・（　。д。）

そしてその眼はきっとこう語っていた。

「・・・・（どうしてこうなった？）」

人生は往々にして上手くは行かず、全ては理不尽と繋がっている。
でも、正直な感想として・・・全く持ってその通りだと思う。
何せ目の前では古今東西古代近代大小様々な沈没船が、群を為して召喚魔法陣から出現している最中なのだから。

「・・・・（どうしてこうなった？）」

大事なことなので二度言った。他意は無い。
恐らく原因は、最後の詠唱を終える際に感じたノイズ。
何かが俺に干渉してきた所為だと考えられる。

それに召喚したフネはどれもこれも、なんか変にオドロオドロしかった。
そう、以前のが沈没船であるなら、コレではまるで――

「（うわぁ、でっかい船・・・幽霊船みたい）」

フェイト嬢、正解。

「（他のフネには棒が突っ立ってんのに、あれには無いねぇ）」

「（うん、それにすっごく大きい）」

フェイト達の念話が俺の方に流れてくる。あとアルフ、棒じゃなくてマストだよ。

ちなみに話題に出ていたのは、沈没船軍団の中で最大の大きさを誇っていたフネの事だ。

そして俺はそのフネを見て更に開いた口がふさがらなくなっていた。

それは、そのフネは俺が特殊機甲魔導師強襲連隊ストライクワイヴァーンズに所属していた際に乗っていたエクリプス級空母だったのである。あの空母は此方で言う所のニミッツ級空母に匹敵する大きさがある為、帆船が多い沈没船軍団の中でも異彩を放っていた。

まぁ世界規模の次元震に巻き込まれて消滅したとはいっても、全てが粒子に消えるという訳では無い。

それこそ時たま世界の“残がい”が、他の世界に流れ着く事もある。フネの残がいが何処か違う世界に流されていても不思議では無いと思う。

でも、幾らなんでも俺と関わりのある世界で沈んだ筈のフネが呼ばれるとか・・・勘弁してくれ。

「（本当にすごい魔法だな。まさかこれほどとは・・・どうしたフェン？）」

「（・・・いやクロノ、何でも無い。ちょっと予想外だっただけだ）」

「（予想外？こんなに召喚されるとは思わなかったとか？）」

「（いや、ソレもあるんだが・・・まぁいい）」

「（？？？？）」

クロノくん、君は良い友人であるが、多分俺の言いたいことは解らんよ。

何せ沈没船の筈のエクリプスの甲板上に、見覚えのある人々が見えた気がした為、俺は今全力でスルーしている最中だったからだ。

悪い夢なら覚めて欲しい、いや幽霊が見えることは自覚していますがね。

つーか見えている連中にメッチャ見覚えがあった。母上の元部下たちや俺の元上官たちだ。

流石に異世界で死んだ両親や、俺が手を下したジェニスや、何処で死んだのか不明なワイズ教官やソフィア教官やフネに乗る前に死んだ連中はいなかった。

だが、エクリプスに乗っていた時に、俺と関わりのあった人間が結構いるのは見えた。

とはいえ、何故かこっちに手まで振ってきたのを見た時には流石に辟易した。

俺は召喚魔法で冥界の扉まで開いてしまったのかもしれない。

死にかけた出来事が多すぎて、霊界へのチャンネルが開きやすくなったとか？

余りにオカルト的過ぎて、俺は頭を抱えたい衝動をこらえるのに必

死であった。

尚、そいつらの姿はヴィズやクロノ達には見えていないようであった。
見えているのは俺と、俺と一心同体のリンだけである。

まぁ、見えていたとしてもやはり唖然とすることは確実であろう。
現に既に召喚された沈没船の数や大きさに圧倒されていたのだから。

何やら周りの味方から凄い凄いと褒められるが、俺としては非常に複雑だ。
何でこんな風に召喚されたのか不明なのだから、余計に気味が悪いというか不気味である。
コレはやはり呪われているか、取り憑かれている気がしてならないので寒気が酷かった。

ある意味恐怖で震える俺とは対照的に、力強く空を飛んでいく５０に届きそうな沈没船達。
いやまぁボロボロのマストやら、謎の燐光付きで非常に不気味なんですがね。

召喚された中で最大のフネと、今回の無人機達を比べるとまさに象対アリの勝負である。
当然、無人機達に沈没船弾（誤字に非ず）を防ぐ手段なんて無い。

【？＊＋＊＊＝～、＊＞＜＜＋～＝！！！】

≪ビシューーーーー！！！≫

≪ガションッ――ドシュシュシュシュッ！！！≫

何やら大慌てな感じ・・・・。
イヤまぁ相手機械だし正確には解らんけど、センサーをチカチカ点滅させる無人機達。
そんな中、沈没船に向けて放たれる大量の凝集光。

だがやはり途中で霧散するかのように減衰して消えてしまう。
今だ辺り一面は霧に包まれているのだから、当然の結果と言えよう。
ミサイルも沈没船に命中はしているが、あまりダメージは無さそうだ。

まぁレーザーはこの霧の中無効化されるし、ミサイルも小型の対人仕様なのだろう。
つーか、元々沈没船であるから、幾らミサイルを撃たれようとも何ともない。
コレ以上沈むことは無いからだ。沈没船なだけに。

≪――――ズドドドドドドドドーーーーーーン！！！！！！！！！≫

召喚された沈没船弾は予定通りその巨体を余すことなく用いる戦法。
様は体当たりを咬まして無人機達をひき逃げし、一カ所に溜まっていた無人機達を押しつぶした。
沈没船達は、そのままある程度進むと、別の召喚魔法陣が前方の空間に現れ、再びどこぞの空間へと戻っていった。
そして沈没船弾が通過した後には、無人機軍団の残がいの身が残さ

れるのみとなっていた。

だ、出すのは大変だったのに、やった事はひき逃げって・・・・。
いや、まぁ攻撃というのはシンプルな方が強力ではあるが・・・・。
旧日本海軍の艦船らしきモノも見えたし、まさかのカミカゼアタックですか？

【凄い光景ですけど、やっぱり轢き逃げにしか見えないですぅ】

『以前のと大分違いますね、術式は同じ筈なのに・・・そこんとこどう思いますマスター？』

「・・・・全くわからん。しいて言うなら身体が重い」

イヤイヤ混乱するな俺、この召喚魔法は最初からひき逃げ攻撃だ。
でも、やっぱりなんか納得がいかないって感じがするぜ。
兎に角、今回の件で無機物召喚魔法フライングダッチマンは、幽霊船召喚魔法フライングダッチマンへと進化した。

・・・これで良かったんだろうか？でも突っ込んだら負けな気がするのは何故だ！？
そう内心思うモノの、誰も応えてくれる訳も無く、寒い風が一人吹いただけだった。

「終わった、か？」

「いや、まだ遺跡内に数体残っている筈さ。次はそいつらの捕縛及

び破壊だ」

「早く終わらせよう」

「フェイトの言う通り、早く終わらせて帰ろう」

「「同感」」

そして遺跡入口で待ち伏せて、のこのこ遺跡物をコードに絡ませて運んでいた最後の一体である無人機を捕まえたことで、仕事は終了したのであった。

いや、今まで散々バカだアホだとなじってきましたが、無人機よソレで良いのか？

まさか遺跡物持っている所為で攻撃出来無くて、偶々攻撃したところが外装式ＡＭＦがあった場所で、こっちの魔法が効くようになったからクロノのバインドで捕まって。

どうでもいいが、敵の癖に哀れに見えたのは俺だけでは無かったとおもう。

だって、フェイトとアルフも微妙な顔してたもん。

こうしてなんとか事件を終わらせた俺らは、もうなんか疲れたという感じでダラダラとアースラに帰還した。

ああ、ようやく家に帰れる！コレでアースラでの無料奉仕最後の事件だべ！Ｆｏｏｏｏｏ！！！

変なテンションで帰還した所為か医務室行った方がいいのではとリンディさんに言われたのは余談である。

勿論断ったけど、なんか釈然としないのであった。

「――わたしは帰って・・・え?二度ネタ?ゴメンなさい」

「――わたしは帰って・・・え?二度ネタ?ゴメンなさい」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

『いくなフェン!行かないでくれ!!』×アースラスタッフ達

「・・・俺のココでの役割はおわったのさ。あとは君たちが頑張る番だ」

『そ・・んな、フェン・・・考え直してくれないか?』

「言っただろう?俺の役割は終わったって・・・今までも俺がいなくても平気だったんだ。これからもやっていけるさ」

『ムリだ。お前が消えたら俺達は――』

「みんな・・・」

『だれが雑用をやってくれるんだ!』

『偶に夜食を作ってくれるの!』

『美味しいコーヒーを入れてくれるんだ！』

『疲れた時に一声お疲れ様ですって言ってくれるんですか！』

『はにかみながらも肩もみをやってくれるんだ！』

『ショタ成分を補充させてくれるんですか！』

「・・・・帰る。そして最後の奴は死ね」

『フェン！早まるな！フェーーーーン！！！！』

アースラのクルー達が涙ながらに（雑用が居なくなる的な意味で）俺を引きとめる中、
俺は転送ポートに飛び乗り、色々と世話になったアースラを後にした。

つーか見送りに来ていたリンディさんが、肩を震わせて笑いを堪えていたのには殺意が芽生えた。
いっその事隣にいたエイミィさん張りに爆笑していてくれている方が良かったのに。
アースラでの味方はクロノとフェイト達しかいなかったんだ！わ～ん。

＊＊＊

さて、苦節した時間が8話分を経過した所でようやく戻ってまいりました。
そう、海鳴にです。この平和な世界が懐かしくもくすぐったくも感じられます。
え？メタな発言？・・・俺のログにはなにも残ってないな。

しかしまぁ、久々に人間の居る街に来たって感じがする。
ここ数カ月の俺の生活圏はアースラという大型艦の中であった。
そりゃ大きなフネであったが、街と言うにはほど遠い。何気に最低限の人員で動かせるように調整されているから、無人の場所も多いしな。夜時間になった時ほど無人のフネは怖いモンだぜ。

「――――ただいま」

そして懐かしき我が家、八神家に到着した。
この家に帰ってくるのも久々だが、全く変わっていない。
既に庭に居たヌコ姉妹はグロッキーになるまで愛でたし、その他も堪能したからホクホクだ。
しかし、若干動物が増えている様な気がしないでもないのだが・・・まぁ気にする必要はないだろう。

「あ、お帰りなさいフェンくん」

玄関に入るとリニスがすでに待ち構えていた。
昼間は家に居る人間は彼女くらいだし、俺は気殺をしていないからすぐに判ったんだろう。

俺は軽く手を上げて、彼女に応えた。

「ただいまリニス。こうして直接会うのも久しぶり」

「そうね・・・ちょっとこっちによってくれる」

「ん？なに？」

なにやら手招きされている。
はて？なんじゃろうかとおもい彼女の元に近づいた。

すると――――

≪ふわっ≫

「おかえりなさい」

「・・・・ん、ありがと」

な、何でだか知らねぇが抱きしめられたぜ。
あー、でもなんて言うか懐かしい感じがする。
・・・昔、母上に抱きしめてもらったあの感じと似てるなぁ。

「まったくもう、心配ばっかり掛けて・・・」

リニスは苦笑するかのように笑いながら、俺の頭を撫でていた。
お母さんか・・・あれ？なにこの母親が子供に対してする様な行動？
いや、まぁ心地いいですが・・・ちょいとハズいんですが。

「あまりに長いこと離れていた所為で、母性本能が凄い事になってます」

「いや！それ自分で言う事じゃないぞ！？つーか母性本能なのかソレ！？」

「そうですね。だけどしばらくは抱っこくらいさせてくださいというかします」

「・・・はぁ、好きにしていいよ」

俺は諦めた感じでそう応えて、抱きしめられたままリビングに連れてかれた。
まぁ普段通信はしていたけど、大分離れてたからなぁ。
彼女も意外と寂しがり屋だし、このくらいは別にいいかぁ。

それにコイツはきっと親愛表現のハグなんだろう。
俺は元々中身日本人なので、少しばかり恥ずかしいが・・・。
まぁ心が暖かく感じられるので問題無い。無いったら無い。

……

……

……

さて、家に帰って来てからしばらくして、他の皆もご帰宅だ。
学校から帰ってきたはやてと、臨時講師として剣道場でアルバイトしているシグ姉さんが一緒に帰宅。

んで、ソレに合わせて俺が造った地下基地にある訓練施設から騎士と管制人格が戻ってきた。
そして、以下が俺を見た時の全員の反応である――

「ぷくく・・・お帰りフェン君」

「くく、何とまぁ。――とにかくお帰り」

「ぶ、ぶふぅ・・お。おかえあっははは!!」

「・・・・・お帰りフェン・・・ぐふ」

「だ、だめ・・ソレ似合い過ぎよ・・・プっふふ」

「・・・・・・・・・・・・・・・笑いたければ笑え」

上から順にはやて、リインフォースアインス、ヴィータ姉、ザフィーラ、シャマル先生である。
ちなみにシグ姉さんは笑ってはいない。
もっとも顔はポーカーフェイスなのに肩が震えているのはいかなものか。

何故皆が笑いをこらえているのか？それは現在の俺の体勢に問題がある。
今、俺はリニスに抱っこされて座らされているのだ。
しかもお腹の方に手を回されて、落っこちない様にというか逃げられない様に保持されて。

・・・・・微笑ましすぎるんだってさ。

「リニス、あのね。恥ずかしいの」

「いやですよ～♪久しぶりなんですからこれくらい良いじゃないですか～♪」

「・・・・（どうやら俺は逃げられないらしい）」

ああ、微笑ましそうながらも実は笑っていて助けてくれない連中の事が恨めしい。
ちなみにヴィズは大爆笑してるけど、うるさいから音声を切ってある。
リンは妖精サイズで俺の膝の上に乗ってるから・・・あーソレで余計微笑ましいのね。

「いやー流石はフェン君や。初っ端から飛ばしてくれるわ」

「い、いや、コレは俺の意思じゃ――」

「んー、かわいい≪ぎゅ≫」

「あひん！ちょ、ちょっとリニスやめ、くすぐったい」

ちょっ！俺一応リニスさんのマスターなんだぜ？！
可愛いとか言って抱きしめるのはまだしも髪の毛をモフルのはやめ、
あばばばばｂ

「あー、なんやうらやましいわぁ。どれそれじゃ私も」

「ちょっ！おま！堪忍してくれ」

「えー、せっかくのスキンシップのチャンスやん」

「これはセクハラになる件」

「犯罪はバレなきゃ犯罪やないんやでー」

「うぐぅ、ああ、純粋だったはやてが黒くなってしまった」

「全ては移り変わりゆくモノなんや。一つとして同じモノはあらへん」

「・・・ふかいな」

「そやな」

「「あっははははは」」

そう言って笑いあう俺ら。あ～、このテンションが懐かしい。
ヴィータ姉がなんか小さく“おいおい問題は解決してねぇじゃねぇか”とか言ってるけど、俺は華麗にスルーだＺＥ☆

「でもギュッとしちゃうのがはやてクオリティ」

「あひんさー！？」

ごめんなさい、やっぱりもう堪忍して下さい。
これからはなるべく家にいますから、とりあえず離してくらはい。
幾ら見た目８歳児程度でも、やっぱりはずいです・・・愛が苦しいとはこの事か。

シャマル先生助け・・・ってウズウズするなよ見た目若奥様。
ザフィーラ、リイン、シグ姉さんは我関せずかよ・・・。
となると、消去法で――――

「ヴィ、ヴィータ姉、助けて」

「あー、んとな。まぁ頑張れ」

「・・・・あう」

HQ!完全に孤立した!増援も来ない!撤退――いや、包囲されて逃げられないか。
こうなれば一矢報いてでもこの場を離脱してくれる!!

「あ、あのねリニス」

「何ですかぁ♪」

うわ、スゲェほにゃって顔してら、やっぱり子供好きなのね。
リニスは俺を抱きしめたまま、尻尾をフリフリ耳をパタパタさせている。
兎に角俺はこの状況を打破する為に、リニスの方に体をよじり懇願する事にした。

彼女は基本的には良い人だし、俺の言うことにも従順である。
だから誠心誠意頼めば解放してくれるだろう。

例えその時、今までの仕打ちの所為で軽く涙目で、身体を抱きしめられている所為で上手く身体を向けられず、必然的にリニスに対し上目使いの状態で見つめて懇願している姿であったとしても!

≪どきゅぅ～～～～～ん♪≫

あれ？いまなにか誰かのハートを撃ち抜いた様な効果音が聞えた様な・・・。
つか随分と具体的な効果音だなオイ――

「あ、あのぅ、リニス？」

「お母さんって呼んでーー！！」

「ちょっとまて！落ちつけリニス！！」

HQ，作戦は失敗した。俺達はもうダメだ。俺の手紙を家族に――ってちがうって。
この後リニスがちょいと暴走したのだが、シグ姉さんが斜め４５度の角度からチョップしたらいきなり普通に治った。一体全体、さっきの暴走はマジで何だったんだろうか？

＊＊＊

――地下基地・訓練施設

「・・・・・ねぇ、何をどうすればココまでひどくなるのかな？」

ようやくリニスから解放された俺は、報告に上がっていた訓練施設の状況を見にやって来ていた。序でに、ココを使用していたという連中も連れてである。

尚、シランズ達とは事前に念話と通信で帰ってきた旨は伝えてあるので問題無い。

「「「「あ、いや・・・そのう」」」」

「何を言う、騎士たるもの日ごろの訓練を欠かさない。ともすれば、多少施設が傷付く事もありうる」

「・・・多少の訓練ならビクともしないよう設計して、それ用の対策も施しておいたのに？」

「ま、まぁボーゲンフォルムとかを使ったのはやり過ぎたとは思う」

あれれ？シグ姉さん、コッチをミテはなしてクダサイよ？目をさ？何で俺がアースラいっている間に、施設内が月面のごときクレーターで埋め尽くされるの？

まぁいい・・・さて、訓練施設は訓練用に強力な結界魔法を張り巡らせてある。

それに加えて、訓練施設の材質自体が固定化と硬化を使用した強化素材だ。

通常の魔法の使用程度ならびくともしない筈だが・・・。
シグ姉さんが漏らした一言でガテンがいった。

「・・・結界・バリア破壊効果がある魔法を全力で放つなんて」

俺は額に手を当ててやれやれと溜息を吐く。
イヤまさかたったの数カ月でココまで破壊されるとは予想外であった。
というか、シャマル先生までココで暴れてたなんて・・・。
貴女は皆のストッパーに成れる人でしょうに。

「ハァ・・・内壁用重金属装甲板が６０７枚、結界発生装置２９個、対魔力特殊複合支柱が５６本、訓練用対魔力ターゲットボード２５８１枚、
序でに照明が３００個以上も粉砕されて使用不能。
それを直す俺の負担、プライスレス」

「なんかすごい数値が出ているが、それ程までに酷いのか？」

リインフォースがそんなことを聞いてくる。
なので、俺は疲れたように訓練場の壁に手を向けて示した。

「あそこ、シュツルムファルケン当てて大穴をあけたでしょ？」

「ああ、そう言えば確かに・・・」

「序でにその横、ブラッディダガーによる弾痕」

「確かにアソコでブラッディダガーを撃ったな」

「おまけに何をどう間違えたか内側から鋼の軛に・・・」

「大手を振って魔法を振るえたから訓練に熱中していて、鋼の軛の発動起点を間違えたな」

「そして止めがラケーテンハンマー。見ただけでもコレだけの魔法を使った。違う？」

「あたしは天井にシュワルフフリーゲンも当てちゃった」

「私は壊してない筈だけど・・・風の御盾で皆の攻撃を跳ね返したりした所為かしら」

シラン達も大変だったんだろうなぁ。
基本的には八神家に逆らえないプロトコル入れちゃったし。
やや大きめの野球ドーム程度の広さじゃあんまり広くは無いが、接近戦を好むベルカ式だ。

この程度の広さでも彼らのレンジ内だったんだろう。
だからってココまで壊していいもんじゃない。

いや、材料のストックがあってコレだから、本当はもっとひどかったのかもな。
つーかヴィータ姉、悪びれもせずそんなことほざくんじゃねぇ。

「これはしばらく訓練施設の使用はムリだわな」

「何故だ?フェンならすぐさま治せるのではないのか?」

「・・・俺に対する認識がどうなのかは知らないですけどね。ココまで壊されたらそうそう直せないよ」

材料は壊された廃品を再利用できる。錬金魔法と言うチートのお陰だ。

錬金ストレージのヘルメスの中には、ココを作った際の材料データが保存されている。

ソレを使えば、廃品となった装甲壁もあっという間に新品に戻るって訳だ。

だがなぁ、集められない程に蒸発させたりとかされたら流石にムリだ。

何処かの誰かさん達が魔力付与攻撃で本気出したみたいだしな。

「ここまで壊されたとなると、廃品だけじゃ足りない。後で仕入れに行かないとなぁ。

ちなみに俺とシラン達だけで修復すれば、概算で1~2週間はかかるよ」

とりあえず廃棄世界にいって足りない分の素材集めだ。

基本的な金属は破片でなんとかなるが、吹き飛ばされた機械の中の

レアメタルはもう一回探して来ないといけない。
俺がそう言うと、シグ姉さんはあごに手を当てて考える仕草をした。

「数日で直せないか？」

「出来るけど。なんで？」

「まぁ色々とあるんだ」

なにやら理由があるらしいが、どうにも応えてはくれないらしい。
まぁ訓練施設が壊れっぱなしというのも、心情的にいやなモノがある。
修理するということには至って賛成なんだぜ。

「直すのであれば私たちも協力しよう。自分の不始末は自分の手でつけるのも騎士の務めだ」

シグ姉さんがそう言ったので、その他の面々の方を見てみると全員その気らしい。
ある意味人手は欲しかったので、彼女らの申し出は渡りに船だった。
リインフォースははやてのそばから離れない為、実質ヴォルケンズ達ダケだけどな。
とりあえず、彼女らに付いて来てと言って俺は基地の奥へと足を向けたのだった。

……

……

……

さて、ヴォルケンズを連れた俺は地下基地内シランズ格納庫へと来ていた。
この格納庫はシランズ達が普段メンテナンスを受けられるベッドが複数置かれている。

だが、そのベッドの数はたったの数床しか置かれてはいない。
ココで働くシラン達の数を考えると圧倒的に足りないのだが・・・。
ま、理由は後で判るからココでは言わねぇぜ。

さて既にシランズ達には要件を念話で知らせてある。
その為、俺が格納庫に入るとスイセンがドシドシと無骨な足音と共にこちらにやってくるのがみえた。

でも戦車なのに、その姿が愛らしく見えるのは変なんだろうかねぇ？
俺が造った訳だし製作者だから、作り上げたモノに愛着でも湧いたかもなぁ～。

【お帰りなさいませ少佐。準備は滞りなく完了しています】

【【【おかえりなさ～い♪】】】

スイセンの他3体が出迎えてくれる。
まぁ帰ってきたことは通信でしか知らせて無かったからな。

「ん、準備は完了してるか」

【はい。ケースはそちらに】

スイセンが指（つーかアーム？）で指した方向に、小さなトランクケースがあった。
俺はそれを手に取ると待機しているスイセン達に言い放った。

「今回は大掛かりだ。全機心して掛かれ、各機待機状態に移行！」

【【【了解！】】】

シランズ達は快活に応えると、全身が光に包まれる。
粒子の如く揺らいだかと思えば、そこにあったのは小さな宝石の様な石が浮かんでいた。
宙に浮かぶ4つの石、ソレを俺は掴みとると懐に、いやさ格納領域に収めた。

「さてと、いきますか」

「フェン、さっきのは？」

「ん？ああ・・・シランズ達はデバイス機能の一部を受け継いでいるのさ」

「なるほど、それがそうなのか」

「流石にデバイス代わりとはいかないんだけどね」

シランズ達は待機形態と呼ばれる特殊な形態に移行できる。
デバイスの待機状態に移行するシステムを模したシステムで、持ち運びが容易になる利便性が高いシステムだ。

簡単に言うと全長２ｍ、重さが２，２トン近くある巨体が懐に収まるサイズになっちまう。
質量保存？んなもん魔法という超常的現象の前で意味があるとでも思うのか？
まぁそう言った物理法則を捻じ曲げられるからこそ“魔法”っていうんだがな。

「ま、とりあえず、全員バリアジャケットでついて来てよ」

そんな訳で、シランズ達とヴォルケンズを連れて基地の奥へと歩いて行く。
そしてそのままシャマル先生に手伝って貰い、次元間転送を行った。

向かう先は以前もやってきたアソコ、廃棄世界である。
考えてみれば廃棄世界には、ヴィズ以外の誰かと行くというのはこれが初めてである。
だがちょいとばっかしハイキングには向かない世界ってのも複雑な気分だな。

ソレは兎も角、幾つかの世界を経由して廃棄世界へと降り立った。
今日の廃棄世界の天候は雲の出た晴れ、気温はー９７，８度で若干放射冷却で寒いが風は無し。
うむ、採取行動にはうってつけの日だろう。風が出てたら俺でも危険だしな。

「・・・さっぶ！」×俺除く全員。

「寒いですんでるなら大丈夫だ。まぁ一時間は持つよ」

ちなみに全員ＢＪ展開しているからこの程度で済んでいるが、Ａランク以下なら例えＢＪを展開していようが数十分でカロンの渡し守と茶を飲むことになるだろう。この世界は廃棄世界だけにトコトン生物の生存に適していないのだから。

ともあれ、俺は持ってきたケースのロックを外し、中から正八角型のクリスタルを何十個もばら撒いていく。ちょっと危ないので他の皆には下がっていてもらい、待機信号を解除すると正八角クリスタルが光を放ち、ソレらは全て量産型シランとなる。

そう、このケースの中身は全て量産型シランズが収納されていたのである。

ちなみに1ケース辺り最大で２００個入る上、待機状態でこのケースにしまえばソレだけでナノマシンメンテナンスが自動で行われるという優れモノ。

お値段はＵＳＮ$で９万ＵＳＮ$、お買い得でしょう？
日本円で換算するなら一台１８００万円ってところかな？
手作りだから単純に材料費で換算したらこんなもんだろう。

とはいえ材料も元手もタダで作ることも可能だから、あくまで目安の値段である。
値段をつけるならソレ位の価値はあるということだ。
ちなみに２００個入るとは言ったが、今の所量産シランをそこまで機体を製造できていないので、今回は４５個しか入っていない為、ある意味宝の持ち腐れであるが気にしてはいけない。

とりあえず量産型達に指示を出して整列させ、ノーマルシランズ達も待機状態から目覚めさせて、稼働状態へと移行した。彼ら量産型もノーマル達もアタッチメント機能でアーム部分に採掘用デモリッションガンが付いて居たりと採掘装備で完全武装している。

この量産型をノーマルシランズに各5機ずつ、ヴォルケンズにも各5機ずつ。
俺にも同じく5機ずつ付け、それぞれ分散して採掘を開始するのである。
その事を説明してデータを渡し、それぞれ分散して廃棄世界に散らばっていって貰った。

なんだかんだでヴォルケンズは全員が強い魔導師だ。
別に戦闘がある訳でもないし、誰が一番採掘出来るのか競争って感じかも知れねぇな。

「俺らも行くか」

『了解』

ちなみにこの採掘でヴォルケンズの中で一番大量に採掘してきたのは何とシャマル先生だった。
流石にフルバック担当だけあり、探知能力はケタ違いだったらしい。
渡したデータをもとに探知魔法で一斉に広域を探査、目的の物を探り当てたんだそうだ。

・・・シャマル先生はトレジャーハンターも向いてるんじゃねぇの？
そう言ったら何故か照れてたけど、褒めてないんだぜ。
だって、イメージ合わねぇんだモン。

＊＊＊

ともあれ、大量の材料をゲット出来たお陰で、訓練施設の修復はすぐに終わった。
ストックも作り終えたし、まぁコレでしばらく持つだろう。

ああ、これで平穏な日常を満喫できるぞー。偶には温泉にでも行きてぇなぁ。
・・・・そう思っていた時期が、ぼくにもありました。

何故シグ姉さんが訓練施設の修理を急がせたのか？

その理由がすぐに判明したからだ。

それは――――

「フェン君いくでー！！響け終焉の笛、ラグナロク！」

「うぉぉぉぉぉ！！！多重プロテクション最大展開！！！！！！！」

≪どどどどーーーーーーーーん！！！！！！≫

――――はやてが魔法を使い始めたからでした。俺にはサプライズだったんだと。

魔法の事をリニス&ｐ;リインに習い始めたのが、俺がアースラに乗った後らしい。

そしてここ数カ月でメキメキと才覚を表し、基礎は全て習得、現在は応用編だとか。

「リイン直伝のぉ！ブラッディダガー！！」

「ひーーーーー！！！」

≪ずがががががががん！！！！！！≫

・・・いや、幾らなんでも成長早すぎるだろう。
なんだよ今の攻撃は！訓練の威力じゃねぇよ！！

「ほれほれドンドンいくでーーー！！」

「ちょっと待て！連発して平気なのか！？」

「最近は定期的にやった方が身体が楽なんや！」

「ですよねー！高ランク魔導師でしたのよねこのヤロウ！！」

つーか何で俺だけ反撃無効なんだよ。せめてレールブラスターくらい許可して欲しい。
だが、ソレはにべなく却下された。何でも反撃すると魔導師の戦いじゃなくなるからしい。
そりゃねぇよ皆と言いたくなったが、考えてみればそりゃそうかと納得してしまった。

俺の戦い方は軍隊で習った非常に厄介な戦い方で容赦がないらしい。
まだ魔導師なりたてのひよっこちゃんの心根をへし折られては堪らんのだろう。

せっかく育ててきた雛がダメなひよ子になるか鳳雛となるかなのだ。
慎重にもなる。

――――だけど・・・・。

「つぎはデアボリックエミッションいってみよか！！」

「ちょ！それは！！」

「なんかテンションあがってきたわぁ！！」

「たのむからモチツケもとい落ちつけ！！ソレは不味いから！！幾ら俺でも訓練でそのクラス喰らったら――――」

――――耐えきれない。と、俺が言いきる前に。

「デアボリックエミッション」

「うわぁ、黒くて・・・大きい」

そして俺の意識は闇に落ちたのであった。
つか、何で俺が標的役だったのだろうかと、久々に会えたカロンさんに愚痴をこぼしたのであった。
・・・・あれ？ココに来てたって事は、もしかして死にかけた？

・・・

「――わたしは帰って・・・え?二度ネタ?ゴメンなさい」（後書き）

過激なスキンシップも愛情表現の一つらしいぜ。
だけど普通はしちゃいけない。お兄さんとの約束だ☆
砲撃、ダメ、絶対。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの子は?前編」

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・
じゃあこの子は?前編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

さて、フェンがアースラから帰って来てから約一週間程度、少しだけ時間が経過した。

その間は特に事件が起こると言った事も無く、フェンは基本的に家に人がいない間は廃棄世界で自分の趣味である兵装デバイスや基地の改良に使えそうな素材探しに赴いていた。

趣味と訓練を兼ねた素晴らしき無駄行動であったが、それなりに本人も楽しんでいた。

廃棄世界は錬金魔法を使えるフェンに取ってはまさに宝の山であった事だろう。

そんな風に毎日を楽しんでいたフェンであったが、ある日身体に少しだけ違和感を感じた日があった。

身体に倦怠感が伴うという非常に些細なことだった為、その時の彼は特に気にしてはいなかった。

ヴィズによる簡易診断においても、問題は見当たらなかったからでもある。

ソレが後に大変な事態になってくるとは思いもせず、彼は廃棄世界を放浪していった。

そして様々な実験機材やら、材料になりそうな得体のしれない物品を持ち帰っていった。

中にはどう見ても生体ポット的なモノもあり、ソレを改造して何を思ったか魚の養殖をしてみたりと、方向性を間違えた開発をしてみたりしてある意味で暴走していたフェンであった。

――ともあれ、彼はそんな風に趣味全開の日々を過ごしていた。

まぁ本人が楽しんでいるのだし、ソレを責めるのは酷だろう。

そして、アースラから帰還して丁度1週間経ったある日のことだった。

彼は前日夜遅くまで地下基地である事に従事しており、睡眠に入るのが遅くなってしまった。

彼は、次の日の朝は特に何の予定も無いことを確認する。

コレは好都合と、彼は久々の休日と思い、地下基地にこさえた自分の部屋で朝食の時間ギリギリまで惰眠をむさぼるつもりであった。

そして眠る直前、以前から感じていたあの変な倦怠感も感じていた。

だが、この倦怠感はリンにすらよくわからない体調変化であり、これと言って行動に支障が出る程度の物でも無かった為、特に気にせずその日は眠ってしまったのであった。

――だが、事態は時として突然思わぬ方向へと転がるのが、世の常と言うモノだ。

「おーい、フェン。幾ら休みでも朝飯くらい出て来いってはやてが――」

朝、フェンを呼びに来たのはヴィータだった。

何時もなら呼びに来なくても黙って食卓で手伝いをするフェンが、何故かその日に限って顔すら見せないのが気になったからだった。

もうすぐ他の家族も起きてくるので、珍しく寝坊でもしてたならからかってやろう。

そう思って彼女は地下基地のフェンの部屋に入って来た。

しかし、彼女はフェンの部屋にノックも無しで入った途端、声を失った。

「「・・・・・」」

「・・・・・・・フェ、フェンが子供造ったぁーーーーーーー！！！！」

「ま、まて！違うっ！！！」

「フェンがつくったぁぁぁぁ！！！きっと試験管でなんかしたぁぁぁぁ！！！」

「ちぃーーーがぁーーーうぅーーー！！！！！」

彼女は普通では有り得ない様な事を叫びながら、フェンの部屋から逃走した。

だがそれも仕方が無い事だった。何故なら彼女が部屋に入った時、フェンは彼とウリふたつの小さな子供を抱き上げていたからだ。

フェンは彼女を止めようと手を伸ばしていたが、ソレが何かを掴む事も無く。

虚空に延ばされた手だけが残り、何処かその場にむなしさだけが残ったのであった。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

――――八神家リビング

「――――だから、さっきから説明している通り、その子は何故か俺の部屋に居た子で俺が作ったロボットとか、偶々作ってしまった生体デバイスとか、廃棄世界から拾ってきた素材にまぎれてたとかそう言うのじゃないんだ。俺も今朝起きた時に寝床に一緒に寝ていて訳が解らないから話を聞こうとしてたところだったんだ」

俺は今、リビングに集合した八神家全員の前で弁解していた。

今朝起きた所をありのままに話すぜ？布団の中に違和感を感じたんだ。

てっきりリンが寝ぼけて入り込んでいるものかと思い、そのまま二度寝した訳だ。

ンで、飯の時間ギリギリになって起きて、さぁ行こうかと思った時に気が付いた。

リンはバスケットの中に寝ている、じゃあこの布団のふくらみは何？

驚いて布団をあけたら、その子が布団の中でぐっすりスリーピングしてたって訳だ。

わはははは、自分で言っていて訳が解らんＺＥ☆

一応危険なヤツなのかどうかは調べてみたが、特に異常は無かったぜ。

れっきとした“生命体の肉体”ってヤツだったよ。

少なくても生物で、危険物は持っていない文字通り子供だった。

お陰で余計に訳が解らなくなったけどな。次元漂流者だろうか？

「そうなんやー、でも幾らなんでもそっくり過ぎちゃうん？
フェン君の子供と違うんやったら、あれか？クローンとかそう言うのやないんやろうね？
もしそうやったら流石に怒るよフェン君？」

「全っ然違います。と言うか作る意味が無いから造らないし」

そりゃ確かに地下基地には俺の趣味で色々と造りこんではいますがね。

流石に生命をもてあそぶような類のモンは置いて無い筈だ。

いや、本当において無いから、杖をこちらに向けるのをやめてください。

もう広域殲滅魔法を喰らうのはカンベンです。

とにかく、俺はそういったのだが、他の皆はそうは思っていなかったらしい。

以下皆さんの言葉――

「でもそっくり過ぎるだろう？」↑シグナム

「ああ、どう見てもウリふたつだ」↑ヴィータ

「でも、こっちの子の方がなんか愛らしいというか」↑シャマル

「それはアレだ。この子はフェンと比べると非常に無邪気だからだな」↑リイン

「確かにニコニコとしているな。おい、耳を引っ張るんじゃない」↑ザフィーラ

「ああ、多分フェンくんの小さな頃ってこんな感じだったのね・・・ジュル」↑リニス

「リニスねぇさん！口から涎出てるですぅ！」↑リン

『ははは、素晴らしきカオス具合。でも本当に何処から来たんでしょう？』↑ヴィズ

そんなことは俺が知りたい。

しかし、みんな俺に似ていると口々に言うが、そんなに似ているか？

犬形態のザッフィーに取りついて、キャッキャと笑っているこの子をよく観察してみた。

確かに黒髪のストレートをポニーテイルみたく束ねてあるし目も真っ赤だ。

肌の色は日本人と言うよりかは白人系であるし・・・あれ？結構似てる？

でも何処か人間っぽくないというか――なんだろう？この違和感。

『ちなみに此方がこの子と同年代の頃と思わしき頃のマスターの写真です』

「ヴィズ！？」

その時、ヴィズがいきなり空間モニターに俺の写真を投影した。

つーかどうしてお前が俺の小さな頃の写真を持っている！？

アルバムは全部あの世界に置きっぱなしで消えたと思ってたんだぞ！？

・・・え?父上秘蔵のコレクション?・・・聞いて無かった事にしようウン。

「ほう、どれどれ・・・うわ、そっくりやん」

「こ、これはまた・・・」

「コレで関係を疑うなって方がムリだと思う」

「本当にそっくりね。でもこの写真に映るフェン君は随分と無表情なのね」

『それは当時、サバイバル訓練明けだったからだと思います。ちなみに撮影者は御父上です』

うわー、うわーとマジでクローンちゃうん?

そう言っているはやてとは対照的に、シグ姉さんは困惑した感じで引き攣った笑みを浮かべていた。

ヴィータ姉は言わずもがな、コレは絶対にお前と関係があると言った感じで俺の方を見つめてくる。

だが俺は全く知らんし心当たりも無い。

シャマル先生も驚いたって顔で空間モニターの写真を眺めていた。

つーか撮影者は父上かよ。

「あら、これもかわいい・・・フェンくんの父上殿、ＧＪです」

「リニス、貴女もそう思うか？」

「リインも？」

「それは兎も角、いい加減俺から降ろしてやってくれないかぁっ！？尻尾はひっぱるな！」

キャッキャと無邪気な笑みでザッフィーをもて遊ぶ正体不明の子。

グイグイと耳を引っ張っていたと思ったら、今度は尻尾に目を付けられたらしい。

と言うかザッフィーも嫌なら人型になればいいのにな。

ただ、それやるとなると確実に泣きだしそうだけどな。

「おい！本当に怒るぞ」

「っ！・・・ふぇ」

「あ、いや・・・・別に撫でる程度ならいい」

「！！～♪」

それにしても今話題に出されているのは自分の事なのに呑気なヤツだな。

いや、ザフィーラで遊ぶのに必死で話を聞いていなかったのか？

だとしたらそれは年相応の子供の反応だろうな。

・・・・サバイバル訓練前の頃の俺は、あんな感じだったんだろうか。

「そういえば、何て名前なんか聞いてへんかったわ」

はやてがふと思い出したかのように、あの子に視線を向けた。

考えてみれば慌ててたから今の今まで、その子の名前を聞いていなかったな。

しかし、一体なんて名前なのだろうか？

「私ははやてって言うんやけど、アナタのお名前は？」

はやてはザフィーラをモフるその子と目線を合わせるようにかがんで名前を聞いた。

その子ははやてをジッと見つめると、ニパッと太陽のように笑って答えた。

「ふぇん・らぁだぁ！」

「「「「「「ええ！？」」」」」」

「いや違うぞ？俺は本当になんにもしら――いやだから本当だ」

その子はあろう事か俺の名前を自分の名前だと言った。

その所為で周りの視線が一気に懐疑的なモノとなる。

だが、改めていうが俺は断じて知らないのだ。

「え、え～と。わんもあぷりーず？」

俺がもう一度訪ねてみた。出来ればそんな悪い冗談はやめてほしい。

だが、その子は本当に無邪気な子供そのモノの愛らしい笑みをたた

えたまま――

「ふぇん・らぁだぁ♪」

――と、そうお答えになりやがりました。ええ、もう私への視線がブリザードです。

「だそうだぞ？フェン、幾らなんでもソレは無いと私は思うぞ」

「お前、幾らなんでも自分の名前を何も知らない子につけるか？」

「でもその子、ふぇんくんって名前なら、やっぱりフェン君が作ったって事？」

「やりかねないな。アイツの地下基地にはソレが可能な設備が幾つかある」

いやいやいやリインさん、確かに地下基地にはソレが可能な施設はありますがね？

アレ今は食糧自給が出来るかの実験として魚やら牛やらを突っ込んでであるんですけど！？

人間用にポッドを動物用に調整したのに、それをまた元に戻すなん

てことしないぜ!?

後、シグ姉さん、ヴィータ姉、シャマル先生・・・・・。

その“フェンならやりかねない”っていう視線は勘弁してください。

幾ら俺でもそんなこと――しませんよ?うん。

「フェンくん、どうして・・・こんな素敵なことを私に教えてくれなかったの?」

「よーし、リニス。すこし頭冷やそうや。でも、フェン君何時の間にか父親になっとったんやなぁ・・・相手誰や?」

「きっとフェンにも何か理由があった。俺はそう信じている」

おい、それ絶対俺が何かしたって事前提だろう?!

「さて、冗談はさて置き、まさかフェン君が分裂を習得して分身を作ってしまうなんて――」

「まて、俺はどこのスライムだ?そこまで人間止めてねぇぞ」

「じゃあ、何処からさらって来たん？」

「よし、俺にケンカ売ってるんだな？いい加減怒るぞ俺も」

ジャカッとカートリッジの装填音を出しながら、格納領域からジリーノを取り出す俺。

だがそれを見て何故かはやてのそばに控えていたシグ姉さんがニヤァと笑みを作る。

あ、不味い・・・。

「ほう、なるほど。久々にお前と模擬戦をしたかったところだ。良いだろう付き合おうか？」

「え、いや。俺は只単に理不尽なことに対して怒っただけで・・・って何でレバ剣出してるんですかシグナムさん？？」

「なに気にするな。とりあえず地下基地に行こう。ココは狭すぎる」

墓穴掘ったぁぁぁぁぁ！！！！！

そう言えばココ最近シグ姉さんと模擬戦して無かったんだっけ？

俺はそのままシグ姉さんに引きずられて地下基地へと連れて行かれそうになる。

その前に逃げだそうとしたが、何時の間にか回りこまれていた。

って襟首引っ張らないで～～～！！いや～～～～！！！！

り、理不尽だァァァ！！！やめて～～～～！！！

ぎゃーーーーー！！！

「あれま、連れてかれてもうた。哀れフェン君」

「模擬戦だと容赦ないですからね、彼女。・・・・で、どうしますこの子？」

「そうやね・・・なぁなぁ、もう一回で悪いんやけど、名前なんて言うん？」

「ふぇん・らぁだぁ」

俺とまったく同じ顔の幼児であるふぇんくん。

彼は俺とは違って本当に満面の笑みではやての問いにそう応えた。

流石にこれには周りも苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

さっきまでのやり取りはあくまで冗談の範疇であったし、これも俺がやったドッキリか何かかと思っていたからだ。

だけど、実際俺は何もしてないし、ふぇんとは何のかかわりも無い。

薄々ソレが解ってきたので、彼女たちも困惑し始めたのである。

「・・・やっぱりフェン君と何か関係あるんやない？
もしかして過去の自分が来たとか、並行世界の己が来ちゃったとか？リイン、どう思う？」

「いずれにしても、今のところ彼の者の正体は解りませんね。
人間と言えば、確かに人間ですし・・・いや、しかし――まさか」

「・・・？どうかしたん？」

「いえ、何でもありません。でも危険って訳でも無いみたいです。
とりあえずは様子を見るというのはどうでしょうか？」

「うーん、確かにこんな可愛らしい子をほっぽり出すっていうのも気がひけるわ」

はやてが視線を向けた先では、ふぇんが今度はザフィーラの背によじ登ろうと奮闘していた。

その姿に心を撃たれたのか、リニスが何故か拳をグッと握って応援している。

ザフィーラは若干迷惑そうだが、流石にこんな小さな子に対して声を荒げることはしないらしい。意外と紳士である。

よじ登ろうとして落っこちそうになると、ヴィータ姉が何時の間にやらフォローしていた。

「それに、なんかもう既に馴染んどるしね。出てけとか言えへんわ」

「同感です。我が主」

「とりあえずは様子見。その子を監視っつーことで誰か一人はついておくこと。
まぁ監視言うても、実質タダの子守りなんやけどね」

「あれとは違い好奇心も旺盛の様ですしね。見張って無いと色んな意味で危なそうです。
序でですからその子の世話はフェンに一任させるというのはどうでしょうか？」

「お、リインソレいい考えや。実に面白くなそうやしね」

「恐悦至極です」

突然あらわれた俺とそっくりなふぇんは、何処か敵では無いという何かを感じさせた。

そして家主であるはやてが許可した事により、その子はリトル（ふぇんだと俺と混同するので）と名付けられて八神家での滞在を許可された。

悪意も無い、敵意も無い、本当に真っ白で暖かな光の様な子供。

一体コイツは何者なんだろうか？敵ではないなら一体何なんだ？何処から来た？

俺は地下基地でシグ姉さんの模擬戦の中そればかり考えていた。

まぁ放り出す訳にもいかないので、ウチに引きとめるというのは仕方が無いだろう。

とりあえずザフィーラが懐かれてるし、彼が世話でもしてくれればいいかな。

そう思っていたのだが、何時の間にかリトルくんの世話役は俺に決定していた。

何より――

「なぁ、フェンは乗り気でないみたいだしさ。アタシのとこ来ない

か？」

「・・・・やだぁ、お父さんと一緒がいいー」

――――そんなことを口に出してくれた為、強制的に俺が世話役になった。

か、勘違いするなよ！仕方なしなんだからな！リトルがそんなこと言うのが悪い！

大体なんで俺が親とかいうんだよ！自分で言うのもアレだが、俺相手もいないのに！！

というかリトルって何さ？！完全に俺の息子設定ですか！？もう俺をいじめないでくれ！！

『とか言いつつ、一瞬嬉しそうだったのはこれいかに？』

「うっさいバラすぞコラ」

『おお、こわいこわい』

俺の服の裾をしっかりと握りしめニコニコと笑うリトル。

・・・本当に、お前は一体何者なんだ?何がしたいんだ?

そう問いかけてみたいところだった。何が目的だ、と。

だが彼は、年相応の思考力しか持ち合わせていないらしい。

その姿は演技には到底見えず、明らかに見た目のままの精神構造をしている。

泣かれても厄介だし、正体は不明だが危害を加えてくるつもりも無いらしい。

大体魔力とか殆ど感じないしな。俺がこの年齢の時は数百倍は魔力に溢れていたぜ。

むしろ常人よりも魔力が少なかったかもしれない。

保持魔力が少なすぎるのだが、そう言った人間は居なくもない。

だから、そこら辺を考えたりはしなかったんだ。

そして、気が付いた時には・・・既に遅かったって事も解らなかった。

初めて会った時からリトルは只笑顔のままだったんだから。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの

新キャラ登場、尚この子は転生及び憑依者ではありません。

一体何者なのか?それはいずれ明らかに!!

・・・・。

最後に書いた部分で大体予想付くかな。

ソレでは失礼。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの

長くなったので中編になりました。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの子は?中編」

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・
じゃあこの子は?中編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

よぉ、みんな元気か?俺ぁ元気っちゃ元気だぜ?
もっとも――

「ああ!これ、いきなり駆けだすな」

「～♪」

「ほほぅ、駆けっこですか?リンは負けませんよー!!」

「お前まで張り切ってどうする!?ああまてお前たち!?」

――どういうわけかリトルも一緒だと、普段の２０倍疲れるのは
何故だろうな?

リトル、それはいきなり八神家、いやさ八神家地下秘密基地に突如として現れた子供。
正体不明、目的不明、出身地不明の三拍子がそろった謎の幼児である。
だが、どういう訳かその姿は俺の小さな頃とそっくりだという子である。
次元漂流者という訳でも無く、あまりに俺と似ている為、俺と何かしら関係があるんじゃねぇかと周りから言われているが、今の所はよくわからない。
ただ言えることは、八神家にヤツが来てから更に騒がしくなったって事だろうな。

「聞いてねぇよアイツら・・・ヴィズ、絶対に見失うなよ」

『次元空間に入ってもトレースできるマーカーつけてあるんですから大丈夫ですよ』

「まぁまぁ、小さな子は元気が一番です」

「・・・なら、リニスが世話するか？」

「ええ、もう是非に！」

「ごめん。あの子の世話役は俺なんだ」

「なんだかんだで気にいってるんじゃないですか」

「うん、あの子は本当にいい子だよ。リンとも相性がいいしね」

どういう訳か、俺を父と慕うリトル。理由は解らない。
ただ言えるのは、あの子は何時もニコニコと笑顔を絶やさないという事だけ。
そして、当たり前の事ですら驚きと好奇心を示す。
まるで、今まで見たことが無かったかのように。

「おーい。あんまり遠くいくなよー」

ともあれ、今は追いかけないと見失ってしまう。
パタパタ駆ける速度は、その年代の子供程度でしかないが、気をつけないと見失ってしまう。
まったく、まるで俺が出来なかった小さな頃をそのまま今になってやっているみたいだな。
・・・・？なんでそう思ったんだ？

「フェンくん、急がないと見失いますよ」

「ああもう、立ち止まってくれればいいのに・・・手でもつなぐか」

「いい考えかもしれませんね。皆で手を繋いでいくのも」

子供は元気だぜと思いつつ、俺はゆっくりとした速さでリトル達を追いかけるのであった。

「あと、リニス。もうそろそろ人ごみだから」

『（はい、念話で喋るんですね？）』

『（猫が喋ったらみか○絵日記になるからなぁ）』

あれはあれでほのぼの系で良い話だよなぁ。
個人的には動物のお医者さんでも良いけどね。

＊＊＊

海鳴市・海浜公園――

久々にこの公園にやってきた。俺がハルケギニアから帰還して最初に降り立った場所だ。
その後すぐにアースラ行きだったから、外にあんまり出歩かなかったから懐かしいと言えば懐かしい。

≪――――パチパチパチ！！≫

「え？ええ？！なに？なんなの！？」

ソレは兎も角として、現状を説明しようと思う。

俺達はリトルを伴い久々に海浜公園に来た訳だが、その後先客がやってきた。
いや、この言い方をするとなんかおかしな響きであろうが間違いでは無い。

やってきたのは高町なのはさんその人だったんだからな。
彼女相変わらずココを特訓場所にしていたらしい。後、ユーノも一緒である。
コイツ相変わらずなのはの金魚のフンしてんのな。

ソレは兎も角、彼女は普段から人気の少ないココを魔法訓練の場所として使っている。
てな訳で俺達は先に来たよそ者って所、ある意味先客はなのはさんってこと。
・・・・普通に後から来ただけでよかった気がするが気にしてはいけない。

そして最近外に出てなかった俺は久しぶりになのはとユーノ達に再開した訳だ。
んで、このとき俺はリトルを連れて来ていたのだが、彼らはリトルを見てかたまった。
いやまぁ、リトルが俺と似ているって言うのもあったらしい。
だが、それよりも何時も無表情に近い俺とそっくりな顔のリトルが、無邪気で満面の笑みで居ることに驚愕したらしい。何でも戦慄が走ったとか・・・俺ってそんなに無愛想かな？

ともかく、普段は見られそうもない俺の顔を見た様な感じがして驚いたんだってよ。
んで、リトルの紹介なんだが素直に何時の間にかウチに居たと話した。

当然八神家の面々と同じ様な反応をされた。

どうやらコイツらの認識も、俺は怪しげな研究をしていたりする人間であるらしい。

全く失礼な話だ。俺はあくまで兵隊でその為に必要な技能を取得する序での片手間に趣味でやっているだけだって言うのに。

本職のスカ山さんに比べたら児戯に等しいだぜぇと言ったら、スカ山さんって誰って言われた。

まぁ知らないのは当たり前だからスルーしてもらったぜ。

そしてさっきのパチパチという音。

ソレはリトルがなのはさんの魔法の練習をみて拍手したからである。

今はなのはの手を掴み、キラキラした目でなのはを見上げもう一回をせがんでいた。

ちなみになのはが最初にやった訓練は基礎訓練の誘導弾誘導訓練。

空き缶に魔力誘導弾を当て続けるという魔力制御訓練にもなる地味なヤツ。

だが、地味であるが非常に効果的な訓練であり、正規のトレーニングとしても知られている魔導師にとってはもっともポピュラーな訓練方だ。

そして自前では誘導弾が使えない俺にとってはあまり関係の無い訓練でもある。くそ、羨ますぃ。

「すごいすごい！おねぇちゃん！もっとみせてっ」

「えっと、そのう」

「はは、リトルに気にいられたらしいぞ？なのは、もっと魔法を見

せてやってくれ」

「ええ～！！」

考えてみればリトルはまだ地下基地の訓練施設に連れて行ってあげて無い。
色々あったから魔法を見せるのが今回が初めてだったことを失念していたのだ。
リトルは好奇心が強い子だ。魔法という不可思議だが面白そうなモノに興味をひかれるのも当然だろう。

何せ地味な訓練とはいえ、さくら色の綺麗な光弾が宙をくるくる飛んで空き缶に当たるのだ。
見た目と同じ精神構造を持つ文字通り幼児のリトルなら、ソレを見たら意味も無くはしゃぐのも判る。
猫形態のリニスも俺の肩に乗っかりながらソレを微笑ましそうに見ていた。
実際なのはは魔法の制御が上手いから、地味な訓練も見てて飽きないもんな。

しかし、それにしても――

「ずいぶんとなのはを鍛えたなユーノ」

「いや、僕は基本的には訓練場所を提供して基礎を教えただけだよ。

あとは彼女の実力さ」

「だが、それでもあの年齢でこのクラスになるには才能だけでは説明が付かない。才能と本人の努力と最高の師がいたからこそだろう？」

「・・・はは、フェンにそう言われるとは幸運だけど、君だって彼女と同じくらい凄いじゃないか」

「まぁ、出身が出身だからな」

ふと、今だ無垢な目でなのはを見上げて訓練の挙動に一喜一憂しているリトルを見る。
最初は戸惑っていた彼女も、なんだか楽しくなって来たらしい。
今ではさっきよりも高速で誘導弾を動かして・・・早いなオイ。
残像が見えるぞ。
ソレを見てリトルは更にはしゃぎ、惜しみない拍手を送っていた。

・・・あの世界で、もしも戦争が無かったら、あるいは俺の前世の記憶・・・もうだいぶ薄れてしまったが、ソレが無ければリトルの様に無垢でいられたのだろうか。
ソレはあくまでＩＦでしか無いし、考えてもしょうがない事だろう。
だが俺はリトルの様子を見ていると、その事を考えずにはいられなかった。

「――――エン、フェン」

「・・・ん？どうした？」

「はぁ、やっぱり聞いていなかったんだ」

「すまんすまん」と言いつつ、手で謝る仕草をする。
どうやら思考の海に途中から沈んでいた所為で、ユーノの話を聞いていなかったようだ。

「（どうやら、なのはちゃんの魔法訓練に付いてお願いしたい事があったようですよ）」

「（そうなのか？全く聞いてなかった）」

どうやらリニスが俺の代わりに話を聞いておいてくれたらしい。
念話で先程からユーノが話していたことの内容を教えてもらった。

「まったくもう・・・まぁいいや。実はさ、また以前みたいに模擬戦をしてほしいんだ」

「模擬戦？俺となのはがか？」

「うん、いつも基礎練習ばかりだしね。やっぱり偶には相手がいる方が練習になると思うんだ」

ユーノはどうやら俺になのはの相手をしてほしいらしい。
彼曰く、以前なのはが俺と対戦した後も、かなりの技量の向上が見

られたとか。
そりゃ、ある程度基礎を積んだらそうやって実際に実践する方が良いだろうが・・・。

「・・・・」

俺はふと、リトルの相手をしているなのはのほうを見た。

「次はー、シューターの１２個同時制御だよ！」

「すごい！すごいー！！」

何と言う事でしょう。
そこには１２個の光る弾を器用に１２個別々で独立させた運動をさせているなのはがいました。
これにはリトルくんも満面の笑みを浮かべてご満悦。

「・・・・随分と器用だな」

「うん、彼女の誘導能力はかなりのモノだよ。
砲撃の出力も事前に準備した僕でも辛くなったくらいさ。かなり凄い伸び率だと思う」

いや、ありゃ器用なんてもんじゃねぇぞ。なんだよアレは？

あの年で魔力誘導弾１２個を別々に思念誘導とかどんなんやねん。
リンの助けが無いと思念誘導が使えない俺にとっては凄まじいとしかいえん。

「う～ん、それは今すぐか？」

「出来るならね。フェンは色々してるみたいだから今のうちに予約しておかないと」

「俺は行列のできる料理店か」

「すぐに注文（オーダー）出来ないって意味じゃね」

クスクス笑うユーノに軽く肘打ちを入れる。
いい所に入ったのか悶絶するユーノを後目に、どうしようか思考を巡らせた。
むぅ、俺としては久しぶりだし別段やっても構わないんだけどな。
だけど今はリトルを連れて来ている。
あの子は好奇心が強いから、放置したらフラフラと何処かに行きそうだ。
流石にソレは不味いから、放置する訳にもいかないし・・・。むぅ。

「ユーノくん、どうかしたの？」

「フェンになのはと模擬戦の相手をしてくれないか頼んでたのさ」

何時の間にか誘導弾訓練を止めて、なのはが此方に来ていた。
ってオイ、ユーノ。

「おい、俺はまだやるとは「え！フェン君相手してくれるの！！」」

「いやだから「この間は負けたけど、今度は私が勝つからね！」・・・話聞けよ」

「だってぇ、フェン君色々してるみたいだからすぐに頼まないと」

「・・・二人揃って同じこと言いやがりますね」

「にゃはは、お願いしますフェン君」

だが、どうやら奴さんヤル気らしい。どうしたもんだろうか？
そんなことを思っていると、何やら服の袖を引っ張られる感じがした。

「ねぇーねぇー」

「どうしたリトル」

「なにかするの？」

首を傾げながらそう聞いてくるリトル。

「んー、アソコのお嬢さんが俺と模擬戦したいんだってさ」

「もぎせん？」

ああそうか、模擬戦の意味が解んないか。

「さっきなのはが光る弾を見せただろう？アレを撃ちあって勝ち負けを決めるのさ」

「え！あのきれーなの！見たい！」

「いや、見たいって・・・やるのは俺なんだが？」

「見たいっ！見たいっ！見たい～～っ！！」

リトルはそう言うと服をギュッと握りしめて、腕をブンブンと揺らし始めた。

あ、あれ？この子意外と力強い！？

「わ、判ったから、服を引っ張るんじゃない」

「～♪」

う〝すごく期待している目だ。
俺を見上げる形で上目使いのリトルが、無垢な眼(まなこ)で期待の視線を向けてくる。
いやしかし、ここら辺で模擬戦をする訳にもいかないんだけどな。
主に戦闘範囲的な意味と、ソレによる環境破壊的な意味で。

「ねぇフェン。たのむよ」

「お願いフェン君!!」

「ワクワク♪」

「・・・・（俺に拒否権はなしかい？）」

とはいえ、どうにも断る雰囲気は無く――――結局、俺は折れたのであった。
だって、あそこで断ったら幾らなんでも空気読め無さ過ぎるぜ。
仕方ないので違う次元世界に向かうということで、模擬戦をする運びとなった。

そしてあの後全員で次元間転送を使い、やってきましたは地球では無い無人世界。
岩と砂だらけの荒れ地であるが、誰ひとり人間がいない上管理局の監視も無い世界だ。
地球上じゃ俺やなのはの力を使うと全力で戦えないから、こうやって態々違う世界に飛んできたという訳である。

無暗に魔法を使うのはいいんだろうかなぁって思うけど、ココは管

理外世界だ。
飽く迄も時空管理局の法の外だから、見つからなきゃいいらしいぜ。

「それじゃあ、俺らは向うで戦るから、その状況をサーチャーで中継するぞ」

「万が一を考えて、僕はココで流れ弾に注意していればいいんだね？」

ユーノとリニス（猫形態）と、リニスを抱っこしたリトルとリンがこの場に残る。
観戦中はユーノが結界魔法を張り、万が一に備えるのである。

「フェン君の攻撃範囲ってかなり広いもんねー。気をつけないと吹き飛ばされちゃうよ？ユーノくん」

「なのはの攻撃も凄いんだから、なるべくこっちには撃たないでよ？」

「「気をつける」なの」

声をそろえてそう答えたら、なんかものすごく不安って顔されたぜ。
失礼な。

「それじゃあ、いく？」

「うん、今日はよろしくお願いしますなの。フェン君」

「あいよ。非殺傷でおｋ？」

「あはは、流石に物理破壊設定で模擬戦は厳しいかも」

あ、別に物理破壊でも断らないんだ。流石は未来の魔王さま。度胸が据わってます。

とりあえず俺達はユーノ達から離れる為に飛行しながらどういうスタイルの模擬戦にするかをお互いに話し合う。

まぁやることはすぐに決まった。基本何でもあり。只コレだけ。

唯一制限があるとすれば、非殺傷設定を外さないと言ったところだろうな。

「後あの姿消えるのもちょっと・・・」

「ミラージュハイドか？確かに今回の模擬戦は派手にいきたいから使わないでおく」

「お願いするの。それじゃあ」

「ああ、思いっきり戦りあおう」

ユーノ達からある程度離れた地点で俺達はふたてに別れて数ｋｍほど間をあけた。

今回の俺のＢＡは？、長距離戦が得意なタイプである。

なのはも砲撃魔導師として腕を見がいたため、両者長距離仕様と言う事になる。
つまり普通の模擬戦の様に対峙した距離だとかえって狭すぎるって訳だ。

「聞こえるか？準備はいい？」

『うん、何時でも良いよ』

「これ以降は念話も封鎖するから、最大３時間戦える」

『・・・？なんで３時間なの？』

念話でお互いが準備できたかどうかを確認しているとそう聞かれた。
いや、だってあーた――

「そこまで長引くかは解んないけど、それ以上は夕ご飯の時間超えるから」

『あー、それはちょっと不味いかも・・・うん、わかった。最大３時間だね』

実際そこまで長引くとは思えないけど、お互いに健闘した場合の処置である。
俺もだが、なのはもあまり遅くに帰る訳にもいかないでしょう。
一応まだ９歳な訳だしね。

お互いに準備が完了すると、先程までのほのぼのさは消える。
模擬戦とはいえ、お互いに力を出し合うのだ。
この始まる前のピリピリとした心地の良い緊張感が肌を包みこむようで面白い。
別段合図は必要ない。何故なら既に――

「ガルヴァドス！」

『スフィア形成！フルオートファイア！！』

――お互いの準備は完了している。なら後は撃ち合うのみ。
最初にこの緊張を破ったのは俺の方だった。放ったのは最も使い慣れたガルヴァドスの魔法。

マルチタスクによって同時に５つ形成されるスフィアから高圧縮され術式を付与された魔力弾が射出された。リンがいない為、誘導ではないモノの弾幕と呼んでも良い密度の魔力弾が一斉になのはの元へと飛翔し着弾する。

≪ドパパパパパパーーーーンッ！！！！！！！！≫

相手から数ｋｍも離れている為、衝撃波は来ないがかなりの爆発を目視で確認する。
ヴィズが着弾確認を仕様としているが、俺はその前にローラーダッ

シュでその場から飛びのいた。
間髪いれずに今まで俺が居た場所へと、ピンクの魔力弾が集中して炸裂する。

『魔力反応！上です！』

ヴィズの警報に俺は上空を見上げる。
望遠された視界がヘルメット内のＨＵＤに表示され、高度３００ｍ程だろうか？その高さに見覚えのある白いＢＪとピンク色の魔力光を煌めかせる翼を展開したなのはがレイジングハートをこちらに向けて浮かんでいるのが見て取れた。

「・・・・はっ！流石はなのは。爆風を利用しやがった」

信じられない戦闘センス。
魔力弾頭が炸裂するあの一瞬でどれほどの規模か判断して防御魔法を用いた。
ソレだけじゃ飽き足らず、恐らくあの爆発を利用し一気に上空へと飛びあがったのだろう。
すこしＢＪが汚れているのがその証拠だ。
それ以外は綺麗なモンで直撃って訳でもなさそうだ。

――――ニヤァ・・・。

自然と、そう自然と自分の口角がつり上がるのを感じる。
彼女の凄まじい伸び率、特に戦闘センスは流石は主人公と呼ぶにふさわしい。
広範囲を爆破するガルヴァドスの爆風を利用しようなどと普通は考えつかない筈だ。
俺も俺で狂っていると自覚しているが、彼女も大概にクレイジーだぜ。

「ヴィズ」

『はい、マスター』

「面白くなりそうだ」

そして今だに伸び続けるその力を育てる為の踏み台として俺が相手をしている。
将来なのはは俺が育てたって胸を張って言える訳だな！

『ですが基本はユーノが教えたのでは？』

「・・・心でも呼んだのか？」

『いえー、長年の勘――高魔力反応！上空警戒！』

ったく、世間話位させろや。
とかは思っても口には出さず、今度は横に何時の間にか跳躍してい

た。
そして今度は桜色の極光が俺の居た場所を通過していく。

「容赦が無くなった分、恐ろしいなコレは」

『多重シールドでギリギリって感じですね。非殺傷でも浴びたく無い威力です』

足を止めることなく、そのまま逃げ続ける。
何故なら何時の間に放ったのやら、ディパインシューターが俺を追尾して来ていたからだった。
以前よりも制御力が上がったからか、更に立体的に動くソレはまるで猟犬の様に追いすがる。
速度が遅いからまだいいが、思念誘導を強化した設定なのか降り切れない。

ローラーダッシュで大地を駆け、時折ある段差を前転して飛び越えた。
何発かが俺の脚を止めようと突っ込んでくるたびに、くるりと回転しつつ方向転換を行う。
超心地回転の様にズザザザザと大地をえぐっての無理矢理の方向転換だ。
俺が通るたびに、地面に凄まじい傷跡が量産されていくがそれどころでは無い。

出来れば空を飛んで逃げたいところだったのだが、よく見ると上空に一個だけ飛んでいる為、迂闊に飛びあがろうとすればそれが襲い掛かってくるのが目に見えていたのである。

別にＢＡとシールドがあれば問題無く防げるが、正直自分から当たりたいとか思わない。

と言う訳で――

「落ちろ」

――身体を前に向けたまま、アルアッソーを後ろ向きに連射した。

以前もやった為ソレを警戒してかシューターが一瞬にして散開する。
だがその一瞬をついて俺は格納領域からジリーノを取り出して広範囲にぶっ放した。
かなり近づかれていた為、足の遅いディパインシューターはジリーノの魔力散弾を避け切れずに相殺される。
上から吸収しようとした一個もヴィズの警告に合わせてジリーノを発射。
他の魔力弾と同じ運命となっていた。

「さて、やられっぱなしは俺の趣味じゃないな」

『そうですね。ではマスター』

「おお、彼女に実戦で鍛えた弾幕を浴びせてやろう」

彼女の成長に歓喜の感情を感じつつ、補足されない様に逃げ回る。
その間に格納領域から、ツイングロム用の砲身を取り出し両肩に装着する。
そしてマルチタスクを全力稼働させ、ガルヴァドス・スフィアを大量に形成した。
ピンクの光が襲い掛かる中、設置術式として周辺に設置しつつ逃げ回る。
その数およそ３０、現在俺が稼働させられるギリギリの数である。

『準備完了！』

「起動っ！」

準備が出来たということを受け、俺はすぐさま術式を起動させた。
そして俺の背後に浮かびあがる３０を超える魔法陣と共にスフィアが現れる。

「さぁ、弾幕対砲撃のバトルと行こうか」

全砲門を開き、狙いをつけるは無垢なる魔法使い。

「揺れろ。ガルヴァドス・シェイカー！！」

逃げ回りつつも空間に設置された魔法陣が、一斉に作動して掃射を開始する。
３０を超える魔力弾の発射台たるスフィアが、俺を中心にして扇上に展開された。
過負荷によって一瞬動きを止める俺だったが、彼女が反応する前にこの堰を解き放つ！
全ての砲台から一斉に光弾が放たれ、光跡が周囲を照らして行く。
ガルヴァドススフィアは誘導していないと周囲に拡散する射線を取るよう造られている為、幾つかが大地と触れて大爆発を起して土煙を上げるモノの、それ以外は壁の様に突き進んでいった。

なのはにとってはコレは洒落にならないだろう。
何せ上に逃げたくても横に逃げたくても、スフィアの掃射範囲が広すぎる為逃げられない。
仕方なしに彼女は少し後退していく、だがそうなれば余計にガルヴァドスの範囲が広がるだけなのだが・・・。

そう思っていたその瞬間、なのはが急に反転したかと思うと、弾幕へと突っ込み始めた。
これには俺も慌てた、もしも今ガルヴァドスに触れれば連鎖的に爆発し、模擬弾だとしてもかなりのダメージを受けること間違いないのだ。
だが、まるで恐れていないかのようになのははガルヴァドスの弾幕へと自ら飛びこんだ。

「な！？――――あは、ははははっ」

そこからがもう笑うしか無かった。
彼女は何とガルヴァドス弾同士のスキマを縫って、突破して見せたのだから。
原理を明かせば簡単だ。ガルヴァドスの弾幕は放射状に広がっていた。
当然ある程度離れれば離れるほど、その弾と弾の間隔は広くなる。
ある程度進むと爆発するガルヴァドスだから、爆発する前に飛びこんだのだろう。

だが、そうなれば子供がギリギリ通れるか否かのスキマしか無い筈なのである。
そんな中を飛び越えて、今俺の元へと飛翔するなのはから、また光弾が放たれるのが見えた。
コレを見て笑わずにいられるだろうか？当たると思っていた攻撃にも弱点があったのだ。
もしも今回俺にリンのサポートがあれば、あんな芸当は出来なかった事だろう。
だが、それ以上に彼女のクソ度胸は凄まじいというところが俺のツボにハマったぜ。

『シューター接近、数5』

「チッ、一時後退する」

舌打ちしながらも、アルアッソーとジリーノで牽制しつつ一度後退する。
多分砲撃魔法の最も効きやすいロングレンジに俺を入れる為に接近してくる。

そう考えた俺はまだギリギリ逃げられると判断して、急いで下がり始めた。
ある程度離れたら、ツイングロムでカウンターを仕掛けてやろうと魔力を練る。

『高魔力反応！なのはさん砲撃を使うつもりです！』

だが何時の間にか動きを止めたなのはさんが、シーリングモードのレイジングハートを俺に向けていた。魔法陣からピンクの魔力光が煌めき、力強さが増して行く様な感じであった。
え？もう有効射程なのか？とか思って彼女を見る俺。
・・・ふと目がキラーンと輝いた様に見えた。不味い、マジで発射するつもりだ。

「――！！ツイングロム！！」

どちらにせよ彼女の有効射程だというのなら、すでに俺に避け切れる術は無い。
以前受けた砲撃はアウトレンジからのギリギリ届く程度と言う当たればいいなレベル。
今度のは確実に狙ってくると直感した俺は、避けるよりも“受ける”ことを選択した。
つまり――

「はぁぁぁぁぁぁ――――っ！！！！」

≪ギュォォォォーーーンッ！！！！！！！！≫

――彼女が砲撃を放った瞬間、俺もツイングロムで応戦するという選択だ。

以前よりもかなりレベルアップしたディバインバスター対ツイングロムの激突である。

お互いが放った砲撃が、空でせめぎ合い周辺を吹き飛ばすような衝撃波が放たれた。

「くぅぅぅ」

こちらもカウンターレベルで急いで撃ったとはいえ拮抗するとは・・・。

カートリッジも無しによくもまぁこんなバカ威力を出せるもんだと感心する。

やがて砲撃の魔力流は広がっていき、周辺の残留魔力粒子と反応して発光現象が起きた。

そのオーロラの様な白い光と桜色の光が、俺となのはを包み込むようにドーム状の粒子雲を形成して渦を巻いていた。

だがその拮抗もすぐに終わってしまう。

俺達の出す力が強すぎたのか、中心で拮抗したお互いの砲撃が膨れ上がり爆散したからだった。

これで物理破壊に設定していたら、大空襲よろしく周囲一帯焼け野原だった事だろう。

それだけならよかったのだが、何と彼女の魔法はツイングロムで減衰してはいたが、そのまま此方へと迫って来ていたのだ。

ヴィズが咄嗟に張ったオートガードによってなんとか撃墜は免れたが、その余りの威力にＢＡ？の装甲表面に亀裂が走っていた。おまけに俺の常時発動型希少技能の所為で気持ちが悪い・・・。魔力を吸い過ぎたからだった。

≪――――ゴォォォ・・・――≫

荒れ地にこだました爆発の音が徐々に収まっていく。
そんな中、俺は右手にアルアッソー、左手にジリーノ、両肩にツイングロムを引っ提げ砂埃を睨みつけていた。

「さらに出来るようになったな」

そう声を発すると、土ぼこりが晴れた先にいた彼女も返事を返す。

「うん、でもやっぱりフェン君も凄いの」

そう言ってお互い嬉しくなって微笑んだ。
純粋にお互いに強くなっていることを確認出来たからだ。

「さぁ続きだ続き、魔力の貯蔵は十分か？」

「・・・・それ格好つけてるよ」

「・・・・そうか？」

「そうだよ」

「「・・・・プッ」」

なんだかすっごく楽しい。久々にアドレナリンが出血大サービスだZE☆

見てるかーリトル！今からもっとやってやるからなー！

――――そして、なのはは杖を、俺はアルアッソーを手に再度激突したのだった。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの

まさかの中編2。まだ腰は治ってないけど投稿、結構長めです。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの子は?」

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・
じゃあこの子は?中編2」

――妄想戦記2nd Mission――

――そんな装備で大丈夫か?

――大丈夫だ。問題無い。

俺は得体のしれない男に問われてそう応えた。

そしてそのまま聖王のゆりかごへと吶喊――

「――ハッ・・・・・・なんつーいやな夢だ。金縛りで動けないってのも酷い」

よう皆の衆、調子はどうだい？俺か？俺はまぁ墓地墓地だぜ。もとい、ぼちぼちだぜ。夢見が最悪だったけどな。大体なんだあの夢は？
まるで未来をアンチ・・・じゃなくて暗示している見たいだ。

「・・・すぴー、すぴー」

「すぅ・・・すぅ・・・」

「――って身体が重たいのはお前らの所為か」

どうも俺は地下基地に造った工房の作業台に突っ伏して寝ていたらしいのだが、膝には呑気に涎の池を作っているリトルが、肩には妖精形態になったリンが抱きついて眠っていた。・・・コレじゃ迂闊に起きあがれねぇや。

とりあえずリンを起さない様に肩から降ろして作業台にハンカチを置いてそこに寝かしてやった。問題はリトルの方だが、夜中ずぅーっと膝の上に乗せていた所為か、なんつーか痺れて動かせん。俺はしょうがねぇと苦笑し、作業台の一角の方を見つめて小さく声を

出した。

「・・・おはようさん、調子はどうだい？」

『Ｎｏ，ｐｒｏｂｌｅｍ，（問題ありません）』

俺の言葉に返事を返したのは、なのは嬢のレイジングハートさんであった。何故レイハさんが此処に居るのか？それは昨日の模擬戦の続きから語らなければならない事だろう。俺は昨日起こった出来ごとをなるべく詳細にわたり脳内で思い浮かべてみた。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

模擬戦に入ってから既に４０分が経過していた。

空を染める砲撃の光、爆発によって巻き起こる爆炎の閃光。純粋な魔力による攻撃として設定されている筈なのに、何故か湧きおこる爆発の衝撃波。フェンやなのはの二人から離れたポイントに居るユーノ達の所まで、有視界でも確認出来るほどの光景が繰り広げられていた。

――片やいくつものスフィアを展開しての弾幕による攻撃。
――片や弾幕こそ張らないが非常に重くパワーの乗った砲撃。

弾幕を放っていたのはフェンである。彼の魔法は対軍仕様であり、広範囲に敵を攻撃出来るのだ。
その弾幕の中を翔け、時折砲撃で反撃しているのがなのはだ。彼女はフェンに対抗できるような広範囲攻撃魔法を持ってはいない。だが、彼女が持つ砲撃魔法は全力を出した場合一撃でフェンを落すことが可能な魔法だった。

「信じられない。なのはの砲撃魔法の直撃を避けているなんて・・・」

ユーノからしてみれば、一対一で正攻法な戦い方の最中、見事なタイミングで放たれるなのはの砲撃魔法を、掠ることはあっても決して直撃を喰らっていないフェンに驚いていた。
なのはもアレから鍛錬を重ね、かなりの技術向上を達成していたと彼は理解していた。それ故、フェンと一対一で正面からぶつかり合えば、それなりに勝機はあるかと考えていたのだ。

「それよりも、あの弾幕を回避している方が凄いですぅ」

それに対してリンも内心驚き、そう呟いていた。彼女は闇の書の

闇が変化して生まれたユニゾンデバイスの特性を持つイレギュラーであり、その本体はフェンと常時融合している。

だからこそ、フェンが放つ魔法の数々が例え誘導が出来無くても通常の魔導師には避けることも困難な魔法であることを知っている。しかしソレを防いだり回避できるなのはに彼女は驚いていた。

「・・・ナァ～（リンはおろかカートリッジも使わない。まったくあの子は律儀というかなんというか）」

この模擬戦を見つめるもう一つの視線、ヤマネコモードのリニスは、フェンが“相手に合わせた上での全力”を出していることに少しだけ誇らしい目をしてみていた。

アルアッソーやグロウタスクやジリーノだけでなく、近接兵装オートクレール、更にヴィズ本体に搭載されたカートリッジシステムを使えば、模擬戦はもっと早くに終わっていた事だろう。

術者に負担を強いる代わりに、凄まじい力を瞬間的に持たせることが出来るシステムだが、安全性の面からミッド式魔導師にはあまり知られていないシステムである。初見で使われれば避けることは非常に困難であると言えたし、防ぐことも難しいだろう。

以前のはやて誘拐事件の際には自分を守ることで精いっぱいであった彼女が、騎士たちが使っていたそのシステムに気が付いていたかも疑問である。フェンは律儀にもなのはに合わせてソレらを用いずに模擬戦を続けているのだ。すなわちブーストを使わないＵＳＮ式魔導師としての実力で戦っている事になる。

勿論手を抜いている訳でもないし、妙に頑固な面があるフェンが

こういった場で手を抜くなんて有り得ないということを知っているから、逆に誇らしく感じられたのであった。

「ほわぁ～・・・・」

リトルはリトルで、まるで初めて花火を見た子供の様に目を輝かせながら、無人の世界で繰り広げられる空に咲く華を眺めていた。思わず感嘆の声を出すのは御愛嬌だ。

現在繰り広げられているのは模擬戦である筈なのだが、魔力弾が炸裂し魔力残照が煌めきながら消えていくその光景は、何処か刹那的な美しさを感じさせてくれる。本来のフェンの戦い方からすればお行儀の良いモノであったが、だからこそ彼らが見惚れてしまっていたのも仕方ない事だった。

（・・・チィ、砲撃魔法の余波が強力だ。装甲、耐えきれるか？）

そしてこの模擬戦は拮抗しているように見えて、実はフェンの方が結構押されていた。予想以上になのはの成長が早く、本当に小学生の女子なのかと叫びたい程、その攻撃は的確かつ容赦がないのだ。模擬戦前にユーノの事を良い師だなと彼は評したが、実際はそんなチャチなモンでは無かったのである。

現在彼はユニゾンのサポートもカートリッジシステムによるブーストも使用していない。だが、正直コレが模擬戦で無かったら、思いっきり使用したい気分で内心満たされていた。しかしソレらを使

用すればコレは模擬戦では無くなってしまう為、フェンは現状使える魔法の中から最適な魔法を選択して使用するしか手が無かった。

アレらを使用したら最後。

これは模擬戦では無く“戦闘”という呼称が付いてしまう。

なのでそれを避ける為の措置だった。

『ガルヴァドス残弾０！魔力チャージ開始！』

やがて一時的にフェンの弾幕が途切れる。スフィアに込められた魔力が枯渇し、再装填されるまでのインターバルが発生したからだ。ガルヴァドス・スフィアは一定の魔力を込めて使用される魔法であり、スフィアの魔力が枯渇したら、そのたび充填しなければならなかった。

――――そしてその隙を逃すなのはではない。

「チャンスっ！いって！！」

ガルヴァドスによる途方も無い弾幕が収まった途端、今度はなのはから8つの桜色をした魔力弾が次々射出されていく。不規則で立体的な軌道を描く誘導弾が、何時の間にか空に浮かび上がったフェンへとめがけて流星の様に追尾していく。

彼女が得意とする誘導魔法ディバインシューター、しかも只のディバインシューターでは無く、更に制御力を上げたディバインシューター・フルパワーである。

さっきの誘導魔力弾よりもキレがましている!?なのはの持つ底しれぬ戦闘センスはこの模擬戦の中でも開花したのか?それともさっきは様子見だったか!と、先程よりも多い魔力弾を見て、フェンはそう考えるが、生憎迫りくる誘導弾を前に時間的余裕は無かった。

誘導弾が来るのを確認したフェンは、今この場にとどまることは得策ではないと判断し、ガルヴァドスのスフィアへの魔力充填作業を中断。多重シールドを展開しつつこの場から離脱を図った。しかし誘導弾である8つのシューターは後退したフェンを追尾し、引き離されないよう追いすがる。

「ヴィズっ!」

『ジェットパック最大稼働ッ!』

彼は誘導弾から逃れるため、普段飛行補助に背中に背負っているジェットパックに内蔵された飛行補助の魔力タービンへと瞬間的に

大魔力を送りこんだ。通常の運航では有り得ないほどの魔力を流し込まれたジェットパックに内蔵された小型の魔力推進機は、余剰魔力によって異常発熱を起しながらも、通常では有り得ない速度で魔力残照の雲を吐きだしつつ急加速した。

刹那に鋭利な角をもつ超音速飛行用に張った障壁からベイパーコーンが発生し、大気を揺らす大音量が響く。これは直線状では圧倒的な加速と速度を持つフェンが僅か数秒で音速を突破した為、ソニックブームが発生したからだった。

この直線に限定した爆発的推進力は彼の隠された特技の一つである。

昔から直線でしか飛べなかったが、今では逆にそれを利用して直進に限り通常の魔導師のソレを軽く凌駕していた。大気圏内においても、慣性制御の魔法や空力考慮を前提にした円錐の障壁を用いればごく短時間であるが超々音速を超える事も出来たのである。

とはいえ今回は瞬間的な急加速だった為にすぐに速度は落ちた。回避が主目的だった事もあるし、コレもまた多用すると身体への負担がデカイからだった。だが直線的とはいえ急上昇によって距離をとったお陰で、彼に迫る誘導魔力弾をレールブラスターの術式を展開したアルアッソーで撃ち落とすことは、造作も無いことであった。

彼女が放った足の遅い誘導弾は瞬く間に撃ち落とされた。

だが、それでも追尾は終わらなかった。

『誘導弾多数感知！第2射来ます！』

「手前からマーカー打て、ＨＵＤに表示しろ、迎撃する」

フェンはレアスキルにより魔法を吸い取ることが出来る。しかしリンがいない今、魔力吸収の際の痛みを抑えることは出来ない。それと魔力吸収はあくまで切り札の様な物であり、率先して模擬戦の様な“試合”の中で使うつもりなど彼には毛頭なかった。

アルアッソーから放たれる光弾加速魔法レールブラスターにより加速された魔力弾頭が、迫りくる誘導弾を次々と撃ち落としていく。目視できる誘導魔力弾を撃ち落とすことは、下手な銃よりも初速が上な魔法式レールガンの様なアルアッソーを用いれば造作も無い。

「まだまだいくよ！」

「くっ、うっとしい！」

だが、ディバインシューターは彼女の持つ魔法の中では比較的連射性が高い魔法な為、ドンドン後続の誘導弾が現れキリが無かった。大本である彼女を叩き落とせば誘導弾も来ないのだが、大本である彼女を叩こうとしても件の誘導弾の所為で彼女の元に近寄ることが出来ない。

まるでアクティブな障壁の如く、フェンが突入してきそうなルートに合わせて展開される誘導弾は、通常の魔導師を超える魔法制御力をもつなのはだからこそ扱える芸当だった。いかにフェンのスピードが早くても、高性能な演算機構を持つレイジングハートが予想したデータを知ることが出来るなのはにとって、フェンの速度に対

処する方法はいくらでもある。

そして誘導弾にフェンが対処している間に、なのはは次の手を使う為に彼に察知されないよう密かに移動した。彼女の周辺に漂う残留魔力が彼女の持つレイジングハートの元へと収束していく。それは彼女の十八番である収束砲撃魔法スターライトブレイカーの予兆であった。

だが、非常に高威力の魔法である分、秘匿性は当然のことながら皆無の魔法である。それゆえフェンの様に戦闘に馴れた魔導師には察知されやすい。だが彼女もなんの対応策を考えていない訳ではなかった。何故なら丁度その時、迫りくる誘導弾を全て叩き落としたフェンが突如として空中で停止したのだ。

いや“停止させられた”と言った方が正しい事だろう。相手の動きが早いなら、その動きを阻害もしくは止めれば良いじゃないという考えの下、かつて彼女がフェイトに対して行ったバインドでの拘束をフェンにもつかったのである。

彼の身体を拘束するかのようにフープバインドが発生していた。しかも以前フェンに解除された時間を考慮し、ギリギリまで術式を発動させなかった。誘導弾によって動きを操作し、フェンが回避しそうな位置へと術式を放つという予測射撃の様な高等技術をやってのけたのである。

「――ッ！やっぱり幾つか避けられた！」

『Ｍａｓｔｅｒ，　ｐｌｅａｓｅ　ｃｏｎｃｅｎｔｒａｔｅ』

とはいえ、念のためにいくつも発射したバインドだったが、彼を拘束出来たバインドの数はおよそ3本程度であり、フェンの力を考えるとそれほど長く拘束出来ないことは明白であった。時間との勝負であることを知っているなのはは、今まで誘導弾に割いていたリソースをフェンの拘束と魔力収束へ切り替える。

しかし今まさに発射直前の悪夢の様な収束砲撃を前に、フェンも黙ってはいない。彼の両腕はフープバインド締め上げられ塞がれてしまったが、両肩は拘束されていなかった。その為、先程と同じくツイングロムの砲身を格納領域から出し、両肩に接続して応戦する構えを見せる。

当然バインド破壊を並行して行ってはいるが、逃げられない以上防ぐしか手は無かったのだ。だがフェンの多重シールド、及び多重プロテクションではスターライトブレイカーの収束砲撃を防ぐことは出来ない。十数秒は耐えられるだろうが、その間にバインドを解除できそうに無かったのだ。

だからこの場面で唯一の攻撃回避手段、すなわち砲撃を砲撃で撃ち落とすことを選択したのだ。そして今度の砲撃は、お互いに十分魔力をプールさせたモノ。その威力は計り知れない。

意外とすぐになのはの目の前には、爆発寸前にまで膨れ上がった魔力球が形成された。一方、フェンの方も両肩のツイングロムに環状魔法陣が幾つも現れ、内部で莫大な魔力が収束している。お互い動きを止めての集中により、僅か数秒で発射体勢が整った！

「いけぇぇぇぇぇぇぇ！！！スターライト！ブレイカーーー！！

！」

「――――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

そして桜色の閃光と白色の閃光が荒れ地で吹き荒れる。本日二度目の大魔力同士の激突は、その日最大の魔力爆発と衝撃波を発生させていた。ユーノ達が見守っている辺りにまで影響が現れたのだから、尋常ではないパワーとパワーの激突であった。

しかしその時、ユーノ達の方では彼らが戦っている様子が急に途絶えてしまった事に少しばかり狼狽していた。彼らの戦いを中継していたサーチャーが先の砲撃魔法激突による魔力爆発の影響で吹き飛ばされてしまったのだ。しかし今やサーチャー等無くても、その様子は遠目でも丸わかりであった。

砲撃の閃光は一瞬だけ拮抗を見せたが、すぐにソレは押される事になる。“白色の砲撃”が押され始めたのだ。そして白色の魔力光はフェンの砲撃である。莫大な魔力が込められた収束砲撃魔法スターライトブレイカーの相手は、通常の砲撃魔法よりも高威力のツイングロムであってもカートリッジ無しで防げるものでは無かったのだ。

しかし、ツイングロムを放った意味はあった。一つはスターライトブレイカーの減衰である。かの収束砲撃魔法より劣るとはいえ、それなりの威力を持つ魔法であるツイングロムは確かにスターライトブレイカーの威力を削ぎ落すことに成功していた。

そしてもう一つ、拘束魔法の解除があった。なのはがこの魔法を

放ち凄まじい魔力衝撃波が発生し、只でさえフェンの魔力吸収によって術式維持魔力が吸い取られていたボロボロのバインドでは、その衝撃波に耐えられなかったのである。

とはいえ、状況は好転した訳でも無かった。砲撃魔法使用中の為動くことが出来ないのに、相手の収束砲撃魔法はぐんぐん此方に迫ってくるのである。彼は一瞬カートリッジを使うべきか悩んだが、それはあまりにもチート過ぎるしフェアでは無い。

だが現実的に考えれば、間もなく己は桜色の閃光に包まれてしまう。純粋な魔力攻撃だが痛みもあるしそれなりに衝撃を貰うことだろう。流石にまだ彼はなのはに沈められてしまうつもりは毛頭なかったのだ。

「・・・・ぁぁぁぁぁあああああっ！！！」

――――フェンは更に魔力を込める、更に大きく、更に強くと。

己の持つ魔力はドンドン術式維持と砲撃に持って行かれるが、彼にとっては関係が無かった。強弱は出来ても止めることが出来ない希少技能の所為で、周辺に漂う濃厚な魔力残照を取り込んでしまっていたからである。実を言うと早く排出しないと毛細血管がヤバい事になるのだ。既に口の中に鉄の味が充満し始めていたのだから、彼も必死であった。

この攻防は僅か数秒の出来事だったが、押された筈の白色魔力砲

撃が一時的に持ち直した所で、まるで堰を切ったかのように大爆発が起こり、両者ともその衝撃で吹き飛ばされた。
とくにフェンはバリアアーマーという堅牢な鎧を持っていたが、爆心地に近い位置で衝撃を受けた為、なのはの受けたダメージとどっこいどっこいの状態であった。

魔力残照による煙が辺りを包みこみ、視界を遮り魔力式センサーを無効化し、なのはもフェンもお互いを認識できなくなっていた。
偶然発生した魔法のジャミング場と言っても良いだろう。

「・・・・っ！！」

だが、この攻撃もなのはの方が強力であった。
なんとかツイングロムで減衰出来たが、その際に発生した魔力爆発による衝撃波が彼らを襲い、その時にフェンは自身を縛っていたバインドから解放されたが、同時に彼の杖と言っても差支えない兵装デバイスのアルアッソーを弾き飛ばされてしまっていた。

兵装デバイスが無くても一応魔法の行使は出来るが、補助する為の機構が無い分、威力や弾数が恐ろしく制限されてしまう。誘導操作の様な魔導師の技能を持っていないフェンにとって、魔力弾の威力、弾数の低下はかなりのダメージであると言えた。

爆発と煙に包まれる寸前、フェンの手からアルアッソーが弾き飛ばされるのを見て、なのははフェンの攻撃手段の一つを奪うことに成功したと思った。本当は弾き飛ばされても魔法で手繰り寄せられるのであるが、その間はかなりの隙が生じるのである。その事を理解した彼女はすぐに追い打ちをかけようとマルチタスクを展開し術

式を構築していった。

≪――――ぶわっ≫

だがその時――、漂う煙の中から何かが飛びだしてきた。

「っ！」

驚きで一瞬硬直しかけるが、今までの訓練のお陰か彼女は咄嗟に防御魔法を展開する。これまでの模擬戦による極度の集中力からか、その瞬間世界が全てスローに見えた彼女は見た。

煙の中から飛び出してきたのは、その身にはあまりにも大きな火砲グロウタスクを構えたフェンだったのだ。視界が隠され、武器であるアルアッソーになのはが気を取られた隙をついたのである。

その姿は爆発の余波をもろに受けたからか全身にひび割れている、魔力による疑似物質製の装甲が多く使われていた所為か、例え模擬弾であっても彼のＢＡにダメージが入っていた状態だった。

ゆっくりと流れる時間、彼は煙の中から天地が逆の状態、なのはから見れば逆立ちしている様な体勢で飛び出し、グロウタスクを構

え彼女を狙っていた。交差した時間は一瞬であったがこの瞬間の彼らには1時間にも2時間にも感じられる位のゆっくりとした時間。

≪――ドドドン≫

アルアッソーの回収が間に合わないと判断した彼は、なのはが体勢を立て直す前に煙から飛び出し奇襲した。ライフル状の兵装デバイスの銃口が光り魔力弾が発射される。ソレらはなのはが咄嗟に張った防御魔法に接触した。

（――――！！！）

放たれた魔力弾は3発。最初の魔力弾は霧散した。

防御魔法のプロテクションを大幅に減衰させて。

次弾は減衰したプロテクションに小さな穴をあけて霧散した。

そして最後の魔力弾が寸分たがわぬ軌跡でその小さな穴を突破した。

声を出す暇も無く、彼女は反射的に身をよぎった。明らかに胴体を狙ったソレに彼女は無意識で手に持ったレイジングハートを構えていた。

≪ガンッ！！≫

「――きゃっ！！」

魔力弾はレイジングハートに接触し、今度は彼女の手から魔杖を弾いていた。意図してやったという訳では無く、全くの偶然であったがアルアッソーを落されたことへの仕返しとなっていた。

（レイジングハート！！――――くっ！）

――――だが・・・不屈の精神を持ち、何より負けず嫌いの気があるなのは。

彼女はそのまま右手を砲身に見立てて、今だスローな感覚で進む世界の中、背中を向けているフェンに照準を合わせていた。今までの特訓のお陰か、ある程度はデバイスが無くても魔法行使が可能であった事、それがフェンにとっての不幸であった。

模擬戦とはいえ普段とは違う戦い方。正攻法で戦った疲労感が大きく、またレイジングハートという最大の武器を落したということ、それと直線での加速中は基本的に機動を変更出来ないという厄介な特性を併せ持つこと、さらに彼は色んな意味で運が悪かったという要因が重なったのだ。

（まだ、練習中だけど・・・）

――――なのはは自力で3発の魔力弾を形成していた。

一見すると通常のディバインシューターと似ていたが、それとは少し毛並みが違っていた。見るモノが見れば、ソレは本来レイジングハート・エクセリオンの際に習得したとされるアクセルシューターのソレだということに気が付いた事だろう。

デバイス無しの自力なため3発しか作れなかったが、ディバインバスターの上位魔法と言っても良いソレを彼女はフェンに向けていた。

（これでっ！！――――）

放たれた魔力弾達は空間中で結合し、まるで砲撃の様に背中を曝すフェンへと迫った。速度もディバインシューターのそれとは次元が違うと言っても良く、その半砲撃とも言っても良い魔法はフェンの背中のジェットパックに吸い込まれるかのように命中したのであった。

ジェットパックを貫き、込められた某大な魔力が内部の魔導機へと干渉した結果、ジェットパックが使用出来なくなった。コレが無くても飛べると言えば飛べるフェンだったが、飛行の際は常時ジェットパックを多用していたからか対処が遅れ、そのまま大地へと落下していく。

戦いの最中、いや戦いの中だからこそ彼女は成長を遂げる。

実践から実戦に、実戦は実践に、全ては成長における踏み台でし

か無い。

＊＊＊

フェンはなのはのデバイス無しで放たれた攻撃により、ジェットパックが機能停止を起した為、通常の飛行魔法を使う暇も無く、かなりのスピードで大地にめり込んでしまった。思いっきりやり合うという言葉は嘘でも比喩でも冗談でもない。

お互いに本気でぶつかり合った結果である。勿論フェンはチート関連を使ってはいないが、なのはがこれでカートリッジを持っていたらと思うとゾッとしていた。

『――――上空警戒、マスター！』

「ちぃ！」

さすがのフェンも加速している状態で地面に落下するというのはダメージが大きかったらしい。気絶する事や大怪我は免れたが、衝突の際のショックでまだ足元がふらつくありさまであった。

彼が持っていたグロウタスクは先の攻撃で手放してしまった。残っているのは格納領域のジリーノだけ、彼は飛んでくる射撃魔法を転がって回避し、身体強化を使って飛びあがると瞬時にジリーノを構えた。

「「・・・・・・」」

なのはとフェンはお互いにデバイスを構えて睨みあっていた。彼女は何時の間にか回収したレイジングハートを構えていたが、魔力の使い過ぎで砲撃は使えない位には消耗していた。だが、ソレをフェンに悟られない様に、シーリングモードを展開した状態で構えていた。いわゆるハッタリである。

一方のフェンに残された攻撃手段はジリーノとツイングロムだけで、ジリーノの有効射程からやや離れてしまっているなのはに対して、グロムを撃つ手がある。だが流石にツイングロムを使うにしては距離が短すぎる上、撃つ為に動きを止めた途端に至近距離に攻められたら打つ手なしだ。

両方使う手はあるが、大地に衝突したショックが抜けきっていない中、多大な集中力を使う魔法を複数使うことは難しい。序でに言えば、もしもなのはが無理にでも魔力を絞り出し、砲撃を一発放てばそれで終わる。

お互いにどう動くべきかを考え睨みあう状態、どちらかがアクションを見せればもう片方も動くことだろう。故に動くことが出来ない。

――――となれば、言うことは一つであろう。

「・・・・・なぁ」

「はぁ、はぁ、何？フェン君」

「お互い千日手になりそうだが、どうする？」

「・・・・実を言うと、私もう限界なの」

「俺も時間さえあれば自然回復出来るが、流石にガルヴァドス使い過ぎた・・・」

「・・・・今回は、引き分けにしない？」

「・・・・同意する。もうヤバい」

飽く迄、コレは“模擬戦”である。決してお互いに止めを刺さなければいけない様な“戦闘”では決して無い。序でに言うとこの模擬戦はお互いに非常に満足できる有意義な闘いであったし、コレ以上続けるのは正直疲れるというのもあった。

お互いに引き分けに同意した為、デバイスを降ろして武装解除を行ったのであった。

「成長したな。まじで危なかった」

「えへへ、大分頑張ったから・・・でも勝ちたかったなぁ」

「いや、このままいけば絶対勝てると思うぞ・・・」

全力では無いし、本来の戦い方では無いというのは飽く迄詭弁だろう。戦闘は常に万全の状態で挑めることの方が少ないのだ。そんな中でお互いに本気で模擬戦をしたのだし悔いは無いが、フェンだけは彼女の成長率に内心冷や汗を流している状態であった。

近い未来に同じ様に模擬戦をして、フルボッコされそうなビジョンが浮かんだからなのかは現時点では不明だが、これからも精進を怠らない様に気をつけなければならないと考えたフェンであった。

「俺、落した兵装デバイス取ってくる」

「ふぇ～、私はちょっと休憩」

「ん、座ってれば？」

「ううん、大丈夫。それよりもフェン君の方こそ大丈夫？なんか飛び方フラフラだよ？」

見れば浮かび上がったフェンの飛行が若干安定していない。フェンも忘れていたと言いながら、ヴィズに修理用ナノマシンを使い修復を瞬時に行わせる。魔力さえあれば大抵の損傷を修理できる今となってはＵＳＮの科学技術の遺産とも言うべきソレはすぐさまフェンのＢＡの損傷個所を修復を開始する。そして模擬戦で落っことした装備を拾いに飛んでいったのであった。

模擬戦は引き分けで終わり、フェンは落としてしまった兵装デバイスを回収した。
だが、なのはの元に戻ってくると、彼女が何やらアワアワと右往左往していた。

「――おい、どうした？」

「ふぇ、ふぇんく～ん！レイジングハートがっ」

なにやら涙目のなのはに驚きつつも、見せられたレイジングハートを良く見ると、なんと全体にひび割れが走り、杖の握る部分からポッキリ逝っているという痛ましい姿になってしまっていた。どうやら模擬戦が終わって気を抜いたからか、突然ひび割れが起こり折れてしまったようである。

「ど、どうしようっ！？レイジングハートが壊れちゃったっ？！わ、私の所為かな！？？！」

「いや、まて落ちつけ――コアは生きてるか？」

「あうあうあうあう――――っ！！！」

しかし、コレが先程まで冷徹なほどに容赦のない砲撃魔法を使って来た相手なのだろうか？先程とは打って変わり、もうコレ以上ないほどおろおろしている彼女の戦闘時とのギャップに冷や汗が流れるが、まぁコレも個性だと割り切った。未来のあだ名がアレだしと

いうのもある。

「・・・聞いてねぇな。――――なのは、まずは深呼吸だ。吸って、吐いて」

「う、うん、すぅ、はぁ～～」

「吐いて」

「はぁ～～～・・・」

「吐いて」

「は、はぁ～～・・・～～・・・」

「吐いて」

「はぁあっ！けほけほ――ってコレ以上息吐けないよう！」

「ようやく気が付いたか」

謀ったね！謀ったねフェン君！？と驚愕している彼女を後目に、彼はなのは純粋すぎと考えつつも、何故レイジングハートがこんな状態になってしまったかを思考する。だが、どう考えても――――

（・・・・・俺の所為だよなぁ？やっぱ）

模擬戦の中で模擬弾とはいえかなりの出力で放ったグロウタスク、それと先の砲撃魔法の激突の影響だろうとフェンは思った。らしくも無く熱くなりついつい魔力を込めすぎたか、それとも最後の奴だけ多重弾殻弾にしていたのが悪かったのか・・・ともあれ原因は自分にありそうだと理解した。

「――仕方ない。後でメンテナンスも兼ねて修理するから、レイジングハートを貸してくれ」

「え？メンテナンス？」

「幾ら簡易修理ナノマシンで覆われているって言ってもデバイスは機械だ。人間の手で作られたモンは人間が調整しておかなきゃならん。特に今回みたいな実戦形式の模擬戦の後だとな」

インテリジェントデバイスというのはある種の精密機械である。彼はミッド式デバイスをアースラで幾つか見せてもらったことがあったが、――ありゃＵＳＮ軍で使ったら3日もたねぇだろうなぁ――というのが正直な感想であった。

性能も必要だが何より頑丈であるのが、ＵＳＮ式の特徴でもあり、現存しているＵＳＮ式デバイスの最たるものがヴィズなのである。もっともＵＳＮ式は消費魔力がバカ高い為、一般兵は頑丈さと高機能の両立は難しかったみたいであるが・・・。

ソレはさて置きレイジングハートであるが、一応フェンもメンテナンスなら出来る。つーか自力で材料さえあればデバイスが作れる

フェンにとって、デバイスのメンテナンスくらい朝飯前であった。アースラでこき使われた経験が変な所で生きるものだ。人生に無駄は無い。

とりあえず後でフェンがメンテナンスを請け負うという形で落ちついたので、二人は空を飛んでユーノ達の元へと戻っていった。

さて、ユーノ達の所に戻ると最初に駆けて来たのはリトルだった。彼らの姿を見るや否や誰よりも早く駆けだしたのである。リトルはパタパタといった感じでフェンの元へとニコニコしながら駆け寄ろうと走り――

≪――ばたんっ≫

「「「あっ」」」「にゃっ!?」

『こけましたね』

ソレはもう盛大にパタンという擬音が聞えそうな感じで、何もない場所で足をもつれさせて転んでしまった。最初は転んだ事に驚いて茫然としていたリトルであったが、しまいに痛みが回ってきたのか、いきなり顔をクシャっと歪めるとぽろぽろと涙を流して泣きだしてしまった。

「あぅ、はぅ・・・あ〝ぁ〜〜〜っ！！」

「ちょっとフェン君！リトル君泣き出しちゃったよ！」

「ああ！リトルくんないちゃだめですよぉ！」

「にゃ、にゃ〜・・・（くっ！人型だったならばっ！）」

「ほらフェン、ボサって立ってないであやしてあげなよ」

「お、おう・・・（えと、こういうときは――痛いの痛いの・・・だったか？）」

周りに言われ、フェンは埋没した昔の記憶を思い出す。

昔から軽く転んだ時などに、親に一度は言われたことがあるあの言葉を言うことにした。

とりあえず、彼は転んだリトルに近寄ると抱きかかえて言葉を紡いだ。

目をカッと光らせて、あの魔法の言葉を――

「いたいの、いたいの――――飛んで来い」

≪――――ひゅるるるる！びたーん！！≫

――だが、残念なことに記憶が薄れていた所為か一言違っていた。

「あ、あぅ・・？あふ――」

「ほーら、このまるで高度２０００ｍから落された人間とかよりもずっと痛くない――」

「「・・・・はぁぅ」」

「な、なのはとリンが倒れたー！リトル君も気絶してる！？ていうか何で空から人がぁぁぁぁ！！！」

「にゃーーーー！！！」

「いや、只の幻術魔法なんだが・・・」

ぼそりとフェンは漏らすが、既に収集が付かない程カオスとなっていた。

ちなみに何故こんなことをしたのかと言うと、彼自身混乱していたからである。何気に幼少から軍に居た所為か、フェンは幼児相手のあやし方が判らなかった。彼の弱点は何と泣いている幼児だったのである。

『・・・とりあえず、みんなモチツケ』

ヴィズの呟きは先のショックで気絶したなのはの前で右往左往するユーノの声に遮られて、周りの人間に聞こえることは無かったのであった。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

ほい、そんな訳でレイハさんをお預かりしてメンテナンスしたって訳ですよ。

いやー、それにしても流石は主人公の相棒なだけはある。メンテナンスは必要最低限で済んだから、今日中にレイハさんをなのはに返せることだろう。

「・・・むぅ～」

もぞもぞと俺の膝の上で猫の様に丸くなり動くリトル。しばらく何かを探すかのように手が中空をうごめいていた。少しして、目的の物を見つけたのかソレを手元に引き寄せると、再び笑顔になって寝息を掻き始める。

「・・・・甘ん坊め」

ちなみに目的の物ってのは俺の腕だったりする。なにこの可愛い生きもの？
しっかし重たくて鬱陶しい筈なのに、どういう訳か悪い気がしないんだ。
父性でも目覚めたんかねぇ？

「むー、リトル～とっちゃだめですぅ～」

ウチのお姫さんはお姫さんで、何やら夢の中で取り合いをしているらしい。
全く持って呑気なことだ。――――とりあえず、膝のしびれが限界なんだがどうしよう？

「・・・えぅ、けふ・・けふ」

「ん？・・・風邪でも引いたのか？」

なにやらリトルが小さく咳き込んでいた。
もしも風邪だと不味いから、後でシャマル先生に見せておこう。
そう思った俺はリトルもゆっくりと抱きかかえてベッドへと連れて行くのであった。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの

・・・まだ腰が痛いぜ。
とりあえず痛み止め飲んだら急に妄想を受信、負担にならない程度に椅子に座ってたら何時の間にか書きあげていたという奇跡。

でも話の殆どが魔王様との戦闘。
おかしい、最初はリトルのほのぼの日常を掻き上げる予定だったのに。
・・・どうしてこうなった?

皆さま、腰痛はマジでヤバいです。
ぎっくり腰にはお気をつけて。
ソレでは失礼。

「あれ？ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな？・・・じゃあこの

また、長くなってしまった。申し訳ない。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの子は?後篇1」

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・
じゃあこの子は?後篇1」

――妄想戦記2nd Mission――

さて、レイジングハートはちゃんと修理&メンテを行ってからなのはに返却しました。
一応俺との模擬戦が原因だしねぇ～、キチンと修理しましたよ?
勿論修理だけじゃ飽き足らず構造解析と改z・・・ゲフン、なんでもない。
別に余っていたカートリッジとかその他色々をつけたダケだし問題無いよね?

後で“レイジングハートの形が変わってるんだけど・・・”って電話来たけど・・・。
とりあえず性能は折り紙つきだから問題ねぇよ。きっと、多分。

『――ぴこん。白い悪魔の装備がエクセリオン(仮)に進化しました。これで攻撃力が数倍にアップ。真綿で自分の首を絞めたマスタ

ーの運命やいかに?!』

「ん?なにか言ったかヴィズ?」

『――はへ?あれ?ここは・・・いえ、マスター問題ありません』

??何だか判らんが、何か毒電波でも受信したのかしら??

＊＊＊

此処は八神家リビング。

休日だからかその日は家族全員が集まり、特にする事も無しにリラックスした状態で寝ころんでいた。かく言う俺も適当に本を読んでくつろいでいる訳なんだが――

「ぬくぬく♪」

「なんやリトルくんフェン君に抱っこされて嬉しそうや。甘えんぼさんなんやなぁ」

――相変わらずリトルにスゲェ懐かれて、俺の膝が占領されているんだぜ。

「そんなにフェン君の上は気持ちええのん?」

「うん♪」

「そかそか、なんだかワンちゃん見たいやなぁ～リトルくん」

微笑ましそうに俺の膝の上に乗っているリトルに冗談半分でそう言ったはやて。

だが、リトルは何気にノリがいい子だった。

「わぅ～わんわん♪」

「・・・・しゃれにならへんなソレ」

自分で行った事なのに、自分で否定するのは何事かと思うかもしれない。

だが、リトルの容姿は女の子のソレに近い・・・と言うかモロソレである。

その非常に可愛いらしい彼が、ワンちゃんの真似をしながら首を傾げる仕草を想像してみて欲しい。

「わふ～？」

破壊力は星光の崩壊より絶大である。

少なくても、何処からともなくズキューンという音が響くくらいには・・・。

「シャマル、ヴィータちゃん。手を離してくれないかしら？」

「だめよ。とりあえず止血しないと」

「というか床が汚れてるだろ、アタシ拭くモノ持ってくる」

後リニス、気持ちは解るからとりあえず鼻から溢れ出る忠誠心をなんとかしようぜ？

・・・・ルパン・ダイブを繰り出さないだけましか。

「むむむ」

「どうした烈火の将よ？」

「い、いや、何でも無い」

「ほう、ふふん・・・なるほどねぇ」

「な、なんだ？」

「いやいや、烈火の将のシグナムも中々良い感性をお持ちの様で。（ニヤニヤ）」

「うぐ・・・そ、そんなことは――」

何やらチロチロとシグ姉さんが此方を見ている様な気がするが・・・気の所為か？

後、ザフィーラさん。アンタなに一人だけふらりと逃げだしてるんですか。

こんなときだけ影薄いスキルを発揮しないでくれよ。真面目な話。

『悶えてやがる・・・萌え過ぎたんだ・・・』

「クロトワ風乙」

ヴィズよ、お前はまた・・・・。

だが、ある意味でこの状況を言い現わしているとも言えるな。

ふっ、まさか初っ端からカオスな状況にしてくれるとは・・・リトル、恐ろしい子っ！

「わふわふ♪」

「・・・いっそ、いぬみみでもつくるか」

「フェン君！そっちいったらあかん！」

「はっ！」

――あはは、楽しい我が家。

＊＊＊

さて、軽く混乱（結構ヤバス？）した後、俺は何時ものように地下基地へと降りた。

せっかく錬金魔法という超便利な生産性の高い魔法を習得したのだ。

コレを用いて色々とやりたいと思うのは父上の血かな？

「此処をこうすると――≪どるるるるるるっ≫――はうあ！」

「おおっ！まるでちぇんそーみたいですぅ！」

・・・そして自称俺の子供（勿論俺は認めてない。認めてないんだからな！）であるリトルが、地下基地に造った工房にある部品を使い何やら得体のしれないモノを自作していた。

コレもラーダーの血筋なのか・・・ではなくて――

「お前たち何処から入った？カギはかかっていた筈だ」

「お姉ちゃんに頼んだの」

「あう、えっとそのう・・・リトルに言われて断れなくて・・・」

怒られたと思ったのかシュンとしてしまう二人・・・可愛いな。

ではなく正直ソレは本当に困るぞ。ここは俺の趣味が反映された

工房なのだ。
むしろ工廠とも呼べる此処には子供の手には危険なモノが沢山置いてある。
いや、俺も見た目子供ですけど中身は別だから突っ込みは無しで・・・。

しかし困った。この後シランズと共にドッグの方で色々とやらなければならない。
それにリトルの事も気になるから調べたいと思っていたしな。
流石に本人がいる前で大っぴらに調べられないし・・・そうだ！
閃いたぜ！

「――――と言う訳で、一日預かってはくれないだろうか？」

俺はリトルを連れて地上に戻ってきた。今いるのは八神家リビングである。
休みの為かまだたむろしていた他の方々に協力を要請しに来たのだ。

一応俺が世話役を預かっていたが、ちょっと気になる事もある。

なので、他のヒマしている方々に預かってもらおうと思い立ったのである。

「それは良いんやけど、リトル君は承知しとるん？」

「大丈夫だ。問題無い」

事前に“今日は他の皆と遊んでおいで”と言いくるめてある。
リトルは初対面の頃から言われたことはちゃんと聞いてくれる子だった。
だから、他の面々と一緒に居させても問題無い・・・筈。

「あたしは別に構わないぞ」

「こちらもだ」

「ええと、リトル君はいい子だし私も反対意見は無いわ」

「・・・・・」↑ザッフィー昼寝中。

どうやらヴォルケンズも反対する人はいないらしい。
そう言う訳で彼らに預かってもらい事にした。

「あの～フェンくん、私は？」

「リニスも同じくリトルを見ていて欲しい」

アンタは多分そっちの方が良いだろう。リトルの事可愛がってたしな。

・・・・それに、どんな検査結果が出るか判らないしね。

――――っと、忘れてた。

「リインフォース、ちょっと色々と手伝って欲しい」

口には出さないが、リトルに関する事を検査したい俺としては彼女の力を借りたい。

リンでも、いやさリンの方が検査に向いているだろうが・・。

彼女だとうっかり口を滑らしかねん。見た目もそうだが心が純粋だからな。

リインは俺が言いたいことを俺の目を見ただけで判ったのだろう。

軽くうなずき、はやての方を向いた。

「・・・・ふむ、まぁそろそろお呼びが来るとは思っていた。――主」

「ええよ。いっといで。リトル君は私らが面倒みとくから」

「ありがとうはやて」

いやホント助かったぜ。こういう時家族ってのは良いな。
余計な確執とか考えずに物ごとをゆだねられる。
そんな訳で優しい“家族”達にリトルを委ねた俺は、また地下へと戻った。

――――っと、そうだったそうだった。

「よし、リトルもいないしコレで久方ぶりの薬草煙管を――――」

だが、そう言って懐から取り出したキセルはすぐに取り上げられてしまった。

「・・・・返せリイン」

「ふむ、よくフェンが吸っていたコレに興味があってな・・・なるほど、確かにコレは良い」

見るとリインが勝手に火をつけて、俺のキセルから吸っていた。
おいおい、俺の憩いを返してくれ。

「んでしょ？だから返して」

「しかしフェンの姿ではやはり体裁が悪いな。・・・うん、コレは預かっておこう」

「ちょっ！おまっ」

だが、一緒に来るように頼んだリインフォースに取られてしまった。

ちきしょう、その薬管の薬草を配合してるのは俺なんだぞ。

ちょっとぷくーっと頬を膨らませたら頭撫でられた。

子供扱いするじゃないやい。ぷすー。

＊＊＊

ここは地下基地にあるラボ。最近増設した新施設である。

所せましと並べられた様々な機械。その殆どが型遅れで廃棄世界に捨てられたものだ。

捨てられたものだが、基本的に普通に使う検査機器と変わらなく動作する。

なのでありがたく修理して使わせてもらっている。ちゃんと使えるぜ？

【少佐、準備が出来ましたよ】

ガショガショと足音を響かせてやってきたのはシランズのリーダーであるアイリスだ。
ボタンとはまた別の方面の・・・倫理観等の心理面的マトリクスにおいてシランズのＡＩプログラムの基幹となった子である。
ちなみに性格は至って真面目、大本であるあの機体とは似付かない位性格が違う。
尚、今回は様々な検査や実験の為にシラン達を人手代わりに使っている。
その為実質リーダーであるこの子がいてくれると作業がはかどるぜ。

【いえいえ、私たちシランズは少佐の手足ですから】

「そう言ってくれると助かる。進行状況は？」

【現在、スイセンが中心になって他のシラン達に指示を出して同時に検査を行っています】

リトルには内緒だが、密かに様々なデータを入手している。
あの子は悪い子では無いことは、これまでの事で判ってはいるのだ。
だが、判っているからと言って、ソレが必ずしも危険ではないということにはならない。
・・・・・本当はしたくは無いさ。本当は。

【それとダリアが――【少佐っ、検査が終わりましたわ！】――ってダリア。会話に割り込まないでよ】

見るとアイリスの背後にもう一台シンクタンクがいる。
話し方から考えるとダリアかな？

【いいじゃありません事お姉さま。別に今は軍事行動をしている訳では無くてよ？】

【それでもよ。他の人と会話している時はいきなりわりこまない事がルールなの。第一、貴方が良く言っている“エレガント”だったかしら？それに掛けるわ】

【うっ・・・申し訳ありませんでしたわ。少佐】

「いや、気にしていない。ダリアの言った通り現在は軍事行動中では無いからな」

でもコレで一つ学習出来たなと言うと、ハイと返事を返すダリア。
アイリスはちゃんと“お姉さん”役を務めあげている。
うん、良い傾向だ。

【とにかく、報告を続けます】

「ああ、頼んだ」

アイリスが述べていく報告をマルチタスクでまとめ上げていく。
その時、ふと今リトルは何をしているのだろうと思った。
どうにも老婆心というか父性というか何かが芽生え始めているらしい。悪い気はしない。

ともかく、なんとなく気になった俺はマルチタスクをもう一つ分化させた。
そして密かに周辺をサーチし、リトルが今いる場所を調べると何と基地内に居る。

悪戯心からか、俺はそのまま基地の監視装置とサーチャーとを繋げてみた。
この基地内に居るなら、ソレらの様子は大抵覗く事が出来る。

さてさて、今リトルは何をしているのかな――――

……

……

……

――ケース1・シグナムさんの場合。

監視システムを経由してマルチタスクに映像が入った。
どうやら地下基地の訓練施設の様だ。

「いいか、リトル。お前は曲りなりにもフェンと関係が深そうだ」

これは・・・シグ姉さんか。シグ姉さんがリトルの相手をしてくれている。
しかし、何でまた訓練施設何ぞに・・・ま、まさか――。

「そしてフェンは私の弟子の様なものだ。そう言う訳でココは一つ近接戦の一つも出来なきゃ話しにならん。そう言う訳で、今日は私が直々に伝授してやる」

おぃぃぃぃ！！！シグ姉さん何してんのぉぉぉぉ！！！
そんな幼子に何させようとしてんだよぉぉぉ！

大体アンタ自分は古臭い人間だからって言ってたじゃん！
剣の打ち込みを平気でしてくる人じゃないかぁぁぁ！！
リトル逃げてーーー！！！

「覚悟は良いか？」

「ハイ！」

「よし！いい返事だ！」

・・・って、リトルも普通に応えてるなオイ。
まぁ冷静になって良く見てみたら近くにリニスもいる訳だし。
多分、無茶はしないだろう。正確にはさせないだろう、ウン。

「いいか？まず剣を持つ手はこうだ」

「こう？」

「そう、あ、ぎゅって握るな。力は入れ過ぎてはダメだ。もうちょっとこっち」

「ここ？」

「そうだ。やはりヤツと同じく筋が良い・・・後はこうやって――」

「こう？」

「ああ！振り回すんじゃない！・・・そう、まずはゆっくりと動きを掴め」

「ゆっくり・・・」

「動きが見えてきたら、徐々に早く――そうだ上手いぞ」

どうやら刃を潰した剣を持たせて素振りをさせているらしい。
しかし、子守りをしろと言われて剣の修業させるとかシグ姉さん

らしいわ。
　まぁいきなり模擬戦とか無茶して無さそうだし、俺は作業に戻ることにした。

――――少しして。

「しでん、いっせんっ！」

「ふふん！まさかカートリッジ無しでも習得するとは」

・・・・・・まじで？――――俺、ちょっと目薬探してこよう。

「――ッ！けほけほ」

「む？いかん。無理をさせすぎたか！？」

「・・・しぃ～ぐぅ～なぁ～むぅ～？」

「ひっ！り、リニスいやこれはその」

「もんどうむようよ？」

＊＊＊

――――ケース2・ヴィータ&ザッフィー&リニスの場合。

ちょっとあの子の学習性に驚いて目を離した隙に何時の間にか場所が変わっている。

というかシグ姉さんは何処に行ったんだ？

「さぁお散歩に行きましょう！」

「「「おおー！」」」

今度はリニスとヴィータ姉とザフィーラが一緒で散歩に行くらしい。

やっぱり何か心配なので、量産型シランに光学迷彩をかけて追跡して貰うぜ。

何故光学迷彩で隠すか？・・・見守ってるなんて知られたら恥ずかしいじゃないか。

「あ、ザフィーラは喋っちゃだめよ？」

「・・・・・（しょぼん）」

あ、ザフィーラかあいそう。でも仕方ナイネ。

飽く迄ザフィーラは守護獣、人型モードじゃないと人間扱いはムリだ。

ともあれ、みんなで仲良く外に出かけた彼らだったのだが――――

「リ、ニス・・・・」

「・・・・フェイト」

――――どうしてこうなった？街中を歩いていたらフェイトと遭遇したぞオイ。

「貴方は、今までどこに――」

「プレシアとの契約を終えて、消える筈だったんです。もっとも新しい主が出来たお陰で今は生きていますが――――お久しぶりですフェイト。元気にしていましたか？」

「え？あ・・うん」

さーてさて、いやいずれはフェイトとリニスは会うかもとは思っていたが・・。
なんてタイミングで出会っちゃうかねぇ？何か運命的なモンを感じるぜ。

「ちなみにフェイトはどうしてこの街に？」

「いまお世話になっている人達とこの街に住むことになったんだ」

どうやらその関係で海鳴に来て、なんとなく散歩に出ていたらしい。
へぇ、って事はリンディさん達引っ越してくるって事かいな。
うわぁ、管理局の出先出張所が近所に出来ちまうよ。
俺また何か呼ばれたりしないだろうな？もう雑用はいやだぞ。

「そうですか」

「リニスは誰のお世話に？というか、どうやって」

「ええ～と、それはそのう・・・」

ま、この件はリニスに任せてあるから、俺は静観かな。
あれから結構な時が流れてるお陰か両者とも一応冷静みたいだし。
心の内は判らんが・・・俺が口を挟めるもんでも無い。

俺は飽く迄リニスを偶然助けただけだ。大体こういった問題はデリケートだからな。
下手に口を挟むというのはいただけない。俺はカウンセラーじゃねぇんだから。

「おーい、リニス。そいつは知り合いなのか？」

いきなりの再開で置いてかれていたヴィータ姉が再起動を果たす。
ちなみにザフィーラも口をあんぐりさせていた。

「あ、ヴィータちゃん。ごめんなさい放っておいて」

「いや、別にいいんだけどさ。アタシ等に紹介はしてくれないのか？」

「そう、ね。彼女は私が以前契約していたマスターの娘さんなのよ」

「へぇー。確かフェイトって言ったか？あたしは八神ヴィータ。よろしくな」

一応ヴィータ姉と彼女は初対面だ。一方的に知っているのもおかしな話である。
だが何度かフェイトやなのはについては話したことがあるから、存外に忘れている可能性の方が高いけど。

「うん、よろしく八神さん」

「さんはいらねぇ。ヴィータでいい。そっちの方が呼ばれ慣れてる」

「あ、ごめん。それじゃあ・・・ヴィータ、コレで良い？」

「ああ、問題無い。んで、コイツはザフィーラ。その上に乗ってい
「フェ、フェンっ！？」る――あら？」

と、その時。
リトルを見たフェイトが驚きの声を上げていた。

「こ、こんなにちっちゃくなっちゃってどうしちゃったの！？」

「・・・うにゅ？」

「あー、フェンと知り合いのだったのか・・・なら話は早いな。
あとその子はフェンじゃない。リトルっつー名前がちゃんとつい
てるぞ？」

何やら混乱しているフェイトにヴィータ姉とリニスがカクカクシカジカと説明した。
最初こそ混乱していたフェイトだったが、流石は戦闘魔導師。
思考の切り替えが早いのかすぐに落ち着きを取り戻していた。

「そう、今リニスはフェンの所に」

「まさか貴方がフェンと知り合いだったとは驚きましたよ」

序でにリニスの現主が俺であることもばれた。
まぁ微妙にリニスが誤魔化してくれているから任せておこう。

「でも、本当にフェンにそっくりだね。――今日はリトル君」

そう言ってフェイトはしゃがんで目線をリトルと同じにして挨拶する。
何気に自然と目線を合わせて挨拶出来るなんてスゲェな。
最初大声を出されたのでちょっとビクビクしていたリトル。
だが、このフェイトの態度で安心したのか。

――――――パァッ！

あの無邪気な暖かい笑顔で応えてくれた。ああ、可愛らしいなオイ。
・・・・俺も色んな意味でダメかもしれない。

「・・・・（ひょいっ）」

「ふぇ？」

と、そのときに何故かフェイトがリトルと抱き上げた。
驚いたリトルはキョトンと彼女の腕に抱かれている。
心なしか目が陰になって見えないが、身体強化魔法まで使って一体何を――――

【・・・守る・・・・私は森羅万象有様々な災厄から・・・この子を守って見せるっ！】

「ひうっ！？」

――――今ここに金色夜叉が降臨された。

つーかフェイトお前もか・・・子供好きはリニスからの悪影響か？
いやまぁ、別に子供好きが悪いとは言わない。
だけど、只でさえ紅い目を不気味に光らせて黒いオーラを出すのだけはやめてくれ。

こっちはカメラ越しなのに冷や汗が止まら・・・あ、リトルが震えだした。

そしてフェイトおろおろ――――いや、泣かせたのは誰だーって・・・。

原因は豹変したお前さんだろうに。あ、全員に突っ込まれて凹んだ。

このあとちょっと天然入って変な盛り上がり方をした彼女が落ち着くまでに、一時間以上の時間を要したのは言うまでも無い。

＊＊＊

――――ケース3・リン、シャマル、はやての場合。

どうやら昔話に花を咲かせる気らしいフェイトとリニス。

なので、リニスとフェイトと別れリトルは一度八神家へと帰還する。

彼らが家に戻ってきたので、量産型も帰還させた。

お疲れさん、後で天然オイルを入れておいてやろう。

家に帰ってくるなりヴィータ姉とザッフィーを伴ったリトルは、はやて達の所へと行く。

どうやら焼き菓子等の簡単な料理をするところだったらしい。

「リトル。面白そうだったらはやて達が作るとこ見てきたらどうだ

？」

「うん♪」

好奇心が強い子であるリトルは、お菓子作りにも興味があるようだ。

ヴィータ姉に言われてニコニコと台所へと駆けて行った。

「・・・あたしは出来るまでゲームしてよ。ヒマだし」

・・・・まぁ人それぞれだからいいんじゃね。

ヴィータ姉がテレビの電源を入れているのを後目に、俺は視界を台所に移す。

「ウフフフ。やっぱり良く似合うわ～♪」

「フェンくんはこういうの嫌がって着てくれへんもんな～」

「良く似合っているとおもうですぅ！」

リトルよ。ピンクのエプロンをつけてパァッと顔を綻ばせるのは止めてくれ。

俺とほぼ同じ顔付きでソレやられると洒落にならん。

主に俺のイメージ的な意味で。

しかし、そこはある意味で華やかだった。
シャマル先生が薄緑のエプロン、はやてが紺色のエプロン、リンは空色のエプロン。
そして何故かリトルはピンクなのだ。うさぎさんのアップリケ付きの。
どう考えても手作りです。本当にありがとうございｒｙ

「リトルくんこっちゃおいで～」

「ウン！」

はやてがリトルを手招きして呼んだ。
ふむ、どうやらケーキを作るのを手伝って貰うつもりらしい。
・・・・しかし、リトルはそう言うことが出来るのだろうか？
不安だ。

「今回はパウンドケーキをつくりま～す！」

「お～っ！」

「本当は薄力粉にベーキングパウダーを加えたりするんやけど、メンドイから市販のパウンドケーキの元を代用」

「これ？」

「そう、それや。それに卵を混ぜていくんや。なるべく玉が出来な

い様にキチンと混ぜなあかんよ？」

「は～い！」

――まぜまぜまぜ。

「次は常温に戻したバターを白くなるまで混ぜるんや。それに砂糖を加えて砂糖が解けるまで混ぜる。最終的に二つを合わせて混ぜる」

「混ぜるばっかり」

「ケーキの生地なんて基本そんなもんや。デコレーションは後で出来る。でも此処でキッチリやったかどうかでケーキの美味しさが変わるからキチンとしよな？お姉ちゃんとの約束や」

「うん！」

――まぜまぜまぜまぜ（白くなるまで混ぜる）

「あとは、ナッツだとか。乾燥フルーツとかを混ぜると良いですぅ。序でにブランデーを加えるといい感じですぅ」

「お、リン気が効くな！とりあえずレーズン入れてみよか？」

・・・なんか、楽しそうだな。

「はやてちゃ～ん。オーブンの準備はできたわ」

「後は、焼くだけや」

「「わ～♪」」

「出来上がるまで４～５０分近くかかるから、とりあえず片付けしとこ。お片付けまでが料理や」

「「は～い♪」」

なるほど、お片付けまでが料理・・・・って俺は何を。

き、気が付いたらマルチタスク一つ増やして片手でメモを取っていたぜ。

でもまぁこの後は特に何か起こるって訳でも無さそうだ。

家に居るみたいだしな。そろそろ検査と実験に専念させてもらう事にしよう。

そして俺は映像を切った。

＊＊＊

それから少しして、地下基地にある一室。
俺はリインフォースと対峙していた。

「・・・コレは本当なのか？」

「ああ、管制人格である私がそう結論付けた。間違いは無い」

「そう、か・・・」

俺は手元のレポートを無造作に机に放り投げ、額を隠すように頭に手をやった。
そこに書かれていたのは、リトルに内緒にしてやった様々な検査結果。
そして、ソレによって判った事を統合した“彼の正体”。
なるほど、だから幾多の監視装置を設置したこの基地内に現れた理由も説明が付く。
だが――

「これは、有り得る話なのか？」

「ふん、ソレをお前が言うか？闇の書の闇をプログラムごと取り込み、あまつさえソレを改編、無害なバグとして融合を果たしたお前が」

「そう・・・だな・・・」

「つまりはそう言うことだ。そしてそこに書かれた内容も、全て真実。
――フェン、お前は決めなければならない」

「決める？」

「あの子とどう向き合うかだ。今の所それを知っているのは私たちだけだからな」

「・・・・・・」

「冷たい様だが、アレは私たち――いや現存しているどの魔導師でもムリだ。
それこそ神という存在が本当にいるとすれば、ソレに頼るしかない程に・・・」

「そうか・・・リインこの事はその時が来るまでは秘密で頼む」

「お前が決めたのならそうする事にしよう。だが忘れるな。
我々にはどうする事も出来ない。ソレだけは覚えておけ」

「ああ、判った・・・・・・協力に感謝する」

「・・・あまり思い詰めるなよ？どうしようもないことはこの世界には」

「判ってるさ。俺の出身は何処だと思ってるんだ？」

「それもそうか・・・それじゃあな」

「ああ、また後で」

彼女が部屋を出ていく。俺はそれを見届けた後、イスに深く座りこんだ。

ふと目に付いたペン、それに錬金をかけて簡易煙管を作り上げる。

取り換え用薬草を詰め、火を付けた後煙を肺に入れた。

何時ものと違いフィルターの付いていないそれから苦い煙が出てくるのを感じる。

「・・・世界はこんな事じゃ無かった事ばっかり、か。誰の言葉だったか」

『マスター・・・』

「ヴィズ、さっきの内容は機密事項だ。決して漏らすな。その時が来るまでな」

『Ｙｅｓマスター・・・しかし、一つ聞いても？』

「何だ？」

ああ、煙が苦い・・・それに、何処か胸に滲みる。

『・・・・“その時”が来たら、どうなさるのですか？』

「・・・・・・・・その時は、あの子のそばに居るさ」

『そうですか。申し訳ありません。差し出がましい質問でした』

「いや、問題無い。いずれは判っていた事さ」

・・・・ああ、本当にもう。人生ってのはままならねぇもんだな。

特に、こう、掌の指の間からこぼれおちるかの様なこういったのはなぁ。

虚空に消えていく薬草の煙を見ながら、俺は内心そう漏らしていた。

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの

多分次でこのシリーズ最後。

彼の正体とは何なのか、その時とは何なのか。

全ては次回の妄想次第、ソレでは失礼。

あれ？ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな？・・・じゃあこの子

久々のシリアス。

あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・じゃあこの子は?

「あれ?ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな?・・・
じゃあこの子は?後篇2」

――妄想戦記2nd Mission――

Side三人称

八神家地下基地、ソレはフェンが実益と趣味を両立させて完成させた要塞。
僅か数週間の間にほぼ一人で組み上げ今も改装を続けている。
その地下基地にあるフェンの私室の一つに彼らはいた。
何の飾りっけも無いまっさらな部屋にはベッドが一つあるだけで他には何もない。
文字通り寝るだけの部屋にあるベッドに本来の主ではない者が寝息を立てていた。

「・・・・・・」

静かな、あまりにも静かな寝息。
普段の元気な姿からは想像できない程に弱々しい。
眠っているというよりも昏睡と言った言葉の方が似合う。
静かに仰向けに眠っているその者の隣には見守るかのようにフェンが座っていた。
そう、今彼のベッドで眠っているのはリトルである。

「・・・いるなら気配を出せ」

唐突にフェンは身体をピクリとも動かさずに声を静かに発した。
寝息しか聞こえない部屋だからか、小声だがハッキリと部屋に響く。
傍から見れば誰もいない部屋でいきなり独り言を言ったように見えた。
だがしかし、その部屋にはフェン達以外にもう一人いた。

「――――すまない。気を利かせたつもりだったのだが」

「そうか・・・ならいい」

部屋に降りる沈黙、魔法を解き静かに現れたのはリインフォースだった。
転移魔法か何かは判らないが、フェンが一瞬でも察知出来ない魔法を使ったのだろう。

フェンは彼女には目もくれず、只リトルの方を眺めている。

彼女は何か言いたげだったが、ソレを飲み込んだ。
そしてフェンの隣に立つと、リトルの様子を彼に尋ねた。

「リトルの具合はどんな感じだ？」

「・・・眠っている。ただひたすらに、な」

リトルは静かに胸を上下させて眠っている。
彼女はそれを見て少し表情を曇らせたがすぐに無表情に戻した。

「・・・だがコレは予想されていた事態だ」

「判っている。コレは避けようがない・・・この子の運命だ」

「珍しいな。リアリストのフェンが運命という不確定なモノを口にするか」

「・・・現実的に見てどうしようもない事もある。運命について否定はしない」

それを否定すれば己は此処に居ない事になる。
天文学的な確立を経て今ここに存在している己を否定することは出来ない。
今まさに昏睡状態であるこの子の事も否定してしまいそうだから。

「フェン、判っているとは思うが、」

「ああ、俺は見守る為に居る。ソレだけだ。出来うることはもはや俺達には無い」

「・・・外に主たちが来ている。理由だけは説明してやれ」

「・・・ああ」

フェンは静かにイスを立つと、リインを伴って部屋から出る為に扉に手をかける。

寝息を立てているが予断を許さないリトルを一瞥すると、彼は部屋から出た。

部屋の外にいた八神家の人間達が事情を聞きに彼につめよってくる。

フェンはリインと共に、かなり冷静に何が起こったのかを説明していった。

リトルが倒れたというのに、彼は余り動揺していない様に見える。

何故なら、ソレは彼がこうなることを事前に知り得ていたからだ。

そう、フェンはリトルがいずれはこうなる事を知っていたのである。

その事を理解したのはほんの三日前、リトルを調べた時のことだった。

――三日前・地下基地ラボ

『俺の人間としての部分に集まったデータの集合体？』

『そうだ。かつて闇の書の闇と融合を果たしたお前は徐々に魔法生命体へと造りかえられていると話したことがあったな。お前は既に完全な魔法生命体だ』

『なんと、何時からそうなっていたのか全く気が付いていなかった』

『当たり前だ。ソレは自覚できるような事じゃない。全て無意識下で行われている改編だからな』

『自分では判らないのか？』

『お前が自分の新陳代謝を把握できているのなら判るんじゃないか？――話を戻すぞ？』

『ああ、頼む』

『リトルは・・・あれはその副産物だ』

『副産物？』

『フェンという存在を作り上げる際に発生したバグや屑データの集合体という意味だ。かつての夜天の書に発生した闇と同じ物質を伴ったバグということだ』

『・・・暴走する可能性は？』

『それはない。アレにはそれに至るだけの力が無い。お前が人間であった時の生体部品をベースに闇の書の闇の中で要らなくなったデータが集合した存在だ。精々魔力との親和性が高い程度だ』

『簡単に言えばリンの劣化品の様な存在だというのか？』

『極端な話をすればそうなる。だが、どうあがいてもアレはバグの集合体でしか無い。当然ユニゾン機能は持ち合わせていないし、デバイスというよりかは人間素体の色合いが強い。ある意味でお前と同じ肉体だ。肉親と言うのも間違いではないだろう』

『つまりはアレか？俺の人間として残っていた部分が完全に俺から乖離し、その生体素体をベースに闇の書の闇と融合した際のバグデータが集合して生まれた人間ということか？』

『然り。しかもリインフォースアナザーであるリンの生まれの過程とほぼ同じでもあるから、リトルはリンの弟の様な存在でもある。つまりはリンとお前との合いの子という訳だ』

『・・・なんか合いの子と言われると恥ずかしいな』

『別に二人の愛の子でも構わんぞ？『それはやめろ』・・・どちらにしてもリンとフェンと共通する因子を持った存在だから、ある意味で間違ってはいない・・・まぁ、ソレも一月持てばいい方だが・・・』

『？どういうことだ？』

『アレはリンとほぼ同じ過程で生まれた。だがリンとリトルの間には決定的に違う点がある。前者は比較的新しい生体データを用いて

お前と常時融合する事で融合騎としての存在を確立させた』

『リンは俺と一心同体・・・いやスマン。続けてくれ』

『そしてリトルは完全なるスタンドアローン。劣化した生体素体をベースに集合した只のデータが入り込んだだけの存在・・・リンの様に融合騎になれなかった存在だ』

『それがどうかしたのか？』

『つまり、アレが生きられる時間は殆ど無い。数々の戦いや事件に巻き込まれたお前の肉体がベースとなった。そしてその肉体はとうに限界を迎えている。それに無理矢理に入りこんだデータの集合体。それが何を意味するのかは判るだろう？』

『・・・自壊するのか。小さな器では耐えられないから』

『然り。あの子は人間になり切れず魔法生命体としては基盤が弱い。そして融合騎に至るには融合騎を構成する為のデータが足りない。歪んで生れてしまったソレは、やがては己の存在に耐えられなくなり結合が解かれる。それがこの子が生きるのに与えられた時間だ』

『・・・回避する方法は？魔力で強化するなり、データを改編するなり――』

『ムリだ。データを改編したくても人間としての側面が強すぎる。下手な改編は余計に寿命を縮める。だが逆に魔力で強化したくても、お前の持つ魔力吸収の希少技能が魔力強化した時に過剰反応を起して生体活動を阻害してしまう』

『つまり、下手にリトルに強化とかの魔法を使えば吐血すると？』

『もっとひどい。とても脆く全く膨らむ余地が無い水風船に思いっきり水を入れる様なものだ』

『下手すればその場で破裂か・・・なんてこと』

『リンカーコアも機能を殆ど果たしていない。今現在動き回っているのが不思議なくらいだ。小さな身体に小さな魔力、そしてほんの僅かな時間があの子の全てだ』

『・・・コレは本当なのか？』

『ああ、管制人格である私がそう結論付けた。間違いは無い』

――――そう、つまりはそう言うことだった。

リトルは俺の人間として残っていた部分と闇の書の闇。

そこに残っていた屑データを集合させた“余りもの”として生れ出た存在だった。

フェンにとって必要でないモノが吐き出され、ソレらがより合わさったもの。

当然生命体としても魔法生命体としても不完全な代物である。

もし、後少しだけでも融合騎としてのデータを持ち合わせていれば。

もし、後少しだけでも人間としての俺の素体が丈夫であったなら。
もし、後少しだけでも時間が残されていたならば。

おのずと今眠り続けているリトルの運命は違うモノとなっていた事だろう。
だが、運命と言うのは皮肉なモノだ。

フェンの様に天文学的な確立で安定したのと違いリトルの存在はとても不安定だった。
やがては彼の肉体を構成している魔力素子が乖離し消滅してしまう。

そして、それによって支えられていた肉体も魔力素子の乖離に巻き込まれる。
フェンの持つ魔力素子との親和性、そしてボロボロになった肉体がその乖離現象に巻き込まれてしまうのだ。

つまりリトルは己の意思とは無関係に体内の魔力が薄くなり衰弱していく。
だが彼の貧弱なリンカーコアでは魔力を補充する事は出来ない。
だからと言ってディバイドエナジーなどで魔力を分け与える事も不可能だ。

只でさえリトルの身体は魔力との親和性が高いがもろくなっている肉体。
他の魔導師が彼に魔力を分け与えるという行為。
それは錆ついてボロボロの水道管に高圧力の水流を流す様なものである。

そうなれば、魔力が無い状態よりも酷い事になってしまうのだ。
最終的に彼はは魔力素子の粒子となって肉片一つ残さずに消滅する。
髪の毛一つ、骨一つ残さずこの世から消えてしまう。
なんと理不尽な、なんと可哀そうな子。それがリトルだった。

――――そしてこの日、まさにその兆候が現れた。

本当に突然の事だったのだ。朝起きた後いつものように挨拶をした。
眠たげに眼をこするリトルを連れて洗面台に顔を洗いに行かせた。
何処か寝ぼけた足取りがとても危なっかしかったから、クラリとなった時に支えてやった。

そして倒れかけたその時、唐突にリトルは意識を失った。

口からどす黒い血をこぼしながら。

ほんの一瞬に起こったそれにフェンは何が起きたのか判らなかった。
身体についた生温かい何かを理解したく無かった。
倒れる直前までリトルは何時もの暖かい笑みを湛えていたからだ。
だが只でさえ不安定なリトルがその偽りの安定を崩してしまえば後は坂を転げ落ちるだけ。

ヴィズが騒ぎ出した時、フェンは正気に戻り一瞬回復魔法を使いかけた。
だが、その時リインフォースに言われた言葉が脳裏に浮かんだ。

『とても脆く全く膨らむ余地が無い水風船に思いっきり水を入れる様なものだ』

それを思い出したフェンはハッとして伸ばしかけていた手をおろした。
危なく治癒魔法を苦しそうにしているリトルに使ってしまうところだったのだ。
とにかく下手に魔法を使うことを止めた彼は、服の袖でリトルの口元の血を拭った後、基地内で常に待機しているシランズ達を呼び寄せて治療器具を取って来させたのだ。

だが治療と言っても精々栄養剤や点滴程度しか無い。
リトルを治療できる機材は此処には無く、またその技術も次元世界には存在しない。
何故ならリトルもまたこの世界に生まれ落ちた“たった一つのイレギュラー”だったから。
もしかしたら治療方法は時間をかければ見つけられたかもしれない。

だが、そうするには余りにも・・・余りにもリトルに残された時は少なかった。

仕方なしに応急処置だけを済ませ、彼は自室にリトルを連れて行った。
基地内の医務室でも良かった。だが、フェンはそうしなかった。
こうなってしまったらもう長くは無いということを彼は理解していたからだった。

そしてシランの内の一体に八神家の方に連絡を入れるように指示を出した。
少しすれば上から八神家の面々が降りてくるだろう。
だが、余り騒ぎ立てるのは不味いからと部屋には入れず部屋の前で待たせることにした。
どっちにしろフェンの私室はとても狭い。全員は入れそうもなかったのだ。

その後リインに八神家が集まった事を聞き、八神家に全てを説明した。
フェンとリインの説明を聞き、全員がリトルの運命への理不尽さに怒ってくれた。
だが幾ら怒りを覚えようがどうしようもない事もあるというのも理解していた。
彼女らは苦しそうに眠るリトルの顔を見た後、それぞれ地上へと戻っていった。

フェンとリインの口ぶりで判ってしまったのだ。
リトルはもう長くはないという事を・・・。

それ故、誰が決めた訳でもないが口をつぐみこの場か立ち去ったのだ。

そしてリトルとフェンの二人っきりにしてくれたのである。
最後を看取るのは一番リトルと関係が深いフェンだけだと考えたからだった。

既にリトルが死んでしまうと判って大号泣し、今は泣き疲れて眠ってしまったリンはリニスに連れられて地上へと戻っている。リニスもリニスでリトルの事を大層気にいっていたが、己の主であるフェンの心情を察し、おのずと身を引いた。そして地下基地にはフェンとリトルだけが残ったのだった。

フェンは皆が帰った後、苦しそうに息をしているリトルの看病に専念する。
吐血はもう出て来ないが、それでも息をするのも苦しそうだ。

典型的な魔力欠乏症と、それによる生体維持機能の不調によるものだろう。
生体活動が阻害されチアノーゼを起し青白くなった顔を苦しそうに歪めている。

そして僅か2時間も経たず坂を転げ落ちるように容体が悪化していった。
点滴も痛み止めも投与したが、もはや露ほどの効果も無い。

フェンは只苦しむリトルの手を握っていることくらいしかできない自分を恨んだ。
せめて、せめてこの苦しみだけでもゆるめることは出来ないか？

そう思った時、フェンはあることを思い出した。

かつてＵＳＮ軍に似た際に支給された軍用応急パック。

貧乏性の彼は今だ後生大事にそれを格納領域に入れて持ち歩いていた。

そしてその応急パックの中にはモルヒネに匹敵する麻薬が入っていたのだ。

厳密には違うものだが、痛みを抑えるという点ではかなり強力な薬。

使い過ぎれば廃人となってしまうという劇薬でもあるが、痛みでショック死するよりかはましという判断でＵＳＮの魔導師ならば大抵デバイスに入れて持ち歩いていたソレ。

フェンはベッドに横たわる小さな己を見つめる。

小刻みに胸を上下させ苦しそうに息を吐いているが、その呼吸は弱々しい。

血の気が引き、青ざめるを通り過ぎて白くなった顔はまるで死人の様だ。

本来なら子供にこの薬を使うことはためらわれる。

しかし、だ。リトルはすでに家族と言っても良い。

ある意味で自分と血がつながった兄弟、もしくは親子の様な存在だ。

自分に常に親愛を向けてくれた小さな子が苦しみに悶えている。

劇薬だろうが、何だろうが、少しでも苦しみを和らげるなら――

フェンはギリッと歯をかみしめ、格納領域から応急パックを取り出した。
中にはすぐに使えるように使い捨て無針注射機とセットになった薬。
それを手に取ったフェンは、リトルの首筋に注射器を当てた。

≪――――パシュ≫

「はぁっ、はぁっ、はぁ・・・はぁ・・・・・・」

強力な麻薬は苦しみを和らげる事には成功したらしい。
苦しそうな息は徐々に通常の呼吸音に近づきやがて安定した。

だが飽く迄コレは対症療法でしかなく、痛みを抑えただけで治ってはいない。
しかも麻薬と言うだけあり、強力な分依存性や常習性もあるのだ。
だがその依存性が発揮されるまでリトルの生命が続けばの話である。

「・・・・」

フェンはリトルの頬に掛かってしまっている髪をどけてやる。
長く艶やかな黒髪は自分と同じ様な髪質である。ソレもそうだ。
リトルと己はほぼ同じ存在なのだから似ていて当たり前なのであ

る。
フェンはソッとリトルの頬に触れた。
徐々に生きる力が失われているのだろう。
リトルの身体に籠っている筈の体温はとても低くなっていた。
何時の間にか現れ、己に異様に懐いた良く解らない幼子（おさなご）。
それがリトルへの認識の筈だった。
なのに気が付けば何時の間にかその関係が当たり前になっていた。
そうなれば、彼がリトルを家族と認識するのは時間の問題だった。
そして今まさに新たに出来た家族が失われてしまう。
そのことに、フェンは肩を震わせていた。
「・・・・〜〜〜う、ん・・・」
その時、ずっと昏睡状態であったリトルが目を覚ました。
理由は判らないが、もしかしたら薬のお陰で苦痛が薄れたからかもしれない。
だが薬を使ったからか何処か朦朧としているようだった。
リトルはゆっくり起き上がると、部屋の中を見回している。
どうしてベッドに寝かされているのかリトルは理解していないようだ。
彼はフェンが自分の近くに居ると気が付くと、ふにゃっと顔を緩めた。

「あ、お父さん・・・おは、よ――――」

「――っ！リトルっ！」

その時グラリと気が抜けたかのように倒れそうになるリトルの肩をフェンは掴む。

少々力を込めすぎたのだろうか、リトルの顔が泣きそうな色を浮かべてしまった。

「・・・えぅ、ひっく。ひっく」

「あ、す、すまん。痛かったか？」

手の力を緩めて壊れ物を扱う手つきでリトルを支えるフェン。

おろおろと強く握ってしまったであろう肩を優しく撫でているが泣きやまない。

リトルは嗚咽を漏らしながら、とぎれとぎれ言葉を発した

「えぅ・・・だめぇ、おとうさん、・・・泣いたら、だめぇ～・・・」

「――っ」

フェンは思わずギュッとリトルを抱きしめていた。

なんでこの子は自分の事じゃなくて周りの事ばかりっ。
それが余りにも不憫で、どうする事も出来ない自分が悔しくて。

気が付けばソレが表情に表れていたのだろう。
泣いてはいないが、今にも泣きそう。そんな顔をしていた。

「ひっく、ないたら・・・だめぇ・・・」

「・・・泣いてないよ」

「えぅっ・・・ほんとう?」

「ああ、俺は強いからな。あの模擬戦でたたき落とされても泣いて無かっただろう?」

嘘、本当は大声で泣き出したい。
また家族を失う苦しみを味会わねばならないから。

だけど、いまこの子を不安にさせたくない。
彼は無表情に近い己の顔を少しだけ歪め、精一杯笑みを作ろうとする。
傍から見れば無理矢理の笑み、だが彼にすれば精一杯の笑顔。

それを見て安心したのか、リトルはいつものようにニコッと笑う。
だが離れたくないからかリトルはその小さな手でフェンの服をギュッと握っていた。

「寒くないか？」

「うん、だいじょうぶ・・・でもねむたいの・・・こわいの・・・」

「こわい？」

「ねむったら、もう・・・おきれなくなるのが、わかるの・・・」

「リトル・・・ッ。ほらこっちへおいで」

「・・・うん♪」

フェンはリトルをそばに寄せ抱きしめながら一緒にベッドに入りこんだ。

元々一人用のシングルだが、お互い身体は子供サイズだから問題無い。

だが、フェンはリトルの身体が既に冷え初めている事を肌で感じていた。

それはもう時が近い事を否応も無しにフェンに告げている。

彼は少しでもリトルが寒くならない様に強く抱きしめた。

「大丈夫、・・・お父さんは強いからな。だから安心して眠ると良い」

「う・・・ん・・・おやすみおとうさん・・・」

「ああ――おやすみ」

どんどん消失していく体温、まるで生命の火が消えていく感覚。
ああ、また、また生命が一つ、己の目の前で消えてしまう。
フェンは精いっぱい笑顔を向けたままリトルを抱きしめた。
願わくば己の生命を分けられるなら分けてやりたかった。

――――だけどソレは叶わぬ夢なのだ。

このどう仕様も無い程の理不尽と、ソレに抗えない己に呪詛を吐いた。
だが彼の中にある訓練で培った冷静な部分が諦めろと囁きかけてくる。
その言霊に惑わされない様に、彼は思考を自ら鈍らせた。

「いずれ・・・いずれまた会える。だからまた会おうな」

「・・・・・・ん、またね・・・・・・・」

「リトル・・・リトル？・・・眠ったのか？」

それはまるで眠ったかのようで。
だが聞こえていた筈の小さな寝息は――――もう聞こえない。

「――そう、か・・・」

彼はベッドから出るとリトルの頭を抱きかかえ膝に乗せた。
もうリトルは身じろぎ一つしない、体温も全く感じられなかった。
生命が消え去った後の躯。今まで幾度となく知ってしまったその感じ。

「・・・軽いなぁ。俺よりも小さいんだもんなぁ」

やがてリトルの躯から魔力の乖離がはじまり、リトルの身体が燐光を発した。
ソレはまるで運命がこの幼子の痕跡を残そうとはさせまいと、全てを持って行こうとしている様に感じられた。
思わず虚空へと消えていく燐光へ手を伸ばすが、実体のないソレを掴める訳が無い。

「なぁ・・・そのままでいいから聞いてくれ・・・」

フェンは消えていくリトルの頭に手を置き、まだ柔らかな髪を撫でる。

「お前といた時間、とっても楽しかった。暖かかった」

ポゥっとホタルの光のような燐光が風に揺らされるかのように漂い始めた。
少しずつ、少しずつ、リトルの身体が薄くなっていく。

「お前がどんな存在だったか判っていた。でもな?常に笑顔を俺達に向けてくれたお前は・・・」

フェンは目から零れ落ちそうになる水をこぼさぬように天井を向き言葉を続けた。

「・・・間違いなく、俺達の家族だった」

その言葉を言い切った途端、フッという感じと共にフェンの膝の上から重みが消えた。

「なぁ、聞いてるか?もしもう一回生れてくる事があったら必ず俺の所に来いよ」

部屋の中に淡い光が漂い、煙の様に薄くなって消えていく。

「・・・それじゃあ、また、な」

そして、フェンの部屋の中から光りが消えた。
その幻想的な光景は、まるでおとぎ話の中に居たのではないかと錯覚させられる。

だがフェンのベッドの上にはリトルの寝巻だけが残されていた。
フェンはそれをギュッと掴んだ。

「嘘でも幻でもない。お前は確かに存在したよ・・・リトル」

それはリトルがこの世界に生きていた証し。
夢や幻想では無い、現(うつつ)の中に確かに存在していた小さな命だった。
そして僅かに与えられた時間を使い果たしリトルは魔力に還っのだ。

「・・・・・・・」

リトルが逝った事を、他の家族にも説明しなければならない。
しばらく動かなかったが、フェンはゆっくり起き上がるとドアに手をかけた。
部屋から出る時、彼は一瞬振り返り部屋を見渡した。
幽霊でもいいからリトルは見えないだろうか?そう思ったのかもしれない。

だが、すぐに頭を振ると部屋から出る為ドアを開ける。
リトルは未練なく逝ったのだ。幽霊として残っていたなんて悲しい。
内心に感じる悲しみを抑え込みつつ、彼は部屋を後にした。

――――そしてその夜、八神家から微かな嗚咽が途絶えることはなか

った。

＊＊＊

リトルが魔力に帰ってから一晩明けた次の日。
何処かドンヨリとした空気が八神家に漂っていた。
近しい者が消え去るというのは、親しかった人間に少なからずショックを与える。
八神家もその例外に問わず、皆がリトルの死を悲しんでいた。

とはいえ、悲しみに暮れる訳にもいかない。死者は葬ってやるのが礼儀だ。
そう言いだしたのは、本来一番悲しむ筈のフェンであった。
相変わらずの無表情で彼は一人黙々とリトルの遺品を整理していった。
遺品と言っても服のお古や生活雑貨しか残っていない。

彼は無造作に段ボールに詰め込み、ガムテープで封印するかのように閉じてしまう。
涙一つこぼさずに黙々と遺品整理をしていくフェンを見て、はやて達はフェンのその痛ましい行動に何処か悲しさを感じていた。

一見するとリトルの死に対して何も感じていないかのように見えるその行動。
だが、明らかに何か他の事をして気を紛らわせようとしているのは明白であった。

その証拠に彼はその日、普段は休憩の時にしか吸わない薬草煙管をずっと吸い続けている。
しかもその眼もとには隈が出来ており、明らかに昨日から眠っていないのだろう。

そして彼はリトルの遺品を集めると、それをパッキングして次元空間へ投棄した。
本当なら葬式でもしてやりたいところであるが、生憎とここには坊主も司祭もいない。
しかもリトルには戸籍も無ければ保険証も無いのだ。
近くの寺からお坊さんを呼ぶ訳にもいかなかったのである。

仕方なしに彼らはリトルの遺品を集め、昔ミッドではやったという次元葬を行ったのである。地球で言う所の宇宙葬の様なソレをもってして、リトルへの弔いに宛てたのだった。

「・・・・・・」

「ん？どうしたんフェンくん。眠れへんのか？」

そして次元葬を行って数日後の夜。八神家の台所にフェンは来ていた。
別になんてことは無い、なんとなく寝付けなかっただけである。

彼は戦場で味方が死んだりすることには慣れているつもりであった。

だが彼は家族が自分の目の前で息を引き取る事には耐性が殆ど無かったのだ。

父上母上の場合は違う世界で己が見ていないところで死んだのだし仕方ない事なのだろう。

はやてははやてでふと咽が乾き台所に居ただけである。

「ああ、はやては？」

「私も似た様なもんや。ホットミルクでも飲むか？眠れん時にはちょうどええよ？」

「もらう」

フェンの返答にそかと応えた彼女は、マグに牛乳を注ぐと電子レンジに入れた。

しばらく沈黙が流れる。

「ほい、あついから気ぃつけてな」

「・・・」

黙ってマグカップを受け取るとそれを少し口に含む。

暖かな何かが身体に滲みこんでいく様な感覚・・・。

「なぁ」

「なんや？」

「リトルに、もっと構ってやれば良かった」

「・・・そやな」

フェンの唐突な独白、突然のそれにはやては驚くが黙って聞くことにした。

確かにフェンは強い。魔導師と言う意味でも魔法生命体と言う意味でも。

だが、強い＝平気という訳ではないのだ。

心は人である以上、幾ら強がろうとも限界はある。

フェンとて同じ、例え外面は強いとしてもやはり何処か弱気になる事もある。

だからはやては黙って彼の言葉を聞いた。

ただ聞いてくれる人がいる。ソレだけでも人は救われる事もあるのだから。

「もっと遊びに行かせてやれば良かったかなぁ」

「かもしれへんな」

「もっと美味しいモン食わせてやれば良かったかなぁ」

「そうやろうなぁ」

「もっと、もっといろんな所を見せて回っても・・・良かったよなぁ」

「・・・フェンくん？」

ふと様子がおかしいフェンの方を向くはやて。

相変わらずの無表情、なのに何処か我慢をしているかの様な違和感。

だが原因が分からない彼女はとりあえず聞き手に回るしか無かった。

「・・・アイツ、消える直前に泣いたらダメって言っててさ」

「だから、なのかなぁ。また泣けなくなっちまった」

「フェンくん・・・」

まったく、相変わらずチグハグな子や。はやてはそう思った。

普段は大人びたという感じのフェンが弱気な言葉を口にしている。

まるで道を見失った子供みたいである。事実子供だが。

普段の彼とは考えつかない程弱々しい姿は痛々しくもあり、だが何処か喜ばしく思えてしまった。弱みを見せるという行為は完全に信用されたという証しでもある。勿論普段から家族と言ってやまな

いが、それでもリトルが消え去った直後で不謹慎ではあるが彼女はそう思った。

「どうすりゃ、良いんだろうなぁ？」

「う～ん、そうやねぇ・・・ちょっとこっちおいでフェンくん」

「？・・・判った」

てくてくと机を挟んで反対側にいるはやてに向かって歩いてくるフェン。

彼女はフェンが自分の手が届くところに来ると――

「とりゃ」

「うわっと・・・なにするだ」

「美少女はやてちゃんの膝を貸してあげとるんや♪」

――フェンを膝の上に抱き上げた、逃げられない様に腹に手を回して。

「・・・そう言えば以前もこんな風に抱き上げれらたっけな」

「うん、そやな。なんというか意外とフェンくんって小柄やし、抱

きかかえるのにちょうどええ」

「・・・抱き枕は簡便な」

「ええ～、それ結構いい案やと思うんやけどなぁ」

軽口をたたきながらはやてはフェンをギュッと抱きしめる。
お互いの体温が感じられる、生きているということを感じられる距離。
しばらく彼女にされるがままになっていたフェンだったが、少しして「なぁっ」とはやてに声をかける。

「ん?どないしたん?」

「すこしだけ・・・すこしだけ、このままでお願い・・・」

「?わかった」

いわれるがままに抱きしめるはやてだったが、少ししてフェンの身体が震えている事に気が付いた。すぐに何なのか気が付いたはやては、彼を抱きしめる腕の力をもっと強くする。

「・・・そうやなぁ、フェンくんはこうしいひんと泣けへんもんなぁ。
ええよ。泣いとき。今はもう皆寝てるから、大丈夫や」

「・・・・」

抱きしめたからかフェンの震えは収まっていく。
だが少しして彼から小さな嗚咽が聞こえ始めた。

「・・・ごめんなぁ」

ぽたぽたと何かが落ちる音が台所にこだまする。
それはフェンの頬を伝い落ちた大粒の涙だった。
今まで泣けなかった分が今になってようやく堰を切ったように溢れだしたのだ。

「ごめんなぁ・・・どうする事も出来無くて・・・ごめんなぁ・・・
不甲斐ない親で・・・ごめんなぁ・・・もっと、色々したかったよなぁ・・・ごめんなぁ・・・」

「・・・私らもフェンくんの事、ちゃんと判っとるよ。だから今だけは・・・」

「ごめんなぁ・・・ごめんなぁ・・・」

「今だけは、私の腕を貸すから、泣いときな・・・」

――――ソレはよくある話。

気が付けば知らない人間が自分の大事な人になっていた。
だからこそ、別れを迎えた時に悲しみが訪れる。

最初こそ、リトルの事は何とも思ってはいなかったフェン。
でも彼と過ごした時間は、確かにフェンとの絆を持つのには十分すぎる時間だった。

そしてリトルが消えたその時、彼は大事な家族をまた失ったという事に気が付いた。
だから、フェンは涙を流す。別れは辛く苦しい。

でもだからと言って歩みを止める訳にはいかない。
また歩み続ける為に、彼は今だけ悲しみに暮れている。

悔しさと後悔で顔をクシャクシャにしているフェンをはやては抱きしめ続けた。
彼が年相応に泣き、それで疲れて眠ってしまうまで、はやてはフェンの背中をさすり続けたのであった。

あれ？ドッペルゲンガーって自分とおなじ姿と年齢だよな？・・・じゃあこの子

リトルくんはフェンの余りで作られた存在でした。
微妙にポータブルのマテリアル達と似ているようでちょっと違うを
目指しました。
次回からまたノーマルな日々に戻ります。
ソレでは失礼。

「悲しんでばかりもいられない。それも人生」（前書き）

冒険も戦闘もないグダグダ日常編。

「悲しんでばかりもいられない。それも人生」

「悲しんでばかりもいられない。それも人生」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

さて、リトルが逝ってしまってから少しだけ日が経った。

相変わらずまだ少し引き摺っているが、沢山泣いたからか思っていたほどでは無い。

まぁあの日の朝起きたら、ヴィータ姉とはやてと一緒のベッドだった事には赤面したけどな。

どうも泣いた後に気を失ったらしくて・・・お恥ずかしい限りですハイ。

「ナァ～ン」

「ああ、猫さま・・・癒されるぅ・・・」

もう１２月に入った外は、いつ雪が降ってもおかしくは無い季節。

寒々とした空気が逆に心地よいと感じられる外に俺は出ていた。

というか庭だ。八神家の庭に集まってくる動物たちを愛でる為だ。

気が付けばご近所の動物が集まるようになってしまっている八神家。

この分ではこの家がヌコ屋敷と呼ばれる日もそう遠くは無い筈である。

・・・まぁ大抵ネコ屋敷という呼称は動物が沢山いる所為で糞害などが起きて、ソレにキレた近隣の住民がつける侮蔑用語みたいなもんだから、色々と気をつけねばなるまいて・・・。

しっかし色々と集まる様になったなぁ。庭が動物で一杯だ。

犬だろう？猫だろう？ハトにカラスにコイツはオウムか？何処かから逃げた奴か？

あと猿に鹿に豚に羊に仔山羊に仔馬に仔牛に小熊？！此処はＤｒ．ドリトルの家か！

犬猫鳥はまだいいとして、どうやって何時も見つからずに此処に来てるんだろうか？

というか一般家庭の庭程度の広さに庭に何故収まるんだ？ほんまミステリーやで。

コレはきっと深く考えてはいけないんだ。常識に囚われてはいけな

いのですね！

「なぉ～ん！」

「ｏｋ、判っているお猫様。ブラッシングの時間だな？」

「なぁ～ん♪」

そうココは海鳴市だ。

戦闘民族高町が居て、高ランク魔導師やらが色々と事件を起こして。

異世界人が単身で大気圏突入をしたりする街。

一々気にしていては身が持たないのだから色々とスルーだスルー。

・・・決して現実から逃げている訳ではない。

『戦わなきゃ現実と！』

「うるさいだまれヴィズ」

『しどい！・・・噛みまみた』

「デバイスが噛むって・・・口無いだろうに」

まぁ実際はこの家には認識阻害系の結界が常時張られている所為だ。
結局色々あったから結界を解除せずにそのままだからな。
周りの住人達もよっぽどの事が無い限り気が付かないクラスの結界だ。
動物が集まっている程度じゃ誰も気にしないって訳だぜ。

――そしてしばらくまだ少しは暖かい日差しの中でボーっとしていると・・・。

『ソレは兎も角として――マスター、シランズから次元間通信です』

――ぴく。

「判った・・・はいちょっとどいてね」

「にぃ・・・」

ああ、そんな今にも捨てられるかのように悲しそうに見ないで・・・

。

と言うか、貴方は他人のお家の飼いネコだからね？毛色が銀のチンチラさんよ。

名残惜しそうに膝から降りたチンチラさんを見送りつつシラン達と通信を繋げた。

｛俺だ。どうしたスイセン。何かあったのか？｝

｛休憩中の所申し訳ありません少佐。実は――｝

さて、何故シランズが次元間通信を用いているのか？

理由は彼らが現在違う次元世界に渡っているからである。

経験値を求めて出歩きたいと申した為、違う世界に送って実地研修中なのだ。

それにシランズ達はある意味で俺の手足の様な存在である。

見えないところでサポートをこなしてくれるように最近なってきたのは地味に嬉しい。

そして今回は廃棄世界にシラン達を送りこんで資源採掘をまかせていたのだが・・。

〜工作用のプラズマカッターやショックガンでは無理でしたので、デモリッションガンを用いて氷塊を破砕した所、氷塊の中からこのようなモノが・・・〜

スイセンが映像を送ってくる。周辺が薄暗いからか映像が若干暗い。

だが、そこに映し出されている光景に俺は息をのんでいた。

ライトアップされた巨大な氷塊と思わしきモノが映っていたのである。

その氷塊にスイセン指揮下の量産型が何体か取りついて作業を行っている。

ちなみにこのシランズ指揮下の量産型達にはそれぞれシランズの名前に由来したエンブレムが付けられ、何処の所属か見れば判るようになっているのだ。

そして、よく見るとその量産型達が取りついている氷塊は一部分が壊れている。

その中には明らかに氷では無い、金属で出来た何かが映り込んでいるのが見えた。

周辺が暗いのは夜なのかはたまた何処かの中なのか・・・一体どこで作業していればこんなもん見つけるんだ?

〜コイツはまた大モノだな・・・中は調べられそうか?あと現在位

置は？〕

〔いま量産型達がレーザートーチで外壁に穴をあけている最中です。予想では本日一杯は掛かるかと思われます。現在位置は表層から２００ｍの地点です。センサーによればまだまだ下に行けます〕

どうやら廃棄惑星の地下にまで降りているようだった。

どうしてそんなところにシラン達が居るのかと言うと、スイセンと現在一緒に行動しているボタンがクレバスに引っ掛かりそうになったからしい。

好奇心が非常に強いというＡＩ特性を持つボタンは色んなモノが落ちている廃棄世界に興奮して走り回り、危うくクレバスに落下して大破するところだったんだそうな。

んで、救出の為に降りて行ったら大きな金属反応を見つけてこうなったと。

〔そう言えば、ボタンはどうした？〕

〔お仕置きした後、作業の方に回ってもらっています〕

〔おいおい、修理するのは俺なんだが？〕

〔ですが規律は重要なことです。まぁコレで懲りたとは思えないのが心苦しいのですが〕

見ると量産型に混じってややボロボロの機体が作業に回っている。

ボタン、お前にも学習機能が付いているから、ソレで成長してくれよ。

主に俺の修理の手間的な意味で・・・オートメンテナンスシステム作ろうかな？

ちなみに何だが廃棄世界は雪が良く降る為、ソレが積み重なって地層の様になっていくらしい。

地表には比較的新しいゴミや廃棄物が凍りついているが、数十年後には雪によって覆われて氷の下に安置される事になるのだ。

また雪が降る時期はほぼ一定なので、雪の層を調べればどれくらい前に埋もれたモノなのかが判るのである。

ある意味で地層の様なものであろう。そう思うとまるで化石を発掘している気分だな。

｛判った。ボタンの事はそれでいい。まぁほどほどにな。あと多分お前たちが見つけたそれは何かの試験機である可能性が高いから十分気をつけて調べてみてくれ｝

｛判りました。なるべく今の状態で保存しつつ作業を行います｝

｛そうしてくれ。それとそう言った類のモノは熱線や銃の弾がお嫌いな事が多いから十分に慎重に、な｝

〜了解、各機にデモリッションガン等の使用を抑える様に指示を出します。それでは通信終わります〜

いやはや、廃棄世界ってのは何でも捨てられてるとは思ってはいたが・・・。

『マスター、あれってフネですか？』

「・・・多分次元航行艦じゃないか？ただ年代的には旧暦か先史時代のモノだろうけど」

まさか先史時代のモノと思われるモノが出てくるとはねぇ。

ある意味で魔導考古学会に発表したら博士号貰えそうな発見だな。

そう、シラン達が送ってきたデータに映し出されていたのは、恐らくはフネと思われる構造体だった。

ただ管理局が持つＬ級艦船、この場合はアースラと言った方が判りやすいか？

あれよりも形状が非常にシンプルであり、アースラがＵの字磁石型だとしたらコレはボールペンか？ロケット型とも呼べるかもしれない。

とはいえ、こりから覗く本の一部分じゃ何が何だかは正確には判ら

ないけどな。

もう少し発掘が進めばどんなものなのかがはっきりと判る事であろう。

というか多分試験艦か何かなんだろうなぁ。こんな世界に落ちていたんだし。

だが詳しい事は調べてみなければわからないが、コレはお宝を発掘したかもしれない。

『しっかし、色々と見つかりますねぇ』

「ああいった生物がいなくて、何を捨てても許される世界ってのは少ないらしいからな」

『そうなんですか？数ある次元世界には一杯ありそうな気もしますけど』

「いわば先駆者ってヤツか？最初は一人だけが捨てて行った。後から来た連中も捨てていった。そしてゴミを見てそいつらが捨てて行ったなら俺達も捨ててしまおう。つまりはそう言うことだ。無限ループって怖くね？」

『ああ、なるほど。見つかった当初からゴミだらけだったんですね？あの世界』

「見つけたは良いが人が長い事活動できる世界では無いからな。調査も出来ずほぼ丸投げにされたという話だ。利用できる資源が何も

ない無人の世界に行きたがるヤツは少ない」

『ウチを除いてってことですね』

「そう言うことだ。それにあの世界の地層の殆どはゴミが堆積したそれだ。恐らく先史時代かそれより以前からゴミ捨て場であった可能性もある」

『塵も積もればなんとやらとはこのことかっ』

「情報があればソレは噂として一般に流れる。別に情報統制されていた訳でも無い。となれば・・・ソレに目を付ける業者や企業が居てもおかしくは無い」

『そのお陰で此方の懐が潤う訳ですから、なんとなく複雑ですけどね』

ま、そりゃそうだな。でもそのお陰で本当に色々と手に入った。

特に凄いのは地表で見つけたナノクラスで構成されている金属製の人工筋肉。

試作モデルだったみたいだが、そんなもんまで捨ててあったんだぜ？

ある意味で軍需技術の最先端まで捨ててあるんだもんなぁ。

お陰でまたＢＡが強化できそうだから、俺としてはありがたい限りだけど。

「さて、と。やりますか」

そして俺は・・・ブラシを手に取った。途端隊列を組んで一列に並ぶ動物たち。

信じられるか？コレ別に誰かが教えた訳じゃないんだぜ？

何やら色々と報告が来ていたが、今の俺の中の優先事項はこっちなのだ。

さぁブラッシングというスキンシップでモフモフさせてもらお～っと。

「行くぞ動物たち、ノミの準備は万端か？」

いや、ホントに居たら困るんだがね。手間的な意味で。

ちなみにノミ取りに必要なのはステンレス製の櫛と洗剤の入った水だ。

櫛でノミを取り、ソレを潰さない様に洗剤入りの水で溺死させる。

潰すとな？卵が飛ぶんだヨ・・・ノミって・・・。

……

……

……

さて、動物たちとの触れ合いによってアニマルセラピー的な効果を得た。

お陰で気力がなんとなく＋２０された。やはりモフモフとした毛皮は最高だと思う。

ちなみに俺は肉球も大好きで耳や尻尾、翼やくちばしでもＯＫだ。なにがＯＫ　かは聞くなよ？

ソレはさて置き、何気にザフィーラとかの毛皮もいい感じにモフモフしてるんだよなぁ。

一家に一匹ザフィーラ推奨きゃんぺーん実施中！なんつって。

さて、そんな感じで久々の動物との憩いの時間を楽しんだ後、俺は友人で魔導師仲間であるなのはの両親が経営している翠屋に来ていた。

別に特別な理由がある訳じゃない。只単にスィーツが食いたくなったダケだ。

俺は甘党とか言う訳じゃないんだが、偶に食べたくなる魔性の味っ

てあるよね？

ちなみに俺の事はなのはが吹聴でもしたのか何気に高町一家には知られているらしく、８歳児の姿ながら一人でも普通に店に入れるのである。

最初はどうかと思ったが、相手はあの高町なのはのご家族だ。

一々気にしていたら身が持たないので考えない方面で行く。その方が楽だもん。

「こんにちは」

「あらフェン君いらっしゃ～い。今日は一人？」

そんな訳で時たまふらりとよってはスィーツを購入する訳だ。

そのたびに何故か恭也さんから挑発的な殺気が飛んでくることがあるが大抵は無視している。

俺は別に訓練が習慣になっているだけで、戦闘狂とかじゃねぇしな。

第一相手にしてたら面倒臭い。

そう言えばリトルもここのスィーツは気に言ってたっけ・・・リトル・・・。

あーいかんいかん、少しばかり思考がブルー入ってんな。

とりあえずスィーツ買うべ。

「はい、一人です。あ、持ち帰りで焼きぷりんとアップルパイお願いします」

「はいはい、ちょっとまっててね」

さて、俺が買ったのはシュー・ア・ラ・クレーム・・・では無く只のパイケーキだ。

何故パイなのかと言うと、一応おぼろげに残る前世の記憶には翠屋のシュークリームは絶品と言うのがあるにはある。

だがパティシエである桃子さんの腕が良いからか他のスィーツも総じてレベルが高いのだ。

流石に某味皇の様に口からビームは出さないが、それでも“なん・・・だと・・・?”と初めてシュークリーム以外を食った時に戦慄を覚えた程である。

ちなみにやろうと思えば俺は口からビームを出せる。

魔法の発射点を口腔内に設定すればいいのだ。

見た目的には某龍玉に出てくる技みたくなる。

ただ調整を間違えると歯茎ごと歯が吹き飛ぶから素人にはおススメ

出来ない。

いやホントにアレは冗談抜きで気絶するくらいに痛かった。血とか止まらんし。

グロいから宴会芸としてもどうかと思うし、ある意味使い道が無い魔法だよなぁ。

「はい、多分大丈夫だと思うけど、念のためにドライアイス入れておいたわ」

「ありがとうございます」

手渡された紙袋を片手に下げ、俺は翠屋を後にする。

ちなみにこれを買う金は自分で作り上げているので問題無い。

何せ錬金が使えるからな。インターネットオークションって便利すぎるよね。

お互い顔が見えないから逃げるのも楽・・・げふん。何でも無い。

「あっそうだフェン君」

「はい？」

帰ろうとしていたら桃子さんに呼び止められた。
はて?俺に何か用だろうか?

「いつもなのはと仲良くしてくれていてありがとね」

「ああ、ええ。友達ですから」

エエもうホント。砲撃魔法撃ちあう仲ですから!残念ッ!

・・・泣いても良いだろうか?まじで心折れそう。あう、目に涙が・・・。

「どうしたの?急に俯いたりして」

「いえ、何でも無いです。目にゴミが入りまして・・・」

原因は貴女の娘さんですなんて口が裂けても言えません。

「そう?なら良いけど・・・ところでフェン君、最近何か辛いことでもあった?」

「え?」

「何と言うか。そんな気がしたのよ。母親の勘ってヤツかしら」

「は、はぁ」

鋭いなオイ、母親の勘ってのマジでパネェ。

そりゃ確かに辛いこと（リトルの事）あったけど、何で判るんだろうか？

「それで、どうかしら？」

「んと、あったにはありました」

「ありました・・・じゃあもう解決済み？」

「はい、自分の中で整理はついてます。ご心配かけて申し訳ないです」

「ううん、私もお節介を出しただけだから気にしないで」

桃子さんはカウンター越しにそう言い、手をパタパタと揺らした。

まぁあいつの事は既に整理が付いているからな。

それに桃子さんに説明するのも・・・難しいと思うし。

粒子になって消えましたとか言ったら普通は黄色い救急車モンだよな？

「それじゃ、今日はこの辺で・・・」

「あ、ごめんなさいね？引きとめてしまって、またどうぞ」

「はい、それじゃあ、また」

俺は翠屋を後にする。う～ん、なんとなく隣が寂しいな。

俺の左手にはよくリトルがぶら下がってたしなぁ。

心の中の整理はついたが寂しいとは思うんだよね。

「・・・ま、いずれ慣れてくるだろ」

てくてくと帰り道を歩きながらそう呟いた。

心情は簡単に変化する。こういったのは時間が解決してくれるのだ。

良かろうが悪かろうが、風化してしまうモノなんだからな。

『マスター、もしかして寂しいのですか？』

「どうしたんだ急に？」

『いえ、只なんとなく脳波とかが揺らいでましたので』

「まぁな・・・」

なにせいきなり逝っちまったからなぁ。でも――

「でも、ほら。あの子はよく笑ってただろ？」

『そうですね』

「俺はあの子の為にこの間一杯泣いた。だから少なくても、これからの日常の中はなるべく笑顔で過ごそうと思っている。そうじゃないとまたリトルに怒られるからなからな。だから大丈夫だ」

『・・・やはりマスターはお強いです』

いいや、強いんじゃないんだ。飽く迄そう割り切っただけ。

だけど、それでもいいと俺は思うんだ。そう思うだろ？リトル。

『まぁマスターの笑顔って希少ですからね。このままだと常にカメラの録画機能が作動しっぱなしになりそうでこわい』

「お前なぁ、勝手に記憶媒体で容量食うな。そして安心しろ。俺の笑顔は表面にはそうそう出ない」

『そ、そんな・・・詐欺だ！そんなの詐欺だ！』

「大体なんで俺の顔何て録画するんだ?撮ってもしょうがないだろうに」

『だってしょうがないじゃないですか!可愛いと思わせるマスターがわるいんです!可愛いは正義!』

「・・・・・俺は何処でコイツの設定をミスったんだろう」

ダメだコイツ、早くなんとかしないと・・。

「まぁいい。とりあえず帰ろう」

『そうですね。あ、お留守番しているリンに連絡入れたらどうですか?おやつの準備と言えば喜んでやってくれるでしょう』

「ソレもそうだな。よし――(おーい、リン)」

「(――はい主殿!なんですかぁ?)」

「(翠屋でスィーツを買ったから、茶の準備を頼めるか?)」

「(おまかせくださいですぅ!)」

念話で家に居るであろうリンに連絡をとったし、帰ってスィーツでも楽しみますかね。

一応人数分買っておいたし、残りは冷蔵庫に入れておこう。

偶には、こんな平和な日があってもいい。そう思ったのだった。

「クリスマスだからってヘマをするとは・・・」

「クリスマスだからってヘマをするとは・・・」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

１２月２４日、それは世間で言う所のクリスマスだろう。

元々はキリストの生誕を祝う日としてクリスマスがあるのだが、何時の間にかサンタクロースが主役の日、もしくは恋人たちが愛を語り合う日と言う風に置き換えられている日でもある。

その為嫉妬に駆られた年齢＝彼女無し達が藁人形を・・・おや？誰か来たようだ。

まぁソレはさて置き、気が付けば今日はクリスマスである。

八百万の神々といった宗教観がある日本人にとってはお祭りの様に感じられる日。

当然八神家でもクリスマスの準備に合わせた飾り付けなどが行われた。

本物ではないが、居間の一角にはドーンとクリスマスツリーがたたずんでいたりする。

いやー、こんなのが物置の中に分解されてしまってあったなんて全然知らなかったぜ。

まぁはやての足が麻痺してから全く物置は開けなかったらしいから仕方が無いだろう。

当然物置の中は埃で一杯で、ツリーを探しに行った俺とヴィータ姉は髪の毛が真っ白になってしまって、リニスに強制的にお風呂に放り込まれると言うハプニングがあったがそれは些細なことだろう。

だがリニス、一緒に入って洗おうとしないでほしい。一人で洗えるから。

ともあれ、クリスマスの準備は滞りなく進められた。

とくにヴォルケンズやリインフォースやリンやリニス達は知識としてでしかクリスマスを知らないので、準備だけでも実に楽しそうであった。

特にヴィータ姉とリンが中心になってはしゃいでいた様に思える。

そう言う自分も何処かウキウキとした気分で準備を手伝っていただけに人の事は言えないが。

「「ケーキ♪ケーキ♪」」

「もうリン！ヴィータ！クリスマスケーキは夜になってからや！」

「はやてちゃーん、コレは何処においておけばいいの？」

「ローストチキンの下ごしらえも終わったわ」

「ああっと、次は――――」

はやて料理長は忙しそうに台所を取り仕切っている。

ソレを手伝うシャマル先生とリニスが彼女から指示を貰い料理の下ごしらえをしていた。

そして何が楽しいのか走り回るヴィータ姉とリン。いや、邪魔だしヒマなら手伝えよ。

「この世界の祭日か。実に平和だな」

「ああ、主も楽しそうで何よりだ」

「まったくだ」

そして大人組みであるシグ姉、リイン、ザッフィーは祭日に浮かれる彼女らを微笑ましそうに炬燵から眺めていた。・・・いや手伝えって。

「・・・だれも飾り付けを手伝ってくれない件」

『こう言うのは男の仕事です。マスターファイト』

「マジかよ・・・まぁ良いけど」

やっぱりこう言った祭日はウキウキが止まらなくなるのは仕方ないNE。

ちなみにこの時期になるとなんとなく讃美歌を聞きたくもなる。

きよしこ〇夜だとか諸人〇ぞりて等がクリスマスの曲として有名だろう。

だがバッハとかのクラシックも何気に捨てがたいものがある。

特にバッハの曲は、三拍子三連符でD(レ)の音n調でもよく作曲された。

これはキリスト教における三位一体の考えを表すらしく宗教的意味を持っているらしい。

まぁなんとなく聞きたくなるから聞くのであってウンチクは二の次でいい。

ようはノリである。その場の雰囲気に合えば何でもいいのである。

それにクリスマスをラップとかロックで飾るとか・・・。

まぁ好きな人は居るかもしれないけど、俺は微妙だと思うしな。

個人的には少しは厳かな雰囲気が欲しい所である。

・・・此処まで考えた時に曲の選曲が随分とおっさんな事にｏｒｚだった。

ま、まぁこの時期ダケさ。うん。この時期ダケ。

……

……

……

さて、時刻は夕方になり八神家のささやかなクリスマスパーティーが始まった。

実を言うとはやては最近懇意な間柄になった高町家や月村家やバニングス家から家族ごとクリスマスのパーティーに来ないかという誘いを受けていた。

だがはやては今回のクリスマスだけは他家の誘いを断っていた。

他のメンバーがクリスマス初体験と言うのもあるし、それ以外にも理由がある。

「それじゃ、みんな初めてのクリスマスやけど、始める前にちょっとだけ此処におらへんリトルくんに黙祷してあげたいんやけど、ええかな？」

そう、リトルの為であった。

短い期間だったが家族として受け入れられた彼の事は、今だ俺達の心に深く根付いている。

寿命さえ持てばもしかしたらこの年に一度の祝う席に居たかも知れないリトル。

ごちそうを食べ、美味しいケーキを食べて、俺達に飾りっけのない真心籠った笑顔を見せてくれたかもしれない。

「リンはリトルの為にお祈りするですぅ」

「リン・・・あたしもそれでかまわないよはやて」

リンとヴィータ姉が賛成した。俺も含め他のメンバーも特に異存はない。

そして俺達はパーティーを始める前に２０秒ほど、リトルの為に静かに祈りをささげた。

「ちょっとしんみりしてもうたけど、クリスマスは祝いの日や！楽しく騒ごうっ！」

「「「「「「さんせ～い！！」」」」」」

黙祷を終えた後は空気もがらりと変えて祭日にふさわしい感じで騒いだ。

御馳走を食べて騒いだり、ゲームをしたり、テレビのクリスマス特番を見たり。

兎に角それぞれが思い思いに楽しんだと思う。

「あ！だれやシャンパンもちこんだの！？」

「いいじゃないか。ちなみに俺もワイン持ちこんでるぞ？」

「・・・どこで買ったん？」

「通販でちょいちょいっと。ネットって便利ね（※犯罪です）」

「そしてそれを没収します」

「ああリニスさんそんな殺生な・・・」

何気に大人組みはリンやヴィータ姉やはやてに内緒で、このパーティーの席に酒を持ちこんで呑んでいた。

当然酒が入ればテンションが普段より高くなるのは世の常と言うものである。

「ほーら、ココだけ真っ暗～（デアボリックエミッション弱）」

「「「ちょ！おまっ！？」」」

「なら私が明かりを灯そう」

「「「「火はやめてください！！」」」」

でもだからって魔法を使っての一発芸は止めて欲しい。

幾ら非殺傷で魔力落して影響が出ないとはいえその魔法はヤバい。

特にシグ姉さん。貴女の炎熱変換は一発芸でやると映像的に見事だけど、一歩間違うと火事になる。

これは流石にはしゃぎ過ぎだろう。酒の力は恐ろしい。

とりあえず風呂場でやってくれと言ったらしょぼんとされたのは余談である。

『ファイヤークリスマスとは斬新な』

「いや違うから、そんなイベントじゃないからコレ」

……

……

……

さて、クリスマスケーキを食べながら談話していると、その話題の中でサンタは居るのかという話題が出た。

これは前世でも記憶の中に残っている。親にこれを聞いたら笑って返されたっけ。

だが地球のクリスマスが今回初めてだという彼らにとってこれ程の話のネタはない。

そう言う訳で、とりあえずサンタクロースさんがいると仮定した場合。

どういう風なことをしなければならないかという方向に話が進んだ。

「サンタクロースがいたとしてだ。アレは全世界の子供にプレゼントを配るのだろう？」

「いや、ソレは正確ではない。いい子にのみ配るんだ。悪い子には何も渡さない」

「でも、そうだとしたら全人口のどれくらいになるのかしら？」

「たしかこの世界の総人口って約６０億越しているんだっけ？」

「良い子悪い子を差し引きしておよそ１０億人と仮定してみたらどうだ？」

「おお！ザフィーラ頭いい」

そんなこんなでとんとん拍子に話が進み――

「サンタクロースがクリスマスの間に走破すべき距離は約３億ｋｍか・・・」

「クリスマスが始まって日が沈むまでを時差を考慮してもおよそ３２時間」

「走破距離から考えて３２時間で地球を駆け巡るのに必要な速度は――」

「およそ・・・マッハ１万・・・」

この瞬間、サンタについての話題を議論していたメンバーに衝撃が走った。

「ば、ばかな。サンタクロースは魔法使いだとでも言うのか！？」

「転送魔法使えばそれほど大変でも無いんだけどね」

シャマル先生、ソレを言ったらお終めぇよ。

「これは飽く迄地上を飛んでいくと仮定した場合の計算だしな」

「しかし流石はクリスマスで一番の有名人、その力も桁外れだ」

「実在するとしたら、どんな魔導師でも勝てないな。個の速さなら気が付いたら地面とキスしているだろう」

「何時の間にか戦うと言う話にすりかわってる件」

「サンタの服の色は返り血が判らなく・・・」

「おーっと、そこまでです。子供の夢を壊す発言はＮＧですよ」

そして大人組み＋俺はこういう結論に至った。

――――サンタはマジでパネェ。

実在するとしたらこうとしか言いようがない。

魔導師とか幽霊がいるくらいの世界なのだし、居ないと言いきれな

いのが凄いね。

ちなみにこの話の前にヴィータ姉やリンやはやて達は既に夢の世界に行っておりましたとさ。

＊＊＊

楽しいクリスマスも終わり、俺達は各々の生活に戻っていく。

クリスマスの次は元旦の準備らしいが、日本人ってホント見境がねぇなと思う。

まぁソレが日本人の特色なのだと考えれば、これ程面白い民族も居ないことだろう。

ごっちゃ煮は日本の伝統ですってか?ごっちゃんです。

さてクリスマスも終了し、俺は遺跡世界に行って発掘でもしてこようかなと思っていた。

地下階層で発見した船、船体一体型セイルに形式番号ＤＤＳ－１と書かれた次元航行実験艦を発見出来た階層で、他にも何かお宝になりそうな物でも無いか探そうと思ったのだ。

（ちなみにこの形式番号はあくまで翻訳したものであり、原文は古代ベルカ語に酷似している為、おそらくはベルカかソレ系統の文明を継承した世界のモノと思われる）

地球では売れない・・・というか地球“へは”売れない物が多いだろうけど。

だが、ちょっと直して改修すれば他の次元世界では高く売れそうである。

俺やっぱりジャンク屋やろうかな、身入りいいし・・・。

「食糧持った。酸素ボンベも持った。緊急用の密閉式断熱シェルターも持った！」

「おやつも持った！ヒマつぶしのゲームもご本も持ったです！」

「・・・遊びに行くんじゃないんだけどな？」

「・・・てへ」

今回はすこし長丁場になるかも知れないので、食糧や酸素をそれなりに持参することにした。

尚、断熱シェルターはあの世界でもしも遭難した場合に使うテントの様なものである。

一人用だが、あの過酷な空気が殆ど無い世界で活動するには必要な

モノだ。

あの世界の寒さだと雪洞掘るとかそういったレベルじゃないからな。

あとリンよ。おやつは持参とかどうかと俺は思うぞ。

・・・でもまぁいいか、注意したら泣いちゃうだろうし。

『それじゃ出発準備完了ってことで、お二人ともユニゾンしてください』

「あいよ」

てな訳でユニゾンして顔に蒼いラインが通ったのを確認した後。

俺はそのまま次元転送を行おうと・・・。

【少佐、リニス様から連絡です。お電話が入っているそうですよ】

「っとと・・・電話ぁ～？」

魔法発動直前、お留守番組みのアイリスに呼びとめられて発動キャンセル。

しかもお電話って、俺に？クリスマス終わった直後なのにか？

「ユーノ達か？それだったら今度って――」

【いえそれが、リニス様からの報告によると管理局の方らしいのです】

「時空管理局が？なんでまた・・・」

『違法に廃棄物利用してるのばれましたかね？』

いや廃棄世界の物を管理世界に持ちこんだならヤバいけど、ここはミッドの影響圏の外である管理外世界だ。

例えバレていたとしても俺は元々ミッドチルダ人でないからな。

特に問題は無い筈だ。ちょーっと質量兵器になりそうなモン持ってるだけだし。

「ちなみに誰からだ？」

予想なら管理局の人と言えば・・・。

【黒っぽい人だそうです】

「・・・」

『クロノさん名前で覚えられてないですね。でも何が目的なんでしょうか？』

「さて・・・まぁ話を聞けばいいか。廃棄世界行きは延期だ。お客さんの相手をするぞ」

めんどくさいが無碍にも出来まい。

態々執務官殿が此方へといらしたのだ。話し位聞いてやらんとな。

仕方なしに展開していたＢＡとリンとのユニゾンも解除して地上へと向かった。

……

……

地下基地から上がってきた俺は受話器を持って待機していたリニスから受話器を受け取った。

クロノめ、一体なんのようなのだ？

『もしもしフェンか？すまない。いきなり連絡してしまって』

「まったくだな。で、態々俺の所に連絡って事は何かあったか？」

『それ何だが・・・すこし外で話したいんだが大丈夫か？』

「ふむ・・・」

外、ね・・・うーん、正直なぁ。

この寒い中外で話すってのも何だかなぁと思う。

あん？テンプコントロール出来るじゃんだと？防寒服で事足りるのに面倒臭い。

・・・まぁクロノならいいか。コイツ意外と友達思いだし。

「・・・まぁいいか。何処で会うよ？」

『ああ、図書館の近くにある公園で待ってるよ』

「そうか・・・ところで何でウチの電話番号知ってるんだ？」

『なのはからエイミィ経由と言えば判るか？』

「・・・把握、それじゃすぐに行く」

あれま、なのはがソース元かぁ。・・・って人ん家の電話番号すぐ教えんなよ。

まぁあれでまだ9歳な訳だし、あんまり言うのも酷か。

とにかく俺は外套を羽織り、リニスに留守を頼むとそのまま公園へと向かった。

そう言えばその公園、俺が初めてはやてと邂逅した思い出の公園だなぁ。

方や車いす少女、方や吐血して血だまり作って気絶した幼児。

・・・想像したらかなりシュールな絵面だなオイ。

＊＊＊

「待ったか？」

「いや、それほどでもない」

やはりと言うべきか、待ち合わせに使用された公園には既にクロノが来ていた。

相変わらず黒一色である。好きなんだろうか？黒色。

まぁ俺も人の事は言えない為、あんまり口に出すつもりはない。

「で？どうする？」

「ちょっと待って・・・認識阻害の魔法を使った」

「まぁ何処に目があるか分からないしな」

とりあえず促されるがまま、公園のベンチに座る。

どんな話をされるのだろうか？まさか人手足りないから勧誘か？

そんなことを考えながら懐から煙管を取り出している俺を横目に、クロノは若干苦笑しながらも今回俺を読んだ理由を話してくれた。

――――で、問題のその要件なんだが・・・。

「武装局員の訓練相手？」

「ああ、是非に頼めないだろうか？」

あまりにも有り得ない要件に、思わず咥えていた煙管をポロリと落しかけた。

慌てた俺はそのまま火がついた煙管を取ろうとして直に触れてしまう。

「――ッ」

「おい大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ。問題無い」

俺ともあろうものがこの程度で動揺してしまうとは・・・。

「どういうことだ？武装隊の訓練は戦技教導隊がいるだろう？」

教導隊というのはアグレッサー部隊のことで、簡単に言うと仮想敵と言うヤツだ。

つまりは相当な実力を持つ者たちがチームを組み、他の部隊の訓練相手を務めるってヤツ。

管理局には本局の公式発表しているデータでも５つのチームが存在しているらしい。

全部で１００人にも満たないが、その全員がエースで構成されたトップエリート。

将来魔王様が所属するかもしれない部署でもある。

「ソレはそうだったんだが・・・・・」

・・・だった？

「スケジュールのちょっとしたミスで、別の武装隊とダブルブッキングしてしまったんだ」

「おひおひ・・・でも、だったら次回に回すって手もあるんじゃないのか？」

「そうしたいのも山々何だが、ダブルブッキングでキャンセルさせられた部隊は新人が多かったんだ。経験を詰まないで前線に出したくは無いけど、知っての通り管理局はその発足以来ずっと人手不足。武装隊の訓練期間を縮めて教導官からの模擬戦も無しで前線に送りだしそうな勢いだ」

「それはまた・・・」

ここで世界を管理しようととか言って身の丈に合わなかったダケじゃんと思ったが、ソレは口に出さない様にしておこう。

青少年の夢を壊すもんじゃないしね。あんまり。

「そして教導隊の非常勤アシストをしているリーゼ姉妹から、顧問官であるグレアム提督に話がまわり、さらには母さ――リンディ艦長にまで話が及んだ」

「なるほど、そして俺を思い付いたと言う訳か・・・まぁ戦闘経験だけなら確かに民間からの援助でも事足りるからな」

これは地球でもよくある話だ。ＰＭＣというのを知っているだろうか？

簡単に言えば民間軍事会社のことで、業務は戦闘から護衛や兵站や兵器の整備や新兵の訓練まで多岐にわたる。

戦争の犬たちと揶揄される傭兵と違い、キチンとしたプロフェッショナルが戦闘方面のサポートを行う文字通りカンパニーといった感じの戦争屋達である。

簡単に言えばソレと同じ様なことを俺にさせようと言う話である。

管理局の観点から考えて民間からそういった者たちを雇うというのは、ちょっと違法なのだろう。

だがコストパフォーマンスも安く、正式記録を残さなければ非常に有効な手だとは思う。

最悪民間協力者という風にしてしまえば、公での言い訳も立つという話なのだ。

「そう言うことだ。フェン、武装隊の未来の為に受けてはもらえないだろうか」

そう言って俺を見つめてくるクロノくん。

それに対して、俺は薬草煙管から煙を少し深く吸い込んだ後――

「・・・クロノ」

「受けてくれるのか？」

「だが断る」

ハッキリとそう応えてやった。

廃棄惑星で色々と発掘したい俺としてはこんなことで時間を潰す訳――

「ちなみに報酬はミッドの科学の圧縮ファイルとかレアメタル関連だったか・・・」

――なん・・・だと・・・？

はん、たかがレアメタルと科学関連の資料じゃないか。

お金と時間さえあれば手に入るモノだろう？

そんな餌に釣られるほど安くは――――

「科学データ良い。レアメタル欲しい・・・引き受けよう」

『マスター、本音と建前が逆です』

――えさにつられたくまー。

「そうか、引き受けてくれるのか。コレで少しは武装隊の経験になるよ。ちょっと艦長に連絡してくる」

「え、あ、さっきのは間違い――行っちまった」

慌てて否定しようとしたがもう遅い、すでに了承したと思われてしまった。

ううん、だって自前でそろえるのって手間掛かるし、金もバカにならないんだモン。

錬金だって使用すると魔力操作でスゲェ疲れるからな。

全部手探りは流石にムリだから先人たちの手を借りたいのだ。

こ、これはしょうがないなウン！・・・と自己弁護して鬱になる。

こうしてクリスマス終了早々にまた変なことをやる羽目になった。

でもキチンとリンディ提督と報酬の件で対談持てるみたいだし、ある意味ありがたい。

あの氷に埋まっているＤＤＳ－１をもしかしたら・・・ムフフ

まぁ軽いバイトだと思ってやりますかねぇ。

「サバイバビリティは兵士の基本スキルだっぺ」（前書き）

今回三人称オンリーで主人公出番無し。

それでもおｋな方はどうぞ。

「サバイバビリティは兵士の基本スキルだっぺ」

「サバイバビリティは兵士の基本スキルだっぺ」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

■第８管理世界・地球時間１２月２９日・ミッド標準時　午前７：００■

ミッドチルダに程近い位置にある次元世界、第８管理世界『レフィディム』。

荒野や岩地が多く点在するこの世界は、時空管理局が所有する演習地の一つに数えられる。

本局からも転送ポートの中継無しで到達でき、尚且つ演習させるにはうってつけの環境を持つこの世界に、その日新米武装局員で構成された武装隊３０名が集結していた。

「ぺっぺっ・・埃っぽい・・」

「おいおい、だから早めにＢＪを展開しておけばよかっただろうに」

「だって疲れるし・・・今日訓練だから魔力消費したく無い」

武装隊と名を打つが、その実、構成されている人員の殆どはうら若き少年少女達だ。

中にはそれなりの年齢に達している人間もいるが、ソレはいわば古株の人間である。

合計で数百は下らない次元世界を監視・管理・観察している管理局では常に人材が不足しがちである。

だが魔法による詰め込み教育は偉大であり、更に就労可能年数を引き下げることが出来る。

そのことを“３０年前に存在したとある世界”から知り得ている管理局上層部では、独自に入手する事に成功した当時の様々な資料を元に局員の育成を行っていた。

この場にどう考えても高校生くらいの人間達がワイワイとしている理由はそれである。

しかし当時入手する事が出来た資料は少なく、マニュアルにはどう

しても穴があった。

そうなった原因は当時その世界でラプターと呼ばれていた女性が己の息子可愛さに資料の殆どを廃棄したからであるが・・・今となっては真相は次元世界の彼方である。

ちなみにこれでも現代の武装隊隊員の平均年齢からすれば非常に高い部類に入っていた。

それだけ人手不足が深刻であり、また若手を入れたは良いが殉職しやすいというスパイラルを抱えた管理局のあり様が現れていた。

「なぁ今日って確か模擬戦だろ?結局何処とやるんだろうな?」

「え?戦技教導隊から誰か来るんじゃないの?」

「なんだお前知らないのか?あそことはスケジュールミスで他のとことブッキングしたからこっちにはこないんだとよ」

「えー、なんだー。せっかくエース達をみられるとおもったのにー」

「ブーたるなよ。・・・けど、本当に誰とやるんだ?」

「さーしらない。先輩達も何も知らないって言うし・・・」

彼らが演習場に集合させられてから既に３０分が経過している。

一応局員としての教育が終了してはいるが、それでもやはりまだ若い。

特にブリーフィングの準備をしに行っている事実上の副官に当たる先輩たちはこの場に居ないのだ。

注意する人間が居ない上、時間が経過すれば集中力を欠いた状態になるのも自然なことである。

第一に今回の演習の件も噂が絶えない。

本来なら来るはずであった戦技教導官ではない何者かが自分たちと対戦するのである。

噂には辺境世界にいた歴戦の猛者であるとか、戦場を渡り歩いた魔導師じゃないかとか。

中には“ムムこれは！男の娘の波動を感じる！”というバカが居たが・・・意外と鋭い。

「はぁ、何でウチの隊には変態が居るんだ」

「なんで精神鑑定に引っ掛からなかったのかしら？」

仲間の一人がＷＲＹＹＹと奇声を発している姿にゲンナリする。

その声に隣に居た別の隊員が何言ってんだお前らという感じで応えた。

「あれでその他は優秀だからな。魔力も多いし資質もある。多少のあれは看過されるのさ」

管理局は魔導師によって運営されている。

当然のことながら資質が高い所謂高ランク魔導師ほどエリート街道に入りやすい。

それもそうである。高ランクであると言うことはソレだけ頭の回転が早いのだ。

術式の制御だけでなく、複数のマルチタスク展開能力と処理にも影響する。

ソレ即ち１０数人いないと処理できない様な事務も理論上一人でこなせるのだ。

流石は魔法、チートである。実際は腕が二本なためそこまで出来ないが、それでも只の一般人と比べればその作業効率には雲泥の差があるのである。

だから多少“アレ”な人間であっても業務に支障が無ければ採用されるのである。

「羨ましいこった。あんなんでも将来は士官までいくのかねぇ？」

ある意味で実力主義であるこの魔法至上主義は結構根深い。

努力で埋まるのを超越した力を持つ者が居たりするので平隊員にとっては朔望の的だ。

なまじ同じ力を使えるのに、その規模が全く違うのだから。

だが勿論、地力があるからこその責任というのもちゃんとある。

「こっちなんて空隊の審査に落っこちたからなぁ。魔導師資質が低いとさ」

「仕方ないんじゃない？只でさえ殉職率が高いのに死にやすい人間なんていらないでしょ」

一人の男性隊員がそう嘆くと、クスクス笑いながら女性隊員がそう答える。

そうつまりはそれだ。高ランク魔導師はエリートになりやすい。

だがそれに比例して殉職率も非常に高いのである。

なまじ魔力資質という力がある為、危険な任務を回されやすいのだ。

経験を積んだベテランならばともかく、経験を積んでいない力ごり押しの若手では、絡め手などによって墜とされることもしばしばなのである。

まぁそう言う訳でそういった危険な職場で生き残れるだけでエースと言えるのだ。

青臭いながらも世界の平和というお題目を持つ若き魔導師達にとって、自分たちが目指すべき目標としてあこがれとなるのも致し方ない。

「きっついなお前・・・ああ、俺に救いの手をくれる仲間はいないのか」

「バーカ・・・あ、そろそろみたいだよ」

一人が此方にやってくる教育隊の教官の姿を見つけた。

ザワザワ騒がしかったさすがの彼らも気を引き締め、気をつけに近

い姿勢になる。

そして教官がかなり近寄った時、一人が敬礼と叫び武装隊員たちは皆それに倣った。

教育隊の教官は厳密に言えば階級が存在しない。

だがそれでも過去に与えられた数々の拷問・・・もとい教練は身体に染みついているのだ。

なので思わずこうして敬礼をしてしまうのも仕方が無いのである。

一方の教官もこういったことは良くある事なため気にしてはいない。

むしろ下手に気に掛ける方が迷惑だし、現在は一時的とはいえ彼らは訓練兵とほぼ同義。

それなら教官らしくきびきびと対応した方がやりやすいのである。

また、教官である魔導師はこの武装隊が遠目からでも騒がしくしていたことは知っていたが、それを見なかったことにした。

彼らの年齢からすれば騒がしくするなという方が無茶だろうと思っていたからである。

「・・・楽にしていい」

≪――――ザッ≫

教官の一声で敬礼が解除され自然と休めの姿勢に移行する。

一応武装隊になっただけはあり、まだ固いがキチンと敬礼を返せるようだな。

教官はそう考えたが、彼らの視線がなぜか自分の背後に集中していることに気がついた。

何だと一瞬思ったが原因となるモノがすぐ近くに居ることに気が付いたので気にしないことにした。

そして今日の予定を彼らに説明する事にする。

特に長々と言うことも無いので、前口上はなしでちゃちゃっと進めることにした。

「今日諸君らにやってもらうのはごく簡単なサバイバルゲームだ」

（サバイバルゲーム？）（模擬戦じゃなくて？）（しっ！静かに！）

（念話でだべるのは禁止だぞー）

教官からの説明が開始されるが、やはり若い連中は何処か浮ついている。

何せマルチタスクを使って思考を分けて、説明の最中に念話で雑談をしているくらいだ。

まぁそれでも一応聞いた事になるのだから魔導師は侮れない。

「言っちまえば他流試合ってヤツだ。楽しいぞ」

「他流試合？他の武装隊とやるんですか？」

「相手が何者か、何名なのかは不明だ。だがこの演習場の何処かに潜伏して待ち伏せている」

ソレを聞いてある程度聡明な局員はそれぞれ眉を顰めた。

演習場はとても広く、岩場もあれば砂地もある入り組んだ地形をしている。

その広い演習場の中を捜すと言うことは必然的に戦力を分散せねばならない。

「岩場、砂地、荒れ地、湿地、川辺、草原の６区画ある・・・全ての区画を制圧すればお前らの勝ちだ。チーム分けは１０人ずつの分隊、０１～０３で分けておいた。後で同行する先輩たちが現場指揮をとるから彼らに詳細を聞くように。何か質問は？」

「「「「・・・・・」」」」

教官はコレで説明終わりとばかりに局員たちを見回した。

局員たちはそれぞれ視線を交わし誰か言えよと念話を飛ばしている。

「ないならこれで――」

「・・・一つだけあります」

「・・・なんだ？時間が差し迫っている。手短にな」

局員の一人が勇気を出して手を上げて質問した。

教官は大体聞かれる質問のことを予測しつつも続きを促す。

「教官の背後にいる。その多脚生物型傀儡兵の様なモノはなんですか？」

「・・・・」

――来たか。

そう教官は思い、そりゃ気になるよなーと自分も感じただけに内心苦笑した。

教官の背後に佇んでいたのは、ある種のクモに似た形状の多脚戦車。識別名称量産型シランという今回の対戦相手が給与してくれたサポートメカだ。

キュイキュイとモーターの駆動音を響かせているその多脚戦車。

本来なら搭乗ポッドがある位置にレドームを備えたその機体は、この演習場に入った者たちの位置を正確に教えてくれる・・・らしい。

胴体の両サイドにアヤメのマークが着いたエンブレムを付けていて・・・少しカッコいい。

「今回の演習相手が貸与してくれたサポートメカだそうだ。演習場に司令部は無いが、このメカが司令部の代わりに通信を担当してくれるらしい」

【よろしくお願いいたします】

「「「「あ、どうも・・・」」」」

喋った！喋ったよ！？と念話が飛び交っている。つーか傀儡兵なら喋らないのだ。

ちなみにこの量産型は一応喋れるが、飽く迄受け答えが出来る程度でしかプログラムされていないので、これもプログラムに沿って喋った――――

【早く始めましょう。少佐がヒマだと言っています】

「「「「「（少佐ってだれだよ・・・）」」」」」

――――プログラムに沿う・・・筈。だがアレが作ったモノなので判らない。

＊＊＊

【はい、みなさん配置につきました】

「ほう、本当に全員の位置が特定されている。おまけに映像つきか・・・サーチャーか？」

量産型シランは胴体に取りつけられた投影機から空間モニターを投影。

演習場にいる全ての局員たちの位置と様子を映像にして映していた。

サーチャーかと思ったが撮影位置が恐ろしく近いのに対して誰ひとり気が付いていない所を見ると、サーチャー等ではない様である。

教官は一体どんなトリックなのか気になりふとそう漏らした。

【企業秘密だそうです】

「そうか・・・各員全方位警戒、制圧スタート」

まさか返答を貰うとは思っていなかったが全員が位置に着いたのを確認した教官は演習をスタートさせる。

どんな相手が出てくるのかは実はこの教官も知らされてはいない。

その為どういう風になるのか内心楽しみであったのだが――

『こちら０１、湿地区画を制圧しました』

『こちら０２、草原と川辺を制圧。誰もいません』

『こちら０３、荒れ地を確保。設置術式を確認したので解除して無効化しました。近くの高台で射撃ポイントを確保します』

――驚くほど簡単に６つあるエリアの内４つが制圧できてしまった。

あまりにもあっさりとエリアを取らせているのに全く接敵して来ない。

残る区画は砂地と岩場、そのどちらかに潜んでいると言うことになる。

焦りすら見せず全く姿を見せないということは、それはつまりココまでが計算されているということ。

むしろソレが不気味に感じられるなと教官は思っていた。

――さて一方の仮想敵を見つけ出そうとしている武装隊はという

と。

「こちら02、砂地に到着。敵は影も形も無い。制圧を行います」

既に次のエリアへと移動を行っていた。

移動の間も何か起きる訳でもなく、恐ろしく静かであった。

ある程度実戦を越えたことがある年配の武装局員たちはこの状況にある種の不気味さを感じていた。

あまりにも静かすぎるのだ。だが、肌で感じるプレッシャーが消えない。

それこそ見えない糸で徐々に絡め取られていくかの様で気分が悪い。

その為、常に全周囲警戒を怠らぬように探査魔法を全開に行動していた。

しかし、先輩達が幾ら警戒しても、そのことを理解できていない若輩達はというと。

「ひまだなぁ～。ふぁ～あ・・・眠」

「ホントホント。もう少し何かあったもいいじゃないかな」

「こうも出て来ないと、もしかして敵とかいなかったりして」

「それなららくでいいな」

「「「あはははは」」」

まるで遠足気分とはこの事か。

その日はちょっと雲が出ているだけで晴れていた。

それこそぽかぽかとした日差しと程良い風が心地いいくらいである。

最初こそ敵を警戒していた彼らだが、こうものどかだと警戒心が薄れるのは想像に難くない。

やがてその空気は徐々に先輩たちにも伝染していく。

「おいおい、だらけ過ぎだぞ。・・・気持ちは判らんでもないが・・・」

とは言いつつも、先輩局員もこれだけ何も起きない事に内心拍子抜けしていた。

これが相手が考えた徐々に効いてくる毒であるということにも気がつかずに・・・。

――――３０分後。

「砂地エリア全域を制圧完了しました」

「ふむ、若干設置式術式が多かったがここにもいないか・・・拍子抜けだな」

「自分たちには手も足も出ないと時間切れでも狙ってるんでしょうかね？」

「かもな・・・よし、岩場で術式解除に手間取ってる０１と０３を援護しに行くか」

このエリアもあっさりと制圧し終えたチーム０２はいまだに制圧に手間取っている岩場方面へと移動を開始した。

飛行魔法で飛んでいく事も出来るが魔力を温存したいのと、

これまで何の襲撃も無かったことが重なり、彼らは徒歩でゆっくりと岩場に向かうことにした。

正直なにも起きなくて面倒臭かったというのが根底にあった。

「それにしても本当に何も起きないな」

「そうねぇ、合計３０人もいるのに誰ひとりかけて無いらしいものね」

「あーあ、もう防護服展開してるのも面倒だな。いっそのこと解除しちゃうか？」

「いいんじゃない？もう先輩たちとかあっち行っちゃってるし。どうせ何も起きないでしょう？」

バリアジャケットを解除したいと言った男性局員にバディの女性局員はそう答えた。

移動の間も何も起きなかったということが、彼らの行動を軽率にしていた。

隊列もあって無い様なもので、先輩局員たちも前方を注意しても後方にはあまり注意していなかった。

「ソレは流石に不味いけど、本当に暇だぜ・・・帰ってシャワー浴

びたい」

流石にＢＪの解除はしなかったが砂地という環境上、陸戦魔導師である彼らでは動きづらい。

砂地での歩き方にはちょっとしたコツがあるのだが、そんなこと若輩の彼が知る訳もない。

だから彼らはゆっくりと歩いていた。もう完全に何も起きないと思っていたのである。

男性局員が伸びをしているのをクスクス笑っている同僚たち。

まぁ留まる訳にもいかないので、先輩にどやされる前に彼らは歩くのを再開する。

だが彼らが再び前を向いて歩き始めたその時であった――――

≪――――ヴォン・・・≫

「――え？あ・・・――。；＃＄％＆‘；@？？」

最後尾を歩いていた局員が――――消えた。

だが、誰もその事に気がつかない。何故なら消えた局員は声すら発しなかったからだ。

その後も一人、また一人と砂地エリアを歩いている０２から人が消えていく。

ちょうど教官が見ている映像の死角となる瞬間、小さな人影が現れると同時に人が消えていった。

しばらくして、流石に3人もいなくなれば人数が減っていることに気が付いた武装局員たち。

普通ならば周囲警戒を厳にし、魔法による探査を用いて襲撃に備える筈である。

だが、残っている０２達はというと――

「おいおい、３人そろってお花でも探しに行ったか？」

「でっかいヤツしにいってたりして」

「もうー、下品だよ！」

「もうしわけない」

居なくなった3人にあまり注意を払うことは無かった。

てっきり丘陵の陰でトイレにでも行ったのかと考えてしまったのだ。

通常実戦でそんなことをするのは有り得ないを越えて論外である。

だが、このだらけ切った空気が彼らの精神をグダグダに変えてしまっていた。

どうせまだ岩場まであることだし、少し休憩しようかという話になり、残りの7人も集まり固まって腰をおろしてしまったのだった。

実は彼らが常に教官に見られていることを彼らは知らない。

一応制圧した事を報告するのが最初から決まっているが、その武装局員たちを教官が見張っているとは彼らは露ほどにも思っていなかった。

それ故、いきなり敵陣で座り込んだ若手武装局員たちの質の悪さに教官は頭を抱える事になる。

まだ実戦に出さなくて良かったと心底思うと同時に実戦に出たことがある筈の先輩武装局員までこれかと内心溜息をついていた。

（油断し過ぎだろう。演習とはいえ敵地に居るという想定だぞ。制圧が完了していないエリアへ向かっているのにその道が安全とは限

らないだろうに・・・スカウトくらいだせ）

量産型シランがサボっている０２を空間モニターに投影し、それを溜息を吐きつつ眺めている教官。

彼は戦技教導官との実戦的戦闘をもっと増やした方が良いだろうなと考えた。

そしてこの武装隊員達の不甲斐なさを鑑み、この事を上層部に申告することを決めた。

これではあまりにもお粗末すぎる。魔導師ランク云々の前に戦う者としてこれではだめだろう。

戦いとは何も敵と戦うだけでは無い、敵と接敵するまでの時間とも戦うのである。

その厄介な時間と戦うには強靭な精神と忍耐力が求められるのだ。

そしてそう言ったモノは若い人間では持ちづらいモノでもある。

特に顔見知りが多い部隊ならなおさらだ。時間は時として毒になりえるのである。

油断を生みやすくするという毒に・・・。

『――ゲッ!?何ッ――ぎゃぁぁぁぁぁ!!!――ブツ』

「な、なんだ?!どうしたんだ!!」

【02、シグナル喪失(ロスト)。分隊全滅を確認】

思考の海にふけっていた教官は唐突に聞こえた絶叫に驚いて顔を上げた。

量産型シランが映していた映像には爆炎しか写っていない。

僅か十数秒目を離した隙に一分隊が全滅してしまっていたことに、教官は氷柱で背骨を突き刺されたかのような感覚を覚えた。

「一体何が・・・」

砂煙が徐々に晴れていく映像を眺めつつ教官はそう漏らす。

基本的に始まりの合図と制圧報告を聞く以外、教官にすることは無いのだ。

なので何が起こったのか判らなくて途方に暮れていると――

【――０２の７人は周囲警戒を怠り、敵地において分散せずに集団で固まって休憩しました。ソレを“少佐”が長距離から魔法で爆撃しただけです】

「なっ！？」

思わぬところから返答が返ってきたことに驚きつつもその内容に特に驚いていた。

長距離からその“少佐”たる人物が攻撃を加えたということ。

ソレはつまり最初から０２の行動は把握されていたことにほかならない。

しかもこれまでずっとこうなる隙を窺っていたということなのだ。

【――本機の上位機体から伝言です。“もう少し忍耐力を鍛えた方がよろしいのでは”――以上です】

「・・・ああ、全く持ってその通りだ」

煙が晴れて完全に気絶した局員たちを眺めつつ、教官はそう漏らす。

演習が始まり既に４時間、いまから本当の狩りが始まる。

「ずっと俺のターン！ドロー！」（前書き）

まともな戦闘描写なくてゴメンなさい。

「ずっと俺のターン！ドロー！」

「ずっと俺のターン！ドロー！」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

■時空管理局本局・地球時間１２月２８日・ミッド標準時　午後２：００■

さてさて、時間は少しばかり巻き戻る。

クロノの要請にウンと頷いてしまった俺は、アースラを経由し一路本局へと赴いていた。

簡単な打ち合わせの為に本局に赴くというのが主な目的である。

序でに演習の為の様々な書類等を作成しなければならないらしく、俺はそれに借り出されたって訳だ。

管理局等は個人的にあまり来たく無い場所だが、報酬が出る以上これは仕事である。

そう割り切り、本局へとやってきたのである。

「あ、来た来た。おーいこっちだよ。クロノ～」

「ロッテ、久しぶり」

本局へと着いた時に真っ先に出迎えてくれたのは、なんとリーゼ姉妹の片割れのリーゼロッテだった。

クロノのお師匠様の一人である彼女は普段は本局武装隊のアシストをしているらしい。

今回俺が協力するという話は既に回るているらしく、その為の書類等を全部用意したとの事。

流石はグレアム提督の使い魔、優秀だな。そう考えていると、

「フェンもよく来たねー。ありがとねー。ほらハグハグ～！！」

「むきゅっ！？」

視界が真っ暗。どうやら引っ張り込まれたらしい。て事はハグかな？

上手く動けない所を見ると、頭ごと抱え込まれているらしい。
冷静に見えるかもしれないが実は結構混乱中。
普通に避けられる速度だったのに何で避けられなかったんだ?もがもが。
「ロッテ。フェンで遊ぶのは勘弁してやってくれ。彼は僕の友人だ」
クロノは何故か安堵のため息を混ぜてリーゼロッテをそう諌める。
安堵のため息はあれか?自分に被害が来なかったという安堵感からか?
何てヤツだ。ヒデぇぞこのヤロウ。
「いいじゃないかよ~。別に減るもんじゃないし」
「ロッテ。時間が減るだろう?」
「ちぇーわかったよ。師匠を顧みないクロ助のけちんぼ――なら代わりにクロ助で」
「断固断る!フェンで気が済むならいくらでも」
「お、おい。友人を売るな」

「さっすが我が弟子！話が判っる～」

「ムキュキュ！？」

友人なのに普通に売られた。人間なんてこんなもんさ。

とりあえず止めてくれと頼んだら彼女は俺を解放してくれた。

むむ、意外とあったかくて気持ち良かったんだが、惜しむらくはこの肉体は今だ子供ということか。

「ふぅ、ビックリした。あ、ロッテさん。お久しぶりです。提督は御息災ですか？あとハグは相手の許可取ってからにしてほしい」

「父様は元気だよ。だけど断る」

「またいつかお話したいと伝えておいてください。今度は英国式でお茶でもいいですね。いやそこは断らないでほしい」

「ンフフ～了解。父様には伝えておくよ」

「二人とも、本題と副題を一緒に喋ってこんがらがったりしないのか・・・」

「「その為のマルチタスクだよ」」

「・・・ハァ、果てしなく能力の無駄だ」

クロノはそう言うと頭を抱えた。どうやらこのテンションについていけなかったようだ。

甘いなクロノ、リンディ茶・・・よりかはましだがまだ甘い。

こういったのは相手の気が住むようにしてノリに乗ってやった方が被害は少ないのだ。

そこん所考えると、まだまだ貴様も若いものよのぉ。

「む、何か変なこと考えなかった？」

「うんにゃ、全然。それよりも、今日はアリアさんは？」

クロノ意外と鋭いな。魔導師だけに感はいいのだろう。

ソレはさて置き、リーゼ姉妹の片割れであるアリアの姿が見えない事が気になった。

「アリアはねぇ。他の武装局員の新人教育プログラム作成で大忙しなんだよ」

「人手不足極まれり、増援は無し・・・か。ご苦労様です」

「なんのなんの。これくらいクロ助弄りですぐに解消よ」

「ま、まってソレは・・」

「では一仕事終えた後はご自由に」

ふん、さっき俺を見捨てた罰だ。思う存分懐かれるがいい。

俺？俺は相手が猫形態になってくれれば問題ないよ。

まだリーゼ姉妹の猫姿は見たことないけど、きっと美人さん何だろうし。

「それじゃついて来て。案内するから」

ロッテの後に続き、管理局本局へと足を進める。

流石は街を一つ内包している大型次元航行艦だけあり、中は非常に広い。

公園すらあるくらい広いのだから、どれだけ本局が広いのかが分かる。

そうなると迷いたくは無いな。迷子のアナウンスとか悲し過ぎる。

そんなこんなで案内されたが応接室だ。

会議室も使えるには使えるが、少人数の打ち合わせならこちらの方

がやりやすい。

そういう気配りが実はちょっとありがたかったりする。

そんな訳で簡単に武装局員ＶＳ俺の打ち合わせをした。

参加人数は約３０名、内数名はそれなりのベテランで他は新しく入った新人共だ。

そして今回の演習は、武装隊に入れて浮かれていると思われる新人共の鼻を叩き折ることにある。

何故鼻を叩き折る必要があるのかというと、陸士訓練学校から武装隊所属になっただけでもそれなりに凄いことだからである。

陸士訓練校での訓練に耐えて、武装隊に入った事でようやく管理局の舞台に上がれたという状況が彼らを浮かれやすくしてしまう。

勿論現実はそう甘いことでは無く、現に何人もの新人が現場での出来事を受け、理想と現実との壁に耐えかねて辞職ｏｒ殉職するのだ。

だから、そうなる前に現実を知ってもらい、尚且つ実戦的な技能を学ばせる為に高ランク魔導師との模擬戦が組まれる訳である。

要するに“テメェらはまだまだひよっこだ。上には上がいる”ということ知らしめ、気を引き締めて任務に当たって欲しいという訳である。

そんな訳で、俺への指示（オーダー）は実にシンプルだ。

【なるべく傷つけちゃいけないけど徹底的にボコれ】

たったこれだけである。あれこれそうしろという命令は一切ない。

出来るなら様々な戦い方を提示し、尚且つそれを身体に覚え込ませることをすればいいらしい。

実に簡単だ。ボコるだけなら超長距離からの狙撃およびガルヴァドス斉射で済む。

だが、それでは何をされたのか判らずに気絶するだけとなり、彼らの実にはならない。

一応演習という形をとる訳だし、彼らの実になるというか経験になる戦い方は必須だろう。

マンツーマンでベルカ式剣術による模擬戦でもいいが・・・ソレでは意味が無い。

飽く迄も此処で必要なことは様々な角度からの“戦い方”を教えることだ。

近接戦は確かに今の管理局武装隊達の経験にはなるが、いずれ近代ベルカ式が広まる訳で俺が態々近接戦闘を教える必要性はあまりない。

そうなるとやはり魔法戦闘技能によるフルボッコがいいのだろうが、武装局員たちとの戦闘技術の差が大きい為、かなりの調整を強いることとなった。

この打ち合わせに付き合ってくれたクロノは、君が魔法でボコボコにすればいいと最初はいっていたが、俺が『下手にやるとシェル・ショック引き起こして使いモノにならなくなるぞ』と言ったらソレだけはやめてくれと言われてしまった。

経験を増やすのは結構だが、ただでさえ人手不足なのに人手を減らすのはやめてくれと。

だが、俺の持つ魔法を考えると、実際そうなりかねないというのが怖い。

主人公組はまだいい、アレらはある意味で異常だからな。

あの年齢で非殺傷であったとはいえ魔法の撃ち合いをしあうとか正気とは思えん。

俺だって最初の頃は弾幕が怖くて怖くてたまらなくて、しまいにゃ慣れたが今でもトラウマだ。

そう考えると一般人上がりの武装局員たちが、砲撃魔法や炸裂魔法を受けて、その精神を普通に保てるか非常に微妙なところである。

一発くらいなら耐えられるかもしれないが、連続して発射するとなると、何時己が吹き飛ばされるんじゃないかという状況になる訳で、下手するとヒステリー起して入院だ。

そうなったら色々と不味いので、基本的にガルヴァドスの連続発射はご法度になった。

序でに砲撃魔法も基本禁止、使っていいのはソレら以外の魔法である。

そうなると俺に残された攻撃手段は、アルアッソーやグロウタスクによる電磁投射魔法レールブラスター。

近接戦闘用デバイスのオートクレールによる魔力斬撃。

そして異世界ハルケギニア式のエミュレートした魔法体系である。

前者に関しては質量兵器である銃を使う敵との戦闘という経験を得られるだろう。

何せ初速が文字通り銃のソレを越えているのだから。誘導なんてクソ喰らえの実戦仕様である。

近接戦闘も経験にはなるだろうが、それよりもアレなのは後者だ。

ハルケギニア式、通称ハルケ式はエミュレート出来なかった虚無を覗いて４属性を扱う魔法であり、ある意味でオーソドックスな魔法使いの魔法形態だ。

今だ開拓されていない未開拓世界の魔法形態として有り得そうなモノでもある。

なにせ使い方によっては気象現象すら操れるのだ。これ程強力なことは無い。

まぁその分ちゃんと考えないと使えないのがネックだけどね。

兎に角、それらを駆使して３０名の武装局員たちと戦わねばならぬのだ。

ソレもなるべくボコボコにするくらいに、である。

何と言う無茶ぶりかと思ったが致し方なし。兎に角戦い方はそういう方面で決まったのだった。

で、とりあえずこれで打ち合わせが終わるかと思ったのだが――――

「あ、そうだ。ただフェンを戦わせるのだと詰らないから、フェンの正体は不明って事で最初から演習地に潜んでいてもらおうかにゃ～」

「「・・・え？」」

このロッテさんのその一言で思わず思考が停止する。

いやいや、それって前日から演習地に籠れってことでしょう？
そんな面倒臭いことをするのは真っ平ゴメンである。
だがそのことを伝える前に、彼女は手にこれまでまとめた書類を持って部屋から出る所であった。

「うんソレが良いね。そういう風に書類通しておくからよろしくね！」

「え、あ！ちょっと・・・行っちゃったよ」

「諦めろ。彼女は思い付きで動くことが多い・・・僕も苦労したさ」

「クロノ・・・」

それ、言ってて悲しくないかとは言わない。
なんとなくクロノから哀愁が漂っていたからである。

そして、ロッテの仕事が早いのか俺はその日の内に演習場へ連れて行かれた。

流石は管理局お抱えの演習場ダケはあり結構広い。

その所為で潜伏しようと考えていた場所以外に、あまり術式を仕掛けられなかったのが残念だが、それでもある程度のトラップとセンサー網を設置出来た。

おまけに今回は発掘作業をしているシランズ達以外を連れてきている。

情報戦においてはより高度な連携が可能となることだろう。

そんな訳で、俺は潜伏場所である“岩場”に籠る為に、ハルケ式の土魔法を密かに使用するのであった。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

■第８管理世界・地球時間１２月２９日・ミッド標準時　午前１１：００■

≪――――ォォォッ――――≫

「・・・ん？」

「どうした？」

「いや、遠くで何か地響きみたいなのが聞えた気がしたが・・・気のせいらしい」

「警戒しろよ。あまり見えないんだから」

「了解・・・。はぁ、それにしても――」

さて、チーム０２が爆散したちょうどその頃。岩場に人影があった。

集団で動いているらしく最低でも隣の人間が見える範疇で行動している。

彼らはこの岩場に第一に乗り込んだチーム０１の人間たちだ。

あちこちで見つかる非殺傷性トラップや設置術式を解除しつつ敵を探索する為に、彼らは今からおよそ2時間前に岩場に乗り込んだのだが――

「――何で、なんで岩場区画から抜け出せないんだ・・・」

――その彼らは、現在遭難の危機に瀕していた。

この岩場は6つあるエリアの内、大小様々な岩石がそそり立ち、長年の雨風で風化して穴が開いた岩によって入り組んだ地形を持つ天然の迷路の様な場所である。

勿論その程度なら現職の武装隊員である彼らが迷う筈は無い。

演習地であるこの地には幾度か訓練をしに来ていたのだから迷いよ

うが無いのだ。

だが現に彼らは遭難していると言っても良い状況に陥っていた。

きっかけは簡単だ。岩場各所に張り巡らされたトラップや術式を解除して回っていると、およそ2時間前に突然岩場に大規模な濃霧が発生し、彼らを飲み込んだのである。

視界１０m確保できればいい方で、それ以上はぼんやりとしか見えない程の霧。

突然発生したそれに驚きつつも演習場では天侯が悪化しやすいことを知っていた。

その為、すぐにまた変わるだろうと彼らは判断したのである。

だがその日は珍しく風が吹かない無風（なぎ）の日で、岩場に立ちこめた霧はまったく消えず、まるで人の侵入を拒むかのように漂い続けていた。

霧が出る前は何度か上空に上がり位置を確認していた彼らであったが、霧が出始めた今地上が見えない為ソレも出来ない。

最悪通信で迎えを寄こしてもらえばいいのであるが、まだ動ける以上ソレをする訳にもいかなかった。

それに他のチームを呼んでも、位置特定が困難な為二重遭難の危険もある。

しかたなしに、霧が晴れてくれるのを待つしかなかった。

「さっき空から見た時はこっちに進めば大丈夫だった筈なんだけど」

「だが現に俺達は霧から抜け出せない。どうなってやがる？」

「その時は霧が出て無かったしなぁ。何時の間にかコースを逸れたか？」

そして霧に巻かれた彼らは現在岩場にあった小さな洞穴に避難していた。

陸戦魔導師が多い彼らの移動は魔法を使わない場合基本的に徒歩である。

転送魔法を扱えるほどの技量を持つ魔導師は戦闘を主にしている武装隊では少ない。

それ故移動は歩きなので体力がかなりある方なのだがそれでも限界はある。

「アリオン先輩、一度休憩なさった方が・・・」

「アホタレ、ココは敵地なんだぞー。どれだけ危険だと思ってんだー」

「で、でも、どちらにしてもこの状況じゃ動けませんし」

「むむ、そいつは確かにそうだが・・・まずいなぁ」

アリオンと呼ばれた活力に満ちた青年は、この世界じゃよくいる美形のお兄さん。

持ち前の元気と独特の喋り方の所為か何処か三枚目感が抜けない残念な人だが、ムードメーカー的な気質により武装隊の誰からも好かれている。

射撃戦を得意としているAランクに限りなく近いB＋ランクの魔導師の彼は武装隊においては副官補佐の様な立場にいる人間だ。

そんな明るい気質を持つ彼でも、この状況には頭を悩ませていた。

突然発生した霧は周囲を薄暗くし、隊員達に精神的な圧迫をもたらしている。

これ程の霧なら風が少しでも吹けば薄れるのに晴れる気配がない。

要するに動くに動けないのだ。

だが敵探査の前に遭難しかけているでは話にもならない。

「（一応3人ずつ見張りと休憩をさせてはいるが――まずいよなぁー）」

選択肢は二つある。一つはこの場に留まり霧が晴れるのを待つこと。

利点としては一番危険性が少ないことだろう。

何処に敵が潜んでいるか判らないのだし、遮蔽物が多い岩場において探査魔法も効果が薄いのだから下手に動き回ると殲滅される危険がある。

敵がこちらと同じ条件とは限らないと考えると、出歩くのはやはり危険であろう。

もう一つは思い切って霧の中の突破を試みることだ。

利点としては敵に位置を特定されにくく出来る事であろう。

だが先にも述べた通り、霧が出ている現在出歩くことは現在位置の特定を更に困難にする。

今ですら霧が発生するほんの少し前に、空に浮かぶ事が出来る局員が上がって現在位置を特定した情報を元に、おおよその位置で特定している状態である。

そして霧が出てしまった今、空に上がるのは危険すぎるし何より岩場が霧で隠れているだろうから見ても位置の特定が出来るか分からないのだ。

ある種の賭けになってしまうのだが、その勝率は果てしなく低い。

「（儀式魔法でも使えりゃよかったんだが・・・俺にはその適性は

無かったしー。どうするかね）」

アリオンは自分に支給された管理局謹製デバイスを見た。
武装隊に入ってからの付き合いである相棒と言えるモノだがこの事態を好転出来る魔法は登録されてはいない。

「先輩？」

「ああ、すまんすまん。それじゃー休ませてもらうぜー」

「はい、その間自分が見張ってます」

「頼んだぜー」

後輩局員に休むよう言われ軽く返事を返すアリオン。

じたばたしても体力を消耗するだけならやはり動かない方が賢明だろう。

洞窟の適当な位置に座りこむと、デバイスから水と食糧を取り出した。

幸い長丁場になるということで全員数食分の携帯食糧を持参させられている。

少なくても腹が減り過ぎで動けなくなることは無いだろう。

「・・・バーベキュー味ね・・・味の改善、した方がいいだろうよーこれ」

ガムの様な触感と“ソレっぽい味”が付加された濃い味スナックの様な携帯食。

本格的な方は文字通り食事として申し分ないレベルだが、演習のあい間に食べる携帯食に味を期待する方が間違っているだろう。

アリオンも思わず不満を口にしていたが、そんなのに割く予算は無いんだろうなぁと思いつつ、不味い携帯食を無理矢理水で流しこむのだった。

≪――――ズズズ・・・≫

――――そして休む為に洞窟に入った彼らは気がつかなかった。

徐々に、本当に少しずつ洞窟を形成している岩が“動いていた”ということに。

霧によって遮られたのは視界に音、冷たい霧の中で彼らは完全に孤立した。

「ん？お前さん何処に行くんだー？持ち場をはなれるなよー」

「いや、その・・・ちょっと、ハバカリに」

「あー、まぁ仕方ねぇなー。洞窟の奥の方でしてこいよー。そとは危険だからなー」

「了解です」

――――だから、彼らは気がつかない。

「・・・ここら辺なら入口より遠いから聞こえないよな」

「・・・ああ、まったくだ」

「・・・え？なゴッ！！！」

――――この洞窟その物が、敵の腹の中であったということを。

「さてと、岩の中に少し入っててもらおうかな」

「！“＃＄％＆‘？！」

「なに、演習が終われば出してやるさ・・・覚えてればな」

「！！！？？？」

「冗談だ・・・イル・アース」

――そして、すぐ近くに彼らの敵がいたということに、まだ誰も気がつかない。

チーム０１、霧の中で籠った洞窟において、一人を除き全員シグナルロスト。

残ったのはアリオン・オルタネータ。

入口付近にて洞窟の異変に気がつきチーム全員を退避させようとした直後、洞窟が突然入口を閉ざした為、彼は０１の中で只一人生き残った。

その十数分後、アリオンのシグナルもロストとなる。

急に霧が晴れた直後の模擬魔力弾による狙撃により意識を失った為、彼は演習が始まってから最初の撃墜判定となった。

――残るチームは、チーム０３。

「ずっと俺のターン！ドロー！」（後書き）

ちなみにフェンはリーゼ姉妹がよく家に来ているヌコ姉妹であることにまだ気が付いていません。

だけどソレも時間の問題無気がしないでもありませんけど。

気が付いたらどんな反応するか楽しみですねハイ。

ソレでは失礼。

「さぁ教育してやろう前編」

「さぁ教育してやろう前編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

■第８管理世界・地球時間１２月２９日・ミッド標準時　午後３：００■

荒野だらけの第８管理世界レフィディムにある管理局演習場。
ちょうど教官と量産型シランがいるところの近くに転移方陣が展開し、シュンという音と共に何者かが転移してきた。よっと、という声と共に転移して方陣の上に降り立っていたのは、ショートカットをした若い女性。

だが、その人物は人ではなく、時空管理局重鎮のギル・グレアム提督の使い魔であるリーゼロッテである。その証拠に彼女の頭にはぴくぴくと動く猫の様な耳がくっ付いていた。ちなみに本物である。

「おそくなっちゃった。ありゃ～終わっちゃったかな？」

周辺が異様に静かなことを受け、どうやら演習はとっくに終わっていたと判断した彼女は、とりあえず事情を聞こうと、この演習に随伴している教官の元へと足を向けた。実は彼女、仕事を終えたら一度この演習の様子を実に来ようと思っていた。しかしこの演習地を使う書類を出した後、姉妹の片割れであるアリアに捕まり、今の今までずっと管理局本局に拘束され、ようやく解放されたのが貫徹を果たしたこの時間であった。

非常勤なのに、私たちアシストなのに！と姉妹が叫んでいたかは定かではないが、それでも貫徹した為かなりお疲れではあった。しかし――

（でも早めに終わってたら～、フェンにブラッシングして貰えるやも！コレは頑張らねば～～！）

――そうやって自分を鼓舞して乗り切り、ココまでやってきたのであった。

ちなみに今だ仕事を続けているアリアには内緒である。あと、彼女は知らなかったのであるが、フェンは彼女が何時も庭に遊びに来る猫姉妹の片割れであることを知らないのである。この場合彼がどんな反応を示すかは神のみぞ知るところであろう。

ソレはさて置き、ロッテはなにやら難しい顔をしている教官を見つけ声をかけた。

「お疲れ様です教官」

「――――ああ、ロッテさん。お疲れ様です」

「演習～、は・・これ終わってるんですよね？」

一応、ロッテは親しい人がいない時には敬語を使っている。
ギル・グレアム提督の使い魔である以上、グレアムの品位を下げない様最低限の努力はしているのだ。

「ええ、ミッド標準時、午後２：４５頃には終わってます。今は休憩・・・というか救出ですね」

「はぁ・・・休憩と、救出？」

教官の口調から察するに、演習が終わったのはついさっきなのだろう。
だが、随分と長引いたモノだと彼女は思った。てっきりあの軍人崩れの少年のことだから、軽くトラウマレベルの魔法行使でもしてとっくに終えているモノだとばかり思っていた。

というか、先程の教官の台詞に聞き捨てならない単語が混じっていることに気がついた彼女は聞き返した。救出だなんて物騒な、誰か大けがでも折ったのか？それとも不測の事態でも起こってしまったのか？救出と聞いてそんな考えが頭をよぎる。

だが教官は彼女の問いに首を振った。別にそれほど大したことでは無く、非致死性のトラップに引っ掛かった武装局員を助けに行っているだけであると言葉を返してきた。ソレを聞いて彼女は胸をなでおろした。怪我人なら別に良いが、流石に死人が出るのはあとで色々と大変だったからである。主に自分の仕事が増えてしまう的な意味で・・・。

「それにしても、長引きましたね。てっきりお昼前には終わっているモノだとばかり」

「いや、相手の実力を考えれば演習開始１０分で片はついていたと私は思います。というよりもロッテさん、相手は一体全体何者なんですか?新人が多いとはいえ武装局員がココまで手玉に取られると今まで教練してきた我々の立場が無いですよ」

教官がそう思うのも無理はない。何せ、どう考えても相手は魔導師ランクが最低でも武装隊の平均より3以上はある人物だと考えられる程、その戦闘能力は異常であったのだから。ロッテは教官に訪ねられるモノの、一応フェンの正体は隠しておこうということを打ち合わせの際に決めていた為、とりあえず今回は適当に誤魔化すことにした。ネタばれしたら面白くないのだ。

「うにゃ、いや～その・・・禁則事項です?」

「何故疑問形?」

「あ、いえその～・・・ご本人の希望で匿名ということで演習をお

願いしたんですよ～。あれほどの戦闘技能を持つ魔導師はそうは居なかったので助かりました。――あ、一応身元は父様、もといグレアム提督が保証しているので大丈夫です」

匿名と説明した時、教官が怪訝な顔をしたので、慌てて誤魔化す。まぁ実際グレアムとは面識がちゃんとあるし、あながち間違いではない。

やや苦しい言い訳ではあったが、そこら辺は教官の方が空気を読んでくれたのか、それ以上聞いてこようとはしなかった。

「そうですか・・・ま、いいですがね」

「そ、そうですよ。ところで武装隊の面々はどちらに？休憩しているとさっき聞いたのですが？」

彼女はとりあえず話題を逸らそうと、姿が見えない武装局員たちのことを訪ねた。

教官も一応興味本位で聞いてみただけなため、不覚追及する事もなかったので、話題は代わり今度は武装局員たちの話へとシフトした。

「連中でしたら向うでくたばってますよ。今回の演習はかなり堪えた様です」

教官が指差したのは少し先に見える丘陵。

ココから出は見えないが、どうやらその向こうにて休憩しているようだ。
普段はアレだけ騒がしい連中が随分と静かになった事に彼女はにんまりと笑みを作り上げた。

「ソレはよかった。無事に鼻を叩き折ることは出来た様ですね」

「ええ、それはもう――――充分過ぎるくらいに」

そう、この演習の目的は新人の鼻をへし折る事にある。
模擬戦による戦闘技術の継承ももちろんあるが、影の主目的はまさにそれなのだ。こうやって上には上がいることを知らしめることで、余計な反逆心をおさえこみ、それでいてもっと高みへと登ろうとさせる反骨精神を育ませるというのも含まれている。

まぁ時たま戦技教導官が張りきり過ぎて、善意による不幸な犠牲者もごくまれに出るが、それでもやるのとやらないのでは、やった方が効果があると言うことで続けられてきたものだ。

「それにしても、１０分ねぇ～。本当にソレ位で片が付いちゃうくらいでした？」

「ええ、あいつ等は良い様に手玉に取られてましたよ。岩場エリヤでは洞穴の岩を操ってチームごと閉じ込めたりと本当に摩訶不思議な戦い方を教えてくれました。きっと大地関連の希少技能でももっているんでしょうなぁ。ちなみに結局の所、直接交戦したのは最後の２０分くらいです」

「さ、直接交戦が最後の２０分～！？じゃそれまでは？！」

「ずっとトラップの排除、及び持久戦でしたね。何せトラップ以外の一切の痕跡が無い。最初なんてトラップだけで実は敵はいないんじゃないかとこっちまで錯覚したくらいで」

ロッテは吃驚して思わず声を荒げていた。別に情けなくも敗北した武装隊に対してではない。

フェンの持久力と精神のタフさに驚いていたのだ。つまりフェンは態々演習をギリギリまで長引かせ、相手が疲労で注意力散漫になるのを狙っていたことにすぐに気がついたからだ。

「まぁ新米ばかりでしたので、これからもっと訓練に励んでもらえればいいですね。あ、何なら最後の直接交戦した所でも見ますか？」

「映像？そんなのあるんですか？」

「ウチの用意した機材じゃないんですがね。おい、頼む」

【了解】

「・・・」

「・・・」

「教官殿、それは？」

「打ち合わせの手紙と共に転送されてきました。今回の演習の為に相手が貸与したメカです。ご存じなかったのですか？」

「ああ、えっと・・知ってはいたんですが実物を見るのは初めてで」

そう言いつつレドーム搭載量産型シランを見るロッテ。

そう言えば一人ではキツイから手伝いを持ってきていると打ち合わせで聞いていた様な気がする。持って来ているとはどういうことだと思いつつもつい流してしまっていたが、ソレはこういうことであったかとロッテは思った。

どうやらこのシランがこれまでの戦闘の映像を記憶しているらしい。シランは教官より前に出ると機体に取り付けられた装置を用いて空間にモニターを投影した。どうやらかなりの技術を投入されているらしく、管理局が使用している通信装置の投影モニターとさほど変わらない。これで実は元々は廃品であり、ソレを解体したり魔法で分解再構築されて作られた代物だと聞いたらどう思うことだろう。

【映像記録、ファイル０１再生します】

機械独特の無機質な音声と共に、空間モニターに投影されたのは、信じられない程近場で撮影されたと思われる映像達であった。そう、なんていうか・・・まるで映画のような臨場感なのである。時たまカメラワークが移動している所なんて文字通りそれだ。これにおあつらえ向きのＢＧＭとかを入れればそのまま武装隊の宣伝映画として放映出来そうである。

サーチャーでも使ったのかと思ったが、ソレにしては武装局員たちが気が付いていないのはおかしい。あれで一応訓練を詰ませた武装隊なのだ。サーチャーや探査魔法については隠蔽されていても見つけられるくらいの地力はこさえてあるはずなのである。だが、映像を見る限り誰ひとり撮影されていたことに気が付いていなかったようなのだ。一体どんな手品か。

まぁ種を明かすと理由はかなり単純なもので、これを撮影していたのは今映像を映している機体とほぼ同じ量産型達である。その量産型達は魔法では無く科学式の光学迷彩装置が搭載されていたのだ。

サーチャーの様な魔法ならその存在を感知出来ても、完全な機械式を用いた魔力を使わないタイプには慣れていなかったのが、武装局員たちが察知できなかった理由だろう。誰だってまさか自分のすぐ近くに蜘蛛型機械が姿を消しているなんて思わないのだから仕方が無いことである。

尚、妙にカメラワークが上手いのは、独自のネットワークを持つ彼らが映像データをリンクして撮影したからである。つまり一分隊に1カメさんと2カメさんが絶えず追随していた様なものなのだ。ちなみにそいつらは不測の事態に備えての救出要員でもある。

「あーら、あらまぁまぁ・・・随分とだらけ切ってることで」

映像には演習が開始してからの4時間分、程が殆どトラップ回避の時間に費やされ、ソレによって油断しきった02分隊が殲滅させられる映像が映し出されていた。

砂の中に潜んでいた何者かが、くっちゃべっている新人達3名を瞬く間に捕獲して拉致していく様も収められており、スロー再生をしてもらったがかろうじて人型であると言うことが分かる程度の映像しか映っていなかった。その後人型は転移魔法で確保した局員と共にその場を離脱。後には誰も残らない。

最終的に０２は固まっていたところを彼らが向かっていた岩場エリヤからの超長距離爆撃魔法の高圧縮魔力弾頭一発で全員吹き飛ばされて意識を失っていた。映像には気絶し撃墜判定がなされた彼らが、待機していた量産型達に連れられて行く様まで映っており、アフターサービスまで万全で有った事を思わせた。

そして先に岩場エリヤに到着していた０１も、０２が爆撃で吹き飛んでいたのとほぼ同じ時刻に、突然発生した濃霧の所為で洞穴に退避せざるをえなくなった所も映し出されていた。狭い洞窟の筈なのに、天井から映したかのような上から視点の映像まであり、局員たちの息使いまで聞こえてくるかのような臨場感がそこにはあった。

先の部隊ほど油断はしていないし、リーダシップを取っている先輩局員はやや軽いところはあるがしっかりと現状をどう打破するか考えているようにも見えた。だが、ロッテは０１分隊が避難していた洞窟の映像の隣に映し出されていたもう一つの映像の方に気がついた。それはその洞窟の上に立つ人型の影、濃霧の所為で見え辛いが明らかに武装隊の魔導師では無いその特異なシルエットを見て、ロッテはそれが誰なのか瞬時に判ってしまった。

そこに居たのはＢＡ?を展開したフェンであった。彼は持久戦になるように演習場で策を巡らし、その為に自称魔力消費が一番少ないＢＡ?を装備して行動していたのであろう。彼はその手に自らの

慎重とほぼ同じ大剣を持って洞穴の上に達、何か魔法陣を展開している。

一見すると魔法陣はミッドやベルカの類と同じに見えたが、よく見ると細部が全く違う魔法陣であり、長年使い魔をやってきた自分でも理解できない魔法であった事にロッテは驚いていた。多分よほど注視しない事にはその魔法が自分たちの魔法とは全く異なるモノであった事すら気がつけない魔法であった事だろう。

事実ロッテが思っている通りであり、その魔法陣はハルケギニアの４大魔法をエミュレートした魔法であり、用心の為に演習中はミッド式そっくりな魔法陣を展開して運用していたある意味で未知の魔法であったのだから。

ちなみにこの魔法は元が魔法陣を必要としない為、慣れれば魔法陣無しでも使用する事が出来る。ロッテが気がつけたのは映像を注視していた事と、クロノの魔法の師匠を自称していることもあり、自ら魔法を組むと言うこともしていたからである。

ソレはさて置き、映像の中のフェンは偽装魔法陣を展開すると、徐々に立っていた足場の中に吸いこまれるかのように沈んでいく様が鮮明に映されていた。よく見ると足場にしていた洞窟を形成している岩が細かな砂となり、流砂に入りこむかのように沈んでいくのが見て取れた。音を全く立てることなく、フェンはその流砂の中に入り込み、モノの数秒で岩の中に入り込んでいったのだった。

映像は切り替わり今度は洞窟の奥の方に映像が切り替わる。誰もいない薄暗い洞窟、少ししてその天井から砂が零れ落ち、音もたてず静かにフェンが舞い降りるのが確認出来た。ただ、どうやら暗視装置を用いての映像なため、恐らくその場に人がいても真っ暗で気

が付かれないということは確実であった事だろうとロッテは思った。

それにしてもてっきりＰＴ事件の時の様に、ド派手な戦闘行動を見せてくれるのかと思っていれば、何と言う地味な戦い方であろう。あまりの泥臭い戦闘方法に、これでは魔導師では無くて暗殺者みたいじゃないかとロッテは思った。じわじわと姿を見せることなく、徐々に相手を罠にはめるなんて何て卑怯臭くて効果的な手法なのだろう。

ここまで考えてロッテはハッとなった。

そうだ。こうも簡単に武装隊が引っ掛かる原因は、武装隊は経験が足りない分搦め手に非常に弱いからだ。もしやフェンはそのことを伝える為に態々こんな面倒臭い戦い方で臨んでいるのではないか？しかもたった一人で。ロッテはその考えに至った時、何とも言えない戦慄の様なモノを感じ取った。

彼がいた世界は３０年前に次元航行炉実験施設の暴走によって消滅しているが、もしもあの世界が消滅せず、彼の様な優秀な兵士と呼べる魔導師が数多くつくられていたら、そしてそれが時空管理局と敵対してしまっていたら・・・。そう考えた時、まず勝つことは出来ないという結論に至ってしまう。

「・・・敵にしないでよかった」

「まったくですよ。民間人でこれ程の戦い方を知っているなんて凄まじいの一言です。民間協力者ということですが、これからも味方でいて欲しいものですな」

「あはは、たしかに・・・」

自分たちの計画していたアレのことを思うと、最初は敵対していた可能性もあった。策を巡らすことについてはフェンよりも上である事は理解していたが、もしあのまま闇の書封印計画が進んでいたら普通に敵対していたことになる。あれ？直接戦闘じゃ勝てる気がしない。

「次が唯一の直接戦闘があった０３分隊の映像ですロッテさん」

「演習開始から7時間後、ココまで戦闘と呼べるものは一切なかったんですね」

「ええ、次の戦闘も本当に次元の違いを思い知らされましたよ。まさかあんなに小さい人がこれほど強いとは思いもよりませんでした。顔が隠れて年齢が不明なんですが、何歳くらいなんでしょうね」

「ああっと、まぁソレも秘密ということで」

「・・・そうですか。まぁとりあえず続きを見ましょう。シラン、頼む」

【了解】

シランは教官からの一言で何をするのかを察し準備する。それにしても何時の間に仲良くなっているのであろうか？まぁ仲良くなったと言うよりかは教官が扱い方を心得たんだなろうなとロッテはそう思い、シランが映し出した映像に意識を向けたのだった。

＊＊＊

■第８管理世界・地球時間１２月２９日・ミッド標準時　午後１：００■

「はぁ！はぁ！はぁ！」

――ありえない。あり得ない！岩が自分で動いて皆を捕まえて洞窟を塞ぐなんて！

前が見えないくらいの霧の中、息を切らせながら駆けるのはアリオン・オルタネータ。

０１分隊唯一の生き残りである彼は、急いでまだ他の分隊と合流を果たしてこの異常性を伝えようと必死に足を動かしていた。

アリオンは見張りを交代する為に洞窟の入り口に行き、外に居た見張りを交代した直後に洞窟内から聞こえた悲鳴に驚いて急いで引き返そうとした。だが、無情にも洞窟の入り口は彼が中に入る前に、まるで生物が巨大な顎門を閉じるかの如く閉ざされてしまい、彼は外に一人放り出されてしまったのである。

無音しか無い濃霧の中、ＢＪを展開している筈なのに身体が冷たくなったかのように感じたソレは恐怖。助けられたかもしれないと

思う前に、後少し外に出るのが遅れていたらと考えた時、彼は恐怖に襲われたのだ。

「はぁはぁ！クソ！クソ！どうなってるんだー！！」

魔力で強化した身体で駆け抜けようとするも、濃霧により視界が限定された中を走ろうとするのは困難であった。しかも只の場所では無くここは大小様々な岩がそそり立つ岩場なのである。何度も転んでは起きあがり、ＢＪのお陰で傷一つ付かなかったが、それでも彼は駆けることを止めず、身体に土を付けながらも駆け抜けていった。

急いで駆けるのは救援を呼びたかったと言うのもあるが、それよりももっと根幹には兎に角怖かったというのがあったからだ。魔法探知を全力で働かせているのに遮蔽物が多すぎて感知しづらいこの状況に彼の精神が圧迫されていったのは言うまでも無い。

「はぁはぁはぁはぁ、ああー！！くそー！！！」

ミルクの中に居るかの様な濃霧。幾ら走っても晴れない視界が彼を追い詰める。

だが立ち止まれなかった。立ち止まったら仲間たちと同じ様に岩の中に閉じ込められてしまうのではないかと思って。アリオンはコレが演習であることを忘れ、後ろから得体のしれない何かが追いかけてくるのではないかという恐怖に怯えてしまっていた。恐怖に呑まれてしまったのだろう。

岩の中に仲間が閉じ込められてしまったという事実が、先が見えない視界が、それなのに無音で風の音一つしないこの演習場という環境にたった一人でいると言う状況が、彼から正常な判断能力を奪わせる原因となってしまっていたのである。だからだろう――

「はぁはぁ――――ハッ！？」

――――突然、目の前の視界がハッキリとなった事に驚き、脚を止めてしまったのは。

今の今まで濃霧に覆われていた視界が急激に晴れてしまい、空が見えている。

それこそ今まで濃霧の中に居たのは夢だったのではないかと思えてしまうくらいに、突然視界が晴れたことに驚いたのだ。後ろを見ても只岩場があるだけで他には何もない。数秒前まで霧に覆われていたなんて思えない程、空気が澄んでいる。

アリオンが第９７管理外世界出身の、特に東洋の島国「日本」出身の人間であった事なら、狐か狸に化かされたのでは？と思ってしまいそうであった。だが、霧は消えたが彼は今だ仲間と合流もしていなければ、敵を倒した訳ではない。

――――つまり。

『・・・ステンバーイ、ステンバーイ』

――アリオンは全く気が付いていなかったのだ。

『・・・ハートショット、エイム』

――ココが今だ“敵の射程圏内”であったと言うことに

≪――――ドシュン≫

「ガッ――――」

辺りを見回して立ち止まっていたアリオンは、突然背中に何かを叩きつけられたかのような衝撃を受けてバランスを崩し、無様に前に転がった。背骨をグチャグチャに叩き折るのではないかと思えるほどの衝撃に、肺から息が全て吐き出され、痛みから吸うこともままならなくなり意識が茫然とする。

だが、落ちそうになる意識の中彼はこう思った。今の痛みは知っている痛みだ。そう、よく教官から叩きこまれた純粋魔力による衝撃じゃないか・・・そうか、相手は、敵は魔導師だったのか。視界が真っ暗になり意識を失う直前、彼は得体のしれない安堵感に包まれたのであった。

意識を失ったアリオンのすぐ近くの空間が歪み、まるで空間に滲み出すかのように人型が姿を現した。光学迷彩魔法ミラージュハイドを展開していたフェンが魔法を解除したのである。その手には大型ライフル型の兵装デバイスであるグロウタスクを持ち、グロウタスクの砲身から魔力残照の煙が立ち上っている。

フェンは気絶したアリオンの足首を無造作に掴むと、彼を引き摺って歩きだした。彼が向かう方向には０３分隊が来る筈のルートがある。そして、おあつらえ向きの広場まで・・・。

≪ズズズ・・・ズズズ・・・≫

成人男性の肉体を引きづりながら、自らが纏う分厚い鎧の中で、これからやろうとしていることを思い浮かべ、フェンは面白そうに少しだけ口角を歪ませていた。

見る者からすれば、それは大層嗜虐的な笑みだと見て取れたことだろう。ソレはあながち間違いではなく、戦闘によって興奮した彼は少しだけサディスティックな感情が出始めていたのである。

フェンは格納領域にしまわれている、かつてプレシアをアリシア要り生体ポッドと共にフィッシングしたあの頑丈なワイヤーと取り

出して罠を設置する準備を始めた。

さぁ教えてやろう、これから見せるのは戦争でよく行われている行為だ。

ソレを見られるなんてお前らは運が良いぞ、とフェンは思考を巡らしつつ、静かに歩を進めていった。

「さぁ教育してやろう中編」（前書き）

今回は長めであるのに中編です。

「さぁ教育してやろう中編」

「さぁ教育してやろう中編」

――――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――――

Ｓｉｄｅフェン

随分手間と時間をかけてやったが、これで残る分隊はあと一つ。

油断への警告、未知への恐怖、そしてメは直接戦闘とくらぁ。

ああ、ちょうど良い“餌”も手に入れたし細工も上々。

連中がどういう行動をとるのかが楽しみだ。

・・・若干体形の違いから、運ぶのが大変だったけどな。

『うわ、絶対マスター悪いこと企んでるって顔してる』

あん？仕方ねぇだろヴィズ。今の今までずっと我慢してたんだ。

これくらいのお楽しみがなきゃ詰らんし終われないぜ。

それに近場に折角のおあつらえ向きな空間もあることだしな。

周囲を岩壁に覆われた空間で入口と出口くらいしか侵入口が無いこの場所。

おまけに今こっちに向かっている連中の通るルートにある。

ああ、楽しみ。何と言うか脳内麻薬がいい感じで出てて気分が良い――――

【主殿・・・こわいれすぅ・・・あぅ噛んじゃった】

『まぁ、確かにこちらも退屈との戦いでしたもんねぇ～

・・・ってどしたんです？いきなりかがんじゃって？』

リンに怖がられた。鬱だ、死のう。後、噛んだのが可愛いぞ。

『ってどんだけショックだったんですか？！早まったらダメですよ！』

ＨＡＨＡＨＡ，軽いＵＳＮジョークさ☆俺がこのくらいでへこたれるもんかね。

・・・さて、ジリーノを口にいれまして、と。

『全然軽くないですよ!?
むしろ現在進行形でおもいっきりへこたれてるじゃないですか!?』

【えへへ、可愛いって言われちゃったのです】

『そこに反応する普通!?ああもうヤダこの人達』

「【ごめんちゃい】」

やかましいぞヴィズ。大声を上げて気がつかれたらどうする?
まぁ、今の所周りには誰もいないんだが・・・。

「・・・」

『・・・』

【・・・】

『とりあえず、真面目に行きません?ヒマだったのは判るんですけど』

「確かにちょっと調子に乗り過ぎたな」

【でもリンは楽しかったと思うですぅ】

さて、いい加減真面目な思考に戻ることにしよう。

概略を説明すると、俺達は敵の捕虜一人を確保。現在ある目的の為に連行している。

ポイントとして、ここでは余計な制約である捕虜への規定は設定されてはいない。

本作戦においてはそのことを最大限に利用させてもらう。

作戦の概要を説明すると単純明快、使い古された囮作戦だ。

この捕虜を予測される敵の進行ルート上に設置、敵分隊が倒れている味方を発見し、近寄り次第各個狙撃にて撃破する。

近寄らずに様子をうかがった場合、又は狙撃を防御した場合は直ちに作戦を変更。

ミラージュハイドを用いた奇襲による近接戦闘へと移行する。

――概略は以上だ。

「・・・・」

『予定通りのルートを進行中。ポイント37にて待機・・・？マスター？』

「・・・いや、まぁ自分で考えたんだが、結構倫理観に問題あるよなコレ」

『今更ですよ』

「ソレもそうか」

まぁ連中には是非とも考えてもらうことにしよう。

自分たちの命が大切か・・・それとも他者の命が大切なのかということを。

正義を歌って捕虜を助けようとして全滅するか。

それとも目的の為に涙をのんで敵を先に撃破するのか。

両方助けるというのが叶うのはフィクションの中だけだ。

だから悩め、葛藤して苦悩しろ、煩悶を重ね、追い詰められろ。

自分たちがいる立場が一体どういうものなのか。

戦闘を行う者の定命とはいかなるものかを知れ。

戦うということを選んだ貴様らが悩めるのは――今しかないのだから。

『――とかカッコいいこと言っても、マスターの肉体は８歳児～♪』

「いや、そこでおとすなよ！？」

そう言えば俺もう成長しないんだよね。

・・・リインフォースとそうだんしようかな。くすん。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

■第８管理世界・地球時間１２月２９日・ミッド標準時　午後２：００■

アリオンがフェンによって捕まってから１時間後。

ようやく０３分隊の７名が、荒れ地方面から岩場へと到着した。

何せ荒れ地は何もない場所であったが、なだらかな丘陵が多く点在している上。

元々が空戦魔導師達が使う場所だった為に、非常に広かったこともあり、彼らは到着が遅れていたのだ。

「・・・ダメです。定期通信がつながりません」

歩きながら新人で女性の武装局員デバイスを介した通信を試みていた。

所謂定期通信というヤツであり、お互いが無事かどうかを確認するモノだ。

だが定期的に行っていた筈の通信モニターには砂嵐が映り込んでいる。

「ジャミングされているって訳じゃないんだなレイニア？」

「はい、どちらかと言えば送信先が無いって感じです」

「やはり、０１分隊も落されていたか・・・気が付けば我々しか残っていないとはな」

「０２とも随分前に通信取れなくなっていますし、どうしますリビエラ先輩？」

リビエラと呼ばれた蒼い髪の女性は、一応この中では最年長の女性武装局員である。

ちなみに年齢は・・・歳である。あれ？何故この部分だけモザイク

が・・・？

まぁソレはさて置き２０代である彼女はやはりそれなりに年長さんだ。

そしてこの０３分隊の中では年長であることもあるが、一番の古株でもあった。

それ故、彼女はこの分隊の指揮を執ることになるということに反対する人間はいなかった。

彼女以外が全員新人で指揮経験が無いというのだから、仕方ないことであるといえた。

「そう、だな。とりあえずレイニア。通信はもうしなくていいから策敵魔法の方に力を割いてくれ、頼んだぞ」

「了解です！任せてくださいリビエラ先輩！蟻んこ一匹見逃しませんよ！」

レイニアと呼ばれた通信を担当していた娘は、リビエラから頼まれたことに喜んで敬礼を返し、そのままデバイスのリソース配分を周辺の策敵に切り替えていた。

それを微笑ましそうに見やりつつも、彼女はマルチタスクで思考を分割して、敵がどう出るかを考えていた。

他の分隊がやられたのは、数時間ほど前だろう。

救援の通信が来なかった所を見ると、奇襲か何かで瞬時に倒された。

もしくは、通信が出来なくなるほどの混乱が起きたかのどちらかであろう。

定石で考えるなら、次もまた奇襲か何かを行って来る可能性が高いとリビエラは思考していた。

その為、己がもつ杖型デバイスの柄を握りしめながら、すぐにでも結界が張れるように待機させて準備を行った。

奇襲に関してはそれくらいしか対応策が無かったからでもある。

只でさえ岩場で視界が悪く、足元も岩だらけで動きづらい場所だ。

何処に敵が潜んでいるか判らないこの状況は、非常に疲れる。

口には出していなかったが、その雰囲気は新米達も感じ取れたのだろう。

何人かがそわそわし始めている。精神的なタフさがまだ足りないからだろう。

こうして無言なのに騒がしい空気の中彼らは歩を進めた。

だがそんな中、周囲を警戒していた男性武装局員の一人がぼそり

と不満をこぼす。

「・・・俺達だけになるなんて、俺達武装局員なのに・・・」

「私語は慎めコルト。喋る暇があるなら周辺を警戒しろ」

「リビエラさん、そうは言ってももう俺達しか残ってないんスよ？敵も見つけられないのにどうやって――」

「だから私らが態々動き回って探っているんじゃないか。ほら口動かす前に足を動かせ」

「・・・了解」

コルトと呼ばれた男性武装局員はしぶしぶといった感じで警戒を再開する。

その顔には自分は不満であると言った感情が駄々漏れである。

「そう腐るな。どちらにしても、もうすぐ終わる。勝てるかは別にしてな」

「何でもうすぐ終わるんスか？」

「なに、理由は簡単さ。――もう私ら以外に分隊は残ってないだろう？」

リビエラの言葉を聞いた時、コルトは最初キョトンとしていた。

だが少ししてその意味を理解した。

つまり、自分たちが最後なのだから敵は絶対に此方を狙う。

もしかしたらすぐ近くの岩場の陰に潜んで魔法陣を展開して待ち構えているかもしれない。

ああ、クソ！だったらこんな所に居ないで逃げれば良いのに！

コルトはそう思いつつも、結局は言いだすことが出来なかった。

どちらにしてもこの演習を終わらせるには、敵味方どちらかの殲滅が必要だったからであった。

「――ん？」

「どうしたレイニア。敵か？」

すこしして、周囲を警戒しつつゆっくりと移動していると。

突然レイニアが何かに気がついた様な声をだした。

一瞬敵を察知したのかとレイニアに近寄ったリビエラは問うた。

「い、いえ。魔力反応を探知したので・・・恐らくパターンからしてアリオン先輩の」

アリオンだと？０１分隊のほうにいるアリオンの反応が近くにある？

すくなくてもレイニアが持つ探査圏内に居るということは確実であろう。

しかし、０１分隊は通信が途絶して久しい。どういうことなのだろうか？

リビエラはアリオンがこんな所に居る理由が判りかねるので、どうするべきか考えをまとめようとしていた。

「他に反応は？」

「ありません。アリオン先輩だけです。方角はアッチの方です」

そう言って自分たちが向かおうとしていたルートの方を指し示すレイニア。

何かがおかしい、いやむしろコレは罠と見るべきなのか？

そうリビエラは思考していたがそれを遮るかの如く他の武装局員たちがザワザワと騒ぎ始めた。

リビエラは声を上げてソレを諫めた。

「騒ぐな！警戒を続行しておけ！――そしてレイニア、どこだ？もしかして向うも合流しようとしているのではないか？」

「それが、全く動かないんです。それどころか魔力反応も小さいんです」

「怪我を負ってるんだ。きっと！０１分隊に何かあったんだよ！」

話を聞いていたコルトが声を上げて叫んだ。

「コルト、憶測でモノを言うのはやめろ」

現状何が起きていたのか不明な以上、迂闊に動くことは出来ない。

年長者であるリビエラはそう判断し、今にでも飛び出しそうなコルトを諫めた。

しかしコルトは落ちつくどころか逆に興奮していく。

「何言ってるんスか！この近くにアリオン先輩がいるって事は判ってるじゃないッスか！
きっとなにか不測の事態が発生したからこんな所に居るんスよ！」

「だがソレはお前の憶測にすぎんだろう？」

「でも、動かないのは怪我をしているのかもしれない、だから通信を入れられなかったんだとしたら理屈は通る！俺は仲間を見捨てる様な真似は時空管理局の武装隊員としてしたくないッ！」

「・・・なら、なおさら岩場から撤退しなければならないだろう」

「リビエラさん！」

「まぁ聞け。なにか不測の事態が起こったにせよ。我々は管理局の武装局員だ。
原因が分からないまま逃げかえったとあっては今まで訓練してきた意味が無い」

激昂しかけるコルトを制し、リビエラはデバイスを手に取りながらそう言った。

リビエラも武装局員だ。仲間が危機に瀕しているのであれば助けたい。

だが、ソレをするには情報が圧倒的に足りないのだ。

ただ突っ走るだけでは、状況が好転することはあり得ない。

時間はたっぷりとあるのだ。状況を把握したうえで、何をすべきか判断しても遅くは無い。

「これより味方の探索に向かう。奇襲も有り得るからな。各員警戒

を怠るな！」

「「「「「了解！」」」」」

「レイニア、コルト。斥候（スカウト）を頼めるか？」

「「任せてください！」」

探査系の魔法が得意なレイニア、戦闘力が高めなコルトを組ませ斥候にだした。

先行する彼らの後を、リビエラを含めた5人が駆け抜けていく。

岩場は足元が不安定で走りにくいが、魔法で身体能力を強化できる彼らは本気を出せばそれほど苦にはならない。

「そう言えば荒れ地に残してきた3人は呼ばなくても？」

「うぐ・・・うむむ、呼んでも構わんのだが・・・う～ん」

「おいおい、リビエラ先輩はあいつのことが苦手だったのを忘れたのか？」

「あ、そうか。ならしょうがないね」

「・・・勘違いをしている様だから訂正させてもらう。アレは確かに苦手だが、だから呼ばない訳じゃない。作戦行動として分隊の全滅を避ける為の処置だ。そうだ、きっと、めいびー」

どうやら公私を分けるリビエラであっても苦手とする人間がこの分隊にはいるようだ。

ソレはさて置き、彼らは最初にアリオンの反応があった場所へと駆けていく。

やがて壁の様にそそり立つ岩を3~4つほど通り過ぎた頃であろうか。

気が付けば周囲の岩が高くそびえるようになり、岩と岩との間に出来た道を走っていた。

どうやらその昔川だった場所が干上がった場所の様だ。

太古に流れた水により、ヤスリをかけたかのように削られた岩肌からは地層が露出している。

地球で似た景色を探すなら、カッパドキアとグランドキャニオンを足して割った様な地形だといえることだろう。

全体的に赤みを帯びた砂岩が風によって削られ、波紋状の景観を生み出しているのが見える。

演習場ではあるが、自然の大いなる姿は否応に目に留まる。

やがて彼らは、自分たちの身長を遥かに超える壁がそそり立つ峡谷の様な所に入った。

峡谷の中だが落石などにより岩はゴロゴロしている為、遮蔽物は沢山ある。

「ハァ、ハァ――み、見つけた！あそこっ！」

先行していたレイニアが指差す先、そこには壁に引っ掛かる様にして倒れているアリオンの姿があった。

完全に意識を失っているらしく、今にも落ちそうになっている。

それよりも、目に見えて問題があった。

「お、おい。アリオン先輩の周辺。なんか赤くねぇか？」

「ホントだ・・・もしかして、アリオン先輩怪我してる?!」

「ち、血ィ～～!?」

アリオンの周囲の岩壁には赤い何かが付着している。

見ようによっては色の加減から血の様に見えるソレを見て彼らは動揺した。

アリオンはもしかしてこの渓谷に落ちたのではないか？

ＢＪを展開していても、とがった岩が沢山ある岩場である。

そこを転がり落ちれば無傷では済まない。
もしくは敵と交戦して大怪我を負わされたのかもしれない。

「ええい落ちつけ！とにかくヤツの治療が必要だ！誰か治癒魔法を習得していないか？」

「自分たちが使えます！」

「よし、いってこい！」

治癒魔法を使える局員2人がリビエラの指示のもとアリオンの所へと駆けた。

リビエラは彼らを見送りつつ、一体何が起きたのかを調べようと周囲の探索を行う様に残った局員に指示を出した。

これがもし事故で、アリオンが重傷を負っているのであれば、演習はすぐさま中止しなければならない事だろう。

それに他の武装局員の姿も見えない事から、これは罠の可能性もある。

だが、分隊の中で一番策敵能力が高めのレイニアが何も言ってこない所を見ると、周囲には敵は居ないのだろうとリビエラは思っていた。

ソレが完全な間違いである事に気が付くのは、このすぐ後のことだった。

さて、治癒魔法が使える武装局員2人は既に先行しているレイニアとコルトと合流。

そしてアリオンが横たわっている岩壁のところへと、共に岩肌をよじ登って行った。

彼らは陸戦魔導師なため、空を飛ぶ魔法が使えない為である。

一応もしも落下した時用に耐衝撃緩和魔法を準備してあるしＢＪもこの高さならギリギリ大丈夫な高さであるが、怖いモノは怖いのだろう。

レイニアとコルトが昇って行く2名を下からフォローし、彼らは誰ひとり落っこちることは無くアリオンの元へと辿りついた。

周囲の岩壁にはべっちゃりと赤くて粘着性のある鉄臭いモノが付着している。

これ程大量のを見たことは無いが、鉄の匂いから考えてコレは血ではないかと彼らは判断した。

とはいえ、血だまりが出来るくらいになっているのを見たことなんて無いので、若干顔色が悪くなってしまったが兎に角治療の為に

治癒魔法陣を展開していった。

「・・・？」

「おーい！どうした！」

リビエラが教官に連絡を入れて演習を中止させるべきか悩んでいたその時。

治癒を使う筈の局員たちの動きが止まっていることに気がついたコルトがしたから声をかけた。

「いや、アリオン先輩なんだけどー！怪我して無いんだよー！」

「なんだって！？だってそんなに赤いのにか？」

「ココからでも赤い血が出ているのが見えるのに・・・」

まさかの事態に困惑するコルトとレイニアであったが、遠くからソレを聞いていたリビエラは、アリオンが全くの無傷であるということに疑問をもった。

現状を鑑みて――――怪我をしていないだと・・・不味い！

彼女は罠だということに気がついて、すぐさま大声を上げていた。

「アナタ達！そこから離れ――」

彼女が必死に叫ぶモノの、ソレは既に遅く――

≪――バス！バス！≫

「うげ！？」「ひゃっ！」

――アリオンの周囲に居た2人は、何処からともなく飛来した魔法に被弾した。

相当強力な魔法だったらしく、2人はそのまま魔法着弾の衝撃で吹き飛んで岩壁から落下して意識を失ってしまった。

リビエラはクッと口を閉じると、他の2人に急いで遮蔽物に隠れるよう指示を下した。

やはり罠であった！しかも、レイニアの魔法探査に引っ掛からない程のてだれ。

おまけに、恐らく2人を倒したであろう魔法は魔力弾の軌跡すら視認できない未知の魔法。

近くの岩壁にあったスキマに潜りこみ、入口を防御結界で覆ったリビエラは、このままでるのは危険だろうとサーチャーを展開し、周囲に誰かいないか探ろうとした。

≪――――バシュンッ！！≫

「な、なに！？」

――――展開したサーチャーが叩き落とされた！？

信じられない事に飛ばそうとしたサーチャーが、目視出来ない魔力弾に貫かれて霧散してしまっていた。

何と言う正確無比な射撃であろうか。

眼で追えないということは音速を越えた魔法である事であろうに、ソレをいとも簡単に操り小さなサーチャーを落すなんて通常はあり得ない。

正確には誘導なんてされていない魔法なのであるが、それをリビエラは知らないのだから驚きもひとしおであろう。

おまけに、ココは渓谷である。遮蔽物こそあるが基本的に一直線の道でしか無い。

空を飛ぶ事が出来ない自分たちは前か後ろにしか逃げ場が無いのだ。

そしてどちらに進むにしても、あの狙撃はかなりの精度がある為危険であることは明白であった。

「く、リエッセ！セレガ！」

一方、すぐ近くの大岩の陰に隠れた武装局員の一人が、先程落された二人の名前を叫ぶ。

彼はこの2人と仲が良かったらしく、気絶した彼らについ声をかけていたのである。

するとどうだろう、二人はウッと苦しそうに息を吐き出しながらも身動きした。

「まだ意識がある！――よし」

「お、おい！なにする気だよ！」

狙撃を警戒していたもう一人の局員が彼の方に向き直り叫んだ。

「防御魔法を使って、攻撃を防ぎながらあいつ等を助け出す！」

「む、無茶だ！お前だって見ただろう！あの攻撃目で見えないんだぞ！」

「無茶だろうがなんだろうがやるんだよ！大丈夫俺なら出来るさ！」

「ああもう！このバカ！援護するから早くしろよ！」

「お前・・・ああ、サンキューな」

なにやら青春の一ページみたいな光景が・・・。

コホン、ソレはさて置き、大岩に隠れているウチの一人がラウンドシールドを展開。

そしてそのまま岩影から飛び出し、倒れている二人の元へと駆けて行った。

予想通り数発の魔力弾が飛来し、シールドにはじかれて火花を飛ばす。

だが、シールドは飛来する魔力弾の攻撃になんとか耐えた。

そしてもう一人がシールドの火花の位置から敵のおおよその位置を把握し、その方向へと射撃魔法を矢鱈めったらに撃ちまくった。

「は、早くしろー！」

「わ、わあってらい！――クッ！一人じゃ二人も運べねぇ」

彼はシールドを展開する際には自分の腕を基点としている。

だがそれ以外の場所からシールドを展開する方法を覚えていなかったのだ。

その為に片方の手を開けておく必要があり、片手では一人を持ちあげるので精いっぱいだったのである。

一方、勝手に飛び出していったその二人を見つめているリビエラも、なんとかして彼らを援護しようと飛び出すタイミングをうかがっていた。

ラウンドシールドに攻撃が飛来した瞬間を利用して、彼女は岩壁の隙間から飛び出し、援護射撃を行っている局員の近くへと飛びこんだ。

「無事か！」

「リビエラ先輩！援護頼みます！俺はあいつを」

「こ、こら！お前まで出て行ってどうする！戻れ！戻るんだ！」

「う、うぉぉぉっ！！！」

リビエラが声をかけると、その武装隊員は彼女に援護を頼み、答えを聞くことも無くシールド魔法を展開して先に飛び出した彼の元へと走って行く。

彼女も制止したものの、既に飛び出してしまっていた為肩すらつかめなかったのだ。

仕方なしに、彼女も攻撃が飛んでくる辺りを見つくろい、シュー

ターを幾つか放って付近の岩場に着弾させて煙幕の様にしてやった。

視界を遮ったからか多少は攻撃の手が緩んだように感じられる。

だがそれでも、敵の攻撃を妨害できるほどの一人で弾幕を形成する事なんて彼女には出来なかった。

「くっ！もう一人いれば・・・」

「手伝いますリビエラ先輩！」

「レイニア！？どうやってココに――それとコルトはどうした？！」

気が付くと自分のとなりにレイニアが立っており、自分と同じくデバイスを展開している。

彼女は最初の攻撃の際に、とっさにコルトに腕を引かれて近くの岩の陰に飛び込んでいたのだ。

お陰で第二第三の攻撃が来ることも無く、コルトと共に岩陰を進んでここまで来ていたのである。

「コルトくんは彼らの元に――」

レイニアが指差す方には、魔力を多く注ぎ込んで強度を上げたラウンドシールドを両手に展開して攻撃を防いでいるコルトの姿があ

った。

ガキーン、ガキーンとまるで金属がぶつかるかのような有り得ない音が響いてくる。

一発喰らうごとにシールドの耐久力がごっそり持って行かれている様だが、片方で防御してはもう片方と入れ替えることでなんとか攻撃を抑えているようであった。

「急げお前たち！はやく岩陰に！」

「「うぉーーー！！管理局魂ィィィっ！！」」

「叫んでないで早く進めバカ！」

「ひーん！攻撃がおおいよぉー！！」

リエッセとセレガを担いだ二人をコルトが殿になって攻撃を防いで走る。

放たれる魔力弾がシールドを揺らし、コルトは歯を食いしばって耐えながらも魔力弾を後ろへと通さない。

前の二人がリビエラとレイニアがいる岩まで走る。

その距離は、残り１００を切った。

「「ファイトーーーーーー！！！」」

仲間を担いだ二人はほぼ同時に岩場の陰に飛び込もうとし――

「「一ぱ～つ！グボアッ！！！」」

コルトのシールドを軽く貫ける威力の魔力弾が、彼らを吹き飛ばしてしまっていた。

「コルトくん！」

レイニアが叫んだが時すでに遅く、先の光景を見ていた彼は動きを止めてしまった。

そして――

≪――ダーーーーンッ！！！！！≫

「こ、コルトくん？う、うそ・・・」

「クッ、今までのは遊びであったというのかっ！」

先程の狙撃の魔力弾がまるで只のお遊びであったと言わんばかりの攻撃。

それがコルトの張ったシールドを貫通し、茫然としていた彼の胸に命中する。

「ガッ――はぁッ！！」

純粋な魔力攻撃とはいえ、命中時のその衝撃力は先程の魔力弾とは段違いであった。

つまり今までのは此方を欺く為のフェイク、手加減を施した魔力弾であったのだ。

それの直撃を受けたコルトから、べきべきという嫌な音が響き、彼は攻撃の衝撃で吹き飛ばされて、何度もバウンドし岩壁に激突する事でようやく止まった。

ソレを見たリビエラは、あれで模擬弾の威力なのかと、コルトの状態を見て戦慄していた。

彼は肋骨を折られたのか、ひゅーひゅーという呼吸音が響き、口からは血を流していた。

生きてはいる様だが、その眼は光りを失っており彼が意識を無くした事を物語っている。

あれでは戦闘に復帰なぞできまい。少なくてもこの演習の間は無理である。

「コルト・・・くっ」

戦力が自分とレイニアだけになってしまった。

これでは反撃はおろか脱出する事も出来まい。

どうするべきかと思考を巡らせようとしたその時、レイニアが異変に気が付く。

「あ、あれ？攻撃が止んでる？」

あれほど激しかった射撃魔法が止まっている。

渓谷の中は何事も無かったかのように静まり返っていた。

「一体どうして――」

「――ッ！！バカッ！」

「え？キャッ！？」

だが、レイニアが思わず顔を大岩の陰から出しかけたのを見て、リビエラは慌てて彼女を岩陰に引き戻す。レイニアが岩陰に戻るのとほぼ同時に、ちょうど彼女が顔を出そうとしていた部分を、先程の魔力弾が通過して岩を抉り取っていくのを二人はみた。

魔力弾は電荷でも帯びていたのか、周囲にはイオン臭が漂っている。

「へ、へぇ？」

「危なかった、あのままだったらコルトと同じことになっていたぞ」

魔力衝撃だけを与える非殺傷設定の魔法である筈だが、その威力が強すぎる。

丸く抉られた岩を見て、命中したらコルトの様になるのも頷けた。

二人はとにかく効くかは判らないが防御結界を張り、岩陰に身を寄せ合って隠れた。

あの威力を垣間見、心理的に他者を求めたのかもしれない。

「とにかく、荒れ地に残してきた連中を呼ぶ事にする。
それまではここに居るぞレイニア・・・レイニア？」

「・・・・」

指示をしようと声をかけたのだが、レイニアから返答が帰って来ない。

どうかしたのかとリビエラは彼女の方を振り向いてギョッとした。

なんとレイニアが身体を小刻み揺らしてに震えているのだ。

彼女は自分の頭を膝の間に抱え込み、ブツブツと何かを呟いている。

リビエラは何を言っているのかと、レイニアに頭を近づけた。

「・・・なんで、どうして――怖い、こわいよぉ～・・痛いのは嫌～」

（不味いな。軽く錯乱状態に入ってる。多分コルトがやられたところを見た所為か）

レイニアを含め新人たちは武装隊ではあるが、彼らはそれほど現場で働いた経験は無い。

それゆえ、ある程度はこう言ったことになれている己は兎も角、まだまだひよっこの彼女にはこの状況から来るストレスは耐えきれないモノがあったのだろう。

例えコレが演習で、味方は気絶しているだけであったとしても、怖いモノは怖い。

「敵はてだれなんて生易しいもんじゃない・・・戦いを知っているエースだ」

リビエラは恐怖で震えているレイニアの肩を抱き、敵の様子を窺った。

今は攻撃がやんでいるが、先程のを見る限り岩陰から飛び出そうものなら蜂の巣にする気なのだろう。

とにかく、待機している連中を呼び寄せる為にデバイスから通信を送った。

アレの顔はみたく無かったのでメールの様に文字だけを送る。

同時にデバイスからの誘導信号も発信し、これまでのルートを地図にして圧縮ファイルにして送ってやった。

これで待機している3人も此方へとすぐにやって来る筈である。

あとは、このままこの場所で持ちこたえれば良い。

そうすれば少なくてもこの手も足も出ない状況からは脱出出来る、そう彼女は考えていた。

「早くこい。そうでないと、私も――」

リビエラの精神も魔力も限界に近かった。

ほぼ半日以上歩き続けた上、居場所を把握できない敵に向けて魔

法を乱射した為、普段よりも魔力の消費が著しく消耗している。

おまけにそれまでの敵への警戒などによって精神は擦り減らされ、慣れている筈の己も限界を感じていた。

そして、彼女の神経をすり減らしていたのはソレだけでは無い。

威力や魔力弾の感じからして、この大岩を貫通出来る筈、なのにそれをしない。

というか、これ程の攻撃を行えるのだから、他にも魔法が使えると予想出来る。

そのことがリビエラの神経をすり減らして行く要因であった。

つまり今自分たちが背にしている大岩は、絶対の壁となりえないものなのである。

それなのに攻撃をしない――ということは、それはつまり・・・・。

「チッ、いたぶる為か・・・悪趣味な」

そう言う考えに行きつくのも仕方のないことだった。

だが、その言葉はいまこの緊迫した状況下で漏らしていい言葉では無い。

リビエラの言葉を聞いたレイニアの震えが、一段と酷くなったのである。

ソレを見てリビエラは己の迂闊さに内心舌打ちした。

この状況で受けたストレスによりレイニアの精神状態は不安定となっていた。

それなのに余計な不安を煽る様な言葉を口にしてしまったのである。

それにより、少しは収まりを見せようとしていたレイニアの震えが再発してしまった。

これでは戦闘に参加させることなんて期待することはできない。

実質上自分ひとりとなってしまった現実が、リビエラの精神を圧迫していく。

だが、更に自体は悪い方向へと突き進む――――

「・・・・いや」

「――？レイニア」

「いやぁぁーーー！！！」

突如として叫び声をあげたレイニアは、リビエラの手を振り払う

と敵の攻撃か飛んでくる方向の反対側。つまり今まで走ってきたルートだが、そちらに向かって駆けだした。

味方が次々と倒されるという現状からショックを受けていた彼女は、軽い錯乱状態に入ってしまっており、この場から逃げ出したいという思いが脳内を占めていた。

「い、いかん！戻れ！レイニアーーー！！！」

リビエラは駆けだしたレイニアを追いかけようと、なるべく遮蔽物になりそうな大岩の影を縫ってレイニアを追う。

あの小悪な敵のことだ。レイニアをどういう風にするのかくらい予想が付く。

もしそんな事になれば、彼女には一生消せない心の傷が出来てしまうだろう。

というか、この演習が終わり次第、大なり小なり皆心に傷を負いそうだ。

「はっはっはっはーーー」

短い呼吸で頭を抱えて点在する岩の間を駆け抜けるレイニア。

そのこげ茶色の眼からは大粒の涙を流し、兎に角ココから離れよ

うと必死だった。

もうこんな怖い思いをしたくないと、彼女は一心不乱に足を動かしていた。

この場所から逃げられるのなら、あの魔力弾に貫かれても良い！

錯乱した頭は正常な思考を得ることは適わず、支離滅裂な思考に囚われた彼女は、己が走る道先にあるモノにすら気が付かなかった。

≪――ビン≫

「え？ひぁンッ！！」

涙でぬれた瞳は目の前を映すことは難しく、歪んだ像を結ぶ世界の中にあるモノは認識できない。彼女は自分の走る先に張られたワイヤーに足を引っ掛けると、受け身を取ることも無く盛大に転んだ。

「いつつ、なんなのよー・・・」

痛みによりほんの少しだけ正常な思考が戻ったのか、彼女は再び立ち上がろうとした。

だが次の瞬間、ドシンという音と共に彼女の身体は空中でくの字に折れ曲がり、カハッと息を吐きだし気絶してしまった。

「レ、レイニア・・・」

そしてレイニアが崩れ落ちる姿を見たリビエラは見た。

レイニアのすぐ目の前の空間からにじみ出る様にして現れる白い甲冑の姿を。

その鎧は非常に重厚でありながら、機能性だけを追求し装飾が全く無い。

滴型のヘルメットにはYの字型のスリットが入っている。

だがその中は薄暗くて顔を見ることはかなわなかった。

頭の回りを取り囲む様になっているネックガードと、それと一体化された留紺色のマントから覗く重厚な手甲には、その者の身長と同じくらいの剣が握られていた。

この甲冑の人間が自分たちの敵役、そして立った今レイニアを魔力を込めた拳で殴り気絶させた張本人。

「・・・あんたが“敵”かい？」

「・・・・・」

――チャキ、ブゥン。

リビエラの問いに無言で返し、自らの身長と同じ剣を重さが無いかのように片手で水平に持つ鎧。その者が持つ剣は、まるで古の物語りに登場しそうな魔法の剣だ。湯気の様なオーラが漂っているかの如く、収束されていない魔力が剣を覆っている。

そして、その剣は今リビエラに向けられていた。

白い魔力が立ち上る剣は、リビエラにとっては処刑人の鎌の様に感じられる。

その鎧の大きさは、小さな子供と同じくらいであるのに、そこから放たれる雰囲気はそれを感じさせてくれない。距離にしておよそ１０m、熟練した魔導師ならば一足で踏みこめることができる、言わば完全なる自分の領域（テリトリー）の中だ。

だが、今まさに強敵と呼べる相手を前にしてリビエラは普通に身体を動かせた。何故か？

その鎧は全く威圧感も、いかなる殺気も発しなかったからである。

剣を向けられているのに感じない。まったく無と呼べるような空気。

言いかえれば敵としてこちらが見られていないということのあらわれであった。

――――舐められている。

そう考えた時、リビエラの中でくすんだなにかが浮かんだ。

リビエラはこう見えても武装隊の中では戦闘能力において上位に居る人間である。

魔力も限界で辛うじて身体能力の底上げが出来る程度であるが、舐められて黙っていられるような性格ではなかった。

彼女は思いっきり息を吸って吐きだし、己のデバイスを腰だめに構える。

「舐めるな。私は――まだ立っているぞ？」

そう言ってリビエラはありったけの虚勢を張り、鎧を睨みつける。

白い鎧は無言のまま、剣の構えを組み換え応戦する形をとった。

相変わらず殺気は出されてはいないが、それでも威圧感が増したように感じられることに、リビエラは内心歓喜した。

少なくても、戦っては貰えるということに、彼女は歓喜した。

「時空管理局、第０１３４武装隊所属、リビエラ・Ｃ・ビュイック。推して参る！」

「・・・・！」

彼女は本能的に理解している。

今の自分、いやさ万全な状態であったとしても、目の前で剣を構える鎧には勝てない。

才能が、抜けて来た修羅場の数が、何よりも生命のやり取りの数が違うのだ。

戦うという枠組みの中で考えれば相手は自分よりも高みに居ることは間違いないのである。

だが、そうであっても管理局武装隊の人間として――引けない意地があった。

そして槍を持つかのように杖を構えるリビエラと、大剣を軽々と振るう鎧が――

「「――――！！！」」

――いま、激突する。

「さぁ教育してやろう中編」（後書き）

あれ～直接戦闘の描写が無い・・・やっちまったぜ。

となれば、戦闘描写はまた次回となります。

それではまた次回に（´・ω・、）ノシ

「さぁ教育してやろう後編」

「さぁ教育してやろう後編」

――――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――――

Ｓｉｄｅ三人称

自然の猛威により作られた景観をもつ峡谷の中で、一人の武装局員と鎧姿の仮想敵ｕｎｋｎｏｗｎが戦っていた。蒼い髪を靡かせ、杖を振り上げる武装局員はリビエラ・Ｃ・ビュイック。その杖の打撃を無言で機械的に受け止める白い鎧姿のｕｎｋｎｏｗｎはフェン・ラーダーである。

武装隊のほぼすべて倒された為、全滅と言ってもいい状況の中で出会ってしまった己よりも遥かに次元が上の相手。たった一人残された現状では逃げるに逃げられない上に、例え逃げたとしても逃げきれるか判らない。なので、彼女はせめて一太刀はと戦うことを選択した。

「――――ッ――――」

リビエラが先ず行ったのはマルチタスクを立ち上げての思考の並列処理化、それと並行しての肉体強化と魔力弾の生成であった。防御やバインドは使用しない。先程の戦闘で味方を援護する為に魔力を消費している彼女は、長丁場に陥ることを避けたいために、最初からアクセル全開で飛ばすことにしたのだ。

要するに短期決戦を挑もうという訳である。万に一つの可能性に駆ける訳ではないが、今、己に出来る全力を出そうとしていた。一方のフェンはそれを見ても飽く迄普段通りであった。リビエラが魔力を身体に巡らせて、ソレを爆発させるかのように杖型デバイスを振るい上げる。

その姿を見ても、フェンは全く動じずに振るわれた杖を受け止めていなしていた。彼は恩師である教官達に骨の髄まで何時いかなる時でもなるべく精神を冷静に保つように仕込まれていた。それは戦闘において回りが見えなくなるほど熱くなることは危険であるという先人たちから刷り込まれていたからである。

「でぇやぁぁぁぁ――――！！！！！」

≪ガギンッ！！≫

圧縮魔力を乗せた打撃、フラッシュ・インパクトが炸裂してフェンに襲い掛かる。

彼はリビエラが放つ魔力が籠ったソレを、手に持ったオートクレールを巧みに操り、受け流せるものは受け流し、防げるものは確実にガードしていった。リビエラが足に魔力を回して爆発的な突進を

見せれば、フェンは柳の様にその打撃力を後方へと逸らし、その勢いで後方へと飛び壁にオートクレールを突き刺して着地した。

フェンはお返しとばかりに、岩壁を蹴ってリビエラの元へと跳んだ。

ドゴンという音と共に、岩壁に放射状の亀裂が入りフェンが凄まじい勢いで飛びこんでくるのを彼女は見た。だが、飽く迄直線状の攻撃だと予想した彼女はカウンターを返そうと杖を大地に突き立てる。

ソレを見たフェンは無意識に、これまたオートクレールを大地に突き立てると強引に方向転換を行い右へと退避する。オートクレールをすぐに構えなおすと、今度は右から左に凪払う為に、突進しながら剣を持ってリビエラへと迫った。

リビエラは大地から杖を引き抜き、身体を逸らしてなんとか回避するも、オートクレールの先端が彼女のバリアジャケットをかすめていった。純粋な魔力だけで衝撃しか伝わらないとはいえ、魔力で編み込まれたＢＪはフェンが剣先が触れる瞬間に無意識で送りこんだ大魔力を受けて一部構成が歪み、弾けるようにして破けてしまう。

これは、ある意味女性としては洒落にならない程嫌な効果である。平時で使われればセクハラとして訴えたいところだろう。だが、今はそんな事に思考を割いている暇は彼女には無い。

「――っ！破廉恥な！ブッ飛べ！」

腕の袖の方を削られたこともあり、彼女は若干怒りながらもフェ

ンが凪払いを使いおわり、次の動作に移る一瞬をついて、持っていたデバイスをまるで杖の様に突き出した。

≪ガガギン！≫

動作と動作の間に発生する僅かなディレイを狙われたフェンは、若干無理矢理動くことで、なんとか魔力が込められて威力倍増の杖の先端をオートクレールの腹で押し止めることに成功した。だが次の瞬間、杖から伝わっていたリビエラからの圧力がフッと消える。

「どりゃあっ！！」

≪バッ！≫

なんと彼女は己のデバイスを手放すと、ムリな姿勢で受け止めたからかバランスを崩したフェンの脇腹めがけて膝で蹴りつけたのである。当然魔力が込められたそれは、普通の膝蹴りとは段違いの威力を持っていることは明白である。そんなもん喰らわんとばかりに、フェンは飛行魔法を応用し空中で横転して蹴りを回避した。

そのままフェンは空中で手刀を突き出し、リビエラへ眼つぶしを行おうとする。リビエラは咄嗟に顔を傾けてかわし、お返しにとまだ浮いているフェンめがけてハイキックを放った。だがフェンはハイキックのインパクトが決まる直前にワザとリビエラへと飛び込んで打点をずらした。

ハイキックの威力も密着されては半減してしまう。その為、普段よりも薄めに展開されているＢＡ？であったとしても、彼女の攻撃は内部に衝撃すら伝えられなかった。両者は一度距離をとる。お互いの実力は拮抗――――している訳じゃない。既にあまりの地力の違いで、片方には限界が訪れかけていた。

「――かはぁ、はぁはぁ・・・」

「・・・・」

限界が先に来たのはリビエラの方であった。多量の魔力を消耗して戦闘した上、体力も限界に近いのか息が荒い。対するフェンはまさに余裕と言ったところだろう。呼吸一つ乱さず、剣を己の前に突き立ててリビエラを見ている。

リビエラは舌打ちしたが、どちらにしろダメージらしきモノは与えられなかった。

魔力も体力も限界に近い彼女にとって、この極限状態の中どうすれば生き残れるか必死に考える。だが、フェンは容赦なしにオートクレールで斬りかかり、彼女を休ませる暇を与えない。

そして何時の間にか――――彼女はこれが模擬戦であることすら忘れ始めていた。

「がぁぁぁぁっーーーーーー！！！」

リビエラがケモノの様に咆えた。残り少ない魔力を絞り出す為に気合を入れたのである。
疲労が蓄積し、徐々に思考能力が奪われていく。早く終わらせなければ・・・。

「おっ、らぁッ！！」

リビエラは重力制御魔法を使い、自身の重量を軽減させて跳び上がる。
空こそ飛べないが、重力軽減魔法により通常の６分の一の重力となった上、魔力で強化した肉体がその力を遺憾なく発揮し、岩壁の出っ張りがある部分まで彼女を押し上げたのだ。
フェンはそれを見上げて、同じく跳び上がると追撃してくる。

「――！ハァッ！！」

≪――ドゴンッ！！≫

「！？」

彼女は出っ張りの亀裂部分に魔力弾を一発ねじりこんだ。それは亀裂内部で炸裂すると、その衝撃が岩壁内部を伝わり、結果出っ張り部分が崩落して後を追って来るフェンへと落下する。だがフェンは猪口才なとばかりに、オートクレールでソレを叩き落す。

「まだぁ！！」

リビエラはフェンが叩き落とした大岩の中のいくつかを、物質加速魔法スターダストフォールを操り、フェンの下から強襲させた。本来なら地面などを砕き、それを射出する魔法であり、消費魔力は大きいのだが、彼女は自由落下の加速を利用する事で消費魔力を抑えたのだ。

さすがフェンものこれには驚き、岩壁を蹴って離脱を図る。

「でりゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

離脱を図ったフェンの身体に重い衝撃。

重力に従いがれきと共に落下してくるリビエラが杖をフェンのＢＡに突き立てた。

「このまま！つらぬけぇーーーー！！！」

リビエラの杖の先が光る。なんとミッド式の使い手ではとても珍しい魔力刃を生成し、自身の持つ杖の先に展開させたのだ。コレは彼女の切り札。杖を使うということを相手に印象付け、その上で至近距離、もしくは完全に接触した状態で発動させるゼロ距離魔法。初見ならそうそう見切れない為、大抵の場合は喰らってしまう。

槍の様になった杖を更に押し込もうと、リビエラはダメ押しとば

かりに再度フラッシュインパクトを発動させる。ドンという音と共に彼女はフェンと共に加速し、崖下へと落下していく。そしてフェンが接地する直前、彼女は杖を離し離脱し、フェンはそのまま落下して大地にクレーターを作った。

「・・・かはぁ、はぁ、はぁ・・・」

防御も捕縛も完全に捨て去った攻撃。捨て身の攻撃。
唯一分隊の中で生き残った彼女が見せた足掻きの牙は、確かにフェンに届いていた。
だが、ソレもまたフェンにとっては――

≪――ガラ≫

「はぁ、はぁ、う、うそ・・・」

――想定の範囲内でしか無かった。

簡単な話である。彼女の攻撃は当たり所によればフェンのＢＡを貫ける威力があった。
だが、彼女の攻撃があたった場所は、ちょうどフェンの胸のあたりである。

胸の部分には心臓や肺やリンカーコアなどの人間が生きるのに必要な臓器が集中している為、もっとも装甲厚が高くされていたのだ。

そのためリビエラの攻撃は胸部装甲にヒビを入れることはできたモノの、貫くには届かなかったのである。

「もう、スッカラカンだ・・・フッ、このバケモノめ」

「・・・」

何故か笑みがこぼれてしまう。リビエラは普通に立ち上がり余裕で埃を叩き落としているフェンを見つめながら、口角を歪ませて笑っていた。　高ランク魔導師特有の高圧的な魔力すら感じない。なのに、こちらの攻撃は一切届かない。

いや、むしろアレは本当に魔導師なのか？魔力や魔法を使う当たり魔導師なのかと踏んでいたが、アの様な形状をしバリアジャケットを彼女はこれまで見たことは無かった。よ～く見れば少し亀裂は入っているものの、それ以上のダメージは見当たらない。

己が出せる最大の攻撃でこれなら、まぁ他に効く攻撃は無いだろう。

それでも、亀裂が入ったということは少しは届いたということ――。

「この身、未熟であったか・・・」

「・・・」≪ギャキ≫

――少しは届いた。今はそれでいい・・・いまは。

掲げられたオートクレールがリビエラへと向けられる。そう言えばコレは演習であったか・・・つい我を忘れてしまっていたことに彼女は苦笑した。

絶対的な強者がいる、強大な魔力を持つ相手。だが、それ以外の戦闘技術は凄まじい錬度であったが、どれもこれも厳しい鍛錬や訓練で研磨されし技術であることは理解できた。

技術だけならば、戦闘における技能だけなら、頑張れば届くかもしれない事を理解できた彼女は、剣を構えて此方に突進しようと身構える鎧に目を真っ直ぐ見開いた。

――さぁ、止めを刺してくれ。

その考えがよぎったその時、急に鎧が動きを止めた。

「？？」

剣は此方に向けたままだが、自分から見て左――鎧からすれば右か――の方に頭を傾けている。何事であるかと思わずリビエラも其方の方をみてしまっていた。

鎧が見る先、目を凝らすと何か遠くの方で光った様な・・・。

『Ｍｕｌｔｉｐｌｅ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

その時、デバイス特有の電子音声が響き、鎧を包み込む壁が出現した。

見ればミッド式のプロテクションと似通っているが、展開された際の術式は見たことが無いもので、おまけに複数枚の防護シールドが重ねられたモノで、明らかに自分たちと使うモノと違う。

いきなりなにをと思った瞬間――

≪――ガガン！！ギャリリリ！！！≫

「な！長距離砲撃！？ま、まさかもう来たのか！」

――長距離からの砲撃がプロテクションにぶつかり、爆散する。

「うぐぅっ」

その衝撃で己も弾き飛ばされた。だが、その次の瞬間には――

「初めましてだなァ！男の娘ォ！！」

「！？」

――ある意味でもっとも聞きたくない声、フィエロ・ソルスティスがそこに居た。

どうやら先程の砲撃はコイツが放ったものらしい。すぐ近くに自分がいたというのにお構いなしか。相変わらず目先のことしか見えていない男だとリビエラはおもった。

フィエロ・ソルスティス、フェンに飛びかかった金髪の男の名だ。彼はいわゆる魔導師的なエリートであり、今の所才能は開花しきっていないのだが、潜在魔力が凄まじいと言われており、現在技術向上の為武装隊に配属されているヤツである。

だがその半面、高ランク魔導師に多い気質とでも言うのか精神面に問題を抱えている。可愛いモノが好きなのだ。そしてその対象は可愛いもの全てに及ぶ。

そして、コイツはアレだ、一言で言い表すなら――

「よもや君の様な男の娘と出会えようとは――フフ、おとめ座の私には、センチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない」

――あれを一言で表すなら、変態だ。

兎に角、奴は自分が可愛いと認定したモノ、動物でも無機物でも女の子でもストレートにいくある意味判りやすい変態である。そして恐ろしいことにソレは自分と同じ性別であっても例外ではない。

奴にとっての正義は可愛い。可愛いは正義なのである。

心なしか、フィエロを前にあの鎧も後ずさっているように彼女には見えた。事実、この時フェンはある種の変態の登場に驚き、その独特の雰囲気に対して生理的嫌悪感を催して思わず後退していたのである。男所帯に居たことはあるが、目の前の男ほど突き抜けた奴は流石に経験が無かったらしい。まぁ野郎に舐めまわすかのような視線を送られたら誰だってイヤだろう。

第一フェンはＢＡを展開しているのに何故判る――「私には判る！魂がそう叫ぶのだ！」――だそうです。勿論本人曰く、いえすろりーた・のうたっち、とかいう自分ルール（時に超法規的処置で勝手に脳内解除）がある為、今のところ何かしらの被害は発生したことはない。

だが、人間性という意味でリビエラは彼のことを苦手としていた。何故か彼は部隊内では面白がられて人気はあるが・・・。

「・・・助けられた気がしない・・・」

「「大丈夫ですか？リビエラ先輩」」

釈然としない気分のまま、フィエロと鎧が戦う様を見て溜息を吐いていると、声をかけられた。身体がもう限界で動かせない為、顔だけそちらに向ける。

「あ、ああ・・・リーガルとフィレンザか」

そこに居たのは、あの変態男を待機させる為に残してきた最も信用のおける二人組、心配そうに治癒魔法をかける赤茶の癖っ毛の女の子のリーガルと、リーガルとは双子の弟であるフィレンザである・・・一卵性でも無いのに偶にどっちがどっちだか判らなくなる。

「先輩ゴメン。あの人が早すぎて追いつけなかった」

フィレンザが申し訳なさそうに言って来るが仕方ないだろう。アレはどういう訳か己の好感の対象となったモノに対し、普段以上の力を発揮する別の意味でも変態なヤツだ。面白いと言えば面白いが、平常な精神を持つ者にとっては近くに居ると非常に疲れる。

「仕方ないさ。フィエロだからな」

「そう言って貰えると助かります」

「怪我では無く疲労が蓄積しているみたいなので、治癒は終わります」

「ああ、ありがとう・・・」

治癒魔法により、ムリに動かした身体の痛みは消えたが、体力・魔力は回復できない為、リビエラはもう動くことはできなかった。自分と戦っていた鎧――フェンのことだが――と笑いながら戦い続

けるフィエロの方を見て、また息を吐いた。

「――フィエロなら・・・なんとかなるといいなぁ」

フィエロが負けたら潔く降伏でもしよう。

なんだか、もうどうでもよくなってきたと、とっても疲れたように頭を抱えるリビエラであった。

＊＊＊

「抱きしめたいな！ガ――少年！！」

（気色悪い気色悪い気色悪い――）

さて一方の選手交代を果たした両名は、先程よりも若干速く動き回っていた。どういう訳か好意を持つ対象に対して以上に執着して普段以上の力を発揮する変態を前に、フェンは少しだけ手加減を外していたのである。まぁそれでも相手にちゃんと合わせているだけ理性は効いているのは偉いだろう。

【ふぇ～ん、なんだかとってもこわいですぅ～！！】

『（な、何と言うプレッシャー、戦場以外でもこんな雰囲気を出す人間が・・・あれ？でも仲間意識が――）』

「（ふざけてないで集中しろヴィズ）」

いやさ、先程の蒼い髪の女性リビエラはある種の武人のような雰囲気であったので、何と無くソレに合わせてやったが、どうにも目の前の相手はやり辛い。技量や戦闘能力云々では無い、生理的にムリ～という感じを受けていたのである

「さぁどうした！逃げてばかりではどうにもなるまい！」

「（・・・本気出したらダメかな？）」

【え、えーと、それはぁ・・・】

『（やめといた方が無難かと。流石に演習場を使用不能にするのは不味いですし）』

正直、フェンはこの相手にどれほどの力で戦うべきか計りかねていた。

一方のフィエロ・ソルスティスは４つほどシューターを展開し、同時操作で魔力を込めた杖型デバイスを振り回し、隙あらばどちらかを撃ちこもうと連撃に入る。

「ふふふ、この演習に入る前から感じていたが――」

「（？）」

息もつかせない様な連撃をオートクレールで受け止めているフェン。
だが、どういう訳かフィエロは目を光らせながら咆哮する。

「――――これぞ正しく愛だ！」

「（――――は？あ、愛ぃ！？）」

告白とでも言えばいいのだろうか？唐突なそれにフェンは思わず硬直しかける。
あまりにも場違いな発言に、耳を貸さなければいいのに律儀に聞いてしまっていたフェンは、かつて経験した事のない程の悪寒と鳥肌に襲われていた。

だが、知らなくもない感覚ではあった。勿論今感じている感覚よりはずっと小さいモノである。ＵＳＮ軍の母上と同じ部隊である特殊機甲強襲魔導師連隊、ストライクワイヴァーンズの配備先である空母に乗っていた時だ。閉鎖空間故長い航海に出ることもあった為、そう言った時に感じたことがある視線。

ああ、そうか。そいつらと同じなのかこの視線。と、フェンは理解したく無い事実に辿りついた。既に泣きそうである。あの時は母上や母上の部下の人達が良く己と一緒に行動することがあって、不思議だなと感じていたのであるが、思えばそう言う視線を向ける奴らへの対処だったという訳だ。あれ？頬を暖かい水が滴り落ちてくるよ。現実は非常である。

「破ッ！」

「（舐めるな若造がっ！）」

まぁそんな現実逃避はさて置き、フェンは非常に頑張った。主に手加減という意味で。

生理的にイヤになる視線を向けられてもそれに耐え、下で見ている三人の為に技を振るい続けた。フィエロが誘導射撃魔法であるクロスファイア・シュートを時間差で撃ってきた時には、最初使わないと思っていたジリーノを思わず使ってしまい悔しく思った。

それよりも嫌だったのは、相手が如何にもな“どや顔”を向けて来たことであった。

そして何よりも嫌だったのは、ココまで我慢しておいて、実は時間的には5分も経っていないという事実であった。アレだけ激しい連撃や魔法の応酬を行ったのに、ソレだけしか時間が経過していないということに更に泣きそうになるフェン。

「はっは！楽しいな男の娘ォ！」

「（全然たのしくねぇよ。早い所沈め、冗談では無い）」

先程から一般の武装局員なら一撃で気絶できるレベルの攻撃に切り替えている。しかし、フィエロは自重せず、倒しても倒しても“殺せはせん！殺せはせんぞォ！！”と叫び起きあがるのだ。もういい

やだと内心思い、そろそろ一撃でカロンさんに出会える攻撃に変えた方が無難かと思い始めた頃――――

「もらったァッ！」

「（し、しまった！？）」

――――思考をずらしたのがいけなかった。フェンは突撃してきたフィエロにがっちりと身体を抱きとめられてしまう。コレ以上ないほどの生理的嫌悪感と鳥肌が発生し、フェンは身動きが取れない！

「破アァァッ！！！」

そしてフィエロはその手をなんと、フェンの胸の位置に持って行った。

ギャラリーと化しているリビエラ、リーガル、フィレンザがえええーとドン引きする。

だが、次の瞬間――――！！

≪バッキャーン！！≫

フェンのＢＡの胸部装甲が突然砕け散った。フェンはしてやられ

たと感じ、胸部部分を抑えながら自分を拘束する不逞な輩の腹を、小柄な肉体を利用して蹴り離脱する。何故胸部装甲がはがれたのか？それは先のリビエラとの戦闘でヒビが入っていたことも原因にあるが、何よりもフィエロが固有振動を割り出して攻撃を加えるブレイクインパルスと呼ばれる魔法を使用したからだ。

その魔法は対象となる物体の固有振動数を割り出し、それに合わせた振動エネルギーを送りこみ、共鳴作用で対象を粉砕させる魔法である。固有振動数を割り出す為、対象と数瞬の接触が要となる魔法であるが、その条件さえ満たせれば多大な効果を発揮できる魔法なのだ。

「うぐぐ、何と言う力・・・だが、まぁいい。目的は達した」

フィエロはフェンに蹴られた腹を押さえながら、フェンの方を向いた。ライムグリーンに近い瞳はぎらぎらと輝き、まるで獲物を見つけた狼の様である。そして彼は腕を掲げ――

「その胸を良しとする！」

――思いっきりサムズアップをかましたのであった。

何故なら、フェンの胸部装甲が剥がれ中のインナーすら破壊された今。

そこには子供特有の雪の様に白い平らな平面が・・・。

≪――――――――――ブチ――――――――――≫

ここで一度映像は途切れる。撮影していた量産型達がアイリスの指示で退避したからだ。その際量産型達は光学迷彩を解除し、近くで見ていたリビエラ達を捕まえてその場を離脱する。そしてアイリスにその命令を送ったのはヴィズである。

その命令は、まるで遺言の如き命令の様な感じがした為、アイリスはその命令を送ってきたヴィズに向けてマニピュレーターを傾けた簡単な敬礼をした後、その場から退避した。

アイリス達が峡谷から離脱するのとほぼ同時に、峡谷から白色の極光が立ち上ったのを、多数の量産型達が記録している。この瞬間のヴィズには映像記録は損傷して残されていなかったが、恐怖で泣いている子供の様な音声が記録されていたのは言うまでも無い。

「さぁ教育してやろう後編」（後書き）

フィエロのモデルっつーか、性格は、００のあの人から。

一応最後の最後までフェンは模擬戦であることを気にしています。

なので、フィエロに対しても同じく、模擬戦レベルで相手してました。

だけど、最後の最後で・・・・。

とりあえず書いていて思った。変態ってこわい・・・

「変態・・・嫌いです」（前書き）

※１　大分遅れて申し訳ありません。
※２　今回主人公に台詞無し、それでも良ければどうぞ。

「変態・・・嫌いです」

「変態・・・嫌いです」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅロッテ

「あにゃ～～～～～・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

・・・えっと、そのね。なんて言うか――

「壮絶の一言に尽きますな」

「あ、うん――そうですね」

そう、まさにこの言葉が一番合うって感じがした。

この映像を見て、教官と二人こう言ってしまったのである。

言っておくが、フェンの動きは合理的で非情に素晴らしい。
無駄を極限まで省き、それでいて非常に理想的な動き。
相手を倒すということに掛けては、管理局でも勝てる人間は少なそうなほどだ。

「しかし、この部分なんて凄まじい機動ですね」

教官はそう言うと、フェンがちょうど蒼い髪の武装局員（女）に対して近接戦闘を仕掛け、空中で一瞬静止したり、通常なら有り得ない機動を取るところを指した。

「ええ、これは恐らく飛行魔法の応用でしょう。
それと急激な機動に耐えられるように、身体強化も掛けてますね」

他にも剣型デバイスを使っての強引な軌道修正とか・・・。
うん、普通はやらないことのオンパレードだわ。

「コレ程の戦闘機動を取れるとは流石はフ・・・私が見込んだ魔導師ですハイ」

「ふむ・・・量産型くん、ここで停めて――なるほど、確かに一瞬だけ飛行魔法を使っていますね。それに初動の時の瞬発力として利用し、尚且つ空中での軌道修正にも使うと・・・通常は出来ませんな」

「普通ならそのまま飛ぶか、専用の魔法を使った方が楽ですからね」

通常なら高機動戦を魔導師が行う場合は、それに対応した移動用魔法を用いることが多い。

フラッシュムーブと呼ばれる移動魔法などがそうだ。

アレは本来、飛行魔法と併用するものだが、やろうと思えば地上戦でも使える。

まぁフェンの場合はそういった魔法を使っているという訳ではないみたいだから、只の飛行魔法を断続的に用いるという、ちょっと面倒臭いやり方をしているみたい。魔力を馬鹿食いしそうなのに何でやってるんだろう？

そしてそれ以外は――――確かに壮絶という一言に尽きる。

いや、なんて言いましょうか・・・他に言うべき言葉が見つからないっていうの？

久々に凄腕魔導師の戦闘ってヤツを見たって感じね。

「この鎧の人物、本当に管理局の人間じゃないんですか？」

「はい。残念ながら。でも父様の友人ですから――――」

「残念ですな。この人物が管理局員なら、これまで以上に殉職者が減ることだろうに」

「ええ全く。出来る事ならスカウトしたいと思っていたのですが」

「ですが？」

「“管理局とは肌が合わん”だそうで」

「肌が合わん！はは、確かに――この実力ならうなづけますな」

苦笑する教官を見やり、そう言った私自信かなり惜しいと思っていた。

彼ほどの実力があれば管理局内で上位に立てる可能性がある。

あ、でも、フェンの公式での魔導師ランクは総合でＢって事になってるんだっけ？

理由は確か、魔力量測定不能による記載なしから来る総合的評価・・・。

・・・・・・。

「どうかしましたか？ロッテさん」

「――いえ、何でも無いです」

急に黙った私を見て、教官が話しかけてくるが気が付けば適当にごまかしていた。

この時の私は、脳裏に浮かんだとあるこに思考が流れていたからだ。

どうも管理局という・・・いやさ魔導師と言う存在は、この魔導

師ランクというモノに囚われている。
管理局の採用基準にしたって、高ランク持ちの方が出世しやすい。
だが今回、フェンの相手をしたヴァカを見る限り、高ランク魔導師を出世させることに疑問を感じていた。

勿論、高ランクだからといって、総じてとんとん拍子に出世という訳では無い。
父様ですら提督になるまでにかなりの時間が掛ったのだ。
だがそれでも、多少倫理観や精神に問題を抱えていても、高ランク魔導師の場合、指揮官に採用しまうことがある。

それでは本末転倒だと、この時私は思ったのだ。
でも、それもこれも全〜部人手不足というものの弊害なのよね。
・・・お陰でこっちは仕事が増えて溜まったもんじゃないわ。

「ただ、本当に・・・惜しいと」

「・・・ええ、本当に」

誘おうが脅そうが、彼は恐らく・・・いえ、確実に断るだろうけど。
でも、少なくても敵じゃないから、こうして協力くらい要請してもいいわよね。
どうも報酬さえあれば普通にやってくれるみたいだし、インストラクターみたいな感じ?戦闘技能専門のね。

あ、そうだ。フェンの友達のあの白い子も何時か誘ってみよう。
あの子の親友自体管理局で嘱託しているらしいし、そのまま管理

局に入る可能性もある。
出来ればその娘たちには入って欲しい。主に人手不足解消の為に・・・。

それと、この量産型シランとかいうメカとか借りれないかな？
意外と優秀そうだし、人手不足なウチじゃぴったりかもしれないわね。

＊＊＊

さてその後も、私は記録された戦闘映像を最後まで見ることにした。
そう、最後までね。当然のことながら一連のアレまで全部よ？
ある意味ド〇ビーサラウンドで臨場感たっぷりだったわ。
しかしまぁホント・・・途中までアレだけかっこよかったのに―

―

「・・・教官」

「・・・ロッテさん」

戦闘記録映像が途切れる所まで見終わった私は、控えていた教官の方を振り返る。
彼も私の方に視線を傾けていた、そして向かいあった私たちは―

―

「「コレは酷い」」

――――同じ心境で、この言葉を呟いていた。

あのフィエロとか言ったけ？あれって本当にウチの試験パスしたの？

何だかどう考えても百害あって一理無しのような・・・あれ一利だっけ？

「うっわ～、よく耐えましたね彼。私だったら最初から全力で潰してますよ」

「ええ、確かに・・・自分でもアレとやり合うのは遠慮したいですね。

まぁ自分男で結構ごついので心配いりませんが・・・」

あ、コイツさりげなく防衛線引いたわね。ずるいぞ。

それにしても、最後の最後でアレは可哀そうだったわねー。

流石の私もあの変態具合には引いた。

つか、やっぱりウチの採用基準を見直した方が良い気がした。

フェンはフェンで最後の最後まで耐えていたみたいで、それはホント偉いと思った。

まぁ、結局耐えられなくてプッツンしちゃったみたいだけどアレは仕方が無い。

私ならもう足腰立たなくなるくらいに拳でお帰り願ってるとおも

うしね。

――――ソレはさて置き、コイツこの後どうなったのかしら？

「そう言えば、フィエロはどうなりました？」

「えっと・・・どうなったんだっけな？」

いや、教官。貴方が知らなくてどうするのよ。

【――本機と同型機である量産型シラン医療パック装備型が回収。
現在治療を終えて鎮静剤と麻酔のカクテルを投与し眠ってもらっています】

普通にシランに聞いて、それに応える量産型シラン。
やっぱり投入検討すべきかしら？いいＡＩ積んでるみたいだし。

――――ん？

「眠って貰っている？どういうこと？」

【少しお待ちを・・・データリンクで照会したところ、治療後にどうやら一度目を覚ましているようです】

「って事は人為的にねむらせたの？」

【肯定。目覚めたはいいのですが錯乱したそうです】

「錯乱って、もしかしてあの最後の極光の影ｋ【違います】・・・じゃあ何よ？」

【只単に可愛い子成分が足りないとご本人が・・・】

「「・・・ダメだ。こりゃ」」

真正の阿呆っているもんねー。いいえ、この場合は真正の変態かしら？

「――――教官、そういえば“彼”は？」

まぁそんなことはどうでもいい。

とりあえず、これほど長い時間演習を続けてくれた彼にお礼を言っておきたい。

なにせ、此方が思っていた以上の教訓を与えてくれたのだ。

一言くらいねぎらいの言葉をくれてあげてもいいじゃない。

「彼？・・・ああ、敵役の彼ですね？少佐とか呼ばれてた」

「（少佐？）ええ、その彼です」

「先程も言った通り、現在岩場エリアで救助活動中ですよ。洞窟トラップに引っ掛かったひよっこ達を助けるのは私ではムリですし」

そう言えば戦闘記録の中に、岩場に閉じ込めた子たちがいたのよねー。

確かにこの教官はミッド式は教えられても、あんなのは想定の範囲外だろうから、フェンに任せた方が簡単よね。

「そうですか・・・どうせもう演習も終わりですし、呼びに行ってきますね」

「了解です。いってらっしゃい」

飛行魔法を使い浮き上がると、私はそのまま空を翔けた。

演習場は広い、飛行魔法が使えなかったら車でも無いと面倒なほどだ。

使い魔とはいえ、魔法を使えるというのは本当に楽だと思う。

ソレはさて置いて、私はフェンの所へ向かいながら、今回の演習について思考を巡らせる。

今回の演習について、私はあえて時間制限を設けなかった。

当初、彼は高ランク魔導師なのだから、全力で全開で高威力高ランク魔法を使うものであるとばかり思っていたからだ。

ある意味で弱い者いじめであるが、上には上がいることを知らしめる。

そう言う趣旨である訓練な訳だし、そう言う風になるだろう。

だから時間制限なんて意味が無い、そう思い時間制限は設けなかった。

どうせすぐに終わるんだし、必要ないだろうと考えたから。

まぁふたを開けてみれば、砲撃系を解禁してしまうと新米達の精神がヤバそうな状態になりそうだった。だから此方から頼んで、砲撃系の様な派手なのは使わない様にしちゃったんだけどね。

ソレだけ制限しても、恐らく彼のことだから戦えるという自信はあった。

なにせ己と同じ長さの大剣型デバイスを扱えるんだもの。

てっきり、それを使った近接攻撃でバッタバッタ無双すると思っていた。

あの大剣で吹き飛ぶ新米達・・・普通に想像が付くのが凄いわ。

・・・だけど、彼は違った。この演習を文字通り演習だと捉えたのだ。

恐らくフェンがその気になれば、３０名足らずの武装隊は反撃も出来ず終わっている。

岩場エリアの渓谷での戦闘で見せたあの狙撃、そして０２分隊を沈めた魔法。

アウトレンジからのその攻撃を使えば、フェンは埃一つ付けず終

わっていた筈だ。

だけど・・・実際にフェンが行ったのは実戦に近い模擬戦だった。
徹底した一対多を想定した戦闘時にとる行動各種だったのだ。

時間制限が無いということを存分に利用した相手の隙を作る戦い方。
一か所に留まることへの危険性を示した洞窟トラップ。
そして、最後の直接の戦闘、どれもこれもそれぞれ違う戦い方。

少人数、あるいは単体戦力における戦闘の基本は、その姿を曝さない事であることを彼は知っている。姿を見せる時、それは作戦が終了するか、止めを刺す時くらいなのだ。

一体、彼はこれ程の技量に至る為に、どれほどの訓練を積んだのだろうか？

一体いくつの戦場や修羅場を潜ったのだろうか？

一体どれだけ肉体を虐め抜いたのだろうか？私にはそこまでは判らない。

少なくても私が見て来たこれまでの魔導師とは一味どころか八味まで違う。
サバイバビリティに溢れた戦闘思考、戦いというモノへの考え方。
それは非殺傷設定を覚えた近年の魔導師が欠落しつつある思考だろう。

そして、私はあの映像を見て更に実感してしまった。
彼は魔法で人を撃つことに、全くと言って良いほど躊躇いが無い。
狙撃の瞬間をとらえた映像を見た時、彼は微動だにせずまるで機械の様に魔法のトリガーを引いていた。

それこそ、目の前に居る新米達は的だと言わんばかりの冷徹なほどの正確さ。
現に非殺傷であったモノの、映像の中の攻撃の殆どは急所狙いだった。
頭とかお腹は非殺傷でも危険だから後で注意しておかないと・・・。

さて射撃型魔導師が先ず陥るのが、魔法を人に撃つことへの躊躇いであるらしい。
非殺傷であっても、人は同じ人に対して攻撃を行うことを躊躇する傾向がある。

ある種の資料によると、管理局武装局員の平均的な魔法行使率――この場合はいわゆる発砲率とでも言えばいいか・・・。
非殺傷設定が用いられるようになった今でもこの魔法の発砲率は、意外なことにおよそ6割ほどなのだ。ある意味でかなり低いのよね。

一応このデータには攻撃する事を躊躇した為に生じたタイムラグというのも含まれているので、実際には命令通り魔法は発射されている。だが、それでも今までの訓練を受けた武装局員は無意識の内に人に対する攻撃を戸惑うらしい。

でもコレは次元世界を管理する管理局の武装隊員としてはアレだが、人という意味ではまだ良い傾向なのだ。躊躇うということは、

それだけ道徳や人間性が残っているという証しだからね。

・・・それに比べてフェンは全く動じず、躊躇わなかった。
それが意味するものは・・・ここまで言えば言わなくても判るよね？

流石は第７８管理外世界、その世界の二大国の一つＵＳＮ出身の魔導師であり軍人というのは伊達では無かったということなんだろう。

・・・考えてみれば、ソレはそれで悲しいことなのかな。
純粋な人ではないから、そこら辺はよくわからないのが、少し恨めしい、かな。

……

……

……

「・・・お、あったあった」

まぁ難しいことは私の領分では無いのでそこで思考は打ち切り、ようやくフェンがいるであろう岩場エリアの洞窟のある場所まで飛んで来た。ちなみに岩場の洞窟がある位置は量産型がミニマップを同時に映していた為（いや、本当便利だと思う）、それを覚えてい

た私はすぐに見つけることが出来た。

途中で量産型達の群を見たので、多分掘り出した新米達を後送したんだと思う。

その量産型達とフェンは一緒じゃ無かったので、まだ洞窟近辺に留まっているのかと思いここに来て見れば、洞窟のある岩山の頂上付近で体育座りしているフェンがいた。

どうやらビンゴだったようである。髪が見えることからＢＪは解除しているらしい。

あの戦闘映像では、フルフェイスのヘルメットに覆われて見えなかった黒髪が、岩場エリアを吹きぬける風に煽られてゆらゆらと揺れていた。

彼は地球の日本古来のパイプである煙管の様なモノを加え、ぷかぷか紫煙を吐いている。

う～ん、未成年者の喫煙はあまり褒められたものじゃないんだよフェン～。

とりあえず、彼のすぐ近くに降り立った私は彼に近づいた。

（・・・あれ？この煙・・・）

フェンに近づいて気が付いた。

彼が吸っている煙管から洩れる煙、これってタバコじゃないみたい。

もっと清涼感のあふれる感じ？ヤニとかタールの匂いが全然しない。

あんまりそう言ったのにはくわしくないから判らないけど、この匂いは嫌じゃない。
そして思いだした、そう言えばフェンはよく八神家の庭でもコレを吸っていたっけ。
・・・ココ最近ずっと仕事だったから忘れてたわ。

「・・・（ボー）」

虚空を見つめて、ぷかぷかと煙を浮かべるフェン。
見つめてとはいうが、その瞳には特に何も映ってはいない。

な、なんかちょっと・・・いやさ非常に声をかけづらい雰囲気なんだけど？
時折小さな声で「ここは狭いなぁ」とか「彗星、かな？」とか呟いてるし・・・。
でも何時までもこうしている訳にもいかないから、私は彼に声を掛けた。

「――よっと。昨日ぶりフェン！演習お疲れ！」

「・・・（ぴく）」

「・・・・あれ？おーい！私だよ～！ロッテだよー！」

「・・・」

話しかけているのに返事が無い。
むむ、綺麗なお姉さんが話しかけているのに反応なしかい！
あとここでキレイなお姉さん（笑）とか思った奴前に出ろ、修正してあげるから。

「・・・おーい。大丈夫かーい？」

「・・・（ポケー）」

「だめだ。完全に茫然としてる・・・」

話しかけても反応が非常に薄い。
というか、アレだ。現実逃避してる奴の感じに似てるわ。

何で判るかって？ウチで鍛えてたクロ助が良くこんな感じだったからねぇ。
特に近接格闘でボロボロのボロ雑巾にノシた時なんて傑作――。

じゃなくて！私は今この話しかけ辛い状況を打破したいんだよ！
ええと確か、クロ助がこういう風になったときは・・・。

「そぉい！」

「むきゅ・・・」

私はフェンの前に回り、思いっきりハグしてやった。

クロ助もそうだけど、大抵こうすると元気になるのよねー。
我が不肖の弟子であるクロ助は最近は恥ずかしがるから余計に面白いのだ。

さぁフェン！あなたも恥ずかしがるがいいわ！そうすれば弄りがいがあるから！
今までと違って次からは私が撫でまわす番よ！――とか思っていたんだけど・・・。

「・・・（――ギュッ）」

「・・・あにゃ？」

思っていた反応と全然違った。な、なんかハグを返されてるんですけどー！！
しかも何かスンスンと泣いている声聞こえるよー！？

予想外の事態に困惑してしまう。つかフェン！あなたキャラ壊れてるよー！
何時もの堂々とした無表情？はどうしたのさ！て言うか何故？！

・・・あ、もしかして――

「あ、あの変態、そんなに怖かった？」

「――ッ！！」

あ、図星っぽい・・・。
ハグしてるから身長差で顔は見えないけど、なんかフルフルと身体が震えてる。
まぁ確かにアレは耐性が無いと怖いよね。うん。

「えっと、演習はもう終わったから、それにアイツは今麻酔で寝てるよ？」

「・・・ホント？」

そう言って顔を上げるフェン。ああ、アレはアナタの指示じゃ無かったのね。
それに泣いたからだろうか？もともと紅い色をしていた瞳は、更に赤みを増していた。
それどころか頬まで赤みを帯びており・・・すこし色っぽい。

「・・・・・・・」

「・・・？（こてん）」

「！！？？」

「？？」

さりげなく首を横にコテンと倒すフェン・・・。
あ、あれ?なんだがいけない方向に何かが目覚めそうな・・・。

「――ッ！」

そう思った途端、ビクンと身体を震わせるフェン。
いけない、いけない。どうやらそう言った人に対して敏感になっている様だ。
勘が鋭いというのも結構厄介なものね。

ソレはさて置き、こんな状態では連れて行く事が出来ない。
なので、落ち着かせる為に声をかけたり色々とした。

ソレはそれで大変だったけど・・・うん、なんか色々と充填出来た。
このことはアリアには黙っておこう。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

さて、ロッテさんが何か分を補給して少し元気を手に入れたのはいいとして、演習の終わりにと最後の挨拶に呼ばれはしたものの、彼は一言もしゃべらなかった。正確にはシランズ達の独断により、密かに麻酔をかけられていた筈のあの男が、何故がフェンが近づいただけで目を覚ましたからである。

ロッテが落ち着かせてあり、本人も自我を安定させて強靭な精神力を発揮したので、あの変態が虎視眈々と狙っているかの様な視線を浴びせられながらも外見上は平然を保つことに成功していた。

そしてなんとか最後の挨拶も終わり、武装局員が帰るのを見送った。

ひよっこ達の前で恐慌状態に入ることは防げたのである。

しかし家に帰った後、しばらくの間は軽い男性不信に陥り、ザフィーラに狼モードになっていて貰っていたことは、フェンの黒歴史としてヴィズの記憶ファイルに記録されたことは言うまでも無い。

「変態・・・嫌いです」（後書き）

フェン君ちょっとだけ幼児代行の巻、でござる。
なおデバイス達が喋らないのは、ヴィズはあの極光クラスのプッツン砲撃の影響で思考安全弁が閉じた為。
リンはユニゾンデバイスなので元々おおやけには出来ず、おまけにフェンの退行の影響喰らって混乱中だったからです。

ソレではノシ

「頑強であっても脆いこともある」

「頑強であっても脆いこともある」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

時空管理局本局の第０１３４武装隊との演習を終えたフェンは、色々と怖い目にあったもののなんとか八神家へと帰還した。しばらくは男性不審に悩まされかけるが、あまり弱点があるのも不味いと思ったのかザフィーラに頼み特訓を開始したのだった。

さて、それはさて置き彼の容赦のない演習により、第０１３４武装隊の武装局員たちの何名かが、しばらくの間物音に敏感になったり、普段以上に訓練に励むようになった。しかし総じて言えたのは、以前と違い学生気分な気質がなりを潜め、まだひよっこであるが故に未熟であったが仕事への姿勢が改善され、以前よりも真面目に努める様になったことだろう。

特に最後の実戦訓練を体験したリビエラ指揮下の０３分隊の面々

の変わりようは凄まじく、まるでなにかに急かされるかのように訓練に励む者、未熟だと感じて訓練に励む者、恐怖を振り払いたいが故に訓練に励む者、という風になっていった。それにつられるように、他の武装局員たちも自主的に厳しい訓練を行う様になる。

それは、自分たちがほぼ手も足も出なかったという現実、そして対戦相手は管理局所属ではないフリーランスであったという事、それらが彼らが以前以上に身を引き締めるようになった理由であった。魔法という力を手に入れ、尚且つ武装隊へと入れたという事に少なからず浮かれた気持ちでいたと自覚したからである。

次元世界は広大だ。すでに百以上の世界を発見している管理局だが、いまだにその根を伸ばし続けているため、管理局が関わらねばならない荒事はまだまだ増える一方だ。それなのにそういった事態に対処できる魔導師の数はそれほど多くない。

クリーンで比較的安全であることがミッドチルダ式をはじめとした魔法体系の醍醐味ではあるが、誰にでも使える訳でもない為、汎用性は非常に低いと言える。なまじ質量兵器を禁じている為、魔力が無い人間が戦闘等の様な荒事に参加できる訳も無く、実質荒事関連は全て魔導師任せなのである。

もちろん魔力が無い人間も数多く管理局に努めてはいるが、上記のような理由がある為戦力として換算できない為、武装隊の様な荒事を扱う魔導師は非常に貴重なのだ。そして広がる世界に対して、対応に追われる魔導師との比率は年々広がるばかりで、なかなか後進の魔導師が出て来ない今、個々の資質を上げるよりほかない。

こたびの訓練により、自分たちが知らない更なる強敵が世界には存在することを自覚させられた第０１３４武装隊は精強と呼べるにふさわしい部隊と後に呼ばれる事になる。彼らに釣られて、徐々にその他の武装隊も錬度を上げていく事になるが、それはまた別のお話である。

さて、フェンが帰った後、この演習の内容は非公式ながらも管理局の訓練の参考資料という風な感じで扱われる事となる。勿論フェンの扱いはグレアムの友人であり、本人が希望しない事から匿名のフリーランス魔導師というふうな扱いとされていた。

これはリーゼロッテが偶々漏らした言い訳に起因している。また参考資料と言っても、全てが使えるという訳では無く、特に０１分隊を陥れた洞窟トラップはフェンが手に入れた異世界の魔法ハルケ式を持ついなければ使えない為、資料としては除外されている。

しかし、その他の忍耐力及び集中力及び緊張を保つ為の訓練として、０２分隊の体験した部分は取り入れられているし、何よりもやはり０３分隊が受けた直接戦闘が一番の参考となっているだろう。

そしてこれら以外にも管理局ではとある動きが進行していた。それはこの演習において通信から救助・治療・監視まで幅広くサポートを行った魔導機械である量産型シランを買う、もしくはライセンスを貰うか借りるかして管理局でも運用できないかという動きである。

量産型シランはフェンがハルケギニアで製作したプロトタイプシランから派生した拠点防衛用の先行量産型シランを元に簡略化がなされた機体である。ＡＩは最低限の簡易ＡＩ（といっても、人間相手に受け答えが出来るレベルなので実質かなり高い）で、固定武装すら持たない機体であるが、さまざまな用途に対応できる換装機構を備えている。

その為、受け答え出来ない上、基本的に用途が限定されている傀儡兵よりも汎用性は高い。また人間と違い蜘蛛の様な多脚生物を模した体躯構造による絶大な安定性と、重量制御魔法や脚部ローラー等の技術により、見た目よりもずっと素早い動きを可能としている。

また通信機能などの電子機器の面を見ればわかる様に、プロトタイプの更に元となった機体の特性も残しているからか、情報関連機器の扱いにも特化している。つまり単独でハッキングなども行えるのである。簡易式とはいえ、デバイスなどに使われるＡＩ技術も使われている為にそん所そこらのスパコンよりも性能は上である。

若干大きい為室内ではやや邪魔であるが、基本的に外で運用されると想定した場合、魔導師に追随出来るサポートマシンとしては恐ろしく優秀な部類に入る上、固定武装ではないが着脱式で魔力稼働型の武装を施せるので、質量兵器を禁止する法にも抵触はしない。

簡易ＡＩなので指示されない限りは行動が単調になる為、魔導師の代わりとまではいかないが、魔導師に数体ほど追随させることで戦力通信サポートの面でかなり活躍できること請け合いであろう。

只でさえ前線組の魔導師に追随出来る存在は貴重だ。従来なら同じ魔導師しかないからである。通信機だけ持たせて前線に一人魔導師を送るというのも、ある意味行く本人も行かせるバックヤード組にとっても心苦しいからだ。最悪の場合貴重な戦力である魔導師の盾に成れる上、量産型と名を冠するだけあり量産が出来るので補充も効く。ある意味で買いであろう。

現在、ロッテは仕事の合間にこの事で予算を組めるかどうか検討中であり、今の所書面にすらなってはいないが、もし予算を組めそうだと出たら、すぐさまフェンの所に行って量産型シランを買えないか交渉しに行く予定である。もっとも一体辺りの価格が製造する際の人件費を差っ引いても５０００万ほどはするので、最初の内は試験運用を兼ねた試験配備しか出来ないのだが・・・・。

まぁそんな訳で、フェンがあずかり知らぬうちにシラン配備についての検討が管理局の一部でなされることになった。本人が聞けば、まぁ金を出してくれるなら普通に売るぜと言いそうである。まさか量産型シランが全て元は廃材であった事など、誰が知り得ようか。

つまり元手はタダ、５０００万というのは飽く迄も使われている廃材を錬金魔法で別の素材に変換し、その変換された素材の値段に等しい。これでこのまま売れば、フェンはボロ儲け間違い無しであろう。

そして件のフェンは一体今なにをしているかというと――

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

拝啓、皆さまいかがお過ごしでしょうか？

第８管理世界レフィディムの演習場から帰ってから、一週間が経過しました。

ザフィーラに協力して貰いなんとか男性不審を克服した私ですが――

「・・・う～ん、まだ熱ありますね」

「・・・あたまふらふらする」

その後、ストレスの所為か熱を出して寝込んでしまいました。

どうやら男性不審克服の為に無茶をし過ぎた様です。
あ、ザッフィーは悪くねえからな？無茶をした俺が悪い。

「熱は・・・３９．８度。ああ、ようやく下がってきましたね」

「あ～う～・・・」

熱を測る体温計を見て、にこりとしたリニスが嬉しそうに頭を撫でてきた。
熱を出した身としてはこのリニスの手の冷たさが心地いい。
そう俺は今、使い魔であるリニスに看病されて療養中なのである。

「て、ひえてて、きもちいい」

「・・・やっぱりまだ熱いです。前に張った冷えぴたがぬるくなってる・・・新しいの持ってきますね」

リニスは俺の頭から手を話すと、熱さまし用の冷えぴたシートを取

りにいった。

今はなんとか熱は下がり始めたとはいえ、当初は４０度以上あったのだ。

なので、まだ様子見だ。何時ぶり返すかわかったもんじゃない。

それにしても、随分とまぁ弱ってしまったと思う。

人を殺した経験まである俺が、あの程度で熱を出してしまうとは思わなかった。

まぁ魔法生命体とはいえ、基本的な肉体の形は人間と同じなのだから仕方ないと言える。

そう、魔法生命体。俺の肉体は既に魔法生命体のそれと同じ状態になっているのだ。

魔法生命体というのは、簡単に言えば魔法で肉体という器を作り上げている存在だ。

器の形の核となる魂は別次元に存在する為に、怪我や損傷などの物理的な損傷にはめっぽう強い。

何故ならいくら損失しようが、損失個所自体がすぐにリジェネレーションするからだ。

例え身体ごと消滅させられても、理論上しばらくすればリザレクションも出来る。

ある意味で不老不死なのは、ありがたい上に魔法万歳と叫びたくなる。

もっとも、地球の政府もそうだが、管理局等の機関にばれると厄介だろうな。

リアル解剖や脳みそ摘出は勘弁してほしい。不老不死でも痛いもんは痛い。

第一、不老不死というモノの本当にそうなのか不明だモンな。

しかし、どうやら魔法生命体となったとはいえ、俺は病気には掛かるらしい。

これがヴィータ姉たちの様な普通の魔法生命体なら、病気には先ず掛からない。

この手の専門家である管制人格のリインフォースさん曰く、俺は非常に特殊な存在のだそうだ。

何せ人間から変異して、そのまま直接魔法生命に至るという特異な存在である。

前例も何もないし、普通の魔法生命体と何処かが違う可能性もある。

・・・こうして思うと意外と危ない橋渡ってるよな。俺。

「冷えぴたをもってきました。張りますよー」

「・・・ひゃう」

おっと、どうやらリニスが新しい冷えぴたを取ってきてくれたらしい。

彼女は効果が薄くなった古い冷えぴたを俺の額から取り外すと、新しいやつと交換してくれた。

熱でぼーっとした頭が冷やされるような感じがして、気持ちが良い。

「リンは・・・小さく切らないとダメね」

「きゅ～・・・」

あ、ちなみにリンも俺の隣で同じく寝込んでいます。

いやー、あの変態との戦闘の時は彼女途中で意識落したみたいで覚

えてないらしいんだけど、どうも俺の体調不良に引きずられてしまったっぽい。

ううん、迷惑をかけるねぇ。

「水分取らないといけませんけど、起きあがれますか？」

「ちょっとまって・・・うあ、やっぱりダメだ」

熱を出しているということは同時に汗を掻いているという事。

だから適切な水分補給は欠かせない・・・んだが、くらくらしてて起きていられない。

いやなんとか起せるんだけど、がくがくしちゃって凄く危ない。

だが、水分を取らないと余計に後が辛いので、なんとか起きあがろうと頑張る。

「ああ、ほら無理しないでください。支えますから」

「ありがと――≪ふらっ≫」

「ああ！っと・・・危ない危ない」

リニスに支えられて起きたは良いが、立ちくらみのようになってしまう。

何やらポフンと柔らかいものに包まれた様な感じがしたが、なんだったのだろうか？

俺はリニスに肩を支えられながら、彼女が手渡してきた飲み物を飲む。

中身は只のスポーツドリンクだが、熱で汗を掻いた身としては実にありがたい。

「今はやて様がおかゆを作ってくださっているそうです。出来あがるまで寝ていた方が良いですよ」

「うぅ・・・すまないリニス」

「いいえ、慣れてますから」

・・・プレシアさんで？とか思ったらニッコリされた。ああ、やっぱりね。

俺は俺で限界だったので、飲み物飲んで意識を落したのだった。

＊＊＊

「見舞いに来たぞフェン」

「生きてるかー・・・って、まぁダメだろうなぁ」

「ドリンク剤を買ってきた。後で飲むといい」

声をかけられ目が覚めると、シグ姉さんとヴィータ姉がお見舞いに来てくれた。

ザフィーラも一緒だが、先日のあれを考慮してくれたのか狼形態である。

一応起きてはいたが、身体がだるくて起きあがれない為、寝たまんまで返事を返した。

「ありがとう・・・助かる」

「ま、別になにか仕事がある訳じゃないんだし養生しとけよ。アイスなら食えるか？」

「やめておけヴィータ。胃腸系も弱っているんだろう？」

「シャマル先生曰く、ストレス性のらしいから・・・」

シャマル先生から診断も受けてるけど、ストレス性の奴だから特に魔法で治療とかは無理っぽいんだよな。

精神に作用する魔法は確かにあるけど、それを治療目的で使うのは最終手段なんだと。

今の状態はある意味で風邪の様なものだから、適切な休息と栄養を付ければ直るんだってさ。

治癒魔法で精々熱で失った体力を回復させる程度しか使わない。

そしてその診断をしたシャマル先生は、看護をリニスに任せて家事に戻っている。

いや、是非にお世話させろと無理やりだったらしいが。

「ストレスか。フェンはそういうのは平気な質だと思っていたが・・・」

シグ姉さんが心底不思議そうにそう語った。
自分でもそう思えるだけに何とも言えない。

「あたしもそう思った。あんだけ普段が我は不動って感じだしな」
「軍に居た事があると聞いていた。俺もそういうのは平気なのかと」
「いや、うん・・・アレだけ変態なのはちょっと・・・」

アレから一週間経過しているというのに、思い出すといまだに鳥肌が止まらない。

そんな事露ほども知らない御三人に、とりあえずヴィズが録画していたのを見せた。

しばらくして、全員が引いた。あのバトルマニアのシグ姉さんまで・・・。

変態・・・もといフィエロさんよ、あんた色んな意味で普通にすげぇよ。

シグ姉さんにまで対戦拒否されるとかどんだけやねん。

・・・そしてその矛先は俺か・・・・・・鬱だ、死のう。

「お、おい顔が青くなってるぞ！どうしたフェン！」

「あ、あたしら何か余計な事言ったか！？」

「・・・！？」

やべ、あのこと思いだしたら顔が蒼白になっていたらしいぜ。

新しいトラウマ量産かよ。まぁフラッシュバックまでは起きていないからまだ大丈夫。

精々顔が青くなる程度だし、しばらくすれば直るぜ。たぶん、きっと・・・めいびー。

「どうしまし――フェン君！あなたたち何をしたんですか！！」

皆の声を聞きつけて、リニスが部屋に入ってきた。

どさくさに皆を掻きわけて俺を抱きしめているよ。

主である俺を守る行動なのは嬉しいけど、鼻から紅いモノが出るのは勘弁して欲しいな。

「だ、大丈夫。ちょっとまだ思いだすと怖くなるだけ」

と、一応言い訳したんだが、余計にリニスさんが怖くなりました。

いや、なんつーか、角が幻視出来るんですが・・・矛先が俺じゃなくて良かったぜ。

それはさて置き、そう言うのも身体に響くからやめてくれと頼んだら止めてくれた。

ホント忠実な使い魔だよリニスは・・・元がプレシアさん製作なだけはあるぜ。

まぁ、こんなことになった為にシグ姉さんたちは部屋を追いだされてしまった。

念話でゴメンという旨を伝えておいたら、気にするなって返答が帰ってきた。

いや、ホントすいません。ご迷惑かけます。

＊＊＊

「うう～熱っぽい～ヒマだよ～」

「体調が悪いんだから寝てください」

とは言うがね？寝てるだけなのはヒマなのよ～。

ああー、なんか熱の所為だろうか？変なテンションだぜ。

・・・ん？おろ？何か見えるぜ？

「・・・おお、なんかグネグネとした変な生き物が見える」

「幻覚がみえてる！？結構重体！？」

あ、違った。変な生き物じゃなくて、お隣の斎藤さんだ。

ちなみに先月お亡くなりになったヴィータ姉のゲートボール仲間である。

俺もなんどか顔を合わせているので、ヴィータ姉経由で知り合いだ。

今日はどうしたんですか?え、ヒマだからって散歩ですか?そうですか。

外は結構寒いですけど、ってもう感じないから関係無い?そりゃ結構なことで。

なまじ肉体があると大変ですぜ?いまもストレスで体調崩してコレですもん。

いいえ、風邪じゃないです。ちょっとショッキングな事態が起こりまして。

鍛錬が足りない?あはは、そう言われると立つ瀬がないです。

まぁ今は養生中なので、お説教は勘弁してください。はい、それでは。

「あわわわ!どうしましょう!シャマルに連絡を!?いや、こう言った時はリインフォース!?」

「・・・落ちつけリニス。大丈夫、ちょっと立ちくらみの酷いのが起きた所為だから」

斎藤さんがいる辺りを見上げてジッとしてたらリニスが慌てだした。

まぁはた目から見たら急に虚空を見上げて沈黙している奴に見えるだろうしな。

「・・・ほわぁ、私まで何か見えるですぅ～」

「リンまで!?あああもう!シャマル～!!」

リンにも過保護の気があるリニスは、リンの呟きを聞くと部屋を飛び出して行った。

「・・・行っちゃったよ」

『いっちゃいましたね』

「はう、よく見たら斎藤のおじいちゃんでした～こんにちわですぅ」

『・・・・・また見えてるんですか?』

「らしいね」

う～ん、他の魔導師とかそういった人たちには見えないらしいんだけどね。

どういう訳か俺とリンはそういったのが“見える”らしい。
以前からそうだったけど、ここ最近日常生活でも時たま見えるようになってきた。
これもまた俺が特異な体質である証だろうか？調査してみた方がいいのかもしれない。

『・・・お化けなんていないさ♪お化けなんて嘘さ♪』

「おいおい、そんなことというと・・・」

≪――――ふわ≫

『ひぇっ！？う、浮いたぁぁぁ！？』

「斎藤さんがポルターガイスト起すぞって遅かったか」

『そう言うことは早く言ってください！ひぇぇ！！おろしてー！！』

見れば斎藤さんが手をかざしており、机におかれたヴィズが軽く浮き上がっている。

つーか斎藤さんが死んだのって一か月まえですよね?え、期待の新人なんすか?そうですか。

・・・最近、こういったのに慣れてきた自分がいる。ナニソレ怖い。

「ようやくＤＤＳ－１がどんなやつかわかってきた」（前書き）

新年初更新！これからもよろしくお願いします

「ようやくＤＤＳ－１がどんなやつかわかってきた」

「ようやくＤＤＳ－１がどんなやつかわかってきた」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

さて熱を出してから少し経ち、ようやく身体が落ち着いたのか熱が下がってくれた。これもザッフィー（狼形態）、ヌコ姉妹、庭の動物たち、見舞いに来たフェイトにくっ付いてきたアルフ（仔犬形態）、ユーノ（学名Ｍｕｓｔｅｌａ　ｐｕｔｏｒｉｕｓ　ｆｕｒｏに似た何か形態）のお陰だろう。

アニマルセラピー万歳ってヤツである。動物のモフモフは何よりの癒しなのだ。まぁそんな訳で、外聞では病気に掛かり倒れたことになっている俺には結構なお見舞いが来た。例えば、ハラオウン家。リンディさんやクロノは仕事が忙しくてすぐに帰ったけど、フェイトやアルフは普通に見舞いに来てくれた。

それと高町なのはとユーノの凸凹コンビ。彼女らはフェイトと一緒に来た。お見舞いの品として翠屋のスィーツが貰えたのは嬉しか

ったぜ。尚、コイツらが俺が倒れた事を知っているのは、はやてが彼女らと同じ私立聖祥大付属小学校に通っている同級生だからである。

そりゃ学校であえるのだから、俺が病気になって倒れた的な話題もでるわなぁ。そんな訳でなんどかお見舞いに来てくれたので、なんだかちょっと嬉しかったぜ。弱っているときにただ一言だけでも声をかけて、良くなってねと言われるだけでも結構効くもんなのだと納得した。

お陰で俺はまだ大事をとってベッドの中だが、リンは既に復調して元気に飛び回っている。リニスがお目付け役でくっ付いているのだが、一緒にお買い物に行けたりと結構満喫しているようだ。この間なんて子供用和服を買って頑張って着付けて見せてくれた。黒髪ストレートの容姿なので和服姿が映えること映えること。

リニスは何時もの様にリンの和服姿に萌えており、リン本人も大層お気に召したらしく、今度から妖精形態の際には和服を基調とした衣装にしたいと言い出したくらいだ。はぁオラにもその元気を分けてくりと言いたいくらい元気だ。良きかな良きかな。

「・・・・」

『マスター？薬管吹かしたままどうかなさっ――また斎藤さんでも見えるんですか？』

手元に灰皿を置き薬草煙管を吸っていたら、ヴィズが話しかけて

きた。何分寝ているとヒマで困る。色々としたいのに、シランズですらキチンと休んでくださいの一点張りだったしよ。お陰でこうやって時たま来る方々を眺めながら一服するしかねぇ。

「いや、今日は来てない」

『（――ホッ）そうですか、まぁ今日は外は良い天気――「代わりに鈴婆さんが来ている」――またですか？もう驚きませんからね！』

さて、お見舞いは別に人間だけでは無いのだぜ。斎藤さんのコネで結構アレな方々が、ヒマだし面白そうだからと見にやって来られるのである。お陰で俺が増改築を積み重ねた地下基地の一区画を通るたびに、若干背筋が寒く感じられるエリアが増えてしまった。

別に偏見とか持ってないから、いてもいなくても関係ないのだが、足無いくせに不良座りで廊下の真ん中に居座るのはやめてほしい。エクトプラズムをタバコみたくするのとかもね。お陰で地下基地が辛気臭くなったと、機械である筈のシランズからも報告が上がっている。

その所為で地下訓練場もシグ姉さん以外はあまり利用しなくなった。そのお陰で損耗率がだいぶ減ったからある意味良い様なモノの、作った手前使われないのは悲しい。でもよくもまあシグ姉さんは辛気臭くなった地下基地を闊歩出来ると思う。烈火の将だからなのか、はたまた単に鈍いだけなのか・・・どっちなんだろうね？

しかし改めて考えると不思議である。ああいった方々はよく電子

機器がある所では出てこないと言われているのに、いまも普通に地下基地のスパコン周辺をうごめいている。病院で薬品耐性菌が出来るように、現代で生まれた方々はそういった耐性が付いていらっしゃるのやもしれん。

でも、どういう訳か魔法で張った対物理障壁を含む結界等は越えられないらしい。なので憑依とかされたらヤバそうな代物は、リニスに頼んで魔法で部屋ごと結界でパッキングして貰ってある。基本的には気のいい人たちが多いのだが念の為に、ね。

でも幾らヒマだからといって、最近寝たきりだった俺を脅かそうとかもマジで勘弁してください。大抵が微笑ましい悪戯の様なレベルだから、逆に笑える時もあって回復に一役買っている？のかもしれないけど。え？どんなことされたか？そうだなぁ・・・・。

例えばベッドが急にガタガタゆれたり、なにもいない筈なのにラップ現象聞こえたり？あとは足元までテーブルクロスに隠れたテーブルから頭だけだして“生首～”とか？何処から連れて来たのか不明だけど、動物霊で取り囲まれた（金縛り付き）こともあったなぁ。

さすがに赤さんのは効いたぜ。まだ暗い時間に急に目が覚めたかと思ったら、白目と瞳孔が逆転した赤ん坊が恨めしそうに座ってるとかどうよ？驚いて思わずつかみあげて投擲してしまった。まぁ物理的なのは一切効かないので壁をすり抜けただけだったけどね。

ちなみにその赤さんはその道３０年の大ベテランだ。見た目赤ん坊だけど中身はおっさんという感じだったため、それと似たような状態である自分と馬が合い、今ではよくおしゃべりする仲である。俺は薬草キセルを吸うわけだが、その副流煙には微妙に魔力が含ま

れており、赤さんでも感じられるとか・・・詳しいことは知らないがそうらしい。

その赤さんも何で来たのかと効けば、やはりたまたま暇だったから来たんだそうで・・・いい加減地下基地全体を覆える結界を張るべきだと思ったのは秘密だ。

・・・はは、もう何があってもオドロカナイよ。ウン。

「まぁそうソワソワしなさんな。こっちから何かしない限りは何もしないと契約してるから大丈夫だ」

『そんな！契約って言っても口約束じゃないですか！大体たくさん集まって悪霊と化したらどうするんですか！』

ヴィズはそういうが、俺は連中がそうなるとは思えない。なにせ信じられないほどのパワーを感じるわけだしな。それに廃棄世界にはもっと変なやつとかいたし、それに比べれば話が通じる分対応が楽なのだ。それに――――

「最悪、こちらが魔力張っていれば連中の力は及ばん。下手に排斥しようと刺激するほうが怖い」

彼らは魔力に敏感であり、あまりに強力な魔力だとしばらく行動不能に陥る。ヴォルケンリッタークラスなら通常状態で垂れ流している魔力ですら、彼らには突破できない大きな壁となるのだから、高レベルの魔導師なら特に心配は要らないのだ。

「それに、ヴィズよ。お前さんここら辺にどれだけ彼らと同じような存在がいると思う？」

『・・・わからないですよ。マスターやリンみたいにわかるわけじゃないし・・・』

「そう、正解。わからない」

『え？』

「つまりはな？俺たちでも“知覚できないくらい”沢山いるんだよ」

高熱を出して起きたら知覚能力がＵＰしたとかある意味テンプレートだが、実際そうなったのだからしょうがない。元々見えていたのが更に見えるようになっただけで、特に何かに役立つとかそういったのでは無いのが今までと違うところだろう。むしろ見える分構って～っとくるからウザい。

「そう言う訳で、下手に刺激するよりかは共存しておいた方が得策なのだよ」

『知りたく無かった新事実。ああ、ウチの地下基地はもうすぐ幽霊基地になるんですね』

「普段人がいないという意味ではあながち間違いでは無いな」

基本的に俺しか使わないしねぇ。ま、今の所彼らとは友好関係を築けていると思う。だから俺はあまり心配はしていないのである。それにあんまり騒がしくしたり、度を過ぎたことをするなら高圧縮魔力で2度と再生できないくらいにしてやるからな。恐らく大丈夫だろう。

んでまぁ蛇足なのだが、実は退魔師のような人が他にもいるらしい。俺は面識も無いしそういった方々とお知り合いになる気は今のところない。なのでそういう人たちがいるという程度の認識だ。でもオカルト系もいるとは、流石はリリカル世界だな。ウン。

……

……

……

〝――以上で報告を終わります〟

「了解した。更に解析を続けてくれ」

さて、更に数日が経過し身体の調子もだいぶ良くなってきた。お陰でベッドに横たわりながらではあるが、止まっていた開発が行える。今は結局シランズにまかせっきりになってしまっているＤＤＳ

―1の経過報告を聞いている所である。

〜・・・・・〜

「――ん、どうかしたか？スイセン」

〜いえ、少佐の体調はまだ悪いと聞いていたもので・・・〜

「大丈夫だ。飽く迄大事にということらしいしな」

〜はぁ・・・〜

「それに手持無沙汰でね、こうやって何かしてないと逆に精神に悪い」

〜そうですか・・・しかし御無理はなさらぬようにお願いします〜

「判っている。そう口煩く言わなくても大丈夫だ。それにな？今はもうていの良い休暇だとおもって諦めている。発掘状況も定期的に知りたいだけで他意はないんだ」

〜了解です。――では今まで通り発掘と解析を続けます。それでは改めてこれにて〜

「おう、壊れない程度に頑張ってくれ、スイセン」

〜はい、それでは失礼します〜

秘匿次元間通信の空間ウィンドウが閉じられる。俺は通信を切るとパタンと横になった。
う～ん、高熱を出してからどうも体の調子が戻らないな。

『ついにＤＤＳ－１を掘り出せたんですね？マスター』

「ああ、――と言っても、いまだに動かせる状態じゃないがな」

ヴィズが話しかけてきた。
そう、ＤＤＳ－１の発掘は俺が倒れた後もシランズ達により続けられていた。俺がそう指示したのだから、シランズ達はそれを実行したにすぎない。なのでこうして時々進展状況が秘匿次元通信回線を用いて伝えられるという訳である。

発掘させるだけならユーノの部族である発掘一族スクライアにでも任せれば良いかとも思うが、場所が廃棄世界な上にそのあまりの寒さから人が長時間活動するにはとことん向いていない世界である。たかが発掘屋が管理局でも数少ない高ランク魔導師を保有しているとは考えづらいので、たとえ呼んだとしても発掘はできまい。

「しかし、報告を受ければ受けるほど、技術的には先史時代の方が高かったんじゃないかと思えてくる」

『ええと、たしか“次元耐圧殻”でしたっけ？』

「ああ、どう考えても戦争用に考案された技術だが・・・悪くない」

先のＤＤＳ－１の発掘、それと掘り出された部分の解析が進んだ結果判った技術。次元耐圧殻、これはＤＤＳ－１を次元空間に“潜航”させることが出来る、らしい。もっとも、飽く迄残されていた資料を翻訳して判った事だから本当の所はいまだ不明だ。

技術的な説明は面倒臭いのだが、簡単に言えば人為的に次元空間に層を作り出す装置があり、その作られた層に船体を潜り込ませることが出来るらしい。尚且つその時に掛かる次元空間に人為的に作られた層が元に戻ろうとする力。それを物理的な圧力へと変換し、発生時間をゆるやかにして対応することが出来る。

そして・・・とりあえず仮に次元偽層と呼称しておこうか？その次元偽層に入りこむことで、次元空間に存在する支流の様な空間を移動できるのだそうな。次元空間を高次元的な角度でとらえれば、実は境界らしきものが存在しているらしく、ＤＤＳ－１はその境界線に沿って偽層を形成する事で潜航して航行できるという訳である・・・説明にはそうあったが本当なんだろうか？

要は次元空間に無理に潜りこむ時に耐える為の殻、それが次元耐圧殻なのだ。理論上は耐圧殻さえ持てば、隠れる空間の無い次元空間内において完全に姿を消すことすら可能らしい。
明らかに現代の技術や理論を数十世代先まですっ飛ばしているとかどうなのよ？と言いたくなったがそれはそれだ。

それに本当はもっと色々と小難しい理論に基づいたものだ。しかし俺が理解できて口で説明できる範疇はこんなもんなのである。これはこの先、もっと色々と調べる必要があるだろう。それにこれも多分ロストロギア級の技術なんだろうしなぁ・・・管理局にバレたらなんだかんだ理由を付けて接収されそうで怖い。勿論確かなことが解るまで、俺も使うつもりは無いけどな！

第一、その為の要となるコアブロックが壊れてて、どちらにしろ今のままじゃ使えない。仕えたとして今の所ただの次元航行船でしかないのだ。ちょっと過剰な武装付きのな。とはいえ、廃棄世界に放置されていた辺り、案外使えないのかもしれないなぁ。未完成故にコアブロックを破壊して次元空間に廃棄されたのかもしれない。

あと当時の資料なんて全然残って無いから、本当の所は不明だけどこれだけは言える。少なくてもＤＳＳ－１はアルカンシエル搭載艦の次に攻撃力が高い。アルカンシエルの様な特殊兵装は無いらしいが、ミサイル・空間魚雷・各種対空砲・バーストレーザー砲などなど、通常兵装における火力面ではアースラ以上なのだ。

よくも貧弱なソフトウェアでここまで作れたもんだと逆に感心した。先史時代には質量兵器が乱用されていたというが、そこら辺の技術はやはり現代よりも上だったんだとしみじみ思った。旧暦４６２年の大規模次元震が起こらなかったら、今頃この兵器を保有していた世界は次元世界の覇者になっていたかもしれないな。

とにかく、一応解析及び修復は続けよう。管理局に渡しちまうのはもったいないからな。どうせ世界間移動は可能なんだし、私用次元航行艦ってことで登録申請出そうかな。そこら辺世界によっては規制が甘いらしいし・・・考えておこう。

「しかし次元潜航か・・・隠れるのが大好きな俺にはお似合いか」

『船体も白っぽいグレーですし、意外とお似合いかもしれませんね』

ちがいねぇ、と俺は苦笑しつつ、マルチタスクでスイセンたちから送られてきたデータを元に改装案を組み上げていく。精神的な疲れで倒れただけなので、以前過労で倒れた時よりかは楽だ。そして俺はこの後も時間を忘れるほどに色々と研究に没頭した。

『――・・ん？マスター。リニスから通信です。ご飯の時間だそうですよ』

「ん、了解。――ついつい時間を忘れてしまうな」

『御父上の血筋ですもんねぇ～』

「違いない」

俺の忠実なる従者にして、とびきりの相棒の言葉にまた苦笑してしまう。どうも俺は父上の血なのか研究や開発に没頭すると時間を忘れてしまう傾向があるようだ。研究者肌というかは開発者？クリエイターとでも言えばいいんだろうかねぇ？

まぁ楽しいから気にして無いんだけどな。

『そういえば、管理局の人間が八神家周辺をうろついていたようですが、監視の量産型からの報告によると撤退したようです』

「・・・何しにきてたんだろうな？」

『さぁ、少なくても危害を加える積もらなさそうでしたので放って置きましたけど・・・』

リンディさんとかには、きちんとお話を通してあるはずだし・・・。ロストロギア級の物品があることがばれた？いや、あの人ならまずは一度話しに来ると思うし、ということはそいつらはリンディさんとは別件かな。

まさかグレアム提督ではないとは思うが、この間の演習で誰かしらに目を付けられたかも知れない。・・・一応リンディさんに問い合わせておこう。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅとある人事部所属の管理局員

いま私はとても面白いものを見ている。それはとある非公式模擬戦の戦闘映像だ。そこに映し出されたのは全身甲冑に包まれた顔すら判らない人物。背丈からすると子供なのに、その人物に武装局員たちが狩られていく映像だ。時空管理局人事部に所属している私にとって、この手の資料を手に入れることは容易い。

管理局が正式採用しているデバイスには、事件の立証に役立てる為の録画機能が搭載されている。デバイスが起動すると自動的に起動するそれは、この非公式模擬戦の全貌をほぼすべて記録する事に成功していた。

つまり、この映像は本局のデバイス整備の人を脅ｓ・・・頼み込んで借りたものだ。

ようするに武装局員側からの視点でみている、という訳である。

「――――それで、なんとか人物の特定は出来たのね？」

「はい大変でした。なにせ非公式な模擬戦で、相手が匿名を希望しているらしくて、見つけられたのもほぼ偶然ですね」

「匿名？それでも顔くらいなら」

「それが、模擬戦開始の時から演習場に潜んでいたらしく、終わった後もあの鎧を着込んでいた為全く顔が特定出来無かったんです」

「・・・随分と警戒していたものね」

おかげで折角の大物がいたというのに、本局に居る間に勧誘が出来なかった。この映像の存在を知ったのも、偶々部下がこの演習に参加した武装局員の一人から話しを聞いたからである。部下がその話をまったくのホラ話と思わず、一応裏を取っていてくれようと思ってくれて幸いだったわ。そのお陰で、なんとか誰なのか特定にまで至ったんだしね。

「同伴していた教官からも話しを聞きましたが、結局正体を知っていたのはグレアム提督の使い魔だけらしいです」

「頭が痛いわ」

でも新たに問題発生。匿名希望の人物はグレアム提督と友人関係だという。さらには海の方のハラオウン提督とも懇意らしい。これ程まで管理局員と親しいくせに、何で管理局に入局しないのよ。勧誘しようにも本人が管理局入りを否定していると聞いている。

曰く“肌に合わない”と言うことらしいが、ふざけんじゃないわと思う。魔法資質を持たない私ら一般職員が、ここまで来るのにど

れほど時間をかけたか。この戦闘映像に映し出されているこの人物並の魔法の力さえあれば、大抵の事件なんてすぐに解決できるというのに・・・。

「まったく、もったいない」

「ですね。しかもロウラン提督からも待ったが掛ってしまいましたし」

「『強引な勧誘はするな。手出し無用』だったかしら?要訳すると」

「ロウラン提督もハラオウン提督からの伝手で知っていた様ですね。とはいっても本人が希望しない上に強引な勧誘は管理局への反発を招くと踏んだようで」

そう、この件からは手を引けと、直接ではないが上から圧力が掛かり始めている。普段なら魔力資質の高い人間は、何かしら理由を付けてちょっと強引に引っ張りこむものなのだけど、今回はちょっとそう言う訳にもいかないようね。まったく、バックボーンが強い人間というのはコレだから・・・。

「とにかく、戦闘映像は武装局員の教練課に回して置いて。資料として使いたいらしいから」

「了解しました」

はぁ、骨折り損の草臥れ儲けとはこのことね。
何だかどっと疲れちゃった・・・しばらく休暇でも取りたいわ。

「・・・折角の身辺調査票も、意味が無くなっちゃったわね」

私はそう言ってから、データをまとめてデータバンクに封印した。
そしてその次の週には、新しく募集で入ってきた新人達の人事に追われ、このデータの存在をすっかりと忘れてしまう事となった。
――だが、私は知らなかったのだ。

この時、封印された筈のデータが何者かにコピーされていたなんて・・・。仕事に忙殺されていた私が、その事気が付く事は無かった。気が付いたのは、この日からおよそ１０年近くたった後である。
まぁ、例え気が付いていたとしても、どうにもならなかったとは思うけどね。

「ようやくＤＤＳ－１がどんなやつかわかってきた」（後書き）

幽霊さん達の話と見せかけて、実はフェンには知らない内に強力なバックボーンがいたという話。ナニソレ怖い。

ソレではノシ

「小奇麗だな」

「小奇麗だな」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

――５月。

春となり、田畑に田植えをする季節として早苗月とも呼ばれる季節である。端午の節句でもあり、鯉のぼりを上げたりして男の子の節句と言われているが、一説では女性が田植えの前に穢れを祓い清める儀式を行う五月忌みという風習と中国から伝わった端午と結びつけられた女の子の節句だったとも言われている。

他にもゴールデンウィークがあったりと、５月に関連する行事は多い。遅めの花見というのも捨てがたいものだろう。まぁそれ以外にも五月病と言ったような、新しい環境に入り、気が抜けてしまう時期でもある。

――そしてコレは只単に書いてみたかったので、別に本編とは何ら関係が無い。

＊＊＊

「う、うそだっ――まさか、そんなっ」

それは唐突なことだった。俺には寝耳に水の様な事態。
今明かされる衝撃の事実に、俺は溢れだす動揺を隠すことが出来なかった。
そんな、あり得ない。だってそんなことがあっていいはずが無いんだ！

「認めなさい。コレは事実なのよ」

「あなたは知らなかったとはいえ、それを行ったのよ」

俺とかかわりがある二人が、何処か楽しそうにそう俺に呟いた。
身に覚えが・・・無い訳では無い。何故なら、確かにその両者と俺とは接点を持っていたからだ。そして当時の状況を考えれば、その両者があの時あの場に居たという可能性は非常に高かったことに至ったのである。

俺はその事に気が付くことが出来なかった。それはその二人の擬態が上手かったとかそういう話では無く、注意して冷静に考えれば

思いたる事実でしか無かったのだ。それにすら気付けなかった俺は、まるで道化だ。

動揺を抑えきれない俺は、無意識にその二人の前から後退した。だが部屋の壁がそれを阻み、俺は壁に寄りかかると力なく俯いた。そして狼狽しながらも、何処かまだ信じたく無かったと、弱々しく声を出す。

「ヌ、ヌコ姉妹が、リーゼ姉妹だったなんてっ」

何てことや～～～～!!知らんかったとはいえ、あんなことをっ!だってとっても美猫だったんだよ!?それが双子ですぜ?猫愛好家なら我慢できまへんでおます!でも、中の人は使い魔で人型で・・・女性で、おれはぁぁぁ!!!

「「・・・責任、とってくれるわよね?」」

「ひうっ!?」

二人、リーゼ姉妹はとても楽しそうにそう言うと、唖然としてしまい硬直した俺を抱き上げて撫でまわす。正直どうすればいいか判らない俺はされるがままだ。まるでこの二人が猫形態だった時にし

てきた事の裏返しである。

・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ

気分的には美人局に手を出しちまったお馬鹿の気分。鬱だ死のう。

「さて、そろそろ良いか？」

俺がリーゼ姉妹に好き勝手弄られていると、クロノが半ばあきれた様な声でそう言った。コイツずっと見てるだけで助け舟一つ出さなかった。全く薄情なヤツである。

「生憎、その二人が結託している時には逆らわない事にしている。大体そんなことをする為に来てもらった訳ではないからな。此方としてはいい加減話を進めたい」

む、まぁソレはそうだが・・・。

「・・・そう言う訳だからロッテもアリアも」

「はいはい、りょ～かい」

「ごめんなさいね。軽い冗談のつもりだったのだけど、反応が初々しくてつい」

はぁ、ようやく真面目な空気に戻ったぜ。さていい加減本題に戻ろうと思う。

俺が今いるのは時空管理局本局である。俺がいる理由は非常に簡単なもので、フェイトやはやてやなのはやユーノ達の付き添いなのだ。

一体なんの付き添いなのかというと――

「いやぁ、それにしても彼女たちが管理局入りを決めてくれて助かった」

――まぁ、つまりはそう言う訳だ。

この度、我が友人たる高町なのは。そして俺の居候先家主の八神はやて。そしてフェイトを加えた3名が管理局入局をすることになったそうなのだ。

「あの子たちの戦闘能力なら、即戦力だよ」

「ほんとねー。まさかこんな辺境の管理外世界にこれ程の逸材が眠っているとか、世界は本当に広大なんだと改めて思い知らされた気分よ」

リーゼ姉妹が言う通り、彼女らは魔導師としての、それこそ戦闘能力を買われた形となる。何せ管理局としては切望すらしていた高ランク魔導師だ。勧誘の手が全く来なかったという訳ではないのである。

俺の場合は最初からそう言ったのはお断りだし、その胸を伝えた上で強引な手に出ようものなら家族を連れて行方をくらますことを予め伝えていたので、リンディさんからの軽い勧誘は結構あったが、かつてＵＳＮ軍に入れさせられた時のような強制的な勧誘は来なかった。

しかし、その他三人娘については多少事情が異なる。

フェイトの場合は何時の間にかフェイト・Ｔ・ハラオウンとなっていたことから、ハラオウン家となじみ、その延長線で家族ともどもの職場という感じなのだろう。何せ今だ何処か世間知らずであり、天然入っている娘なのだ。

普通の企業よりかは彼女の技能である魔導師を生かせる管理局という職場はある意味うってつけであり、また管理局はどういう訳か身内に非常に甘いところがあり、家族が同じ部隊に配属になっても問題とならないのである。

あ、俺の場合は母上の半ば強引な上層部への圧力だったから、この場合当てはまらないから気にしないでほしい。ＵＳＮ軍でも家族

同士が同じ部隊として配属される事はほぼ有り得ないことなので、俺はその点でも特別だったってだけだ。

話を戻すが、フェイトはそう言う理由で家族から誘われて管理局入局を決意したわけである。そしてフェイト嬢経由で、なのは・はやての両名にも管理局に入局しないかというのが以前から密かに打診されていたらしい。

何せこの3名は同じ小学校に通う同級生同士で友達なのである。それぞれが共通の技能である魔法の力を持ち、それを生かせる場所で親しき友と働きたいと願うのはごく自然な感情であり、あり得ることだ。

だが本来なら10歳の少女達を戦いの場に送ることになる時空管理局に入れる事には反対すべきなのだろう。銃であれ魔法であれ人の形をしたものを撃つということは、やはり精神に悪影響を与えやすい。

いや、今はまだ幼いから理解できていないのかもしれない。これが後々になり、己のアイデンティティを構築できる年齢となってきた時、それまでの自分が暴力にまみれた自分で有るということを自覚した時、はたして彼女たちの精神がどうなるか判らない。原作組だから大丈夫という訳にはいかんのだ。

それこそ、そう言った事を自覚できる年齢に達した途端、魔導師としての生命が断たれる可能性だってある。だが、彼女たちは自分で決めてしまったのだ。そうなったらもう止められない。なにせ、この3名にはもう一つ共通するところがあり、非常に頑固な面を持っているのである。

一度決めたら一直線、それはある意味美徳でとても愚かな人の一面だ。だが、高ランク魔導師である彼女らはその美徳で愚かなそれを持っている。その彼女たちがやると決めた以上、本人たちでは無い外野の俺達がどうこう言ってももはや管理局入りは止められない事は明白だったのだ。

そういう訳でなのは嬢はこの為に、自らの事情を家族に全て話したのだという。俺はあずかり知らん所でそんなことが起きていたとはな。まぁそんな訳で紆余曲折はあったが、義務教育は出る事を条件になのはは管理局に入局出来るようになった。

何故か彼女の友人で魔導師では無いアリサ嬢やすずか嬢にまで事情を話してしまった事には驚いた。まぁその二人は親友である訳で、秘密を作りたくは無かったというのもあるのだろう。

例え魔法云々を彼女らが話しても、あの地球では頭がイタイ人に見られること請け合いだから、聡いあの二人がそんな愚かなことするとは思えん。

ちなみにウチの場合は家主様の決めたことなので、居候のオイラや家主で夜天の書の主たる八神はやてに仕える5名は、基本的に生命の危機でもない限り彼女の決定を覆せない。彼女は俺にとってある意味で上官だからな。上官の決定には逆らえんのよ。

そういう訳で今回、非常に目立つであろうヴォルケンリッター達はここには来てはいない。勿論何かあった時はすぐに召喚出来るように家で待機であり、護衛として俺＋量産型シラン光学迷彩仕様が複数機、行動を共にしている。余程のことが無い限り、彼女らを危険にさらす事態にはならないと思うぜ。

勿論、子供が戦うのがいやだとか、そういう義憤に燃えて彼女らを管理局させないということは簡単だ。彼女らの魔力を完全に封印、もしくはリンの力を借りてリンカーコアを日常生活に支障が出ない程度に歪め、魔導師として生きていけなくしてしまえばいいのだ。

そうすれば、彼女らの原作で起きた様な事態は避けられるだろう。だが俺はそんな気は毛頭なかった。俺は知っているのだ。俺も含めて戦う味を知ってしまった魔導師はその感覚から逃れることはできない。それが望む形であれ、望まぬ形であろうとも心のどこかで戦うことを追い求めてしまう。

それは戦う力を持ってしまったが故の定めの様なものであり、決して逃れられないし否定することは出来ない運命である。俺なんてまさにそれだ。本来なら必要も無いのに、何かに脅えるかの様に異常なほど戦力増強や自身の鍛錬を欠かさない。

兵隊としての定命を叩きこまれ、幾度もの実戦という名の修羅を越えた。実戦を越えて恐怖に襲われ、それを越えた先に見出したのは、確かなる達成感と恍惚とできるほどの解放感だった。もう、俺は戻れない所にいる。ソレだけは確かなのである。

そして件の3人も魔法という力を知ってしまった。特定の技法により、魔力素を介して事象を発現させる奇跡の様な力。あまりに強力なそれは麻薬のような魅力を放ち、一度覚えてしまったそれは禁断の木の実のように、忘れることなど出来やしない。

仮に魔法の力をすてて日常に生きろと言ったところで、この奇跡の力に魅了された我々魔導師が魔法を捨てることなどあり得ないのだ。蛇のように、茨のように深く絡みつくそれらを前に、逃れるこ

とは決してできない。

3人は管理局入局を決めた。家族の為、困っている人を助ける為、理由は色々だろうがコレだけは言える。魔導師となった彼女らは無意識ではあるが魔法の力を行使できる居場所を選んだのだ。

故に、彼女らと魔導師である俺達はそれを止められない。俺達は知っているからだ。魔法を行使できない時の渇きを、蜂蜜のように甘い魔法の力の魅力を・・・。

要するに、どうせ我慢できなくなるだろうから、それならそれなりの組織に属させて発散させる方が楽なのである。特になのはの場合なのだが、最近ユーノから教わることがなくなり模擬戦を所望する回数が増え始めたのだ。

俺はなんだかんだでのらりくらりと言いくるめて模擬戦を回避しているのであるが、フェイト嬢やはやてがそのあおりを食っている。そん時に思ったのは、なのはは放置しておくと危険すぎるから、もう管理局で管理してくださいって事だね。

全く、ついついあの時にエクセリオンに改造しちまった所為で大変だぜ。いやマジで。

「ソレは兎も角として、何故リーゼ姉妹がここに？」

なのは御一行の事は良いとして、何故にヌコ姉妹・・・もといリーゼ姉妹がアースラにいるのかを聞いてみた。だって両名とも、本来ならお仕事でお忙しい筈では？

「「フェンをからかう為」よ」

「・・・・・・・・・・・・」

な、なんとも言えねぇ・・・。まぁソレは兎も角、訓練校に短期入学か。

俺も経験したなぁ、あの時は戦争中で状況が切羽詰まっていたけどな。

それに少なくてもなのはとはやてに関しては心配していない。なのはの場合は頑張った後は適度な休息を取るということを覚えているし、はやての場合は闇の書関連云々で何やら言われそうだが、生憎彼女が持つのは夜天の書なのだ。大体、闇の書の闇は全部俺が喰っちまったからな。

いまでは只の古代ベルカ式デバイスの使い手でしかないはやてを責められる奴はいない。もしいるとするなら、そうだなぁ・・・明日の日の出を見れなくしてやろうかな。それとも夜道も気を付けてもらおうかな。くふふ。

＊＊＊

『キングクリムゾン！過程は消し飛び結果だけがｎ』

「何言ってんだおまえは？」

ヴィズがまた何処からデムパを受信したらしい。・・・この間一応のメンテでは問題無かったよな？本来メンテナンスフリーだけど。まぁソレはさて置き――

「まぁまぁ、ヴィズがおかしいのは毎度のことやん」

「・・・それもそうだ」

『ひ、ひど！マスターもはやてさんも酷いですよ！？』

「おお、ココが陸士訓練学校か・・・」

『シカトですか！？泣きますよ！？』

「目玉も何もないのに泣くとはどういうことやろか？」

それはきっと心の中で泣くということさ。まぁこの会話からも判る通り、俺達は陸士訓練校にやってきている。広い敷地に小奇麗な校舎。なるほど中々良い所じゃないの、と思わず感心してしまった。

今は中に入る為の手続きをクロノがしてくれているので、俺達は外で待っているって訳だ。つーかクロノが何故いるかってーと、ただたんに非番らしい。

「わぁ～、おっきいなぁ～」

「がんばろうね。なのは、はやて」

「そうやな。頑張らんと・・・それにしても訓練校なんていうから、もっとゴツイ感じを想像しとったんやけど、全然ちがうなぁ」

やっぱりそう思うよな。

なんでこうミッドチルダの建物ってのは妙に清潔感溢れるのが多いんだろうか。

これだと訓練校というよりかは、只の学校でも通じそうだぜ。

「ねぇねぇ、フェン君もこんな感じの訓練校で習ったの？」

モノ珍しげに訓練校を見上げていると、なのはが声をかけて来た。

う～ん、そうだなぁ・・・。

「いや、こんなに整ったところじゃなかったな」

少なくても門と塀があって、入口には門兵が立っていて、巨大なグラウンドがあったっけなぁ。基本的には軍基地に隣接した施設ということになっていたが、有事の際には軍学校自体も軍の施設として稼働出来るように造られていたっけ。

「とりあえず、もっとゴチャゴチャしたところだったよ」

「ごちゃごちゃ？それってどんな風に？」

「どんな風？・・・あーうー、そうだな。風雨にさらされて所々ひび割れてたな。
勿論それは見た目だけで、キチンとした結界に守られた魔導拠点でもあったけど」

俺が軍事訓練受けたところは軍事キャンプみたいな感じだったしな。グラウンドと学科棟と技能棟、それに寮と食堂と病院がセットになっただけで何もない場所だった。とにかく戦争で予算ないから建物が汚いのなんのって・・・まぁ蛇足だな。

「ふーん。そうなんだ。じゃあ、こっちの方がいい環境なのかな？」

なのははそう言って校舎を見ていた。
俺も釣られて訓練校の建物を見るが、うーむ。

「どうだろうな。少なくても敷地の広さでは俺がいたところの方がデカかった」

俺達ＵＳＮ式魔導師の場合、戦闘訓練には必ず射撃魔法がカリキュラムとして取り入れられていた為、流れ弾を防ぐ意味でもかなりの規模を誇っていた。ああ、思いだすと懐かしい。

新兵殺しの大グラウンド無限周回走破実技、アレは面白かった。
魔導師は魔法で戦うモノではあるが、戦場という特異な環境においてモノを言うのは体力である。

俺達魔導師は魔力を用いて身体強化魔法等で身体能力を底上げできるが、スタミナなどの体力は基本的に自分で鍛えていくしかない。例外として治癒魔法をかける事で体力の回復を少しだけ行える。
だが、魔力を消費するリスクを考えるとハイリスクだ。高魔力、高技能、高技術、どれもあればいいモノだが必須では無い。現場で求められるのは倒れない持久力、要するに体力なのである。

当然俺も参加させられた訳だが、元より身体を苛め抜きサバイバルまで経験し、前々から身体強化を用いて長距離マラソンまでこなしていた為、ほかの訓練兵がドンドン力尽きる中、只一人待ったが掛るまで走り続けた経験がある。
命が惜しくて訓練なら全力でやると決めていたお陰で目立ってしまい、闇ウチされそうになったのはいい思い出だ。・・・思いだしたら泣きそうだぜ。

「フェン君？」

「・・・ああ、何でも無い。目にゴミが入った」

思えばあの訓練で実力出さなければ、疎まれる事も無かったんだよな。でも実力出さなかったらワイズ教官を含めた教官団とのマンツーマンレッスンは受けられなかったろうし・・・俺もここに居なかっただろうけど。

ふとしたことから懐かしい記憶を思い出し、万感の思いに浸る俺だった。

……

……

……

さて、その後すぐにクロノが来て入館手続きを終えたので職員の人に案内してもらえる事になった。俺は今更陸士訓練学校に入るつもりは毛頭ないが、もの珍しさから彼女らについて行った。

案内されたのは校長室、老年の女傑ファーン・コラード三佐が俺達を出迎えてくれた。何せなのは嬢、フェイト嬢、はやての三人は数少ない高ランク魔導師な上、基本的な魔法関連の教育を終えている為、短期入学のシード枠。ファーン校長が出迎えるのも判るってモンである。

「ようこそ第四陸士訓練校へ。わたしはファーン・コラード。この訓練校の校長を務めています。よろしくね」

コラード三佐を見た第一印象は、優しいが甘さは無い強い女性だろう。柔和な笑みを浮かべてはいるが、何処か芯が一本通っている

ような印象を受けるのだ。聞けば元戦技教導官であり、こと教練に関してはベテランどころかエキスパートである女性である。

三佐ということは、ＵＳＮ式で言う所の少佐に該当する人間だ。そして元戦技教導官であったということは現場で叩き上げられた人間である。人柄も問題はなさそうであるし、何処となく雰囲気が肝っ玉母ちゃんみたいだぜ。

三人娘は校長室にはいった当初は緊張していたが、柔らかに対応してくれるコラード三佐の雰囲気に緊張を解されたのか一人一人自己紹介を行っていた。当然雰囲気を読んだ俺も三佐と挨拶を交わした。付き添いと言ったら何故か怪訝な顔をされたので、ちょっと困惑したが、そのまま話は流れて三人娘の短期入学の話に入ることになった。

俺は飽く迄付き添いとして来ただけなので、これから先はコラード三佐にお任せして、三人娘が帰る時間までミッドの散策でもしゃれこもうかと思い部屋から音も無くスッと出ようとした。

のだが――――

「おいおいフェン、どこに行くつもりだ？」

――――何故か慌てて追いかけてきたクロノに止められた。なんぞ？

「いや、ここからは三佐殿にお任せしようと思って・・・」

訓練校の中だし、余程のことが起きない限りは大丈夫だと思うしな。

それにミッドの魔導関連ショップ漁りたいし・・・。

「何を言ってるんだ？君も短期入学するんだよ」

「・・・は？」

その時だった。ちょっと聞き捨てならん単語が聞えた所為で思考回路がフリーズを起しかける。なんとか数秒で再起動させた俺は、目の前でキョトンとしているクロ助に問いかけた。

「いや、俺は付き添い兼護衛役でここに来ただけなんだが？」

「だが、既にそういう風に話が通っている。師匠達の手で・・・」

・・・・おk、事情は把握した。

「俺、そんな話しは聞いていないんだが・・・」

「諦めろ。アリアとロッテだぞ？」

「・・・その言葉で納得してしまうのは何故だ？」

「恐らくはおふざけと本気が半分半分の冗談だとは思うが・・・」

そう言うとクロノは額に手を当てて小さく溜息を吐いた。

しかし、なぁ・・・。

「そんな事言われても、俺はすでにＵＳＮ式魔導師として完成されてしまっている。

今更ミッド式やベルカ式などに鞍替えする気は無いんだが？大体肌合わんし」

コレでもし俺が本気で断ったらどうするつもりだったんやろね？

「・・・そうなんだが、何故か正式な書類が通されていてね。でも確かにフェンが習うべきことは無いだろうしなぁ」

んだんだ。陸戦魔導師の時代なんてとっくの昔に通り過ぎてるぜ。

ただでさえこっちの時代に飛んでからも訓練を欠かさなかったから、技量はかなり上がっているんだぜ?変に訓練校に入る方が問題あるだろうに・・・。

ハッ!まさかあのヌコ姉妹、俺を管理局員にしたいのか!?

「ちなみに、正式な書類というけど、やっぱり断ったらダメ?」

「そりゃあね。何せ短期入学ってことで僕や母さんからも推薦を書いた訳だし、ここで断られるのはちょっと・・・」

ああ、まぁ執務官殿の顔に泥を塗るのは不味いわなぁ。
これから先、色々と贔屓して貰いたいし・・・つーか外堀埋められてたんかよ、クソ。
でもなぁ・・・。

「なんとかならないか?」

とりあえずもう一度粘り、聞いてみる。
今更基本教育とかなんて苦痛過ぎる。恐らく短期入学で教わるのは管理局での上下関係における礼儀作法とかが多いだろう。だが既に軍隊形式で身体に覚え込んでいる上、敬礼等は管理局もＵＳＮもほぼ変わらないのだ。なので出来れば堪忍して欲しいんだが・・・はたして。

「・・・ちょっと待っていてくれ、ファーン校長と話してくる」

「おう、頼んだぜ」

『――そういって校長室に戻るクロノを見送る俺、だけどこの後あんなことになろうとは予想だに――』

「おい、かってにモノローグを語るんじゃない」

『だってヒマなんだモン！リンはマスターの中で寝ちゃってるし、一人しりとりは飽きたんですよ～』

今度はヴィズが騒ぎ始めた為、クロノが戻ってくるまでヴィズの相手をすることになった。だけど、まさかヴィズの言った事が本当になるとは――

『――この時の俺はまだ理解していなかったのであった』

「だから、変なモノローグを語るなと・・・もういやこいつ」

――大丈夫だと、思いたいぜ。うん。

「経過を報告って感じ？」（前書き）

ちょっと長すぎたかもしれない。
もし長いと感じたら言って下されば2話分に分けます。

「経過を報告って感じ？」

「経過を報告って感じ？」

――――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――――

Ｓｉｄｅフェン

皆の衆、元気か？俺は相変わらず薬草煙管のお世話になる日々だ。

何気に普段から手放せない状態なので、現在吸えない状況が辛い。

そう俺はこれまたどういう訳か、陸士訓練校に来て居るのである。

ただ、別に訓練生という訳ではない・・・不法侵入でも無いぞ？許可は得ている。

「お久しぶりです三佐殿」

「いらっしゃいラーダーくん。一カ月ぶりかしら」

「肯定であります。およそ一カ月と４日経過しました。あの時のことは感謝します」

「まぁ、此方も本人が了承していないのにやらせるほど外道じゃないからねぇ」

さて前回、ヌコ姉妹の悪戯か策略かしらないが、なぜか短期入学の手続きの書類が出されそうになった。

そしてそれが結局どうなったのかと言いますと――ギリギリセーフですた。

話は通り書類は確かに来ていたが、まだ受理される前だったのである。

ちなみに受理が遅れた原因は目の前に居られる三佐殿のお陰である。

高ランク魔導師が４人も入り、おまけに短期間のみという特殊性。

それを鑑みて送られてきた資料を見て、それの更に詳細なものを要求したらしい。

なにせ、はやて達は一応１０歳にはなっているのに俺なんて見た目８歳児だ。

幼い子が訓練校に入校する事は過去に前例が無くはない。

それでも流石に年齢一ケタで来る子は数えるほどしかいなかったのだ。

こう言った事に慎重になるのはよくわかるというものである。

「でも、ちゃんと会って見て、あなたやあの娘たちが優秀だとすぐに判ったよ」

「まぁ彼女らは特別です。色々な意味で」

前回、態々三佐殿が俺達と対面したのには理由があった。

書類上は非常に優秀な若い・・・幼い魔導師達。

それがどういう存在なのか実際に己が目で確かめたかったらしい。

実際に会えばどういう存在かなど、経験を積んだ人間にならすぐにわかるのだ。

尚、なぜ俺に対して怪訝な視線を向けたかというと、ただ幼かっただけではなかった。

ぶっちゃけ、資料と実力やら魔力やらが噛みあわず困惑していたのだそうな。

なにせ三佐殿自体、もともとが戦技教導官だったお人である。

その実力は凄まじく、恐らく正攻法でぶつかれば俺も勝てない。
トラップ系を使えば話は変わるだろうが、敵に回したく無い程の実力者だ。

三佐殿の魔法の力とかは確かに強いというのもある。
だが、それ以上に経験に裏付けされた圧倒的な実力を持つある意味で母上と似たようなタイプだったのである。
多分狙撃しようとしても、戦闘中狙撃エリアには絶対に近寄らない。
アルアッソーやグロウタスクの射線に身を晒すことも無いだろう。

ある意味俺にとって天敵の様な存在であることは想像に難くなかった。

本能的にそう察知したので、実際はどうなのだろうかとも思うが、多分その通り。

なんて言うか、存在感？口では言い表せないなにかを感じるのである。

それ故に三佐殿は魔力を感じる力に長けておいでであった。

報告書に記載された俺のランクとその時に感じていた魔力量。

その感じに差異を感じたらしいのである。

以前、俺の書類は総合でBランクにされていると述べたことがある。

だが三佐殿が感じた魔力は明らかにBランクのレベルでは無かったのだろう。

恐らくは感じられない程小さいか、もしくは明らかにBランクの量ではなかったか。

俺の外に漏れる魔力は安定しないという意味で、非常に測定が難しいのだから当然だ。

なにせ当事者である自分ですら、普段の魔力量がどれほどなのか理解していないのだ。

まぁ己のレアスキルを考えると、魔力量云々は宛てにならないのであるが・・・。

ともあれ、そういう理由から書類は受理されることなく、俺は解放された。

三佐殿、マジでGJです。もうあなたには敬語でしか話せませんぜ。

「今思えばあなたを招かなかったのは管理局としては損失かもね」

三佐殿は残念ねといった感じに両手をぱらぱらとふる。
とはいえ心底という訳では無く、精々福引でハズレを引いた程度の感じである。

「いえいえ、自分は歪んでいますから、こういう場所では学べないだけですよ」

一カ月ほど、ここの訓練や教えている事をこっそり見せてもらった。
そして思ったのは、やっぱり俺にはあわねぇってことだろう。
俺基準で考えれば非常に温い、ぬるま湯もいい所なのだここは。
それに、良くも悪くも純粋な人間で溢れている。
そうなると、人を殺めた経験がある人間にはちょっと、な。

「・・・そう言う事を自覚していられる人間はそういないって知ってるかい？」

「自分が異端な存在であることは、生まれてすぐに気が付きましたから」

「赤ちゃんの時に？フフ、面白い冗談だよ。でも逃がした魚は大きかったとはこの事だねぇ」

意外と冗談ではない。主に転生という意味で。

三佐殿は、ま、良いけどねと話を変えた。

「それで?今日はあの娘たち三人の様子でも見に来たの?」

「肯定であります。たまたま本局経由で来れたので訓練の様子を見に来ました」

「そう、いいですよ。見て回ることを許可します」

「ありがとうございます」

俺は背筋を伸ばし敬礼を三佐殿に向けた。

本来なら別にしなくてもいいんだが・・・なんて言うか自然とやってしまう。

敬礼は本来敬意を払う相手に向けるべきものであるから、別に間違いではないので気にしてはいないけどな。

「・・・もう少しその口調がなんとかならないかねぇ」

「すみません。三佐殿を前にすると身体が勝手に・・・」

「体の芯まで叩きこまれてるって感じか。なら仕方が無いね」

ちなみに三佐殿は資料で俺の生まれを知っており、どんな存在かも知っている。

俺がＵＳＮ軍で史上最年少、ある意味狂気と取れる部隊長だったこともだ。

そして当時俺がどういった事をしていたかも、ご自分で調べられたらしい。

それでいて態度は変えないでいてくれる珍しい人でもある。だから信頼出来るのだ。

その後も一言二言話したあと、俺は校長室を後にする。

三佐殿とはこれからもいい関係を築きたいものである。

・・・仮に敵対しても、爆殺とかしたくないしね。

ま、それにしても本当に色々と大変だった。短期入学とかねぇよ。

クロノやリンディさんには推薦状を書いてもらったらしいが、譲れない一線はある。

なんとか入学はしなくても済んだが、ちーと申し訳なく思ってしまった。

その事を後でクロノに謝ったら、あいつは気にするなと言ってくれた。

彼曰くリンディさんも気にしないし、第一書類が受理されていたならまだしも受理されて無かった。

それなら推薦状は最初から無かった事にすればいいので、彼らの顔に泥は塗らない。

それを聞いて安心したのは余談だ。彼らの懐の深さにもな。

勿論、こんな事態を引き起こしてくれたヌコ姉妹への報復は敢行した。

直接手を下す訳ではない、ちょっと回りの方々に“お願い”しただけだ。

いやー、どんな所にもいるとは思っていたけどさ・・・本局にもいるとはね。

国際色というか次元世界色が豊かなメンツがそろっておりました。

特にこれまで管理局に勤めあげた心配性の先輩方が多くいた。変態もいたが。

まぁちと管理局の正義にうっさいが、基本的には良い方々ばかりだった。

俺の事情を話したら、ヌコ姉妹の折檻にご協力して貰えるくらいに・・・。

それからしばらくヌコ姉妹は非常にお疲れの様だったとクロノに聞いた。

流石は今も心配で残っている方々、此方の基地に居る方々と同じくらい強い。

ある程度憔悴したヌコ姉妹の様子を見て満足した・・・。

いや、ちょっと哀れに思えたので折を見て適当に引き上げてもらった。

個人的な報復はこの程度で十分だろう。どうせ八つ当たりだったし。

でもまさか彼女らからヌコ形態になるからリラックスさせてくれと言われるとはな。

よっぽど応えたんだろうなぁ、眼には見えないし・・・。

当然、もう二度とあんな真似はしない事を約束させた。

すぐに約束した辺り、大分参っていたんだろう。

毎晩寝る前に怪奇現象起これば、流石の使い魔でも精神的に参るよなぁ。

ま、精々それくらいが限界なのがあの方々のいい所だ。

さすがにもう私怨でそういうことを頼む事はしないけどな。

さてそれは良いとして、結局3人娘たちは三佐殿の眼に叶った。

今では無事に短期入学を果たして色々と修業中だそうだ。

それぞれ武装隊士官候補生、執務官候補生、特別捜査官候補生へ進むらしい。

そこら辺は原作通りだし、ある意味で陸海空の全てを網羅する気だなと思った。

ちなみにユーノは無限書庫で司書見習いをしているらしい。

だが有能過ぎでもうすぐ本職の司書になってしまうそうだ。

ただ、無限書庫が面白過ぎるのか外にあまり出なくなったらしい。

だから俺は定期的に襲撃して、ユーノを外に連れ出すようにしている。

籠り過ぎるのは身体に悪い、それに無限書庫内は無重力に近い。

あんまり籠り過ぎると、若い身空で骨がスカスカになっちまう。

そうさせない為、見張りを兼ねたシランを一機彼にプレゼントする予定だ。

名前は決めていないが、司書のサポートを行えるようにカスタムした。

空間圧縮個を備えているので、資料の持ち運びが超楽になるだろう。

当然タクティカルアームを４本ほど増やし、書庫の整頓整理も可能にする。

ＡＩは量産型だが、機体性能はスイセン達ノーマルシランと同程度だ。

また現在開発中の小型シランの母艦として運用可能出来るように拡張性を残した。

小型シランズの開発が終われば、人手が足りないと言っていた無限

書庫での仕事の役には立つだろうよ。

また無限書庫内は無重力なので、司書シランのスラスターを増設しておこう。

・・・これ成功したら宇宙開発でも活躍できるかもしれないな。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

第四陸士訓練校の中を歩く８歳児、絵面的には非常にシュールである。

だがそんな事は気にもせずにフェンは勝手知ったるなんとやら。

回りから寄せられる奇異の目もお構いなしに訓練校の通路を進み続けていた。

何故なら彼がここに来るのはコレで通算４度目くらいになるからである。

一カ月ほど前、リーゼ姉妹の悪戯か策略か短期入学されかけたフェン。

なんとかそれを阻止した後も、フェンは何度か三人娘の様子を見に来ていたのである。

どの程度の教育をするのか興味もあり、また変な事吹きこまれないか心配だったのだ。

なんだか何処の親ばかだと言われそうだが、彼の中身はいい大人である。

ある意味娘の様な年齢の彼女らを心配するくらいあり得る話だ。

傍彼見れば寂しいから見に来ているようにも映るのだが・・・。

まぁトップがキチンとしているからか、第四陸士訓練校の教育に問題はない。

むしろフェンに言わせれば訓練が温いと思っているが、お前の常識と一緒にするなという話であろう。

フェンの基準で考えたら、管理局員の訓練は全てシールズ並となってしまう。

当然付いて来れる奴は殆どいない。ソレでは数が欲しい管理局では

意味が無いだろう。

さてフェンが通路を歩いていると時折ビクンと震えて立ち止まることがあった。

どうやら感じる奇異の視線の中に、以前武装隊との模擬戦の時にフィエロから感じたのと同じ視線を感じることがあるらしい。

一応克服こそしたが、あの出来事はいまだ根強く彼の精神に入りこんでいるようだ。

なので、曲がり角を曲がったところで気配を消して近くに隠れる。

隠れた場所からちらりと見れば、何故かきょろきょろしている人間が何人か・・・。

まったく、人が多ければそう言うのも沢山いるというのかと彼は溜息をつく。

つーかキョロキョロしていた人間の内４割以上が女性とか。

管理局はもうダメなんじゃないじゃろうかと思ったのは彼だけの秘密だ。

とにかくそう言う大きなお兄さんお姉さんたちを撒き、目的の場所へとやってきた。

やってきたのは訓練校の屋上である。何故屋上なのか？
それはこの屋上からなら訓練校の訓練場を一望できるからだった。
また様子を見に来ているのは三人娘には内緒であった。
だから近寄らなくても訓練を一望出来る場所に来たのである。

「さて、お三方は上手くやっているのかな？」

眼を細め訓練場を見てみれば、どうやら封時結界内で戦闘訓練を行っているらしい。
白いＢＪに身を包んだ少女が飛びまわりながら砲撃を撃って、人が宙に舞っている。
雷を伴う斬撃が飛び、ビビビビビと感電しているような人影が見える。
紅い鋼の短剣がそれでも生き残った人影を撃ち抜いて止めをさしていた。

・・・・。

「・・・相変わらず元気だな。今日も全力か」

フェンはスルースキルを発動させた。無邪気な娘ほど怖い者はない。

あの三人が模擬戦をしただけで封時結界が揺らぐ様だ。

当然結界の中は嵐のようになり、阿鼻叫喚の地獄絵図なのだろう。

「・・・でも相手にしている奴らも普通じゃないしなぁ」

そう呟くフェンの視線の先には、砲撃に吹き飛ばされた人影が見える。

それなのに嬉々として立ち上がる人影・・・訓練生たちの姿が見えた。

普通なら逃げたしたくなる筈なのに何故彼らは立ち向かうのか？

それについてフェンはあえて語る事はないだろう・・・。

それでもあえて言うとするなら、彼らはフィエロの後輩であると言えばいいか。

「・・・魔導師の場合、精神論もバカに出来ないな」

どうして砲撃や斬撃を受けて立っていられるのか？

それは彼らが非殺傷と不屈の精神力を持つということにほかならない。

そう、いま三人娘と対戦している連中は、本来の実力ならとっくに気絶している。

それなのにふらふらしながら立ち上がり戦線に復帰するのだ。

もはや精神力でしか動いていない、彼らを支えるのは一つだけ。

『ファンの執念ってすごいですね～』

「・・・イヤ過ぎる」

戦う少女達にモエテいるからだ。片仮名にどの漢字を入れるかはお任せする。

その為だけに彼らは意識を保ち、撃たれる為に立ちあがる。

時折ありがとうございま～すと口を動かしている馬鹿を見て、フェンは心の中でその人物を危険人物の排除リストに加えたのは余談だろう。

最もその馬鹿達のお陰で実習の際に三人娘が孤立しないで済んでいるのだが・・・。

「・・・頼むから訓練場を終えたらノーマルになってくれ」

とりあえず心配はなさそうなので八神家に待つ家族に報告しよう。

フェンは見るのをやめると、そのまま屋上の出入り口へと歩き出す。

定期的に見てはいるがキチンとやっているので重畳と彼は呟いた。

最初こそ、あの変人達に毒されないか心配だったが今はしていない。

何故なら連中は紳士なので、普段接する分には普通だからである。

でも中身は・・・お察しください。

（しかし、随分と動きがよくなっている。正規訓練はやはり効果があるな）

本来、短期入学の彼女らが実習で学ぶ事はあまりない。

魔法の実技はほぼ完成の域に達しているからである。

それでも模擬戦が組まされたのは、基礎を固める目的もあるのだろう。

なのはとフェイトはほぼ独学で魔法を覚えた。

はやては才能こそあるが、まだ本格的な魔法訓練を始めてから日が浅い。

それに管理局には管理局側の機動訓練とかもあるはずである。

ようするに部隊単位で動いた時の連携を学ばせなければならない。

この訓練はその為の訓練も兼ねているのだろうとフェンは考えた。

彼女らが訓練校を出て何処ぞの部隊に配属されたとしよう。

その時、部隊単位の行動がとれませんでは話にならない。

魔導師は単体戦力として効果的だが、部隊単位で動かないという訳ではないのだから。

今こそ自由に訓練しているが、後少しすればリミッターをかけて通常の魔導師レベルに落しての訓練も入ることだろう。

その中で動けるかどうかは三人次第。

だが恐らく大丈夫だろうとフェンは訓練を眺めてそう思った。

そしてフェンは、あの絶賛吹き飛ばされている連中が、三佐殿によって修正される事を願い、その場を後にしたのであった。

「あ、フェン君また来とる」

「え？どこどこ？」

「なのは、あそこ。本館の屋上だ」

まぁ、フェンがよく見に来ていることは彼女らにばれているのであるが。

ちなみにばらしたのはファーン校長である。

ばらした事をフェンに教えない辺り、強かさを感じさせてくれる。

良く見に来る為、心配性だなぁと三人に微笑ましく思われているのは当人のあずかり知らぬところであった。

……

……

さて、訓練校を後にしたフェン。

彼はそのまま第3管理世界のヴァイゼンに赴いていた。

「で、このカレドヴルフ・テクニクス社にいけばいいの？アリアさん」

「え、ええ。そこは管理局も懇意にしているデバイスメーカーなのよ。この間のお詫びにそこの見学を打診しておいたの」

カレドヴルフ・テクニクス社、頭文字を取って通称ＣＷ社はデバイスメーカーである。

デバイスメーカーというのはその名の示す通り、デバイスの開発・受注を請け負う会社だ。

時空管理局のデバイスも多くはここで作られている。

アリアはこの間の件で何と無くフェンがよそよそしくなった事が気になり、態々ヴァイゼンのＫＴ社所有の機器試験場がある研究所の見学許可を取ったのだ。

戦闘魔導師ではあるが、こう言ったのが好きなフェンにとっては管理局側の技術を知るチャンスであったので二つ返事で了承。

なのは達の様子を見終わったあと、アリアと合流しヴァイゼンの赴いたのである。

尚ロッテは今回アリアとのじゃんけんに負けて仕事がある為お留守番だ。

「この間の・・・にしては、時間掛かりましたね。アリアさん」

「管理局の部品も扱っているから、部外者に見せるのに結構時間掛かっちゃって」

「まぁ、自分としてはミッドの最先端が見れればそれで良いんですがね」

フェンはそう言うとプイっと顔を前に戻す。

だが何処か足取りが軽い所を見ると、最先端技術を見せてもらえるのが楽しみの様だ。

ちょっとアリアに対して口調が硬いのは、前の事をまだ少し怒っているからである。

一か月前に何故彼女らがフェンを訓練校に入学させようとしたのか。

何かしら理由がありそうだが、実はちょっとした出来心であったのが真相である。

ただ何と無く、外堀を埋めたらいけるんじゃないという話となりダメ元でやってみようという形でやってしまったのだ。

ご丁寧に現役最年少執務官のクロノと次元航行部隊のリンディ提督の伝手まで使い、わざわざ推薦状まで用意していたのだ。

だが、彼女たちにとって大きな誤算であったのは、フェンは全くと言っていいほど管理局に入る気が無かった事であろう。

結局最後まで頑として入る気はないことを明言したこと。

それを聞いて訓練校の校長も入る気の無い者を入れる気はないという話となったこと。

それらが合わさって結局フェンは訓練校に入る事は叶わず、話ももみ消されたのだ。

そしてコレを画策した彼女らは、しばらく謎の怪奇現象を味わう羽目となる。

実害は彼女たち以外には出ておらず、センサーでもなにも感じない現象。

魔法が解明されたミッドではあまり知られていないオカルトな出来ごとだ。

それはまるでフェンを陥れようとした所為で起されている様に感じられた。

現に限界が来てフェンに泣きついて慰めてとまで言いに行った。

その直後から、怪奇現象がぴたりと止んだのである。

勿論フェンがやったという証拠はない。
だけど姉妹はフェンを怒らせるような真似はしないと誓ったのは言うまでも無い。

「どこにいけばいいのアリアさん？場所知らないんだが・・・」

「ええ、こっちよ」

「そうか。なら案内して。早く行こう。すぐに行こう」

小さな身体で忙しなく足を動かし、先に行ってしまうフェン。
場所知らないのにせっかちねとアリアは子供っぽい行動を取るフェンを見て苦笑する。

そんな彼の様子にすこし微笑ましさを感じつつ、アリアはＣＷ社へと彼を案内するのだった。

＊＊＊

ＣＷ社の研究所はフェンにとってはまさに理想郷だった。
デバイス研究、開発、性能試験、デバイス用マザーマシン。
そのすべてがミッドでの最先端を行くもので溢れている。

自作でヴィーザフを作り出したフェンは、デバイス製造にも精通していた。

その為、眼に映る全てが珍しく、彼の知識欲求を加速度的に刺激する。

ＵＳＮ式の無骨で頑丈な機材とは違い、コンパクトにまとめられた機材の数々。

フェンはそれらを見ているだけで興奮を覚えたほどだった。

もし彼の心を覗くことが出来れば、普段の彼を見る目つきが変わったことだろう。

（す、すげぇ・・・魔力素加速器ってこんなちいさくできるんだだだ）

『（マスターが処理落ちしてる！？）』

――といっても、表情的にはほくほく顔程度なので、微笑ましさが増すだけだ。

その後も研究所内を徘徊する見た目八歳児の少年フェンくん。

人とすれ違うたびに奇異の視線が来るが、新技術を見られるという興奮の前には塵の様なものだ。

なにせ時折混じる変態的な視線すらもスルー出来るほど舞い上がっていたのだ。

流石に機密にかかわる様な場所は見せてはもらえなかったが、それでも十分満足できるほどの収穫はあったとフェンは思った。

一通り施設内の見学を終えた後は本来帰る予定だったのであるが、なんとそこでアリアが特別に研究所の技術者や研究者たちと話が出来るようにセッティングしてくれた。

あまりこういった訪問を受けたことも無い技術者や研究者たちだったが、まぁ未来の研究者になってくれるかもしれないと適度に問答に応える気であった。

彼らはフェンとの問答を行うウチに、見た目以上の知識の高さに驚くことになった。

だが彼らをさらに驚かせたのは、フェンの見た目に沿わぬ知識だけでは無かった。

「――なるほど、ミッド式の魔導端末の術者の魔力を循環させたり、デバイス自身が強化させる出力方式ではなく、一度チャンバーにプールさせる方式か。いやはやこれなら安定した魔力供給が可能なのも頷けます」

「もっとも常にその状態をキープさせるシステムなので、並の魔導師では運用は難しいのがネックです」

「それでも見たことが無いシステムなので興奮を覚えますな。それにバイパスで経路を増やすことで急激な出力上昇にも耐えられる仕様とは・・・ＵＳＮ式は此方のデバイスとは根元は同じでも大分システムが違うのですね」

最初はただのデバイス談義だった筈が、何時の間にかヴィズの紹介になっていた。

なにせ現存しているなかで、現在ヴィズは唯一完全稼働しているＵＳＮ式デバイスである。

それに気が付いた研究者がいたことで、一気に場の空気が変わったのだ。

ＵＳＮやＯＣＵで使用されていたデバイスは、第７８管理外世界において何世代にもわたり精錬された独自の技術を持っていることで有名だったからでもある。

何故なら第７８管理外世界は冷戦したり大戦起したりの日々が日常だった。

そのためデバイスもそういった荒事に対応できるように特化し、大戦が起きるたびにバトルプルーフが繰り返されていったのだ。

その為、一部の技術がミッド式のそれを越えていたとされていたのである。

だが、その世界自体が３０年前にテロリストたちの手で消失。

デバイスを軍事技術としていたＵＳＮ・ＯＣＵ両軍のお陰で秘匿されていたデバイス技術は永遠に失われたと考えられてきたこともある。

それゆえ、生きた原本とも言えるヴィズとそれを運用し、尚且つＵＳＮ式を作り出すことが出来るフェンの存在は研究者たちの知的好奇心を刺激するのに十分であった。

「はい、ちなみに建造時のＵＳＮ式世代区分としては第４世代に相当するもので有ります。能力的に目指したのは第５世代でしたが、当時の自分が未熟だったので・・・」

ＵＳＮにおける第４世代とは、仕様者を確実の防護できる強化服がコンセプトである。

ちなみに世代別にあげると――

・第１世代が魔力の運用と現象の発動。
・第２世代が魔力運用の効率化、及び高出力化。
・第３世代で長期間の戦闘に耐えられる本体の頑強性。
・第５世代はあらゆる状況に対応できる統合兵装システム。

――という風になる。

ちなみにS型デバイスは更に飛んで第6世代であり、コンセプトは人と魔導端末の融合という禁忌の領域であったりする。

それを聞かされたCW社の技術者たちはそれぞれに関心していた。

各人質問を入れたり逆に問われたりと討論会のようになっていく。

最初はデバイス開発部署の人間のみだったのに、何時の間にやら色んな人が出入りしてワイワイとしてきた。

そして一通り話を終えた辺りで一人の男が立ち上がり拍手し始めた。

「すばらしい。ハラショー。エクセレント。流石は失われた第78管理外世界、大戦が勃発して技術交流が困難だったので殆ど資料が無かった世界の技術がこれ程進んでいたとは思いもよらなかった。特にこの壊れにくくするための設計思想、負担こそ大きいが壊れにくく修理しやすいというのは確かにアドバンテージとなりうる。ミッド式とは設計思想の段階からして・・・いや失礼、少しばかり興奮しまいました」

「いいえ、自分も楽しかったです。同好の士とはいいものです」

「いやまったくもってその通りじゃ」

何時の間にか話しこんでいた事に気が付いたフェンと研究者たちは

満足気にしていた。

知的好奇心を刺激され、尚且つ実りのある対話も行えたのだ。

失われた技術を垣間見たという興奮もあり、終始全員ニコニコとしていた。

そして約束の時間一杯まで、デバイス開発研究部の人々と会話するフェン。

「・・・そろそろ約束の時間のようですね」

「おお、確かに・・・いやはや勉強になりました」

そういってぺこりと周りの人々にお辞儀をするフェン。

喋り足りないし、名残惜しいが時間は有限なのだ。

ただでさえ彼らの研究の時間を割いて、突き合わせてしまったのである。

こんな子供の姿をしていても、ちゃんと対応してくれる彼らにフェンは感謝した。

そして部屋から退室する時となって、途中から一番多く話をした人物が声をかけて来た。

「また何時かに来られると良いでしょう。主任権限で許可を出してもいいですぞ」

「・・・主任さんだったんですか？」

フェンは思わず驚きで眼を見開いた。

途中から色んな人が出たり入ったりしてきたことは知ったいたが、まさか主任レベルの人間まで来ているとは思わなかったのである。

目の前の白髪の男性、エメット・オーカー主任笑みを浮かべる。

「色々と隙に研究しとったら何時の間にかネ。まぁ気が向いたらでもいい。また訪ねて来てくれるとわたしたちは嬉しい」

「・・・今度、面白い試作品とか持って来てもいいですか？」

「大歓迎だ。どんなものか見せてもらおう。代わりに此方もある程度までなら面白いものを見せてあげようじゃないか。わたしらの固まった頭に是非新しい風を吹き込んでおくれ・・・むしろ就職しないかね？」

「はは、まぁ考えておきます」

ここでも勧誘かとも思ったが、悪くないとフェンは思っていた。

どこかフリーダムな感じを受けるＣＷ社の魔導機器研究所だが、機

材は最先端。

頑丈さではＵＳＮ式に負けるが、非常にコンパクトかつ先進的であることに変わりはない。

戦闘者ではあるが、こう言ったのもまた良いなぁとも思う。

彼の父の血がそうさせているのかもしれなかった。

＊＊＊

フェンとしてはもっと色々と話をしたかったが時間は決められている。

その為泣く泣く研究所の門の所まで戻ってきた。

とはいえ、その顔には何処か満足そうな笑みがうっすらと浮かんでいる。

アリアに連れて来て貰って良かった。楽しかった。

そう考える彼の中では、もうあの時の怒りは消えていた。

「ん、出て来たわね。どう？面白かった？」

「ああ、もう本当に・・・ありがとうアリア」

「いえいえどういたしまして」

時刻は夕方、自然と手を繋いで帰り道を行く二人。

もうフェンが怒っていないことを察して、アリアもホッとしながら一緒に歩く。

良く見ればうっすらと笑みをたたえているフェンを見て、見学させてよかったと思っていた。

傍から見れば姉と妹・・・いや姉と弟のように見える二人。

心がぽかぽかとしたまま、家路に着くのであった。

「日常の裏側では・・・前編」

「日常の裏側では・・・前編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

ときどき、物事というのはどうしようもないことに直面するという。人はそれを壁と称し、越えるべきものや目標として頑張ることがある。

しかし、時にその壁は非常に強大かつ強固で、抗えないこともある。抗える壁と抗えない壁、それを見極めるのが長生きの秘訣と言えるだろう。

つまりは何が言いたいのかというと――

「・・・うそだ。嘘だと言ってくれリインフォース」

「残念だが・・・コレ以上は・・・」

俺は地下基地のラボの中でとある実験を行った。
だが上手くいかないことがわかり、手伝ってくれたリインフォース？の前でｏｒｚな体勢でうなだれた程である。

「どうして・・・どうして・・・なぜ出来ない？」

「フェン。あきらめろ。時に無理なモノはムリということもあるんだ」

優しく肩に手を置かれるが、俺はその事に気付けない。
どうしようもない理不尽に抗うが如く、咆哮する。

「どうして・・・身体を大きく出来ないんだっ」

はい、今ズコーってこけた奴素直に挙手して前に出ろ。粛清してやる。
アルアッソーとジリーノの響きは骨にまで響くぞ。
とりあえず身長云々は冗談で言っている訳じゃない。

本気も本気、非常に真面目で未来を見据えた大事な話だ。

俺はあの管理局との模擬戦で、ちょっとした恐怖を味わった。
それは俺の精神を蝕み、そのショックは身体状況にまで影響を与えた程である。
なんとか無理矢理直したが、今でも怖いと思えてしまう辺り完治していない。
そう言う訳で、それから解放されるには自分の肉体を大人にしなくてはならないと感じたのだ。

大人の姿ならあんな変な視線を送られることも無い筈っ！
そんな訳で、なんとかして自分自身の肉体が大きくならないかリインフォースに相談し、肉体の調整を頼んだのがおよそ2カ月前。今の状況という訳だ。

「うーむ、やはり下手に変えると他との整合性が――」

俺を構成する魔法プログラム調整が表示されているウィンドウを睨むように眺め。
シミュレートした調整結果を元に調整の操作を続けてくれるリインフォース。
だが、やはり結果は芳しくはないらしい。

「ううん、くそう・・・どうにからならない？」

「意思を持った肉塊に成りたいのなら良いが、流石にそれは嫌だろ

う？」

いや、貞操の危機を脱する事が出来るなら・・・。
いやいや、流石にそれはない、幾らなんでも人型を止めるのは嫌だ。
“テケリ・リ”とか言う様な状態になったら命を絶つね俺は。

「・・・ただでさえ人間止めてるのに、外見まで人外になったら首吊る」

「なら大人しくしていろ。どっちみち無駄とは思うがな」

そう言ってこれまで調整してきたデータと睨めっこを再開するリイン。
そして今日もコレで何度目かのプログラム調整を実行する。
身体の中をくすぐられる感覚があるが、他に何か感じる事はない。
だが、魔法陣が閉じてもそこに居たのはガキのままの俺だった。

――――要するに結果は散々という訳だ。

「はぁ、これでもダメか・・・もういっその事整形手術でもしたらどうだ？」

「傷付いてもすぐに再生しちゃうから無理。その所為で機械も埋め込めない」

変身魔法ならともかく、本体の姿形を変えるには魔法生命体と化した肉体の構成している根幹プログラムをいじくりまわさねばならない。
当然、そんな事が出来そうな奴は俺は一人しか知らない。

古代ベルカ式デバイス夜天の書。
そのデバイスの管制人格であるリインフォース、彼女しかな。
当然、最初は簡単だと思っていたのだが、どうにも見当違いだったようで・・・。

「もう一度、もう一度できない？」

「だが、これでもう2カ月近く調べてるんだぞ？」

そう、これでかれこれ二月近く調べてもらっているのだ。
でもコレはある意味で仕方が無いのかもしれない。
俺は正式な手順を踏んで魔法生命体に至った訳ではない。
云わば横道、邪道もいい所で偶然この状態に至っただけなのだ。

となれば、その調整や変更を行うのは容易なことではない。

「うーん、普通ならある程度の変化を促せる筈なんだが・・・」

「・・・エラーの表記しか出てこねぇとかどうよ？」

色々な手順で試すが、実際に調整しようとしてみれば出るのはエラーばかり。
勿論彼女の力を使えば、エラーが出てこようが無理矢理プログラムを変更出来る。
だがエラーが表示されるということは、下手にいじくるのは危険だと判断されたということだ。

「やはり、諦めた方が・・・」

「諦めてはダメだ。戦場で最初に果てるのは諦めた奴だけ・・・」

「時には勇気ある撤退をするのも長生きの秘訣だろう？」

どうなんだ、ん？と聞いてくるリインフォースに俺はうっと言葉を詰まらせる。
言外にそろそろ諦めろと言われているのだ。
そりゃ・・・迷惑かけている自覚は・・・あるけど・・・・。

「・・・だって、変態に追いかけられたくないもん。その為にはゴツクないと」

「・・・・・・（その姿の方が愛らしいのだがな）」

背を大きくしたいと言いだした時は回りから何故か暖かい眼で見れらた。
勿論もう成長しないということを踏まえて説明したので、そりゃまぁそうだろうという話となった訳だ。

これに対しリニスは猛反対してきた。
可愛くない俺は俺では無いという暴論を出したくらいに。

まったく失礼な話である。何故俺が可愛くないと俺では無いのだろうか？
そりゃ女の子みたいな風貌である事は自覚しているが、ちゃんと成長していればそれも二次性徴の時に薄れ、男の子という感じになった筈である。

中性的な今だからこそ、女の子みたいな感じを覚えるだけなのだ。
大体変態を越えたＨＥＮＮＴＡＩの手から逃れるにはゴツイ男に成るしかない。
それなら、頑張って身体を大きくするしかないでしょう。

「・・・ははは、あたしだってずーっとこの姿だけど、特に不自由じゃないぞ」

俺がうなだれていると、横から嬉しそうな声が掛った。
今日の実験を“偶々”見にきていたヴィータ姉が笑いながらそう言ったのだ。

ちなみにヴィータ姉も大きくなりたいと言いだしたが、はやての権限で却下された。

家主さま曰く、ヴィータはヴィータのままでええんだそうで・・・。
その所為でとばっちりで俺が睨みつけられたのは余談である。

そして今日も何度目かの失敗をわざわざ見に来ている訳だ。
その眼にはざまぁという感じが見え見えである。

「ヴィータ姉・・・そりゃヴィータ姉は女の子だし・・・可愛い方がいいじゃん」

「う〝・・・だけど大体あたしだって身体を大きくしたいのに・・・フェンだけ大きくなるなんて不公平だ。そう言う訳でリイン、あたしも大きくしろ！」

「ヴィータは主からだめだと言われているじゃないか。主の命令に背くか？」

「うっ・・・でも・・・むぅ・・・ううぅ、うー」

「ぷぷ、はやてにまでダメって言われてら」

「よぉーし、フェン動くな。あたしのアイゼンの錆びにしてやる」

「いやだって事実・・・すみませんでした。だからハンマーをしまってください」

「・・・・・・・ククク（だめ、この子たち面白い）」

何時の間にか上段に構えられているアイゼンを見た俺は若干顔を青

くして謝った。
そのやり取りを見てリインフォースが、五十歩百歩だろうにと笑いを堪えていた事に気が付かなかった。
どうして大きくなれないんだろう・・・この時ほど自分の特異な体質を恨んだことはなかった。

……

……

……

＜おーす、遊びに来てるぜ・・・って、どうした？随分と元気がねぇな＞

「・・・ああ、赤さんか・・・ヒマつぶしに来た？」

越えられない壁の高さにゲンナリしつつ二人と別れ、とぼとぼ部屋に戻る俺。
部屋に入ると地下基地に入り浸るあの方がたの一人が来ておられた。
何やら枕を浮かべて空中でエアサーフィンしてる様は非常にシュール。

＜まぁそんなとこだ。なにせこの身体になってからは兎に角ヒマだ

ぜ＞

「成仏でもしてみれば？あの世を見学、楽しくていいじゃないか」

＜それは今後の楽しみだからな、今はしねぇよ＞

そう言いつつ彼は浮かべた枕をこっちに放り投げ俺のベッドにポテっと着地する。

彼は赤さん、以前ご紹介したこの地下基地に入り浸る方々の一人である。

見た目は一歳に満たない赤子、中身は齢数百を越えるじじぃ

＜・・・おい、お前いま何考えた？＞

「身体は子供、頭脳は大人」

＜バーローじゃないぞオラァよ＞

「うん、知ってる。だからポルターはやめろ」

不機嫌になると部屋の小物飛ばしたり部屋ごとポルターガイストで揺らすのは止めて。

スゲェガタガタと揺れてますから、立て付け悪くなるからマジでやめてください。

地下基地を修理出来るのは造った俺だけ、だから後で修理するのは必然的に俺なんだ。

＜お前さんは一言余計なんだよ＞

「年食ってるわりに短気過ぎるんだよ赤さん」

＜年を食ってるって何処がだ？こんなに可愛い赤ん坊がよォ＞

「はいはい、ワロスワロス」

可愛い赤ん坊はそんなひねくれた表情で憎まれ口叩きませんから。
残念。
そんなこと考えてたら布団が飛んできた。だから散らかるから飛ばすなっての。
飛んできた布団をキャッチして、畳んで降ろす。
それを赤さんがどうでもよさそうに横目で見ていたが気にしない。

「まったく、埃が立つだろうに・・・」

とりあえず俺は椅子に腰かけて、懐から煙管Ｍｋ－２を取り出して火をつけた。
煙が狭い部屋に充満し、何故か赤さんの輪郭がよりはっきりと見えるようになった。
・・・俺普通に調合しただけなんだが、何でこんな効果があるんだ？

＜おうおう、相変わらず不思議な煙だな。まぁそれよりも何があったんだ？＞

「・・・まぁ、聞いてくれ赤さん」

――――カクカクシカジカ・・・少年、説明中・・・。

＜そいつは・・・なんて言うか難儀というか・・・＞

「もう、なんて言うかね。泣きそう」

＜アレだろう。お前さんは永遠のショタという神の御意志＞

「・・・洒落にならないから、そういうの勘弁だから」

そんな神の意志なんていらねぇ。
つーか赤さんって神様信じてるの？

＜うまれてこのかた無神論者よ。成仏出来ねぇのはその所為だったりしてな＞

「それと悪戯に人に呪いフッ掛けたりしたからじゃないの？」

＜いいじゃねぇの。生きてりゃその内なんとかなるだろうよ＞

「話逸らすなよ。あと俺に呪いかけたりするなよ」

＜あー哺乳瓶が恋しいぜ＞

なぜ露骨に顔を逸らすのかね？
もっとも呪いの類は高ランク魔導師にはあまり効果が無いみたいだからいいけど。

＜ふぅ、ま、生きていないワシがいうのもアレだがな。気に病むことじゃねぇよ＞

そういって赤さんはポンっと煙となって消える。
消えたかと思いきや、今度は俺の頭の上であぐらをかいて坐っていた。

＜全てを受け入れる受容の心こそ、世界に平和をもたらすもんだぜ？＞

「・・・だけど、ある意味死活問題なんだが？」

＜それこそ今更だーね。ワシを見てみろ。お前が永遠のショタならワシは永遠のベイビーだぜ？だがワシはソレはソレで良いと思っておる。ワシらがここにこうしておるように、変えられない不変も確かに存在するってことだろうよ＞

赤さんはそう言ってウンウン頷いて見せた。
流石は長い間、この世に留まり続けた人生の先輩。
そのつぶらな瞳は一体どれだけの理不尽な出来事を見て来たのだろ

う。

＜肉体の変化を促せないなら、お前さん御得意の魔法で隠すか、人前に出ないかをすればいい。だけどお前さんはそう言うのは嫌なんだろう？ん？＞

確かに、姿を幻術で隠そうと思えばできる。

だけど俺単体だと長時間はムリ、もって一日かけられれば良い方だ。リンに協力を仰げば数週間単位でも大丈夫なのだろうが、彼女への負担がな。

「・・・諦めろってことか？」

＜いんや、押してダメなら引いてみろ。引いてダメなら横に動かせってな。姿を変えるなんざやり方次第でどうにでもなるもんだ。どれが正しいか何て誰にも判らねぇ。だが少なくても別のアプローチが今は必要だってだけの話だぜ＞

「別の・・・アプローチ・・・」

＜案外、答えは間違いのすぐ隣にあるもんだ・・・んじゃな＞

赤さんは言いたいことだけ言って満足したのか、また煙となって消えた。

気配を感じない事から帰ったらしい・・・もっとも何処に住んでるかは知らんが。

しかし、別のアプローチか・・・そう言えばリンと俺は同化してたっけ・・・。

・・・・・・・あっ。

「なるほど、流石は年の功だ。別のやり方が浮かんだ！」

流石は赤さん、馬鹿みたいに年食ってるだけはあるぜい！
俺は思いついたことをメモし、急いでラボへと戻る。
やり方さえ間違えなければ、あるいは上手くいくかも知れない！
兎に角、やってみよう、ダメならダメで方法はある。
俺は諦めねぇ・・・絶対に大きくなってやるんだっ！
何だか理由が微笑ましいが、やってやるぜ～！

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

フェンが自分が成長しないという現実に改めて墜ち込んでいたちょうどその頃。
次元世界の一角において指名手配中の次元犯罪者が数多く所属する大規模密輸組織のアジトの位置が判明し、その検挙の為に管理局が動いていた。

だが、その検挙は普通の大捕り物とは少し違っていた。
これは現場で交わされた会話記録の一部である。

……

……

管理世界にある次元航行船用の倉庫埠頭。
一見すると普通の倉庫街なのだが、一部違法な密輸品が集積されているという情報を手に入れた管理局が現場を押さえる為に周囲に展開していた。

わざわざ密輸品を隠すのに一般の倉庫街を使うのはおかしいと思うかも知れない。
だが木を隠すなら森の中とは良くいったもので、通常の荷物コンテナに偽装し、税関に賄賂さえ渡しておけば大抵の物品は通されるのである。

だが、次元世界に枝を伸ばしている管理局も無能では無い。
巧妙に隠されたルートから僅かな痕跡を探し、密輸品のルートを割り出したのである。
そして証拠を掴んだ管理局の次元航行部隊は、密輸団の大量検挙に乗り出した。

また検挙に伴い現地の執務官が本局へ、複数の武装隊の派遣を要請したことにより、現地にはかなりの数の武装局員が召還され部隊を展開していた。

何気に相手は次元世界を股に掛ける密輸団である。
彼らが扱う密輸品の中には、違法な魔導機や質量兵器も確認されているのだ。
警戒を厳にし、検挙の際の反撃に備えるのも当然と言える。

その召集された武装隊の中に、あの第０１３４武装隊も存在していた。
ちょうど訓練も一段落し、新人達もこなれてきた。
その為実地をさらに積ませる為、この召集に応じたのである。
そしてアジトと思われる場所の周囲に展開させていたのだが・・・

「・・・またお前か、フィエロ」

これで人生何度目か判らない溜息をつく蒼い髪の女性はリビエラだ。
今回の検挙において、反抗してくるであろう密輸団の戦闘員の殲滅を任されている。
その為に第０１３４武装隊の０３分隊を率いて所定の位置に待機していたのであるが・・・。
なぜか、彼女の視線の先には半壊しかけた倉庫が見えた。

「ふ、認めたくないものだな。若さゆえの過ちというものを・・・」

言っている事の割には悪びれもせずどや顔でふんぞり返っているのはフィエロだ。
リビエラは事の元凶を起したこの男に思わず殴りかかりそうになる手を抑える。
一体何がどうしたのかというと――

「そんなことより早く防御魔法使ってください～っ！」

一人女性武装局員の叫びながらリビエラの居る物陰に隠れる。
その直後さまざまな口径から発射された金属の弾丸が空気を切り裂いて、彼らの頭上を通過する音が響いた。
どうやら敵は違法な密輸品の一つである質量兵器の銃で武装しているようである。
そんな中でリビエラは怒りに耐えるように拳を握り締めてレイニアに顔を向けた。

「判っているレイニア。だが一言くらい言わせろ。フィエロのバカ野郎！」

彼女は拳を空に振り上げようとして止めた。
ちょうど手を上げようとしたその上を音速を越えた弾丸が通過していったからだ。
いかにＢＪを着ているとはいえ、彼らクラスの魔導師だと弾丸によっては貫通する。

特に徹甲弾なんかは当たり所によっては致命弾に成りかねないのだ。
盾にした倉庫の壁が弾丸で削られるのを見ながら、彼女はどうしてこうなったかを思い浮かべた。

およそ二時間前、三分隊に別れたリビエラたちは次元犯罪者を検挙する為に展開。
密輸団のアジトへの主要ルートをそれぞれ見張っていた。
当初の予定では執務官の到着を待って、アジトに突入して制圧する筈であった。

だが、どういう訳か武装局員が待機している事がばれたのである。
それにより銃を手にした手下たちが銃座に配置されてしまったのだ。
そして彼らが砲火にさらされている原因というのは――――

「いや今回は私の所為ではないと思うが？」

「だとしても我々は分隊なんだ。一人が動けばそれをフォローしなきゃならない。貴様が持ち場から移動した所為で私たちも移動せざるを得なかったんだぞ」

フィエロが持ち場を離れて動いてしまった事にあった。
それに気が付いたコルトがリビエラに報告し、彼を追った結果現状に至る。

そしてフィエロが持ち場を離れたのにも訳があった。

「狙撃手が居た。最初からわれわれの動きは読まれていたのだ」

そう言ってフィエロは自身の持つ魔杖をリビエラに見せる。
ちょうどコアの周辺にある一番硬い外装部分に穴があき亀裂が走っていた。
これでは使用はできるが注意しないと壊れてしまうことだろう。
彼のＢＪにもいくらか銃撃による穴があいているのが見て取れた。

持ち場に一人ついていたフィエロは、突然敵に銃撃されたのである。
偶然か幸運か、スナイパーが放った第一射目が運の良いことに外れた。
そしてそれにより狙撃に気が付いた彼は、連射式なのか連発で放たれる銃撃の射線から逃れるために移動するしかなかったのだ。

魔導師とはいえ、銃で狙われていた上に咄嗟のことでは防御魔法だって展開出来ない。
準備も無く自力で魔法陣を展開して防御魔法を発動させるのと銃を撃つ事。
咄嗟の場合、後者の方が圧倒的に早かったからである。

「・・・そうだったのか。すまない」

「気にしなくてもいい。銃撃戦の中では誰だって焦るし物言いもきつくなる。それに貴様が俺に対してつっけんどんなのも何時ものことだろう？」

「ああ、そうだったな・・・だが、これでは動けんな」

頭を抱えるリビエラ。問題は彼らが逃げ込んだのが倉庫と倉庫の間という事である。
そこはフィエロが逃げ込んだ場所で、遮蔽物に使える金属製の大型ゴミ箱があった。
フィエロを追って来た０３分隊の面々もそれを盾にしているのである。

本来ならフィエロの無事を確認した時に彼を連れて一時後退する予定であった。
だが味方がいる他の場所に続く道には銃を持った者達がすでに配置され。
進むことも戻ることも出来ない状況に追い込まれてしまっていたのである。

勿論、銃から放たれる弾丸程度なら、防御魔法を使えば彼らのような平均Ｂランクレベルの魔導師でも十分に防ぐことができた。
しかしそれはあくまで単体の敵を相手にした場合の話である。

流石に出ただけでミンチにされるレベルの銃撃。
それを高々Ｂランクが全て防げるかと言えば・・・答えは否である。
フェンやなのは等のＡＡランク越えの魔導師ならばいざしらず。
本気で守りに入ればＩＣＢＭすら防いで見せそうな連中と彼らは違うのである。

この状況も単体レベルでアサルトライフルを撃たれているのなら問題はない。

だが多方面からの面制圧射撃のような弾幕を防ぐのは、彼らにとって容易なことでは無かった。

≪――チュインっ！ガガンッ！！≫

「っく！バカスカと撃って来て・・・身動きがとれない」

「連中も必死なんだろう。爆弾が来ないだけましだ」

もしもここで相手が痺れを切らして、迫撃砲などの爆発物を使ってくれば、例えＢＪを着込んでいる魔導師でも危うくなる。
それどころか今０３分隊は孤立してかたまっているのだ。
下手をすれば、たった一発の手榴弾ですら彼らを全滅へと導く死神となりかねない。

「判っている。――クロスファイアー！シュート！」

「隊長が４～５人やった！」

リビエラが放った誘導魔力弾は的確にこちらを狙う集団へと着弾。
爆発するように設定された術式がいかんなく効力を発揮し、相手の意識を奪っていた。

しかし、まだまだ沢山いるようで銃撃がやむ気配は見られないことに、リビエラは溜息を吐いた。
魔導師は数が少ない、言い換えれば魔導師でない人間は数が多いと

いうことだ。

効力は薄くても効いて無いわけではない質量兵器を持った人間の集団。
それらと対峙する数が少ない低ランク魔導師がどうなるか何て想像に難くない。
かと言ってただやられるのを待つだけというのも彼らのプライドは許さなかった。

「隊長、後少し数が減ったら、防御魔法を展開して後退することを提案するッス」

「ふむ・・・」

「・・・コルトくん、残念だけど増援がまた来たよ」

「な！くそっ！わらわら湧いてきやがってっ」

「敵はよっぽど私たちを殺したいらしい。もしくはこの先に行かせたくはないのか」

すこし数が減ったと思ったら、また増援が現れた。
相手が非合法の密輸組織であると聞いていたので、まさかこれ程頑強な抵抗を見せるとは・・・。

（管理局は敵を侮っていたということか・・・）

考えてみれば相手は密輸組織とはいえ、この近辺では最大の大きさを誇る組織だ。
お抱えの私兵を雇い入れていることも考えられる上に数も多い。
多勢に無勢、このままでは勝負にすらならないだろう。
だが、流石にＡＰ弾やフレショット弾、偶にグレネードが飛び交う中を、遮蔽物を盾に移動することも危険すぎる。

遮蔽物もよくてコンテナ、悪くて木箱なのだ。
ここいらは倉庫埠頭なので、そこら一帯に木箱が置かれていたりする。
だが所詮木箱は木箱だ。ただの木箱では銃弾は容易に貫通する事だろう。

また、これまた倉庫故に銃の弾がお好きでない商品も多々置いてある。
ガス缶とか石油タンクとか、可燃性の化学物質やら、花火とかｅｔｃ．だ。
従って、現在隊を率いているリビエラはどうすべきかをすぐに決断する。

「とりあえず救援を頼もう。せめて援護が無いとここを突破できない」

自力で突破出来ない上、このままでは全員撃ち殺されることは確実。
ならば、自力以外にも他力を頼ればいいのは道理だろう。
自分たちは何でも一人でこなせる高ランク魔導師とは違うのだ。
他の、同じ釜の飯を喰らった仲間に助けられて何が悪い。

「いい案です。しかし、そらでも飛べたら楽だったんスけどね～」

「阿呆だなコルト君は。空飛んだら蜂の巣だぜ」

「そして俺達の治癒魔法が大活躍ということだな」

「「アホだ～アホだ～」」

迂闊な発言をしたコルトをリエッセが茶化す。
それに便乗したリーガル＆ａｍｐ；フィレンザの双子がさらにからかった。

「うるせぇっ！つーかリーガル！フィレンザ！同じ声で同じこというんじゃねぇ！」

「「わー、おこられたー」」

「お前らふざけてないで魔法撃てよ・・・≪バチュン！≫うわっ！あぶねぇ・・・」

チュイン、チュインと壁に当たって跳ね返った跳弾の一つが、敵の様子を見ていた局員の近くに着弾する。穴の大きさは大体3センチくらいだろうか？壁ごと貫通しているらしく弾は見えない。

（これ、頭に当たってたら今頃爺さんと再会してたのか・・・）

後３０センチもズレていたら殉職していたかもしれない。
それを見ていた０３分隊の面々は口を閉じるとすぐに防御魔法を張り直した。
真面目に警戒をしていないと怪我どころではすまないと思考を切り変えたのである。

しかし貼り直してもすぐに新たに飛来してくる銃弾でシールドが減衰していく。
そのたびに全員が交代交代で張り直すのだが、なんともはや。
とくにグレネード等が命中すると一発でシールド強度が危険域になる。

複数枚同時に張ることで、万が一シールド魔法が破られても、すぐにはやられない。
とはいえ、訓練を積んだ彼らでも現在の状況は厳しいと言わざるを得ない。
特に精神の摩耗が酷い。至近距離で空気を切る音が聞こえるたびに精神が擦り切れてしまう。

（急がないと・・・このままでは全滅だ）

とにかく、この場を離脱することに専念しないと生きては帰れそうもない。
特にせめて後退する時に誰かに援護して貰わなければ殉職確実だろう。

掩護要請を出す為に、リビエラは自身のデバイスを介し、作戦の指示を出しているＨＱ（ヘッダオーター）へと連絡を入れた。

「ＨＱ、こちら０３分隊、敵に包囲されて身動きが取れない！至急救援をっ」

『こちらＨＱ、現在ほかの分隊も武装局員も密輸組織の激しい抵抗にあっている。支援はできない。自力で脱出は？』

「不可能だ。すでに囲まれている。まるでシャワーのような弾幕だ」

『そうか、今本局に・・・っ！ちょっと待て――』

突然、管制を担当していたオペレーターの声が通信から途絶えた。そのことに少し眉を顰めながらも、まだ繋がっている通信が返ってくるのを待つ。

『０３分隊へ、ほかの武装局員は回せないが救援は送れる』

「どういうことだＨＱ。訳がわからない」

『こちらも知らん。ただ上からそう言われただけだ。後１５分で救援が来る。それまで持ちこたえられるか？』

リビエラは顔を上げて回りを見た。

前と後ろからの攻撃で頭上を銃弾が飛び交っているが負傷者は出て

いない。
後15分くらいなら、相手が強襲して来なければなんとかいけるかもしれない。

「・・・あと15分だな。03分隊了解、通信終わる」

『HQ通信終わり――死ぬなよ』

オペレーターが最後に小さく漏らした声に、ああ全く持って同意すると思ったリビエラだった。

「日常の裏側では・・・後編」（前書き）

注意、最後の方で作者が暴走。ダメなら書き直しますハイ。

「日常の裏側では・・・後編」

「日常の裏側では・・・編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

リビエラ達が倉庫埠頭の路地裏で防衛陣を引き、なんとか持ちこたえているのと同時刻、倉庫の地下に造られた違法次元港に隣接する大規模密輸組織のアジトでは、そそくさと撤収準備が行われていた。

輸送用の大型次元航行船、それと小型船にコンテナが積み込まれていく。

そのコンテナの中身は換金しても比較的足が付きづらい貴金属類だ。

他にも貴重品は大量にあったが、逃げることが優先の彼らは放棄していく様である。

勿論、自爆装置の起爆は忘れないのが悪役クオリティだ。

いやまぁ只単に見つかると不味いもんもあるので焼却処分というのが理由８割である。

そして発進準備を急ぐドッグでは幹部クラスの怒号が響いていた。

「いそげ！出来るだけ次元航行船に積み込み次第、発進する！」

「おい！外に出ている連中はいいのかよ！」

一人の幹部が言ったことに、傍らに居たもう一人の幹部が反応した。
先程から怒声を発している幹部に詰め寄ると問いただそうとした。
一方、問い詰められた幹部はというと――

「どうせ金に雇われただけの連中だ。精々質量兵器保持違反で捕まるだけだ」

あっけらかんとそう言い放った。
どうせ外で戦って時間を稼いでいるのは傭兵や下っ端である。
もとより金を払った分だけの時間稼ぎ程度でしか信じてないのだ。
外に居る輩がアジトを死守してくれると思うほど、彼らの間に信頼関係は存在しない。

「じゃあ置いて行くのか？情報が漏れたら・・・」

「たかだか下っ端が何を知っていると？それよりも俺達が捕まればその方が不味い。幹部の内の誰かから情報が漏れれば、他の組織まで巻き添えを喰らうことになる。そうなったら俺達は消されるぞっ」

外で戦っている連中には悪いが、中核が捕まる方がもっと不味い。

とくに取引されていた“商品”にはへどが出そうな代物もあった。
それがバレれば一生を塀の中で過ごすことになってしまうだろう。
また何を扱っていたかがバレても消されてしまう。
上に行けばいくほど責任が重くなる。組織の辛いところなのだ。

「どうせ全部は持って行けねぇんだ！置いて行く銃器は全部外の連中に送ってやれ！」

「ラジャ、ラジャ」

それにその事は外で足止めをしている連中も暗黙で了解している筈だ。
飽く迄、上にいる彼らがアジトを守るのはビジネスだからだ。

キチンとそれなりの額を指定された口座にきっちり振り込んである。
それなりに高い金を払ったのだから、それなりに活躍はしてくれる。
それがこの業界における商売の暗黙のルールであることを幹部は知っていた。

≪ズズーン・・・≫

「――ちっ、管理局め・・・倉庫埠頭ごとつぶす気か・・・」

まだ遠いが響いてくる砲撃魔法の衝撃波の振動音。
どうやら管理局の執務官が業を煮やしたのか、砲撃魔法を展開して

放ったようだ。
外で防衛していた連中と繋がっていた筈の無線チャンネルの幾つかが繋がらない。

いくら銃器があるとはいえ、彼らは所詮魔法を持たない人間だ。
執務官クラスがアジトまで到達するのに、それ程時間は掛かるまいと彼は踏んだ。
何せ相手は魔導師、魔法という反則的な力を扱う連中なのだから。

それにしても乱暴な連中だと部下に指示を出しているこの幹部の男は思った。
何のためにこんな倉庫埠頭に組織のアジトがあると思っているのだろうか。

彼は指示を出しながらちらりと地上へと視線を向ける。
ここからでは隔壁に阻まれて見ることは不可能だが、地上の倉庫には危険物や劇薬を保管してある民間の企業が保有する倉庫が幾つかあるのだ。

劇薬のいくつかには漏れれば有毒ガスになったり、可燃性のガスとなる物もある。
そういったのがあるからこそ、わざわざ狭い倉庫埠頭という立地を選んだというのに・・・。

「管理局の質も落ちたか・・・それならそれで嬉しいがな」

だが相手が無能なら無能なだけ、此方が逃げる時間が得られるというものだ。

一部では足止めどころか管理局武装隊の一部隊を殲滅できそうだと聞いてはいる。
質の低下に人手不足は彼らにとってはまさに最悪のコンボだろう。

とはいえ、返り討ちにしてしまうのは非常にまずいと彼はおもった。
もし武装局員を血祭りにあげれば、それこそ仲間意識に熱い正義馬鹿達のことだ。
下手すれば管理局と組織の全面戦争、最悪高ランク魔導師による殲滅が待っている。

ソレだけは避けなければならない、まだ売っていない商品も多々あるのだ。
金にも利権にもならないゴタゴタは彼も彼のボスも望むところでは無い。

「おい俺だ。現在の積み込み具合はどんな具合だ？」

男は通信端末を用いて積み込みを進めている場所へ連絡を入れる。
後どれだけ掛かるかを知ろうと考えたからだ。
だが返ってきた返事はあまり芳しいモノでは無かった。

『まだ半分ってとこです』

コンテナの積み込みは難航している。
積み込める物に限度があると言っても、その量は膨大だからだ。

「いそげよ。相手は管理局だ。足止めが無くなれば人外の速さで突っ込んでくるぞ」

『クレーンどころか空いてる人手まで全部使ってるんです。これ以上はムリですよ』

「無理でもやれ！給料減らすぞゴラぁ！」

文句を言う暇があったら荷物を運び入れろと彼は怒号を発する。
もっとも部下はそのことに馴れているのかへいへいと肩をすくめてそれに応じた。

『了解、了解・・・あ、ならアレ使っても言いッスか？』

「あれってーと、ああ。あのポンコツか」

幹部の男は十数年前から使われているあの機械を思い浮かべる。
何処で手に入れたかは知らない。先代が拾って来たものだった。
四脚型の足を持ち、胴体は人型に近い形状で物を持つことが出来る。
簡単な動作プログラムしか無かった為、ちょっと改造して色々と出来るように改造した無人機械。

その名も――――

「いいぞ、ケイロンを使っても、その代わり急げ」

『へい』

ケイロンと彼らは呼んでいたその機械は彼らの指示の下さっそく稼働する。
大分ガタがきているからか、駆動音がやや煩いが今はそれどころでは無い。
この無人機は各所を修理されたり改造を受けているが、元はＯＣＵ制無人戦闘機体のタウルスである。

たまたま次元海を漂流していたところを、密輸船に発見されたのだ。
武装は破壊され、強いエネルギーの直撃を受けたのかシステムは落ちていた。
密輸団はそれを持ち帰って修理し、作業機械として使っているのである。
前は数機現存していたが、共食い整備でもうこの機体しか残ってはいない。

「ああ後、上の連中へのプレゼントだ。Ｂ－１３　倉庫のコンテナを解放して転送してやれ。どうせ持ってけねぇんだしここも廃棄するんだ。派手に使わせちまおう」

『くひゃひゃ、さぞかし大きな花火が上がることでしょうな』

「ああ、それも憎し魔導師達の墓標付きでな」

下種な笑みを浮かべながら自爆装置まで稼働準備をさせている辺り徹底している。
だがそれにしては死亡フラグっぽいことを立てているのは気のせいだろうか。

それはさて置き、地下次元港の倉庫に保管されている大きすぎて運ぶことが出来ないコンテナ群の中の一つが降ろされる。密輸組織の人間がコンテナに群がり電子鍵を解放した。

「ゆっくりと降ろせ、ゆっくりとだ」

≪――ｖｉｖｉ≫

コンテナの中にあるものを、ケイロンが手を伸ばして引っ張り出す。
それは細長い槍の様な棒が縦４列横５列の計２０本セットされた足付きの四角い物体。
ところどころ塗装が剥がれおちているあたり、かなりの年代物のようだ。

これもまた元タウルス、ケイロンと共に発見された遺物。
一応稼働するが外見がボロボロな為に買い手が付かず、倉庫で埃を被っていた兵器。
まだ若干残っている塗装にはこう書かれていた。

シールドバンカー、かつて多くの魔導師を貫いた魔導師殺しの槍。

魔導師殺しの槍は台座に乗せられ、電力で稼働する転送装置で地上へと送られる。

それが一体何を意味するのか、ここで理解している人間は殆どいなかった。

……

……

……

一方、時間は少し巻戻って敵の攻撃を受けている０３分隊はというと――――

「１５分も持ちこたえられませんって！上は何考えてるんですかっ！」

「そんなことは知らん。だがやるやらないではなく、やらなければ死ぬ。ソレだけだ」

ＨＱとの通信を終えた後、リビエラはその内容をすぐ隊員達に話していた。

だがその内容、特に１５分持たせろという内容に皆が皆渋い顔をする。

ソレもそうだ。今すぐにでも脱出したいのにそれを１５分持たせろというのだ。

ただでさえ弾丸が空気を切る音が響く所為で神経が立っているというのに。
これでは撃たれるよりも先にストレスで参ってしまいそうである。
そんな隊員達の様子を見て取ったリビエラは仕方ないとばかりに指示を出し始めた。

「文句を言ったところで始まらん。私とコルトと双子は右を、フィエロとお前たちは左だ。残りは後方支援に回れ。とにかくたった15分持たせろ」

「たった15分か、言ってくれる・・・後10分持ちこたえられればいいのだがね」

フィエロはそう言い放ち、部下二人を連れて路地の反対側へ匍匐前進していく。
なにか言いたげなリビエラもかぶりを振りコルト達を連れて攻撃を再開した。
後方支援に回ったレイニア達も交代で防御魔法でシールドを張り変える。
着弾する度に波紋のようにシールドが揺らぐが、通常弾頭なら十分に耐えられるようだ。

複数人で防御陣を形成することで、多少目立つが長時間の戦闘行動を可能にする。
魔導師資質の低い魔導師達が必須とする集団戦の基礎である。
だがそれでも、銃撃の中に居るのは気分が悪いものだとリビエラは思う。

たったの15分だが、されど15分。ソレだけの時間動くことが出来ないのだ。
レイニアがあの時のようにプッちんしなければいいなと思い、彼女の方を見やる。

「・・・うう～、もう辞めたい・・・でもお給料はいいし～」

・・・普通に文句を垂れているようだ。
あの第8管理世界における演習のあと、あれだけのショックを与えられて錯乱した所を見ていた為、リビエラはレイニアは武装隊を止めるかと思っていた。

だが彼女はその後も隊に居続け、今では銃弾飛び交う中で不満を言う程度には神経が図太くなっていた。
彼女なりに考える所があったのかもしれないがリビエラはよくしらない。
まぁ理由としてはたった今彼女が漏らした言葉の通りなのだが、リビエラはそのことには気が付かなかった。

「でも死んだら元も子もないよね」

「とはいえ他の部署もお給料はよろしく無いんだぜ」

そんなレイニアの言葉に相槌を返すのは、後衛型魔導師のリエッセとセレガだ。
彼らはあの演習においてすぐに落されたのだが、後衛としての実力

は本物だ。
現に緊張はしているようだが、それ程恐怖に呑まれてはいないあたり、それなりの丹力を持ち合わせているのが見て取れる。

「あう～・・・やっぱり続ける～って魔法っ」

「おっと、また薄くなってきてたね。――はい修復」

「やっぱり死んだら元も子もない」

「あ～う～！！」

削られていく魔法障壁を交代交代で直しながらも、レイニアは悶絶している。
そりゃまぁ、人生の岐路というか、これからどうしようかという大事なモンだが、場所を考えて悩めとリビエラはコレで何度目か判らない溜息を吐いた。

「隊長、溜息吐くと・・・」

「判っている。幸せが逃げる、だろ？」

「ううん、ソレだけじゃなくて」

「男運まで逃げるよ」

「金運も」

「クジで暗黒大魔凶って出ちゃうかも」

「ああそうかい。とりあえず撃て、さもないと・・・」

「「わぁーい、怒ったぁ～」」

さりげなく双子も酷いこと言う。

そう思いまた溜息を吐きそうになり止めた。

別にそう言う話は信じる質ではないが・・・ちょっとは気になるからだ。

ともかく、長いようで短い１５分――０３分隊の奮闘が始まった。

……

……

……

ここから更に十数分が経過した。

周囲の倉庫の壁に大穴があき、時折爆発が起こって視界を遮っている。

敵からの擲弾筒から発射される擲弾が着弾した影響であろう。

そして包囲され執拗な攻撃にさらされた０３分隊はどうなったかというと。

「・・・皆生きているか？死んだ奴はいないか？」

「私は問題ないようだ。こっちの二人も無事だ」

「私とリエッセとセレガも無事です」

「俺を含め双子も無事です」

「怪我無しです」「です」

・・・なんとか生き残っていた。

きちんと防御魔法を展開し後方が怪我の治療を行った結果である。
それぞれ掠り傷程度の軽傷と疲労が溜まってはいるが、たかだか１０分で倒れるほど軟な鍛え方はしていないので大丈夫であった。

しかし精神も摩耗はそろそろ限界に達し始めていた。
只の検挙かと思いきやかなり大規模な戦闘に発展してしまったからである。
当初こそ過剰戦力ではないかと思えるほど武装局員が呼ばれたのだが、結果として拮抗するほどの状況に追い込まれてしまっていた。

これはある意味で事前調査が甘かったと言わざるを得ないだろう。
勿論、現状では段々管理局側が有利に立ちつつある。
だが、そんな事は今現在窮地に立たされている０３分隊には関係のないことだった。

「いい加減救援が来ても――ッ！１１時！グレネード！」

「ええい、くそっ！シューターっ！シュートッ！」

「――命中、これでグレネード持ちは１０人目か・・・多くないか？」

時間的には救援が来てもおかしくないのだが、戦況にも変化が現れていた。

密輸組織が置いて行く事にした武器類を解放した為、地上に展開している足止めたちにはより強力な携帯火器が配られたのである。

魔導師の纏う防護服は通常のライフル弾だと当たり所がよくないと効果がうすい。

ＢＪは薄いながらもフィールド魔法を常に展開する魔法だ。

それは個人差があれど、全身に防弾チョッキを纏っている様なものなのだ。

一応Ｂランク程度の魔導師なら突撃銃レベルの銃弾でも貫通可能ではある。

だが魔導師の防御法には、それとは別に防御魔法や結界も存在する。

故にかなりの弾丸を当てて、シールドを減衰させないことには撃破が難しかった。

だがそれもグレネード弾を使われれば話は別である。

炸薬が対魔導師用に増量され、鉄片やら矢が仕込まれた擲弾。

直撃を喰らえば当然ＢＪを着ていても動けなくなるレベルのダメー

ジは負ってしまう。
武装局員がフェンの様なＢＡを持っていれば話は別だが、今は関係ないだろう。

「ああもう、火薬のにおいは嗅ぎ飽きたよ・・・ん？」

「どうした？ハトが突撃してきた様な面して」

「それ普通に恐怖じゃん。いや、ほら何か白い煙が垂直に――」

その時、偶々周囲を見張っていた一人が空に昇る煙を見つけた。
煙と言うが、立ち昇っているという訳では無く真っ直ぐ空に伸びている。
よく見ると小さな棒から煙が噴出している様に――

「なぁ、あれってもしかして・・・噴進弾？」

「・・・だろうな。隊長、あれをっ！奴さんら新しいおもちゃを繰り出したみたいです！」

「あの方向は・・・他の武装隊がいる方角だぞっ！」

「ＨＱ！此方０３分隊！奴ら噴進弾を使用した！各部隊に警戒をっ！」

――空に上がった無数の煙。

その正体は地下アジトから地上に送られた２０連装シールドバンカーであった。
地上に展開していた足止め部隊は、グレネード等の強力な火器を使いこう着状態にまで持ちこんだものの、徐々に押され始めていた。
その為地下から転送されてきたそれを見て、これでかつると思ったのか即使用。
こうして空に白い噴煙によるアーチが掛ろうとしていたという訳である。
そして射出されたシールドバンカーは、やがて重力に従い高度を下げて着弾した。

――鈍ッ！！

「ＨＱ、噴進弾の着弾を確認した。損害は？」

一応警告は発していたし、それが他の部隊にも伝わっている。
レイニアが言うには防御結界を発動したと感じたらしいので、それ程被害は出ていないだろうと思い、リビエラは通信を入れたのだが――

「――は？いや、間違いではない？そんな」

通信先のＨＱでは悲鳴のような報告が上がり続けていた。

それを聞きとったリビエラも、放心に近いくらいに唖然とする。

「どうかしたんですか？」

「まさか、たった数十発の噴進弾で全滅だというのではないな？」

レイニアとフィエロがリビエラに問い詰める。
彼女はまだ信じられないと言った顔をしたまま、彼らに向き直る。

「・・・部隊の半分が壊滅。重軽傷者多数、死者は無し・・らしい」

そして彼女が発した言葉を聞いた彼ら。
そのあまりの被害の大きさに彼らは驚き言葉を無くした。
たかが数十発のロケット弾で、これ程の被害が起きるとは予想出来なかった。

武装局員たちにとって不幸だったのは、それが只のロケット弾では無かったこと。
使われたのは戦争ばっかやっていたあの第７８管理外世界の二大大国が、両陣営ともに使用していた対魔法防御貫通処置が施された特殊弾である。

シールドバンカーと呼ばれるそれは、文字通り防御魔法を貫通することが出来る。
細長い弾頭に仕込まれたコーティングや魔力素子干渉装置。
それがどんな強固なシールドであっても結合を緩ませることが可能

となるのだ。

そして結合が緩んだ瞬間を突いて、細長い本体が持つ物理的な運動エネルギーが加わることで、一枚だけのシールドならば余程特殊な――ディストーションフィールドとか――防御魔法でもない限りは貫通してしまう。

そしてシールド内部で爆発し、被害を与えることが出来る悪夢のような兵器だ。

シールドを中和させる装置が大きすぎて炸薬が少ないというのが唯一の救いだろう。

だがそれでもＢＪを着こんでいない場合、人間はなすすべなく肉塊に変えられる。

これの対処を知らない管理局側の被害が増したのは仕方ないことだった。

実を言うと、これを使用した密輸組織もそこまでの代物だと気が付いていない。

只単に拾った兵器であり、在庫処分な気分で使用しただけなのだ。

一応試験は行ったが、非合法組織故に正規の魔導師はあまり所属していない。

その為、魔導師相手に使用した事はなかったのだ。

それに密輸組織は兵器を扱うとはいえ専門家ではない。

故にちょっと爆発力が小さめのロケット砲という風にしか認識できなかったのである。

この兵器の弾頭に仕込まれたシールドを瞬間的に無効化出来る装置やコーティングに気が付いていれば管理局の屋台骨を揺らす事態に発展したことは想像に難くない。

この事態はある意味で偶然が重なりあって引き起こされた事態である。
両者とも、その兵器の有用性に気が付かなかったのは幸運か、それとも不幸なのか。
そして偶然の重なりは０３分隊の上に最悪の事態として起きた。

「再度噴進弾の発射を確認っ！こっちに来るっ！！」

「防御魔法を！」「だめだ！間に合わない！」

再度発射されたシールドバンカーの効果範囲に運悪く彼らが巻き込まれたのである。
マルチタスクを起すも、着弾まで後数秒、術式構築は間に合わない。
彼らは爆風に備える為に伏せた、その直後――

≪――キュルルル≫

シールドバンカーの空気を切る音が聞こえた。

≪――ドカァンッ≫

そして炸裂、辺りに轟音が響きわたる。
彼らは次に襲い掛かるであろう衝撃に備え身を凍らせた。
だが――

―――――――――?

爆風に備え伏せていたリビエラは、何時まで経っても衝撃がこないことを不審に思い、顔をゆっくりと上げた。
周囲を見渡すと、倉庫の路地であった筈のそこは殆ど全壊。
支柱がむき出しとなった倉庫は、まさに爆撃の後という惨状だ。

だが、０３分隊が居た空間だけ、不自然なほど無傷であった。
まるでそこだけぽっかりと穴が開いたかのように、何ともなっていない。
周囲の建物は半壊しかけているのにどういう訳なのだろうと疑問に感じるリビエラ。
そしてその理由は、目の前に佇む存在を見たことで一気に氷解する。

【――多重シールドビット正常稼働中。救援目標の防衛に成功】

そこに居たのは複合装甲の身体を持った鋼鉄の蜘蛛達だった。
それはかつて演習の最中、彼女らに存在を気付かせなかった魔導機械。
多脚思考戦車の量産型シランがそこに居たのである。

そしてその量産型の周囲には複数の小さな機械が浮かび、そこからシールドが複数展開されているのを０３分隊の面々はその眼で見た。恐らくは紙一重の差で自分たちとあの噴進弾の間に割り込み、シールドを展開してくれたのだろう。

【一応確認します。貴方がたが救援を要請した第０１３４武装隊０３分隊でよろしいか？】

「あ、ああ――――」

【要救援者を確認、データ照会でも一致――お待たせしました。自分たちが援軍です】

援軍と聞いて０３分隊は怪訝な顔をする。
そこに居たのは確かに高性能な傀儡兵の様な魔導機械ではある。
だが、だからと言って包囲された中から突破出来るのかということに疑問を覚えた。

しかしこの時、０３分隊の面々は気が付いていなかった。
包囲され銃弾が飛び交っていた筈の路地が、全く持って静寂であった事を。
すでに周囲は量産型シランズ達によって制圧されていた事を。

「お前たちはなんだ？敵ではないみたいだが・・・救援とはお前たちの事か？」

【肯定、現在管理局にて試験運用中の魔導師支援用端末である多脚

思考戦車です】

「支援・・・多脚？」

【通称は量産型シランです】

目の前の機体はそう言いつつ、何ならＨＱに確認をと言って来た。
もし敵ならこんなに悠長に会話しないだろうと考えたリビエラは、
とりあえず彼ら量産型シランズを信用する事にする。

どちらにしても周囲に十機ほど展開されていれば反撃も出来そうに
ないのだし・・・。
まぁちゃんと管理局の認識コードも持っていたので、ソレで完全に
信用したのだった。

【それでは後は自分たちが引き受けます。０３分隊は搭乗ポッドに
乗って後退を】

「・・・その指示を受諾する・・・だが、後退出来るのか？」

リビエラは此方に話しかけてくる量産型にそう問うた。
量産型はその問いに対し、カメラアイをクルリと回転させた。
どうやら思考しているらしい。そして答えはすぐに出たのか、量産
型は音声を発した。

【問題ありません。０３分隊は我々が責任を持って後方へと運びま

す】

「・・・了解した。全員それぞれ乗車、忌々しいここから離れるぞ」

「了解」×０３分隊全員

正直、すでに疲労感が限界に近づいて来ていた彼らはそれぞれ付近の量産型に近寄り、彼らの背部に設置された搭乗用ポッドに乗り込んだ。
０３分隊を乗せた機体達は重量制御術式で機体を軽くすると、そのまま跳躍してこの場から素早く離脱していった。
後には６機程の装備がそれぞれ異なる量産型達が残された。

【デルタリーダーへ、此方デルタ。各機配置に付きました。指示を待ちます】

【デルタリーダー了解、コマンダーへ連絡します――デルタへ、此方デルタリーダー。
周囲の脅威目標を全て殲滅、また魔導師の支援を行え。以上です。行動を開始】

【了解了解】

デルタチームと呼ばれた量産型達は機体を翻して散開していった。
彼らの胴体にはアヤメのエンブレムが刻印されている辺り、どうやらアイリス配下の個体達の様である。

さて、彼らが何故ここに居るのか？
それはリーゼ姉妹に頼まれたフェンが、彼らをCW社経由で本局に貸したからである。

フェンは当初は渋ったが、隙をつかれて姉妹に抱きつかれ顔を真っ赤にして了承したのだ。
彼は案外ハニートラップとかに弱いのかもしれない。
いや、純粋すぎて逆に気絶してしまうからあまり効果はないかもしれないが。

話を戻すが、これはグレアム提督も了承した魔導師支援機体の実験的配備の一環だ。
フェンから貸し与えられた彼らは、本局において運用評価試験を行っていた。
最前線で働く魔導師達の支援を行えるように、運用評価試験は実際の現役魔導師の監修のもと行われ、要求された要求をほぼ満点でパスしたのである。

こうして運用評価試験をクリアした量産型シラン達。
彼らは実験的にどこかで実験的配備を行わせる予定であった。

そんな時に知らされたこの密輸組織検挙事件である。
予想より大規模であった組織、そして本局にも送られる救援要請。
試験は終わったが実践の方はまだ評価されてはいなかった彼らには渡りに船だった。
また他の武装隊も他の事件で出払っており、救援に行けるのが彼ら実験部隊の身だったことも、今回彼らを参加させることとなった要因であった。

要するに人手不足だし、何でも使おうって感じだった訳である。

とはいえ現場に付くまでに転送ポートを幾つか経由せねばならず、15分を要したのだ。
結果的に間にあったが、ある意味で紙一重だった事は量産型の上位個体であるアイリスをホッとさせた。

こうして、ミッドチルダにおけるシラン達の初陣は武装隊の救援という形で幕を上げた。
鋼鉄の身体を持ち、防御魔法を展開出来る彼らに銃器は通用しない。
標準装備の着脱式魔力機銃は、スタンモードで犯罪者たちを駆逐した。

生憎組織の幹部は取り逃がしたが、アジトの自爆装置まで止め、自爆で消え去る筈だった多くの情報を管理局が入手する事に貢献したのである。

そしてこの功績が評価され、管理局の実働部隊へ配属が決定したのだ。
この事件こそ、後のシラン達の様々な威業の第一歩であった。

＊＊＊

さて、件のシラン達を作り上げた男のフェンは、その時如何していたかというと。

「これで最後だリイン、頼んだ」

「任せておけ・・・リン、サポートを頼む」

「お任せあれですぅ！」

『私もサポートします』

地下基地の演習施設に横になり、リンとリインフォースが彼の傍に立っている。
そして彼女らは手をかざすと、大規模な術式を展開した。

「それでは、コンパイル開始！」

その言葉と共に空間にある術式から光りが伸び、フェンへ突き刺さった。

「ぐっ、うぐぅがぁぁぁぁぁ！！」

「プログラムデータ、アナザーを経由、主殿へと多重継承っ」

『マテリアルの構成計算開始・・終了、データを送ります』

「肉体構成に変化あり！骨格が変動を開始！」

「いけるっ！いけるぞ！！頑張れフェン！もうすこしだ！」

「プログラム定着まで後２３秒ですぅ！」

「い・た・い・・・けど、まけるかぁぁぁ！！」

光りの中、フェンの身体がゴキゴキと音をたてて改編されていく。
ある意味直視出来ない様な気もするが、術式の光りが強いので回りからは見えない。
その痛みに耐え続け、やがて光りが収まっていくと――

『「「・・・・・・」」』

「お、おお。視界が高い位置にある・・・まぁ以前変身魔法で体験したけど」

ガッツポーズをとりながら飛び跳ねかねないほど喜色に満ちたフェン。
だが――

「あれ？なんで胸が出てるんだ？あと何か足りないような・・・」

『マスターが「主どのが「フェンがおんなになったぁぁぁぁっ！！？？？」」』

「へぇあっ！？」

――なんだかとてつもない事が起こったようだ。まる。

「日常の裏側では・・・後編」（後書き）

ゴメンなさい、つい我慢できなかったんです。

でも後悔はしてなかったりして。

今後どうなるかは、まだ未定。

ソレではノシ

「ううん、永遠の少年・・・ピー○ー・パンかよ！」（前書き）

１月３０日に改訂しました。改定内容は後書きに

「うう、永遠の少年・・・ピー○ー・パンかよ！」

「うう、永遠の少年・・・ピー○ー・パンかよ！」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

・・・すこし、昔話をしよう。

これはかつて両親が生きていた頃の話だ。
俺は両親に連れられて親戚の家に遊びに行ったことがある。
それは新年のパーティを兼ねた泊まりもある旅行の様なものだった。
親戚一同集まって皆で年を越し、ハッピーニューイヤーと馬鹿みたく騒いだ。
その時はまだ戦争が再発するなんて予想だにしなかったからな。呑気なもんだ。

でだ、親戚の新年会を兼ねたパーティで兎に角酒がふるまわれた。
親戚一同、酒好きが集まり、それこそ樽で一気とか平然とやっていた。
俺は俺で秘密裏に叔父にあたる人間から密かにご相伴を得たもんさ。

まぁその叔父は後で母上に絞められてたが、それはどうでもいい話だ。
問題はその新年会で酒をかっ喰らった人間が全員悪酔いした事に端を発する。
ソレだけなら問題はなかった。別段酒を飲んでテンションが上がる事はよくある。

だが酒を飲んで悪酔いした酔っぱらい達はゲームをすると言いだした。
全員参加でもし負けたらクジで罰ゲームを引き当てるってヤツ。
御酒を少し飲んでちょっとテンションが上がっていた俺も当然参加した。

ちなみにやったゲームは地球で言う所のツイスターゲーム。
あのぐるぐる回るヤツで色を指定して、そこに手足を伸ばすアレだ。
んで当然俺は当時幼児である。そしてその新年会では一番年下だった。

ここまで言えば大体判るだろう。俺はゲームで負けたのである。
大人と一緒に参加すればそうなることはすぐに判る。
だが酒をがぶ飲みした酔っぱらいと、少し飲んだだけでほろ酔いだった俺。
思考力が低下しているのに判る訳がねぇ。

そんな訳で不利というのも馬鹿らしいほどの状況でゲームをして負けた。
ビリもビリ、ビリっケツの下から数えた方が早いというか一番下。
その格差、圧倒的・・・！ってな感じだった。

そして負けてうなだれる俺の前に何時の間に造ったのだろう。

何やら段ボールに手だけが入る穴をあけた物が置かれていた。
どう考えても罰ゲームクジＢＯＸです。

まぁどうせ大したもんはないだろう、そう考えて俺は籤を引いたってワケ。
そして引いたのは“女装する事”・・・クジを握り潰そうとした俺は悪くない。
だれがこんなアホなクジを混入させたのだろうか。

そして何故こういうときだけ、俺のサバイバビリティは発動しないのだろうか。
固まった俺はそれを不審に思った両親にクジを無理矢理見られた。
だがちょっと安堵していた。両親なんだからこんなアホな事させないだろうと。

ここまでで言いたかったことは、それは非常に日本人的思想であったという事だ。
俺の家は名前からも判る通り、地球で言う所の白人系に近い。
そして最悪な事に酒が入ってハイテンションな両親はノリの良い白人ヘジョグレス進化を遂げていたのだ。

つまり、最初から俺に逃げ場はなかった訳ですな。
悪のりした女性陣に親戚の家の奥の部屋に連れて行かれた俺は・・・
女装させられた。
只の女装では無い、幼い為中性的な顔立ちなのを利用し、女性の持つコーディネイト能力をフルに活用。

あれよあれよと着替えさせられ、気が付けばあら不思議。
黒髪ロングの可愛らしい少女がそこに居ましたとさ。
エエ黒歴史です。黒歴史ですとも。

――――いい加減現実逃避は止めた方が良いだろう。

「ああ～肩が重い・・・これ戻せるんだろうか？」

ふと自分の顔を下に向ければ、ご立派なバストとご対面。
まぁ前の身体でもそうだったが、この身体でも別段動とも思えない。
・・・男としてそれはどうなのかと無限の思考ループに入りそうだぜ。

「心配はいらない。術式を逆流させればいいんだ。定着も完全じゃないから今ならすぐ戻せる」

そうリインフォースは言ってくれるが、正直どうなるか不明が本音だろう。いやはや、俺も焦っていたとはいえ、随分と馬鹿な真似をしたもんだねぇ。ちょっくらオツムを冷静にすればすぐに判ることだろうに・・・。

さて俺は純粋な魔法生命体ではないことは以前から話した事があるから周知の事だろう。俺が厄介になっている八神家の人口の８割に当たるヴォルケンズやリンフォース等が俺が知っている純粋な魔法生命だ。

彼女らはキチンとしたプログラムによって構成されている純粋種と言ってもいい。

そしてお察しの通り、偶然の産物で彼女らと似た身体になった俺には、今まで何度試しても肉体の変化を促す調整が効かなかった事も前回話した通りだ。

どうやってその問題を克服したのかというと・・・。
正確には克服なんてしていないというのが答えだろう。
正解は回り道、直進出来ないなら迂回路を通らせるのはよくある話だ。

要するに普通のアクセスでは無理だったから別の方向からアクセスした。そしてそのアクセスを行ったところはリンのプログラムを経由する方法だったというだけの話。何せリンの方は奇跡的に通常の魔法生命体のそれとほぼ同じ構成だったのだ。

そして彼女は俺と常にリンクし、俺達はお互いに影響を与えている。ダメージフィードバックや魔力運用がそうだ。それを利用し彼女にまずとあるプログラムを与えて俺に合うように改編させる。

そのプログラム事態は単体では何の意味も無さないが、複数のプログラムが合わさる事で意味を為す、言わばある種のコンピュータウィルスの様な機能が付与されていた。
それを彼女経由で俺に直接リンクさせることでプログラムを構築、肉体改編を促そうとした訳だが・・・その結果がこれだよっ！

大きくなったのは良いとしてなじぇに性別まで変わるのかねぁぁ～ンっ！？
責任者出てこい！謝罪と賠償を要求するぞコンチキショー！！
只でさえガラスの様な俺のハートを粉砕してくれやがって！

・・・ってやる様にお願いしたの俺じゃんｏｒｚ

「さっきから怒ったり落ち込んだりと忙しいな」

『まぁマスターの事ですから、自分の考えなしに気が付いてって感じですかねぇ』

「主殿・・・」

ううん、なんか皆の目がイタイ・・・。

＊＊＊

さて、当然のことながら戻れるのならすぐさま戻りたい。
そう言う訳で術式反転を行い、すぐに元の身体に戻ろうと思っていた。
・・・のだが――――

「ああ、フェンく～ん。こんなにきれいになって、私は、私は！うっ」

「リ、リニスさん？出来れば離してくれるととても俺は「ソコは私またはボクでしょう！？」嬉しい・・・私としてはとてもうれしいのだが？」

「そう、それ。その淡々とした感じが・・・ああ」

（頼むからだれかなんとかしてくれ）

肉食獣に捕まった。

なにやら報告したい事があるということで部屋に入ってきたリニスに問答無用で捕まった・・・のです。そしてもうヘブン状態に入って俺の言う事を聞きやしない。
ちなみに何故初見で俺が俺であるかを理解したのかというと、只単にレイラインで見分けただけの話だ。

「一体どうしたんですか、こんなに綺麗になってしまって」

「いや、その、背丈を伸ばそうとして色々したらこうなってしまってね」

「そうだったんですか。でも本当、綺麗になっちゃってまぁまぁ」

「いや、何で頭を撫でる？」

大きくなったらちょうどアナタと同じ程度の背丈はあるんですぜ。
そう言っている俺の声は黙殺されたらしく撫でら撫でらと撫でられる。
いやまぁ、別段嫌では無いんですがね。

「・・・はっ、ごめんなさい。あんまりにも綺麗な御髪だったから」

「そうなのか？自分じゃ判らない・・・」

どうやら俺の髪はとても綺麗らしい。
鏡を見た訳ではないし普段特に気をつけている訳でも無いから判らない。
髪の毛を手に取ってみるが、まぁ普段より多少柔らかい程度か？
リニスは使い魔とはいえ女性、やはりそういった細やかな部分が解るのだろう。

とはいえ・・・

「そろそろ離してくれ、元の姿に戻らないと・・・」

「例え貴女がどんな姿でも、私は貴女を認めるわ」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「いえ、むしろこっちの方が本当の姿です。そうですよね？」

「違う！絶対に違う！」

おい、一瞬目がマジだったぞ！？
このままでは化粧までされてしまいそうだと判断した俺はすぐさま彼女を振りほどく。

そしてそのままミラージュハイドでドロンしてこの場から逃げ出した。

「ちょっ！フェンく～ん！！もどってらっしゃ～いッ！！」

誰が戻るか。怖い怖いお姉さんの所からはすぐにグッバイね。
男性の変態は鳥肌が立つレベルで怖いが女性も中々だぜ。

まぁリニスは溢れ出る母性から来るモノ・・・だと思わないとやってらんない。
兎に角俺はキョロキョロと辺りを見回しているリニスに背後から近寄り気絶させた。
流石にコレ以上情報が漏れるのは勘弁願いたい。

「まったく、気絶させるとはどういうことだ？」

「なに、すぐに戻れば彼女もすぐ眼を覚まさせるさ・・・というかお前ら逃げたな」

「な、何を言っている」

『逃げてませんよ。戦術的に後退しただけです』

「にげてないですよぉ。リイン姉さんたちに付いて行っただけですぅ」

巷ではそれを逃げるというんだぜ。
でもまぁそんなことよりもだ。早く俺を元に戻そう。なんだか嫌な予感がする。
何せ、時折ゾクンとした感覚が背筋を駆けあがるのだ。
これは敵からの砲撃魔法が至近距離を通過したあの時に感じたあれと同じ。

と、兎に角急がないとヤヴァイ事になるぜい！

「・・・兎に角、元に戻してお願い」

「判った。術式を反転させるから少し待ってろ」

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

シグナムは家に帰ってくるなり困惑してしまった。
普段のように剣術講師のアルバイトから帰ってくると、家の中が混沌に包まれていたからであった。

「ブツブツ、ブツブツ・・・」

「ずるい、あれはずるい・・・」

居間には何やらブツブツと陰鬱な空気を発する物体が二つ。
膝を抱えて体育座りしている鉄槌の騎士ことヴィータと沈黙の兵であるフェンだった。
なにかあまりにもショッキングな出来事が起きたときの反応に似ているが、今この状態の二人に聞くというのはなにか危険な気がしてならない。

烈火の将とまで言われる自身の勘がハッキリとそう言って来たので彼女は彼らから目を逸らす。

「ねぇ、こっちの方も似合うんじゃないリニス」

「そうですね。此方の華やかな色合いも捨てがたいですが、意外と清楚な方も（ボタボタ）」

方や、陰鬱な空気を発している物体の反対側では、何やら着物を手に話し合う湖の騎士と山猫の使い魔がそれはもう楽しそうにどの着物が良いか談義している。
なぜヤマネコの鼻から赤いなにかが滴り落ちているのかも考えたくはない。

「リイン姉さん。私、このままで大丈夫なのですか？」

「・・・一応問題はない・・・筈」

「筈・・・筈って」

『自信ないんかい』

それと我らが夜天の書の管制人格とフェンのデバイスを手に持った謎の少女。
少女はどこか困惑しているらしく、しきりにリインに詰め寄りなにかを訪ねていた。
その少女とは会ったことはないはずだが、シグナムは彼女とどこかで会ったような既視感を覚えた。
誰だったかとも思ったが、烈火の将を名乗る身としては現状を把握せねばなるまい。

「・・・ザフィーラ」

「・・・なんだ？」

「どうしてこうなったか簡潔に教えてくれ」

「・・・いいだろう」

この混沌とした空気の中で、一番静かであったというか。
とにかく恐らくこの事態を静観していたであろう蒼き狼に情報を貰うことにした。
もっとも、どうしてこの事態になったのかを聞いた彼女は――――

「なんとも、形容しがたい事態だな」

――と、言葉を濁すだけだった。

さて、一体全体何がおきたのかは、正常な思考力を持ち合わせる皆さんにはお気づきの事だろう。何てことはない、一言で言えば“フェンが元に戻ったらリンが美女になった”ただコレだけである。

そう、先程からリインフォースのところで心配そうに自分の異常を訴えている少女。

彼女こそ、フェンという存在の片割であるリンことリインフォース・アナザーであった。

外見は黒髪ストレートのロングであり、身長は１７０ｃｍほどであった。

また瞳が紅くなっており、年齢は１８歳くらいで胸は何故かシグナムと同程度だ。

リンの童姿から面影を感じることが出来る成長した女の子という感じである。

彼女がフェンとならべば姉妹というふうに見られ・・・いや、彼の名誉の為にここは姉弟としておこう。

皮肉なことに、フェンが自身を成長させようと使用した分散プログラムが、術式反転で戻る際にリンを経由させていたからか誤作動を起したのである。

分散プログラムは目的の場所において結合し効果を発揮する。
この場合この成長を促進させるプログラムがどこで結合するのかというと、言わずもがなフェンの身体の中である。

当然一時的にではあったが、フェンは女性の姿になりつつもプログラムの作用で成長を果たしていた。
要するに分散プログラム自体は既にフェンの中で結合しあい、一つのプログラムとして機能していたのである。

それをそのまま分解させずに術式を反転させたから、このような事態になったのだ。

「――――と、俺はそこでうずくまる前のフェンに聞いた」

「そうか・・・で、何故コイツはこうなった。それとヴィータは？」

「いや、フェンに関しては話している内にドンドン雰囲気が暗くなって、ヴィータは・・・まぁアレだ。リンを見たショックから、だな」

どうやらヴィータはフェンが失敗とはいえ一時的にでも大きくなり、また自分よりも小さかった（↑ここ重要）筈のリンが大きく成長してしまった事にショックを受けたらしい。
彼女に至っては彼らの最も尊ぶべき存在であるはやてから、これ以上成長したらアカンというお言葉をいただいており、ショックに拍車をかけた結果の様だ。

フェンは何時ものように、何でこうなるんだと己の理不尽さを呪っているだけである。
まぁしばらくすれば元に戻るので問題ない。
だがシグナムとしてはちょっと言いたい事もあったので二人の前に立った。

「まったく・・・フェン、ヴィータ」

「「・・・」」

「・・・はあ――――気を付けっ！」

「ッ！！」

呼びかけに応じなかったフェンだったが、シグナムの気迫のこもった号令にすぐさま気を付けをする。
フェンは条件反射で、ヴィータは気迫に押されて思わず立ち上がった。

「二人がショックを受けた事は理解できる。だがその醜態はなんだ？」

シグナムの辛辣な言葉に二人はぐうの音も出ない。
彼らが一般の魔導師であったなら、多少はこの言葉に抗議しただろう。

だが鉄槌の騎士の称号を持つヴィータは、本来は主であるはやてを守護する存在である。
故にこの程度の事態でうろたえていい筈はないのだ。

そしてフェンもこの家の防衛に一役買い、地下にシェルターまで建設した男だ。
いまだ兵士としての矜持を捨てていないのなら、そんな醜態をさらしてどうするというシグナムの問いに対し、フェンはぐうと黙る他なかった。

「いくら平穏が多い日々とはいえ、そんな調子でどうする？平和ボケし過ぎだぞ二人とも。臨戦態勢とは行かなくても、せめてショックからはすぐに立ち直れる精神をみせてくれ」

自分たちヴォルケンズを含め、八神家に集う者は力ある存在。
それゆえ、どんな事態でも心折れる事は許されることではない。
例えそれが些細なことであっても、簡単に折れるのは精神が弱いということだ。

フェンやヴィータとて本来その程度には動じないほどの精神力を持っている。
武人たるシグナムとしては、力を持つ二人がその程度で落ち込むのをみたく無かった。

そしてシグナムの言葉を聞いた二人もその意味をすぐに理解した。
目からうろことはこのことか、大事なことまで忘れていたようだ。
雷とまではいかないが確かにシグナムの言う通りだと二人は思った。

自分たちがなんでここに居るかと問われれば、答えは一つしかない。
彼ら彼女らがここ、八神家に居る理由・・・それは家族を守る為に
ほかならないのだから。

こうして憑きモノが落ちた様に二人はシャンとした顔となった。
そして気が付かせてくれたシグナムに顔を向ける。

「・・・ごめん、シグナム。あたしどうかしてた」

「平和ボケ、か。たしかに少しばかりぬるま湯に浸かり過ぎていた。
もうこういったことに拘るのは止めよう・・・シグ姉さん、気付か
せてくれて感謝する」

「気にするな。我らは共に主を守る存在・・・家族なのだからな。
家族のフォローというのも良いものだ」

そういって自然に微笑みあうシグナムとフェンとヴィータ。
どこか一枚の絵画のような優しい光景がそこにはあった。
そこには確かに家族としての見えない絆が見える。
生れも育ちも生き方も、全て違えど彼らは確かに家族であった。

「・・・で、私はどうすればいいですか？」

「まぁ、別に大きくなって不具合はない様だし、良いのではないか
？」

『それにしてもマスター、青春ですねぇ～』

とりあえずその後の沙汰だが・・・。
リンは大きくなってしまったが機能的にはかなり向上しているのでそのままとなった。
そう決まった時、やや暴走しているリニス&シャマルと訓練校から帰って来ていたはやての三名によりショッピングへ繰り出されたのは余談である。

フェンは必要な時は変身魔法で誤魔化そうと完全に思考を切り替えることにした。
普通はそっちを先に考えろと言われそうだが、勘弁してやって欲しい。
本人必死だったし。

また成長しない事についてはレアスキルの反動ということで通す。
実際そういう人間は次元世界には居なくもない。
強すぎる力をもっているので成長が止まったという設定である。

もっとも、それだと次元世界では通用しても地球では通用しない。
この時期の子供はドンドン成長する為、ずっと姿が変わらないのは怪しまれる。
ヴィータはそこら辺割り切って変身魔法で誤魔化すことにしていた。

フェンも多少面倒臭いと思ったが己の体質上仕方ないと割り切った。
それにあのリンのサポートが付いた特殊な変身魔法と違い地球では通常の方だ。
自分自身で覚えれば良いので、デバイスのリソースは喰わない。

こうしてフェンの大人になるぞ計画は終えたのであった。哀れ。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

あはは・・・つわものどもが夢のあとってな。
おまけにリンも大きくなっちまった。もうどうにでもな～れだぜ。
もう俺は永遠のショタで通すのさ。ヴィータ姉と一緒にな！

「はぁ～」

『まぁまぁ、良いじゃないですか。大人になればなるほど汚れに染まってしまいますよ？』

「・・・一体どこで覚えたんだか・・・ふはぁ～、煙管ウメェ」

もう煙管やってやる！中身は薬草だけど！！・・・むなしいな。
これまで必死になって一カ月以上費やしたあの時間はなんだったんだ。
こうなることが判ってるんだったら、ＤＤＳ－１の修復にでも精を出しておくんだったなぁ。

『――ん？マスター、メールが来ました』

「メール、誰から？」

『リーゼ姉妹からですね。なにやら色々書いてありますが・・・読みます？』

「・・・要点だけ」

正直、いまの気分だとあんまりそう言ったのに対応できんばい。
でもメールをだした彼女らにそれを求めるのも酷だから普通に対応。
大人の対応ってヤツばいねぇ～。

んで、送られてきたメールの内容は仕事の愚痴が８割。
そして量産型シランズの導入数が増えたのでもっと貸しての催促だった。
どうやら量産型達は大分気にいられたらしい。

そりゃそうだろう。シランズは魔導師の手足の様に動けるよう造ったんだ。
あれで満足できないってんなら、一生人間の魔導師探してろって話だぜ。
まぁ色々と機能を付けたから、何かしら重複して変な機能が生れないか心配だけどな。

「・・・なら増産してやろうかねぇ」

『あれ、ＣＷ社のオーカー主任にそういったのを任せたんじゃ』

「うんにゃ、パテントは俺のモンだし、頼んだのは外装の部分。既存の技術で再現できるモノだけだ。個人と企業じゃ生産力が違うしな。一々外側造ってたら日が暮れる」

『ならマスターがやることなんて・・・』

はは、俺が作るのは中身だよ。
外側は確かにＣＷ社で懇意になったエメット・オーカー・・・通称ドクに頼んだ。
魔力駆動の機械というのは彼らの好奇心を色々と刺激したらしく、技術交流がてら色々と面白い話が出来たんだよなぁ。

まぁ兎に角、外側の外装、シランズの手足や胴体はＣＷ社がやってくれる。
俺は一応シランズを共同開発した人間としてフリーランスの技術屋扱いだそうだ。
ＣＷ社にしてみても、色々と面白い技術が手に入る分、悪い話では無かったからな。

ちなみに俺が手掛けるのは内部のＡＩ部分や魔導炉、武装関連だ。
ＡＩに関して量産型シランズからのコピーでいいのだが他二つがね。
魔導炉に関しては現状あのサイズで稼働するモデルは手作りするしかないのが一つ。

武装に関してはああいったのはあまり造られたことが無いのでノウハウが無い。
なので独力とはいえハルケギニアで実戦を経験した魔力機銃等の技術は俺がやるしかない。
そこだけハンドメイドだから、結構金掛かるんだよねぇ。

まぁそれもいずれはマザーマシンでオートメーション化させるんだが、何年も先の話だろう。

「とりあえず、色々と持って行きたいし・・・あ、そうだ。アレの申請もしなきゃいけないんだった」

『まぁ動かせる程度にはなってますしねぇ。持ってきますか？』

「そうしよう。序でに重たい機材とかもな」

さてと、金を積めば正式の免許くれる世界はどこじゃったかな。
俺は色々とやることが出来たのでそれはそれで楽しもうと思った。
どうせだし、小さな会社でも造ってみようかな。ＣＷ社傘下でも良いし。

「うう、永遠の少年・・・ピー○ー・パンかよ！」（後書き）

※結局元鞘。

あ、本文中に未成年者の飲酒的描写がありますが、決して推奨しているわけではございませんのであしからず。

改訂内容

・はやては禁止しなかった。

・リンはロリ巨乳では無くなった。

・文章増量

「どんな世界でも人がいれば、金の力は偉大だ」

「どんな世界でも人がいれば、金の力は偉大だ」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅリン

寝耳に水という感じで、私が大きく成長してからはや数カ月がたちました。

はやて様も無事訓練校を短期で卒業なさり、いまは特別捜査官候補生をなさっているそうです。

学校がある為、今はそれほど動けないらしいですが、義務教育を終えたら恐らくはもっと本腰を入れるとか。

ヴォルケンリッターの皆さんも、マスターであるはやて様を守るという目的があるので、はやて様と同じく管理局に入局するかもしれません。はい。

この間食事の際にそのことが話題に出ていたので、まぁ十中八九そうだろうと思いますです。

またフェイトさんとなのはさんとも仲がよろしいらしく、主殿曰く三人娘だそうです。

でも学校では、はやて様やなのはさん達と共通の友人であるすずかさんやバニングスさんが合流するので、実際は五人娘だろうなぁと言ってましたです。

あと、なのはさん達もそれぞれ武装隊士官候補生、執務官候補生へと進みました。

目標があるのは良いことだとリンは思うです。はい。

さて、我らが主殿も彼女らに負けず色々となさっておいでであります。

一番驚いたのは主殿は何時の間にか会社を造っていたということです。

会社の名前はドミトーリ社、なんでもヴィズ姉の名前の由来に関係があるとか。

そして会社の特徴は、自由に動き回れる脚を持つ、地球でいう民間軍事会社と似た様な形態らしいです。

魔導師は管理局に多くいるのですが、全ての魔導師が管理局という訳ではないです。

主殿のお仕事は管理局では無いけれど、自衛の為に魔導師になりたい人達への指導とかが中心だそうです。

また主殿はドミトーリ社からＣＷ社に派遣された社員扱いで登録されてるです。

なので仕事が無い時には魔導機器の研究開発の手伝いをなさっています。

主殿は新しい技術が見られてヤフーと喜んでたです。

最近ではＣＷ社研究所のエメット主任や研究者さん達と仲がとても良いです。

この間は主殿のＢＡを見てこっちでも造れないか模索したり、それ

に対して主殿がハルケギニアで製作したヴァンツァーの技術を公開してたです。

試作でゼフィールを造ってお見せしたのですが、秘匿技術が多すぎるのと製作費用が掛かり過ぎてＣＷ社側で造るのを断念しました。

主要パーツが自爆装置でギチギチだったのも印象を悪くしたのかも知れないです。

ならば代わりにと、主殿はカエルの様な顔立ちをしたテラーンとかいうヴァンツァーを設計してたです。

此方はゼフィールよりも単純な構造と軽量でコストが非常に低く設定されています。

ですがシランズからのノウハウにより、高性能な逆関節機構を用いることで機動性はゼフィールに迫るとからしいです。

主殿曰くこれらのヴァンツァーは、研究の合間のお遊びのつもりらしいのです。

リンにはよくわからないことなので、どこら辺が遊びなのかよくわかりませんでした。

でも皆さん楽しそうにしていたので、何時かは世に出るかもしれませんね。

「リーン、早く乗って～！出発するわよー！！」

「了解です。今行きます～っ！」

あ、リニスねぇさんが呼んでいますです。私はもういかないと。

急いでタラップを駆け上がって乗り込みます。

え、なにに乗り込むかですか？

それは――――

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

よう元気か？俺はすこぶる快調だぜ。

さて前回、会社を造る的なことを言ったと思うがマジで造りました。

・・・といっても自営業みたいなもんだけどな。

しかも社長俺、社員シランズだから、もはや会社とも言えないか？

とにかく何でも屋みたいな感じで俺の技能を生かす職。まぁ傭兵に近いわな。

戦闘インストラクターやらＰＭＣやら運び屋やら色んな呼び方はあるとは思う。

序でにＣＷ社の下請けというか・・・何なんだろう、手伝い？とかしているぜ。

ちなみに社名のドミトーリはＦＭのヴァンツァー、ヴィーザフを造った会社だ。

何せ俺の手持ちデバイスの名前はヴィーザフだからな。そういうつながりな訳。安直。

さて、やってきたのは第３８管理世界にある次元交易地だ。

何しに来たのかというと、移動拠点としてフネを使いたいから、次元航行船の所有における色々な手続きをしに来ただけである。

まぁガキの姿だと手続きは難しいかと思われるかもしれないが実は案外平気らしい。

これも魔法至上主義という環境があるからだろうな。

魔導師の台頭により就労レベルが低年齢化してるから結構融通が効くんだそうな。

この時ばかりは魔法至上主義さまさまだと思ったのは余談だぜ。

とにかくそんな訳で無人世界と各管理世界との連絡橋の様な世界に来たって訳だ。

まぁこれ以上先は自然保護区となっている世界が多いからな。

手続きが・・・まぁ正式なモノとして認められるのに、若干の心持ちしだいで融通が効く世界というのがここだっただけだ。

【少佐、ＤＤＳ－１は目的地に到着しました】

ちなみに、移動拠点とするそのフネはＤＤＳ－１のことである。

ついに全てを掘り出したＤＤＳ－１。その全容は３００ｍ超の大型船であった。

とりあえず動かせるように主機と補機は廃棄世界の残がいから入手し転用。

壊れていたり旧式なヤツもあったが、そこは二個一修理と錬金で素材変換した。

そして今日、あの廃棄世界――もはや乾ドッグと化している――から出港。

いまに至るという訳である。

ちなみに現在のＤＤＳ－１のスペックはこんな感じ――

・次元潜航艦ＤＤＳ－１
　全長：３６０ｍ

全幅：５６ｍ
全高：７０ｍ

機関：（修理品なので、やや調子悪い）
主機：次元航行機関×１
補機：高出力小型魔導炉×２、点火用兼非常用小型レーザー核融合炉×１

兵装：（まだ修理していないので殆ど使用不可。今は置いてあるだけ）
：収納式ＣＩＷＳ１２基（使用可能４基）、収納式ＳＡＭ４基（使用可能２基）
：収納式連装バーストレーザー砲４基（使用不可、要修理）
：空間魚雷（弾種各種）発射管、計１０門（前門が６、後門が４・唯一使用可能）

最大搭載数：通常２５機、部品単位を含めて３０機（現在の機体数は６機のみ）
防御：ディストーションフィールド（要修理）
：高出力光波シールド、各種結界

特殊装備：（まだアクティブステルス関連以外は修理ｏｒ研究中）
：次元空間潜航装置
：次元耐圧殻
：次元転移装置
：アクティブステルス、ＥＣＭ、ＥＣＣＭ

――とまぁ、壊れている所を除けばスゲェもんだった。チートだなチート。

ちなみにＤＤＳ－１の形状は旧ソのタイフーン級のそれとシルエットが似通っている。

二倍近い大きさと推進機の部分さえ見なければ、両者はほぼ同じに見えるほどだ。

それと最大積載数とあることから判るようにＤＤＳ－１は航空機を搭載している。

但し、航空機とは言ったが人が乗るものではなく戦闘型無人機だ。

この戦闘型の無人機はＤＤＳ－１の格納庫と思われる場所で見つかった。

ちなみにその無人機の形状だが・・・マクロスのゴーストそっくりだった。

なんでかはしらん、当時の技術者に聞いてくれ。

ただまぁ、ＤＤＳ－１は長いこと氷に閉ざされていた。

おまけに廃棄世界に墜ちた時の衝撃でもあったんだろうな。
格納庫に残されていたほぼ全機体が使いモノにならなかった。

だが十数機だけあまり壊れていなかったので、これまた二個一修理で共食いだ。
そしたら現状で6機のみ、稼働状態にまで持って行く事に成功。
現在どんくらいの性能があるのか調査中である。

【反応室内レベル3から2へ移行、主機補機ともに異常無し】

【次元港タワーに連絡。返信、未登録船は8番ベイへとのこと、侵入許可貰いました】

「接舷準備、整備シランズは準備を始めろ」

【了解、了解】

ああそれと既に艦船ライセンスは・・・まぁ傭兵やっていた時の伝手で入手済みだ。

取得のやり方は聞くなよ？“専門家”に山吹色の菓子持参でお願いして取得したんだ。

違法と合法すれすれだからちょーっと心苦しいけど、まぁ使えりゃいんだ。

それに今回も似た様な事するから今更だ・・・クロノとかと顔合わせ辛くなるなあ。

それはさて置き、ここ第３８管理世界ではフネと寄港地さえこの世界の交易地であるアンティルで登録しておけば後はオールオッケーとなるのだ。

後は適当に貨客船の不定期船（トランパー）として登録しておけばいい。

さすが多少頭が柔らか～いお役人様が多くいらっしゃる所だ。お金の力ってすごいね。

まぁ別にフネを運行するだけなら黙ってればいいからいいんだが。

もしも何らかの理由で管理局に見つかると色々と面倒臭い。

だから適当に商業目的の免許やら資格やらを取得しておく。

そうすれば何処に行くにしても貨客船ということで言い訳が通るのだ。

あとＤＤＳ－１　は個人で持つには非常に大きなフネではある。
だが次元世界を巡る貨物船や輸送船と比べれば半分以下の大きさでしかない。
なにせ地球と違ってこう言った運有の商売先は異世界規模の大事業だからな。
転送魔法ではあまり大きな物は遠くまで送れないから、こういった大型次元航行船が物流を担っているんだろう。転送中継ポートって値段高いしね。
【各部署、異常無し、次元航行機関停止ィー。慣性航行へ移行します】
尚、これまでのやり取りから判るだろうがフネの運航はシランズが行っている。
正確にはＡＩのみ接続してそれぞれ分担作業を行っているのである。
なので、俺は艦内の何処に居ても通信で彼らに指示を出せばフネが動くのだ。

まぁ一応一元化も出来たんだが、それするとハッキングが怖かったんだよな。

それ以前にシラン系の図体じゃ意外と狭い通路が多いＤＤＳ－１の中は動きづらい。

だから艦船運航シランズは限定的処置で格納庫にてケーブルにつながっている。

本当は小型ボディを造ってそっちに移したいんだが、整備の機体を優先した所為でそこまで作れなかったのだ。

基本的に小型ボディに換装してあるやつは艦内の整備に充てているからな。

いずれは全部小型ボディに換装する。じゃないと色々と不便だ。

「さぁ上陸だ。専門家の方と一緒に色々と楽しくお話してこようかね」

「楽しく、でも隙は見せず・・・ですね」

『とりあえず山吹色のお菓子とかを持参ですね。流石マスター、えげつない』

「はは、褒めても何も出んぞ」

ＤＤＳ－１が次元港に停泊し、船体が固定されたのを確認した俺は降りる準備を始めた。

しかしＤＤＳ－１、最低でも５００年は眠っていたと廃船だというのによく動いたよな。

一応重要そうな機関部や配線はチェックしたり交換したりして稼働出来る様にはした。

だけど、それ以外には殆ど手をつけていない。よっぽど頑丈なんだなＤＤＳ－１。

大体、本来なら千人ちかくの乗員が運航する規模のフネの筈なのだ。

それをＤＤＳ－１は、艦船の運航プログラムを特別にダウンロードした運航シランズ数十機と小型の整備シラン数百機によって運航されているのである。

これはある意味、とてつもなく異色な船であると言える事だろう。

・・・コレじゃまるで某黒い王子さんのフネみたいだな。ワンマン

シップだし・・・。

「お前たちは留守をたのんだ。序でに艦内補修もやっておいてくれ」

「・・・御一人でいかれるのですか？」

「主殿、それだと危険ではないですか？」

「危険ならすぐに逃げるから平気だ。それじゃあ頼んだ」

「「いってらっしゃい」です」

＊＊＊

■第３８管理世界・交易地アンティル■

ここは第３８管理世界にある交易地アンティル。

時空管理局が管理している世界の中ではかなり辺境に位置する世界である。

だが辺境とはいえこの先にある採掘世界や他の次元世界の足掛かり的な位置にある世界なため、その賑わいはミッドにも劣らない。

一攫千金を夢見る人間が集まる為、治安はそれ程いいとは言えないが活気がある町だ。

治安が悪いと言ってもキューバレベルなので、気を付けていれば大丈夫だろう。多分。

確証は持てないので今から行く場所へはミラージュ ハイドを展開して歩く。

地図を頼りに付いた場所はやや草臥れた感じの事務所の様な建物だった。

俺は建物に入り魔法を解いて、ここの主人と会うべくインターホンを押した。

……

……

……

「――それではこれで頼む」

「・・・確認した。後は――それらにサインを・・・結構、これで君も船主だな」

建物の中に入ってすぐに責任者と思わしき男性とご対面した。

一応知り合いからの伝手だったのでお互い顔と名前は知っている。

なのでちょっと重たいトランクに入った“御土産”を渡したらすぐに用事は終わった。

「そいつはどうも。苦労かける」

「なに、昔の仲間のスタイナーからの紹介だ。無碍には出来んからな。

お前さんがもう少し出かけりゃいい酒場にでも連れてってやるんだがね」

「今後の楽しみとしてとっておくよ。ありがとうエルンスト」

「ああ、良い土産も貰ったからな。気にするなリトルボーイ。

あ、言い忘れていたが、その書類の申請には少し時間が掛る。

今日一日はそいつを使わない事をお勧めしよう」

「了解だ。それじゃ」

手を振ってくる彼に俺は顔を向けずに手だけで返事をして事務所を後にする。

陰鬱で腐った生ごみや雑多な匂いが漂う裏道を来た順で辿り元の表通りへと戻ると、そこでようやく一息ついた。

まったく、裏町にあるとは聞いていたがマジでゴミ溜めにあるとかな。

ミラージュハイドで姿を消してはいたが気持ち悪い場所だったぜ。

リンを置いてきたのは正解だったな。下手に連れて来てたら犯されてるぞきっと。

序でに俺も掘られ・・・いや、何でも無い。

「・・・ふぅ～なんとか手続き完了～っと」

『お疲れ様ですマスター・・・ですがあの男信用出来るんですかね？』

そこら辺は問題無いだろう。流石は横のつながりを大事にする傭兵の伝手だ。

手数料として土産は持ってかれたが、手渡された書類はちゃんとした書類だった。

俺は以前アースラで事務作業を奉仕という名のタダ働きで手伝わされたからな。

この手の書類が偽物かどうかくらい見分けるやり方も知っている。

相手が俺を騙す依頼でも受けていなきゃ、この書類は本物だろう。

ちなみにスタイナーは前に傭兵で稼いでいた時の先輩さんだ。

金さえ払えば何でもするが裏切りはしないと評判の人だったので伝手を頼んだ訳だが、頼んで良かったな。

『それにしても、お高い買い物でしたね』

「そういうな。多少は法に触れるかもしれないがグレーゾーンだ。小言は言われても逮捕は出来んよ」

証拠でもあるならともかく、あのエルンストとかいう男は長年これで食っている。

今更そんな程度でばれるようなヘボい仕事はしないだろうよ。

「・・・にぎやかな街だ」

『流石は交易地だけあって賑やかですねぇ～。まるで御祭みたいです』

「御祭、か。いや、これがこの世界での日常なんだろう」

交易地には物が集まる人が集まる。人が集まりゃ色んな珍しい物も集まるのは道理だ。

若干熱い日差しの中で正規品では無い品物を売る連中が露天を造って売りに声を張り上げている姿は見ていると暑苦しいが、自分に来なければ雰囲気的に悪くない。

とはいえ、観光ならともかく普段からその調子は勘弁だがな。

見れば子供の売り子がかごに入った御菓子や飲み物を売り歩き、ザ

ワザワと露天の声と雑踏の声が混ざり、テメェブチ殺すとケンカが起こっている。

うん、実に熱気があるね。さすが交易地。

『・・・あの最後のは交易地と関係ないのでは?』

「まぁそだね」

ケンカが日常、でも殺し合いにまでは発展しないのがその土地クオリティ。

拳で思う存分殴り合った方が、後々までしこりを残さないんだろう。

ある意味で潔い考えだと思う。俺がするのはごめんだがな。

≪・・・くきゅ～≫

「あっ」

『・・・お腹すきました？』

「・・・すこし」

いやだってねぇ？一応今日の取引で緊張くらいしてたんだぜ。

朝飯も少ししかとってないから、安心して緊張が緩んだから・・・

その。

『幸い露天や屋台が多いですから、なにか買ってはどうです？』

俺は帰るのが送れるので少しだけ悩んだが、ヴィズの提案に乗る事にした。

腹が減ってはなんとやらッてな。身体の成長は止まっても食欲は無くならん。

便利な身体ですこと。いやホント。

……

……

……

たまに外で食べるというのもオツなモンだ。

飲み物がビニール袋にストロー付きで入ってるのには苦笑したがな。

まあ味は悪くないし、元よりそんな事はあまり気にしない質だ。

「ふむ、エビの味だな」

『さっきから何を食べているんですか？何か茶色いですけど』

「ん、これ？これは屋台で買った食用ゴ・・・」

『オエーッ！なんてもの食べてるんですか！』

「蝉の素揚げよりかマシだぞ？油の味がまるでエビ天――」

『ひー！聞いた私がバカでした！もうやめてー！私のＭＰはゼロよー！』

そんなに嫌なもんかね？まぁゲテモノ食いは意外と敬遠されるしな。
普通にイナゴのつくだ煮が食える人間を見て吃驚するのと似たようなモンだ。
それにしてもコレ、何と無く癖になる味だ。油ギッシュなところが何ともはや。

「あ～ん、あぐ、あぐ、ング・・・ヴィズ」
『はい・・・なんかつけられてますね』

さて、俺はなにか目立つような・・・って存在自体が目立つか。
活気がある露天商や屋台が立ち並ぶ大通りだったから油断してたぜ。
ともあれ俺は紙袋に手を突っこんだまま、さりげなく背後の様子をうかがう。
人ごみの中にさりげなく紛れこんだ異物のような男どもが見える。
人数は３人程度。
全員男性の中肉中背で筋肉質だが服に紛れて判り辛い。

（独特の身体の揺らし方・・・胸の変な膨らみ、拳銃所持の可能性高）

そして恐らくだが銃を所持している。銃で無くてもデバイスか何か。

魔力は感じられない辺り魔導師では無いと見えるから、銃の訓練を受けた人間か？

『（――スキャン完了。小型の金属を複数感知。どうします？）』

「（如何しますと言われてもな・・・街中だし）」

魔法を使うにしても、俺達の攻撃系魔法は目立つことこの上ない。

それに下手に騒ぎを起すと、折角手に入れた書類とかの件が管理局とかにばれる。

この書類が有効になるのに一日くらい時間掛かるって聞いたしな。

出来れば隠密裏に事を進めたいが、なんか嫌な予感しかしねぇ。

「（どっかに隠れてやり過ごそう）」

『（ですね・・・ＧＰＳだとこの先に幾つか路地に入れる横道があります）』

「（グッド、なら隠れよう）」

俺はさりげなくスッと路地裏に入り、すぐさま積まれたカメの物陰に隠れる。

ミラージュハイドを使っても良かったが、もし相手に魔法を探知できるヤツがいたら、この距離じゃ確実にばれるからな。

とりあえず魔法を使わないように小さな身体をちぢこませ、隙間から様子をうかがう。

中肉中背の男どもは路地に入ったところをチャンスと思ったのだろう。

手にはそれぞれどう考えても捕縛する気満々でしたという物を携えていた。

だが肝心の俺の姿を見つけられず右往左往して周囲を探している様だ。

殺しとかじゃなくて捕縛って事は何か様があったのか？それともタダの人さらい？

どちらにしても有効的な相手とは思えなかった。

「くそ！どこに行きやがった？」

「だめだ。こっちにゃいねえぞ！煙みたいに消えちまいやがった」

「チッガキが一人でいたからいい金になるかと思ったのにようー」

うん、頼んでもいないのに目的を暴露してくれた。

どうやら人さらいらしいな。管理世界でも治安が悪い所は悪い様だ。

だが残念だが俺とてそんなのに捕まりたくはないからな。

あわよくばこのまま無事にＤＤＳ－１が停泊している次元港へ辿りつきたい。

「（さて、どうやって逃げるべきか・・・）」

『（敵性と思われる反応、更に増加。いけませんね。仲間を呼んで

いる様です）』

思考に浸っている間に少し状況が進んだ。

最初3人だったのにすでに5～6人、携帯の様なもので連絡している辺りまだ増える。

不味いな、隠れた場所は積まれたカメの隙間なのだ。

このままではすぐさま見つかってしまうだろう。なんとかしなければ・・・。

≪――ジャリ≫

「（マズッ！？）」

と、その時、何と言う理不尽だろうか。

俺自体は動いていないのに、カメが風に揺られでもしたかこすれたような音を出した。

だが大通りからあまり離れていないとはいえ、それ程煩いという場所でも無い。

カメがこすりあう様なその音が、必死こいて俺を探している連中に届いてしまった。

『（今の音で気づかれました！数人がこっちに来ます！）』

音に気が付いた一人がカメの山へと近づいてくる。

覗きこまれれば見つかってしまうだろう。ああもう、面倒臭い。

こうなれば、多少の荒事も覚悟しなければならない。

相手の目的が何であれ、捕まってしまえばとても面倒なことになってしまう。

兎に角することはこの場からの離脱だ。

俺はその為にカメの隙間から近づく男の距離を測る。

男の距離が一歩一歩着実に近づいてくる。

その距離――――５ｍ。４ｍ。３、２――――

「ハァアアアアッ！！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

男がカメの山を覗きこんだその瞬間、俺は身体強化魔法で飛びあがる。

目指すは男の背後にある鉄製のはしご。そこを駆け上がり屋根伝いに逃げる。

――――その予定だったんだが・・・。

≪バキン≫

『「（あれ？なんか嫌な音）」』

しっかりとにぎった筈のはしごから響く鈍い金属が割れる音。

そしてコンマ一秒の静止の後に発生する浮遊感。

そう、その梯子は・・・錆びていた！

「っ！この程度っ」

だがこの程度の高さなら問題無い。俺は身を翻し地面とキスしない様着地する。

まだ唖然としている男どもを尻目にその場から駆けだそうとした。

「グギャっ！？」

だが、現実は非常である。先程飛び出した際、カメの山のバランス

を崩した。

そして俺が着地した途端、カメの山がまるでタイミングを見計らっていたかのように俺めがけて崩れ出したのである。

「いた！あた！ゴガっ！？ファック！うぎゃっ！」

崩れるカメはまるでなだれのように、小さな俺の身体の上に落ちて蹂躙する。

悪態の一つや二つ付きながらも手を伸ばして頭をまもる。

俺を追跡してきた男どもが唖然とする中、俺はカメの中から這い出し――――

≪――ヒュ～～～ン・・・がっちゃ～～んっ≫

「むきゅっ！？」

――――最後の大きいヤツが脳天にクリティカルヒッツ！

（・・・あ、やばい、かも）

打ち所が良かったのか、はたまた悪かったのか。

痛みに耐性を持つ筈の身体はテンプルにヒットしたカメの衝撃をダイレクトに脳みそに伝えて揺らし、俺の意識はそこで途絶えることになる。

閉じていく意識の中で最後に感じたのは、近づいてくる男たちの足音。

それと必死に呼びかけてくるヴィズの念話だけが、脳内に響いたのだった。

ああ、クソ・・・ヘマしたな。

「同郷の友？それとも御仲間？」（前書き）

※残酷な描写が入ることがありますので読む際には注意してください。

「同郷の友？それとも御仲間？」

「同郷の友？それとも御仲間？」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

――第３８管理世界次元港８番ベイ。

無重力にされた巨大な空間には様々な世界から来た次元航行船が係留されている。

どのフネも様々な形状をしているが、そのなかでもＤＤＳ－１は目立つ形状だった。

葉巻型の船体、凹凸が少ないのっぺりとした丸い形状。

潜水艦と似た形状をしているＤＤＳ－１は回りの次元航行艦と比べれば何処かが違う。

民間と軍用の違いもあってか、その異質さはより一層際立って見えた。

「いくらなんでも遅すぎます！」

そしてそのＤＤＳ－１のキャビンにて、一人の少女がそう声を張り上げていた。

彼女はリン、偶然により古代ベルカ式の流れを組んだ異質の生体デバイスである。

年齢は１８歳程に見えるが実年齢はまだ一年経っていないという幼女？である。

そんな彼女は今だ帰って来ない己の半身で主であるフェンのことを心配していた。

「連絡もないし・・・確かに心配だわ」

室内でも帽子を被り心配そうにしている女性はフェンの使い魔のリニスだ。

彼女もまた奇運な事情によりフェンの使い魔となった存在である。

彼女は一応フェンからの魔力を受けて活動している為、レイライン

を感じられる。

今の所レイラインは問題無く繋がっている為、死んではいない事は判っていた。

ともあれ、すでに戻ってくる筈の時間から4時間が経過している。

幾ら無事であることが判るとはいえ、心配なのは心配だった。

「あの子、好奇心が強いところがあるから、面白い物でも見つけたのかしら」

リニスは少し溜息を吐きながら、フェンという存在の性格を思い出してみる。

フェンという存在は冷静である半面、何処か面白いモノを見つけると子供っぽくなる。

睡眠も忘れて基地を数日で作り上げて、その後死んだ様に眠ったこともあるのだ。

研究馬鹿極まれりとはこの事である。

「主殿ならありえそうですね。でも約束の時間を破る様なことはしないですよ。はい」

「たしかに、食事だけはキチンと欠かさず出てきてたものね。フェ

ンくんは・・・」

何故飯だけキチンと出てくるか。

それは彼が御世話になっている家主様に頭が上がらないからである。

食事は皆でというのが八神家の暗黙のルールなのだ。

「それに連絡がつかないというのもおかしいです。念話や通信ならともかく次元間通信の受信すら出来ないなんて変です」

「そうね、あの子が此方からの通信を無視するということは先ずしないし・・・やっぱり何かあったと見るべきかしら？――とにかく、シランを捜索に出すわ。でもあまり大っぴらには動かせないから少し時間が掛ると思うけど」

「仕方ないです。でも兎に角急ぎましょうです。何か嫌な予感がするです。はい」

流石に表立ってシランを投入する事はまだ出来ない。

だがシランには光学迷彩等が実装されているので、姿を隠したまま活動出来る。

その為彼女らは積んできた量産型達を姿を消した状態で捜索に出すことにした。

密かに格納庫の戸を開き、姿を消したシラン達が次元港に降り立つ。
既に外は夕暮れとなり薄暗くなり始めているが、機械である彼らには関係ない。
次元港の監視カメラや隔壁をハッキングし外に出たシラン達はうすっらとした闇へと消えていった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

意識が覚醒した時、まず感じたのは硬くて冷たい何か。
普段の癖ですぐに意識を浮上させれば、灰色の何かが視界に入ってくる。
どうやら俺は剥き出しコンクリートにそのまま横たわっていたらしい。
カメの山が崩れた辺りまでは記憶している。
だがその後どうなったのかが判らない・・・が、大体予想は付く。

「――まったく、何がどうなってる」

「ふむ、捕まったということか・・・」

なるほど、あのカメの崩落で俺は気絶し、ここに連れ去られたということか。

頭がくらくらしていることから、脳天直撃で気絶した後に薬まで使われた様だ。

なんとも用心深いことだ。それに手が自由に動かせない・・・。

見れば俺の手首には分厚い鋼で出来た手錠が嵌められている。

何とも年代物のようで、歴史を感じさせる重厚な手錠だ。

だが、こんな何かの滲みが張りついた赤錆の手錠の歴史何ぞ知りたくも無い。

服も・・・何と言うか違う服に変えられている。勝手に着替えさせられた様だ。

当然、腕につけていた筈のヴィズの姿も見えない。見た目は腕環だから捕られたか？

デバイスだとバレてなければいいが、まぁアイツのことだし心配はいらんな。

分解してもコアさえ無事なら勝手に復活するし、何より頭が良い。

例え二束三文で売られても、非常用のシグナルを出すから場所の特定も出来る。

まぁ捕まってすぐの今は信号を出してはいないと思うけどな。

それに、あの特殊な機体が俺以外に扱える訳も無いし・・・。

「はぁ、しかしヘマをした・・・」

ああ、それにしてもこんなヘマをしてしまうとは・・・何と言うか慎重になり過ぎた。

こんな姿を母上やワイズ教官やソフィア教官に見られたらなんて言われる――

「・・・ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ――」

ホントすいません！ナイフ生身避け訓練千本とか反撃不可回避訓練は勘弁して！

母上も砲撃準備しないでください！もっと精進しますから～～～っ！！

本当に特別訓練だけは堪忍して～っ！後生やぁ～！川はみたくない～！！

ワイズ教官止めて――アンタは何一人ミラージュハイドで退避してんだ！

そんなさわやかな笑みでサムズアップして“ぐっどらっく”？
・・・泣いていいですか!?泣いてもいいですよね!?
え、男が泣いていいのは家族と別れた時と大事な人を失った時？
全部すでにクリアしてますよ?!――ってめんどくさいから俺も訓練つける!?
ナマ言ってスンませんでした!だからお願いです!ソレだけはやめて～!!
い、いや!そんなの!無理!大きすぎるよォォ!!神様ァァァ!!アババ!!!

「――おい!大丈夫か?!」

「へ、へへ、俺の亡骸は灰にして、エアーズロックからばら撒いてくれ・・・」

もう、どうなってもいいぜ。えへへ。

「エアーズロックとやらのことは知らぬ、だが恐らく環境破壊になるからやめておけ、遺灰は墓の下におくものだ。ばら撒くものでは無い。――まったく、他の子らは怖がっているというのに緊張感すらないとは・・・」

「う～ん、う～ん・・・あれ?ここは、というかあなたは?」

何やらトリップしてたら、誰かから話しかけられていた様だ。

というかいま気が付いたが、この部屋は俺だけでは無かったらしい。

・・・。

うおおおおおおおおおおッ!!!??恥ずかしい姿見られたァァァァァ!!!!!

「お、おい。本当に大丈夫か?」

「・・・お願い、さっきまでの自分の姿を忘れて・・・」

「わ、忘れて?もしかして膝を抱えたかと思えば急にブツブツとしてた行動をか?」

「お願い」

「お願いと言われてもすでに見てしまったのだが・・・」

それを聞いて俺はガクンと膝を突き、ズーンと頭を抱えた。

そりゃあれは不慮の事故だったし、気絶したのはしゃーないと言える。

だけど、あろう事か今は亡き師匠達の幻影にいじめられてトリップ

した姿を他人に見られるなんて、もう泣きそうだ。

心なしか目の前の見知らぬ少女からも、不審者を見るような目つきをされている様な気もする。

とにかくもう一度コンタクトを試みよう。

俺は落ち着く為に一度深呼吸をしてから、話しかけてきた少女の方へ向き直った。

「――失礼、ちょっと取り乱した」

「ちょっと？――まぁこのような状態では判らなくもないが・・・本当に大丈夫か？」

「肉体の健康だけが自慢なもので・・・っと、失礼。自分はフェンといいます」

「いやに唐突だな・・・だが名乗られたら名乗り返すのが礼儀か、私の名はアリスだ。どうやら君と同じく、奴らに捕まってしまったらしい」

白に近いブロンドの髪をショートヘアにした目の前の少女。

まぁ俺よか４歳ほど年上だが、はアリスと名乗った。

どうやら俺より少し先にここに連れて来られた魔導師の少女らしい。

先程、彼女が子らと言ったのは、俺以外にもこの部屋に子供が集められているからだ。

ちなみに彼女以外の子は殆どが俺と同じくらいの子供たちである。

先程から照明が明滅するこの部屋の片隅で脚を抱えた子供たちが見える。

嗚咽が聞こえてくる辺り、不安で不安でしょうがないと言った感じだろう。

大方俺を連れてこようとした連中により、睡眠薬か何かで眠らされて連れて来られた。

そして気が付けば見知らぬ剥き出しコンクリートの部屋の中。

幼い子供にその状況で泣くなという方が鬼畜だろう。

何せ、薄暗いこの部屋はいわば“商品”を閉じ込めておくための鳥かごだ。

もちろん、その商品とは俺達。愛玩用か臓器かは知らんが、少なくても碌な事にならんだろうよ。

「それにしても君は随分とその・・・冷静だ。先程取り乱したのはこの状況に怖がってという訳ではなさそうだし、君は一体？」

「そういうアリスさん？「アリスで良い。敬語もいらない」――了解、ならこっちもフェンでいい・・・アリス嬢こそ、この状況下で

冷静だ。先程、魔導師と言っていた辺りそういう訓練でも積んでいるのか？もしくは管理局か？」

それなりの魔力を感じることが出来ることから、魔導師であることは理解出来る。

また、見た目の割にはこの事態に非常に平常心を保っている目の前の少女アリス嬢。

思春期の少女がこんな異常事態で取り乱さない方が正直おかしい話だ。

となれば、目の前の少女はこういう事態に対する訓練を積んでいるということになる。

そして俺の問いは当たっていた様で――――

「その問いにはイエスとだけ答えておこう。私は管理局で嘱託をしている身だから、ある意味管理局の人間であろう」

「うん？管理局の嘱託魔導師が何故こんな場所に？」

――――本当に管理局・・・まぁ嘱託だが、管理局に関わりのある人間だった。

しかし、嘱託魔導師というと管理局で試験を受けて得られる協力者

の資格だったな。

なぜ目の前の少女がその資格を持ち、こんな場所に居るのか気になり訪ねてみた。

すると若干顔を引きつらせた彼女から陰鬱な雰囲気が少し漏れだした。

・・・な、なんぞ？

「あ～・・・まぁ嫌なら言わなくてもいいが」

「いや、よい・・・誘拐犯を追ってきたのに、まさか上から落ちてきた植木鉢が脳天に直撃して倒れて逆に捕まったと思うとな・・・はは、情けないものだ」

・・・何故だろう。今とても彼女に親近感が芽生えた。

「それは置いておいて、そういうフェンこそ随分と落ち着いているな」

「ま、自分は慣れてますから・・・はぁ」

随分とまぁ普通じゃない嫌なことに慣れたモンだな。思わずため息をついてしまう。

溜息を吐く俺の姿は随分と似合わなかったのか、アリス嬢は眉を顰めていた。

「こっちも溜息を吐きたいな。私とて今この場で魔法さえ使えていれば、すぐにでも脱出して管理局詰所に駆けこんでいる所なのだが・・・」

「魔法が使えない？」

彼女の言葉に反応した俺に、彼女は自分がかけられている手錠を掲げて見せた。

俺やその他の子供たちが掛けられているのと同じく、赤錆びた感じの古い手錠。

「ロストロギアでは無いが古典的な魔導封じの手錠らしい。術式でも込められているのか、魔法を使おうとすると術式発動の際に漏れ出る魔力を糧に手錠の術式が発動、脳を揺さぶられる。それでも無理に魔法を使おうとすれば此方には急激な眩暈が起こるというわけだ。魔法のまの字もあったモノでは無いぞ」

それはまた、何と言うことか。魔法が使えなきゃ魔導師もタダの人か。

もっともこの錆びた赤い手錠は周囲の泣いている子供たちにも付けられている。

魔導師を狙っていたという訳では無く、ここに来た子供には全て付けているようだ。

相手は魔導師かどうかを図る術が無い？それとも関係無くさらっているだけか？

希望は前者だが、後者の可能性を鑑みると迂闊に魔法は使えないか・・・。

だが、ここに居ては何時大変なことになるか判らないし――

「――フェン、おい、フェン！」

「・・・んあ？なにか用かアリス嬢？」

「まったく、ようやく返事を返したか。急に黙りこむから吃驚したぞ」

おっといけねぇ、思考の海にハマりこむ癖が出ちまったな。

何時もならヴィズがたしなめてくれるんだが・・・。

俺は普段よりも軽くなった手首をさする。

「コイツ、壊せないか」

「見た目よりもずっと頑丈だから止めておいた方が良い。それに戸の外には連中の仲間が交代で監視に付いているから、騒ぐと何をされるか判らないぞ」

そーなのかー。とりあえず何をするか決めるまでは静かにしていた方が無難だな。

それはさて置き、試しに俺も少しガチャガチャと手錠を動かしてみる。

だが赤錆がボロボロと剥がれるだけで壊れそうもない。意外と頑丈の様だ。

身体強化魔法を使えば壊せそうだが、それを封じる何かが施されているらしい。

だとしたら、アレをするのか・・・一応習ってはいたが、痛いんだろうなぁ。

まぁとりあえずここから出ないと何も出来そうもないな。

少しばかり現在の状況を確認してみよう。

手錠を掛けられて部屋に幽閉、お互いデバイスは無しの魔導師が２人。

そして庇護すべき民間人の子供たちがざっと見て１２～３人ほど。

敵の数は不明だが、今聞き耳を立てたら外には数は不明だが見張りがいる模様。

では、俺がやるべきことの優先順位は――？

民間人である子供たちの脱出が一番の優先事項。

次点でデバイスの回収、これが達成できたらアジト自体の殲滅も考慮。

ま、こんなところだろう。

とにかくフェイズ1、牢屋からの脱出の為に準備でもしますかね。

＊＊＊

Ｓｉｄｅアリス

普段私は嘱託魔導師として恩を受けた管理局の仕事を手伝っている。

なにせ次元漂流者だった私を手厚く看護してくれた人は管理局でもかなり偉い人。

あのお三方はたまたま休暇で旅行していただけだって言っていたけど、見ず知らずの私の怪我を治療して助けてくれた優しい方々だった。

もっとも最初の頃は自暴自棄であったし、お三方には迷惑を掛けてしまったわ。

まさか自分が居た世界が３０年近く前に消滅していたとは思わないもの。

まぁそんな訳で、なんとか持ち直した私は自分と同じ境遇の人間がいないかと思った。

世界が一つ崩壊する規模の事態だった訳だし、一人や二人くらいいるかもしれない。

もしかしたら集団で脱出くらいしていたかも知れないしね。

そんな訳で、私は恩を返すのと同じ境遇の人を探すこと自立する為の資金源稼ぎ。

この三つの目的を持って、私は管理局で嘱託をしているというわけなのだ。

一応、前いた世界で医療免許を取得していたし、戦闘力にはある理由で自信もあった。

まぁ勤め先もお三方の紹介で入れたため、私は彼らに頭が上がらないのだけど。

閑話休題。

とにかく私はこうやって恩返しがてら嘱託の仕事をしていた訳だけど。

今回、嘱託の仕事で誘拐犯を追っていた私は不覚にも捕まってしまった。

私が捕まった理由はとても単純。ちょっとした偶然と不幸な事故の所為だ。

あの時、私は一人で連続誘拐事件の捜査の為に街中を探索していた。

皆は誰かと一緒の方がいいのではと言っていたが、人手が足りないというのを知っていた私はそれを断り、一人で捜査を行っていた。

勿論このアンティルという町は治安がいい訳では無い。

辺境であり監視の目が緩いからかならず者が多い町なのだ。

なので手持ちのデバイスは何か起きればすぐに展開出来る様に気をつけていた。

だが、幾ら経験があろうとも咄嗟の事態というのは回避しづらい。

まさか犯人と思わしき人間を尾行していて、偶々倒してしまった棒が洗濯用に吊られた紐を引っ張って、その紐が弾ける様に外れたら、

偶々窓辺にあったビンを引っ掛けて飛ばして飛ばした先にあった植木鉢に命中して落下、そして落下先に私の脳天があるなんて判らないでしょう。ガシャンという音が聞こえた時に何故かピタゴラス〇ッチと聞こえた様な気がするけど、気のせいなのかしら？

とにかく尾行してたのに背後でそんなことすれば凄い音を立ててしまう訳で。

当然気絶している私に気が付いたその男はちょうど良いとばかりに私を捕まえたという訳だ。

なんとも不甲斐ない話であり、正直今はもういない師匠にばれたら何されるか・・・。

ああ、また私の給与カードでスィーツを食べてしまうのですね。

しかも私の目の前で私には一口もくれないで・・・。

――太れと念じたらナイフが！ゴメンナサイ！ゴメンナサイ！

さて、そういった経緯で捕まってしまった私は牢屋へと入れられてしまう。

といってもその時の記憶はない。放り込まれた時はまだ気絶していたからだ。

そしてあの少年がこの独房に放り込まれたのは、私がこの独房で目を覚ました時だった。

「テメェらのお仲間だ。精々仲良くしてやりな。ぎゃははははッ」

私が追っていた誘拐犯は生理的な嫌悪感を催す笑いを浮かべながらそういった。

ドアが開けられた時、一瞬そこから駆け抜けたい衝動に駆られたが、相手の手に握られたモノを見て止めた。

実弾兵器、質量兵器、もしくは銃とも呼称されるオートマチック式の拳銃。

黒くて表面がざらざらなそれは、キチンと手入れが行き届いてはいない。

整備の仕方なんて知らずに購入してそのまま素人が使い続けたと言った感じかしら。

とにかく、魔導師とはいえデバイス無しで相手するのはキツイ相手だった。

第一、　今デバイスがあってもこの手錠をなんとかしなければ魔法が使えない。

その考えに至った私は固く閉ざされる扉を眺めていることしかできなかった。

すこしして放り込まれた少年が目を覚ました。

ぼうっとした感じで此方には気が付いておらず、また唐突に頭を抱えて転げ回った。

その事に驚いて大丈夫なのかと思わず声を掛けた。

意識が戻るまで変なことを呟いていたが、そのことは少年の名誉の為に黙っておく。

とりあえず、少年は意識を取り戻すと先程の混乱具合からは想像も出来ないほど落ち着いた。

自分から自己紹介をしてきたほどである。ちなみに少年の名前はフェンというらしい。

自分よりも小さく幼い容姿をしているあたり、まだ１０歳にも手は届いていないのではないかと思ったが、どうにも良く解らない。

捕まったというのに、不安で泣く訳でも無く放心する訳でも無い。

それどころか冷静に、至極自然体で私に話しかけ、今の状況を聞こうとする不自然さ。

そのあまりにも異質な感じに、彼の年齢が実際どのくらいなのか私

には判らなかった。

少なくても見た目通りの年齢ではなさそうだと感じたのは間違いではないと思うわ。

すこし普通でないことは理解出来たが、それでも唯一取り乱していない貴重な存在だ。

私はとにかくこの場所を脱出してなんとかここに居るこの子らを助けたい。

話はしていないとはいえ、見捨ててしまうというのも目覚めが悪いし出来ない。

だって、私はそう作られたから・・・。

「コイツ、壊せないか？」

ふと見ると、フェンと名乗った少年は手錠を壁に打ち付けていた。

赤さびてはいるが手錠は酷く頑丈で子供の力では壊すことは出来ない。

それを彼に伝えると、またフェンは黙り込んだ。

ただそれは諦めたのでは無く、どうすべきか考え込んでいる様に見える。

この冷静さ、もしかしたらフェンも魔導師なのかもしれない。
そう考え声を掛けようとしたその時だった。

「あー、アリス嬢」

「アリスで良いと言った。・・・なんだ？」

「ちょいと、向う側向いててくれないかね？」

一体何をしようというのだろうか。不審に思いながらも私は視界を逸らす。

「・・・すーっ・・・ハァー」

どうやら深呼吸をしているみたい。

でもそれが一体なんなのかしらと思ったその刹那――

「ふんっ！」

≪コキャ≫

乾いた木の枝を折った時の様な軽い音が、暗く子供の嗚咽しか聞こえない牢に響く。

静かだった為その音は際立って私の耳に届いていた。

驚いて私は音がした方・・・つまりフェンの方を向く。

そこで目にしたのは――

「アイツツ・・・これだけは訓練して無かったから痛いもんだな・・・」

変な方向に曲がった手首を片方の手で支える、手錠が片方外れたフェンの姿だった。

一体何故、目の前の少年は何をした?驚きのあまり私は肩まってしまう。

だがその間にも、彼はそのままおもむろに自身の手を掴むと――

「セイッ！」

≪コキャ≫

――自力で手首の骨を嵌め直していた・・・若干顔をしかめなが

ら。

・・・とりあえず目の前にいる存在が通常の子供では無いことを再認識したわ。

「さてと手錠は外したし脱出しよう・・・ああ、アリス嬢」

「な、なんだ」

同じ方法でもう片方の手錠を外したフェンに声を掛けられた時、思わず声が震えた。

何せ今の私には目の前の存在は非常に異質なものとして写っている。

自分自身、あまり正常な存在とはいえないのは自覚している。

それでも8歳児の見た目で泣くこともせず己の骨を外したり嵌めたりする存在は、今目の前にいる存在以外いないと思いたい。いや、本当に。

一方のフェンは私のその反応には全く動じず話を続けていた。

「アリス嬢、これからちょっと脱出の為の策を使うんだが・・・子供らを頼むよ」

何を言っているのか理解できない。

いや、理解する暇を与えられることなく、私は混乱したまま固まっていた。

そして彼の言葉を混乱する脳がなんとか理解した時――

「う・・ウグ――――ゴパァッ！！」

――――紅い鮮血が、灰色のコンクリートに、華を咲かせていた。

そのあまりにスプラッタな光景、そしてそれまでの理解不能な行動。

常人であったなら、死んでしまうのではないかという生々しい吐血。

それら全ての要素が絡み合い、只でさえ困惑していた私の精神を凍らせる。

だが同時に自分がすべきことはなんなのかをすぐさま理解している冷静な自分もいた。

周囲の同じく捕まっていた子供たちが異常を感じて大泣きを始める。

剥き出しコンクリートの部屋の中で響く子供たちの泣き声の大合唱。

その中で、私は一人冷静にこの牢獄の唯一の出入り口の前に立っていた。

「開けろッ！大変だ！開けろぉぉぉっ！！」

力の限り、咽から声を張り上げる。

流石にこの異常に気が付いたのか、固く閉ざされた戸の向うで動く音がした。

「うるせぇぞっガキども！！殺されてぇのかッ！！」

「そんなのよりも一人が病気で血を吐いた！伝染病かも知れない！早く出してくれ！」

「なにを・・・なにぃ！？」

見張りの男が戸に付いた覗き窓から牢獄の中を見て素っ頓狂な声を出す。

それもそうだ。入口付近で一人の子供の回りに紅い水たまりが広がっている。

幾らなんでも異常。死んでもいいとは言っていたが此方には商品としての価値がある。

となれば、見張り役の奴がすることは大抵決まっている。

何なのかを確認する為に戸をあけて入るか、仲間を呼びに行くかだ。

もしも連中が魔導師の見極め方を知っており、私が魔導師であると知っていたら、見張りはすぐに仲間を呼びに行っただろう。

言わば、これはある種の賭けだった。そして、私たちはその賭けに――――

「くそう！病気持ちだなんて聞いてねぇぞ！そこどいてろ！」

≪ガチャガチャ――――ガコンっ≫

――――賭けに、勝った。見張りの男は重たい戸を開け、中へと入ってくる。

私は戸が開く瞬間に飛びの居ていた。無遠慮に開け放たれた戸にぶつからない為だ。

飛びかかりたいと思ったが、私の両手は拘束されたままだし、相手は銃を所持したままだった。

だが、私が躊躇したその刹那。

血溜まりにあった影が跳ね起き男の懐に一足で入りこむのを見た。

「なっ！？ぐぎぃぃぃぃぃっ？！」

そしてその影は一直線に加速したまま――――男の股間を掴んで握りつぶしていた。

見張りの男は悲痛な叫びを上げ、股間を抑えながらその場に膝立ちとなる。

痛みで動きを止めた男の中心線に沿った目と目の間を思いっきり殴りつけていた。

腰の入った“威力がある”殴り方は明らかに熟練者のそれ。

小さな身体からは想像もできない程の打突を受けた男は意識を刈り取られていた。

時間にして男が部屋に貼ってから2秒ほどのことであり、周りは・・・。

いや私ですら訓練をしていなければなにをしたのか理解できない程の早業だった。

そしてその影、先程まで血だまりを造っていたフェンと名乗る少年は――――

「――シっ！」

――まだ動きを止めていなかった。

今度は少しだけ開いた戸の隙間に身体を滑り込ませ外へと飛び出した。

気が付けば私はそれを追いかけ、戸の隙間から顔だけ出していた。

そこで見たのは銃を構えた男の腕に張り付いているフェンの姿だった。

先程の見張りは一人では無くどうやら複数だったらしい。

戸に近い位置に居たフェンは入ってきた男の背後にもう一人いることに気が付き飛びかかったのだ。

そしてフェンはなんと男が手に持っていたリボルバーをその手に掴んでいた。

その光景は出来の悪いヒーローコミックでも読んでいるかの様だ。

男は「何で撃てない！」と恐怖と困惑が入り混じった顔をしている。

当たり前だ、何せリボルバーのハンマーが当たる部分にフェンの指が入り込んでいるのだ。

その状態では幾ら引き金を引いても、銃から弾は発射されない。

そしてフェンは男がその事に気付く前に容赦なく男の腕をへし折っ

た。

手首、肘があり得ない方向に曲がってグニャグニャしている。

男が痛みから叫び声をあげる前に、今度は男の身体を駆け上がり口に手を突っ込んでいた。

叫ぼうにも口を塞がれては叫べないだろう。そしてフェンはそのまま首に手を回した。

その時、私は彼が今から何をするのかを理解し――――

「殺すなっ！！」

「――――ッ」

咄嗟にそう叫んで、彼の動きを止めた。

彼は男の首を折るつもりだったのだ。なんの躊躇も無く。それが必要なことだから。

私が止めなければ、彼はこの場で障害となる存在を葬るつもりでいたということ。

彼は私の言葉で一瞬固まったが、今度はすぐに男の首に抱きつく形を取る。

「カッ――ケヒュッ――――クヒュ――――ヒュ――――」

男の口からは苦しそうな声が上がるが、彼は力を緩めることはしない。

そしてモノの十数秒で、絞められた男は意識を失いそのまま倒れたのだった。

「――制圧完了。第二段階・・・」

冷たく、とても冷たい声で目の前の存在がそう呟くのが聞える。

久しく感じていなかった生命のやり取りの空気を感じた私の思考もクリアとなる。

だから、どうしても聞いてみたくなった。

「君は、お前は一体何だ？」

私が言ったどうとでも取れる問いかけは文字通り色んな意味を込めていた。

何者なのかというのもあったし、人間なのかという意味まで含んでいる。

それをすべて理解しているのだろうか。
目の前の存在はうっすらと唇を歪めながら、こう答えた。

「ただの、元軍人の、ドミトーリ社の人間です」

何かするとは感じてはいた・・・がしかし、まさかこれ程までとは・・・。

この時私は彼のことを警戒するとともに、少なくても敵ではない事に安堵した。

得体は知れないが、何処となく、同郷の匂いを感じ取れたから。

その匂いは幾ら身体を洗ってもとれない、取ることが出来ない。

滲み付いたカビのように饐えた・・・私と同じ鉄と血の匂いだった。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

「同郷の友？それとも御仲間？」（後書き）

新キャラ登場。

アイディアを下さった幻想の庭師さん、リトラさんやその他の皆さんには厚くお礼を申し上げます。

「道中は暗いがオラ負けない」

「道中は暗いがオラ負けない」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

見張りの無効化は終わった。次は脱出する為のルートを探さねばならない。

いずれにせよ気絶させられてこの建物・・・つーか廃墟だな。

廃墟に連れて来られたので、何処から出れば良いか判らないからだ。

コレが俺一人だけなら、良かったんだが――

「・・・お、やっぱり持ってたな。手錠のカギ」

「ありがたい、早く外してくれ」

「外したら他の子たちも頼む」

「任されよう」

――残念ながら、俺一人じゃないんだよな。おまけにヴィズもいないし。

単独での敵地からの離脱はそれほど難しいモノでは無い。

なまじ、ぶっちゃければ、自分の命にさえ気を配っていれば破壊活動しようが逃げだそうが自由だからだ。

だが護衛対象――この場合捕まっていた子供たち――がいるとなると話は変わる。

自分の命だけでなくこの子たちの命にまで気を配らなければならないからだ。

幸いなのは今の所相手に魔導師の存在を確認していない事だろう。

銃火器は兎も角、魔導師が出てきたらデバイス無しではキツイのだ。

如何したものかとも思ったが、置いて行く訳にもいくまい。

ここにおいておいても連中につかまるだけだからだ。

かと言って連れて行くとなるとそれはそれで大変だ。

まったくもって面倒臭い、だが仕方なかろうと腹をくくる。

不用意に捕まっちまった俺が悪いんだから、今更文句はいわねぇさ。

とりあえず倒れている男の一人が持っていたナイフを拝借させてもらう。

魔法の攻撃手段もあるが・・・武器があるのと無いとでは安心感が違う。

昔取った杵柄というか、何と言うか、こう言った刃物の扱いは得意なのだ。

刃渡り２０ｃｍ近いナイフを軽くふるってみる。

久々に使う感触だが、どうやらあまり腕は墜ちてはいないらしい。

まぁ若干グリップ回りのおさまりが悪いが、そこら辺は錬金で調整することにした。

デバイス無しで錬金を仕様する為、集中に入ろうとしたその時、それまで周りの子供たちの手錠を外して回っていたアリス嬢が此方へとやってきた。

その手には連中から押収した銃を持っている。

「フェン、この銃は置いていくのか？」

「いらん、慣れてない武器を使うほど怖いもの知らずじゃない」

銃というのはああ見えて非常にデリケートな武器だ。

弾を装填し、敵に向けて構え、腕をしっかり保持し、狙いをつけて撃つ。

だが撃つ時の手のブレで近距離でも弾を外しやすいのが銃なのだ。

こと、使い慣れて無い場合はその傾向が顕著になる。

初めて触った銃で人間に当てるなんてのは映画での話。

訓練を積んでいても何度か試射しないと、銃なんてデリケートなモンを使いたいとは思わない。

その点、ナイフや刃物は意外とすぐに使いこなせる。

動作も取り出して構えて切るという工程を踏むが、基本動作の延長線なのではやい。

玄人なら取り出しながら切るだから、工程はほぼワンアクションだ。

遮蔽物の無い平野なら兎も角、室内における刃物は舐めてはいけない。

そう言う訳で、俺は訓練も積んだ事があるナイフを選ぶのである。

格闘術とも組み合わせやすい上、何よりも音が出ないからだ。

魔力で身体強化を行う身としては、こと室内戦においてナイフ以外

は使いたく無い。

俺はアルアッソーという銃型の兵装デバイスを扱えるが、あれは反動がほぼ無いからなぁ。

そう言う意味じゃ銃を扱えるという訳じゃないし、ナイフの方がいいぜ、やっぱり。

「なら、コレは私が預かっておくことにしよう」

そう言って彼女は誘拐犯共から外した銃をホルスターごと身につける。

「つかえるのか？」

「・・・昔取った杵柄で・・・」

「・・・？」

何故だろう、なんか随分と哀愁を漂わせてるな。

つーか、質量兵器を禁じている管理局とかかわりがあるのに銃の扱いに心得があるとは珍しい。

確かに手元の動きは何度か実銃に触ったことがあるのだろうか安定している。

下手すれば扱いは俺よりも上なんじゃないだろうか。

俺にしてみれば魔力弾単発なら自力でも生成出来るのであまり必要が無い。

まぁ下手に放置して他の子供のおもちゃにされても困る。

アリス嬢は一応この中では一番の年長だし、魔導師だけに早熟だから安心だろう。

いきなりぶっ放すとかそう言う事はしない・・・筈。

そう思いたかったのだが――

「・・・で、何故俺に銃を向けているのかな？」

「なに、ちょっと聞きたいことがあるから――」

――カチャという音と共に、俺は銃を突きつけられていた。

まぁ、確かに魔法陣を造らない分察知しにくいが・・・何だかなぁ。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

「動くな。既に撃鉄は上げて引き金を引けば良いから変な真似はしないように」

「――――フゥ、で、何を聞きたいので？」

アリスがいきなり銃を突きつけたので、流石に驚くフェンは両手を上げた。

だが、いきなりのことで困惑こそすれ、一応敵意はないらしい。

なので彼は素直に両手を上げて応じることにした。

むしろ下手に反抗して銃が発射される方が厄介だと考えたからだ。

それは銃声が響いて誘拐犯の仲間が集まってくる的な意味でもある。

流石に銃声が聞こえれば誘拐犯も何事かと身構えてしまうだろう。

そうなれば、警戒が強まって脱出する事が非常に難しくなってしまう。

そう考えれば、今の所は従った方がいいという考えに辿りつくのは道理だった。

ちなみに周囲の子供たちは黙って事の成り行きを見守っている。

まぁこの状況下で口を出せるほど早熟した子がいるとは思えないので仕方ない。

「――なにを黙っている」

「いや、スマン。真面目に聞こう」

そう言って居住まいを正すフェン。

正味、距離が近い為やろうと思えば目の前で銃を突きつける少女の指を切り落とせる。

だがそれをこの場でやるのは少々憚られた。回りの子供たちには刺激が強すぎる。

もっともフェンは彼女が自分に対して銃を向けてはいるが、今の所撃つ気はないと確信していた。

敵意も無ければ悪意も無い。

精々威圧感が少しだが、警戒している所を見れば妥当なレベルだ。

そう言う訳で彼は銃口を向けられているとは思えない程リラックスしていた。

もっともアリスの側からすれば、銃を突きつけられて平然としてる

少年を前に。

やはり普通では無いという事を思い溜息を吐いていた。

「はぁ――幾つか質問に応えてもらう。ハイかイイエで答えろ。いいな？」

「仰せのままに」

フェンは恭しく相返事を返した。

何だか馬鹿にされている様にも感じられたがアリスは眉を顰めるだけにとどめた。

目の前の存在の見た目に騙されてはいけない。

彼は魔導師でも委縮する銃を持った相手を軽くいなした実力の持ち主。

警戒を解く訳にはいかなかった。

「まず一つ目、お前は魔導師か？」

「肯定、こう見えて5年程度、鍛錬を積んでいる。戦闘訓練も受けた」

フェンの回答になるほどと思う反面、やはり解せんという部分をアリスは感じた。

先の戦闘を見れば相当な実力者なのは素人から見たとしても明らかだ。

だが、それ以上に目の前のフェンという存在は人を倒すことに忌避がない。

実力を持って障害を排除するというのは自分のスタンスに近い物がある。

だが、その精神のあり方と実力があまりにも見た目からかけ離れている。

一瞬使い魔か何かとも思ったが、使い魔の元となった生物の欠片を彼からは見いだせなかった。

考えてもコレは解りそうもないので、アリスは次の質問へと移った。

「そうか・・・次の質問だ。お前は戦闘訓練を積んでいるのは判った。では何故捕まった?」

「・・・カメの山に潰されて気が付きゃここだ」

フェンはありのままに自分の身に起きた事を説明した。

あのカメの山の崩落で押しつぶされて気絶したところまで全てだ。

何と無く自分の場合と似ていた為、アリスは同情の眼を向けたのは余談である。

「では最後の質問だ。――――お前は敵か？」

そしてアリスは今この場ではもっとも聞きたかったであろう質問をフェンにぶつけた。

本当に味方なのか、敵の敵が味方などという甘い考えは彼女は持っていないのだ。

少なくてもコレだけははっきりさせたい、そう思い態々貴重な時間を割いてまで彼に銃を向けて尋問しているのである。

そしてその問いに対してのフェンの回答は――――

「否定。もっともアリス嬢が敵対するなら定かでは無い」

「・・・・・・」

「信用たらんのなら撃てばいい。少なくても脅威は一つ減る。だがその代わりたった一人でここに居る子供たちを守れるかな」

「おまえなら出来ると？」

「出来るじゃない。やるんだ。民間人を守り助ける。それが兵士の

定命よ」

そう言うと部屋の中を静寂が支配する。周囲の子供たちの息以外聞こえない。

だが少ししてカチャと金属が動く音が部屋の中に響いた。

「信用しよう」

「良いのか？」

思わずフェンは銃を降ろした彼女に問うていた。

一応フェンは銃で撃たれても痛みを感じる程度で死にはしない。

それでも銃を向けられワクワクするような戦闘狂気質は持ち合わせていないのだ。

その為、これだけの問答で銃を降ろしたアリスに驚いたからである。

「どうせ、一人では無理だ。それはそっちも同じであろう？」

「お前らを見捨てればそうでも無いが」

「なら安心だ。制圧できるのにしない上に損な言葉を吐くヤツは信用できる」

「・・・気付いていたのか」

「あたりまえだ。この距離なら刃物の方が早い事くらい私にだってわかる」

「そうか、なら良い・・・だがッ！」

気が付くと、アリスは天井を見つめていた。

それは比喩では無く、何時の間にか懐に飛び込んできたフェンが押し倒したのだ。

反射的に銃を向けそうになるが、手に持っていた筈の銃は既に手元には無い。

ガシャコという音と共に、アリスに馬乗りしているフェンが弾倉を引き抜いていた。

彼女は慌て、フェンを跳ね飛ばそうと身をよぎろうとしたが止めた。

そのの元には何時抜いたのかナイフが突きつけられていたから。

そしてフェンから感じる威圧感が、過去に教官から受けたそれと似通っていたから。

だからだろう。彼女は動くことが出来なかった。

「次から同じことは通用しない。コレ以上脱出の邪魔をするなら」

そこで一度言葉を切り、フェンはとても小さく静かで、それでいて脳幹にまで届く様な威圧感を乗せた声で――

「――障害は排除させてもらう。いいな」

――静かに怒りをにじませつつ、そうアリスに言い放った。

別に彼はアリスに対して起こった訳では無い。

だが態々時間を潰した事に怒りを感じていたのだ。

コレは警告。もし彼女が聡明では無く同じ様な事をするというなら・・・。

それは先程言った言葉の、文字通りのことを行うという警告だった。

アリスはフェンの剣幕に対し、ああ解ったとだけ返して解放される。

やや先行き不安ではあるが、即席の脱出チームがここに組まれたのだった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

ああ、怖かった。いきなり人に銃を突きつけるなんてどんな教育受けてんでしょうね。

まぁ俺もナイフ突き付けて警告したから御相子か・・・似たモン同士だぜ。

とにかく、俺を先頭にして殿にアリス嬢を立て、子供らを連れて牢屋から離脱する。

どんなに杜撰な組織であっても見張りの交代くらいするだろう。

ここに居てはすぐに見つかってしまうのだから、兎に角移動しなければならない。

まずは牢屋の部屋のドアから少しだけ顔を出して周囲を窺う。

小さく足元だけ補助ライトが付いて照らされており、音などは聞こえない。

「・・・いくぞ」

意を決して扉を開け放ち、柱の影へと滑りこむ。

そこから少しずつ等間隔で置いてある柱を利用して移動する。

まぁ簡単に言えば俺がスカウトの役をしているって訳だ。

ああ、ヴィズさえいれば対人レーダーやスキャンが使えるというのになぁ。

まぁいないヤツのことを考えても仕方ないから、今は出来る事をしよう。

それ程広い空間ではないので、薄暗い通路の先に上へと続く階段を見つけた。

一応気配を探るが、まだ誰も来てはいないようだ。

「・・・（大丈夫だ。誰もいない）」

「（判った。子供らを連れて其方へ行く）」

念話を使えば、音を立てずに連絡を取り合える。

これぞ魔導師の特権ってな。脳内に通信機埋め込んでる様なモンだ。

さて、幸いここは廃墟といっても元はホテルか何かの後の様だ。

その一部を誘拐犯達が使っているようで、微妙に整備されているあたりアジトだろう。

んで、窓から逃げられんかなぁって思ったんだが、ちょっと泣きそうだ。

「（・・・アリス嬢）」

「（なんだ？）」

「（この廃墟のこと、なんか知ってるか？）」

「（いや、知らないが・・・何か問題でもあるのか？）」

「（そと見てみな。逃げるに逃げられん）」

板打ち付けられた窓見つけて外覗いてみたら、周りを水で囲まれてますこの建物。

反対側もおんなじような感じで、４０ｍくらい先に岸部が見える。

どうやらこの廃墟、小さな小島の様な所に造られた場所の様だ。

見晴らしこそ最高の眺めであるが、ここから出るには橋を使うしかないらしい。

魔法が使える俺は兎も角として、他の子らは飛べないのだ。

アリス嬢が飛行出来るか判らないので、子供らを逃がすには橋を使うしかない。

コレはまた、ミッションの難易度が上がった。泣きそうだ。

「（・・・見張りが少なかったのはそう言う事か）」

「（あそこが牢屋だと思ってたが、この廃墟自体が牢獄か・・・考えてるねぇ）」

「（・・・呑気だな）」

「（呑気か・・・いや、まぁ慣れだな、こういうのは）」

「（慣れる、ものか？）」

さぁ？でも実際この程度じゃ驚かねぇぜ。

問題は岸から４０ｍほど離れていることだろう。

間に水があるとはいえ、子供が泳ぎ切れるとは思えん

飛んでピストン輸送したくても、俺はヴィズが無いと飛ぶのはからっきしだしなぁ。

「（・・・なんとかしてデバイスを探し出さないと不味いな）」

「（それよりも移動しないと危険だ。移動しろ）」

はいはい、ちゃんと先方を行きますよー。オイちゃんスカウトマンしますよー。

まぁソレはさて置き、廃墟故か所々崩れて動きづらい事。

遮蔽物や部屋も多くて逃げ回るのには苦労しないのはいいけどな。

しかし、夜の廃墟というのは何と言ういかにもな迫力というのを感じるな。

まぁうちの地下基地にいるような連中はいないみたいだから、普通に潰れた廃墟か。

出たら出たで対応に困るから、今のところ助かってるけどな。

しかし、そういった存在の扱いを知っているのは俺だけだ。

要するに他の子にとって、ここは非常に暗くて怖い場所なんだよな。

「・・・くらい、こわい」

さて牢屋から離れて移動していると、連れている子らの一人がそう零したのを聞いた。

普通に考えれば一般的な感性を持つ人間なら薄暗い建物には恐怖感を抱く。

小さな子供ならなおさらのことだろう。だがここで問題なのはそれではない。

一人が恐怖を感じ、声を漏らせば、それは周囲の子に伝染してしまう事だ。

「・・・ふぇ、ぇ～ん――」

そう、つまりすすり泣く声が増えたという事。

まだ大声で泣き叫ぶ子はいないが、この分だと時間の問題だ。

そして子供の泣き声はとてもよく響く、本来が親に危機を知らせるものだからだ。

それ故、敵対者、この場合は誘拐犯の耳にも届いてしまう可能性が高い。

その結果は正直Ｂａｄである。なまじコレだけの子供がいればなおさらだ。

如何したもんかと思い、泣きだしそうな子供らを先導していると――

（ん？ここは――）

ふと目に付いたのは、元リネン室だった部屋だ。流石はホテルだな。
見れば中には野ざらしのシーツやら何やらがまだ放置されている。
それを見た俺はペカーンと有る考えが浮かんで、その部屋に入って枕を手に取った。

「（おい、時間が無いのになにを――）」

（・・・・錬金）

そしてアリス嬢の念話を無視して錬金発動。
若干魔力の光が出るがリネン室の戸を閉めてあるので光は漏れない。
補助デバイスのヘルメスはヴィズの格納領域の中だから、補助なしでの錬金発動だ。
ミッド風にエミュレートした錬金は複数の魔法陣が交差し合う複雑な術式。
円柱交差式魔法陣を形成するが、一瞬だけの展開と光の所為で良くは見えない。
だが光が収まれば、そこにあったのは――

「・・・ふぅ、完成。ほらここにあるヤツ、好きなのを持ってきな」

熊に馬にネコに犬に豚にライオンに鳥に、他にもさまざまな動物を模した。

デフォルメしたキャラが可愛らしいぬいぐるみの山であった。

なに、リネン室に残されていた布や枕を使えばそれほど難しいモノでは無い。

怖い時にはぬいぐるみとか、何か抱きしめるものがあると落ち着くもんだ。

走る時に邪魔にならない様にリュックサックとしても浸かるのは御愛嬌。

「「「わぁ～！」」」

「シー！小さな声で頼むぜ。まだ安全じゃないからな」

今まで怖がっていた子供たちの顔から恐怖が薄れ歓喜の顔が浮かぶ。

これで少しは泣いたりするのをやめてくれることだろう。

って何気にのろいウサギ人気高ぇな。もう無いんかい。

「意外だな」

「あん、何が？」

子供たちの様子を見ていたアリスがそうぼそりと漏らす。

独り言の様なそれに、俺は律儀に返していた。

「いや、その・・・何でも無い」

「・・・別に俺は冷血漢じゃない。子供が笑顔でいられるなら、それに越したことはない」

「・・・そうだな・・・ところでさっきのは魔法か？」

「企業秘密でお願いします」

「そう言えば自称ドミトーリ社の人間だったか」

「自称は止めて、ホントだけどなんかいたたまれねぇ」

「――そろそろ移動しよう」

スルーかよ。でも警戒は相変わらずだが、少しは緩めてくれたらしい。

さて、気を引き締めて行かねばなるまいて、出来ればこのまま出な

いでほしいな。

俺、帰ったら美味しいご飯食べて御風呂に入るんだ。

んで動物たちをモフって癒されて、一緒にのんびりしてやるんだ。

＊＊＊

Ｓｉｄｅアリス

薄暗い廃墟の中をフェンを先頭にしながら子供らを引き連れて歩く。

最初こそやはりその見た目以上の実力から警戒してしまったが、この状況下では実に心強いといえた。

とはいえ、私は首にナイフを突きつけられた身なので警戒は解けなかったが。

それにしても目的の為なら容赦しないヤツかと思っていたけど子供には甘いわね。

もっとも、それを見て少し安堵している自分もいる。

目の前の存在は冷徹で感情が無い機械という訳では無い。

その心の内にはちゃんと他者を思いやれる優しさがちゃんとある事が判ったからだ。

子供たちが不安で泣きそうになっていたのを見た彼はすぐさま魔法でぬいぐるみを取り出した。

まったく、何処にしまってあったのやら、案外可愛い趣味があると見える。

※アリスはフェンが人形を持ってきたのを魔法で隠し持っていたと勘違いしています。

・・・だからソレだけに怖い。彼は優しいのに躊躇なく人を壊せるのだから。

自分も言えた義理では無いが、それはとても怖くて悲しくて寒い。

そう思い子供らに囲まれている彼を盗み見た。

あの誘拐犯二人を無力化した時とは打って変わって穏やかな感じを受ける。

アレだけの戦闘を見せられたのに、子供らが怯えないのは本能的に理解しているからかもしれない。

でも子供らを見るその眼は、何処か寂しそうだった。

その眼はまるで、今はもういなくなってしまった誰かを見ているようで。

でも、そのことには既に折り合いを付けているという感じで。

会いたいけど、もう会えないという事が判る様で・・・。

私と同じ、誰かを何度も失っているのだと、自然と理解出来てしまった。

だけど、私は――――それを見てもやはり得体のしれなさが際立って見えてしまう。

・・・ダメね。まだ私は彼に対して警戒を解くことが出来ないわ。

とにかく今は子供らがはぐれない様に歩いていると――――

「（それで良いと思うぞ）」

「（・・・！！いきなり念話なんて、というか心まで読めるのか）」

「（いや、何と無くだ。そんな眉間にしわを寄せてれば嫌でも判る）」

まるで心の内を呼んだかの様なシレっとした念話が飛んできた。

そして思わず眉間にしわが寄っていないか手で確かめてしまう。

しかしソレでは自分がそう思っていたという証拠ではないかと思いハッとした。

見れば先頭を行く彼はプルプルと小さく肩を揺らしている。

「（・・・騙したな）」

「（いやいや、カマ掛けたら中々面白いモノを見せてもらえた。重畳）」

「（あとで覚えてろよ）」

「（おお、こわいこわい）」

くっ、顔は見えないけどにやにやされている様な気がする。

なんとなく気恥ずかしくなった私は話題を変えようと話を振った。

「（で、何処に向かっているんだ）」

「（・・・出来れば子供たちを安全な場所に隠しておきたい。それとデバイスの奪還だろうな。アレが無いと長距離通信も使えやしない）」

確かにデバイスの補助なしで長距離通信を使うのは難しい。

残念なことにフェンも私も通信はデバイスに依存していた。

お陰で実質的な通信の範囲は良くて数キロ、悪くて数百mしかない。

そしてこの廃病院周辺は廃墟が立ち並びおまけにアンティルから離れている。

お陰で通信で救援を呼べなかった。

「（問題はどこにデバイスがあるか、だ。アレは頭が良いから、デバイスだと気付かれない様に自閉モードにしている可能性が高い。そうなると呼びかけても返事が来ない）」

まさにお手上げだと、彼は両手を軽く上げて見せた。

デバイスで頭が良いとは変な表現だが、恐らく彼のデバイスはＡＩを積んでいる。

インテリジェントデバイスかそれに類するたぐいの代物なのだろう。

書く言う私のデバイスは管理局からの借り物のストレージデバイスだ。

自前のは今も持ってはいるが、戦闘に特化した仕様なので他の機能がほぼ無い。

それにアレは、人前でホイホイ見せられる代物でも無いのよね。

専用オプションデバイスもあったが、次元に流された時に紛失してしまっている。

お陰で今の私は戦闘力だけの特殊な魔導師でしかないわけなのだ。

つくづく何でも出来る目の前の少年が羨ましく思えてくるわ。

「（・・・なんだかアリス嬢の視線を感じるんだが、何かトラブルか？）」

「（いや、何でも無い。それより――）」

とりあえず私が隠れる場所を探そうと提案しようとしたその刹那――。

「いたぞーっ！！逃げだしたガキどもだっ！！西館５階の連絡橋にいやがる！」

「「！！」」

――見つかった。

見れば隣の連絡橋に懐中電灯と無線を手に持った男が、凄まじい形相で此方を睨んでいた。

どう見ても誘拐犯の人間だ。

「そこで待ってろガキどもが！全員バラして売っちゃるからなぁっ！！」

連絡橋の割れた窓から、反対側の男の怒声が此方にまでビリビリと響いてくる。

そして男の声はタダでさえ怖がっていた子供たちを怯えさせた。

何人かがついに泣きだしてしまい、動かなくなってしまう。

「見つかった！思ってたより早かった！」

「どうする！逃げるにしても――」

「ここでジッとしてもいられんだろうが！」

フェンはそう怒鳴り返すと魔力弾と腕に砲身の環状魔法陣すぐさま形成。

そしてそれを反対側の連絡橋で今だどなっている男に向けて発射した。

信じられなかった。放たれた魔力弾は私の眼を持ってしても見えな

かったのだ。

だが今はそんな事を考えている場合では無い。

「走るぞ！」

「判った！」

泣きだした数人をフェンと私で分散して抱き上げて、私たちはこの場から駆けだした。

走れる子供たちは自分で走るが、子供たちの泣き声が暗い廃墟に木霊する。

だが走り出したと言っても、その移動速度は決して早くはなかったわ。

私たちが守るべき子供たちの年齢を考えれば仕方が無いこととはいえ、このままでは。

「止まっても撃つぞー！」≪ダーン！≫

「ッ！考えさせる時間もくれないかっ！」

何時の間にか私たちの後から誘拐犯が迫って来ていた。

しかし、止まっても撃つぞとはどういう事だ？ソレでは止まりようが無いじゃない。

「ほら全員急げ急げＧＯＧＯＧＯＧＯＧＯッ！！」

「までゃごりゃ！っころしゃよっ！」

「何ていってるのか判らんぞ阿呆共！追いかけてくるなっ！」

私は抱きかかえた子供たちを一人は右手に一人は肩車に移動させる。

その間に自力で術式を構築し、空いた手に幾つかの魔力弾を形成させた。

形成した魔力弾を集中させて圧縮、巨大な魔力が籠った魔力弾へ変える。

「フランジブル・ビュレットッ！」

そしてそれを腕だけ後ろに突き出し、追いかけてくる男が来る方向へと発射した。

ややゆっくりと動く魔力弾は真っ直ぐと飛び、駆けてくる敵の方を――

「あだるがゴラァ！なめとんかい！」

――――かすめる様にして外れる。

「なめてるのは――そっちだ！」

外れた魔力弾はそのまま誘導により天井へとブチ当たり炸裂し轟音を響かせる。

その衝撃でひび割れが酷かった天井にさらにひび割れが広がりを見せ。

≪ズドドドドーーーンッ！！！！！！≫

何かを押しつぶす様な音と共に、天井ごと廊下が崩壊していく。

廃墟故天井を落とせばなんとか道は塞げると思ったが、予想以上だった。

だがそれを振り返って確認する余裕は、その時の私には無かった。

「アリス嬢！グッキル！」

「あたりまえだ！」

前を行くフェンは子供を抱えたまま器用に親指を立ててきた。

私もそれに応え、その後も何度かひび割れへと魔力弾を撃ち込んでワザと崩落させた。

連中が西館と言っていたさらに向うに連絡橋で繋がる棟へと転がりこむ。

なんとか滑り込むようにして部屋に入り、周囲のもので簡易的なバリケードを構築。

そこでなんとか一息つくことが出来た。

全速で逃げたので子供たちの体力は限界だ。コレ以上の無茶は出来ない。

長く無くてもここで多少の休息を取らなければならない。

「・・・しばらく休もう」

「・・・了解だ、アリス嬢」

最も途中の道や階段の幾つかはワザと魔力弾で崩落させたので時間は稼げたと思う。

少なくても、連中が梯子でも持って来て橋でも駆けない限り、此方

へは来られない。

とにかく休息を取らねばならないが、私たちが黙ったので子供らがまた泣き始める。

なんとも・・・それが耳元についてはなれない。やっぱり子供は苦手よ。

ああ、それにしても、また一人この手にかけてしまった。

先程最初の崩落を起した時、がれきが崩れる時に一人追いかけてきた男がいた。

魔力を感じない事からアレはタダの人間だろう。

という事は、あの時崩落させた時に逃げられたとは思えない。

今頃は冷たいコンクリートの真下で、冷たい躯と化していることだろう。

はぁ・・・もうコレ以上、人を手にかけないと決めていたんだけどなぁ・・・。

人生って、本当にままならないわ。

「アリス嬢、あまり気にはするな。それは後で幾らでも出来るのだから」

「・・・判っている」

「それと、俺を警戒しているだろうが先に休息を取ってくれ。こっちは見張りに付く」

「・・・了解」

正直、子供たちの泣き声が煩いと感じられないくらい疲れていた。

デバイスの補助なしの魔法行使、多数の子供たちを抱えての全力疾走。

どれも普段はやらない様な事ばかり、鍛えておいて正解だった。

フェンが入口近くの壁に寄りかかるのを見て、私は彼とは反対側。

部屋の窓辺付近に腰かけて目を閉じた。

完全には眠らない、だってここは敵地なのだから。

身体は弛緩させるが、意識は半分だけ残して浅く眠る。

何が起きても、すぐに起きられる様に・・・・。

「道中は暗いがオラ負けない」（後書き）

※多分次くらいでコレ終わるかも、でも予定は未定。

「アラモの砦ってか？前編」

「アラモの砦ってか？前編」

――――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――――

Ｓｉｄｅ三人称

「う～ん、う～ん、連絡がこないです。はい」

「・・・だめね、やっぱり直接自分たちで向かった方がいいのかしら」

次元港８番ベイ、次元航行船が係留されている港。
フェンの所有するフネであるＤＤＳ－１の通信室では二人の女性が頭を悩ませていた。

「捜索に出しているシラン達をもっと増やせないですか？」

「無理ね。コレ以上は流石に管理局が気付く可能性があるわ」

「うう～、でも～」

「我慢なさい。仮にシランを使っていることがばれたらその事情を説明しなきゃならなくなるのよ?そしてその責任はフェン君に行く事になる。私はあの子と困らせるつもりはないの」

リニスはそう言って、今にも飛び出しそうなリンを見つめた。
すでにベイエリア付近の住宅地、商店街等は捜索を終えている。
しかし、確かにフェンらしき少年の足取りは掴めたモノの、その後どこに行ってしまったのかが全く分からなかった。

コレはフェンが裏町に入って、そこに身の危険を感じてミラージュハイドを使ってしまった所為であった。つまり目撃者が端的にいうと非常に少ないのである。

「でも気になる情報があったわね」

「誘拐集団のことですか?ここに駐屯している管理局が追っているっていう」

それは探索に出した量産型シランの一機が送ってきた情報だった。
現在フェンを捜索する為に光学迷彩を施したシランは各所に散らばっている。
そしてその中には管理局の詰め所も含まれていたのだ。

ここ交易都市アンティルは辺境とはいえ犯罪が横行している。
その為、本局とアクセスできる最低限のデータ端末は置いてあった

のである。
そしてシランはとりあえずその端末をハッキングしたのだ。

勿論、ハッキングしたログが残らないようにだ。
それくらいシランには朝飯前である。
そしてそこで様々な市井の情報やら犯罪組織の情報を掻きつめたのである。

しかし予想したようなフェンと特徴が一致する少年の情報はまったくなかった。
お門違いであるが管理局使えないなぁと彼女らが思ったのは秘密である。
それはさて置き、入手した情報の中に一つ何と無く関係ありそうなのがあった。

「“誘拐窃盗団。過去の類似する犯罪等から十五年ほど前から活動していると推察される。現在は交易都市アンティルを中心に、各地で誘拐した未成年者の売買を行っている。正確な規模は不明、しかし大規模次元犯罪組織の傘下であると思われる。魔導師が組みしているという情報もある”・・・まさかとは思うけど――」

「確かに主殿がそんな連中に捕まるとも思えませんですハイ・・・」

「「・・・」」

そう、その筈・・・あの規格外で変に老成している彼がそんなミスをする訳無い。
でもよく何かしら厄介な事態に巻き込まれる不幸体質なご主人だ。

絶対にそうでは無いと言いきれないのが悲しいところであろう。

「・・・一応、シランに指示出しておく？」

「それっぽいヤツを見つけたら尾行させるんですね？わかります」

「シランには転送座標のポインターになってもらうわ。そうすればもしフェン君に何かあってもすぐに跳べる」

「幾つかのシラン達を換装してくるように指示を出すですね。はい」

とりあえず、さっきは止めた増援を出すことにした。
捜索範囲は街中を止めてアンティル郊外やその近辺に限定する。
それはこの日はまだ次元航行船がベイから発着していない。
その為、フェンがもし誘拐されていたとしても、この世界の外に出た可能性が低いからである。

次元世界間転送を行うという手もあるが、それを行えるのはそれなりに高レベルの魔導師に限られる為、その可能性も低い。絶対と言いきれないところが悲しいが、犯罪組織なら一々単体で誘拐するよりも、一か所にまとめて捕まえておき、後のち一気に運ぶ方が効率がいいだろう。

そうなるとアンティル市以外であり得るのは、郊外に点在している建物等だ。
リンとリニスはとりあえず郊外へと光学迷彩のシラン達を向かわせた。
それに街中では無く郊外なら管理局に察知され辛いので増援を送る

ことが出来る。

そんな訳で、またＤＤＳ－１の格納庫から光学迷彩をした機体が発進する。

早く見つかってほしい、とても心配なのだから。

彼女たちは祈る様な気分でシラン達の報告を待つのだった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅアリス

――ＦＦＲＣ－４３、スケジュールを消化せよ。

――・・・了解。

半分眠っている意識の中で、私はとても懐かしいモノを見た。

それは夢とも言えるし、夢とも言えないただの断片的記憶の再生。

強いていうなら、かつての私の記憶である。

――・・・ネオスヒドロゾンの投与量を・・・副作用・・・痛覚の消失。

――ＦＦＲＣ－１０　系列・・・個体暴走・・・破棄され・・・

計画は続行・・・。

――学習装置・・・リミッター・・・脳が破裂する・・・廃棄・・・。

――・・・優良因子・・・女性体・・・リンカーコアの安定・・・。

――・・・ラーダーのＤＮＡは化け物・・・男はそうでも・・・突然変異。

――・・・生死の狭間・・・遺伝子の優良因子発芽・・・を残せる・・・。

――残ったＦＦＲＣ・・・因子改良の為・・・戦わせ・・・生き残りを培養。

――データ収集・・・生き残り十体を実戦投入・・・全員死亡。

――・・・ＦＦＲＣ－４０から・・・後続個体・・・フィードバック・・・。

――ＦＦＲＣ－４３・・・希少技能開花・・・その他の廃棄が決定・・・。

――・・・研究対象・・・ＦＦＲＣ－４３に限定・・・培養・・・。

コマ送りの映画を見せられているかのように記憶が再生される。

この記憶の奔流は私に埋め込まれたある特殊処理の副作用。
脳神経系への無機物の接続はその負担から様々な脳の領域を圧迫する。

それ故に失うと自我を保てなくなる記憶は補助記憶領域への移行が行われる。
そしてこの記憶の羅列は、その際の副作用であり、私が私である為の大事な時間。
そのほとんどは掠れたような断片的なモノが多いが、時には高解像度の記憶も流れる。

――ＦＲＣ－４３、目の前の標的を壊せ――

――・・・了解。攻撃目標を受領。標的は――

――合成人、識別名キュクロプス・・・消します――

これは最初の訓練、人型のたんぱく質の塊を分解した時の記憶。
この時の私にはそれに対する何の感情も持ち合わせてはいない。
だって生れたばかりで何も知らなかった。それで感情を表せと言う方が無理よ。

そして無知は罪であり、また救いでもある。

後に、それが廃棄された姉妹や実験体で造られたことを知った。

さて戦いとは相手を倒す。倒すとは殺すこと、もしくは再起不能にすること。
そう教えこまれていた私たちは、スケジュールに従いそういった人型の何かを壊した。
時には同じくクローンで生み出された姉妹同士での戦闘訓練もあった。

しかもそれは生死問わずであり、全力でやらないと飯抜きである。
食事を抜かれるのは薬品で無理矢理成長を促進していた私たちには死に等しい。

だから死に物狂いで戦闘訓練を行った。同じ顔を持つ姉妹たちを傷つけた。
気が付けばそれは、完全な生死のやり取りになっていた。

幾ら理性は拒絶しても、肉体は命令を拒絶してくれない。
そして皮肉なことに、殺し合いを経験するたびに、自身の能力が研ぎ澄まされた。
生死のやり取りが、生命を奪い会う行為が、私の命を繋げた。

まるで吸血鬼、他者の命を糧にする死神、後にそう思ったのは黒歴史。
本当に、まるで三文芝居・・・脚本家が悪いと揶揄されそうな話し。
だが、その三文芝居にもならないクソッたれなことを私は経験した。

それから少し時間が経過した。
今度の記憶は５３名の姉妹たちと並んで立っている記憶。
研究者らしき男と顔合わせであった。

――すばらしい。実にすばらしい。魔力との親和性がこれ程高いとは――

――私の個体として使ってやりたいところだが、生憎女性体に興味はない――

――例え休戦中でも人の欲は変わらない。よりいい物を望む――

――そしてＦＦＲＣシリーズこそ、人機一体、生体兵器の集大成！――

その男は、他の姉妹が洗脳やロボトミー処置を受け紛争に実験配備される直前。
唯一レアスキルを開花した個体という事で、研究所に連れて行かれる前に出会った。
名前は教えられなかった、知る必要が無いからと言われた。

その男の第一印象は、耳の後ろに銀色のプレートを付けた奇妙な男。

それが最初に合った時の感想、そしてその次に感じたのは――

――しかし、ダメだ・・・もっと強くしなくてはならないだろう――

――・・・かの『小さき英雄』に匹敵させるには、まだ能力不足だ――

――だがこれ以上の素体改造は不可能、だが問題無い――
――S型を使う。これでまた人機の垣根を突破できる――
――人の命を何とも思わない狂った研究者。

彼は私たちにS型デバイスを埋め込み、そして去っていった。
もともとの研究者ではなく、非合法の取引で来ていただけだったらしい。
そしてS型を埋め込まれた53人の内、私以外には10人しか残らなかった。

それ以外はすべてS型の送りこむ情報量に耐えきれず狂死した。
感覚器の情報を増やし、神経系の高速化を行うそれは10歳児相当の肉体で耐えられることは稀だったのだ。

だがあるいは、それは幸せなことだったのかもしれない。
だって生き残った11人では10名が紛争に送られてデータ取りをさせられたのだ。
そして希少技能持ちの私以外の10名は、全て紛争中に処分されたのだから。

この時に私は自身の至るべき存在、そして連中が目標としていた存在をしる。
『小さき英雄』僅か数カ月で敵国の軍人の中でも異様な戦果をあげた存在。
その名の通り、僅か年齢一ケタで戦争に参加した奇異の魔導師。

休戦後もＰＫＯとして活躍、そしてテロリストの大規模テロを未然に防いだ英雄。

そう、英雄――――自らの命を他者の為に使った英雄。
それが私たちが望まれた姿。生まれた理由。造られ調整された原因。
だが彼という存在に対し、私たちは憎悪を抱かなかった、むしろ感謝した。

だって彼がいたからこそ私たちは存在を許されたのだから。
苦しくても苦しみを知らず、悲しくても悲しみを知らない私たち。
そんな私たちが唯一持っていたのは、強力な生への執着心だったのだから。
それに、彼は腹違い？の兄でもあるのだから・・・。

そして自我が芽生え、覚えている限りの時間では一年が経過した頃。

――――ＦＲＣ－４３、異常事態が起きた。実験スケジュールは一時停止――――

――――・・・了解――――

私以外の他１０名が紛争地で全員証拠隠滅で処分されたのと同時刻。
埋め込まれた私専用Ｓ型デバイスの調整を終え、いざ実験という日。
その日、研究所はＵＳＮ特殊部隊ストライクワイヴァーンズからの強襲を受けた。
遠くで響く爆音、慌しく動く研究所の人間たちを、私はタダ茫然とみていた。

自我があると言ってもこの時は人間らしさは殆どなくなっていた。
それゆえ、命令が来ない時は自然と待機するという風にマニュアルに従ったのである。
なぜ研究所が休戦状態とはいえ敵国であるＵＳＮの強襲を受けたのか。

それはＯＣＵの国家直属研究施設ではあったが、表向きは非合法の研究所扱いであり、研究所自体は第三国に存在していたからだったらしい。
そこを突かれ、研究施設はストライクワイヴァーンズに攻撃を受けたのである。

来るのは警備システムも駐在していた魔導兵士も全く歯が立たない相手。
４０ｃｍの厚さがある対魔導処理が施された隔壁をぶち破って進むバケモノ。

――・・・ほう、噂には聞いていたが、既に完成していたか――
――ＦＲＣ－４３！研究所に侵入した敵がそこに来る！排除しろ！――
――・・・了解・・・――
その姿は、ローブを纏った修道女の様でいて・・・。
――・・・標的を確認、排除を行います――

――そして敵対すると・・・悪いが私は――

そして、背中の魔導端末で出来た翼が鳥の様で・・・。

――最愛の子を失って今だ傷心の身だ・・・敵対者に手加減はせん――

――・・・行きます――

三日月の刃が付いた槍状の魔杖を此方に向けた。
私の遺伝子提供者、エリス・ラーダーその人だった。

さて結果だけを言うと、私はその人に勝てなかった。
いや、勝つも何も勝負にすらならなかった。

――・・・フランジブル・ビュレット――

――・・・ふん、威力、精度、どれをとっても高レベル・・・だが――

――ギッ！――

超長距離の攻撃が主体な私の魔法を一目で見切っていた。
トラップも光学迷彩魔法と魔力隠蔽による奇襲も通用しない。

最後に泣けなしに放った魔力弾すらも魔導端末の翼が勝手に防御してあたらない。
そして気が付けば私は頭部を掴み上げられていた。これで如何勝てとという話だ。

――経験が浅い、悪いが無力化させてもらうよ――

そう言うが早いか、彼女は私を放り投げ術式を展開して此方へと向ける。
本能的に私は身体強化を用いてその場から高く飛びあがっていた。
そしてそれを見たエリス・ラーダーは一瞬驚くがすぐに無表情へと戻る。

その次の瞬間、ガシャンという排夾音が響いた。
カートリッジシステム独特の急激な魔力の変動。
それを術式に回し、魔法陣が寄り強力に発光する。

――豪ッ！！――

そしてその直後、私の足を巻き込んで巨大な砲撃魔法が放たれる。
その威力は私が幾ら暴れても壊れなかった研究所の訓練室を簡単に破壊した。
次元が違い過ぎると考える暇も無く、焼け焦げた脚を見ながら私は研究所が崩壊するのを見ていた。

焼かれたお陰で出血多量でショック死にはならなかったのだ。
だた血が出ていないという訳ではないので、圧迫止血をし続けないと死んでしまう。
戦闘不能状態では命令があるまで待機、私はそのマニュアルに従っていた。

施設が崩壊していく、私にあれこれ実験を施してきた研究者たちが全員拘束される。
愚かにも頑強な抵抗をした研究者たちもいたが、もとより戦闘は専門外だ。
リーダーと思われる人間を残して、全て魔法で消滅させられていた。

だけど、それを見ても別にどうとも思わなかった。
奴らは人間じゃないのだ。人を簡単に壊せるモンスターだ。
その手段が実験か、直接戦闘かの違いだけ、そして私もモンスター。

血が足りなくなり、その時の私はそんな事をつらつらと考えて座っていた。
何せ両脚が膝の上まで完全に吹き飛んだので歩くことが出来ないのだ。
空を飛ぶ魔法もこの時はまだ覚えてはいなかった。

実験は全て研究所内だったから、まだ必要が無いとされていたからね。
お陰で逃げることも何もできず、ただ破壊された施設で座っているだけ。
もっとも命令が無ければ何もできない木偶でしかない私が動けたかは別問題だけど。

――・・・ほう、やはりまだ生きていたか。連中の生体兵器は優秀だ――

気が付けば、あの人は・・・ラプターは私のすぐ目の前に立っていた。

戦闘を行ったのに、彼女のＢＪには掠り傷どころか埃すら付いていない。

ああ、やっぱり別次元だ。英雄の母は、やっぱり英雄なのね。

――如何して欲しい？――

――・・・如何とは？――

――如何して欲しいか、選べ。生きたいのなら手を貸そう。死にたいのなら研究所崩落に巻き込まれた事故死という事にしておいてやる――

――・・・慈悲のつもり？――

――そうよ。これはタダの偽善なの・・・さぁ選びなさい――

そして選択を問われた。だがここで私の記憶が揺らいでいく。

何故ならこの時点でかなりの血を流していた私は意識が朦朧とし始めていた。

だからだろう、あんな事を言っていたのは・・・。

――・・・一つ・・・一つだけ――

――なんだ？――

――・・・小さき英雄に、私の・・・私たちの兄に会いたい――

――小さき英雄が兄？・・・まさか――

――私たちは・・・貴女のクローン・・・――

それは絶対に実現し得ないこと。
私の兄である小さき英雄と呼ばれた存在は少し前にＭＩＡとなっていた。
常に戦場では顔を隠していた為、素顔だって知らない。

それでも、生れてから僅かな時間しか生きていなかったとしても、一度はあって話しをしたかったのだ。
そして言いたかった。どんな形であれ生れさせてくれてありがとうと言いたかった。

――・・・兄にあってみた、い――

ここで意識が途切れたのか記憶は暗転する。
同時に今回のＳ型による記憶補完処理が終わったらしく、続きは再生されなかった。
ちなみにこの後の記憶はどういう訳かベッドに寝かされて病院に居

た記憶だ。

そしてなんだかんだで、私はあの人たちと家族となった。
人としての何かを教えてくれた母様と父様には感謝してもしきれない。
たった1年だったけど、家族という絆はあまり時間は関係無いのかもね。

記憶の再生も終わり、再び浅い眠りに入ると思ったのにまた意識が覚醒する。
今度は人の気配を感じ、私の半分表に残してある意識が覚醒したのだ。

「――――・・・・・ん――――」

浅く揺らいでいた眠りから急激に意識を現地に引き戻す。
現状が現状だから深く眠る訳にはいかないとはいえ、あまり気分は良くない。
だが人の気配を感じたので動かない訳にはいかない。
私は膝に突っ伏していた頭を上げ気配を感じた方を見る。

「・・・・・」

「おはよう、お姉ちゃん。はい、おみじゅ――お水」

人の気配の先には目の前には男の子が一人いた。
見ればコップの様なものに水をいれて差し出してくれている。
どうやら飲めということらしい、私は戸惑いながらもコップを受け取った。

「あ、ああ。・・・ありがとう」

「ん」

目の前の男の子はそれを見てから他の子供たちの元へと戻っていく。
どうやら眠っている子と何人かは起きているらしい。

何処から調達したのかは知らないが、毛布に包まれて寝息を立てていた。
子供の気配を感じて起きるとは、やはり多少気が立っているのだろう。
まぁ久々に非殺傷では無い戦闘だった訳だし、しょうが無いわね。

「――――・・ん」

私はあの子が持って来てくれた水をそのまま飲みほしていた。
水と言うよりかは少し沸かして冷ました白湯のような感じだった。
浅いとはいえ眠った後なので咽が乾いていたのよね。

そう言った意味じゃ、飲み物を飲むだけでも十分――

（・・・あれ？なんで飲み水があるの？）

ふと飲んでから疑問に思った。
私たちが今いる場所は廃棄された施設。つまりは廃墟なのだ。
電気は最低限しか通っていないし、上下水道だって動いているかどうか・・・。
なら、先程飲んだ水は何処から？

「――目が覚めたかアリス嬢」

「フェン・・・状況は？」

先程の水のことを考えていたらフェンが此方にやってきた。
少しとはいえ眠っていたのだし、その間何かあったかを聞いてみることにした。

「別になにも。状況は相変わらず籠城状態だ。連中はしかけてくる様子もない」

「どういう事だ？普通なら追いかけてくる筈だろう？」

「・・・多分だがこの廃墟にいる人間の数が少ないからかもしれな

い」

「仲間を待っていると？」

「もしくはこっちが干上がるのを待っているのかもな。可能性は低いが」

数が少ないなら撃って出たいところだが、生憎敵の位置が全く分からない。

ああ、この世界で軍事衛星とのデータリンクとＨＱの支援でもあればなぁ。

敵の数と位置さえ特定出来れば、子供たちに近づかせない様に殲滅出来たのに。

無い物ねだりはしょうがないとしても、せめて私のデバイスがそう言う機能があればよかったのに・・・。

基本的に野外での戦闘向けなのよね。私って。

「はぁ、どちらにしても現状じゃ全て後手になるのか」

「最悪廃墟に火をつければ、その煙で誰かが気が付くかもしれないがお勧めでは無いしな」

「・・・過激だなフェン」

「そうか？」

そうだと肯定すると、そーなのかーと彼は頷いた。
そこだけ見れば年齢通りの可愛らしい子供である。
あ、そう言えば・・・。

「ところでさっき水を貰ったんだが、何処で調達したんだ?」

「ここの屋上に雨水の貯水タンクがあったから、この階だけ水道が通っているらしい。まぁちょいとそのままじゃ飲めなかったから、魔法でちょいちょいっとな」

「随分と便利魔法を知っているんだな。どれだけサバイバルなんだ」

なるほど、水を用意したのはコイツだったのか。
どうやら私が眠っている間に色々としていたのだそうだ。
階下の通路や階段を完全に塞いだり、食べ物はないが子供たちに水分を補給させたりしていたらしい。

しかも浅く眠っている私に気が付かれないように無音でこっそりと作業したらしい。
まったく、これで何度目か判らないけど恐れ入るわ。
幾ら眠っていたとはいえ、少しでも変な音がすれば起きた筈なのに・・・。

「しかし仲間を呼んで待っているのだとしたらかなり厄介だ」

「たしかになぁ・・・」

私たちは二人して溜息を吐いた。
非戦闘員を見捨てられないとはいえ、なんとも歯痒い気分だ。
思わずガラスの無い窓の方を見やる。

狙撃を警戒してあまり近づけないのだが、それでも良い景色が見えた。
そう言えばこの世界にはアンティルのそばに海のように広大な湖があると聞いた。
恐らく窓辺から見えるこの景色がそうなんだろう。

綺麗な満月の光を反射する水面、風によって聞こえるさざ波、遠くに見える数機のヘリと貨物船。

・・・・ん？

「・・・まさか」

「お、おい、アリス嬢？」

私はフェンを退かし、目を皿のようにして窓の外を凝視する。
すると間違いない。此方に向かっている2機のヘリが見えた。
見ればゆっくりとだが貨物船と思われるフネも此方へと向かって来ている。

「・・・チッ、増援を呼んでいるというのが正しかったらしいな」

「・・・そうか、ところでアリス嬢」

「なんだ？」

「いい加減離して」

え？と思いフェンの方を向くと、フェンをそのまま抱きしめる形となっていた。
どうやら退けたは退けたが抱き寄せる形だったらしい。
・・・意外と収まりが良いのはなぜだろう？

「アリス嬢？」

「もうすぐヘリと貨物船が到着する。戦う準備をしておいた方が賢明だ」

「見えるのか？ここからだと暗くて見えないが・・・」

フェンはちょっと怪訝な顔でそう言った。
確かに満月とはいえ時間は夜だ。普通の目ならこの距離ではヘリは解らない。
だが、私には見えている。私には何でも見通せる目があるからだ。
希少技能“千里眼”遠くが良く見えるレアスキル。

「スキル持ちだ。それに音も聞こえてきただろ？」

「・・・了解した。準備しよう。ところで何で俺の頭を撫でるんだ？」

ハッ、おさまりが良い序でに何時の間にかフェンを撫でまわしていた。

子供特有の柔らかな髪質を無意識の内に堪能していた様だ。

「・・・何？その“フェン・・・恐ろしい子”的な目線」

「気にするな、フェン。――それよりも」

誤魔化し笑いをしながら、私はスイッチを切り変える。

それを感じたのかジト眼であったのが、鋭い目に切り変わる。

それを見ればやはり彼も何かしらの訓練を受けている事が良くわかった。

「フェン、私はヘリの相手をする為に屋上に出る。下は任せた」

「おいおい、生身でヘリの相手は――」

「これでも遠距離型魔導師だ。今ならまだ遠距離から仕留められるからな。フェンは砲撃や長距離系は？」

「・・・使えなくはないが、デバイスが無いと辛い」

「なら、決まりだ。私は上、君は下だ」

「・・・アイマム」

お互いに役割を確認すると、私たちは銃とナイフを取り窓から降りようとする。

「おっと、忘れていた」

「如何した？急がないと――」

「待ってくれアリス嬢。ちょっとこの子たちを、な」

フェンはそういうと、眠っている子供たちの元に起きている子供たちを集める。
そして比較的元気が残っている子供らを前に、彼は口を開いた。

「今から悪モンをブッ倒しに行って来る。んでだ。お前さんらが俺らが不在の時のリーダーをやってくれないか？」

何を悠長なと一瞬思った。
監禁されていた子供がそのようなことを言われても動揺するだけだろう。
第一、自身と同じような年齢の子にそのような事を言われても――

「判った！僕たちが皆をまもるっ！」

「勢いは良いが、周りの奴らが起きてしまう。静かにな？男は寡黙こそカッコいい」

「・・・！！（こくこく）」

――――・・・何時の間に手なずけたんだ？オイ。

「それじゃ、一応安全の為に結界を敷くから、寝ている子の所に集まれ」

驚いて黙って見ている内に、気が付けば子供たちを一カ所に集めたフェン。

そしてタンッと脚を踏みならすと、子供たちを中心に魔法陣が浮かび上がる。

それは確か封時結界の魔法陣であった。半径が２，５ｍあるかないかの小さな結界。

だが、確かにそれを使えば、外から破られない限り中から外の様子は判らなくなる。

それは同時に、彼らを必要以上に怖がらせなくても良いという事につながる事に気が付いた。

「――結界、展開」

――ヴォン。

結界が作動し、子供たちは結界内部に残された。
しかしこれでは――

「・・・これで、勝つしかないということか・・・」

「そう言う事だアリス嬢。これは俺達にとっての背水の陣」

「ハイスイの陣？なんだそれは？」

「・・・要するに後が無いから死に物狂いで頑張れという事だ」

「ああ、なるほど」

――なんとも、地味にハードルを上げてくれる。

封時結界を解くには魔導師の力が必要だ。
そして現在、誘拐犯達が結界を解除できる魔導師を雇えるのかは不明である。
となれば、私たちは絶対に生き残り、彼らを守り閉じ込める結界を解除しなければならない。

これでは絶対に生き残るしかないじゃないのよ。

「行こう。楽しいパーティーの時間だ」

「鉛玉がＢＧＭのパーティーは願い下げなんだがな」

「慣れれば楽しいぞアリス嬢。それでは“また”」

「ああ、“また”なフェン」

こうしてフェンは窓から飛び降りて着地して闇にまぎれて消えた。
恐らくフェンは海岸近くの岩場に潜むのだろう。
そして私は私で窓から外に出て屋上に上った。
まだ非常に遠くだが、ヘリ特有のパタパタというローター音が夜空に響いている。

通常の視界では――――ヘリはとても遠かった。

こんな夜では相当近づくか、はたまた夜戦に特化した魔導師か。
それともデバイスか後方からのデータ支援を受けないと戦えないわね。
・・・とりあえず周りには誰もいないのだし、切り札を問題無く使えるわ。

「・・・起きなさい“ブルータルウルフ”」

私はその名を呼んだ。私に首に埋め込まれし忌まわしき機械。
そして今では私の相棒である普段は眠るS型デバイス。

［おはようございます。戦闘行動を開始します］

――その途端首の後ろから魔力光が煌めき、私の視界に空間モニターが現れた。

私の視界が一気にクリアとなり、S型の神経系への介入、薬物投与が始まる。
そして目を開ければ、遠くに止まって見えるヘリが視界に写っていた。

「グラシリウスを稼働状態に――イグニッション」

［グラシリウス、レディ］

そしてブルータルウルフが稼働した事で、私の両足が振動し命を得る。
ナノマシンによるカモフラージュ・スキンが振動と共に崩れ去り、中から黒い艶のある合金で出来た義足が現れた。
そう、私の足は母様に撃たれた後遺症で再生できなかった。

でもこれはそんな私に父様がくれたプレゼント。
そして、この世界に流されて来てからの切り札である。

「PJ（パワージャケット）展開」

［レディ］

私の声に首の後ろのデバイスが反応。
グラシリウスと連動して防護強化外骨格を展開する。
PJは兄様が残したデバイスのデータを元に、父様が試験的に作り上げた新しいデバイスの形、その雛型。

BJの動きと連動しパワーアシストを行う両手にはめ込む大型マニピュレーターを蛇腹状特殊合金製の背骨で繋ぎ、その中心に魔導師が配置され、マスター・スレーヴ方式とS型により、ほぼ術者とシンクロした動きを可能とした。

本来ならこのPJに見合ったサイズの大型狙撃魔導砲を持っていたのだけど、流された際に消失してしまっている。だが非常時の今は無い物ねだりは出来ない。

「狙撃体勢に移行、マニュアルによる素体狙撃、術式はエクスプローダー」

［マニュアルによる狙撃体勢に移行、脚部固定、アンカーパイル・ロック］

腕を動かすとパワーアシストとスレーヴでマニピュレーターも稼動する。
右マニピュレーターを掲げると、そこに砲身となる環状魔法陣が展開された。
脚部から魔導の杭を打ち込んで固定してあるので、後は目を凝らして狙撃すればいい。

魔導砲が無いのだから本当は固定しなくてもいいが、それ込みの狙撃体勢としてプログラムされているので仕方が無い。

「・・・」

私は目を皿のように凝らし、此方に向かって来るヘリの方へと照準を合わせる。
正確な距離は不明だが、目算でココからヘリまで８ｋｍほど。
どうやら遅い輸送船と速度を合わせて移動しているらしい。

もっとも今の私には世界は非常に遅く、スローモーションの映画みたく見える。
ブルータルウルフの機能、思考加速が使われて一時的にスローな世界を見ているのだ。
つまりヘリの動きは非常に遅く、僅かずつ動いているようにしか見えない。

とはいえスコープもなく、衛星リンクも無い直接照準ではややきついわ。
けれど、機体左右にミニガンらしきものを積んでるヘリが来ている、

殺るしかない。
私は網膜投影されるダットサイトを目安にしてマニピュレーターの位置を調整する。
そしてピタッとある位置に来た所で固定した。
私はさらに集中し、ヘリのその姿だけを見る。

「すー・・・はぁー・・・」

ピントを絞るように、視界の中央にヘリの姿が収まる。
そして私は魔法のトリガーを引いた。

――――ドズンッ！

「ッく」

空間展開している魔法陣から放たれる魔力弾の反動がＰＪを通して私にも伝わる。
久々に感じる反動の重さは、懐かしさを感じさせてくれる。

だが、今はそんな事を考えている時ではない。
明らかに向かって来るヘリを落さなくてはならないのだ。
私はそのまま術式展開を解かず、魔力を再注入して魔力弾を再形成する。

――ドズンッ！

「ッ！」

そして続けざまに第二射を発射する。
今度は先の第一射の射撃諸元から導き出される予想未来位置への偏差射撃。
しかしやはりまだ距離があり過ぎる気がしないでも無い。

事実、この魔法は結構弾足が遅いのでヘリは視認して回避運動に入っていた。
まぁ私は魔導師だからそこら辺はあまり関係が無い。

「――ッ」

やや遠いし見え辛いけど、誘導してやれば問題はないのよね。
態々弾足の遅いエクスプローダーにしたのも誘導しやすくするためなのだ。
ヘリは運動性が高いとはいえ、魔導師が誘導する魔力弾を回避できるモノでは無い。

「――バーン」

――ドーンッ

［エクスプローダー、炸裂。敵ヘリ被弾。墜落確実。流石です］

「・・・ッ、システム通常モードに、お休みブルータル」

［はい、お疲れさまでした。それではおやすみなさい］

S型が通常モードに移行する。
視界が元に戻り、あの“何でも見える”様な感覚は消え去る。
止まっていたように見えた世界が動きだす。

そして私は――

「う、うぇぇ・・・きぼぢわるい・・・」

――システムが元に戻った反動で呻いていた。

ううう、だって神経系を無理矢理使うから負担が凄いんだよコレ？
脳みそがその負担に耐え切れず、まるで乗り物酔いの酷いのにかかったようになる。
本来もっと調整される予定だったのだからしょうがないとはいえ、やりきれないわ。

そして気持ち悪いので良くある口元を押さえる仕草を取る訳なんだ

けど・・・。
これってマスタースレーヴ方式だから、大型マニピュレーターごと動くのよね。
大きな手が口元を隠している姿って、なんだがとってもシュールな気がした。

「アラモの砦ってか？前編」（後書き）

描写省かない様書いたら長くなりそうだったので切りました。
後篇ｏｒ中編はまた後日、一週間掛かるかもしれませんがわかりません。
そう言う訳で、どうやら後少し続きそう、お付き合いください。

ちなみにこの話終わったら、俺原作キャラとの絡みを作るんだ・・・

「アラモの砦ってか？中編」（前書き）

※なんとか書けたので投稿

「アラモの砦ってか？中編」

「アラモの砦ってか？中編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

ｓｉｄｅフェン

アリス嬢と別れたあと、俺は俺でなんとかしてあの輸送船を制圧できないか考えたうえで行動を開始した。簡単に概略を説明すると、船にひそかに近づき中から制圧するというものである。当然それは秘密裏にという前提にあるが、何らかの事態によりそれが不可能となった場合、今使える魔法を駆使しての殲滅という形をとる。

尚、現状で貨物船を沈めるのに使えそうな手は三つある。

一つは長距離からの炸裂系魔法のガルヴァドスを撃ち込んで、航行不能もしくは撃沈というやり方。二つ目はある程度近づかれてからの砲撃魔法ツインングロムによる攻撃。三つ目は近接兵装デバイス・オートクレールによる喫水線下を切り刻むやり方。この三つだ。

ただしこれにはヴィズの使用が前提という注意書きが付くことになる。そして残念ながら今の俺はヴィズはおろかリンやシランたちの支援すらない状態。そんなかなり弱体化した中でかなりの人間を積んでいるであろう貨物船を廃墟へと接舷させることは数が少ないこちらを圧倒的に不利にしてしまうということである。

したがって少数（と言っても俺一人だけど）で乗り込み、貨物船を廃墟に接近させる前に制圧することが最重要な目的となる。概略としては以上だ。・・・それにしてもアリス嬢に言いくるめられたとはいえ、あの娘一人でヘリを相手に大丈夫かな？時間がなかったし彼女が遠距離系魔導師だって言っていたから任せたけど・・・。

まぁ本人が言うんだし信用しなきゃ何もできんな。俺は俺で連中がこっちに接岸する前にあの輸送船のほうを制圧しにいかないと・・・ヴィズめ、本当にどこにもってかれたんだろうか。アレがいないとどうも調子が乗らないぜ。

ぶくぶくぶく――――

さて、遠くの水平線近くにいる船に対し、飛ぶこともできずかといってデバイスなし射撃魔法では届かない位置にいる魔導師が、その船を攻撃するにはどうすればいいのだろうか？答えは至極当然にして簡潔で簡略で必然で、おまけに超簡単である。

「ぶくぶく（現在３０ノット（適当）、潜望鏡深度まで浮上）」

そう、泳いでいけば良いだけである。さらにいえば見つからないように潜水しながら近寄ればいいのだ。実に簡単かつ、またとてもシンプルでジェームズ・ボンドのごとくスタイリッシュだろ？え、なんかちげぇ？さーせん。

まぁ俺が何しているのかというのはここまで読めばお分かりであ

ろう。俺は今、潜水して沖にいる敵の輸送船と思われる船舶に接近しているのである。普通動いている船に泳いで接近することは自殺行為である。だが、俺にはハルケ式の初歩の水魔法というものがあるのだ。

これは水流を操るだけの魔法であるが、マルチタスクで飛行術式と併用すると化ける。

なんと水中で魚雷並みの速度で動き回ることができるのだ。カッパさんもびっくりだぜ。ちなみに呼吸は息を止めるか、空気の玉を圧縮して口の近くに纏わせるというやり方の二種類がある。今回は後者のまとわりつかせるやつなので単身でも長時間水中活動可能なのだ。

でも・・・つくづく能力の無駄遣いだな・・・燃費超悪いし。

「ぶくぶく（ふっふっふ、名付けてヒューマントーピードだ・・・ってそれ人間魚雷？）」

ふと思いついた言葉に俺特攻するんかいと欝になる。

まぁ攻撃が届かないなら攻めるしかないけど、なんだかねぇ？暗い水の中を泳ぐのはフェイト嬢とのバトルに介入したことで経験積みとはいえ、あまりいい気はしない。いやサーチ系の魔法使えば“見る”ことはできなくても“視る”ことはできるんだぜ？

だけども、だからといってまっくらな中を進むのはいい気はしないし、正直怖くてちびりそうだ。

真っ暗な水中というのはどこか原初の恐怖を呼び覚ます。引き吊りこまれそうな感覚がなんともはや、恐ろしさ倍増だ。なにせ敵に見つからないために、スフィアを明かり代わりにすることもできない。この暗い水の中にマーマンとかいてもおどろかねぇぞ俺は。

「ぶぶくぶく（・・・・今、下のほうで何か光った気がするけど・・・気にしない）」

この湖でも沈没した船はいるのかね？まぁそれはともかくとして正直なところ俺は超低空飛行で輸送船まで一っ飛びしたかったのだが、現状を視てもらえば判るように潜水中である。何でかというと・・・あんまり言いたくはないが俺はいまだに飛行が下手なのだ。普段何気なく飛んで見せていたが、実はあれまっすぐかっ飛ばす以外の飛行制御を結構ヴィズに頼っていた。

そのおかげでヴィズのサポートなしでの飛行は非常に危ないのである。もちろん単独で飛べなくはないのだが、それはあくまで人間が歩く速度までだ。もし何気なくサポなしで戦闘機動を取ろうとすれば、下手すると空中ネズミ花火となってお茶の間の皆様に笑いを提供してしまう。もちろん俺はコメディアンではないのでそんなのお断りだ。

これも変に出力が高い魔力の所為だが、いまさらなので仕方がない。飛行時の魔力制御方式を通常制御から魔力多段式噴射に変えればヴィズなしでも頑張れるが、それは普段ヴィズのサポートがあってこそ楽にできる芸当なので、やはりヴィズの助けなしだとマジで

キツイ。

たぶん、よしんば飛べたとしても、ある一定以上の速度で飛べば、こっちへフラフラあっちへフラフラという飛行になってしまうだろう。そんな状態で輸送船に近寄ったら、対空機銃・ミサイルの洗礼を受けて俺はハンバーグのミートパティのような状態になり、水中のお魚さんたちの夕飯となってしまうという訳だ。

そんな最後はバッドエンド過ぎるし、そうなるつもりもない。もちろん俺は復活できるだろうが、だからといって穴だらけとか肉片にはなりたくはないので、俺は安全な水中を行くのだぁ。

チキンとかいうな！俺は慎重なだけだ！・・・不死身な肉体でも痛いもんは痛いんだよ。とにかく、そういう訳で探知魔法と音だけを頼みで敵の下へと向かっているという訳だ。まさか自分がイルカとかシャチの真似事をすることになろうとは・・・。

人生はこれだからおもしれぇってもんだな。

≪――――どぽーん≫

「ぶく、ぶくぶく？（あん？なんだ？）」

さて、水中を動いていると、なにやら上のほうから音が聞こえたような気がした。なんだろうかと思い見上げてみれば・・・沢山の

鉄くずが俺めがけ沈下中。

は？

「ばっ（は？）」

思わず脳内で発した言語と口から出た言語がリンクする。どういうわけかしらないが大量の鉄くずが月明かりに照らされキラキラと輝きながら降ってくる光景を前に固まってしまい、そのまま金属片の雨の直撃を受ける。

「ごぱぁぁ！？」

ちょっ！いてぇ！？なにこの理不尽！？なに銃撃？爆雷？！
な、なんで？もしや俺の場所がばれた！？ソナーでも積んでたのかあの船！？
つーかそれ以前に、破片とかが刺さって血が、血がぁぁぁ！！！

※ちなみに落下してきた金属はアリスが落としたヘリで、遠くにいるため念話がつながらずフェンはアリスがヘリを落としたことを知りません。そしてアリスはＳ型使用時の反動でダウン中。

「ぷげらっ！（イテェっ！！）」

大きな鉄塊は沈降速度が遅いのでなんとか回避できたのだが、それ以外の細かなものまでは避け切れず、なにやら棒状の何か（テイルローターです）に激突されたあげく、その後降って来た板状の何か（プロペラです）に衝突され、おまけにそれに服のそでが引っかかった所為で沈降に巻き込まれる。

湖ではあるが深いところでは３００ｍを超えそうなほど深い。琵琶湖もびっくりの深さであるがこのままでは俺はその湖底にまで行ってしまいそうである。つーか地味に傷ついたところから血が流れ出して痛い。すぐに再生が始まっているが水流に傷口が押し広げられてあばばばばｂ

俺はこなくそとばかりに、引っかかっていた服を身体強化した筋力で破り捨て、その場から脱出する。さようなら俺の一張羅、深い水のそこで漂っていてくれとか思っていたのもつかの間、今度はズクンっというひさびさに感じるなにかの予兆を感じ、条件反射で水流を操ってその場から離脱していた。

そして今回もその勘に救われた。

≪――――ずぉぉぉぉぉ・・・・≫

「ぶばっ！？（な、なんだありゃ！？）」

俺がそのとき見て取れたのは、四つの何か光るもの。
だが俺が常時展開していた探査魔法に映し出されたシルエットは、地球出身者なら一度は見たことがあるだろうその形。日本人ならかまぼこで、ロシア人ならキャビアでおなじみのあの生物。

「ばべー!?（サメー!?）」

そう、完成された生物として地球では何億年も前から姿を変えなかった生物である水中の狩猟者であるサメと酷似した生物が、突進を交わした俺のほうへと向き直る姿だった。だが大きさは地球のサメの比ではなく、ゆうに４０ｍはある。目に至っては片側４つの計８個、テメェはヤツメウナギか!?

おまけにそのぎらぎらとした口にはギザギザの鋭い剣歯が生えそろい、獲物を食い破るために今か今かと輝きを増しているように見える。

・・・・獲物？

さて、サメというのは非常に優秀なハンターである。特に嗅覚がすばらしく発達しており、その鼻は水中で数キロ先で流れた一滴に血にすら反応できるという。ところでオレの今の状況はというと――

・破片を浴びて全身傷だらけ。

・おまけに再生する前に結構血を流している。
・若くておいしそうな肉体デス。

・・・獲物、イッツ・ミー？

――――・・・オレサマ、オマエ、マルカジリ

・・・・／（＾Ｏ＾）／

たぶん、交わされた視線はこんな内容だった。

＊＊＊

ｓｉｄｅ三人称

「おい、交代だ」

「ありがてぇ、ここはケツがさむくていけねぇ」

さて、またまた時間はヘリが落ちる前にさかのぼる。
ヘリを引き連れた誘拐犯たちの輸送船はようやく水平線に写るフェンたちがいる廃墟を、双眼鏡や肉眼を細めて見張っていた。本来

格納庫があるはずの区画に隠しヘリポートを抱え込んだこの船は移動する誘拐犯たちのもうひとつの移動する拠点であり、廃墟に監禁してある商品たちを別の場所に停泊している密輸次元航行船に運ぶ役目をもっていた。

こうして各所に小さなアジトを点在させ、中枢となる指揮系統がある本部のようなところだけは一般の船に混じり湖上を行き来する。たったこれだけの工夫であるが数十年近くこれでばれなかったあたり、組織として優秀なのかはたまた調査を行った組織が阿呆なのか微妙なところだ。

一般貨客船に偽装された船の上では、眠たそうな見張りの船員がちょうど交代の時間なのだろう。二人ほど甲板のほうに出て会話している。この一見普通の船乗りに見える男たちも立派な誘拐の片棒を担いだ犯罪者たちである。やったことがないのは直接の殺しだけであり、それ以外はなんでもやった上、特に後悔も罪悪感も抱いてはいなかった。

「うん？オマエそんな腕輪してたか？」

「こいつは今日の分捕り品だぜ。ガキの癖に良いもん付けてたからな」

そういって見張りの男の一人が交代しにきた男に腕を振り上げてみせる。そこにはどういうわけかうまい事男の腕にフィットしている白い腕輪が収まっていた。

「なさけな。売りもんから物盗ってどうすんだよ」

「いいじゃねぇか。どうせガキの服とか持ちもんは捨てちまうんだ。リサイクルだ」

そういって胸を張って見せるが、正直オマエそれで良いのかとしかいえない。交代の男も同感のようで、とりあえずスルーすることにしたようだ。意外とガキっぽい連中である。

「しっかし、へましたもんだな。商品を逃がすなんてな」

「確かにな、けど相手はデバイスを持たない魔導師とただのガキだろ。ヘリ2機で合わせて２０人、足りなくてもこの船に大体１００人近くいるんだ。すぐにつかまるだろうよ」

「だと、いいがなぁ」

話題はちょうど逃げ出した商品、つまりはフェンたちのことにシフトする。この輸送船は前回分の商品たちを乗せ、密輸をしている次元航行船が待つ秘密のポイントに向かい、そこで商品と密輸品を交換するはずであったのだが、途中でフェンたちが逃げ出したことが判明し、廃墟の一部に篭城したということが廃墟に残っていた見張りたちから輸送船に伝えられた為、一度引き返したのだ

何せ逃げ出したのが魔導師では能力的には普通の人間である見張りの人間には荷が重すぎたのだ。そのため応援をよこしてくれと通信機に叫んだのである。そのため、輸送船は拠点である廃墟へとU

ターンし、ヘリを飛ばしたという訳だった。

「つーかよ、魔封手錠かけてたんじゃなかったか？どうやって抜け出したんだ？」

甲板で見張りをしていた男に交代に来た男がそう聞いた。

彼らのいう魔封手錠とはあのフェンたちが拘束されていたときに付けられていた赤さびた手錠のことである。あれらの3級ロストロギアのようなアーティファクトは裏ルートでは結構出回っており、効果はそれほどではないがそれなりに使えるため、秘密裏に売買が行われていた。

この魔封手錠もそうやって出回っているアイテムのひとつである。効果は魔法を使おうと術式を使うために魔力を集めたとき、一定上集めた途端、装備している人間に低周波やいろんな脳みそを揺らすものを叩き込んでくれる。本来は昔の次元犯罪者用に管理局が開発した手錠である。沢山作ったが現場では魔導師がバインド系魔法を多用したため、そのうちに使われなくなったものだった。

そのことを聞かれた見張りの男は肩をすくめながら交代に来た男に言葉を返した。

「しらねぇよ。アレ使えば魔導師も捕まえられて大もうけだとか言って買ったボスが悪いんだ。おかげでオレたちゃトンボ帰りよ」

「そうか・・・まあ俺たちにゃ関係ないか・・・おい、タバコくれや」

「あん？ねーよ、んなもん。トイレの紙でも巻いて吸ってろ」

「ちっ、しけてんなぁ・・・」

「そんなにほしいのか？湿気ったタバコならあるが？」

「ばっ、おめぇそれカビてるじゃねぇか、捨てちまえんなもん」

それもそうだなと、男は湿気ったタバコを箱ごとポイ捨てする。
そう、彼らは犯罪者なのでごみのポイ捨てくらい朝飯前なのだ。
大きく振りかぶって投げられたタバコの箱は大きな曲線を描きつつ湖面へと落下していく。

「ストラーイク」

「ばーか、さっさと見張れ」

「へいへい」

見張れというがレーダーやソナーがあるのに見張りをする意味はあるんだろうか。
とはいえ以前から続くそういう仕事なので、文句を垂れても金にはならない。仕事が終われば酒と女は飲み放題し放題なのだ。男はやれやれと見張りを交代して船室に戻ろうと思い、そのままふと湖を眺めたその刹那。

「・・・あん？なんだ」

「どうした？」

「いや、なんか遠くで光っ――――」

何かが遠くで光るのを彼は見た。なんだろうと身を乗り出したそのとき。

≪――――バアァーーンッ！！！！！！！≫

「・・・ああ？」

彼の聴覚は爆発したときになる爆音を聞いた。

その爆音が何かと考えたとき、彼の理性は即座にそれを否定した。

ここは湖とはいえ岸から１０ｋｍちかく離れている水の上なのだ。

だからありえないのだ。目で見ることも困難な距離で、増員を載せたヘリが湖面に墜落して暗い水に飲み込まれていくなどという光景は。

「おい！今の、聞いたか！？」

「ヘリが飛んでいった方角からじゃねぇか！」

とてもではないが、信じたくはなかったのである。
そして交代に来た男が騒ぎ始めたのと同じく、まるで思い出したかのように現実に引き戻された男も、隣で狼狽する仲間と同じように騒ぎ始めた。そして人の耳や目に捉えられていたということは、船のセンサーにも捉えられていたということもである。

≪ヴィー！ヴィー！ヴィー！――――≫

船の非常用サイレンがけたたましくなり響く。
同時に船内があわただしくなり、人がいなかった甲板に船内から船員たちが何人か上がってきていた。見れば全員武装を施している。船内の武器庫が開かれたのだ。見張りとその交代の男はそれを見ると互いに顔を見合わせ、そそくさと船内に戻ることにした。

回りの状況を見れば自分たちも武装しなければならない事態が発生したことは明白だったからだ。

「――――明かりだ！ライトをつけろっ！」

男二人が船内に戻ろうとしたそのとき、誰かがそう叫ぶのが聞こえた彼らは何だとおもい立ち止まると湖のほうへと顔を向けていた。船のサーチライトが波立つ湖面へと向けられ、そこだけが昼間のように明るく照らし出され、何かにおびえるかのようにせわしなく動いていた。

何のための行動かはわからないが、おそらく湖面下に何かがいる。

サーチライトが照らされているのは水面すれすれにそれがいるからに他ならない。

≪――――ズザザザザザッ！！！！！！≫

そのとき、波の音とはまったく違う水を掻き分ける音が周囲に木霊した。

誰かが「居たッ、あそこだ！」と叫んでいるが、船員たちはその声よりも早くその存在を見つけていた。なぜならやや遠いところをぼんやりと光る何かが、水面下で恐ろしい速さで移動しているのが見えたからだ。

その光は機械などが発する光などではなく、もっと薄気味悪い人魂のような何かに見て取れる。だが人魂にしては四つに並んでいたり、等間隔で八つに見えたりと微妙に見え方が安定しない。だがそれもようやくその光に追いついたサーチライトが照らしたことで、それがいったい何なのかが判った。

「魚だ！でっけぇ大魚だ！」と明かりに照らされた影を見た誰かが叫んでいた。

そう、サーチライトによって水面下に居たそれは巨大な魚、もしくは魚のシルエットを持つ何かであることがわかったのである。だが、誰一人として「なんだ魚か」などといった言葉は漏れなかった。

「で、でけぇ・・・」

サーチライトが照らしたその魚影は通常この近辺で観測されている魚などの水生生物のそれを軽く凌駕した大きさだったからだ。この世界において目が八つあり、魚のシルエットを取っている生物はドラゴンシャーク、もしくは八目鮫と呼ばれている鮫の仲間しか存在しない。

だがそれでも大きくても精々が３ｍほどであり、さすがにその１０倍はあろうかという巨体を持つ生命はこの湖には存在しなかった。

「あ、あれはヤメガロドン！」

「知っているのか！？サンダーボルト」

「ああ、あいつは太古にいたとされる古代鮫の一種だ。八目鮫の祖先だがその大きさは優に十数倍はあったらしい。一見肉食のようで実は雑食であったという研究も――」

「魚がもぐったぞーーーッ！！！」

そのとき、船の周りを巡っていた魚影が突然見えなくなる。

魚が水の中にもぐってしまえば、サーチライトでは見ることはできない。あまりにも突然静かになったのでどうすればいいかわからず立ち尽くす船員たち。なにかが警鐘を鳴らすのだ。これだけで終わるはずがないと。

『――全員何かにつかまれぇぇぇっ！』

そしてスピーカーからどこかあせったような指示が出たのは、それからまもなくだった。船員たちはそのあいまいな指示に従い、船の舫いを付けておくための出っ張りやとにかくつかめる場所をつかんだ。

≪――――ザッパァーーーンッ！！！！≫

何が起きたのかは判らない。だがそのとき、船員たちはなにかが湖から飛び出してくる音を聞いた。そしてそのうちの一人は常識では有得ない光景を見ることになる。それは一人のぼろぼろの服を纏った小さな人と、それを追いかける古代鮫が水面から飛び上がり、放物線を描いている光景。そして着地点は――

≪――――ズッガァァァァンッ！！！！！！！≫

――――彼らの乗る船、そのものだった。

この日、この静かな湖の上で天文学的な確立で起こってしまった巨大な魚類に激突されて転覆しかけるという珍しい光景が展開されたのだった。そして先ほど説明をしていたサンダーボルトとか言う男が一人、これは伝説の大技ウォーターゲートと言って戦慄してい

たのは余談である。

＊＊＊

ｓｉｄｅフェン

正直、死ぬかと思った。

何とか起き上がった俺はどさくさに紛れて誘拐組織の貨物船にまんまと乗り込むことに成功していたが、正直それにいたるまで生きた心地がしなかった。リアルジョーズを体験するのはマジで怖かったです。

俺は動物が好きだし、好かれる体質だと思っていたが、どうやら水生生物の鮫は管轄外であったらしい。というか鮫にしては大きかった気もしたが、水生生物についてはあまり詳しくはないのでスルーすることにしておこう。

さて、とにかく混乱のうちに船の中にもぐりこんだ俺はちゃっちゃと制圧してしまうために行動することにした。船の中は狭い、非常に狭いといえる。大人が一人何とか通れるだけの通路が多いので行動が非常に限定されてしまうというデメリットが存在している。

だがその条件は当然相手側にも当てはまるのだ。

なのでもし戦闘に突入した場合だが、同時に戦うことになる人数

はおおよそ3～4人になると予想している。さすがにいきなり手榴弾とかだとつらいが、ここは敵さんの所有物である船の中な上、周囲は水で囲まれた空間だ。わざわざ自ら船を沈めたいと思わない限りは着ても精々マシンガン。

そしてそれならシールド魔法で十分に防げることだろう。

まぁそれ以前に――

（――こちらラーダー、敵貨物船に侵入した）

――ドサクサに紛れて侵入したから、まだ誰にもばれてない。なので思う存分スネークさんごっこができるってことなんだよね。

ΩΩ　Ω＜ナ、ナンダッテー

まぁ一人でやってもむなしいだけなんだが・・・。気にしないぜ。

さて、誰にも見つかることなく静かにやってまいりましたのは、この船の通信室に当たる部屋だ。何をするのかというと至極簡単、通信機をぶっ壊すだけである。こちらは増援を呼ばれるわけには行かないのでね。

絶対に直せないようにぶっ壊してしまうのだ。恐縮だね。

さてこの通信室には一人だけ人がいたが、こちらは魔法で姿を消しているのでばれることなく制圧できた。もちろん殺してはいない。殺したら血の匂いやらなんやらで色々とばれてしまうからな。意外

と臭いんだぜ？人間の死体ってヤツはさ。

なにせ殺したら血だけじゃなくて弛緩したからだから小水やら消化物のカスやらがぶわっとこう・・・まぁとにかく匂いがしてくるのだ。そんな訳で通信席に座っていた男の後ろから忍び寄り、口をふさいでから魔力込めた打撃で意識を刈り取った。

んで、そいつが気絶している間に通信機をぶっ壊し、男を運びだして拘束した後に近くのロッカーに詰めた後、微妙にさび付いていた通信室の戸を閉めて錬金魔法で戸を溶接した。というか通信室の戸を壁に変えたのでここに通信室があったことを思い出せなければスルーしてしまうかもしれない。

これでかなり時間が稼げることだろう。そしてその間にお掃除だ。

先ほどの鮫との激突でテンヤワンヤしている船内で、人目につかない場所にいるやつらから一人ずつ意識を刈り取り、通信機壊したとき出てきたコードをワイヤーに変換してぐるぐる巻きにした後、船倉に放り込んでいく。

甲板に乗り上げた鮫のほうが目立つので、俺の行動は非常にスムーズに進んだ。

もっとも、ある意味で作業だったので非常に疲れる羽目にはなった。特に戦闘もなく進んだので小説としていいのかとメタなこと考えたものだ。音も無くトラップや魔力弾で気絶させるのは欠伸が出るほどやった事なのでヘマはしない。

でもな、俺って一応兵士だろう？

なんとなく先程からの行動をふと振り返ってみると、何だか何処ぞのアサシンみたいなことしかしていない気がするんだが気の所為なのだろうか？なんだかあまりにも格好悪い気がするが・・・まぁ仕方ないと割り切るしかないだろう。

カッコよく行きたくてもその為の手段がないのだし、地道に潰して行く方が確実かつ安全だ。戦闘しておいて安全とはこれいかにと思わなくはないが、安全第一は戦いの基本であるし俺の心情なんですぜ。刷り込まれたトラウマとも言うけど・・・。

ともあれ何とか貨物船の中を血風呂（ブラッドバス）にすることも無く、ある程度の区画を制圧する事に成功した。制圧した場所はことごとくドアをロック、あるいは溶接してしまい、中からも外からも侵入されることを防ぐ。

そうしている内に徐々に船内が慌しくなり、スピーカーからも『侵入者を見つけ次第殺せ』という内容のけたたましい野太い男性ボイスで放送が流れ始めた。まぁあれだけ通路を塞いだりしてればいずれは見つかることくらい想定の範囲内だ。

すでに各所の隔壁は溶接というか壁と化し、何処にどうつながっていたか判らない状況を作り出してある。あとは迷っている間に各個撃破を狙えば数の利点はそれほど戦況に影響して来ない。戦争は力も勿論のこと頭も使わないとな。

「いたぞー！」

さて、どうせばれたことだしいい加減ミラージュハイドを単独で維持するのに付かれてきた俺は、迷彩魔法を解除して行動していたところを船の船員に見つかった。正確にはわざと見つかったのだがそこら辺はどうでもいい。

「な！逃げた！追え追えー！！！！」

俺はクルリと背を向けて敵の前から一目散に逃げる。

恐らくは短機関銃と思わしき銃や拳銃を撃ってくるが、背面にシールド魔法を展開しておけばあたってもダメージにはならない。むしろ撃った本人たちが跳弾に当たったりしている。

賊相手に言う事ではないが全くもって訓練不足だな。下手に壁際によって撃つと跳弾で訳の分からない方向に弾が飛ぶ可能性がある。狭い室内での銃撃戦はなるべく腰を落として敵のほうを狙うのがベストだ。敵はかがむことは出来ても魔導師でもない限り飛んでいることは出来ないからな。

まあ今はそんな事を考えている暇はない。俺はちゃんと付いて来ている事を確認しながら甲板へと出た。続々と船内から飛び出してくる連中は追い詰めたとでも思ったのだろう。「もう逃げられねぇぞ」と言いつつ笑みを浮かべている。

よくいる簒奪者の笑い方だ。弱いものと見るや否や途端強気となるタイプ。

「・・・逃げた？誰が？」

思わず苦笑してしまう。なにせ態々ここまで来たのはそろそろ一気に人数を減らしたいがためだ。・・・別にちまちま制圧するのが面倒臭くなったわけではない。断じて違う。ただちょーっとだけ、もっと派手に行きたいと思っただけだ。うん。

ともあれ気が付けば続々と集まって来るわ来るわ。あれだけ無力化したのにまだ２０人ちかく残っていたらしく、いまだ水浸しの甲板の上にずらりと並んだ男どもが俺に向けて銃を構えている。

「好き勝手やりやがって。だけどこれでもう追い詰めた。大人しくすりゃ命までとらねぇぞ」

命は取らなくても売る気満々でしょう？とは聞かない。だって絶対に是って答えるだろうからな。悪党というのは相変わらず、どこも似た様なもんである。

「大人しく？態々こちらから出向いたのに？」

「おいおい、これだけならんだ武器の数々が見えないのか？」

どうやらこの船の責任者、もしくは組織の幹部かトップに相当す

ると思われる男が前に進み出て俺にそう言って来た。たしかにずらりと並んだアサルトライフルや拳銃やらの数々はある意味で圧巻だ。慣れてないとコレだけで委縮でき・・・だれだ、ロケット砲持ってきたの？

甲板だから多少ぶっ放しても大丈夫ってことか？つーかそれ殺る気満々じゃね？

「生憎、おじさん達が持っているおもちゃしか見えないね」

「はっ！コレだけの数で撃たれてデバイスも無い魔導師が耐えきれるか？」

「・・・まぁ確かにちとキツイか」

「魔導師のガキは高く売れるんだ。研究所とか研究所とか研究所とかな」

「もはや研究所しかないみたいだが・・・」

「気にすんな。とにかく投降しろ。テメェの肉体は俺達が有効活用してやる」

「・・・御免こうむる。親から与えられた肉体は自分だけのものだ」

「・・・良い心がけだ。ソレだけに残念だがな」

「ッ！プロテクション！」

男が引っ込むと同時に銃口が一斉に火を放つ。
勿論此方とて撃たれれば痛いのでマルチタスクで待機させていた魔法で防御するのでたかだか対人用の弾丸では魔法の障壁を突破されることはない。通常のプロテクションよりかは魔力出力と強度は高めなのだから当然だ。これで突破されたら逆にショックである。勿論多重プロテクション程の強度はないので油断できないが・・・。

（・・・マルチタスク同時展開でコレ維持するの辛いな）

囲まれている為、範囲を考慮してプロテクションを選んだが、ちょっと失敗したかもしれない。防げるけど範囲広い分維持するのがつらい。だども敵さんはんなことお構いなしに此方の動きを止めるかの様に、たった一人の8歳児相当の子供に弾幕を放ってきている。

しかし障壁で遮られるとはいえ、障壁は視界を遮らない為に透明に近い半透明なので、命中しては障壁に遮られて止まり、拉げていく弾丸が目視出来るんだが・・・うん、これ魔法無しならミンチ確定だ。殆ど急所とか考えずとにかく当たれって感じに満遍なく弾が散布されているのを見るというのも複雑な気分である。

「クソが！コレだから魔導師ってヤツはっ！」

「撃ちまくれ！どうせある程度撃ってりゃ魔力切れ起こすぞっ！」

なんとまぁ、確かにソイツは“通常の魔導師”ならあり得る事態

だ。
　プロテクションやシールド魔法の類は常時展開している訳ではないのは、展開すればするほど魔力を消耗することは誰でもわかる。だから防御の時にしか展開しない。無駄に魔力を消費したく無いからだ。

　だがお生憎様だ。

「う、撃っても撃っても揺らがない！？」

「如何なってやがる！？魔力切れ起こすんじゃねぇのか！？」

「だ、弾幕を絶やすな！絶やしたら最後俺達は血祭りだ！」

「「「「ひ、ひぃぃぃぃぃッ！！！」」」」

　いや、俺別に血に飢えた戦闘狂の魔導師じゃないから。勿論邪魔するなら実力を持って排除するだけだし。まぁ、ともかく俺は魔力切れは起こさない。何故ならヴィズを纏っていない今、俺の魔力を消費する媒体が少ない上、俺はレアスキルのリサイクルを持っている。この程度では魔力切れが起こることはないのだ。

「・・・とはいえ、此方も打つ手なし、か」

　ヴィズさえ、ＢＡさえ纏う事さえ出来れば、銃撃なんてものを気

にせずに、それこそ銃弾の雨の中を歩いたとしても、俺がそれにより傷付くことは断じてあり得ない。その硬さを利用し、此方から魔法を乱射する事で殲滅が可能となる。

だけども今はヴィズがいない。当然ヴィズがいないとＢＡは展開できない。

ＢＡは骨格となる強化外骨格が無いと意味を為さないからだ。アレ自体がデバイスの杖に当たる魔法媒体なのだから、それが無ければＢＡは展開不可能である。そしてその骨格に当たる部分はヴィズが収納しているって訳だ。

そんな訳で、俺はプロテクションを張っている間は魔法を撃てない。無難にシールド魔法にしておけばよかったかなと思ったが後の祭りである。とはいえ誘導魔法を単体では使えない俺がシールドを張ったまま連中を攻撃する為には腕を向けなければならず、その場合必然的に手が吹き飛ばされることが予想できるのでやらないが。

「ええい埒が明かん！ブリッツ！」
「ああ任されたぞボス！」

と、なにやら連中の間に動きがあった。

ひときわ大きな男、さきほどロケット砲らしき何かを背負っていた男が周囲をかき分けて此方に向かって来た。これはあのロケット砲を俺にめがけて撃つつもりか。外道め、船が壊れることもある程度はお構いなしか。流石にロケット砲の直撃を受ければプロテクションは破壊されて俺は吹き飛ばされてしまうだろう。

というか、人に向けて使うもんじゃないぞソレ。

「見よ！この巨砲！本来は戦車を相手にする為の短距離噴進弾発射無反動砲である！」

ロケット砲を俺に向け、とっとと撃つのかと思いきや、何やら急に喋り出した。

「弾頭には人に使うにはヤバすぎる、魔導師相手であっても強靭すぎるタンデムＨＥＡＴ弾を採用！この巨砲を受けて生き延びた魔導師は今だ存在しないのだ！」

どうやら自分の武器の自慢話のようだ。

だが正直周りの銃声が大きすぎてあまり聞こえん。最後だけ聞きとれたがあれを喰らって生き延びた魔導師がいない？それ以前に動き回る魔導師にどうやって当てたのよ？あ、俺みたいな状況の奴に当てたって事か？

「怖いか！？そうだろう！怖くないはずが無い！この威力をしっかりと目に焼き付けて死ね！！」

動かないんだから早いとこ撃つなら撃てと思っていたら、野郎本気で撃った。

凄まじい噴炎を吐きだしつつ加速した弾頭が、プロテクションに命中する。

≪――――ドォォォォォォッ！！！！！！≫

本来戦車を相手にするソレは確かに凄まじい威力だった。たしかにこれ程の威力があれば魔導師であってもシールド展開していたとしても致命傷は避けられまい。とはいえ、ソレはあくまでBやらAランク相当の通常魔導師の話。俺らのような高ランク魔導師にまではそれほどの効果は期待できないだろう。

「ぐッ・・・がっ！」

とはいえ、現在弱体化しているこの身では荷が重い。

プロテクションは破られ、体重が軽い俺は衝撃に耐えきれず吹き飛ばされた。爆炎と破片でからだのいたるところを焼いて裂傷を造り血が飛び散る。痛いとかそう言ったのよりも衝撃と爆炎の影響で肺から空気が強制的に吐き出され、酸素が足りなくなり意識が朦朧とする。

だが、こんな状況下で俺は吹き飛ばされながらほくそ笑んでいた。

「――――痺れろ。クソ野郎ども」

俺の得意技というか、師からの直伝の戦い方。

それは――――設置術式の隠蔽。

「ぎゃぁぁっぁぁぁぁぁぁぁあああっぁ！！！！！！」

そして、貨物船の甲板に絶叫が響いた。

「アラモの砦ってか?中編」（後書き）

う～ん、やっぱりＰＣに触る期間が開くと、どう書いてもしっくりこない・・・。

少しすれば治るとは思いますが、いやはや何ともはや。

「アラモの砦ってか?中編2」（前書き）

リアルが忙しくて更新が大分遅れてしまい申し訳ありません。

なので今回お詫びを兼ねて2本立てとなっております。

それでは本編をどうぞ。

「アラモの砦ってか？中編２」

「アラモの砦ってか？中編２」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

ｓｉｄｅフェン

バチバチという空気を弾く音と、独特のイオン臭が周囲に立ち込める。
何が起きたかというと別に如何という事はない。
簡単に言えば連中を師直伝の罠にはめただけだ。

先の衝突で今だ乾かぬ水浸しの甲板。そして態々囲んでくれたあの状況。
低出力のプラズマバレット系魔力弾を発射せずに炸裂させ放電すれば、ＢＪを持たない人間を気絶、無力化させることは容易い。

態々あのロケット砲に吹き飛ばされたのも濡れている甲板から逃れるためだった。
まぁロケット砲が無かったらじりじりと後退してから飛びあがる予定だったけどな。

「うぅぅ・・・」

「い、イテェ・・・イテェよぉ・・・」

甲板そこかしこから立ち上る水蒸気。
その中で電流に踊らされて倒れこんだ人間達のうめき声が聞こえてくる。
連中にしてみればスタンガンを喰らった様なものなのだ。

今は身体が痙攣して立つことはおろか動くことも出来ないだろう。
若干暴力的ではあったが結果的にはほぼこの場にいた全員を無力化させることに成功した。
電流を流した際、持っていた弾薬が暴発して弾けた所為で虫の息の奴もいるが捕縛してから治癒魔法を掛けたのでなんとか生きている。

まぁ俺は治癒はそれ程得意ではない。
最近じゃ自身の治癒力が増したので、怪我した端から治ってしまうのだ。
勿論ヴィズ無しでも最低限使えるが、何らかの後遺症が残りそうな気がする。
殆ど気休めじゃなくて直る代わりに何かを失う系？

しかし子供を誘拐する様な下種に同情する心は持たん。
命は取らないでおくから、ありがたく思って欲しいところだな。

――――ズクンっ

「・・ッ！」

とその時、海の中でも感じたあのズクンとした何かを感じた。
コレは良く知っている勘とでも言うべきものか。
とにかく俺はその勘に従い咄嗟にシールド魔法を展開する。

≪――――ガーン！≫

そして、その勘は大当たりの籤を俺にくれたらしい。
何処からともなく響く銃声が響いたかと思うと弾丸が命中。
緊急展開したシールドに衝撃で波紋を浮かべていたのだから。

銃声をした方を見れば驚愕の表情を浮かべた男が、倒れ伏した仲間の陰から拳銃を構えていた。
しかし俺もまた随分と鈍ったものだと、そう思った。
以前なら撃たれる前に気配を感じて無力化か殲滅をしていたというのに・・・。

まぁこの手の“勘”は平和な日々の中で多少鈍っているとはいえ馬鹿に出来ない。
現にこうしてまた俺の危機を教えてくれたのだから感謝しないとな。
それはさて置き、初撃を外した男は慌てて第二射を討とうとしている様だ。

「おそい」

「ガッ」

だが俺はその男に撃たれる前に射線から身を翻す。
男が膝立ちでもう一度銃口を此方に向ける前にソイツの懐に飛びこんで腹に蹴りを喰らわせた。
男はそれなりに筋肉質だったのか、それとも腹に何か仕込んでいたのかもしれない。

なぜか随分と硬い感触と共に、そのまま壁の方へと吹き飛んだ。
壁にあたった衝撃で服がめくれそこに防弾チョッキが見えたので原因はそれだろう。
しかしまぁ驚愕で身を止めるとは・・・訓練が足りていないぞ？

「しかし、何でコイツだけ痺れなかったんだ？――――ん？」

何で男が電撃で気絶しなかったかを疑問に思った。
そりゃ死なせない程度に手加減したとはいえ電圧的には動けなくなるレベルだ。
何故だろうと考えつつ、壁に当たって崩れ落ちる男を見やる。

その時、ふとソイツの腕に付いた腕輪に目が行った。
男が腕につけていた腕輪。特に細工はされていないシンプルイズベストなバングル。

「・・・・運命の神様は、遊ぶのがお好きなのかねぇ」

それはそのバングルは・・・最近腕時計機能付けてみた――ヴィズだった。
気絶した男の手首には如何言う訳かヴィズがはめられていたのだ。
正直、あまりにもあっさりと相棒が見つかった事に拍子抜けだ。

というか色々と疲れが一気に襲い掛かってきた。
恐らく男が気絶しなかった原因はコイツだろう。

「自動防御の認識を本人以外では作動しない様にしとけばよかったかね？」

ヴィズは待機状態だとある程度の危険を察知したとき。
自動的に自身と装着者の為に蓄積魔力を放出、防御魔法を展開する事が出来る。
通常はデバイスであるヴィーザフをヴィズたらしめている高性能のＡＩが展開のＯＮ・ＯＦＦを決定する。

だが今のヴィズの状態は自閉モードで本来作動するべき機構が起動していない。
だから、防御魔法の制御もクソもあったもんじゃない。

結局プログラムされたまま防御魔法を自動展開。
主人じゃない男を守ったという訳か・・・。

――何だか浮気された気分になるのは何でだろうな？

「・・・・まぁいい、それよりも――――」

俺は男の腕から自分の相棒を取り戻す。

「クッ、手曲げたまま気絶するな――――セイっ≪コキャ≫」

なにやら乾いた音が聞こえた気がしたが、大丈夫だ、問題無い。

「・・・起きろヴィズ」

『――――登録者魔力パターン検知、ＤＮＡ・・・照合完了。最上級命令者（ユーザー）フェン・ラーダーである事を確認。思考安全弁閉鎖解除、バックアップ回路起動、思考ＡＩ作動開始――――おはようございますマスター！寂しかったです！！マジで！！』

苦節３８時間でよ～～～やく我が方腕である相棒が返ってきた。

成人男性が身につけたことで、ややサイズが広がってしまったが、俺が輪に手を通すと、シュンといって自動的に元のサイズに収まる。

これ、俺の成長のことを考えて魔法で自動的にサイズを調整出来る機能だったんだがコレの所為で大人も付けられたんだろうな。それにしても起きた途端騒がしいヤツだ。

「はい、おはようさん。さっそくだがお仕事だ」

『えー、私さっきまで自閉モードだったから何か思考回路が凝っちゃって・・・』

「ほう、なら久々に分解整備をしてみようか。ちょっとコアに穴をあけるだけの簡単な手順を踏むだけです。なに心配する事はない」

『さ、さー！何します？探査ですか？戦闘ですか？』

まったくＡＩの癖に面倒臭がるんじゃない・・・。

「ま、とにかく現状だけ説明するぞ。時間が無いから端的にな」

『お願いします』

こうして、我がもとに最も信頼のおける相棒が戻った。
もうこれで一々魔法を組み上げて使うことも無い。優秀なサポートがあるからな。
さて・・・これからどうしてくれようかね？

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

フェンは相棒たるヴィズを取り戻した。
そして偶然にも戻ってきた魔導師のデバイスであるヴィズ。
これは鬼で言う所の金棒のような存在であり、それがフェンの手に渡ったのだ。

もはや犯罪組織が生き残れる確率は相当低い事になっていることだろう。
多分数億円の宝くじや万馬券よりもずっと低い。ご愁傷様。
それでは悪の組織三分エクスターミネーションのはじまりだ～。

「・・・・」

『・・・？マスター、バイタルに疲労がみられますが？』

「お前がいない間ずっと単独だったからな。疲れもする――ナレーションも変だし」

『治癒使いますが？焼け石でしょうけど』

「大丈夫だ。問題無い・・・・第一治癒魔法は失った体力は戻せないだろう」

フェンは普段はやらないデバイス未使用戦闘の影響で若干疲れを見せていた。
もっともこの程度で参るような鍛え方はしていない。
見た目は子供でも中身のスペックは大幅に通常の人間のそれを上回っているのだから、ある意味当然のことだった。

見た目は子供で中身は化け物、ある意味で妖怪の様な存在だと自嘲する。
まぁそんなことは半年も前には判っていたし、母上に鍛えられて魔導師という未知の道へ進んだ時から“一般”からは遠くかけ離れた“異能の存在”である事の自覚があるので、人間でないからなんだとフェンは思っていた。

「とりあえず、甲板のお掃除が先だな」

『まだ下部デッキとかに生命反応ありますけど？』

「下は錬金でかき回したからもはや迷路だ。しばらくは上って来れない」

『左様で。それじゃ万が一上ってきちゃった時に備えてマークしておきますね』

「頼んだ」

『任されました♪』

さてさて、黒こげの連中を縛り上げておきますか・・・っと、その前に。
フェンは掴んでいた黒こげの男を放り捨てる。

「ヴィズ、格納領域からあれを出してくれ」

そしてヴィズにあるモノを要求した。
だがいかに相棒であっても主語が抜けていれば判らない。

『アレ？アレってなんです？』

「だから、あれだよアレ。細長いアレ」

『ジリーノを出してどうするんですか？』

「違う。何故ショットガン型兵装デバイスを出すんだ――煙管だ煙管。薬草煙管！」

『見た目悪いのに・・・ハイ、どうぞ』

おお、これこれ。これがなきゃやってらんねぇぜ。
そう言いつつ彼は煙管を口に咥えて炎熱魔法で火をともす。
薬草に火が付き薬効がある紫煙があがり彼はそれを思いっきり吸いこんだ。

彼の肺いっぱいに広がる清涼感溢れる薬効豊かな紫煙。
十数時間ぶりに吸う薬草の煙は、何だかとっても肺に滲みた気がしたとは彼の談。
だが一連のそれは傍から見るとタバコ中毒者のそれである・・・。

「はふぅ～、おいしいな～」

とっても美味しそうに薬草煙管の薬煙を吸うフェン。
・・・まぁ気にしないで上げた方がいいのだろう。これまで奪っちゃ可哀そうだし。

「・・・おっと、リニス達に連絡しないとな」

煙管を吸って賢者モードになったフェンはふと思い出したかのようにそう言った。
そしてヴィズを介して長距離通信を行う為に衛星をハッキングしていった。
・・・わざわざその為だけに通信をハッキングしていいのか？フェン。

――――さて、通信を終えたフェンはどうなったかというと。

「ブツブツ・・・ブツブツ・・・」

トラウマ、ではなくてしこたま怒られたのでブルー入っていた。

曰く、危ない所に一人で行くとは何事か。
曰く、おお主よ。捕まってしまうとはなさけない。
曰く、いっつも何時の間にか大変な事になっていて、どれだけ心配したとｒｙ
曰く、あなたが消えれば私たちは如何なるんですかっ！残されるのはもういやです。
曰く、わーん！！主殿～！！！ふぇ、ふぇ～ん！！！

・・・彼曰く、最後らへんが一番堪えたそうな。

『まぁあれだけ心配かけたんですから、少しは反省しないと』

「判ってるさ・・・こちとら泣かれるとつらいのよ」

『美女の涙にゃ男は弱いってヤツですか？』

「茶化すな。まぁそうだが・・・」

『このおませさん』

「やかましい・・・」

おませって歳かと良い返そうとして止めた。
己は精神は別にして一応外見的にも肉体の時間的にも年齢は８～９歳児相当なのだ。

認めたくはないが、もう否定するのも面倒くさかった。

「とりあえず俺らの捜索に出ていたシラン達が来るから合流しろとさ」

『え？転送魔法で戻ればいいのでは？』

「・・・一人にするとまた何かやりそうだから監視だそうだ」

『あー・・・・ご愁傷様』

やれやれと頭を掻きながらも彼はシランと合流する為の誘導ビーコンを出した。
どのへんにシラン達がいるのかは判らないがコレですぐに合流できるだろう。
それに結構疲れたから、正直転送魔法とかは使いたく無いというのが本音だった。

不死身と言えるスペックでも普通に疲れるのがフェンクオリティ。
そう言う訳でしばらく薬草煙管を楽しむことにしたのであった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

あ～、下にまだ敵がいるけどなんかやる気がしねぇ。
働きたくないでござる。絶対に働きたくないでござる。
と、某ニート侍を思い出したが、実際面倒臭い。
ああ、あとニート侍といっても彼女のことではないのであしから―
――

「――ッ!?!?!?」

『マスター？いきなり飛びあがって如何したんです？』

「いや、なんか強烈な恐ろしいほどの気迫を感じたような・・・」

『・・・周囲に生命反応は無し、下の連中も上には来てないですよ？』

「気のせい・・・なのか？」

――この話題はもうやめよう。途轍もない命の危機が訪れそうだ。

戦闘狂の血が入っている義理の姉の様なあの人のことを思い、思考を切り変えた。
そう言えばシラン達が到着するまではまだ時間がありそうだ。

どうせヒマだし、中にいる悪者達を全員ふん縛っておいた方が無難かな。
そこまでしなくても良い様な気もするが、まぁアフターサービスって感じ。

ここまで制圧しておいてそのままってのも気が引けるからな。

「（――フェ――聞こ――るか？私だ――リスだ。今どこ――いる？）」

ん？なんだ？・・・ああ、念話か。壊れたラジオかと思った。
念話の相手は廃墟に居る筈のアリス嬢からで距離があるからか若干聞き取りづらい。
流石に距離がかなり離れていては高レベル魔導師でもないとクリアな念話とはいかないようだな。
俺らとて高ランクの魔導師だが念話が得意という訳でもないのでこうなるのである。

「（此方フェン、聞こえているぞ）」

「（――無事だっ――か。――よかった。廃墟周辺で呼び――ても反応無――だったから心配して――・・・）」

「（ちょっとまってくれ、いま出力調整する――どうだ？）」

念話にも波長というものがある。
ラジオや無線の周波数帯の様なものだと思ってくれれば良い。
それを調節してやれば、ある程度は聞こえが良くなる筈・・・。

「（うん――聞き取りやすくなったな。

こっちはヘリを落して廃墟で残党を捕縛した。
それと沖合の貨物船を警戒中だ。子供たちも無事だよ）」

「（それは良かった）」

なるほど、まだ残敵がいたのか。
それを相手にさせたとなると悪い事したな。

「（それで、今どこにいる？
かなり念話を強く発信しているところを見ると、地下にでもいるというのか？
まさか一人で逃げだしたという訳でもあるまい？）」

――だからだろう、少しばかり機嫌が悪い。

多分捕縛と言っても魔法でねじ伏せて捕縛したのだろう。
残党相手とはいえ、一人でやったなら気分はあまり良くないのである。
そんな訳で多少念話の感じに皮肉がこめられていてもしょうがないだろう。

なんせアッチから見れば俺は途中で消えた様な感じになる。
一人取り残されたのではと不安に思ったのかもしれない。
もしそうなら・・・悪いことをしてしまったな・・・。

「（・・・あー、すまん。そして、まことに言いづらいのだが――）」

ついでだし、もう一つ言いづらいことを言っておくことにしよう。

「（――いま自分は、貨物船にいる）」

沈黙。むしろ何の反応も無いのが痛い。
だが少しして溜息のイメージが念話で届けられた。

「（・・・・・確認した。まったく何時の間に向かったんだ）」

「（泳いで・・・というか見えているのな）」

「（言ったろう？レアスキル持ちだと・・・それと人の趣味をどうこうと言う事は普段はしないが――）」

「（まて、まさか口に咥えてるこれまで見えてるのか？）」

現在この貨物船はサメが激突した為、沖合で停泊している。
惰性でしばらく動いていた事を考慮しても、距離で言うとまだ８ｋｍ近く離れている。
肉眼では到底見れる様な距離じゃない。少なくてもマサイでもない限り。

だが、アリス嬢には俺の姿が見えているらしい。
それも、俺が咥えている薬草用の煙管まで・・・。

「（恐らく形状からして煙草、もしくはそれに類似する嗜好品と推測できる。
だが若い身空でそういったものに手を出すというのは感心出来んぞ）」

「（・・・まぁ心配していることは解る。だが安心してくれ。
これは見た目は煙草に見えるかもしれないが中身はタダの薬草だ）」

「（・・・・・・・麻薬か？）」

「（自分がジャンキーに見えるのであれば、眼科に向かう事をお勧めします）」

麻薬ってあーた・・・まぁもってはいるけど注射方式だから吸えないぜ。

「（大丈夫だ。私は目は良い方だから眼科はいらないよ。
それよりも泳いで貨物船に忍び込む、か・・・・まぁいい。
――――そこで待ってろ、私もすぐに向かう。制圧してしまおう）」

「（了解。――――と言っても、殆ど仕事ないだろうけど・・・）」

「（ん？何か言ったか？）」

「（いや、何でも無い）」

……

……

……

さて、念話による連絡を終えてから約１０分後。
湖上に浮かぶ貨物船の上で黒こげになった連中を船室に閉じ込めた俺は外に出ていた。

少々面倒臭かったが連中はあくまで痺れさせただけなのだ。
また動きだされてはたまらないので縛って船室に閉じ込めたのである。

『ピピ――湖の上を飛行する物体検知。人間サイズ。魔導師と思われます』

んで、その作業を終えて一服しようとすると何やら近づいてくる反応を察知した。
まぁこんな時に湖の上を飛ぶ反応何ぞたった一人しかいない。

「来たか。意外と早かったな」

『陸地の方角ですから左舷側ですね。そろそろ肉眼でも見えますよ』

そうヴィズに言われ左舷側から遠くの湖上を見つめてみる。
くらい湖の上で星の光以外に輝き動く物がうっすらと見えた。
あれがそうか、アクセルフィンとかの飛行術式ではなさそうだ。
となると今まで見たことが無い魔法と言う事になるんかね？
だとしたら楽しみだぜ。出来る事ならコピーでもしよう。

『・・・はて？』

「・・・ん？如何したヴィズ」

『いえ・・・う～ん何て言えばいんでしょう？望郷？デジャブ？』

なんだ？何が言いたいんだヴィズ？
また電波でも拾ったのかと、今だ試作の領域を出られない相棒を尻目に視線を湖上に戻した。
近づいてくるにつれてアリス嬢の姿がハッキリとしてくる。
だが、近づくにつれて何だか異様な姿である事に気が付いた。

「おかしい、どうなっているんだ？」

先ずおかしいと思ったのは手足だ。
如何考えてもシルエット的に両手足が肥大化しているように見える。
身体が急激に痩せたという訳でも無いだろうし、手足が大きくなったとでも？

それこそあり得ない、なのでもう少し近づくのをまった。
暗い湖上で月明かりに照らされてその全貌が段々とハッキリ見えてくる。
肥大化した手足に見えたものは・・・あれだ、ロボットのマニピュレーターの様なモンだ。

どうも手足を覆えるほどの巨大なマニピュレーターに手足を突っ込んでいるのだ。
んで、ソレらは蛇腹的な金属の骨格により固定されて外れることはない。
簡単に言えば肋骨の無い首なし巨人の骨格の中心に人間が固定されている感じか？

大きさは大体２．５ｍといったところで、武器は無しで素手の状態である。
そんな大きなのが飛べるのかと思ったが、どうやら自力で飛行できるタイプの様だ。
両脚部の装甲が展開し、中から飛行用スラスターを展開している。

それを推進力にして飛行しているのだろう。
んで乗っている魔導師が何かしらの魔法で機体全体を持ちあげている。
さしずめ乗り手はリパルサーリフトってとこか？

『あやや？あれはまたケッタイなデバイスですね』

「・・・デバイス？まて今デバイスと言ったか？」

『え？は、はい。インテリジェンスでは無いみたいですが魔導機の様です。
あ、マスター以外にもあんな面白いデバイス作る人っているんですね！』

「・・・それ自分が面白いデバイスだって自称してる様なモンだぞ？」

そうだったー！と人間なら頭を抱えてひざまずきそうな雰囲気の声を出すヴィズ。
まぁそんなことよりも驚いたな。あれじゃまるで強化外骨格じゃないか。
どうやら未完成で試作品の域を出ていないが俺のヴィズのコンセプトとよく似ている。

ＵＳＮ式区分で表すなら第４世代か第５世代に相当するようなヤツだ。
あれなら魔導師単体が行う肉体強化に＋してパワーアシストが使用できる。
もしあれにヴィズの様な兵装デバイスがあれば相当大きな獲物を持つ事が可能だろう。

くー、製作者の浪漫を感じるな。きっと巨大な剣とか杖とか大砲だぜ。

でもどこの研究所が造ったんだろう？ＵＳＮは３０年前に消し飛んだらしいし・・・。
出来ればあれを造った所を紹介して欲しいもんだな。後学の為に。

『・・・未完成の領域から抜けてませんねぇ。私と比べればまだまだですね』

「言っておくがお前もまだ未完成なんだぞ？」

『え　ぇ！？――――ああきっと拡張性があるんですね！判ります！！』

「はいはい。しかし彼女が１人でヘリの迎撃をかって出た理由がアレか」

『ん？あのロボットの操縦している人のことですか？』

ロボットって、まぁ確かに傍目から見ればそうも捉えられるか。
とにかくアリス嬢のことだな。ヴィズはずっと自閉モードだったから知らないだろう。
とりあえずアリス嬢のことを含めて少しだけ説明してやった。

『・・・へぇ、なるほど。管理局のねぇ？』

「嘱託らしいがな」

『う～ん、あれだけの物をもっているなら何で最初から使わなかったんでしょうか？』

「さてな・・・恐らく囚われていた場所が廃墟だったからだろう。
あの大きさで屋内を動き回るのは難しい。それか見られたくはなかったか、か」

『それに恐らくミッドチルダ系の魔導師では無いですね彼女。
ミッド式やベルカ式の魔導師の持つデバイスであの様なロボットの様な物はありません』

まぁ確かに、俺が知っている限りであんなバリヤジャケット?を使うヤツはいない。
つーかアレはバリヤジャケットなのか?なんか全く違うものの様な気がする。
とはいえ、確かに主流とは言い難いモノではあるな。

「しかし主流では無いだけでありえるかもしれないぞ?」

『だとしても無駄すぎます。第一あれでは外では良くても室内戦で不利です。
また管理局を含めてミッド系の魔導師は質量兵器を嫌う傾向があります。
あれはその質量兵器に見てとれなくもないかと・・・不思議です』

確かに・・・だとするとあのアリス嬢が纏っている強化外骨格もどきは一体何だ?
あんなのを作れるような人間なんて・・・俺はＣＷ社の人くらいしか知らないぞ。

だが定期的に連絡会のようなモノをもっているがあんな面白そうなモノを作っていたという話は聞かない。

機密だから教えてもらえないだけかもしれんが、それなら外に出ている方が不自然だ。

だからその線は消える。第一技術はあっても義足なんか作る様な人手はないしな。

あと考えられるのは医療関係か？どうやら彼女は義足の様だしな。

『義足？ああ、確かにサーモで見るとあそこだけ人の体温ではありませんね』

「ヴィズは便利だな。俺は動作とかで辛うじてだ」

『・・・動作でそう言うの解るんですか？』

「おいおい、ある程度のコンバット・トラッキングは一応収めてるんだぞ俺」

『コンバット・トラッキングって、あの色んな痕跡から敵を追跡したりする技能のことですよね？はっ！まさかマスターは足跡だけで相手が如何言う人間か判るんですか！？』

「いや、流石に本職のトラッカーじゃないからそこまでは・・・」

でも何で判るかって？そりゃ俺がどれだけヴィズの開発に携わったと思う。

基礎フレーム以外全部だぞ。そりゃ最初の構想は父上だが、他は全

部俺だ。
まるで完成系が見えないパズルを一人で組み上げるかの様なことをしたのだ。

それにヴィズは外骨格の流れを汲む特別製の強化外骨格デバイスだ。
当然、これまでにもあった外骨格の技術を知らないと組み立ても出来やしない。
だから俺はある程度そういった技術にも覚えがあるってだけだ。

またこういう外骨格等の技術は医療系からの派生が多い。
当然義手や義足の技術からの転用もあるのだ。関節とかの形状とかね。
そんな訳で一応俺も人の形を取っているのだから、そう言うのに詳しくないと、な。

しかし治癒魔法はあまり得意では無いのに外科や人間工学に関しては妙に知識があるとはこれいかに？
つーか俺以外にあんな強化外骨格のような物があるとはなぁ。
でも外骨格を使う魔導師なんて聞いた事もない。

アリス嬢、君は一体なにものなんだ？

「・・・とりあえずここで思考しても判らん。彼女を迎えにいこう」

『ま、少なくても敵では無いのですしそれが無難ですね。“知る必要のない事”と言われるかもしれませんし・・・・』

Ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｋｎｏｗってワケか・・・まぁ俺も聞か

れたくない事はある。
今の彼女は味方、ソレだけで良い。邪魔になるなら排除するだけだぜ。
・・・出来ればそうならない事を祈るぜ。

「（此方アリス。貨物船に近づいた。フェン、何処にいる？）」

おや、かなり念話の聞こえがいいな。
ふむ大分近づいたから念話が大分クリアに聞こえる様になったようだ。
薄暗いが彼女が飛行する際に発生している魔力光で何処にいるのかはよく見える。

どうやら甲板の上に直接着地する気らしく、速度が徐々に遅くなっていく。
・・・垂直離陸とかは出来ないのだろうか？もしそうなら少し不便そうだ。
まぁ脚部噴射ダケじゃバランスを取るのにも思考をさく必要があるだろう。

どうせならウィングバインダーのようなバランスをとれる機構をつければいいのに。
というか装甲が無いのは怖くないんだろうか？
俺みたいにゴツイ装甲で固めた方が安心・・・いや女性にソレは酷か？

・・・・・・。

いかん、どうも技術屋というか研究者的な方に思考が持っていかれる。

『甲板まで７ｍ、５ｍ、３、２・・・タッチダウン。お見事です』

さて、オイラがそんな風に考えている間に彼女は甲板上空に到達した。
そして、ふわりという音が聞こえそうな感じで柔らかに甲板上に着地する。
見事なタッチダウンである。結構手慣れているあたり前からああなんだろう。

彼女は意図してかそれとも無意識か、俺のすぐ目の前にまで来て機体を停止させた。
図らずも俺は彼女を見上げるような構図となる。
・・・手足がデカイと威圧感も結構あるもんだ。

「・・・ようこそ下種共の肥溜めに。茶は出ないがゆっくりしてけ」

「ゆっくりはしていきたくはないがな。まぁ此方に黙って色々としてくれた少年のお陰で疲れてはいるが気遣いは無用だ。とっとと取りかかりたいね」

敵への皮肉を言ったら俺の皮肉で返された。
ま、別に良いんだけどね。事実だし。

「アラモの砦ってか？後篇」

「アラモの砦ってか？後篇」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅアリス

なんとかシステムによる“酔い”が消え、廃墟の連中を捕縛した後。
私はフェンと連絡が取れなくなっていた事に気が付いた。
戦闘系に特化した私に場合、念話及び策敵が非常に拙い。

そのため離れてしまって繋がっていないのだろうと思い念話の出力を上げた。
確かに離れてはいた。最初は廃墟近辺、返信がないのでさらに上げて島周辺。
それでも返信が来ないので焦って限界まで上げてようやく繋がって見れば――

「（・・・あー、すまん。そして、まことに言いづらいのだが――いま自分は貨物船にいる）」

――――コレである。思わずはぁ？と声を上げてしまった私は悪くない。

まさかと思いレアスキルで遠くにうっすら見える貨物船を見てみた。すると如何だろう、あの小さな魔導師は貨物船の甲板で呑気に煙草を吹かしていた。

私が敵を警戒している間に何やってくれているんだと憤慨し、思わず八つ当たり気味に机をけり上げて粉砕してしまったのは余談である。

その後、我にかえりとにかくそこに行くと言って空に飛び出した。久々にパワードジャケットを使っての飛行は真っ直ぐ飛べば安定するので意外と楽。

だけど飛んでから気付いたんだけど・・・ＰＪの姿、見られちゃうんじゃない？

ハッとしても既に遅し、そのときすでに半分ほどまで来ていたので今更戻れない。

ときどき動揺してポカをやらかすのは誰の遺伝なのかしらね？

まぁ私の遺伝子提供者はあのラプターさんしかいないんだけど・・・。

そう言えばときどき普段はしない様なミスで転んだり失敗してたっけ母様。

・・・・・・・。

ま、まぁそれはさて置き、今更戻る訳にもいかない。
ならどうするかって話だったわよね？

・・・別に如何と言う事はなかった。
この姿は切り札だけど秘密にしてたって訳ではなかったもの。
幾つか調整が済んでいないシステムがあるから、普段は使わなかっただけ。

まぁ見た目が管理局の人達の言う質量兵器に見れなくもない。
だから、そう言うのがダメな人には嫌煙されそうだけど、私の勘はフェンは大丈夫だと言っていた。

何でかは解らないけど・・・多分あの子の廃墟での行動の所為ね。
とにかくそんな訳でＰＪの姿のままで飛んできてしまった私。
そのまま上手く速度とバランスを保ちつつもフェンの目の前に着地した。

ＰＪの欠点は着地時のバランスの悪さと操作の難しさだと思うわ。
調整したいけど、私はそう言う技能を持っていない。
私が造られた理由があくまで戦闘目的だったから整備くらいしか出来ないの。

母上や父上と過ごしたのだから少しはマシになったんだろうけど・・・。
実際過ごした時間ってあの世界が崩壊するほんの少しの間だけなのよね。
それにあの二人に心開くまで、ちょこっとだけ時間掛かったし――

―。

と、それよりもフェンはどんな反応を示すかしら？
そう思い彼の方を見てみたのだが――あれ？反応が薄いわね。
もう少し子供らしく目を輝かせるかと思ったのだけど・・・。

いや別の意味でランランと輝いてるわね。
でもその眼は子供と言うよりかは研究所の研究者？
・・・ううん、父様のマッドモードの時と同じ目だったわ。

いやまぁ、変な眼で見られるよりかはずっとマシだけど、なんだかなぁ・・・。

「・・・ようこそ下種共の肥溜めに。茶は出ないがゆっくりしてけ」
「ゆっくりはしていきたくはないがな。まぁ此方に黙って色々としてくれた少年のお陰で疲れてはいるが気遣いは無用だ。とっとと取りかかりたいね」

――だからつい皮肉を皮肉で返しちゃった。

微妙に勝手に行動してくれた子に対する私怨も入ってるけどね。
まぁ私たちは飽く迄協力者であり、上下関係のようなモノは存在しない。
あくまでも同じ境遇にあい、それでいて動ける人間同士として協力し合っただけ。

言い方がすこし淋しいが事実なのだし気にしない事にした。

……

……

さて船の中を制圧、というか探索する。
どうも私が来る前に殆ど制圧してしまっていたらしく、折角来たのにやる事が無い。
これで見た目は小さな子供だというのだから詐欺だと叫んでしまいそうだ。

なので仕方なしに恐らく船長室だったと思う部屋で証拠漁りをしに向かった。
尚、デバイスは節約モードで小さくしてあるので船内でも普通に動ける。
機能は殆ど無くなるがＢＪレベルの防御力はあるし、魔法演算も出来る。

それはさて置き船長室を探し出し、室内を捜索したら出るわ出るわ。
金庫らしき所からは申告して無いだろう大量の金が。
机には無造作に密輸品の作成リストが起きっぱなし。

本棚には今までの売れたものの販売リストまで半ば放置の感じで積み重ねてある。
あまりのおざなりさに眩暈がした。情報管理というのは形だけだった様ね。
これだとまるで見てくださいって言っているようなものじゃない。

――――他にもまだまだあった。

武器庫と思わしき場所からは、銃火器からナイフや刀剣などの質量兵器。
なんでナイフがと思ったけどどうやら只のナイフではないらしい。
何せ手から落しただけで鋼鉄製の床に柄の部分まで入り込んだのだ。
如何考えても一般には先ず出回ることなんて無い軍用の斬鉄ナイフです。
危険物なんてもんじゃありません。ウルトラスーパー危険物です。
この武器の山の中で何故かフェンは彼の背の高さの倍はありそうな無反動砲を眺めて感慨にふけっていたけど、何でなのかしら？

それはさて置き、今度はブリッジのメインＰＣにフェンはアクセスしようとしていた。
このＰＣにさえアクセス出来ればこれまでの航路データが判る。

そのデータさえあれば今まで何処で商品の受け渡しをしていたのかも判る。
そうすれば犯罪組織一斉検挙も夢ではなくなるのだ。

もっとも私はそう言うのが出来ないのでフェンに任せっぱなしだっ

たけどね。
・・・こっちに来てから出番が無いわ。ホント。あ、そう言えば――

「なぁフェン」

「・・・なんだ？敵の増援でもやってきたか？」

「いや、それはないが・・・なんで聞かないんだ？」

「それはどれのことを聞いている？主語を省かれてもわからん」

「いや・・・なぜ私のＰＪ――いやデバイスについて尋ねないんだ？」

それが不思議であった。
この子も魔導師であるなら私の持つＰＪの異様さに気が付いている筈。

私を最初に保護した管理局のあの方たちも驚いていて如何言うものか聞いてきたのだ。
だけどまったく訪ねてくるそぶりを見せないことに、私は不思議と疑問に思い聞いてみたのだ。

すると彼の方が逆に驚いたような目つきと苦笑をして返してくる。
・・・絶対子供が見せる表情じゃないわよ、それ。

「ほう、そのデバイスはＰＪというのか。ああ別に興味が無いわけじゃない」

「なら――――なんで訪ねなかった？」

「・・・あんまり人の身体のことについてズカズカ訪ねるような無粋はしないだけだ」

「・・・・・いつから気付いていた？」

「それはその身体のことか？それともそのデバイスのことか？」

その返しを受けて、私は言葉に詰まってしまう。
両方聞きたい様な、それでいて聞きたくない様な・・・。

「――最初からだ。義足についてはな」

「一応カモフラージュスキンは完璧だったはずだが？」

「昔の職場にも似た人がいてね。判るんだよ。本物と違うってのがな」

もっとも、基本的そうなると内勤になっていたが――とフェンは語った。
・・・どういう職場にいたのかとか、その年で就職！？とか思いましたけどね・・・。

「デバイスだと判ったのはさっき飛んできたからか。それまでは只の精巧に出来た医療用の機械式義足だとばかり思っていたよ。だがこれまた随分とケッタイな魔導機だ。少なくてもミッド系の魔導師の発想では――いやすまない。俺が詮索すべき事では無いな」

「そこで謝られても困るのだが・・・まあいい。どうだ？アクセス出来そうか？」

「いやどうにも無理そうだ。妙にファイアーウォールだけ硬い。専用の機器でも無いと・・・とはいえ俺のデバイスでも突破出来ないＦＷとか如何なってんだ？」

首を横にコテンと倒しながらフェンはそう呟いていた・・・ちょっと可愛い。
でもそれだと航路データが得られないから取引場所は不明という事になるのね。

「そうか、なら仕方が無い。幸いコレだけの物証があればコイツらだけでも検挙でき」

「いや待ってくれ、もうすぐアクセス可能になるかもしれない」

「・・・？それは――」

「機器が“出向いて”くれたらしい。ちょっと出迎えてくる」

「え？いや待ってフェン・・・もう」

そう言って部屋から出ていくフェンを追いかけた。
もう、突然ふらっと居なくなるなんてまるで風ね。
そんな事考えながらフェンを追ってデッキに辿りつく。

しかし機材が出向くとは如何言う事なのかしら？
一応通信室を利用して管理局に通信を送ってはある。
だけ来るまでにはまだ時間が掛る筈だし、だとすると――

「フェン、機器が来るとは如何言う事だ？」

私の問いに彼は答えなかった。ただジーっと夜の湖の上を見ている。
そちらに目を向けると何かがうっすらと湖面の上を滑走しているのが見えた。
なんだと思い、レアスキルを使おうと集中しようとしたその時。

「・・・来た」

「え？」

来た？来たって何が？

「アリス嬢、そこどいた方が良い」

「退く？何を言って――――」

――――鈍ッ！

私がそこまで声を発した時だった。
船べりから大きな影が飛びあがり、私のすぐ目の前に着地したのだ。

「ひゃん！？」

思わず変な声を上げて後ろに転んでしまう。
カシュンカシュンと金属がこすれるような音を立てる影は一体何なのよ！？
そう思って転がって近くの荷物の影に飛び込みつつ影の方を見た。

そこにいたのは多脚生物の様な外観をした機械だった。
生物的でありながら機械的な直角の装甲を持つ相反する面を持つ機械。
強いて言うなら蜘蛛に似た機械のゴーレムがそこにいた。

「な、なんなんだコイツは！？」

私はフェンに向かってそう叫んでいた。
発する声が荒くなってしまうのは仕方が無い。
だっていきなり驚かされたら誰だって声を荒げてしまうもの。

「言っただろう。機器が来ると。コイツらはシラン。量産型シランシリーズだ」

シラン・・・シラン？

「シランだと？まさかコレが噂のサポートメカのシラン？」

聞いた事があった。
数カ月程前にあった密輸組織の一斉検挙。
その事件において孤立した武装隊を救出したという蜘蛛型魔導機械の噂である。

それらは魔力で駆動し決められた魔法プログラムを使う事で非殺傷を実現したらしい。
またその後の制圧において武装した犯罪者を圧倒するほどの性能を示したという。
さらには自爆装置を解体して情報が自爆と共に吹き飛ぶ事を阻止したという。

それらを成し遂げたのは、たった十数機の魔導機械であった――という噂。
そして、その魔導機械の名称が“シラン”であったと私は記憶していた。
噂と言うがすでに試験的に実働部隊である武装隊に何機か配備されている。

しかもかなりの成果を上げているらしく、注文が徐々に増えているのだそうだ。
私が今お世話になっている部隊でも是非配備して欲しいと上層部に打診していた。

それで、私の目の前にいるのがそのシラン？噂の？
何と無く私はもう一度シランの方をジッと見てみた。

噂で聞いた程度ではあるが、確かにシランと呼ばれていた魔導機械の特徴と一致する。
しかしあの機体は管理局に魔導機器を卸している魔導機器メーカーのＣＷ社が管理局に貸していると聞いていたんだけど・・・。

「そこのお前だけついて来い。外から配線に直接アクセスして航路データを入手しろ。他は出入り口を警戒。行け」

【了解了解】

・・・・・。

如何言う事だろう？フェンはＣＷ社と何らかのつながりがあるのだろうか？
大体この蜘蛛型の魔導機械であるシラン自体は個人向けに販売はされていないらしい。

到底個人で持てる様なモノでは無い・・・ならフェンは何故それを持っている？
考えられるとすれば、多分これしかないだろう。
――私は勇気を出して聞いてみることにした。

「フェン、君は確かドミトーリ社の人間と言ったな？ドミトーリ社はＣＷ社の下請けか何かか？」

「はは、下請け？ないない」

あっさりと否定されてしまった。それはそれで何か悔しいわね。

「コイツらを開発したのウチだし」

・・・フェン、大丈夫か？

「おいおい、なに胡散臭そうな眼で見てる？まぁ良いけど、実際開発したのは事実だぞ？」

「だがＣＷ社が管理局に売り込んでいると聞いたぞ？」

「ウチみたいな名前も知られていない弱小企業じゃ相手にして貰えないからな。ＣＷ社には個人的な伝手があったから共同開発ってことにして貰った。外装フレームだけでも生産ラインを使わせてもら

えるからウチとしては大分楽になったよ」

でも内部機構は全部ウチが手掛けてるけど――とはフェンの談。
なんとまぁ、もはや言葉が見つからないがコレだけは言える。

「フェン、君は本当に子供らしくないな」

「褒め言葉だな。ありがとう――はい、航路データ一式おまち」

そう言って彼は私にシランから受け取った記憶媒体を渡してきた。
私たちが会話していた僅かな間に外壁に取りついたシランが回線に直接侵入。

そのままハッキングしてデータをダウンロードしていたらしい。
・・・一応量産型と聞いていたが、ハッキングまでこなせるとは・・・。

「・・・貰っておこう。これを解析すれば色々と判るだろうからな」

「是非そうしてくれ。こう言う奴らは居なくなった方が社会の為だ」

「意外だな。お前なら自分で制圧しに行くかと思ったが？」

「社会的に信用があるとされる組織がやってくれた方がゴタゴタが少ないのだよ」

「ふむん・・・やっぱり子供らしくないな君は」

「褒めるな褒めるな――それじゃ自分はそろそろ帰るかな」

そういってシラン達に指示を出しているフェン。

え！ちょっと待って――

「おい！この事件の重要参考人だろう君は！」

「・・・証拠品もデータも渡したのだからこれでちゃらには出来ないか？」

「そうはいかない。君の身元も特定しなければならないしな」

これまで接していて極端な事をするが悪い子ではない事は判っているのだ。

だがだからと言ってそのまま見逃すという話にはならない。

彼の身元を特定して保護者の元に送るまでが管理局の仕事であろう。

一応管理局は警察機構の様なものなのだし、嘱託とはいえ私も管理局に協力する立場。

そのまま調書も取らずに帰してしまう訳にもいかなかった。

「うーん、それは困る。すぐに帰らないと彼女らがなぁ」

「（彼女ら？）――とにかく私と一緒に管理局の詰め所に来てもら

うぞ」

「いや、俺の身元なら一応管理局に問い合わせれば判ると思うぞ」

「だとしても、勝手に帰られては困る」

「・・・それにあの姉妹の耳に入るだろうから管理局のとこに居たく無いし・・・」

「おいボソボソと喋られても判らんぞ。兎に角勝手には帰らせないぞ」

私はそういって彼の襟首をつかもうとした。
だが彼は私の伸ばした手からするりとぬけだした。

「・・・こら」

「すまんな。だがそろそろ戻らないと本当にヤバいのでね」

念話がガンガン掛かってくるんだと若干肩を震わせているフェン。
どうやら若干怯えているようであるが、何時の間に念話をしていたのかしら?
いやまぁ念話は指定した対象相手じゃないと何しゃべってるのか判らないけどね。

「だから、勝手に帰るなと――って手すりから乗り出すな!」

フェンは私から後ずさって距離を取ると船べりから身を乗り出していた。
貨物船だけあり今いる場所は上部の甲板デッキである。
当然眼下の水面までかなりの高さがあるからもし落ちて叩きつけられたら！
私は慌ててフェンをそこから降ろそうとした。

「それじゃアディオス。アリス嬢」

「やめっ――――」

だがフェンはそう言うと、そのまま重力に従い――――自ら飛び降りた。
私は突然のことに、彼が魔導師である事も忘れて慌てて船べりに駆け寄った。
船は停泊しているし、風が吹いている訳ではないので周辺はとても静か。

すぐに水音の一つ聞こえてくるものだと私は思っていた。
だが、着水した時の大きな水音は聞こえなかった。
代わりに聞こえてきたのは私も良く知っている魔力スラスターの排気音。

それは魔法で空気の流れを操り、超音速の気体を魔力残照と共に吐き推進する装置。

当然のことながら生身の肉体では使えず、専用の機材が必要で扱いが難しい為、空戦魔導師であっても使用しないそれは、私の様な特殊なデバイスを持つ人間。

つまり機械による支援を受けられる人間でしか使えない筈なのに・・・。

そう思ったが早いか、私のそばを別の陰が駆け抜けていった。

シラン達だ。今まで警戒やデータ回収を行っていた機械の蜘蛛達が散っていく。

脚部に魔法の力場を造りアメンボのように水上を滑走していった。

それらの先頭に立っていたのは、真っ白な姿をした機械式鎧。

そう、彼は・・・会いたくて、会いたくて、恋い焦がれた・・・私の――。

「・・・・・あっ」

ふと背後にトンと何かが当たる様な感じに私は振り返っていた。

背後に壁がある。いや、何時の間にか私が後ろに下がり過ぎていたのだ。

周囲には音一つなく、時折水面が風に吹かれて波打つ音が聞こえてくるだけ。

さっきまであった人はそこにはいない。ここにいるのは私だけだった。

人生は奇なり、何時かの偉人がそう言っていた。

まっことその通りだろう。まさか、まさかとっくの昔に死んでいたと思っていたのに。

「生きていたのね・・・兄様（あにさま）」

思えばその姿はあの世界から消えた時の記録の姿と全く変わらない。
黒い長髪を結った童姿の小さな英雄、私の兄と呼べる存在。
どこか既視感を感じたのはその所為だったのね。

「ははは、ははは――――あはははははっ！！！」

ドサリと背後の壁を背にしてそのまま崩れ落ちる様に座りこんでしまう。
そして気が付けば、私の口からは笑いがこぼれていた。
まさか会いたいと願っていた同郷の人間の最初の接触が、面識のない家族だなんて。

本当におかしくてたまらない・・・この手で触れられたのだ、触れたのだ。
一度は知りたかった温もりなのに・・・私は彼に気が付かなかった。
そして気が付いたときには、兄はまた遠くに・・・私の知らない所に逃げてしまった。

「ははははは――――――は～・・・鬱ね」

もう、何で気が付かなかったのよ！コンの馬鹿アリス！！

せめて住所くらい聞いておきなさいよ！そうすれば・・・あ、でも
――――

「あ、そうだ。兄様は私の存在自体しらないのか・・・鬱だわ～」

兄様より後に製造されたために私たちに面識なんて無い。
って事は例えあの場で私はアナタの妹ですと言っても信用なんかされない。

というか、あの場でそれを言ってもアンタ何言ってんだって目で見られるわ。
いや、最悪・・・変態とか頭可哀そうな人とかに間違えられたりとかしちゃう！？

「あ～もう！ウツダワ～・・・・・」

ごろんとそのまま甲板の上に寝そべった。
溜息を吐きながらスッと目を閉じて、また開けて夜空をジッと見つめる。

周囲に明かりも雲がなく、遮るものが無い夜の空はとても綺麗な星空だった。
そして不思議と、星空を見ている内にもやもやとした感じが薄れて冷静になってきた。

「まさか、ホントに同郷の人間がいるとはねぇ・・・」

しかも血の繋がりというか遺伝子的繋がりはあるのよね。
そう、会えたのよ。もう合う事はなく先に逝っていたと思っていた存在に・・・。

「・・・・・ま、管理局とも渡りがあるみたいだし、生きていればまた会えるわね」

私はそう前向きに考えることにした。だって相手は生きていたのだ。
幽霊とかゾンビーとか機械の身体とか、そういうＳＦめいた存在ではない。

暖かい血の巡った生物として、確かに触れられる存在としてそこにいたのだ。
・・・・人造でも使い魔とかのような魔法生物は除くわよ？ややこしくなるから。

とにかく生きていたならまたいつか会えるし、やろうと思えば探し出すことも可能だ。
なにせ彼は私に色んなキーワードを残してくれたのだ。

「“ドミトーリ社”“量産型シランシリーズ”・・・これを辿ればきっと・・・」

またいつか会える。
私はその事を胸に私の日常へと戻っていった。
またいつか会いましょう、私の兄様。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称？

～ＤＤＳ－１・キャビン区画～

「ただいまー「「遅い！」」」・・・えっと事件の後処理を――あ、いえゴメンナサイ」

帰ってくるなり般若と化している家族に別室に連れて行かれるフェン。
そして“チキチキ説教レース～リンの涙で精神がマッハ～”が始まったのだった。
半日後ようやく解放され、その後の数日は憔悴していたのは言うまでも無い。

「アラモの砦ってか？後篇」（後書き）

これにてオリジナルストーリーのアリス編は終了。

しかし言っていたのとは大分ちがい随分手間取りました。

次こそ原作キャラ達との絡みを掻くんだ・・・。

それでは失礼（´・ω・、）ノシ

「平和・・・平らな和みってか」

「平和・・・平らな和みってか」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

俺が人攫いされた日から数えて、およそ数ヶ月の時が経過した。そして気がつけば、この世界にきて一年近く経ったということになる。時が経つのは意外と早いもので、それに己が気がつくのはこういった何らかの節目があった時くらいだろう。感慨深いものである。

以前と比べれば自分の変化は目覚ましく、肉体の外見こそ変わらないが力は段違い。魔法はリニスやリインフォースに、技量は守護騎士たちに習ったのだ。これで成長しない道理はない、少しは今の自分を誇ってもいいのだろう。もっとも最近は別の問題を新たに発見してしまった事で、考えんでもいいのに俺のオツムが勝手に思考してくれた所為で若干憂鬱な気分ではあるが・・・。

肉体の状態に精神が引っ張られる、そんな話を聞いたことがあるだろうか。何らかの理由で肉体が変化した場合、その変化した肉体に収まっている精神。この場合は魂と置き換えてもいいかもしれないが、変わってしまった肉体に適合する為にその姿相応の思考、構造を取り始めるというもの。

これはある種の環境への適合というふうに取ることが出来る。あるいは成長や進化、もしくは退化という必要のないモノを淘汰する現象か。未成熟であるが故の適応とも呼べるかもしれない。

しかしだ、それは肉体の向上する変化。すなわち成長するという要素がからむからこその適応である。果たして、人器の軛から解放されてしまった自分は普通でいられるのか?成長しない肉体を持った自分は常に変化していく周囲の環境に適合できず消え去るのでは?答えは出ない。

インテグラル思想を提唱したアメリカの哲学者ウィルバーも人間の心理が3段階で発達する事を述べたりした。だが最初から発達した精神が誕生から少年期のプレパーソナルの段階に定着している事例なんて知らないだろう。自我を構築する段階に既に完成された自我が入った状態。

果たしてそんな存在がそのままのパーソナリティ、すなわち自己を保ったままでいられるのだろうか?肉体に合わせた精神の逆行、退行現象に近い事が起きるのではないか?興味は尽きない。

時折、俺はそう言った突拍子もない事に無駄に思考を割いて恐怖する事がある。肉体的な死は薄くなった。だがそれ以上に精神的な死が付きまとう。だがそれ以上に恐ろしいのは、その件に対してま

るでモルモットを観察しているかの様な自分を発見する時だろう。

怖いもの見たさというか、恐怖への知的好奇心とでも言えば良いのか。ある意味無意識の怖いもの知らずというのも死亡フラグ立ちまくりである・・・最も、肉体が無くなっても蠢いている連中を自分は知っているのだが・・・。

その所為か最近段々そんな事考えるのがアホらしくなった。どうせ今の所何ともないのだし、もしかしたら魔法という不可思議な力で精神も固定化がなされたのかもしれない。

――これからも経過観察を続けていこう、面白い事になりそうだ。

＊＊＊

さて先程まで思考が微妙にマッドっぽかったところはスルーするかねぇ。ああいったのは発達心理学とか現代哲学者が考える様な事柄だからな。元より戦う事ばかり考えて来た俺が考えた所で良い答えが出るとは思えん。

――なので、仕切り直しして最近の事を少し述べようとおもう。

さて、ここ最近は特に変わったことも無く平和に労働に勤しんでいた。その仕事とはドミトーリ社としての研究開発。あとはＰＭＣっぽく戦闘インストラクター等が主な仕事だ。戦闘インストラクターの仕事は長期間の訓練とかが多いので、訓練の様子などはつまらないから省略させてもらうが、まぁＵＳＮ式を一般人がギリギリ耐えられるレベルに落としたといっておこう。

それでも魔導師向けと一般人向けに分けられるんだが、閑話休題。

さて、その日は仕事もなく俺は久々のオフの日だった。特にすることなく家のリビングにいたヴィータ姉とだらけながら世間話をしていた。何せ明日からはまた予定が入って3週間ほど留守なので、だらだらできるのは今だけだ。

なぜ彼女が家にいるか？ヴィータ姉だって四六時中ゲートボールをしているという訳ではない。そうなるとこういうオフの日は基本的にお互い家にいるため一緒にいるという訳だ。それに世間では普通に休日だから、特に問題はないぜ。

「暇だなぁ」

ヴィータ姉は窓の外を見ながらそう呟く。今日は外の天気はそれほど良い訳でもない。風が吹いて寒いし、老人会も基本家にこもる方のほうが多かろう。その所為でヴィータ姉はお得意のゲートボー

ルの相手もいない。だから暇なのだ。かといって地下施設で模擬戦とかするというのも何か違う気がして興が乗らないのだろう。

毎回防御が硬いからと的にされる俺からすればありがたい限りだ。

「何時も暇じゃないか、今のヴィータ姉は」

「う、うるさいな。来月管理局のほうにいけるから良いんだよ」

「つまりそれまでは暇人」

そういうと生意気なー、ヴィータ姉が俺の米神をぐりぐりしてくる。堪忍してーと嫌がるそぶりを見せたがお構いなし。折角結った髪までぼさぼさにされつつじゃれ合いとなった。これ遠目からだと、赤い髪の女の子が黒髪の男の娘とじゃれ付いているように見えるだろうな。ん？なんか漢字変換にミスがあったような気がするが気のせいか？

まぁそれはさておき、ヴィータ姉が普通の少女ならよかったんだけど・・・。

「ほれほれ、ぐぃー」

「うにー、いた、いたたた！」

彼女はベルカの騎士、戦闘ができる魔導師なので力が半端ないの

です。つーかじゃれるのに肉体強化使わないで、痛いの、ほんとに。少ししてやっと開放してくれたが、ちょっとだけ額が赤くなっちまった。

「もう、結構痛かった」

「悪いな。あたしは楽しかった」

さいですか。俺いじりでも暇つぶしにはなったんでしょうね。しかしまぁ俺も忙しいときは本当に急がしいのだが、我がドミトーリ社は設立してからまだそれほど時間が経っていないから、暇なときは本当に暇だ。

時折、管理局に貸し出している量産型のことで話が来る以外は特にないからなぁ。もちろん暇なときは合間にヴァンツァーとかシランとかデバイス開発もしてるが・・・今日は研究開発とかの気乗りがしねぇからなぁ。だから暇だってことだ。なのでのんべんだらりと煎餅を齧りながら過ごそうと思っていた矢先。

＜よぉー、呼ばれてないけど遊びに来たぜー＞

あれ？どこからともなく幼子の声が脳内に響いてるんですけど。この脳みその中を揺るがすような赤子の声はまさかっ！？跳ね上がるかのように顔を上げ周囲を見渡すが――声の主の姿は見えず。

「フェン、どうしたんだ？」

「えと、なんでも・・・」

はて？何時もならとんでもない悪戯が来ると思っていたんだが・・・気の所為か？

＜おっす＞

突如、机の中から俺のまん前の位置に幼児の生首が生えた。そう来たか、あえて王道できましたか。本当に驚かすのが好きだなぁ。もはや性なんじゃないだろうか？

んで、とりあえず久々の茶目っ気たっぷりなそれに驚いた俺は――

「どっせい！」《バンッ！》

「にゃ！？」

＜ぬぉっ！？＞

テーブルに生える頭部に目掛けて腕をたたき付けていた。若干手に魔力をこめていたことに一瞬ハッとしたが、何とかテーブルは壊れなかったことに安堵した。だけど俺の奇行にヴィータ姉は驚いた

ようで、鋭い眼でにらんでくる。

いや彼女曰くそういう目つきらしいが、どう見ても睨んでいるようにしか見えまへんバイ。

「なにすんだフェン！？あたし何かしたか？！」

反射的にとった行動の所為でヴィータ姉に詰め寄られております る。

いや、何かしたかと問われると心当たりは・・・うわぁ、やっぱり目つきこえぇ。

「えぁ、ああ、蚊が飛んでただけだ」

とりあえず、とっさに思いついた無難な回答をする。

とはいえ蚊と言ってみたが、考えれば今の季節的に少し無理があった。

「蚊ぁ？この涼しい時期にか？」

「大丈夫だ。問題ない。大丈夫だとも」

なんかヴィータ姉に不審の目で見られているけど、仕方ないじゃないか。俺だって久しぶりの心霊体験だから驚いたんだぞ。ここ最

近てんで現れないから油断してたんじゃ。いやマジに。

＜おお、驚いた。流石の赤さんでも押しつぶされるかと思っちまったぜ＞

「（赤さん、いきなりそういう系の登場されると心臓に悪いんだけど）」

＜いい若いもんがナ～ニ言ってんだ。気合が足りねぇんじゃないか？気合＞

「（いや、気合って・・・死人に気合も何もないと思う）」

机に生えた生首の正体は、見た目は赤子、中身は高齢者の赤さんだった。というかねぇ、幼児とはいえ生首が机の中からニュッと出てきたら誰だって驚くだろうに。ってめっちゃ楽しそうな笑顔・・・あ、それを狙ってたのか。

＜まったく久々の登場だってのに、いきなり冥土に送ろうとするかねぇお前さんは？＞

えへらえへらと笑みを浮かべている赤子というのも実にシュールだなと俺は思う。

つーか赤さん、アンタ以前お祓いしてもらっても成仏できないって嘆いてなかったか？

ちなみに今の彼の姿はヴィータ姉には見えていないらしい。なので仕方なく赤さんとは念話で会話をしている。虚空に向けて会話しているの見られたら病院呼ばれちまうからな。魔導師にも見える人見えない人がいるから、見えないフリをするのも大変だ。

・・・つーか幽霊相手でも念話って届くんだな。

＜こんないたいけな赤子を殴りつけるとか人としてどうなのよ?＞

「（赤さんがいたいけなら、俺は可愛らしい男の子だよ）」

＜・・・自分で言ってて悲しくないか?永遠のショタっ子＞

「（やかましい。永遠のベイビーが）」

＜そう、おいらはある意味お前さんの大先輩。さぁ敬えたたえろ＞

「（なぜそこでえらそうにするし?）」

先輩というか先生?まぁ人生経験はこっちの比ではない方ではあるな。

といってもその殆どが死後なんだが・・・なんだかなぁ。

「おい、フェン。さっきから黙ってどうしたんだ?」

「ん?ああいや。なんでもない。なんでも・・・」

＜お、今日はエターナル炉利も一緒か＞

エターナルロリ言うなよ。
大体夜天の書の製造時期から考えると彼女はロリばｂ

《――ギャキ》

「おい、なんかとっても不愉快なこと考えなかったか？」

目の前にゲートボールでもご愛用なさっているアイゼンさんが・・・。

「・・・まぁそれはそれとして」

「お、おい。自然にながすのか？」

「毎回アイゼンさんの沁みに貢献してると、いい加減慣れます」

俺はそういいつつズズッと先ほど淹れておいたお茶をすする。知ってる？血液って生理食塩水みたいなもんだから錆になりやすいんだぜよ？だからグラーフアイゼンの沁みのどれかはきっと私デス。
模擬戦と称して結構殴られたからねぇ。

＜すげぇなお前さん。普通真顔でそんなに流せるもんじゃねぇぜ＞

「え!?いや、そんな筈は!?大体沁みになるほどやった覚えはっ」

「嘘だよ。大体デバイスには常に薄くシールドされている。沁みがつくわけがない」

「嘘なのかよ!?」＜・・・シカトされるのも地味傷つくぜぇ＞

いい反応だヴィータ姉。そしてやかましか赤さん。

大体呼ばれてもいないのに勝手に出てきているほうが悪い。

＜へっ良いんだぁ別に。かまってくれないなら違うとこに行くだけだ＞

おうおう、ぜひそうしてくれ。

＜今度知り合いの町内霊引き連れて地下基地占拠してやる＞

「ッ!?ちょ!」

「?!今度はなんなんだフェン!?」

気がつけば赤さんの姿は見えず。何時の間にか帰られたらしい。

なんて騒がしい存在だ。静かな午後のひと時が台無しになってしまった。くそ、それにしても、あの不可思議存在のことだから本当に

やる・・・まぁ大丈夫だろうけど。

ああ見えて礼節は弁えている。人目に余るようなことすることはないだろう。だがその所為で大声上げた所為でヴィータ姉がビクッとなった。そしてまたもや不審な目で見られている。なにか、なにか良い言い訳を・・・・。

「い、いや。窓の外に二股の尾を持つ猫が」

咄嗟すぎてなんという厳しい嘘をついてしまった。
いくらなんでもコレは怪しいからすぐにバレ――

「化け猫?!化け猫が来たのか!」

――食いついたっ?!いやそういうの好きなのかよ?!

「あ、いや。見間違いだったようだ」

「なんだ。つまんねぇの」

・・・見えている人間からすると、見えないというのもうらやましいんだがなぁ。

＊＊＊

さて赤さんも帰り、その後適当に本を取り出してまったりと過ごしていた。
いやまあ、それはさておいてだ。実を言うとさっきから気になっていたんだが――

「ところで彼女らはいったいなんであそこで絶望にひたっているんだ？」

俺が指差したところにいたのは、魔法少女三人組。
なにやらそれぞれ難しい顔をしていらっしゃるんですが？

「さぁ？あたしが来たときにはすでにあんなんだったぞ」

何時の間にか冷蔵庫から盗りだしたアイスを口にしながらヴィータ姉はそう答えた。いやヴィータ姉。あんたアイス食べるの一日何個とかってリニスに言われてなかったか？あんまり食べるとおなか壊すぞ。まぁそれは横に置いておきまして。

「うう～、だめや～、わからへんよ～」

「えーと、これ何て読むんだっけ？」

「・・・・（ぷしゅー）」

うえから我等が家主、白い魔王、頭から煙を出す黄色い閃光。机に突っ伏して何かしている彼女らから時折、こんな言葉が漏れてくる。その顔には解らない、理解できないといった様相がありありと浮かんでいる。

どんな相手でも正々堂々真正面から叩き潰せるほどの魔法の力を持つ彼女たち。だが、そんな彼女たちでも勝てない相手が今回の相手のようだ。彼女たちを悩ませ、頭を抱えさせるほどのそれはある意味子供の天敵と呼べるだろう。

「宿題、か」

「宿題だな」

そう、彼女らを悩ませている原因。それは学校からの宿題だ。なんだかんだ言って彼女らはまだ義務教育の真っ最中、当然学校にも通っている。学校といえば部活や友達との付き合いもそうだが、その本文は学ぶことにある。

そして魔法少女だ時空管理局に勤めているだ言われている彼女らも、まだ学校に通う女の子なのである。となれば、当然学校からの宿題くらいするのは当たり前である。特になのはは義務教育だけはちゃんと出ろと親と約束しているらしい。

いやはや、それにしてもずいぶんと懐かしいというかなんというか・・・。俺もこの世界に再び生を受ける前、まぁつまりは前世であるわけだが、それから数えると小学生だったのは死んだ日から数えてさらに数十年は前ということになる。

思えば、宿題なんて出さずに野山を駆け回っているクソガキだった。夏休みの宿題なんてドリルはやらずに自由研究しかやらなかった。中学に入ってからはそれの所為で勉強がよくわからず苦労した記憶がある。まぁ授業でノートはとるほうだったから、それで底辺ギリギリはキープできたけどな。

「うう、国語だけは苦手なの」

「やっぱ通信と普通の学校のやとレベルが違うから大変や」

「日本語って、難しい・・・」

「はやてもお前らもなんでそんなに大変そうなんだ?」

っと、俺が懐かしき昔の記憶に思いをはせている間に、ヴィータ姉が彼女らに元に行ってしまった。まぁアイスを食べていただけだし、ちょうど暇だったのだろう。

だがヴィータ姉よ、今の彼女たちは――――

「なにヴィータちゃん？」

「いや、なにしてるのかなぁと」

「宿題や宿題。学校からのめんどーくさーいお勉強の延長や」

「管理局の仕事もしているから、たまに授業を休んじゃってわからなくなるんだよね」

「へぇーそうなのかー」

――――あ、別にそれほどイライラしているわけじゃなかったか。

しかし、あははは笑っているけど、それって結構まずいと思うんだが・・・。

「ふーん、コレがきょうかしょってやつか。ふーむ、ぜんぜん解らん」

「いや、読めるでしょ？ゲームとかする時普通にテキスト読んでるし」

ヴィータ姉はなぜか日本語の習得が守護騎士の中で一番早かった。

たぶんその原因はＴＶゲームだろう。日本のはテキスト読めないとつまらんしね。いや彼女も長い時間を生きてきた守護騎士だし・・・

。

しかし戦闘関連が基本だとすればこういう勉強系はあまり付与されてない可能性もある。でもまぁ、魔法生命体だし？後でプログラムのダウンロードすればすぐに対応可能なのがうらやましいのぉ。

「ふ～む・・・！そうだフェン、コレ解るか？」

「って何故俺にふるし」

なにやら思いついたらしいヴィータ姉の頭に電球が幻視できるんだが・・・。それはさておき俺にも小学生の教科書を見せてくるヴィータ姉。というかなんだその“やって見せてみろ”的な視線は？アレか？さっき驚かしたことへのささやかな仕返しってヤツか？

「ん、どれ・・・ふむん」

とりあえずノートを一枚借りて数回教科書をパラパラめくる。そして問題を解く。一応こう見えても前世もち、スラスラとは行かなくても詰まることはない・・・まぁそれ以外でも簡単に解ける理由は確かにあるんだが。

「――――まぁこんなもんだろ」

ジャスト１０分。素晴らしい。
まぁ事務作業で使う魔法のアタラクシアを使えばもっと早いかな？

「は、はやい。しかも正解」

「教科書を少し見ただけでスラスラと？！しかも両手でペン持って二刀流？！」

「な、なんでなん？いっつも家におるフェンくんが学校行っている私たちよりできるなんて・・・不公平や」

簡単に問題を解いてみせるので三人とも驚きの表情だ。彼女たちの認識であるなら俺は学校には行っていない子供だ。そんな子が自分たちが四苦八苦している問題をスラスラ解けばそう思いたくもなるだろう。

さて、一見すると転生者の能力フル活用しているかのように見える・・・が、少し違う。なぜなら一応この教科書も基本的なことは昔習ったことと変わりない。しかし実は微妙に俺が習ったころと違う内容となっているものもあるのだ。

例としては社会だ、こういうのは近年の発見により微妙に内容が異なっている。平行世界の人間でおまけに彼女らより古い世代で習ったので、今まで源頼朝といわれていた絵がまったく違う武将の絵だったなんてさっき読んで知った。

だが、それにしても――

「三人とも魔導師ならコレくらいできてもいいだろうに」

「ま、魔法を使うのと勉強は別物だよ～」

「フェンは本当にその教科書見るのはじめてなの？」

フェイトがそう訪ねて来たが、確かにこの世界の教科書を見るのは初めてだ。

第一、俺がいたのは公立であんたらは私立だから少しばかり量がちげぇんだぜ。

「間違いない筈や。コレまで見せたことあらへんし・・・なにかしたんやろ？」

はやては断定かよ。まぁ確かに“した”けどさ。

「ああ！あたしにはわかったぞ！」

三人がまたうーむと考え込んでいると、横にいたヴィータ姉だけが声を上げる。

おや？ヴィータ姉だけは気がついたのか？

「フェン、お前は――――瞬間記憶能力者だな！そういう人がいるっ

てこの間テレビで見たぞ！」

ズビシッと指を刺してくるのは良いが、残念ながら違う。
ってよく見たらほかの三人までおーって顔してるし・・・。

「いや、残念ながら瞬間記憶能力者ではないよ。ただの魔導師だ」

そういうと余計に混乱したのだろう。４人とも頭にはてなマークが幻視できそうな感じで頭をひねっていた。いや、お前らも魔導師なら少しくらい気づけよ・・・。

「まさかとは思うが俺がなんの技術もなしに解いて見せたとでも思ったか？」

「え、じゃやっぱり何か小細工でもしてたん？」

そりゃ、ねぇ？いくら俺でも小細工もなしには瞬間記憶なんてできまへんがな。そろそろかわいそうになってきたので、俺はねた晴らしをすることにした。俺が簡単に教科書の問題をといて見せた理由、それは――マルチタスクだ。

そう言うとなぜかえーと微妙に残念そうな顔をされた。何でだと聞くと、俺のことだから何かよくわからない魔法でも使ったのではとのこと。失礼な。マルチタスクだって立派なチート技術であることをこいつらはわかっていない。

「だって、マルチタスクって普通に使えるし・・・」

「なのはよ。それは使えているのであって使っているではないんだぞ？」

「・・・え、えっと、だから使ってい・・・あれ？」

「な、なのは！難しく考えなくても大丈夫だから！」

「そうや！きっとフェンくんのことやし面白・・・ううん、何かしたんや！間違いない！」

「断定か・・・解った。とにかく俺はマルチタスクを使った。それだけ覚えていればいい」

まぁとにかく種明かしをすると実に単純な事だ。マルチタスクで記憶しつつ、記憶した内容を脳内で並列させて反復練習しただけである。見た瞬間に複数のタスクを展開して、問題に当たったのだ。

勉強というのは基本的には反復練習だということは知られているだろう。反復することで脳がそれを記憶し、場合によってはある特定の行動。つまりは反射的に使えるくらいにまで消化できるのである。

これを脳内に複数の思考を同時に処理するマルチタスクを利用すればあら不思議。常人ならば一度にできない反復連取を何十回分も水増しして練習できるのだ。それに教科書をパラパラ見るのだって、

近接技能もちなら視神経くらい強化できる。これとマルチタスクを併用すれば、あたかも俺は天才少年のように見えるという訳だ。

――――ネタが解ればなんというか、実に単純かつ稚拙なものである。

「うう～、またフェン君に嵌められた～」

「嵌めたとは随分な。ただ単に魔導師の可能性を提示したに過ぎない」

「でも勉強って自分の力でやるものだって母さんもいってたよ？」

む、それは確かにそのとおりではあるが・・・。

「自分の力とはどこまでのことを指すんだ？魔法の技術もいわば自分の力だぞ？」

「いや、なんにしろ。コレは普通にずるいやり方だろ。あたしはそう思うけど？」

「さすがフェンくんや。おかげで今までの苦労がなんやったんやとヤル気が降下してくで」

あ、あら？勉強の手っ取り早い身につく方法を教えただけなのに、何でか俺が悪者？でもまぁ、確かに少し考えなしだったか？他の子たちは自分の力だけで頑張っているのに、自分たちだけ特別なやり

方で学ぶというのも気が引けるものなのだろう。形振り構わなければ何でもやった俺とは違うんだな。

「・・・ごめん。確かに余計なお世話だったのかもしれない」

「いや、別にええんやけどな。しかしよくこんなやり方知っとったね？」

「・・・軍で習った短期学習法だ。戦時下では時間がいくらあっても足りない。だが質が落ちた兵士は役に立たない。一定レベルをキープしつつ、なおかつすばやく仕上げるには効果的なやり方だろう？」

――確かにと俺以外の全員が呟いていた。

まぁ実のところ俺の受けた教育自体が実験的要素が強かったらしいがな。このマルチタスクを用いた学習方法も頭で覚えねばならない軍隊のあれこれを覚えさせる時間を短縮させるための方法として編み出されたものを、試験的にやらされていたらしい。

実際マルチタスクを使える魔導師には効果はあったが、一定以上のレベル。こちらで言うところのAランクなみの魔導師ではないと展開処理できるマルチタスクの数に限界がある所為で恩恵はごくわずかとなってしまう。ある意味、高ランク魔導師だからこその勉強法なんだよな、これ。

「とにかく、早く終わらせたいなら使えばいい。実際身にはつくし、

時間が有効に使えるぞ」

「う、そういわれると・・・」

「はやく終わらせたいのもホントだしね・・・」

「あかん、フェンくんの言葉が悪魔のささやきに思えてきたで」

そこまで言うか、ひどいなはやてよ。その後、結局ぶー垂れている三名に対し、頼りになる我が使い魔リニスさんの休憩のティータイムにより、この件に関して一応の幕は降りた。

そして後日聞いた話だがこの話の後、三名の成績は上がったらしい。なんだ、結局使ってんじゃんと思ったが、口には出さず俺は黙秘するのであった。だって口にしたら・・・ガタガタガタ、モウ、マトヤクハ、カンベン。

とにかく、騒がしくも楽しい、これが今の俺のプライベートの日常だった。

「平和・・・平らな和みってか」（後書き）

お久しぶりです。引っ越しが何とか落ち着いたので投稿します。

・・・でも時間空くと、ホント書けないですね。

それではノシ

「ゆっくりしていってね！」（前書き）

今回投降したモノは前回削除したものとは全く内容が異なります。
おかしい、多少直すだけだったのに・・・どうしてこうなった。
完全ほのぼの補充回です。戦闘無しです。

「ゆっくりしていってね！」

「ゆっくりしていってね！」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

さて、俺がこの世界に漂着してからジェニスによるはやて誘拐以後、特に何か大きな事件があるわけでもなく2年の歳月が瞬く間に過ぎていった。あったのは細々とした日常だけであり、劇的な変化はなかったので割愛する。

三人娘も１１歳となり、気がつけば俺は彼女ら三人に背を完全に抜かれてしまう。
それを指摘された時、俺は口には出さなかったがこの成長しない肉体が恨めしいと心底思ったのは秘密だ。

うぐぐ、ほんの少しまえまでは身長の差は数センチだったのに、いまや２０ｃｍ近い開きがでるとは・・・。彼女らを見上げる日が

来るとはなぁ・・・はぁ。

ちなみに俺の身長は１２０ｃｍ程しかない。同年代の子が遊びまわってよく眠る中、戦場的な意味で眠れない時期を過ごした分が響いて成長が伸び悩んだ所為だ。だから同年代である８歳児の子供よりも背が低いという事になる。泣いてもいいだろうか？むしろ泣いても良い筈。泣いても、いいよね。

・・・。

すまん、大きなお兄さん方が俺の胸に飛び込んでおいでと言って来る途轍もなくチキン肌が起こりそうな電波な幻覚が見えた。今めちゃくちゃ気持ち悪くなった。おえ。

それはさて置き、他に変わったことは原作通り騎士たちが管理局入りしたり、あとはフェイトが執務官になったということだろう。これは後でなのはから聞いた話だが、なんとフェイトは執務官認定試験を一発で合格を果たすという稀にみる快挙を成し遂げていたらしい。

事前学習に四苦八苦かと思いきや以外や以外。ペーパーテストでは最高点を取ったとクロノからの伝手で聞いて驚いた。もともと勉強は得意とはいえなかった彼女だが親類に現役執務官が居たことと、どうやらあのマルチタスクを用いた勉強法を完全にマスターしていたようで事前学習はばっちりだったらしい。

それに加えて元々高い魔法の能力を持つ彼女は実技もトップクラス。実技も試験も１５％程しか合格率がない超難関試験を一発合格

したことで、管理局側からは若くして将来を期待されるエリート扱いで執務官試験を通過したとの事だった。

いやはや、あの時教えたことがこんな風になるとはねぇ。マルチタスクを使う勉強法は案外知られていない。だから予想外というか何と言うかだ。魔法技術のチート全開ってのは恐ろしいね。

まぁそんな訳で特にうちの身近では事件になる様なことは起きなかった人伝に聞いた話じゃ、なのはが捜査の帰りに正体不明無人機と遭遇戦したとか、どこぞの首都防衛隊の部隊が壊滅したとか等の話は聞いていたが、俺は俺で会社を大きくする為に奔走していたから特に関わってはいなかった。

なのはにしても襲撃を受けた癖に返り討ちにしたらしく傷一つ負わなかったそうな。十分な休息と適切な訓練が実を結んだということだろうねぇ。スリーパーホールドでお話は効いたらしい。流石に何度も絞め落とされたら嫌でも学習するわなぁ。俺はやるときは女性にも容赦しませんぜ。

まぁとにかく、ここまで色々語ったが基本全部人から聞いた話である。どれもこれも俺は全く関与していない。間接的な関与はしているかもしれないが少なくても直接的な何かはしていない。何故なら俺はこの2年間、自分の会社を大きくすることだけに力を注いだからだ。未来を知ってるからって介入するとか言う話じゃないんだぜ。

大体どれもこれもフェイト以外は突発的なモンだから介入なんてほぼ不可能だし、フェイトにしても執務官認定試験は自力でやるも

んだっていう意識を彼女が持っていたからあの一途な面がある彼女のこと。へたな手伝いは逆に嫌がられただろうよ。

んで基本的に不干渉ではあったがその間にドミトーリも着々業績を上げて少しであるが成長を遂げていた。資本金ゼロの俺が一人で立ち上げた文字通りワンマン企業だったドミトーリは現在社員を20人抱える程度にまで成長している。

意外と少ないと思われるかもしれないが、うちは他社と違って基本的に雑務をシランシリーズに任せられる。だからここまで人材を削減できたのだ。人件費が掛からないっていいね。シランシリーズの材料については廃材を利用しているから元手ほぼタダ。

次元世界は広大だ。探せば管理局の唾がついていない天才やら鬼才やら秀才やら天災やら色々と埋もれているもんである。多少性格が悪かろうが何だろうが雇われている以上はキチンと仕事してくれるプロってのはどんな時でもありがたいものだ。とくにウチみたいな荒事も扱う仕事はね。

あとシランシリーズも増産されたのは良いが何時か悪用されないか心配である。もっとも基本的に量産型シランたちが使われているのは管理局の次元航行部隊、通称海だけであり、仮にシランが悪用されるなどという事態が起きたとしても、それはすなわち管理局から盗まれたということになり俺に責任は発生し得ない。

要するに連中の職務怠慢になるわけだわさ。一応秘密裏にだが、シランシリーズには位置情報を様々なラインで発信できるようにいくつものチップをナノサイズで練り込んである。

錬金を利用したフレーム自体が回路という某サ〇コフレームを参

考にしてあるから部品総取換えしない限りまず大丈夫だろう。偽装回路も積んであるし、初見で見破れる人間は多分いない・・・筈。

とにかく今現在ドミトーリはＤＤＳ－１を移動拠点に次元世界各所で活動中。あなたのお悩み要相談。武力で何でもお悩み解決。民間軍事会社ドミトーリが請け負います。お電話は・・・いっけね、どうも商売癖がつき始めてやがる。失敬。

＊＊＊

～～八神家・庭～～

「あんあん！ワフッ！」

「ああ、可愛いなコーギー・・・もふもふだぁ・・・」

「くゥ～ん！はっはっはっはっはっ」

「もうお腹まで見せちゃって・・・愛いヤツよのう」

仕事を分担にしたお陰で定期的な休みを取れる様になった俺は久々に八神家の庭で動物と戯れておりました。勿論周辺の住宅環境を考慮して認識阻害＆庭の範囲から音が漏れないように遮音結界の魔

法式を汲んであります。おかげで庭で射撃訓練しようが花火爆発させようが周辺の家に気付かれることはありません。ビバ魔法万歳。

「なーうっ（すりすり）」

「くまー（べろり）」

「あは、くすぐったいよ。にゃん美、クマ吉」

最近来るようになった子猫のにゃん美はゴロゴロ咽を鳴らしながら足元にいるし、いつもどうやって庭に入りこんでるのか判らないけど何故かいる小熊のクマ吉は縁側に座って俺の頬を舐めてくる。あっははは、爪が肩に食い込んで血が出てるけど俺は気にしない。だって可愛いから。

「・・・・ぴっ（じー）」

「うさみちゃん、目つき悪い」

そして白うさぎのうさみは何故かよく俺が他の動物たちに絡まれている光景をジッと見つめてくる。でもなんとなく居心地が悪く感じる目線の様な気がしてならない。動物に目付き悪いと言っても仕方ないんだろうけど・・・なんだかねぇ。

しかしネコは滑らかな感じでモフモフだし、熊は若干ごわごわしてるけどモフモフだし、うさぎは、うさぎは耳がぁぁぁ・・・ああ、

どうして動物の毛皮ってこうも癒されるんだろうね？あ、勿論生きているの限定ですよ？１０１のクルエラじゃあるまいし。

というか動物の種族が雑多なんだが何故ケンカとかしないんだろうか？まぁ細けぇことは気にしたら負けだな。ああもう、撫でるだけで目を細めて気持ちよさそうにしちゃってまぁ・・・なにこの可愛い生きもの。

んでネコと熊とウサギ可愛がってたらさっきのコーギーが俺の周りをうろちょろしている。かと思えばいきなり膝の上に頭をポンと乗せて構って欲しそうにジッと・・・あかん、やっぱかわええ。疲れててもこれ見れば吹き飛ぶね！

「――そういう風に生き物と戯れてるフェンくんもかわええとおもうで」

「わひゃんっ！？」

突然後ろから話しかけられたことで驚いて飛びあがりかけた。

俺の背後を取るとは、タダモノでは無いな？！

「大家様や」

「ホントに只者じゃ無かったー」

俺に住む場所を提供して下さる可愛い大家様が縁側の戸をあけて立っていた。あれま、何時の間にか学校から戻ってきてたんだな。全然気がつかなかったぜ。

彼女は何事も無いように俺の隣に腰かける。なお動物たちは八神家の面々に絶対に危害を加えないので彼女も怖がるそぶりを見せない。はやては何と無く俺の膝に頭を乗せていたコーギーを撫でていたが、すこししてちょっといいかなと口を開いた。

「なぁフェンくん。ちょっとええかな?フェンくんって会社もっとるやろ?ドミトーリって名前の民間・・・なんとか会社」

「軍事会社な」

おおそれやそれやと言いつつ、いつものように接してくるはやてだが、俺は内心気が気じゃなかった。もしかしてさりげなくこれまでやってきた俺の悪行でもばれたのだろうか?意外とあたまが回る彼女のことだし、表面上普通でも中身は狸――

「・・・これからは家賃でも貰うべきやろか?もちろん身体で、やけど」

「イイエ、ナンデモナイデス」

あぶねぇ、変なこと考えても彼女の場合言い当てられかねん。なまじリインフォースとか傍に居るからさらに腹g・・・ゲフン、と

にかく平常心だ平常心。俺だって表立って麻薬だとか人売り人買いだとか密輸だとかしてないしな。悪い事はそんなにしてないさ。

・・・だけど色んな世界で駆けまわる為にちょっと無茶して色々と根回ししたりとかしたしなぁ。山吹色のお菓子って大人に大人気だった。世の中銭ズラ。でもそれを知っているのは俺とリニスくらいのもんだし・・・う～ん。

あ、ちなみに身体で払うってのは彼女のおもちゃにされるって意味だから・・・女装的な意味で。くそ、身体さえ成長してれば・・・鬱だ。

「そうそれや。民間軍事会社ドミトーリ。そしてフェンくんはそこの一番偉い社長さんなんやろ?そして量産型シランの生みの親でもあるわけや」

「??そんな今更な話をなんで?」

まるで一つ一つ確認するかのように聞いてくる彼女。意図が読めない。だが落ち着くんだ俺。大丈夫、話の感じからは俺が色々と違法なことしてたのはバレてないみたいだぜ。ＫＯＯＬになるんだ、じゃなかったＣＯＯＬにな。

精々、スムーズに次元港を利用する為に重たい菓子渡したり、紛争発生で渡航制限となっている世界に軍需物資輸送がてら小遣い稼ぎに密入国させてたり、ＤＤＳ－１についている艤装を色々と手を回して誤魔化したり、廃棄世界から無断で物資作ってたりしてるだけ・・・あ、結構ヤバい。

内心汗だらだらであるがこの2年でも結局変わらない無表情はそれを顔には出さない。そしてはやてはそんな俺に顔を向けると――

「すごい肩書きやなー」

「あ、うん、そうね」

なんとも無さそうに日向ぼっこするのだった。あれ？なんか肩すかし喰らった気分。

「考えてみるとフェンくん社長さんなわけやから私社長夫人やな」

「夫人の前に結婚してない件」

「玉の輿を狙うと申した」

「いやそんな儲かってないから」

「何や残念や」

くすくすと笑うはやてはもう一度コーギーを撫でていた。うん、そうだねプロテインだね。どうやらはやては世間話をしてきただけの様だ。あーよかった。内心バクバクなのを隠し一緒に日向ぼっこする。ああ、のんびり最高。

「でも結構もうかっとるんやない？」

「そりゃもう・・・あっ、殆ど寄付してるんで手元にゃ最低限しかないぞ」

唐突な質問に思わず素で答えちまった。ヤベっと思った時にはすでにはやてはニンマリとした笑みを浮かべている。うう、まさかタイミングをずらすという高等テクを使ってくるだと！？誰かが教えたのか！？それともはやての素質か！？・・・なんとなく後者だと思うのはなんでだろうな？

「誤魔化してもダメや。いま儲かっとるってはっきり聞いたで！」

「とはいっても、殆ど研究に消えちまうしなぁ・・・」

もうわたししっかりこの耳で聞いちゃったの、と言わんばかりに高らかに話しかけてくるはやてだが、正直本当に結構な額を色んなところに寄付している。聖王教会関連にも寄付してるってのは蛇足だが、その所為で結構金は飛ぶしおまけに研究費用も結構掛かる。スポンサーでも見つけたいね。いやホント。

「そこは可愛いはやてちゃんに日ごろの感謝を込めてなんか買ってくれるとこやろ！」

「え？俺が悪いの？俺が悪いというのか？？」

何故か理不尽に怒られたが、まぁ本気で言っている訳じゃないのは判っている。
判ってはいるはいるが・・・しかたない、こんど何かプレゼントでも買ってあげよう。それくらいなら貯蓄があるしな。

しかし、だ。俺は正直女の子が欲しがりそうなものとか判んないんだけど?

「なんか買うっていっても何が欲しいよ?炊飯器?圧力釜?万能包丁?」

「う~ん、そうやねぇ・・・って何で調理器具オンリーなんや!え、違うのって顔もしない!」

「してないよ。俺は昔から鉄面皮の無表情だよ」

「ううん、フェンくんがいじわるやー。女の子にそれはないやろ・・・」

よよよとはやては何処から出したかハンカチをかみしめる。勿論お互いに冗談だっていうのは判ってるんだぜ。だけど例え冗談といえども男は女の涙を放置しちゃいけねぇ。じゃないともっと恐ろしい事になるというのは母上で経験済みだ。

女性とは核爆弾のようなもの、取り扱いを間違えば怪我では済まん。と父上は言っていたことがあるんだが、その後全力スクラッチ

を母上にかけられてたっけ。
教訓、男は女に叶わない。古来より女性は強かだ。世の真理だろうよ。

「はいはい、金銀財宝なんでもござれ」

「おお！ふとっぱらやん！」

「ダイヤは炭から抽出すればいいか。金は・・・ゴミ捨て場から携帯とか拾ってくるよ」

「あれぇー？高価な品物なのに一気に安っぽくなったんやけど？！」

「魔法使えば何でも作れます。まさにリサイクル。まさに俺クオリティ」

錬金魔法&疑似物質形成その他って便利ねえ。一円玉とクロムでもあればルビーだって作れちまうぜ。あと光ファイバーから石英をとりだすと水晶も作れますぜ。

・・・。

俺はどこの錬金術師だ？

「さぁ選ぶのです。心のこもった元ガラクタか。心のこもらない市

販品か。選びなさいはやて」

「メーテル乙。だけどそれやったらどっちもいらんわ」

「それは残念。いまならこの指輪型レーザーガンがついてくるのに」

「マジでメーテルの指輪やん！というか私もようそんな古いアニメ知っとるんやろ」

「作者の趣味」

メタ発言禁止といわれ叩かれた。酷いわ。

ちなみにちゃんと使えますよ？このレーザーリング。最大出力で２０ｃｍの鋼鉄もブチ抜けるくらいの威力がある。もっとも強度とエネルギーの関係上、最大出力だと一発が限度だけどさ。安全装置はついてるけど殺傷性能あるしこれじゃ暗器だよ。

ちなみに本当に要らないって聞いたら普通のアクセサリーをくれって言われた。あとレーザーリングは危険だから封印しとけってさ。色々と危険なんだって。あと普通のアクセサリーといってもストックがないので、今は保留と言う事で話が落ち着いたのは言うまでも無い。

んだども、何故か今度お菓子を俺が買ってくるという話に流れたのは迂闊であった。

こんど翠屋で買ってこよう。あそこは本当においしいからな・・・。

さてこんな風な適当な馬鹿話をはやてとして楽しんでいたら、此方に向かう足音が聞えた。顔を上げると家の中なのに帽子を被っているショートヘアの女性が居た。リニスは相変わらず耳を隠すのに帽子をつかうんだな。

ふむ、腕時計代わりにしてるヴィズを見ると既に時刻はおやつの時間。手に持ったお盆は多分おやつだろうなぁ。わほっーい。

「リニス。多分だけどそれおやつ？」

「ええちょうど良い時間かと思いまして」

「そりゃええ。皆でいっしょに食べようや」

はやての提案に俺達はにべもなく賛成する。ちょうどこの時間は柔らかな太陽の光のお陰でぽかぽか陽気なのだ。食べたら眠くなっちまうけど、居心地が良いことに変わりはない。

あ、そうだ。動物たちの分も持って来てやらねぇと可哀そうだ。適当に動物たちのおやつも格納領域から取り出してみんなでおやつときたもんだ。さりげなくリニスは小魚も食べてるけど気にしないぜ。

んでのんびりと時間を消化していたんだが、ふとあることを思い

出した。

「ああ、そうだ。あとで事務仕事しなきゃ」

「ちょっとフェン君!?」

「え?フェンくんそんなこともしとるん?」

そんなことしてる様には見えへんけどなぁ、という風な目を向けてくるはやて。おいおい、俺だってなぁ・・・俺だって、なぁ。

「・・・エエ勿論。だってね。この間会社に社員とか雇い入れたんだけどさ。そいつらがしっかりしてるから俺がこうして休み貰えたんだけどさ。そうなると経営者の俺は社長扱いなのはしょうがないんだけどさ。そうなると社員達から上げられる報告書やら決算やらの事務書類がこっちに回ってきちゃってさ。そりゃ俺も軍隊時代にかなりの数の書類をたいらげたこともありますけど今だから言えるね。ＵＳＮの事務職の皆さん、マジでアンタらは凄かったんですねって。正直もう紙束みたくない。ウフフ・・・」

いやー、ＵＳＮ軍の事務課の人々は偉大だったんですね。今更ながらそう思うぜ。

むしろ最近身体動かしてない・・・身体が鈍っちゃうよ。

そしてなんか遠いところを見ちゃう・・・あ、昼間なのに星が見える。

「ちょっ、フェンくん何か目がすわっとるで！？」

「栄養ドリンクは友達。コーヒーは水」

「そんな不健康な生活は家主として家族として認めんへん！」

「大丈夫です。そこら辺は私がちゃ～んと管理してます」

リニスは元々はプレシアの使い魔、しかも小さい頃のフェイトの世話もしていたらしく、彼女の健康管理能力というのは伊達では無いのだ。でもそのお陰で倒れないから更に仕事というスパイラルが待っているんだぜ。やっぱり泣いても言い気がしてきた。

そのことに頭を悩ませて白く燃え尽きた感じを醸し出していると、なんかポンっと肩を掴まれる。見るとはやてが何かとっても憐みの視線を俺に向けていた。なんだ？

「・・・フェンくん、寝た方がええ。きっと疲れとるんや。休んだ方がええ」

「いや、だって今日は休日だから既に休んでるけど」

「つべこべ言わんと昼寝でもエエから寝なさい。家長命令や」

「そんなむちゃな」

なんで眠くないのに昼寝しないといけないんだ？むしろ仕事しないと・・・なんか休日でも落ち着かないお父さんの様なことを考えつつ懐から煙管を取り出そうとする。
そんな俺の様子を見てはやてはさらに声を大にして休むように言ってくるが俺も頑として受け付けない。やっぱ疲れとったんだろうね。んでこんな些細なことで口論になりかけたその時。

「仕方ないわね。よいしょっと」

はやての方に意識を集中していた俺は後ろから迫るリニスに気がつかず、そのままグイッと引っ張られて倒れてしまう。いきなりのことで対応できなかった俺は無駄に良い目が天井の模様までくっきり見えており、それを見ながら硬い床にあたると魔法で強化していない肉体はさぞかし痛いと感じるだろうなぁとか考えていた。
――だが俺の予想は外れることになる。

「・・・・・・・・リニス」

「はい？なんですか」

「コレ、なに？」

「膝枕ですよ？」

さも当然にリニスはそう言った。俺が感じるべき衝撃は感じず、

ポフっとした柔らかさだったのはリニスが自分の方に引き寄せて膝の上に乗せたからだった。いや恥ずかしいし何とも言えない羞恥心の所為か嫌がってうーうーと抗議したんだが、全然離そうとしてくれない。

とっさのことで身体強化も出来無かったし、第一この程度で身体強化を使って逃れるというのは流石に大人げない。でも頭を押さえられちゃって膝枕の体勢から動けない俺はなんとかこの羞恥地獄から逃れたい一心ではやてにヘルプという目線を送ろうとした。

だが、はやてはそこにはいなかった。あるぇー？

「はいタオルケットや」

「ありがとうございます」

あ、掛ける物を取りに行ってたんだーって逃げられない！？

「フェンくん、いい加減諦めて休み」

気がつけば手に持っていた筈の煙管も取り上げられてはやてのすぐ横に置かれている。哀れ俺は逃げられもせず、そのまま毛布をかけられてしまったのであった。

ちょっ、子供扱いは本当に止めてくれ。マジで恥ずかしい。優しくしないで。

「もう、暴れないでください。毛布落ちてますよ」

「そんなにじたばたして・・・なんや寂しいならお姉ちゃんが添い寝したろうか？」

「ニヤニヤしながらそんなこと言わないでください？！」

思わず敬語でそう叫んでしまう。お前絶対俺がそういうの苦手だって判ってるでしょ！？という視線を送る。するとはやては当然やという視線を返してくる。この間、僅か０，２秒、最速のアイコンタクトだった。

しばらく嫌がるが頭を押さえられていては身動きが取れないので、半ばあきらめて身体の力を抜いた。ただ頬は膨らませてある。ささやかな抵抗の証しだ。

「うー、うー」

「ふふ・・・ようやく大人しくなりましたね」

ふん、いきなり横にさせて髪を優しくすくってもダメなんだぞ。俺は不機嫌だ。だけど動けない以上無駄な事はしない。恨めしいという目をしながらリニスを睨みつけるが微笑まれた・・・クソ。

ジッとしていると段々瞼が重くなってきた。軽くポンポンと叩かれるその振動とこの間からの仕事の疲れも相俟ってすごく眠い。だ

がここで寝たらはやてたちの思う壺。眠りはせん！眠りはせんぞっ！そう意気込んでいた。

だが8歳児で固定されている俺の肉体は非常に正直で、一定の間隔でくる心地いい振動が徐々に睡魔を呼びこんでくる所為で最終的には瞼を上げられなくなり、疲れがたまっていたこともあり、気がつけば俺の意識は完全に落ちていた。膝枕って気持ちいいんです。いやホント。

「・・・眠ったようです」

「・・・ようやく寝たんか。疲れ取るなら素直に眠ればええのに」

「出来ないんですよ。なまじ精神がしっかりしてるからプライドがあるんです。だから最近じゃ3時間睡眠とかざらでした。それを咎めても聞いてくれませんでしたし」

「なるほどなぁ・・・しっかし寝てる時は可愛い顔しとるわ」

「こう言う時だけは年相応なんですね。本当、可愛い・・・」

「・・・母、上」

「「・・・」」

「・・・やっぱ寂しいんやろうか？ってリニス！？」

「ああ、ははうえと間違えられるなんて、ギュッと手を握り返し・・・オヴッ！」

「だめやこの人、速くなんとかせぇへんと・・・」

「ゆっくりしていってね！」（後書き）

とりあえずほのぼの回分を補充、次回はその他二人との絡みにする予定。

それといい加減時間を進めたかったので2年ほどすすめました。

賛否両論あるかと思いますがこんな駄文で申し訳ない。

ソレでは失礼。

「地道に過ごしていたら無理難題が・・・鬱だわぁ」

「地道に過ごしていたら無理難題が・・・鬱だわぁ」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

いやー、前回は恥ずかしいところをお見せしたようでして。まさかリニスを母上と間違えるとか・・・恥ずかしい。赤ん坊じゃないんだから人肌くらいでそんなこと思うなよなぁ。

勿論その後リニスの溢れだした母性の処理が大変だったけどさ。しばらく動物たちが怖がって縁側に近寄らなくなってしまったのは痛い。主に俺の精神的癒しが少なくなった的な意味で。まぁ薬草煙管があるからそれ程苦じゃないけどね。

しかし何か膝枕されている最中、妙に背筋がゾクッときたり、ねちっこいというか羨ましい的な感情が来た気がしたのは気の所為だったんだろうかねぇ？

『広域スキャン反応、位置情報特定されました』

「“スタコラサッサ”だ。すぐに砲撃魔法が飛んでくるぞ」

『ローラーダッシュ――高魔力反応、砲撃きます』

≪――――ギュゴゴゴゴゴッ！！！！≫

おうっと、危ねぇな。すぐ近くをかすめやがった。

さて、見て判る通り現在俺は模擬戦中である。何故か砲撃が飛んで来るが模擬戦だ。これは模擬戦ですとも、例え障害物として設置されている訓練場のビルが崩壊しても模擬戦だ・・・模擬戦だと言ってくれ。

『回避成功　ミラージュハイド再度展開　戦術オプション起動可能』

「奴さんは・・・そこかっ！」

『レールブラスター斉射・・・命中、しかし直撃弾無し。向かってきます』

魔力弾は命中、だが強力な防御魔法で貫通弾はなし。通常弾ならこんなもんか。

「魔力の増大に注意しろ。奴さんはカートリッジのトリガーハッピーだからな」

『魔力増大、カートリッジの使用を確認　エクセリオンバスターだと推定』

「・・・本気すぎるだろうに・・・」

口は災いの元と言うが中々どうして・・・いや、この場合言霊か？見れば桜色の魔力光を煌めかせながら今にも『ブレイクシュート』と叫びそうな彼女の姿が・・・誘導砲撃と来たか・・・殲滅というかこのセクションごと消滅させる気かよ！？

あれでは距離が近過ぎて逃げることは出来ず、かと言って懐に入るには遠すぎる。微妙に誘導されるという効果が在る為だ。普通なら視界一杯に迫る複数の砲撃が合わさった様なビームを前に飲み込まれるというＰＴＳＤまっしぐらな情景を味合わされて気絶させられると言うところだろう。

しかも厄介なことにコイツには誘導の他に副次効果でバリア貫通と炸裂効果まで併せ持つから普通の防御魔法では防ぎきれない。まさに殲滅使用の強力誘導砲撃だ。

――――とはいえ、俺も黙って砲撃に呑まれる気は無い。

「・・・装填、多重オーバルプロテクション。四肢固定」

『カートリッジ・イグニッション　ラインディングギア展開、アイゼン、ロック』

ガシャコンとカートリッジがアルアッソーの薬室へと引き込まれ、リン特製の高圧縮カートリッジが炸裂。元々魔力吸収体質な俺は余すことなく、溢れだしそうな魔力を自分の目の前に展開した、いくえにも重なった巨大な球体を形成するのに用いた。

そして形成を終えた直後、環状魔法陣に魔力を収束し続けた彼女の杖の先の光球から巨大な魔力のビーム砲が放たれる。あまりの出力に放たれた直後複数に枝分かれした砲撃はヒドラの様に荒れ狂いながら途中で合わさり、文字通り俺を飲みこもうと迫った。

『砲撃、命中します』

ヴィズの声とヘルメット内に響く警告音を聞きながら、格納領域からツイングロムを出して両肩に固定した。その直後砲撃が多重オーバルプロテクションへと命中する。本来なら保護対象と中心に全方位球状防御を行う魔法をアレンジし、複数の防御膜を展開するこの魔法はその意義を果たし、背後に立つ俺を守る盾の如く砲撃を受けとめていた。

とはいえ相手もカートリッジ使用の魔法でありバリア貫通効果付き。徐々に溶かされるかのように防御膜が削られていくのが見てとれる。ヘルメット内の警告音は止まらず視界の隅が警告表示で真っ赤に染まった。このままでは砲撃に飲み込まれるのも時間の問題に見える・・・だが。

「――ラージカートリッジ、装填ッ」

ツイングロムの機関部からゴガシャッという金属がぶつかる音が響き、ペットボトルサイズの金属薬莢が排夾された。身体に満ちる活力と毛細血管が弾ける何時もの感覚を感じつつ、最後の防御膜が消えかけているオーバルプロテクションへと向け――放つ。

多重オーバルプロテクションは反対側からの同じレベルの砲撃を喰らいコンマ一秒と持たず消滅しその効果を失った。代わりに冷却の水蒸気を放出しながらツイングロムの砲身からカートリッジの魔力を喰らった圧縮魔力砲撃が桜色の砲撃と激突した。

相変わらずの砲撃同士でのガチンコ勝負は互角に近いというのが以前から変わらないのは良いが、向うは通常カートリッジでこっちは大容量のラージカートリッジ2本なのはいかがなものなんだろうか。

そしてオーバルプロテクションが消え去ったとほぼ同時に炸裂効果でエクセリオンバスターが炸裂する。ここまで僅か数秒、相手から砲撃がくると判っていたので事前に砲撃魔法の準備を終えていた為、砲撃を撃つことには一秒もかからない。

とはいえ余波からくる魔力を飲みこんだ俺の身体は悲鳴を上げていた。ヘルメットを被っていなかったら、吐血を見られて即訓練中止という無粋なことを言われてしまうだろう。だが咽の奥から滲む鉄の味は何とも言えず甘美な味を俺に与えてくれる。だから止める

気はさらさらない。

目の前に広がる爆炎を放ったツイングロムの余波で防ぐというこの無謀な行為が何とも言えない緊張感をもたらしてくれるのだ。装甲を叩く余波の音がまるで音楽だ。ああ、これぞ戦闘――俺は・・・俺は満足だ。

――と何やら死亡フラグが経つような台詞でも言いたいところだが、すぐに爆炎が晴れるので準備しなければなるまい。爆発の衝撃はおよそ3秒の間、爆炎で俺を包みこみ着弾地点である俺を中心に５００mほどのクレーターを作り上げて消えていった・・・その直後――

『上方警戒ッディバインシューター』

速い、強力な攻撃の後、確認を込めて放ったであろう後詰め攻撃が格段に素早くなっている。俺はその迫る幾つかの誘導魔力弾を前に、四肢の拘束を解除しながら両肩からツイングロムをパージして退避し、魔力弾へアルアッソーを連射する。

興奮から来る一時的な思考加速状態による時間の外側を体感しつつ、ヘルメットマウンテッドサイトが捉えた瞳孔の動きにより、ロックオンされたシューターが次々とアルアッソーから放たれるレールブラスターに射抜かれ消えていった。

上空から囲う様に発射された魔力弾を落とす為に、俺は円の機動を取りつつ舞を舞うかの如くに、アルアッソーの連射力に任せて連射ながら、この攻撃をしかけてくれた張本人へと迫った。すでに此

方のＨＵＤにはレーダーで相手の位置が表示されていた。

奴さんも此方が近づいてくることを理解したのだろう。後方に高速で退避しながら連射性のあるショートバスターで弾幕を張りつつ此方を近寄らせないように狙って来ていた。俺は近距離での攻撃手段があることを理解しての行動だろう。

・・・だが甘い。

『設置トラップ術式へと接近、戦術オプション起動可能』

「今回は俺が白星だな・・・弾幕結――」

すでにそこら辺に術式を設置してあった俺はほくそ笑んだ。多少先程の攻撃で吹き飛んだが模擬戦で使うには十分だ。今回は俺の勝ちで終わると、そう確信した。

≪ヴーーーーーーーーッ！！！！！≫

『――――っ！時間切れですマスター』

訓練場に鳴り響くサイレンの音、それはタイムアップの音だ。この模擬戦では予め時間制限を設けてあったのである。折角追い詰めたのに時間制限なら仕方がない。

「・・・戦闘行動を終了。弾幕結界を解除」

『了解。戦闘行動を終了します――――惜しかったですねマスター』

「一勝ち一負け一引き分けだ。まぁまぁだろう」

少なくても相手の経験値にはなっただろう？というか最近手を抜けないから困る。やっぱりアレか？前に訓練開始直後トラップ爆破とかやっちゃったことがあったからだろうか？あれ以来なんか模擬戦だと鬼気迫ってるというか何と言うか・・・。

うん、訓練に入れ込むのは良い事だ！・・・たぶんね。

「おつかれさま～」

模擬戦の相手はまぁ薄々気づいていただろうが武装士官のなのはが相手だった。というかエクセリオンバスター何て大技を扱えるのはカートリッジシステムを導入した彼女くらいのものだろう。僅か２年でこれ程までシステムの扱いに長けるとは思わなかったけど・・

・適性ってヤツだろうかね？

「お疲れさん。ストレスは発散出来たか？」

「やだなー、そんなにストレス溜まってないよ。お互い本気じゃないし」

「訓練でのって意味だ」

「それなら本気だったよ！何時もより頑張ったの！」

本気だが本気じゃない。いや本気じゃないじゃなくて本気なんだがまだ理性があるって感じか？まぁ俺らクラスが殺し合いの戦闘の本気でやりあったら、お互いタダじゃすまないだろうしな。中～遠距離なら彼女の砲撃の方が強い。だが俺だって小さな身体を利用して懐に入り込めば無効化とはいかないけど制限をかけられる。

それにミラージュハイドで近づいたり錬金使用したらまず負けん。もっとも勝てもしないけど・・・錬金で疑似核融合炉形成して特攻すれば大抵の奴には勝てるけど自分も消滅しちゃうしな。だがそれが今の俺が出せる最大の手札であり本気と覚悟の証明って事でもあるが・・・死にたく無いからやらん。

「ところで砲撃魔法は？」

「全力だよ」

「その心は？」

「なんかそうしたかったの」

「おい、破壊衝動に近いぞソレ」

「そうかなぁ？」

「そうだよ」

「そうかなぁ？」

「そうだよ」

――以下、エンドレス。無限ループって怖いね。

「でもちょっとすっきりしたかな？いつもはここまでいかないから・・・って何か結構危ないことを私口にしてる？！」

「なにをいまさら。さっきも砲撃魔法でトリガーハッピーだったじゃないか（ジト）」

「にゃああ！！そんな目で見ないでよぉ・・・！！」

「だからこうしてガス抜きも兼ねて訓練を行ってるだろう？」

「うう、御手数おかけします」

「うむ。大丈夫だ。問題無い」

彼女のそれも判らんでも無い。なのはは最近Ｓランクになったらしいからな。俺なんていまだ測定不能でＢランクあたりをうろちょろしてるってのに・・・でも彼女が現場において全力全開で戦うなんてことは少ないというかほぼ無い。

ミッド式ではＡＡＡランクの段階で本気で暴れれば街が一つ消し飛ぶ程の力を有している。下手すれば戦術核レベルだ。そんなのが必要とされる現場ってのはやっぱり国家レベルで凄いことが起きているって訳で・・・。

まぁ彼女は普段の仕事の中で、魔法の力を全力にして戦う事は殆ど無い。戦術核が自在に動き回ってたらあたり一面焦土になっちゃうもんねぇ。その後の捜査もクソも無い。

「でも悔しいかな。結局フェン君のフルドライブ姿はまだ見てないの」

「・・・さらに精進すれば見れるかもな」

思わず乾いた笑みが漏れる。いやはや、やる気満々だなぁ。

まぁフルドライブモードを使う事は、今はどだい無理なんだけどな。俺の場合フルドライブっていうのはヴィズのＢＡバージョンアップ形態である。そうＢＡこそ俺の本来のデバイスなのだ。兵装デバイスはあくまで攻撃オプションに過ぎない。

話を戻すが実は以前俺は一度だけフルドライブを経験している。それはハルケギニアおけるアルビオンでの撤退支援任務の時。原因は良く解らないが唐突に発動してしまったＷＥＣリアクターシステムを介したあの時の状態が、恐らくフルドライブと呼んでもいい状態だった。

もっともあれは危険すぎてシステムごと基幹フレームに封印処理してある。俺が考えなしにロストロギアの部品組み込んだ所為で、暴走すると次元震を発生させてしまう可能性もあるし、何よりリンのサポートがなければ魔力粒子を制御できない。

安定制御は一応なんとかなりそうだが、今のままだと発動の度に血管を破裂させて吐血し、そのまま地獄を巡るどころか豪華物見遊山する事になるだろう。そんな俺にも他者にも危険な形態を使う事なんぞできませんとも。

「まぁ兎に角、訓練結果だけど。反応速度、魔力操作技能ともに前より格段に上手くなっている。それと所々きちんと連携を意識した動きになっていた。ポジションはセンターガードでちゃんと運用していけると思う」

「広く視界を持つようにって現場で教わったの。あっ、でもその代わり動きづらくなっちゃったけどね」

「いいんだよ。基本的に集団で動く時なら前衛がつくだろう？策敵に防衛に迎撃、仲間が補ってくれる。それを運用できるようになれば怖いものはない」

「そういえばそんなことも教わったような・・・ちゃんと覚えておかないとダメだね」

「急がなくてもいい、すぐに覚える。その為の訓練だし、その為に俺がいる」

「クスッありがとうございます教官殿！」

「教官？何だいきなり・・・では次は教官らしくもっとびしばし逝こうか？」

「ええ！？あっと・・・すこし休んでからの方がいいかも・・・」

だろうな。久々に激しく模擬戦をしたんだ。疲れもするだろう。しかし教官か・・・悪くない響きだな。

「でも前からよくこうして教えて貰ってたから、フェン君が教官なのもあながち間違いじゃないかもしれないね」

「かもな」

「・・・ふふふっ」

「ははは っ」

かれこれ2年近くこうやって偶に模擬戦とかの訓練してたな。そう言えば――――

「最初の頃は大変だった」

「え？どういうこと？」

「もともと俺は教えられたことはあっても教えたことはなかった」

それが今じゃ、ＰＭＣとかやって他者に戦い方を教えてたりするんだよな。変われば変わるもんだ。殺しの技術が人を守ることにつながるとはね。

「そう言えばフェン君は他の人にも訓練をつけていたりするんだよね」

「有料だけどな」

「でもどうして人に教える気になったの？やっぱりお金の為なの？」

「どうしてって・・・それも守ることにつながるからな」

彼女の質問にそう返すと彼女は小首を傾げていた。

「・・・難しく考える必要はない。ただ――」

「ただ？」

「――俺が教えることで、一人でも強い人間が育てば、その分悲劇は減る」

「悲劇が減るって、他の人を育てるだけで？」

これは今の俺の考えの一つだ。どうしても一人では出来ることに限界がある。魔導師とて人だ。神では無いのだから魔法というブーストがあっても出来ることに限界はある。だが力を持つ人間が一人でも多くなればその分助ける幅も広がるって事だ。

三人よれば文殊の知恵とでも言えばいいのか、はたまた三本の矢と言えばいいのか。少なくても俺が教えて来た人間が理由は様々でやり方も色々だが、自分でない誰かを一人でも助けていれば教えた意味はあったと言えるだろう。

「――――少なくても、俺はそう思っている」

「・・・そっか。教えることも守ることなんだ。なるほど・・・」

そういうのも何かいいだろうと言うと、なのはは首肯で返してきた。こう考えたら例え相手を殺す為の技術であっても、それを教えることで同じ様な手に対抗する為の知識とすることが出来る。間接的にであっても誰かを守ることにつながるんだ。

まぁそれが悪用されないとは限らないんだがな。

「もっとも、教えたことを悪用するという可能性もある」

「え、そんなっ！まさかっ」

「一応確認取れているところで悪用したヤツはいないさ。だけど、もし悪用したヤツが出たら・・・その時は、自分の手で始末をつけるさ」

「始末って、もしかして・・・」

「勿論最終手段だ。だが言っても聞かなかったりする可能性もある。だからこそ教えた人間として、生徒の不始末は自分の手で付ける。それが教えた人間の責任であり、教えることへの覚悟だと、俺は思っている」

「・・・そっか。大変なんだね」

「それ以上に強いヤツが増えれば俺は隠居出来るしな」

「っ！もうっ！真面目な話してたんだよっ！大体フェン君隠居とかってそれお爺さんの考えだよっ！！」

「俺はいたって真面目だ。それに水戸の御老公の隠れファンだ」

「大暴れご隠居さんなの！？」

なぜか真面目な話をしていた筈が変な方向にズレた気がしたが気にしない。こうして依頼を終えた俺は友人価格（翠屋シュークリー

ムを一杯）の報酬を貰い彼女と別れたのであった。沢山あるから皆と分けて食～べよ、と少しほくほくとして家路に付く。

なのはが帰り際に何か考える仕草をしていた気がするが、シュークリームに意識が向いていた俺は気がつかなかった。

――この時の会話が後のなのはの立ち位置を決めることになるのはまた別の話。

＊＊＊

なのはとの模擬戦から数週間後のある日、ドミトーリ社に来客があった。

いやはや、どうしたもんか・・・。

「シランシリーズのお買い求めではないのですか？」

「いえ、その何と言いましょうか・・・シランシリーズは確かに有用ですが此方としましては・・・」

「シランシリーズではない別のものをお求めと？」

「そうなんです」

と、目の前にいる時空管理局地上本局から来たサルガと名乗る管理局員はハンカチで汗を拭きながらそう答えた。出されたお茶にも手をつけていない辺り緊張していると見える・・・そういう“演技”の可能性もあるが・・・。

――さて、今このＤＤＳ－１のキャビンにて行われているのは商談だ。とある次元世界において、偶々追加分の量産型シランを受け渡しに赴いた際に接触があったのだ。

シランシリーズを降ろしているのはウチだということは、その方面では知られていたことらしく、接触してきた管理局員も接触はしたが無理矢理商談ではなく、只アポイントを取るとそのまま退散していった。

そしてこの状況である。接触してきたのは軸管理局地上本部。ミッドチルダの地上を担当する部隊・・・ではなく、時空管理局の地上部隊を統括している通称“陸”だ。

てっきり量産型シランシリーズがそのアタッチメント機能で様々な局面に対応できる汎用性から価値を見出されて、陸の方でも海の様に買い求められるのかなぁと思ったのだが、どうやら違うようだ。

「しかし現在時空管理局が運用されている量産型は我が社の主製品です。生産ラインも確保されており運用実績もあります。そちらを使われた方が確実かと思いますが？」

「それはそうなんですが・・・此方にも少々複雑な事情がありまして・・・」

横に控えていたリニスがシランシリーズではダメなのかという確認も兼ねて質問してみたが、このサルガという男は何故かはぐらかすかのような答えを返してばかりで何を言いたいのか要領を得ない。

だがまぁ・・・おおよその見当は付く。本局が率いる次元航行部隊・通称海と地上本局が率いる通称陸は両陣営間の溝がクレバスの如く非常に深い。この両陣営の深〜い溝があるお陰で、片方が使っている道具をもう片方が使いたがらないという構図が発生しているのだろう。

原因は次元航行船を有する海が予算を馬鹿食いする為、地上の首都防衛隊にまで予算が回らないことに起因している。場合によっては未知の世界に赴き事件に対処しなければならない海が装備の充実化を図り、それによって金食い虫なのが気にくわないのだろう。治安維持も出来ないで何が管理局かという事かも知れない。

だが一方で海がシランシリーズを導入したことで功績を伸ばしつつあるのは事実であり、それにより陸の予算がさらに減る可能性も出てきたということもある。だからこそ陸も海に対抗する為にこうしてシランシリーズに対抗できる代物をよこせと人を寄越した・・・といったところだろう、カバーストーリーとしては、な。

裏では何を考えているのやら・・・とはいえ、それを口に出したり、咎めたりする気は毛頭ない。此方が関わることではないし、下手に刺激して恨みを買うのは論外だ。こじらせた所為で回り回って

俺の友人のなのはとかフェイトとか大事な家主様のはやてとかヴォルケンリッター達とかに何かされたくはない。

相手が世界を股に掛ける組織だけにあり得ないと言いきれないのが痛いな。

「・・・深くは詮索しないでおきます。ですが何故他社に依頼されなかったのですか？ウチは確かにシランシリーズを卸していますが、それでも小さな会社なんですよ？」

「助かります。実のところその案もあったのですが、基本的に他社はデバイス作りが主動でしてなかなか要望に合う企業がなかったのです」

「デバイスではダメなのですか？魔導師を手っ取り早く強くするなら強力なデバイスを用意するのが一番手近でセオリーでしょうに・・・」

「それは別系統で進んでいますのでご安心を。御社には新しい企業として新しい力を造ってほしいというのが上からの指示なんです」

ふーん、このサルガって人・・・意外と狸か・・・雰囲気は違うが一番最初の配属地だったセスル基地の司令と同じ匂いがしやがる。

目の前で忙しなく汗をハンカチで拭く、この一見ヒョロいサラリーマン風に見える男を気付かれない様に見ながら俺はそう思った。さりげなく下手に出ることで真意を悟られない様にする辺り結構やり手なんじゃねぇか？

それにしても今この人が言った言葉の中に別系統で開発とか、新しい企業には新しいなんちゃらとあったが嘘も方便とは良く言ったものだ。恐らくこれと同じような内容を他社にも打診している。そしてその上で要望に叶ったモノを手に入れる。実に合理的だ。言うだけタダだからな。

地上本局は予算が少ないとはいえ管理局という巨大組織の看板というバックがある。だから企業側も面と向かってお断りと言える訳も無い。

そして新しい力を・・・の下り、こいつは多分要望に沿えなかった場合即座に切り捨てるということなのだろう。新しいというと聞こえはいいが、それはすなわち試験的実験的な意味合いが含まれる。上手く作れなければ新興企業という事で切り捨てる気は満々という訳だ。

所詮は新参だから老舗の企業には勝てないという風評でも流せば、強力なバックを持たない俺の会社はＰＭＣとしては兎も角魔導機器関連で商売は出来なくなる。だからシランシリーズを造ったウチに回して来たんだ。俺んとこが海にシランシリーズを卸しているから。

考えてもみろ。ウチが魔導機器に介入しなくなればシランシリーズも最終的には“使えない会社の商品”って事で現場から引き揚げが始まる。そうすれば最近上がってきた海の株を貶めるには十分な効果を出せるという訳だ。

逆にウチが要望に沿った商品を作り上げればそれで良し。地上部隊の戦力アップに使われるという二段構えな話ってこった。憶測でしかないが、海と陸は深〜い溝があるのだからあり得ないとは言えない。まったく俺は元軍人だぞ？そりゃあそれを商売にはしてるけど・・・こうも面倒臭いのは肌に合わねぇ・・・。

「とりあえず要望だけは聞きます。話はそれからです」

「では此方の書類を――」

「・・・・・・・」

「どうでしょう？」

「これは、本気ですか？」

「すくなくても上は本気の様です」

――要望書には、端的に言えばこう書いてあった。

・強いの作れ、安くて壊れないヤツをな。

“ね？簡単でしょ？”のレベルじゃねーよ。むしろ“ね？簡単（に心折れる）でしょ？”のレベルだよ。普通の会社ならこれ見ただ

けで突き返したくなるよな。第一これに組み込まれている予算が・・・雀の涙とはどういうつもりだよ。やる気あんのかよ?少なすぎるよ!もっと熱くなれよぉぉぉぉ!!

……

……

……

しばらくしてＤＤＳ－１のキャビンで俺は薬草煙管にバンバン焚いて頭痛とムカつきの中ソファーに腰掛けていた。すでにあの管理局員は帰っており、お茶菓子のカステラと冷めた紅茶がそこにあるだけだ。まったくもって忌々しい。

『・・・結局、話を受けちゃいましたねー』

「・・・仕方ないだろう。あそこで断れという方がおかしいし不自然だ」

「でも下手したら折角ここまで大きくしたドミトーリ社もこれまでよね」

「リニスねぇ・・・でもでも相手が相手でしたし、今回主殿は悪くないとリンは思います。ハイ」

なおリンはさっきの商談中も一応居たんだぜ？俺の中にだけどな。

『リンはやさしいねぇ。でもホントどうするんですマスター』

「どうするもこうするも――――やるしかないだろう」

「それじゃあ他の社員さん達も招集して会議開かないとダメね」

「リニス、たのんだ」

「まかされました」

リニスが社員を呼びに行く。会議室に集まるだろうから俺もそっちに向かわないとな。ああ、しかし何と説明したらいいものか・・・鬱だなぁ。

「主殿、ファイトですハイ」

「・・・ファイトの前に生きる気力が欲しい」

『とにかく行きましょうマスター。止まっていてもいいことはありません』

へいへい、行きますよ。重い足取りで会議室に向かった。何と説

明すればいいやら・・・はぁ鬱だなぁ。

「地道に過ごしていたら無理難題が・・・・鬱だわぁ」（後書き）

ア、アリス嬢が・・・まだ出せない・・・だと？

・・・・・・。

まぁ焦らないでじっくりといきますかねぇ。

「挑戦者たち・・・ぽい？」

「挑戦者たち・・・ぽい？」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称（一応プロジェクト何某風）

ＢＧＭ：地上の星

――新暦６７年

歴史を変える新技術

――単機能重視パーツ構想――

相手を

汎用性

いなば選

――プロトタイプスーツ――

常識を越えた

高機能

対立する現場と開発陣

迫るコンペティション

ドミトリ？

脅威

メカ

民間企業の底力

ムズニ

――Оборона（アバローナ）――

ドミトーリの軌跡

～開発に携わった男たち～

＊＊＊

民間軍事複合企業ドミトーリ。

２０名弱の社員を抱えるこの会社に、規模に合わない大きな仕事が舞い込んだのは、その年の新暦６７年のことだった。

仕事の依頼主は世界を股に掛ける巨大組織、時空管理局。

経営を開始してから僅か2年しかたっていないドミトーリに、このような大御所からの仕事が舞い込んでくることは非常に稀である。

そのため今回の仕事は、社運を左右するといっても過言ではないと思われていた。

この話を聞かされた当初、会議室に集められていた社員達は大いに沸いた。

大半の社員達は大手からの依頼ということもあり、成功すればボーナスにつながる。

まだまだ無名といえたドミトーリを更に発展させる足がかりとなると考えたのだ。

だが、そんな彼らに途轍もない大きなハードルが突きつけられる。

『まずはこれを見てほしい』

そう言われ、手渡されたのは管理局の要望書のコピー。
管理局のエージェントに手渡されたそれにはこう書かれていた。

――――曰く“強く、安く、壊れにくいものをよこせ”

それを見た途端、社員たちの世界が――――止まった。
具体的な事は何一つ書かれてはいない。
在るのは抽象的な語群によって飾られた文字通りの要望だけだった。
会社の命運を分ける依頼は、最初から破たんしていた。
そんな中、ドミトーリ社の若き代表である社長フェン・ラーダーは、停滞した会議室で一言呟いた。

『なんだ。これ程簡単な仕事はない。“自由”にやれと言われただけじゃないか』

指示されていない、自由にしてもいい。詭弁だった。
それがどれだけ大変なことなのか、理解していない人間はいない。
だが同時に社長の目をみた社員達は、この仕事が断ることのでき

ない類だと理解した。
彼らの目に、力が、戻った。

妥協は許されない。

彼らが目指すべきは、今のドミトーリが作り出せる最高の物。
考える頭を持つ者は全員一代奮起し、提案を構想に、理想を現実にすべく設計図を仕上げていった。
ただひたすら低予算、シランシリーズを下回るコストで、シランシリーズを凌駕する。どれ一つとっても、新規開発である以上、その道はとても険しいものだった。

設計図を仕上げれば仕上げるほど問題が沸き上がる。
様々な設計図を絞り出した技術者たちはこの事に頭を抱えていた。
シランシリーズを下回るコストとなると、シランシリーズのような魔導支援端末ではコストが高すぎたからだ。

コストを抑えるには携帯出来るほどの大きさにする必要があった。
だが小さければ性能は下がってしまい、効果があるかは判らなかった。
その時の様子を、開発に携わったメカニックの一人、ジュリアス・バンクロフトはこう語る。

『あの時は本当に行き詰まってたッスね。基本的に人がいなくても扱える魔導支援端末は高性能を求めると大型化する傾向があったッス。かと言って小型化を優先すると魔導炉が搭載できないから駆動方式がバッテリーになって性能が限定されて、護身用具買った方が

強いんじゃないかって開発陣の中では噂が立ったンスよ』

高性能多機能を求めれば求めるほど、低コストでの小型化は難しくなる。

泥沼にはまった。抜け出せない何かに足を取られたと、開発陣は感じていた。

結果的に魔導支援端末での開発は打ち切られ別の開発が始まった。

そしてその末に考え出されたのは、既存のデバイスに着脱可能なアタッチメントだった。

管理局のストレージデバイスは殆どが既製品。

それを逆手にとり、接続端子を設けて増加パーツとして機能できるようにする。

ある意味で画期的なアイディアであった。

だが、低コストというハードルは予想以上に高く、開発陣に重くのしかかった。

高性能を保ったまま、様々な機能を入れた状態で小型化すると、どうしてもコストが高くなる。

材料の見直しを徹底し、複雑にならない様に設計を根本から見直した。

とはいえ、それでどうにかなるモノでは無かった。

これには開発陣も白旗を上げた。

これ以上の開発には技術的なブレイクスルーを待たねばならない。

誰もが諦めていた。これ以上は技術的に不可能だと。

だが、誰もが諦めかけたその時、開発に携わった技術者の一人がある事に気付いた。

『・・・何で一つの装備に機能が集中してるんだ?』

目から鱗だった。

魔導師が携行するものだから、コンパクトで多機能でなければならない。

開発に携わった誰もが、その常識に縛られていた。

だが携行する物を一つに絞る必要はなかったのだ。

ちょうどこの時、ようやくデスクワークから解放された社長であるフェンが、自ら開発に携わることになる。

彼もまた、今までのパーツ一つに機能が集中しすぎている点を指摘した。

そして社長の言葉が決定だった。

『多機能では大きさとコストを考えると小型化はムリ。パーツ一つに付き一つの能力で対応していこう』

新しく、開発案が練られることとなった。

一つのパーツに機能を集中させない新しい考え方。

ミッド式やベルカ式で見られる多機能はあえて捨てる。

パーツ一つにつき一つの能力。単純で壊れにくいことを実現した構想。

後に単機能重視パーツ構想と呼ばれる新しい概念が生まれた瞬間であった。

その後、こんなこともあろうかと社長がかねてより用意していた

設計図を元に、今まで失敗とされていた設計図からデータをサルベージして採用した。
社長自らが開発に参加した。これにより開発はさらに加速していく。

そして光陰矢の如く時間は過ぎ去り、依頼を受けてから半年経過した頃。

量産型シランの派生タイプである整備シランなどが製造を補助したお陰で、ついに数セット分の概念実証機の完成にまでこぎつけたのであった。

この概念実証機は、社長が使用しているデバイスの基部を元に設計がなされていた。
ＢＡと呼ばれる魔法を応用した強化外骨格のデバイス技術をオミットして再現したモノであった。
当初の予定通り、既存のデバイスをコアとすることで、魔法の力を強化しつつも装備者の安全と力の向上を約束する機能。

腕、脚部、胴体、背中と言った具合にブロック化されたパーツ。
そして例え個々のパーツだけでも運用可能であるという特性。
これにより概念実証機は様々な場面で運用可能な汎用作業スーツと呼べる代物であった。

そして完成した外骨格はプロトタイプスーツという名称を与えられたのだった。
このプロトタイプが完成した時、ここにきてようやく一段落したと感じ、開発に携わったメンバーは皆肩を降ろした。

だが、まだ終わりでは無い。

概念実証機こそ出来たが、まだ完成ではない。
この先は、性能を落とさずコストをどれだけ下げられるか・・・
それが焦点であった。
とにかく実験をしてデータを手に入れなければならない。

その為に、ドミトーリは車内の中で魔導師ランクがAに届かない人間を集めてテストを行った。

なぜAに届かない人材をテストに用いたのか？
それは時空管理局において中核をなしているのは高ランク魔導師ではなく、こういった中堅と呼べる人材が殆どであったからである。

テストは難航した。

プロトタイプスーツの重量はおよそ２００ｋｇある。
一応廃棄世界から発見された人工筋肉をインナースーツに用いたことで４割ちかい重量軽減を成し遂げていたが、それでもまだ重かった。

自在に動かすにはかなりの調整を加えなければならない。
技術屋達はどうすべきか悩み、決断を下した。

『高機動の時は使っている魔導師が重量軽減魔法を使えばいい』

動くだけならパワーアシストがある為、装備者は重さをあまり感じない。

むしろ筋力は異常に強化され、自重の何倍もの重さを持ちあげることが出来る。

それ以上の高速で動き回る時は、中の魔導師が調節する。

そうすればコストを上げることなく調整が可能だった。

こうして再度調整を受けたプロトタイプスーツだったが、今度はまた新たな問題が浮上した。

最初にそれを言ったのは、現場でテストをしていた魔導師の一人だった。

『暑くて暑くて、１５分以上着ていられない』

盲点であった。

操縦者の安全を図る為、スーツは密閉式を採用していた。

だがそれが逆に熱をこもらせる原因となっていた。

性能を重視するあまり、オペレートする人間の操縦環境から目を外していたことが裏目に出てしまった。

快適なオペレート環境がなければ、高性能とは呼べない。

一日中着ていると言う訳ではないだろうが、我慢して１５分では論外だった。

これでは魔導炉を搭載しているシランシリーズには勝てない。
疲れを知らないシランの稼働時間は機体限界と同意義である。
せめて5時間、最低でも3時間稼働できなければ、現場に出すことは不可能と言えた。

熱量を抑えるには、排熱が未発達な小型魔導炉をオミットする必要があった。
しかし、それは稼働時間の大幅な低下を招くことになる。
性能を取るか、稼働時間を取るか、開発者たちは、悩んだ。

『魔導炉を、外そう』

苦渋の選択だった。
大きなエネルギーを得られる魔導炉を外す。
それは装備が限定されるだけに留まらず、稼働時間の低下にも繋がりかねない。

――だが、人が使えないよりはいい。

こうして魔導炉が外されたタイプのスーツの開発が始まった。
基本はプロトタイプからの流用で、インナーマッスルスーツを下地にし、そのうえから装甲・武装を装着していく形は変わらない。
だが魔導炉を取り外したお陰で、重量は８０ｋｇにまで抑えることに成功していた。
魔力コンデンサ方式にしたことで排熱問題も解決し、稼働時間も3．5時間と大幅に延びていた。

ここまで万事順調かに思えた。
だが、まだ装備する兵装の開発が残っていた。

シランは換装機構を持ち、様々な装備のバリエーションがある。
しかし、開発されたばかりのプロトタイプの装備は、まだ個々のパーツ能力しか存在していなかった。
基本のパワーアシスト以外には、使用する魔法を強化する腕部の魔法補助機構、地上移動の際の走破性を約束する脚部の移動用クローラー。

そしてＢＡと同じ防御レベルを誇る胴体部の装甲シールド。
さらにはバックパックに補助魔力タンクとスラスターとが一体化した装備担架がある。

しかし、ソレだけだ。

決め手となる装備までは開発がなされていない。
しかしこの時、すでに開発陣の気力も体力も限界であった。
低コスト高性能を目指した装備は、開発者たちの命を確実に吸い上げていた。

そして恐れていた事態が起こる。

開発者の一人が過労で倒れ、他の開発者も後を追うかのように倒れのだ。
これまでテスト被験者と何度も衝突し、隈が消えなくなるほどの徹夜を重ねていた彼らの生命力が限界を迎えたのだ。
デバイスでは無い魔導機械を作り上げる負担は、想像以上に彼らに負担を強いていた。

もう、動けない。

だれもが医務室のベッドに横たわっていた。

彼らと同じく開発に携わり、主導してきた社長であるフェンもまた医務室にいた。

彼もまた、開発者たちと同じく無茶をした為、開発者たちよりも先に搬送されてここにいた。

特殊な肉体といえども、疲労は容赦なく彼を蝕んでいた。

ドーピングのようにカートリッジを使用し続けて肉体を活性化させて挑んでいたことにより、何度も吐血した。

それでもフェンは開発を止めなかった。

もはや意地だった。

『諦めるな。まだ終わりじゃない。最高をこの手で作るんだ』

疲れ果てた開発者たちを、フェンが鼓舞していった。

過労で医務室にたむろしていた開発者たちにそう言い放った彼は、一人研究室へと戻る。

小さな身体を引き摺り、支えられながらも開発に向かって歩き出す。

その姿を見て、若い社長が1人頑張っているのを見て、開発者たちもまた腰を上げて研究室へと戻っていった。

元より無茶な依頼である事は承知の上。ならば見せてやろう。民間企業の底力を。

それから数カ月が経過し、地上本局主催の次期装備コンペティションが行われることになった。

このコンペティションを通過すれば、晴れて時空管理局地上の次期主力装備として採用されることは確実であった。

そして参加した企業はドミトーリ社を含めて４社。

いずれもドミトーリ以外はすべて老舗メーカーである。

その為、若きドミトーリ社は、まさに社運をかけてこのコンペに臨んでいた。

コンペは管理局の演習場にて行われた。

行われる競技は３つ。走破性、魔法射的、模擬戦をすることが予定されていた。

これら競技において、最下位は脱落する方式を取っていたことにより、会場には何処か張り詰めた空気がただよっていた。

他社が管理局既製品デバイスの強化型、もしくは何を履き違えたのか高性能インテリジェントデバイスを持ちこんで居たり、量産型シランに対抗してか能力未知数な傀儡兵を準備したりする中、一際異彩放つ場所があった。

ドミトーリ社である。

彼らの元には、鎧を内側から開いた様な何かが置かれているのだ。
周囲の人間は、それが一体なんなのか理解できず、首を傾げていた。

やがてコンペの開始が宣言され、各社のテストオペレーターが装備を開始する。
周囲がデバイスを起動したり、傀儡兵を起動させる中、ドミトーリ社のテストオペレーターを務めていたＢランク魔導師のダモンが鎧に腰かけた。

鎧は彼を包み込むかのようにして、一人の魔導師を２ｍ強の巨人へと姿を変えた。
人が着ける物であるのにもかかわらず、その姿はまるで機械そのもの。
起動したとき、装甲表面を魔力ラインが走り、装甲シールド魔法が働いて胴体を包む。
冷却ファンの独特の空気を切り裂く甲高い音が、まるで生き物が目を覚ましたかの様な錯覚を周囲に与えていた。

魔導師用装甲強化外骨格、アバローナと名付けられたＢＡ量産型と呼べる機体が産声を上げた瞬間だった。

＊＊＊

※いい加減この書き方疲れたので普通に戻します。悪いね。

さてコンペはどうなったかというと、言わずもがなな展開だった。ドミトーリに居る開発者たちの正常な思考を妨げるレベルになるくらいで製造したからか、その性能は他社が造ったものと比べると段違いであり、象ＶＳアリくらいの開きがあったのだ。

――その為、コンペの一部始終はこんな感じであった。

走破能力試験は、魔法による飛行は無しで不整地のルートを通り、どれだけ早くゴールへといけるかを競うものだった。何故飛行は無しかというと、次期主力装備を使う魔導師はいずれも陸士、つまりは陸戦魔導師が大半を占めているという理由があった。

ここで管理局デバイスの強化品を持ちこんだ企業は最下位となって脱落した。飛べないという事態を想定していなかったからか、テスト魔導師をただ走らせるという意味のない物となった挙句、クローラーで加速するアバローナや似た様な機能を持つ傀儡兵は難なくクリアしたからである。

次の魔法射的では傀儡兵が脱落した。人型という形を取りながらも重武装を採用したそれは両肩の大型魔導キャノンという威力はあるが取り回しの悪いそれしか遠距離に対応できる武装がなく、ターゲットスフィアの他に民間人を模したプレートを粉砕してしまい、マイナスとされたからだった。

ドミトーリのアバローナは走破性能でインテリジェントに勝ち、

魔法射的においてはインテリジェンスデバイス持ちの魔導師と互角であった。これだけなら特に特筆すべき点はない様に見える。

だがインテリジェントデバイス持ちの魔導師はコンペティションで好成績をあげたい為かＡＡランクであったのに対して、アバローナを操る魔導師はＢランクであった事が、アバローナの有用性を地味にアピールしていた。

そして最後の模擬戦では、インテリジェンスデバイス持ちがミッド式の代名詞よろしく誘導魔力弾を乱射する中、アバローナはソレらをバブルプロテクションで完全に防ぎ切った上、管理局謹製ストレージデバイスの杖形態のＵの字型の部分をよりシャープに長くした様なモノを展開。

そこから一発だけ電磁加速された魔力弾を放ち、開始から一分でインテリジェントデバイス持ちを沈めて見せるという快挙を成し遂げていたのである。元々がヴィズの設計思想を受け継いでいたこともあり、使用する魔法もレールブラスターと同じ魔法を運用可能としていた。

対戦する事になったインテリジェントデバイス持ちにとっては、大衆の中でたったの一撃で昏倒させられるという屈辱を与えられた訳だが、本人は気絶させられた為にそれを感じることもなく退場していった。

こうしてコンペティションでは他社を圧倒したドミトーリは次期主力装備のコンペティションを通過し、見事に陸からの要望を叶えた形となった事にフェンは安堵のため息を吐いていた。

これで少なくても、ドミトーリの力というものを示すことが出来た。コスト面は他社のに比べれば一ケタ高いが、それでも原価５００万を越えるシランに比べれば、ほぼ材料費だけの２３００万程度に収まるのだから十分安い。

安いどころか半分以下の価格であるからおつりが出るほどである。徹底してコストを削減し、尚且つデバイスではなくて、あくまで魔導師の持つデバイスの支援ユニットとしたお陰で格納場所こそ取るがとても安上がりとなったのだ。

その上、材料自体は殆どが錬金を用いたリサイクル品である為、元手もとても安いというかほぼタダだったが・・・それは言わぬが花であろう。勿論安上がりというのはうわべだけに過ぎず、中身は性能も含めて全て一級品である。

パワーアシストで災害救助から老人介護までこなせる器用さと汎用性を実現している。もっとも２ｍ強の巨人に介護をされたい高齢者はあまりいないことだろうから無駄機能であるとも言えた。

さて、このコンペを開いた主催者である地上本局の役員たちは、

まさかこんな事態になろうとはと頭を抱えていた。実はこの依頼、海にシランシリーズを提供しているドミトーリを密かに貶める為の罠のようなものだったのである。

当初フェンが予見していたように、次元航行部隊を持つ本局に長年辛酸を舐めさせられ来た地上本部は、なんとか海に嫌がらせしたいと考え、海にシランシリーズを卸しているドミトーリに無理難題をフッ掛けて、出来る事ならこの業界から締め出してしまおうと画策していた。

実際最近の海の活躍を支えているのは陰でシラン達が支援しているというのが大きい。それを排除出来れば大幅な海の弱体化につながると一部の人間が考えて実行した。それが今回の裏の目的の一つだった。

だが誤算だったのはテコ入れした企業が何を考えたか高性能デバイスを作るだけに留まり、逆に貶める筈だったドミトーリが実現できない筈だった非常に抽象的な内容しか無かった筈の要望を満たしてしまうほどの物を作り上げてしまったと言う事だろう。

それどころか、コンペでは好成績を叩きだし、最後の模擬戦では物の一分も掛からずに相手を下す程の力を見せた。一企業の持てる技術と血と汗と努力と命を込めて造られたアバローナは、そん所そこらのデバイスが落とせるほど生易しい物では無い。これでは性能不足等を理由に叩き降ろすことも出来なかった。

ドミトーリ社は結果を出したのだ。まかりなりにも世界を管理している組織である時空管理局がそれを反故出来る訳もなく、また陸の全員が全員このような他人を貶める様なことを考えている訳でも無い。現にこの企みとは関係のない陸士の士官には是非とも欲しい

という言葉まで頂いていた。

結果的には海の勢力を削れはしなかったが、陸の戦力ＵＰは出来る。とりあえずはこの結果で満足しようと、一部の陸の人間。フェンの元にこの依頼を持ちかけたサルガは静かに、コンペの会場を後にしたのだった。

さて、コンペティションの結果は後で伝えられるという風に管理局から通達があった為、フェンはコンペティションが行われた会場において、開発陣やテスト魔導師達全員に休暇を言いわたし現地解散とした。

全員が全員、これの為に身体を壊すギリギリまで精神と肉体を酷使した為、この休暇の一言は彼らの死体のような顔に生気を戻すのに十分な効果をもっていた。打ち上げの代金を全部社長であるフェン自らが払うと言ったのもそれに拍車をかけたのかもしれない。

もっとも見た目子供のフェンに飲み代を支払わせようなんていう勇気がある輩は流石に居なかったらしく（フェンの背後の使い魔さんが怖かったとも言う）、一応会社名義で落すことが可能という話で落ち着いた。

フェンとしてはちょっと釈然としなかったが、自分の見た目とか考えたら確かにそうだということに思い至り、打ち上げも辞退してその場から立ち去った。周囲が大人だらけだと、子供の身体な自分では好きに飲み屋にも行けないだろうと彼が配慮したからである。フェンは打ち上げに繰り出す彼らを見送りつつ、リニスを伴い帰路に着いたのだった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

「あー、打ち上げでなくてよかったかも・・・キツイ」

眠い、ヤバい、キツイの三拍子が同時に俺に襲い掛かってくる。さすがに今回の無理難題をこなすのは肉体はともかく精神がヤバかった。しかも場所が場所だけに薬草煙管が吸えないからちょっとイライラするぜ。

「大丈夫？なんなら抱っこでもしてあげようか？」

「・・・勘弁してくれ。だが倒れたら頼む」

「倒れるまで無茶しないで・・・と言ってもダメよねぇ」

男の子だものねぇとリニスは苦笑しながら俺の後に着いて来ていた。俺も俺で頑固なところがあるからな。言ってもダメだと思われてしまったのかも知れん。まぁ事実だから俺は気にはしていない。

とりあえずＤＤＳ－１を引き取りにいかないといけないな。今俺達が居るのは管理局本局の次元航行船用ドッグだ。外洋用輸送次元航行船ならいざ知らず、ＤＤＳ－１クラスのフネが停泊できる港は残念ながらミッドの次元港ではここしかない。３００ｍ超もあるとどうしても港での使用料がかさむのが難点だな。

「それじゃあ、手続きを済ませに行ってくるわね」

「頼んだ」

リニスを見送りながら俺はベンチを探しに向かう。いやね、手続きは俺がしてもいいんだが、ほら身体がこれだろう？子供過ぎてちょっと意外な顔されるのがなんか嫌でな。管理局に務めて顔が知られてるならそんな目で見られんだろうが、こればかりはなんともはや。ま、楽ができて良い。

でもなんだか視界がすこしぼんやりしているのが気になるな。まだ疲れが残っているらしい。何処かで座って待っていた方が賢明か？

『脳波乱れてますよ？大丈夫ですか？』

「・・・だいじょばない」

『ベンチは6時方向。反対側ですよ』

「ん」

――――んで、ベンチに向かおうと振り返ろうとしたその時。

≪――鈍っ≫

「おっと」

「わっ！？」

だれかとぶつかってしまった。どうも疲れで注意力が散漫になりつつあるらしい。それよりも、ぶつかったのだし、とりあえず謝らんといかんなと思い、俺はぶつかった相手にぺこりと謝っていた。

「申し訳ない。不注意でぶつかってしまいました。大丈夫ですか？」

「いえ、此方こそ前を見ていませんでした。すいません」

「あれ？君は――フェン！？」

「そういう其方さんは、フェイト？」

「「なんでここにいるの？」」

なんとぶつかった相手は、かれこれ2年の付き合いがある友人フェイト嬢だった。何てことはない。彼女の職場は管理局本局の次元航行部隊だ。別にこの場に居ても何の不思議もない。むしろ俺の方が向うからしたら異分子だろうということに思い至り、少し笑みがこぼれる。

とりあえず折角久々に会ったのだし、近くのベンチに腰掛けてお互いに世間話でもという流れとなった。ベンチに座るとその隣に彼女が座る。しっかし、改めてよく見てみると、何と言うか管理局の制服を着こなしてるって感じだな。最初の入局当時に比べてら雲泥の差なんだろうなぁ。

「フム、久しぶりに見たけど、その格好はフェイトに良く似合うね」

「ありがとう。そう言って貰えると嬉しいよ」

若干恥ずかしそうなのはそう言う風に真っ向から褒められたことがないからだろうかね？まぁ2年で背丈がけっこう伸びているし、何より元の素材が良いのだから似合う似合わないでは似合うと言うほかはないだろう。蛇足だけど。

この後は他愛のない世間話だ。とはいえ途中から俺は聞きてにまわっていた。若くして執務官というのは、それなりにストレスがた

まるらしく、途中から世間話が捜査が行き詰まったりした等の愚痴に変わっていた。

まだ１０代前半だというのに、こんなに苦労を重ねたら老けちまいそうだな。魔導師が早熟なのはこういうことも理由になるんだろうかねぇ？とか考えてたら睨まれた。相変わらず女性はこの手のことには勘が鋭い。疲れた頭でボロを出すのは嫌だから、一応思考を切り変えておこう。

「――そう言えばフェンはどうして本局に？」

「実は、魔法の実験をする時に、人間使って動物実験していたことがばれてしまって自首をしに・・・」

「え！？そうなの？！でも自首だったら少しは罪も軽くなるし、執務官の私も口添えするから――」

「・・・・・・勿論冗談だぞ？」

そういうとなんだ冗談かと彼女は胸をなでおろしていた。それどころか嘘はいけないよと怒られてしまった。俺としては冗談をそうも真に受けるアナタが心配です。後、冗談で言ったつもりだったけど、俺ってそんなことする人間に見えるんだろうかねぇ。

ちなみにだがさっきの言葉は半分嘘だが半分本当だったりする。アバローナ作るときはどうしても被験者が居るからねぇ。一番最初のプロトタイプにはリミッター着いてたしね。乗り込んだ人間が死なない様に。

「ホントの理由は、ちょっと会社の仕事でね」

「会社っていうとドミトーリ社だっけ？何してたの？」

「今はまだ企業秘密ってことで、少なくても管理局全体の害にはならない筈」

「なんか気になるなー。でも今はまだってことは何時かは話してくれる」

「そう言う事。んで後は自前のフネを預かって貰ってたから引き取りに、な」

「・・・フネ？フェンって自前の次元航行船もってたの？」

「言って無かったか？」

俺がそう言うとフェイトはふるふると首を振っていた。そう言えばＤＤＳ－１を手に入れて船主になったことはまだ話した事はなかったな。

「もしかして、いま噂になってるのって・・・」

「うわさ？」

「うん、管理局のデータには登録されてない船種の次元航行船が停

泊してるって。ちょっと黒っぽい感じの大きな葉巻型の次元航行船だって聞いたよ」

仕事がひと段落したから噂を確かめに来てたんだけど・・・とは彼女の談。

どうやら俺のＤＤＳ－１は管理局では異彩を放っていた様だ。それもそうだろう。元々ＤＤＳ－１は廃棄世界に偶々埋まっていたものを修理したフネだ。現在運航されているどの船籍のフネとも船種が異なるのは当たり前である。

第一、造られたのが先史時代らしいのだから既存のデータバンク何ぞに残っている訳もない。唯一記載がありそうなのは無限書庫くらいだが、あそこは今だに情報の魔窟らしいから調べてもすぐには結果は出て来ないだろう。

第一サイズも空母並にデカイのだ。個人が持つ代物には到底見えない。そりゃ物珍しさから見に来るやつもいるよなぁ。

「・・・間違いなく俺のフネだな」

そう言うとフェイトは眼を丸くして驚いていた。まぁ判らんでも無い。俺だって友人が空母持ってますとか言ったら驚くだろうしな。

「なんなら乗ってみる？」

「う～ん、いまは良いかな。休憩時間終わっちゃうから」

「うん？一段落したのでは？」

「あはは、執務官って本当に忙しいんだよ」

なら仕方ないねー。俺もクロノの手伝いで執務官の仕事量には辟易した事があるから気持ちは良く解るぜ。最悪大変だったらお前さんの義兄クロノがやったみたいに俺をこき使っても良いぜ。友達だからな。

「お、リニスが手続きを終えたらしいな。それじゃフェイト」

「うん、また今度ね」

「またな」

そう言って俺達は別れたのだった。

しかし疲れた、早く布団に入りたいぜ。

猫形態のリニスを抱き枕にしたいなぁ・・・。

「挑戦者たち・・・ぽい？」（後書き）

どうも、作者のＱＯＬでおます。

今回結構投稿が長引いたのは何を隠そうプロジ○クトＸ調にしようとワタクシが拙い文章を考えていたからであります

つくっては見ましたけど・・・あはは、途中で力尽きて微妙になってますねｗ

・・・とりあえず、もうプロジェクト○風には書かないぜ。

ちなみに今回出したアバローナはＦＭのヴァンツァー、ヴィーザフに似た量産機です。

パワードスーツってものすごく質量兵器とか言われそうですが、考えてみたらアインヘリアル防衛で戦車出て来てるしこれくらいいいかなと思いまして。

まぁ既にシランだしてるので今更かなーと。

それではまた次回にノシ

「妹さま、襲来」

「妹さま、襲来」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

人が人である限り、その存在は善悪を持ち合わせるというのは、昔から宗教や心理学などで語られてきたある意味通説である。

人は生まれながらにして悪であるという性悪説、逆に生れた時はまっさらなキャンパスであり、環境が人を変えるという性善説、どちらも何処か頷ける内容である。

真実味を帯びているこの説は、人という生き物は善悪からは切っても切れない間柄であることを如実に物語っているだろう。

そしてこの理論は魔法が蔓延し、あり得ない現象を現実にすることが出来る次元世界にも対応しているらしく、時空管理局は日夜その対応に追われていた。

人あるところに悪だくみあり、悪だくみあるところに犯罪ありというのはどの世界に置いても真理であった。

「――――素晴らしい力だ」

さて、ここは時空管理局地上本部にある一室。
管理局でも将官とその直属の部下しか立ち寄ることが許されない区画において、一人の男が映像資料を眺めながらそう呟いていた。

男の名前はレジアス・ゲイズ。武闘派として知られる管理局将官の一人である。
彼が見ていたのは、アバローナと呼ばれる強化服を身にまとった小隊が、銃火器で武装した次元犯罪者をものともせず突っ込み、捕縛していく様子を映した映像だった。

映像の中で、次元犯罪者が短銃を撃つ、すると弾は当たる。
だがセラミックとチタンの複合材製の装甲と装甲表面を防御魔法でコーティングする装甲シールドが合わさったアバローナにはボールを当てたほどの効果もない。

弾かれた弾丸は明後日の方向へと跳弾するだけで、本当に当たっているのか疑問になるほどだった。
犯罪者はそれに慄くと、今度は背負っていたライフルをアバローナに向ける。
それは狩猟用とはいえ大型動物を相手取れる大口径のライフルで、ランクの低い魔導師ならばＢＪを着ていても重傷を負わされる威力を持つそれをアバローナに向けて弾が尽きるまで撃ち続けていた。

しかし、それすらもゆっくりと進むアバローナの歩みを止めるに

は足りなかった。
当たるは当たるが２ｍ強の巨体を少し揺らすだけでバランスすら崩さない。
大型動物の分厚い頭蓋骨を粉みじんに出来るそれでも、ダークグレーの巨人を止める事は出来なかった。

――――それを見て絶望の色を浮かべる犯罪者。

だがまだ諦めきれないのだろう、腰のベルトから棒状の何かを取り出していた。
それは缶詰の缶に持つ為の柄が付いた様な代物に見えるが、知っている人間はそれが爆薬と鉄片が沢山詰まった手榴弾だとすぐにわかるだろう。
次元犯罪者はそれをアバローナに目掛け投げつけようと振りかぶった。

その時、これまでいくら撃たれても反撃しなかったアバローナが、動いた。
腰を落とすかのような姿勢を取った途端、アバローナは大地を滑るかのように犯罪者めがけて突撃した。驚いたのは犯罪者だ。
今までその巨体から愚鈍だと考えていた巨人が自分目掛けて急激に加速したのだから。そのことに恐怖し手榴弾を慌てて投げつけた。

だが犯罪者が乾坤一擲で投げたであろうそれは、アバローナからくる恐怖からか着弾点がずれてしまい、アバローナの進行方向すぐ手前に落下する。
対するアバローナは手榴弾を前にしても動じず、フィギュアスケートのようにその場でターンして回避し、その直後手榴弾は爆発、

周囲に爆風をまき散らした。

――――爆風の中から、ぼんやりとカメラアイが薄く発光しているのが見えた。

手榴弾の爆風を受けても相手は無傷であると理解した犯罪者はなにかを喚きながら逃げようとしたが、アバローナは杖を犯罪者に向ける。

すると犯罪者は突然転ぶ、いや転ばされた。

犯罪者の身体には光輝く魔法のバインドが幾重にも巻きつけられ完全に身動きが取れない状態にされたのだった。

この清々しいほどの力に、見た人間はこれは宣伝用映画か何かなのではないかと錯覚してしまいかねないほどのものだった。

だがその映像は、随伴した魔導師がサーチャーで記録した現場における犯罪者捕縛の瞬間である。映像偽装のしようがなく、またしたところで何のメリットもない。

それだけに、この強化外骨格スーツのアバローナが如何に突出した力をもっているということを理解させられる。理解してしまう。

嘘の様な本当の話、英雄譚から飛び出したかのような圧倒的な力。暴力。

それでいて、その力は人々の平和の為に運用されるべくして作られた。

「実に、素晴らしい力だ。まったくもって素晴らしい」

椅子に腰かけながら映像を見ていたレジアスは映像を閉じると、再びそう呟いた。

だが、その表情はお世辞にも賛辞を述べているような顔では無い。眉間にしわを寄せ、どちらかというならば不機嫌と言うべき表情。何故彼がその様な顔をしているのかを理解できる人間は、恐らく彼本人以外はいない事だろう。

「――これがトライアルに勝ち、現在地上部隊の主力装備採用候補に挙がっている。え～と、識別名称はアバローナと呼ばれる装備の映像です。実際の犯罪現場にて試験運用された時の物のようです」

その様子を眺めて疑問符を浮かべながらもレポートを読みあげる秘書官のオーリス。

レジアスの娘である彼女は何時も地上部隊の為に尽力している父が、自分たちの力になりえる内容であるのにあまり喜んでいないことに気が付いていた。

だが理由は何と無くであるが想像がついていたので口に出して聞く事はしなかった。

レジアスとしても現状の地上本局や地上部隊の現状を考えれば、このアバローナの導入は喜びこそすれ、不機嫌になる云われは無い。むしろ己が提唱してきた武力強化による治安維持という概念に実にマッチしたモノであると言う事も重々に理解している。

これならば、まだ草案であるがアバローナなら地上防衛兵器との併用も可能だろう。

だが、それだけに、何故もっと早く開発されなかったのか、せめて数年程はやく世に登場していれば友は死なずに済んだのではないか。

そう思わずにはいられず、第二戦級戦力の魔導師を第一線級に押し上げるアバローナを見ても素直には喜べず、逆に複雑な心情を持つ事になった。

理解は出来ても納得はしたくないと、思わざるをえなかったのである。

――例え、それが叶わない事であったとしても・・・納得できない。

「・・・お父さん？どうかしたの？」

「ん？ああ、いやスマン・・・」

オーリスに呼ばれても気が付かない程に考え込んでいたレジアスは、見かねたオーリスが思わず素で呼びかけるまで眉間に深い皺を寄せて考えていた。

我に返ったレジアスも思わず素の状態でオーリスとの呼び合いに応じてしまう。

だが、今はまだ仕事中であり、このような口調で会話する時ではない。

「――ンンッ、オーリス、今はまだ仕事中だ」

「お父さん・・・――失礼しました」

親しき仲だからこそ、公の場での公私の区別は重要だ。
娘とそれを確認するかのように視線を交わし、脱線から本線に戻ることにする二人。

「それで、どうなさいますか？」

「どう、とは？」

「このアバローナについてです。これがもしも採用され生産されるとなると、かなりの予算を持って行かれることになります」

「ふむ・・・」

アバローナのコストはシランシリーズと比べれば確かに低コストであるが、地上本局の通常のそれからするとやはり割高であると言えた。
地上の、ミッドチルダの守りとなる部隊の人材不足を補うには、魔導師の質を高める必要が出てくるが、そう言った人材は大抵本局が持って行ってしまう。
質を高めるには高ランク魔導師が必要だと以前はそう言わざるを得なかった。

そう以前はだ。
このアバローナは数の居ない不安定な高ランク魔導師ではなく、地上部隊に多くいる一般的な陸戦魔導師を数ランク上の相手と戦え

るほどに強化できる。
　また個々のパーツ単位での運用も可能であり、一体のアバローナを入手すれば腕部、脚部、胴体、頭部、バックパックの五つに分けるられる。
　つまり1セットで最大5名の魔導師が強化の恩恵を受けることが可能となるのだ。

　通常運用ではパーツ単位で運用し、非常時にはそれらを結集して通常では対処できない事態にあたるという柔軟な運用も可能となる。
　このアバローナの数がそろえば、それだけで地上の守りは楽なものとなると言えた。
　だがその為に使われる予算は、装備一式を考えるとかなりの値段である。

　普通の魔導師が持つ装備。
　それにデバイスを加えたコストのおよそ三倍の値段なのである。
　インテリジェントデバイスや海が使用しているシランシリーズと比較すれば安いのだが、万年人材不足と予算不足で苦しめられている地上本局を舐めてはいけない。

　緊急車両と同等の値段で地上部隊の安全を買えれば安いと考えたいだが、個人装備に其処まで金をかけても良いものか？
　GOと言えない懐具合がなんとも悲しいとレジアスとオーリスは思っていた。

「・・・防衛長官の儂ともあろうものが、情けない」

「仕方ありませんよ。想定予算は飽く迄も想定。実際はもっと切迫しているのですから」

「「・・・・・・はぁ」」

長官と秘書官はやり場のない感情を溜息として吐き出した。
運用したいがやはりちょっと戸惑ってしまう。
高級バック店でバックを購入しようとして戸惑う時の気分と似ているかもしれないとオーリスは思った。

だが、もしもこれが採用されるとなれば、それについて考えていませんでしたでは済まない為、どうすべきかを考えることになるレジアス。
紆余曲折あって、今のところは一部隊分だけ購入することにして、予算が組めたら随時購入という形を取ることを決定した。
また地上部隊の一つにアバローナの運用を任せる所謂特殊部隊も同時に設立し、宣伝部隊としての役割も持たせ、事件に対処して貰うことになった。

くしくもこれはシランシリーズが最初の内はレンタルのみで、後に部隊に浸透させる時に取った方法と同じである。
その事に気が付いたレジアスはさらに眉間のしわが深くなった事は言うまでもない。
そしてこれからあの方がたにも説明しなければならない事を考えると余計につらい。
年齢の所為かすこし太めだった彼がストレスの所為か少し痩せることになるのは、回避できない運命のようだった。

＊＊＊

さて、一方その頃、第９７管理外世界では――

「――ふぅ、ここか・・・」

極東の日本という島国の海鳴市に居を構える八神家の門前。
そこに、とある少女が訪れていた。
白に近いブロンドのショートヘアの少女は拳を作り――

「ようやく居場所を見つけたわっ！兄様（あにさま）！」

――往来でそう叫ぶ少女は、とてもシュールであったそうな。

彼女の名はアリス。以前、フェンと共に誘拐を生業とする卑劣漢共に捉えられた際、フェンと共闘して誘拐犯のアジトを制圧し、危機を脱したあの少女である。
彼女がどうして地球に居るのか？なぜ八神家の前にきているのか？
それは全て、彼女の目的がフェンにあると言う事にほかならない。

アリスは３０年前に崩壊した元管理外世界にあるフェンと同じ世界の出身だ。
そして彼女はフェンの母方の遺伝子マップから作られたクローンである。

フェンが世界から消えた後に、フェンという規格外を目指し造られたのだ。

クローンというが遺伝子１００％のクローン体ではなく、フェンの母であるエリス・ラーダーの遺伝子を元に研究者が弄ったので純粋なクローンではない。

遺伝子的には母方ともフェンとも似通っているが若干違うのだ。

どういう事かというと、ようするに彼女は遺伝子的にはフェンの妹の様な存在だった。

「まさか2年も探して回ることになるとは思わなかったけど・・・管理局と繋がりがある人で助かったわ」

あの誘拐事件の折に、彼女はフェンが自分が会いたかった兄であったことを知った彼女。居場所を聞く前にフェンが帰ってしまった為、今の今まで探し続けていた。

手がかりはあの時フェンが連れていたシランシリーズだけであったが、シランを製造している会社はドミトーリ社だけだった。

その為どこの会社なのかはすぐに特定出来たものの、問題はそこから先だった。

ドミトーリはＤＤＳ－１に本社を構えている。

つまり常に次元空間を移動している為、特定の次元港に停泊していなかったのだ。

一応、廃棄世界に乾ドッグなどが設営されているが、そこは一般人はおろかその座標に世界があることすら一般には知られていない。

ドミトーリにでも勤めなければ知られることはないのだ。

ではアリスはどうやってフェンの居場所を特定したのかというと、フェンがアバローナ関係でよく管理局に出向いていたからである。
それ以前から友人であるなのはやフェイト、家主のはやての様子を見に、陸士訓練校へと定期的に出向いていた為、目撃情報は多々あったのだ。
ただ、フェンがはやてのところに厄介になっているという事を知り、さらに彼女が世話になっている方々の伝手で八神家の住所を特定するのに少し時間が掛ったという訳だ。

――こうして紆余曲折あって、辿りついたのだった。

手には菓子を持ち、訪問する準備はできている。
問題はどうやって入るかという事だった。
入るだけなら呼び鈴を鳴らせばこと足りるが、訪問した理由がないのだ。
正確には兄に会いたい一心でココまで来たが、冷静に考えてみれば兄は自分のことを知らない。

入って理由の説明で「私はアナタの妹なのです」と言うことは簡単だ。
そしてすぐに追い出されるか、病院を紹介されるのが目に見えている。
いやむしろ痛い人扱いを受け、同情心から話を合わせる為に述べた理由を肯定され、そのままお引き取りにされる方が痛い。心が痛い。
まるでお馬鹿の子扱いは流石に遠慮したいアリスだった。

（どうしよう。ここまで来た、けど・・・）

それに、いざ会うとなるとしり込みしてしまう。
出会った状況も状況だったし、大体なんと言って彼に会えばいいのだろうか？
この様な状況は研究所の戦訓でも、母親のエリスからも習ってはいない。
考えても考えても思考はループするだけで良い案が浮かぶ事はない。

戦闘に関する事なら簡単に思考を切り変えて冴えてくるのに・・・。
これまでになかった経験に、段々頭痛が出てきたように感じられる。
その所為かアリスは往来で頭を抱えてしゃがみこむと言う淑女にあるまじき行動を取っている事に気が付かない。
だがそれはとてもとても、目立つという事で――

「――あのう、どうかなさいましたか？」

「へ？・・・ああ、いや。なんでもありません」

――誰かが話しかけてくるというのも仕方がないことだった。

アリスに話しかけてきたのは、彼女より年下の金髪の少年だった。
成長期まっさかりにしては小柄な体形で、筋肉の付き方から運動

はあまり得意そうでないので危険度は低・・・と、鍛えられた軍人アイがそう相手を判断する。
アリスはなるべく自然体を装い、しゃがんだ所為で付いたほこりを振り払った。

「大丈夫なら良かった。なにか悩んでいる感じだったので・・・」

「っ！い、いや。悩んでるという訳では無くて・・・ただ、そのう・・・」

・・・前言撤回。これは自然体では無い。挙動不審という。

案の定金髪の少年に胡乱な目で見てくることにアリスは動揺している。
根は素直な方なアリスは、想定外の事態にあまり耐性がないようだ。
そんな訳で微妙な空気が漂う中、その空気を破る様に金髪の少年が口を開く。

「まぁ何ともないなら良いです。では僕はこれで」

「ああ、迷惑をかけてしまいすまない。私もこれで」

関わり合いになりたくない両者の選んだ選択は妥当なもの。
とりあえずもう別れてしまおうというものだった。
まぁ誰だって変な行動していておまけに挙動不審者がいたら関わ

り合いになるのを避けることだろう。

アリスとしては相手がすぐに引いてくれたことに安堵の溜息を内心漏らした。

私の演技も捨てたモノでは無いわねと考えたら、それはないわ～と母エリスの声で否定される言葉が脳内再生されるがスルーする彼女。

そんなアリスを尻目に、金髪の少年はとっととその場を離れると、家の門を潜って中に入っていく。その家の表札には八神の文字が浮かんでいた

（今の子目的地同じ？この家に用があったの～！？）

失敗した。今自分が中に入ればあの少年と鉢合わせする事になる。

そうなれば先程の奇行も知られてしまう事だろう。

彼女の結構優秀な脳みそは、入る＝変人はノウサンキュー、の方程式を浮かべて、何処からか登場したシュワちゃん似の男につまみ出される姿を想像する。

・・・慌てると突拍子もない事を考えるのは誰に似たのやら。

しかし、そうなると選択は二つ。

このまま強行突破するか、潜入するかの二つだ。

何故か普通に訪問して自分の事情を素直に説明する事が浮かんでいない。

説明などの前に戦闘行動などを浮かべるあたり、彼女はブッ飛んでいて抜けていた。

（・・・こうなれば、潜入するしかないわね）

そしてなにをどうすればその様な決断に至るのか不明だが、彼女はとりあえず潜入して中を調べるという行動を選んでいた。

敵情視察は行動の基本原理と思っているようだが、それは戦闘時にすることであり、ましてや今まで離ればなれだった兄の家に入る時にすることではない。

だがそんなことは関係ないとばかりに、彼女は魔力隠蔽を併用しつつ光学迷彩魔法を発動させていた。

周囲に察知されずに尚且つ魔導師の本拠地が目の前で相手に気付かれずにやってしまった事実は、彼女が否応もなく優秀であるという事を物語る。

だがなんだか方向性が現在脱線している気もするが・・・気にしたら負けの様だ。

そして姿も気配も、ましてや魔力すらも隠蔽した彼女は八神家の門を潜ったアリス。

それがまた飛んでもない騒動を引き起こすのだが・・・この時の彼女は気が付かなかったのだった。

＊＊＊

さて、侵入したのはいい。なにせ門自体には鍵は掛かっていないのだ。
郵便屋さんやら一般の人が通る場所に特に何かあるという訳でも無いのだろう。
それよりも問題は、敷地内に入っても家の中に入れないという事だった。
普通に呼び鈴を鳴らして入ればいい物を、わざわざ潜入何ぞするからこうなる。

ある意味自業自得なのだが、アリスはその事には触れずそのまま塀と家の壁の隙間を通り庭の方へと侵入した。
家に入れないなら、大きな窓があるところから家の中を観察すればいいのだ。
観察してどうするつもりなのか今一判らないのだが、アリスは気が付いていない。

――――そしてそのまま縁側のある庭へと到達する。

そして彼女にとってラッキーなことに――――

「もふもふ」

そこには、件のフェンが動物たちと戯れていたのだから。
動物に触れあうということだけで、判る人には判るそれはもう幸せそうな顔をしているフェン。
普段笑わない子が時折無意識でする笑顔というのは何事よりも尊

く感じられる。
フェンのこれもその例外に漏れず、無垢で犯してはいけない領域に見えていた。

そしてそれを隠れて見ていたアリスはというと――

（・・・・・何だろう。この見ているとこっちまで幸せに感じられる光景？）

それが癒しというものです。
アリスはフェンの持つ純粋な一面を見て、ちょっぴり幸せな気分をおすそわけしてもらったように感じた。

（それにしても、色んな動物がいるわね）

見渡しただけでも、犬猫鳥のオーソドックスは当たり前。
なんと日本猿やら何処から来たのか外来種の生き物まで来ている。
極めつけはフェンの足元に陣取る熊だろう。普通にのんびりと寝ころんでいる。
これだけの動物がどうやってこの住宅密集地へと人に見つからずにこの場所まで来たのかが今だ謎につつまれていた。

そして不思議なことに、動物たちはケンカもなにも起さず、只居るだけ。
不思議とそういう空気が漂っているのか、何故か吠えたり鳴いた

りもしなかった。
フェンは肩にフェレットを乗せて縁側に腰かけ、膝に猫を2匹のせている。
さらにフェンの左隣には大きな紺色の狼にも犬にも見える大型犬が陣取っていた。

（いいなぁ・・・あの熊さんに抱きついてみたいわ）

アリスもまた動物は好きな方らしい。しかし普通熊を選ぶだろうか？
テディベアなんてちゃちなモンじゃなくて生モノの熊だというのに・・・若干価値観がおかしいのもラーダーの血筋なのだろうか。
それにしても、フェンのすぐ近くにいると言うのに気付かれない彼女の隠匿能力は凄まじいの一言であった。

彼女は本来のスタイルが狙撃、すなわちスナイパーの様な魔導師である。
そしてスナイパーは擬態や偽装などの隠れる能力に特化している。
フェンも姿を消せる魔法を覚え、それらを知覚することに長けているが、どうやらアリスの方が隠れるという点に関してはフェンを上回っている様である。

その後も彼女は動物を愛でるフェンを観察し続けた。
彼の手が動くたびに、膝の上の猫達はゴロゴロとのどを鳴らし、手が止まらない様に催促するかのように時折ニャーンと甘えた声をだしていた。
目を細めて本当に気持ちよさそうで、何だかちょっと羨ましく見えてしまう。

正直、あまりにも平和な光景過ぎて眠たくなってきたアリス。
だがその時、フェンに動きがあった。ピピッという電子音が鳴ったと思えば通信用のウィンドウが彼の前に突然現れたのである。
ウィンドウには黒い髪をした女性が写っていた。何だか兄に似ている気がする。

『主殿、休憩時間まで残りあと3分ですハイ』

「・・・やれやれ、お仕事している身も楽じゃないねぇ。――了解した。すぐに戻るからゲートを開けてくれリン」

『了解しましたです』

どうやらリンと呼ばれた女性は自分の兄君と懇意であるらしい。
主殿と呼んでいたので、恐らくは使い魔か何かなのだろうとアリスは思った。
そしてフェンは周囲にいた動物の大半、縁側に陣取っていた動物たち以外を解散させて、すくっと立ちあがると庭の隅っこへと足を延ばしていた。
気が付けば動物たちは忍者のように音も立てずに消えている。あり得ない。

(どこに向かっているのかしら?)

アリスはアリスでフェンの後を追う・・・と言っても庭はそこま

で広くはない。
一般家庭の庭程度なのだから、正直立ったままでも十分フェンを視界におさめていられるのだ。
だが彼女はフェンのすぐ近くまで近寄った。
細心の注意を払い、絶対に知覚されないように気をつけて・・・。

「・・・ん？」
（うっ・・・気付かれ、た？）

だがその時、急にフェンがアリスの方を向いた。
気付かれてしまったのかとアリスは無意識に身体の力を抜いて、すぐに離脱できるように準備していた。
というか最初から潜入などしなければ良いと思うのだが・・・。

『マスター、どうかしましたか？』

「いや、誰かいる様な気がして」

『――周囲スキャン完了。若干魔力反応に乱れを検知しましたが、またアレらでは？』

「ふむん、俺に知覚できないってことは雑霊か何かかな？まぁいい、そろそろか」

え？雑霊？お化けに間違われたんですか？というかお化け解るんですか？

あまりの隠蔽力に知覚できない何かに間違われたのは良いが、兄は変なものが見えるという事実に戦争って酷いよねと変な方向に思考が漏れるアリス。
他人の家に不法に潜入している君ほどじゃないと思いますよ。

そうこうしている内に、庭の地面に偽装されていたゲートが開き、下へ降りる階段への入口が開かれる。
どうやら八神家の本拠地は此方だったようだと、アリスは微妙に勘違いしていた。
正確には八神家の家は地上の方で、此方は趣味と実益が混ざりあったカオスから生まれたフェンの作った秘密基地である。

本当は襲撃された際に立てこもる為のシェルタールームとして作った筈なのだが、改造が止まらず規模もアホみたいにデカイ。
だがそんなことは知らないアリスは、なんだか面白そうねとフェンに続いて階段を下ってしまったのだった。

――――地下基地には地上以上に警戒システムが設置されていることを知らずに・・・。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した前編」

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した前編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

八神家地下の秘密基地。こう書くと何だかとっても心躍らせるものを覚えるのだが、何故かある程度自分で作ってしまうとそれ程には感じない。あれだ、料理していざ食べようと思うとなんか食欲わかない、そんな感じ。

――まぁそれはさて置き、本日はこの地下基地にお客さんが来ていた。

「すごい！この腕輪の紋様は国際紋様の蓮紋じゃないか！！
こっちは年代が違うけど、地球のヘレニズム様式にそっくりだ！

すごい！」

「・・・何時の間に地球の考古学にまで手を伸ばしてたんだ？」

ここは地下基地にある保管庫だ。そして目をキラキラさせ、俺から見れば骨董品である物品達を吟味するかの如く観察しているのは、フェレットモードを解除した少年ユーノくんである。彼はいま見たこともない紋様が掘られた翡翠製の腕輪を手にとり素晴らしいを連呼していた。

「こんなの何処で手に入れたのさ！」

「いや、部下が貰って来たらしいんだが、詳しい事はしらないんだ」

何てことはない。ドミトーリは戦闘インストラクターの仕事もやっているのだが、インストラクターの仕事を終えた部下が帰還した際、何故か授業料の代わりに徴収してきたのがこれらの骨董品だっただけだ。

本当はお金か貴金属か希土類じゃないとダメなんだが、貰って来た部下がこれは良い仕事をしているから絶対価値があると言いきったのだ。ならば鑑定して貰おうという話となった訳だが、鑑定士に知り合いはいない。

なのでユーノを呼び寄せたのだ。彼なら鑑定する人間に知り合いくらいいるだろうと思ったのだ。それがまさか本人が嬉々として骨董品の鑑定をするとは・・・ああこら、自然にポケットに入れるん

じゃない。蒐集癖直せ馬鹿。

「じゃあ、価値はあるってことか？」

「価値だなんて！博物館に送れるくらい貴重なものだよ！値段なんて付けられない！」

「・・・そうなのか？」

「うん、こっちは先史時代よりも前に乱立していた超古代の魔法文明黎明期の――」

「すまん、判らん」

職業柄一応ある程度は考古学的なことも知っているし、友人がこれだから素人に毛が生えた程度なら判る。だが、あくまでも素人レベルを脱していない俺にとって、チミが興奮して話す何千とあるだろう古代文明の専門的な話はちと辛いもんがある。

俺が知りたいのはこれが売れるものなのか、そしてその値段を鑑定できる人だったのだが、彼がこうも興味を示すとは・・・しかも、お宝はお宝でも・・・。

「――やれやれ、なんつーもん掴ませるんだ。こっちは慈善事業じゃないのに・・・」

「でもすっごいお宝だよ！僕はもう興奮が冷めないよ！」

「幾ら凄くても、これじゃ何処かに寄贈する以外使い道がない」

残念だ。実に残念だ。まったくもって残念だ。大事なことなので三度言ったけど、まさか換金できないヤツだったとは・・・お宝はお宝なんだろうけど、考古学的なお宝じゃこっちには価値がない。俺のポケットには大きすぎらぁ。

「ふぅ、もうやるよソレ」

「いいの!?」

「だって、売れないじゃしかたないから。そういうの好きでしょ?」

そう言ったらユーノがわなわな震えだした。
あんまり投げやりだったから起こらせちまったか?
そう思ったのも束の間――――

「やったー!ありがとうフェン!」

「いやちょっと、抱きつかないで・・・フェレットモードでなら抱きついても可」

「そんなの朝飯前!」

いらないからあげたら超喜ばれたでござる。
でも幾らショタでも男のハグはノウサンキューだったので、フェレットにしてもらった。きゅーきゅー言いながら御機嫌で頬ずりしてくるのには癒された。え？中身はユーノ？別に気にしませんよ？外見が動物なら。

「ホント好きなんだな」

「うん！大好きだよ！」

あれれ～？聞き様によっては怪しい響き～に聞こえちゃうぞー。まぁそうなる事は万に一つもないけど・・・ってそこのヌコ姉妹変な笑み向けるな。猫形態で笑われると何だかとっても傷付くんよ。

「――ところでさ。なんかしばらく見てない内に変なモノが増えてるね」

彼が嬉々として渡された骨董品をカバンに仕舞い終えた時に、周りにおかれた様々なモノを見渡してそう言った。

「変なモノとは失礼な。鑑定不能や表に出せない開発物だぞ」

「鑑定不能って・・・どこで手に入れたのさ？」

そりゃあーた。あたしの職業を言ってみろ！・・・関係無いか。
ここに集められたガラクタの経緯は主に三つ。発掘、報酬、開発のどれかだ。
でも一々説明するのも面倒臭い。

「う～ん、何時の間にか持っていたじゃダメか？」

「・・・まぁ良いけどさ。こっちも見てもいい？」

「かまわんよ。あ、そっちのプロトスーツには触るなよ」

「うわっ、なにこの大きいの・・・ロボット？」

「違う。強化外骨格の試作品ってヤツ。カッコいいからありがたく頂戴した」

「外骨格ってコレ。フェン中で手足届くの？これ３ｍちかくあるけど？」

「すでに対策済み」

「ふーん。じゃあこっちの方を見せてもらうよ」

「ああ、存分に見てくれ。そして売れるか教えてくれ」

まぁユーノにとってはこう言った発明や開発品よりも、太古のロマンの方が興味をそそるらしいな。とりあえずなにやら判らん壺やらビンやら輪っかやら土偶やらを見てくれるならバン万歳だ。ユー

ノは鑑定士じゃないけど鑑定眼はあるみたいだから呼んで正解だったぜ。

「――さて、彼がアレらに夢中な間に・・・（今日は何用ですかな？）」

「にゃーん（遊びに来ただけだよー）」

「（ほう、ならば撫で倒してくれよう）」

「うにゃ～ん（いや～ん、フェンのえっちー）」

「なおん（・・・違うでしょう。仕事で来たんでしょうに）」

んでユーノが夢中の間に、今度はもうひと組のお客さまに念話ではなしかける。猫形態で先程から足元でスタンバってたのは言わずと知れたリーゼ姉妹だ。

「（仕事。まぁその姿できたのなら、どういう用件かは判るが・・・）」

「（単刀直入にいうわ。シランシリーズの――）」

「（却下）」

「（ちょ、ちょっと！はなしくらい聞きなさいよ！）」

ロッテがそう咆える。だがヌコの姿だと怖くないね！それにこっちにも理由がある。

「（陸の為に開発に専念した所為で別の仕事が溜まってるんだよ。新規開発みたいな新しい仕事を受けるほどの余裕はない）」

ドミトーリは戦闘インストラクターも生業としている。陸からの依頼でそれらの予定を大分過密にして時間を割かねばならなかったしわ寄せが今来ているのだ。書く言う俺も今日はまだいいが後日インストラクトの仕事が入っている。

その旨を伝えると、リーゼ姉妹はしょうがないと思ったのか尻尾をダラリと垂れさせてがっくりとうなだれてしまう。生粋の商人や商売人ならそれを見ても何とも思わないだろうが、俺は生憎そういうのじゃないんだなぁこれが。

「（・・・だが、多分そう来るだろうと思ってこんなこともあろうかと既に試験を終えたオプションパーツのセットを準備してある）」

こんなこともあろうかと！これは一度言ってみたかったんだぜ！もっとも開発してあったヤツを出しただけだから、別に負担じゃないだけなんだけどな。ちなみに、その内訳はこんな感じ――

・魔力ワイヤー射出機

・魔力式プラズマバーナー（溶接・溶切断兼用）
・工作用ワイヤーカッター&チェーンソウ
・障害物破砕用魔力稼働型重力子射出機（デモリッション・ガン）
・ハルケ式高水圧噴射機
・作業用8本腕追加ポッド“アシュラ”
・魔力探査複合式対人探査レーダーソナー

――はい、全部工作及び救助用の装備でございます。

整備シラン等で現場における経験を経て完成した工兵装備である。戦闘時には殆ど役に立たないが、災害や事故現場などにおける作業ではかなり役立つ装備である。特にハルケ式高水圧噴射機は空気中から水分を集めて使うので近くに水源が無くても使用可能な素敵装備だ。

言わずもがな異世界ハルケギニアの水魔法を応用した装置でシランシリーズに搭載されている魔導炉で駆動させる。なので魔力出力がそこいらの魔導師の比ではないからか、周辺の空気が一気に乾くという欠点もある。だが水がない場所でも水が出せるというのはすごいと作った後に自分で思ったぜ。

それにしてもシランシリーズについて、か。まぁ大方アバローナを陸に提供したことが彼女らを動かしたんだろうな。一応次元航行部隊にシランシリーズを誘致したのはリーゼ姉妹ということになっているし、彼女らがしたということはグレアムさんにも肩棒を担がせているのと同じである。

志は同じでも、長年培った壁はそうそう崩せる訳も無し。どっちかを補強すれば残った方も補強しなきゃならない。流石にアバローナの製造を停止しろとか言って来ないのは、彼女らなりの配慮ってところだろうか？まぁ流石にグレアム付きの使い魔の彼女らが部署は違えど管理局の方針に口を挟むのは越権行為。

ウチとしても建前上は管理局とは中立でいたいしねぇ、どっちかに傾くとろくなことがないから今回の件はある意味つり合いが取れたとも言える。これからも末長くお得意様でいてほしいものだ。そうすれば商品がまた売れ・・・段々思考が死の商人ぽくなって来て嫌だなぁ。

「（一応お得意様だしね。勉強させてもらいます）」

「（くっくっく、おぬしもわるよのぉ）」

「（いえいえ、ロッテさまにはかないませぬ）」

「「（ふっふっふ・・・）」」

「（・・・なにしてんのよ二人とも）」

お代官様ごっこですがなにか？という念話を送ったらガクッとしたアリア。

「紅茶でも飲むかい？それともミルク？」

「（・・・出来ればミルクで）」

彼女のことを気遣って、飲み物を差し出すことにした。詳しい商談は後日になるだろうが、まぁ幾ら勉強させても今度のオプションもそれなりに値段が張る。巨大組織ってのはこうゆう時羽振りがいいからいいねぇ。

≪――――ズズーンッ！！！≫

「うわっ！？」

「「にゃにゃ！？」」

「ん？」

さて、お茶を飲みつつまったりしていると、地下基地に突然衝撃が走った。地震では無い、空間圧縮されたこの基地はある意味で通常の空間から切り離されている。となれば基地内部で何かが起きたと考えた俺は慌てず騒がず端末を使い基地司令室へと連絡を入れた。こう言う時慌てたらダメなんだ。避難訓練を思い出せ！

「司令室。なにが起きた？スイセン」

〝侵入者です少佐。この基地に侵入していた何者かを定時訓練に赴いていたヴォルケンリッターのシグナム様が発見、追跡を開始、その際にＬブロック付近の通路にて小規模爆発。恐らくシグナム様の魔法だと思われます。事後報告となって申し訳ありません〟

何と言う事だ。侵入者がこの基地にいると上位シランであるスイセンは答えた。何処から入ったのかは知らないが、随分とまぁ命を顧みないヤツも居たものだ。侵入がばれた段階で転送魔法妨害装置が作動し、出入り口を封鎖するので逃げることは外から増援でもない限りほぼ不可能だ。

しかしいつかは来ると思っていたが、どこぞの企業からの回し者だろうか？だが生憎この基地には目ぼしい物はほぼ無いと言って良いだろう。ドミトーリにとって主要な物は全部ＤＤＳ－１に積んであるのだし、ここに来たところでどうにもならん。むしろ問題は――

「Ｌブロックだと？――不味いな。あの場所は・・・」

〝はい色々と不味いです。先程の爆発で幾つか部屋が破壊されました〟

「・・・とりあえずＬブロックへと通じる全通路に高濃度魔力を注入しておいてくれ。

あと通路の隔壁を使って侵入者を訓練室に・・・」

〝了解しました〟

とりあえず指示を出し終えた俺が振り向くと、ユーノとリーゼ姉妹の目が俺に何があったのかの説明を求めていた。俺は少し苦笑しながらこう答えた。

「なんてことはない。タダの侵入者だ・・・すぐに捕まるよ」

とりあえず何か理由を聞きたそうな彼らには即効お引き取り願うことにして案内にシランを付け、出口へと向かって貰った。勿論ちゃんと説明しろと抗議されたが、現時点では目的が解らない。それに、すまねぇな。巻き込みたくねぇんだ。そう言うとしぶしぶ彼らも了解してくれた。

警戒態勢に入ったこの基地での異分子は彼らだという事をちゃんと理解しているだけでも俺としては大助かりだった。これが某知り合いの白い悪魔さんなら絶対首を突っ込んできそうだと俺は思った。さて、それはさて置き是非こんな無謀をしてくれた侵入者の顔でも見に行きますか。

「行けるか？ヴィズ？」

『勿論、最近書類仕事ばっかだったので腕が鳴りますねぇ』

――俺もだぜ。最近戦闘無かったからな。少しばかり戦いに飢えている。

プロトスーツを見上げる。相変わらず重厚で実にカッコいいな。
・・・どうせだし使うか、新装備のテストもしたいし。
俺はプロトスーツの隣に格納された6本の砲身を束ねたそれを見る。
その束は鈍い金属の輝きを放っていた。

＊＊＊

Ｓｉｄｅアリス

■爆発が起きるほんの少し前■

センサーの類を避けて移動していた所為で、完全に兄様を見失ってしまった私は、時折巡回してくるシランシリーズから逃れつつ、この場違いな巨大施設を見て回っていた。

でも軽く見て回っただけでも私が培った平常心という名の感情を、軽く吹き飛ばせるほどの衝撃だった。なに？あのセンサーと探査網の濃さ？軍の基地でもここまで凄くはないわよ。

もともと身に着けていた隠遁術と偽装技術、それに母様直伝の魔法がなければとっくの昔に見つかって警報が鳴っていたわ。ふふふ、

でもね。スナイパーは何よりも隠れることに特化しているのよ。

それにしても広い、下手したら自分が昔いた研究所（あれもある意味でシェルターだったわね）よりもずっと広い。下手したら小さな町に手が届くのではないかと思えるくらい、地下とは思えないほど広かった。

しかも長期間居ても大丈夫なように、各所に外の景色を模したホログラムビジョンの偽窓が設置されていた。・・・なにを考えてこんな施設を作ったのかしら？この世界ってそんなに物騒な場所だったかしら？

事前に調べておいたデータを思い出しながら見て回っていた。現実は只単に兄様が凝り性でついつい増設を続けた結果らしいのだけど、そんなこと露ほども知らない私からすれば驚愕の世界であることに変わりはなかった。

恐らくシランシリーズの生産工場と思われる場所を見て完全自動化された工程に驚き、何も置かれていない巨大な地下格納庫らしき場所を通り抜け、何と無く疲れたわぁと思った時に見つけた食堂らしき場所で自販機の様な機械を見つけてボタンを押したら食べ物がタダで出て来てラッキーと思った。

――この施設、下手な遊園地等でやるアトラクションより面白かったかもしれない。

それにしても、本当にこれだけの施設をどうやって建設したのかが本当に謎だわ。よくもぁ一般住宅街地下にこれだけ目立つ物を造

り上げたものだと感心してしまう。これだけ大きいんだから、何百という人間が何年か立てて建設したに違いない。

兄様の他にも協力してくれる人達がいるのね、きっと。そう思いつつ、調査の為に姿を隠しつつ警備のシランを回避しながらさらに奥へと進んだ。もちろん兄様を見つける為だ。

ふふ、それにしてもセンサー類が張り巡らせてあっても、私を発見する事は出来ないわね。母様に“スナイパースタイルならちゃんと隠れられるようになれ”って虐め・・・もとい鍛えられた甲斐もあったというものだわ。

そうどこか優越感に浸っていた時、目の前の十字路から一人の女性が歩いてくるのを見た。なんと言うか・・・そう、凛々しいとは彼女の為にありそうな言葉だと浮かんだのが第一印象。ポニーテイルに纏めた髪、信念の籠った瞳、あれは武人だというのがすぐに判った。

そして同時に私の中の勘が、彼女はタダものではない、警戒せよ。と警鐘を発したことでさらに緊張する事になった。研究所での生活の中で姉妹兄弟の血を拭いあって培ったこの勘が外れることはない。目の前の女性は恐ろしい。そう感じた。

だから私がとった行動は簡単だった。姿は消えているし、向うはまだ気が付いていない。音もたてずに彼女の横をすり抜ければいい。たったそれだけの簡単なことだ。私にとって隠れる技術は治癒や狙撃並に自信があったことがそう考えた理由。

――――だけど、それがどれだけ甘いことだったかを私は知ることに

なる。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

その日、地下基地にはシグナムが居た。何てことはない、暇な時は地下基地にある訓練室で訓練をすることをここ数年日課としていたので、今日も目的は訓練にあったのだ。元来真面目な彼女は訓練を疎かにはせず、空いた時間には大抵訓練室に来ていたのである。

そんな彼女が異変を察したのは、いつも通りに通路を抜けて訓練室に向かう途中だった。そこへと至る通路は何時もと同じでなんの変哲もないただの通路。その筈なのに何時もとは違う、えもしれない違和感を感じ背筋がぞくっとなるのを感じたシグナムは何だろうかと思考を巡らした。

これまで体験した経験から、似た様な事象を探り、対処法を考える。結果、あった。それもごく最近同じ様な感覚を経験しているとシグナムの経験は叫んでいた。あれの悪戯なのだろうか？いや、あれはこのような無駄なことはしないし、やるとしたら模擬戦の時だけだ。

――――となれば、行き着いた思考は只一つ。

「貴様！見ているなっ！」

侵入者、これに尽きる。もしかしたら違うかもしれないが・・・切れば判る。

「はぁぁぁぁっ！！」

壊したら修理するのはフェンだというのに、シグナムはそんなことはお構いなしに瞬時にレヴァンティンを起動させ、そのまま抜き打ちで違和感を感じた場所へと切りかかった。余剰魔力で少しばかり炎がまとわりついた剣が壁を打ちすえる。

≪――――ガキン！≫

（手応え、あり！）

いや、壁を打ちすえはしなかった。硬質な感触。金属を殴りつけた様な感覚。そしてその感覚は正しいというかの如く、虚空で停止した剣先。

「何者だ。ことと次第によってはタダではすまさんぞ！！」

そういうシグナムの顔は、何処か楽しそうに歪んでいた。
ここはある意味でフェンの庭、そこに侵入できる輩は相当な手練れなのだ。
そして現に突然の剣の抜き打ちに反応し、しかと防いで見せたその技能。
騎士であると同時に武人である彼女が楽しくならない訳はない。

「・・・・・」

「答えぬのなら、切ってから聞くことにするっ――ハッ！」

虚空で止まった剣を引き戻し、再度切りつける。止まらずに何度もだ。相手は逃げようとするのを感じるが、一度感じた違和感を頼りに虚空へと切り結ぶシグナムの姿は舞踊をしているかの様に見える。見えない相手に対してここまで戦えるのも、彼女が烈火の将と称される実力の持ち主であるからだ。

そして切れば切るほど、攻撃を当てれば当てるほど、相手がいるであろう空間に“歪み”が視認できるようになる。そうなればもう相手は逃げられない。ベルカ式魔法の十八番、一対一の近接戦闘は容赦なく基地へと侵入したモノへと向けられ、火花を周囲に散らしていた。

そうしている間にもはや隠れることに意味はないと感じたのか、隠れていた不埒者は唐突にその場へと姿をあらわにした。それはまさに異形の怪物の様だった。太く長い手足、それを支える蛇腹状の背骨、中心にはフルフェイスのヘルメットとフルスキンに身を包ん

だ人型らしきものが見える、その存在が辛うじて人だという事が解る。

「ようやく姿を見せたか・・・レヴァンティン！！」

『Ｊａ，Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』

「――っ！？」

だが、相手が姿を現したところで止まらないシグナムの攻撃。カートリッジを消費し使うは剣型のシュベルト・フォルム時における彼女の決め技紫電一閃。カートリッジの魔力を吸い、レヴァンティンと彼女自身が持つ炎熱変換により刀身に炎が宿る。炎の剣を冠するそれは今まさに侵入者に振るわれようとしていた。

警告の一つも無しに振るわれる紫電一閃を侵入者は寸でのところで後ろに飛び去ることで回避することに成功する。だがシグナムの攻撃はまだ終わりでは無い。振り切った剣を再度振るい、魔力の伴った衝撃波。陣風が通路を駆け抜けて侵入者を打ちすえた。

狭い空間において圧縮されたそれは、大きな身体をしていた侵入者を容赦なく吹き飛ばせるほどの威力を発揮する。しかしシグナムとしては不満であった。紫電一閃で仕留める気であったこともあるが、侵入者の手が一瞬魔力を帯びたのを見て咄嗟に陣風を放ってしまったからである。

そしてこの攻撃では詰めが甘かったことも、侵入者の腕から放たれた一発の魔力弾が目の前で炸裂したことで、否応も無く理解した。

殺傷設定では無いが、確実に気絶を狙った威力がある魔力弾の爆発。普段爆発する魔力弾を使うフェンとの模擬戦に慣れていたシグナムはそれほど驚くころは無い。

だが魔力弾の炸裂による閃光、そして轟音と煙がシグナムの探知能力を著しく低下させた。そのことはシグナム自身が気づいており、タスクを割り振って周囲警戒に当たる。全力では無いがシグナムの攻撃をかわして防ぐことが出来る手練れだ。何時何処から来るかわからない緊張でうっすらと汗が流れ落ちる。

（――――？）

だが煙が晴れかけて来ても攻撃の予兆を感じられない。

「ッ！しまった！逃げられたか！」

そしてシグナムは己の失策を悟り、壁を殴りつけていた。アレは侵入者、だとすれば目的は生きてここで見た何かを持ちかえることにある。だとするなら逃げの一手に徹するのは定石。戦いに我を忘れたことを一瞬恥じ、彼女は消えた侵入者の追跡を途中で合流したシラン達と開始した。

姿を消せる相手に追跡は困難に思えた。だが相手も大分動揺したことで、これまで完璧だった魔力隠蔽に失敗しているらしく、所々うっすらと痕跡が残っていた。だがシグナムが追跡出来たのはそこまでであった。

「くっ、まさかこのエリアに入りこむとは・・・」

彼女が立ち止ったのはLブロックに入る入口の前だった。そこはフェンから絶対に入ってはならないと厳命された場所であり、入るとしてもフェンが同伴しなければならないということを聞かされていた。といっても以前フェン同伴で入った際には特に何か大事な物が置かれているという場所では無い。

だがシグナムは入った時に、その場所は生きる者が入ることは許されない場所であることを肌で感じ取った。武人としての覚悟もあり、主の為なら死人として戦場に赴ける彼女であるが、死人と死者とではまた違う。Lブロックは何もない筈なのに、奥は死者の気配が濃厚というとても不気味な場所。

生と死の狭間である戦場を過去に幾度か経験したことがある人だからこそ、そこに入ることは躊躇われたのである。むしろ平気で入っていくフェンの神経の方が信じられないと感じたことがあったくらいだ。しかし侵入者は確実にこの先へと入っていった。見つけた者として追跡しなければならないだろう。

【シグナム様、上位機種からの通達です。
侵入者は隔壁を操作し、訓練室へと誘導するそうです。
出来ればシグナム様もそちらへと向かって欲しいとのハイマスターからの伝言もございます】

「む、そうか」

警備シランがフェンからの言葉をシグナムへと伝えたことで、彼女はどうすべきか揺れる。それを見ていた警備シランはまた言葉を発した。

【これはキツネ狩りでございます。
追いたてる猟犬は我々に任せ、シグナム様はトリを飾ってくださいませ。
と、ハイマスターは申しております】

「・・・判った。必ず追い立てるのだ。行け」

【お任せください】

次々とLブロックへと突入していく警備シランを尻目に、シグナムは一人訓練室へと急いだのだった。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した前編」（後書き）

次回、少し更新が遅れます。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した中編」（前書き）

くっ、昨日に間に合わなかった！

ちなみに長いのでキリが良いところで続きは次回です。

それではどうぞ。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した中編」

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した中編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

なんの変哲もない一般住宅である八神家。魔法も掛かっているが実際見ただけではこの家が不可思議現象を普通に行使できる魔導師の家であると気付く者はいない。暖かな午後の陽ざしの中、その変哲がない筈の家の中では――

「ふわぁ～あ・・・ねみぃ」

「眠いんやったらベッドで寝てや。ソファーはあかんよヴィータ」

「わかったぁ～」

仕事から戻ってきたはやてとヴィータがリビングでくつろいでいた。管理局の仕事で帰ってきたは良いが微妙に時差ボケが起きているらしく、ヴィータはとても眠そうである。眠たい目をこすり疲れた体を引きずるようにベッドに向かうヴィータ。

夕飯になったら起してあげようと思いつつ、そう言えば材料あったっけと冷蔵庫の中身を頭の中でリストアップしていくはやて。家主はやてに掛かれば大抵の料理は食卓に並ぶが材料がなければそれはムリ。

最近和食通になりつつあるシグナムもおることやし、今日の夕餉は和食中心にしとこか。そう思いとりあえずごはんを炊こうと台所へ向かおうとしたその時、

≪――――チーン≫

何処からともなくエレベーターが望みの階に到着した時の様な音が響き、リビングのソファーが引き込まれ、空いたスペースに人が乗ったソファーがせり上がってきた。そしてそこに乗っていたのは顔見知りの少年ユーノ＋猫2匹。

「「・・・・」」

思わず両者にぽかんとした表情が浮かぶ。まぁそりゃ説明も無く追いだされた者と何故自分の家の床下から友人がせり上がってくるのか判らない者、どちらも共通して理解したことが、またフェンの仕業か、という事。

2年近くお互いに交流のある共通の友人がいるので、どういう事態なのかはやては即座に理解してふっと笑うと――――

「・・・ご飯、食べてく？」

「・・・いただきます」

「「にゃー」」

いまだ大事そうにバックを抱える友人の友人である少年にそう声をかけたのだった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅアリス

――ふぅ、どうにか振り切ったみたいね。

私は壁に背を付きながら先程いきなり攻撃してきた女性を思いだす。どうして隠れていたのがばれたのかは判らないが、やはり勘は正しかったらしい。事前にグラシリウスのＰＪ（パワジャケット）を展開出来る様にしておいて正解だったわ。

まさかすれ違いざまに、本気で切られかけるとかは予想外だったけど、私はなんとかその場から離脱した。道は判らなかった。でも

空気の流れが来る方を目指して奥へと逃げ込むことが出来たのはよかった。

それにしても一体何なのよ?普通警告も無しに切りかかるって・・・魔力を感じたし変わった魔法陣も展開してたからあれは魔導師なのは判るけど、いきなり切りかかるなんて何処の人斬りなの?兄様はそんな人を施設に解き放ってるというの!?

あの女性が兄様の部下かもしくはなんらかの協力関係を持っているのだとしたら・・・兄の底知れなさを改めて痛感させられた感じであった。

「ふぅ、それにしても・・・なんかさむいわね」

一息ついてようやく気が付いたんだけど、慌てて逃げ込んだこの場所になんだかとっても嫌な空気を感じた私は身震いしていた。う~ん、そうねぇ・・・感じ的には明かり一つない夜の墓場に放り込まれた時のような?ううん、霊安室かしら?

うまく口では説明できないけど背筋がゾワってする感じとでも言えばいいのかしら。通路の見た目はこれまで見て回ってきたところと対して変わらないのだけど、なぜか埃っぽく薄暗く肌寒さを感じるのである。

まるでここだけ違う世界に迷い込んでしまったかのような・・・ダメよアリス。弱気になったらダメよ。最後まで諦めずに全てのことにあたれ。やらなければならないことがあるのだからこんな所で怖気づいてはいけないわ。

とにかく一度見つかった以上、ここから脱出しないといけないわ。しくじってしまったけどＰＪの顔の部分をちゃんと覆っておいたから私が誰なのかはまだ特定には至らない筈だしね。（ＰＪの特殊性でばれるという事にまだ気付いていないアリス）

――クスクスクス

「――ッ！？」

その場から離れ、さらに区画の奥へと向かおうとした時。
背後から囁き笑いが聞えた気がしたけど・・・気のせいかしら？

……

……

……

兄様が作り上げた地下基地は住宅地の地下に造られた奇妙な立地条件の基地だったけど、この場所はさらに輪をかけておかしな場所だった。歩いている内に気が付いたんだけど、気が付けば内装がどこか古い洋館のような内装に変化していた。

薄暗くて判り辛かったけど、どうやら一つ前のブロックの隔壁を越えたあたりからしい。何故ここはこのような内装にしてあるのか理由が判らない。この基地は兄様が本拠地としているのではないの？それともこの様相には理由があるのかしら？

考えてもわからないし追手が来るであろうと想定していた私は先を急ぐ。そのうちに通路を歩いて行くと曲がり角の先に沢山の絵画が置かれた廊下に出た。何処か薄汚れた古い肖像画達は何故か全て表情が違うのに、何処か笑っているような印象を受ける。

不気味だわと思いつつも、ここ以外に通る場所がないので仕方なく進んだ。だけど、進めば進むほど気持ちが悪い。まるで誰かに見張られているような感じがした。だけど機械式のセンサーの類の反応はここに来てから一切感知していない。

だというのに、私は誰かからじーっと見られている感覚が拭えなかった。何枚も対面してならぶ肖像画を通り抜ける度にその感覚が強くなる。まったく、視覚効果を狙ったなんらかの警備システムかしら？それともタダの錯覚？

不気味に感じていたとはいえ、肖像画は数十枚ほどしかないので何とか通り抜けることに成功した私は無意識の内に安堵の息を吐いていた。だけどその途端聞こえない筈の笑い声が聞こえた気がした。

しかも背筋がぞくっとなり慌てて振り向いたが、視界に写るのは先程通り抜けた肖像画の絵が並んでいるだけ・・・でもこれはおかしいことに気が付いてしまった。何故なら私が通り抜けようとした時、肖像画は全部“入口の方”を向いていた。

でも、いま向いているのは――――私の方だった。

「――――ッ！」

えっ！と私が目を見開くと、肖像画は元通りの形となっており、異常は見受けられない。でも確かに私を見つめる目と視線が交差したのを覚えている。どれもこれも、とても愉快そうな。新しい玩具を見つけた様な・・・そんな目を。

ばかばかしい、只の肖像画がこっちを見る訳がない。目の錯覚よ目の・・・多分。私は頭を振ってさらに奥を目指す。移動しなければ捕まってしまうからという考えで頭がいっぱいだった私は、結局投降して説明をするという考えに至らなかった。

――――クカカカカ

風の音だろうか？妙に頭に残る笑い声の様な音を覚えつつ奥へと迷い込む。もっと向けられる気配の機微に敏感であったなら、私は気付いていただろう。私を取り囲むようにして存在する非常に薄い複数の・・・ナニカの気配に見られていることに。

さらに奥へ進むと十字路の様な場所に出た・・・そう思ったがよく見ると合わせ鏡となった無限回廊が置かれていた。一瞬あまりの

長さに驚いたんだけど、よく見ると単純なトリックで拍子抜けしてしまった私は何故か笑っていた。

だけど、よーく鏡を見て異変に気付く。何故か無限回廊の奥に火が灯ったろうそくが一つだけ浮いているのである。合わせ鏡は光の反射を利用したものであるので、何かが写ると複数現れる。現に私の姿も複数写っている。

だがろうそくは一つだけ浮かんでいた。あり得ないことにまた私は眼をこすってしまう。どうもこの区画に迷い込んでから変なものを見ている気がしてならないわ。でも目をこすって頭をゆすれば、ハイ元通――

≪ふわふわふわ≫

「あ、あらー？」

――おかしいわねぇ、まだ見えているの？

空中に浮かぶキャンドルというのは、トリックが判れば幻想的何だろうけど、薄暗い廊下でしかも無限回廊の中に浮かんでいるのは訳が解らない。頬をつねっても痛いことから、これは幻覚ではなく現実なのだろう。

異質なことに気が付き茫然としていた私だが、やがてろうそくがゆっくりと此方へと近づいてくることに気が付いた。あれを近づかせてはいけない、何故か本能がそう叫び私は顔を青くして合わせ鏡の前から離れた。

背筋に氷水を流されたかのような冷たい感触が止まらない。沢山の戦闘を経てここにいる私でもこんな奇妙な感じは知らない。未知のことへの恐怖が私の中で大きくなり、冷静な思考が奪われていった。

いままでタダの薄暗い通路だと思っていた場所が、この洋館の様な内装となっている区画自体が、人が入り込んではいけなかった異界ではないかということに、いまさらながら気付いた私は止まることも出来ず、振り返らずに廊下を駆けていた。

そしてそのまま広い空間へと飛び出した。どうやら休憩所のようになった空間らしく、埃を被った古い本だなやソファーのようなものが置かれている。追手のことを考えるとここでぐずぐずしている暇はないんだけど何故か私はソファーに座ってしまった。

なんというか・・・そう、誰かにゲストとして招かれて、手を取ったまま座らされたかの様な感覚かしら?誰もいない筈の休憩室でそんな奇妙な感覚を覚えたあと、ふとソファーに対面した位置にあったチェストに目が行った。

古ぼけ埃が掛ったチェストの上には、これまた埃が掛った金髪と赤い髪をした二体の古い人形が腰かけていた。薄暗い明りの中でもうっすらと見えるビスクドールはこんな状況でなければ思わず手にとってみたいと思ったほど愛らしい。

だけど、この後に起きたことを考えると、私は手に取らなくて正解だったと思う。

――くすくすくす

突然鈴の音を鳴らしたかのような笑い声が聞こえ、何処から声がとキョロキョロしていた私は再び凍りついてしまう。何故なら、先程まで俯いていた筈の二体の人形が、ガラスのまなこをスッと開いて此方を覗いていたのだから。

――あー　かわいそう　かわいそう

人形と目が合う、すると人形たちは笑みを浮かべ歌うかのようにして口を開いた。

――ことりがひとりできちゃったわ
――ここはいきもののすみかじゃないんだよ
――くっくろびんはだれがころしたのかしら
――だれもしらずにきえちゃうのさ
――きゃはははははは　あーかわいそう
――うふふふ　でもおもしろいよぉ

支離滅裂なことを叫んだ人形たちは不気味に笑いだす人形。
周囲の雰囲気も相俟ってとてつもなく不気味に見える。

――ああごめんなさいことりさん
――おどろかすきはなかったんだ
――だけどもう　ひきかえせはしないわ

――くるくる　いっぱいあしのあるくものへいたいさんたち
――あらあらたいへん　このままだとくもさんにころされちゃうわ
――あなたがぼくたちのなかまになりたいなら　のこればいいよ
――でももし　でていくのなら　このまますすんでみるといいわ
――いきていられるほしょうはないけどね
――きゃはは
――あはははは

ここまで聞いて私はもう耐えられないと頭を抱えてその場から立ち去っていた。人形たちの笑い声が頭から離れない。魔法で動いているのでも機械でもないのは勘でわかった。あれはもっと違うなにかだと、私の中の何かが喚く。

耳を塞いで来た方向から逆の方向へと逃げた私だったけど、人形たちの声は耳を塞いでも聞こえてきた。あり得ない。あれらは念話ではないし、魔力を感じないのに・・・そして人形たちは最後にこう言った。

――あーあ　ひきかえすのだったら　ここがさいごのちゃんすだったのに

私は、やっぱりとんでもないところに来てしまったのかしら・・・。だとしてもここから生きて外に出なければ・・・だってこれまで探し続けてようやく見つけた兄と言葉を交わすまで、死にたく・・・いいえ、死ぬ気なんかないわ。

なんだか頭がくらくらしているような気がしてならない。変な思

考も無駄にタスクを消費している。冷静に考えなければいけない。だが私が思考を切り変えようとしたその時またもや声が聞えてきた。

『んぎゃあ、んぎゃあ』

でも、その声は言葉ではなかった。赤ちゃんの泣き声が唐突に聞こえてきた。またしてもあり得ない現象に思考は再びゆすられ正常さを失っていく。訓練を受けて心を平坦に出来る筈なのに、まるで精神の奥底を揺さぶるかのような感じで冷静を保てない。

『あー、ほぎゃあ、んぎゃあ』

身体が硬直する。動けと念じても動けない。気が付かない内にじぶんの身体が金縛りという状態に陥っていたことに驚愕する。だめだ、意識が途切れそうになる。冷静に、考えを・・・思考をしなければ、いけない。

赤子の泣き声が響く、気が付けば何時の間にか周囲はなにもない真っ暗な部屋となっていた。よく見ると木で出来たとても古い家の中にいるようだった。タタミと呼ばれる草を編んだ独特の床の上に何時の間にか立っていた。

泣き声はどうやら私のすぐ目の前にある綿が詰まった赤い衣の中から聞こえるらしい。よくみると、そこから小さな手が伸びている。赤ん坊の手だ。なぜ、こんな場所に？いえ、ここはどこなの？わたしは、たしか・・・。

≪――ヒュルルル・・・・ドドドドーン!!≫

まるで白昼夢の中だった。突然聞こえたのは風切り音と何かが炸裂する音、かなり近い。恐らくは爆撃の音だった。爆弾がさく裂し、部屋を揺らす程の衝撃が響いてくる。なぜ?地下にいたのでは?そう、私は地下基地に潜入していた筈だ。

赤ん坊の声が大きくなる。泣いている。信じられないほど大きな轟音が響く中、ここにいない両親を求める赤ん坊の泣き声が大きくなる。金縛りの中で、無性に心を締め付けられるような赤ん坊の泣き声を聞き続ける。

爆撃の音はドンドン近くなる。これはもしやと考えたその時、天井が割れた。黒い何かが天井を突き破り、赤ん坊がいたと思われる赤い衣へと、落ちた。泣き声が途絶える。何かが私の頭に入りこむ。怖くて痛い。判らない。

そして直後の爆発によって吹き飛ばされたことで、この夢は終わりを告げた。

「――――っはぁ！？」

気が付けば私は入った時と同じように通路を走っていた。後ろを見るがあの洋館染みた内装ではなく、潜入したときと同じ地下基地の内装だった。デバイスで時間を見ると私はこの区画に入ってから3分も経っていないらしい。

だが、あの経験は一体なんなのだろう？すくなくても私の体感したアレは1時間近くあったはずなのに・・・判らない。何時から正常な思考を失ったのか判らない。だが判るのは、ここは人の居て良い場所じゃなかったということだった。ＰＪの中は冷や汗でべっとり。気持ち悪い。

強力な幻術・・・な訳がない。第一私にはＳ型デバイスによって幻術魔法があまり効かないようにされているのだから、掛かりようがないのだ。それにアレは幻術なんて生易しいものじゃ無かった気がするわ。

変な空間にでも迷い込んだのかしら？あり得ないけど、そうでもないと説明が付かないと思った。だけどそう考える暇もなく、ガチャガチャと金属がこすれる音をセンサーが感知する。そうだ、私は追跡を受けていたんだった。

慌ててこの場所から移動して通路を抜けて上層へ向かう階段を発見した私は、この区画から飛び出すようにして階段を駆け上がった。何故か充満された高濃度魔力が揺らめく通路の前まで走りぬける。

以前、追跡の手は止んでいないので、若干気持ち悪くなることを

覚悟して高濃度魔力が漂うこの区画と別の区画の境目を抜けようとしたその時――

≪――なかなかおもしろかったぜ。お嬢ちゃん、いいリアクションだった≫

――そんな声が聞えてこけかけた。

だってその声は、最後にみた幻の赤ん坊の声だったのだから。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

アリスが出ていったＬブロックの境目付近では、床の中から浮き上がるかのようにして赤ん坊が顔をだした。外見は赤ん坊の癖におっさんな彼はこのフェンが作った地下基地の謎の一つである亡霊の赤さんである。

アリスを脅かしたのはなにを隠そう彼と友達の幽霊たちだ。このＬブロックには暇を持て余したお化けが遊びに来る・・・言わば集会場のような場所と化していた。そこに来た生きた人間、お化けな彼らが脅かさない道理はない。

そんな訳でヒマつぶしを兼ねて、自分たちでもよくわからない死者の持つ不思議な力で色んな物を見せたのだ。幽霊による誘拐というのが近いのかも知れない。現実では限りなく短いのに、体験することは膨大なソレをやったのである。

結果は上々。

アリスは非常に怖い思いをしたという事が判ったので彼らとしては満足であった。死者は生きるという事がない為に非常に暇であり、フェンにより解放されているこの区画で今日はどうするー？じぶんの墓でもみにいくー？とダレていた。

そこにやってきたアリスは彼らにとってはまさにヒマつぶしの玩具のようなものだった。恐怖と困惑に彩られた感情がなんともいえない刺激を与えてくれたので、ある意味でお化け達は満足出来たのである。

そしてある意味、お化けの筆頭の様な赤さんはアリスをフェンに渡すかどうか迷ったが結局そのまま行かせることにした。理由は単純、その方が面白そうだったからだ。赤さんはなんとなくアリスがフェンとなんらかの関係があることに気付いている。

これもまた勘であり根拠がある訳も無し。只単にそう思っただけだが、もしそうならこれ程面白いことはない。死者は何より面白そうなことが大好きで、時としてそれは生者の知り合いを巻き込むのだ。そしてそれが悪いとは露ほどにも思わない。

そんなことを考えている今の赤さんを人が見ればこう言った事だろう。

まさに外道！

無邪気に笑う赤ん坊は何よりも邪気にまみれていたのだった。

さて、アリスの不思議な体験が終わったあと、彼女は隔壁により身動きを制限され、追手として追いかけるシラン達の活躍により、そのまま訓練室へと逃げ込むようにして追い立てられ、駆けこむように訓練室に飛びこんでいった。

訓練室に入った途端、訓練室の入口は硬く閉ざされてしまう。だが彼女にとってこれは想定の範囲内だった。何せ行く道行く道が閉じていたり相手いたりと明らかに誘導しようとしていたのが見え見えだったからだ。

なんらかの罠が張られていることは判っていたので警戒して進み、見えた先には広い空間・・・訓練室への入口がある。正直大柄なＰＪの姿では通路で戦闘する事は難しく、さりとて通常のＢＪに戻すには追手が多すぎたので広い空間に出られることは逆にありがたかったのである。

「――――来たか。まっていたぞ」

「・・・」

だが同時に会いたくない存在もそこにいた。自分の偽装を見破り、調べるつもりだけだったのをここまで大きくしてくれた張本人。ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム。すでに戦闘態勢の女性の将は、剣型デバイスをアリスに向けていた。

「さて一応の提案だ侵入者よ。ここで諦めるか、それとも躯をここに晒すかだ。選べ、但し私はそれほど気の長い方では無いからな。急いで決めろ」

そうシグナムはアリスに言い放つ、正直無茶苦茶だ。死ぬか降伏するか選択肢を出しているだけまだましなのだろうが、それにしても目の前で剣を向けてくる女性は随分と戦うのが好きな戦闘狂なのかとアリスは考えた。

しかしアリスに剣を向けたシグナムが戦闘狂なのかというと、実はちょっと違う。シグナムにとっては主であるはやての安全が最優先事項であり、守護騎士を名乗る以上それが存在意義として根底にあると言ってもいい。

そのため普段は無用の騒乱が来ることを望まない。まかり間違って主を巻き込むようなこととなれば目も当てられないからだ。だから普段は理性でもって闘争本能などいっさいを封じているのである。文武両道であるからこその芸当である。

またシグナムはアリスに対し、躯を晒すなどの発言をしていたが、

これはブラフである。彼女の主であるはやては殺人を好むような人間では無い。あくまでも脅し文句としての台詞であった。とはいえ凄みが追加されていたので本気にも聞こえていたが。

「――ッ！」

そしてアリスはいきなり駆けだした。戦闘の合図は一切ないが言葉はいらない。彼女は捕まる気はないし死にたくはないのだ。シグナムの脅し文句がブラフなのかどうかは彼女には判らないので、必然と戦いを選択したのだ。

魔力を用い術式で肉体を強化し、何時でも放てるように魔法を構築しての突撃。Ｓ型デバイスであるブルータルウルフはまだ起動させない。アレは使えば思考加速とＰＪの操作の円滑化が可能だが、稼働限界があるある意味で彼女の切り札である。

おいそれとは使えないため、それ以外の力をもってして相手を殲滅することを優先した。最初の一手を繰り出し、相手の体制を崩して自分のペースに持ち込む、遠距離装備はないが魔法は撃てるのだし至近距離なら避けられまい。

――もっともそれが通用するのは相手が格下場合だけである。

「そうか、戦いを選ぶか・・・レヴァンティン！」

『Ｊａ！Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ』

シグナムは襲い掛かるアリスを見てから余裕を持って防御魔法を使った。そして至近距離でアリスの腕から複数の魔力弾が放たれパンツァーガイストを消し飛ばすが、防御魔法で守られたシグナムはまったくの無傷。

すぐさまレヴァンティンを構えて、目の前ですこし硬直したアリスへと切りかかった。しかしそれらの斬撃をアリスは見切っていたかのように、後方へ身を引くことで回避していく。追撃の斬撃を受ける気はないと魔力弾のフラッシュが辺りを照らす。

「クッ！だが二度は効かん！」

目をかばったシグナムは距離を開けたアリスへと向かい跳ぶ。魔法で強化された脚力で一気に距離を詰めようとするシグナムを、近距離は危険だと理解したアリスは魔力弾で牽制して退避しながら、隙を窺っていた。

「フランジブル・ビュレット！」

小さな炸裂する魔力弾がアリスの指先からいくつも発射される。フェンのガルヴァドスほどの威力はないが、直撃を受ければ大抵の相手はその衝撃で硬直を余儀なくされる魔法だ。だがシグナムはそれを遅いと言って爆発範囲を見極めながら回避していく。

なんども激突し、撃ちあい、切り合い、殴り合う。そこには美しさなど欠片もない血なまぐさい戦闘の雰囲気が漂っていたのだが、両者の動きは完成された機械の様な動きであった。それ故にもし見る物がいたならば、そこに美を感じたであろう。

それほどまでに両者の動きは速く、そして正確であり、力を出していた。古代ベルカ式の剣を用いた近接攻撃を前に、無理に激突することはせずにひたすら回避と遅延を目的とした魔力弾による牽制でしのぐアリス。

ある意味で剛の剣に近い動きをしていたシグナムは攻めきれないと感じたのかすぐさま戦法を変えた。カートリッジを一個消費し、レヴァンティンは長剣型のシュベルトフォルムからいくつもの節が目立つ鞭状連結刃、シュランゲフォルムへと姿を変える。

実直な剣が効かぬのならば、柔らかな変幻自在の剣ならどうだ？そう言わんが如く、連結刃をアリスに向けて放つシグナム。連結刃はその名の通りに節から分裂して伸び、蛇の動きを真似ているかのように、生物的な動きでアリスに迫った。

一撃目を横に飛び去ることで回避したアリスはすぐさま反撃に出ようとする。しかし伸びきったレヴァンティンを見てすぐさま全周囲防御魔法を展開させた。直後ガキンという衝撃がアリスに届いていた。

蛇腹状の連結刃の動きは実直な剣よりも遥かに柔軟で、それを意のままに操るシグナムは死角からの攻撃を放っていたのである。初見でそれを防いだアリスに対して戦闘者としての癖なのか何処か嬉しさを感じつつも攻撃を続行した。

戦法を変えて来たシグナムに困惑したアリスだったが、彼女とまけてはいなかった。迫りくる必殺の剣劇を避けながら、別の魔法を構築していた。種となる設置術式を展開し、この場所の広さと強度を考え（といっても訓練室なので非常に強固）隠蔽しながらタスクを回す。

戦闘の中でも常に一つは意識を高く持ち上げろ。

意味は常に全体を見る目を持て、その教えが導き出した戦術が目の前の脅威を討つべく発動する。シグナムが再度連結刃を伸ばし、それを引き戻したその瞬間、

「エクステンション・ケージ」

――シグナムを中心として足元、空間に魔法陣が浮かび上がり、そこから柱が生えるかの如く、いくつもの砲撃魔法が放たれた。四方八方からの避け切ることが困難なこの魔法はフェンの弾幕結界とよく似ていた。

そしてその準備には逃げ回り、術式を設置しなければならないという発動条件の厳しさまで、彼女の兄であるフェンのそれと酷似していたのである。偶然であると言ってしまえばそれで終わりだが、無意識なる偶然は時として恐ろしい。

唯一違う点があるとするなら、フェンみたく湯水のように魔力を使用できる訳ではないアリスにとっては設置術式の隠蔽と意地にか

なりの魔力を消費する為、今の彼女にとってのまさに必殺の魔法であると言えた。

――――だがしかし、それは初見であればの話であろう。

「フッ！でりゃぁぁぁぁぁっ！」

（へっ！？うそ！なんで“突破して”くるのよ！？）

生憎と、シグナムはこの魔法ととてもよく似た魔法を使う相手とよく無理矢理に模擬戦をしていたことがある。似ているならば、対処法も似た様なものだ。かたや爆発する圧縮魔力弾幕、かたや砲撃魔法、どちらも基本は直線なのである。

だからこそ、基点を見極め射出された後の弾道がどう動くかを見極めれば、回避はそれほど難しくはない。魔法は特殊な物を除き音速に達しない為、一流の武人であるシグナムにとって見れば、迫る魔法は槍の矛先の様なものであった。

故に、身体強化を用いることで自分目掛けて迫る魔法をことごとく回避して見せた。なまじシグナムを中心に狙っていたことがより弾道を直線にして予測を容易い物としていたことがアリスにとっての不幸であった。

「ふむ、初見ならこれは避けることは難しいことだろうな。だが――」

お返しとばかりにシグナムは再びカートリッジをロードさせた。

「――――私には、通じんっ！」

連結刃にシグナムの持つ魔力が乗り、より長く伸びたそれはアリスを囲むように動き、蛇が獲物を締め上げるかの如く一気に襲い掛かった。魔力を纏った攻撃に張っていた防御魔法が一瞬にして砕け散ったのを見たアリスは空中へと跳ぶ。

だがそれをシグナムはまっていた。

≪――――ヴォン≫

空気を切り裂く音を経て、地上にあった筈の連結刃はアリスへと伸びた。剣先が音速を越えて雲を出す程の速度が出ている剣の横腹がアリスを捉え叩きつけられる。防御魔法が事前に崩されていたアリスはなすすべもなくグゥと息を吐き出して訓練室の壁へと吹き飛ばされ、壁にめり込んだ。

シュランゲフォルムにおける連結刃の攻撃はシグナムの意思により自在に動かすことが出来る。よって連結刃を振るうだけで、足場のない地上よりも不安定な空中にいる相手を吹き飛ばすことは容易である。シグナムは息を整えながら吹き飛ばしたアリスの方を見やった。

殺しはしていない、恐らくは気絶させることが出来たとシグナムは思っていた。だがそれは彼女を狙う魔力弾が降り注いだことで覆される。連結刃の大技を使ったために一時的に移動が困難だったシグナムは魔力弾の直撃を受けてしまい、ダメージを受けた。

「クッ、なにが・・・」

ダメージを負ったことでシュランゲフォルムからシュベルトフォルムに強制解除させられたレヴァンティンを杖の様に使い、再び立ち上がったシグナム。だが魔力弾直撃のダメージはそれなりに大きく、少しばかりふらついた。それを見て好機であると判断したアリスは追撃の攻撃を加える。

シグナムはあれほどの攻撃を受けて動いているアリスに対し驚愕しつつも追撃の攻撃を回避していった。だが実はアリスもまたかなりのダメージを負っていた。現にアリスはフルフェイスヘルメットの中で口から血を吐いていた。シグナムの放った攻撃の衝撃は彼女の臓器にかなりのダメージを与えていたのである。

それなのに普通に動けるのは何故か?それはアリスの出生に秘密があった。彼女は研究所で作りだされたクローンで実験体であり、度重なる拷問染みた実験と投薬は彼女から人として大切な物を沢山奪っていた。その中の一つが痛覚である。戦闘をすることを前提に造られた為に痛覚を薄くする投薬実験を受けさせられた名残だった。

触覚はあるし視覚嗅覚聴覚味覚も正常に作動している。むしろ視覚聴覚嗅覚の三つに関しては人のそれを遥かに凌駕できるほどの性

能を持つ。だが戦闘時には一定以上の痛覚を一切感じなくなるのがアリスが失った感覚の一つであった。また実はあまり温度なども感じないため熱さと寒さに鈍感でもある。

それはともかくとして、痛覚を感じないアリスはあれほどの攻撃を受けても精々身体の動きに違和感を覚える程度で済んでいた。通常であるなら気絶させられるような激痛が伴う筈なのだが、異常な生い立ちを持つ彼女にとって痛みはそれほど怖いモノでは無かった。

（痛みを感じなくなった・・・２０分が限度ね）

むしろ痛みを感じなくなった方が問題であった。痛みとは怪我の程度の指針でもあり、それが判らなくなるということは、つまりどれだけの重傷なのかがすぐには判らないということと同義である。

つまり動いたら死ぬ怪我を負っても彼女が動こうと思えば動けてしまうのだ。痛みが無くなった恩恵は大きいが、その分負ってしまったリスクもまたとても大きかった。痛みこそ感じないが血が流れ出ていくことで意識が朦朧とし始めるのも時間の問題だった。

しばらくして訓練室で今だに睨みあう両者、お互いにダメージを受けたことで攻撃を出し辛くなった。片方が揺れればもう片方も反

応して揺れる。一触即発、千日手となり始めた戦いに、どうすべきかを考え始めたアリスだったが、その均衡は突如として破られる。

「シグ姉さん！飛べっ！」

「――――ッ！」

戦いの場に介入する第三者の声が訓練場に木霊する。アリスとシグナムの両者のどちらにとっても知っている人間の声。その声を聞いた直後シグナムは突然空へと跳び上がった。何故とアリスが理解する暇もなく――――

≪――キュンキュンキュン≫

――何かが回転している音が響き。

≪――――ヴーーーーーーーーッ！！！！≫

その直後、唸り声のような音と共に、彼女の視界を奪うほどの白い光が、まるで流れ落ちる滝のような勢いでアリスに直撃する。その光は全て魔力弾であり、簡単に言えば弾幕である。一つ一つの威力は高くないが、その数は千では足りず万ではない。

だが、あり得ないほどの大量の魔力弾であることに変わりはなく、

声をあげることも叶わずに直撃した弾幕により、防御魔法も物理装甲も関係なく破壊された。そしてアリスは本日2度目の吹き飛ばしを体験して宙を舞った。

そして彼女が最後に視界におさめたのは2mほどの長さのガトリング砲を此方に向ける鋼の巨人・・・プロトタイプスーツと専用兵装デバイスであるイコライザーを装備したフェンの姿であった。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した中編」（後書き）

Qシグナムさんは戦いを邪魔されて怒らないのか？

A、これは決闘じゃないから多分大丈夫だと思うよ。

Q、イコライザーってなにさ？あとプロトタイプスーツつかえんの？

A、プロトタイプスーツはＢＡの上から装着可能というか中に入り込んで使えるパワードスーツの様な感じ、ちなみに胸部に収まるので腕は自身の胸の前においておける。

　イコライザーは同名の航空機関砲がそのまま魔力仕様になったら的な発想で考えた。なんとなく弾幕と言ったらガトリングな気がして・・・。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した後編」（前書き）

注意、今回主人公が冷酷です。
そう言ったのが嫌な方は本項はスルーした方が賢明です。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した後編」

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した後編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

訓練場に到着したのは、シグ姉さんがアリス嬢を攻撃するほんの少し前であった。

到着してみれば既に侵入者とされているアリス嬢が――侵入者がアリス嬢であったことは、彼女の魔力隠蔽が途切れた際に魔力パターンによる照合で確認済みである――シグ姉さんと交戦中であり、迂闊に手が出せない状況だった。

やろうと思えば会話を試みることも出来たが俺はそれをしなかった。相手の目的が判らない以上例え顔見知りであっても彼女は敵である。

武装解除に素直に応じてくれるかわからないし、相手が戦える状態で話し合うよりも此方から強制的に武装を解除させ制圧した方が安全かつ確実であったことから捕縛を優先した。

勿論、一応は以前に一度一緒に肩をならべて戦った彼女に対し含

むことがなかったと言えば嘘になるだろう。だが彼女と行動したのはアレ一度きりだけであったし、俺が優先すべきは俺の居場所と親しい人間の安全だ。

そう言った意味では例え顔見知りであったとしても敵は敵なのである。

彼女は管理局の嘱託魔導師であると聞いた事があったが、あの時のそれが2年経った今でも継続しているかは判らない。もしかしたら管理局からなんらかの企業に鞍替えし、雇われ先に命じられドミトーリ社関連を調べに来た可能性もあった。会社と造った時からいずれはと覚悟していたので動揺はしていない。

――ただ、相手がアリス嬢であったことが意外なであった。ただそれだけである。

「シグ姉さんが出たから、俺の出番は無さそうだ」

『なんだー。折角新装備の試し撃ちが出来るとおもったのにー』

訓練室にある制御室から訓練室内の様子をモニターしながら、俺の腕でブー垂れているヴィズを無視し懐から薬草煙管を取り出し魔法で火をつけ吸う。

あーやっぱ美味い。自身で調合し、この世界でも同じ物が作れることを確認して使っているこの薬草。一応麻薬効果はないことはわかってるんだが何故か止められない。

【各ブロック、隔壁閉鎖を確認。フィールド発生機稼働開始】

【訓練室内、模擬戦用魔力弾減衰フィールド形成を開始】

【フィールド形成を確認。フィールド強度９０％】

【訓練室内、模擬戦用結界作動開始、全結界機出力最大】

口にくわえた煙管から輪っかの形をした煙を吐き出しながら、制御室勤めのシラン達が計器を読み上げていく報告を聞き、それを踏まえて本来は訓練用におかれた設備の出力を上げてあの二人の戦いが基地に被害が及ばぬように調整するよう指示した。

そのお陰か今のところ問題無く作動している。やはり訓練室に誘導したのは正解だったということだろう。アリス嬢も結構な戦闘力をお持ちであるようだから、この基地で下手なところで暴れられなくてよかったぜ。

これで最下層にある大型魔導反応炉という、いかにもなフラグが立ちそうな設備近辺に逃げ込まれて暴れられていたら・・・一応最悪の事態が起きても一秒にも満たない一瞬のことだから海鳴市の人達は苦しまないことは確かだ。そのレベルじゃないとこの基地を運用する為に必要なエネルギーをまかなうことは出来なかった。

他人から見れば俺はすごく自己中なんだろうな。勿論反応炉には幾重にもヴォイドフィールド発生機がおかれ、また最悪異次元にパージできる安全対策も取られている。だが俺は幾度もそういった安全対策の機能が施された施設が暴走して蒸発するところに出くわしているので、幾ら安全対策を設けても安心したことはない。

常に緊張を持つ、これが安全への近道だ。もっとも今回の侵入に関しては、こちらとしても初期の段階で対応が取れなかったことが露見した。だが今回に限りこれはありがいたい。何故なら武装した大部隊が侵入したとかではなく、魔導師が1人で侵入しただけなのだ。

逆に言えば今のこの基地はアリス嬢がとった手段を用いれば集団で侵入も出来た可能性があったのだ。ある意味でアリス嬢には感謝しなければならない。此方でも感知出来なかった侵入者という存在を教えてくれえたこと。

そして、そのことに対する対策を取れる時間を得られるということを・・・。

「・・・随分と揺れるな」

『それだけ戦闘が激しいのだと思います。外ならともかく訓練室じゃちょっと手狭ですしね』

そうこうしている内にシグ姉さんとアリスの戦闘は激しさを増し、制御室にまで衝撃の余波による振動が来るほどになった。ショックキャンセラーの魔法陣が作動しているので地上の方には振動はいかないだろう。

もっとも今この制御室は震度5程度で揺れているが。

【シグナムさま、カートリッジの使用を確認】

「なにっ？」

【シュランゲバイセン、フィールドと接触、処理中。フィールド出力６０％まで低下】

【侵入者砲撃魔法使用、フィールドジェネレーター負荷増大、処理中】

【フィールド出力低下、フィードバック遮断。エラーエラーエラー】

【第３０番装甲から２１９番までが剥離しました。疑似物質装甲展開中】

【フィードバック遮断に失敗　許容限界突破ばばばばば】

その時だった、シグ姉さんがカートリッジを使用したのは。
そのあまりの激しさで、制御室でシステムと直接つながっていたシランの一体がシステムからのフィードバックによる大電流でショートしてしまった。
街一つを単騎で殲滅出来るＡＡＡランククラスの魔導師の本気の攻撃の前では、例えそれが非殺傷設定の流れ弾であっても受け切れるものでは無かったらしい。

バチバチと火花を散らして煙をあげながら操作卓から強制排除されたシランの消火を他のシランに頼むが、それとほぼ同時にシステムが危険域だということを知らせる空間ウィンドウが次々と現れた。
このまま訓練室内の被害がドンドン上がり続けると、システムが根幹から破壊されるのも時間の問題ということらしい。

「ええい！馬鹿力共め！」

『マスターも人のことは言えませんがね』

「俺はまだそこら辺は考慮する。人の基地だからって全力出しやがって、誰が修理すると思ってるんだあの人はっ」

『基本的にはマスターと修理パック搭載のシラン達ですね』

「・・・的確な指摘ありがとうよ」

俺は苛立ちながら頭をガシガシ掻きむしった。訓練用の魔力減衰フィールドではコレ以上防ぎきれない。時間が進むにつれて相対的に被害が増大していくことになると焦った俺は介入行動を取ることにした。

「プロトタイプスーツを使う。これ以上破壊される訳にはいかん」

『でもあれは出力調整と排熱の問題がまだ解決してませんよ？』

「１０分でカタを付ければ問題無い」

『ははぁ、そのための試作兵装デバイスですか。判りました、やりましょう』

俺は訓練室の床下にあたる層に運び込んでおいたプロトタイプス

ーツにＢＡを展開させてから乗り込んだ。小さな身体はすっぽりとスーツの胸部パーツに収まり、俺はモニターの下に設置されたスライドバーに手を固定する。基本的には思念と筋電位感知による操作システムなので操縦桿に相当する物は必要とされないのだ。

胸部が閉じるとスーツから延びたコード類がＢＡへと接続され、ヴィズが魔導炉を駆動させたことでスーツにシステムに灯が点る。すぐに訓練室への搬入用エレベーターに乗り込み、ヴィズが魔導炉の出力調整をしている間に俺はシグ姉さんに戦闘に介入する意思を念話で送った。

右肩の担架からサブアームで固定されていた５つの銃身を束ねたガトリング砲を降ろし、エレベーターが地上に出るのを待つ。頭上の隔壁が開くと同時に凄まじい衝撃波と流れ弾が魔法障壁に命中し、視界を揺らすが重量があるスーツのお陰でよろめくことはない。

今だ戦闘中のシグ姉さんに向けて俺は「シグ姉さん！飛べっ！」と拡声器で叫ぶのと同時にちょうど此方に背を向けていたアリス嬢に試作兵装デバイスを向けた。

銃身がカラカラと回りはじめ――――直後、尋常じゃない量の魔力弾が噴き出した。

弾幕の雨、いや滝とも言える個人が出せる量では無い魔力弾の暴風が抱えている黒いガトリングから吐き出される。ガトリング砲の名前はイコライザー。試作機だったが故に魔導炉を搭載しているプ

ロトタイプスーツ用の専用試作兵装デバイスである。

砲撃とは違う連射力による制圧を重視した結果、単機能重視パーツ構想を用いた為、デバイスとしての機能は超高速の魔力弾形成補助しかない物となった。魔導炉無しで運用しようとするとＡランク魔導師であっても僅か5秒で魔力を吸いつくされ、魔力切れのレッドアウトを起させる化け物だった。

レアスキルの恩恵で魔力切れがそうそう起こらない俺でも、魔導炉からの供給がなければ連続で３０秒使えるかも怪しい。カートリッジを用いれば一応最大で１５分の掃射が可能となるが、その際には格納空間に溜めこんだカートリッジが毎分５０単位で消えることと吐血を覚悟しなければならない。

そのあまりの燃費の悪さと、大きさからくる扱いにくさを考えると、普通の魔導師なら使う気すら起きないある意味で欠陥兵器・・・いや欠陥デバイスであるといえる。なにせこの兵装デバイスのイコライザーは内部機構を本来Ｌ級巡航艦に搭載されているのと同じ魔力式対空砲を少しだけ小型化したモノをそのまま転用したのだ。

自重も軽く１００ｋｇを越えており常人なら保持すること自体がまず無理。取りまわすことも難しい為、並の魔導師では単品で扱える代物ではない。毎分４０００発という凄まじい掃射力で弾幕密度がとてつもなく高いが、なんとなく思いつきで造ったド派手さが売りの趣味の産物であるといえた。

だが欠陥付きの兵装デバイスではあるが自力で運用できる下地があったりすると、その力は折り紙つきである。考えてみてほしい。航空機関砲を対人戦で用いたらどうなるだろうか？

もしもそれが出来たなら、対人戦闘では相手から無理ゲーとささやかれるであろう。むしろ人に向けて使うなと言われるレベルである。もしもまかり間違って物理破壊設定にして人に向ければ・・・墓には遺体のない棺桶が収まることになるのだから。

「・・・撃ち方、やめ」

『イコライザー運転停止、強制冷却開始します・・・うは、癖になりそうコレ』

「気持ちはわかるがトリガーハッピーはいらん」

『でしょうねー』

――結果、アリスは撃墜された。

冷却機から吐き出される蒸気がくぐもった音を出す。ガトリング砲が多量の魔力弾頭を高速で吐きだした結果、５つの砲身にかなりの潜熱が溜まったのでそれを冷却したのである。いまだ勢いよく蒸気を吐くそれを邪魔にならない様に担架に戻し、俺はアリス嬢が吹き飛ばされるのを少し唖然として見ていたシグ姉さんの方を向いた。

「大丈夫かシグ姉さん一応照準からは外したが」

「・・・問題はない。それよりもその――――やっぱりお前なのか？」

「ん、いま顔を見せる」

俺はスーツに膝をつかせると、ごそごそとその場に降り立ちＢＡのヘルメットを外して顔をシグ姉さんに見せた。

「やはりお前か・・・まったく、なんだこの凶悪な攻撃は？それと侵入者は私が捕まえたかったのだが？」

「それについてはすまないと思っているんだけど――――」

俺は先程まで戦いが繰り広げられていた訓練室を見回した・・・ボロボロだった。完膚なきまでにボロボロであった。ここを利用する守護騎士たちや八神はやての力を考えて、錬金魔法で再構築した素材と仕事の報酬で得た手に入るだけの最高峰の技術を混ぜ込み、頑丈に壊れにくくした筈の訓練室。

それが、経った一回の純粋な戦闘でパーとなった。

模擬戦と実戦は違うとよくいうが、流石にこれはないだろうと俺は内心茫然と変わり果てた訓練室を眺めていた。眺めるついでに彼は今回の騒動を引き起こしてくれた侵入者のアリス嬢の方を睨んだ。

なにが目的で忍び込んだのかは知らないが、相応の被害を出してくれたのだ。情報を聞きだした後も生かして償いをさせなければ気が治まらない。

そしてくだんのアリスだが、イコライザーによって壁にまで吹き飛ばされて完全に意識を失っていた。

「――コレ以上は流石に訓練室を破壊されたくない」

「う・・・すまん、いつもより激しくやってしまった」

「ううん、直すのはシランも居るからいい・・・いや、やっぱりあかんわ」

いまも酷いがこれでもしシグ姉さんの必殺技っぽいレヴァンティンの弓形態であるボーゲンフォルムまで使うつもりだったらどうなっていたことか。あれの破壊力は彼女が持つ技の中では最大であり、使われれば結界やバリヤ破壊効果をもつ魔力の矢がさらに大きな破壊痕を生み出していたことは想像に難くない。

「まぁ、とりあえず捕縛出来たからこれで戦いを邪魔したのはチャ

ラね」

「・・・しかたなかろう」

しぶしぶという感じであったが、一応は配慮してくれているのだろう。というかそうでないと困る。まぁちょうど余剰魔力を溜めこんできたカートリッジの数が億に到達しそうだったので、それを消費する機会だと考えればそれ程苦でも無い。

――――とりあえずアリス嬢を拘束しておいた方がいいな。

「ヴィズ、ワイヤーってまだ持ってたっけ？」

『あのー、マスター？そんなことより先程から其方さんの生命反応が徐々に小さくなってるんですが？』

へっ？と素っ頓狂な声を漏らしアリス嬢を見れば、なんか痙攣していた。ヘルメットが破損しており彼女の顔が見えるのだが、口から結構な量の血が噴き出している。あちゃー、内蔵をやっちまった。放っとくと持たないだろう。

どうやらイコライザーは非殺傷設定でも長く当てすぎると重症を負わせてしまうようだ。しかし流石元は対空魔力機関砲だ。攻撃出力の地力が違う。でも人相手に使うにはナギ払うレベルで抑えた方がよさそうだ。非殺傷でも十分殺せるようだしな。

試験運用が出来た上、人に向けるとどうなるかが判ったことに感

謝しつつ、俺はとりあえず以前からよく使っていた自分用の治癒魔法をアリス嬢にかけてやる。とはいえ自分用に調整された治癒魔法は他人には効き目が薄い。このままではアリス嬢はここで果ててしまうことだろう。それはちと困るな。

仕方ない、か――

「シグ姉さん、シャマル先生呼んできてくれない？」

「何だ。侵入者を助けるのか？」

「死体はなにも語らないので。まぁ死体でも情報は得られるといえば得られるんだが・・・それに殺したらはやてがね」

「わかった連れてこよう。今の時間なら上の家で料理の手伝いでもしているだろうしな。それまで持つか？」

「一応医療設備もあるから。それじゃ頼みます」

＊＊＊

戦闘は終わり、後処理を出来るところまでで良いからとシランズに頼んだあと、アリス嬢を医務室に搬送した。ちょいとやり過ぎたらしく、軽く診断しただけでも内臓破裂と各所複雑骨折や粉砕骨折は確実。治癒魔法で無理矢理生命維持させないと死んでいた状態で

あったことに少し冷や汗が出る。

やはり対空砲をほぼそのまま流用したのは不味かったか。これで死なれたら情報が得られない上寝ざめが悪くなる。最近リジェネレーションする身体のお陰でめっきり使う機会が減った治癒魔法をかけ続け延命させながら、はやくシャマル先生来てくれ―と内心思っていると、

「おまたせ。急患はどこかしらっ」

息を切らせたシャマル先生が飛びこんできた。治癒魔法を展開しているのを見るとすぐさま変わってくれた。やはり俺では代わりにもなりはしない。シャマル先生は騎士の中では参謀役にあたり、あまり戦いには向いていないが、その分回復役を担っていたからかこういった治療などが上手い。

実際管理局では医務官のポストを得ているのだから、かなり医療の腕前はあるのだろう。そのお陰で俺がするよりもずっと効果的な魔法を使用し、アリス嬢の顔色がドンドン良くなっていくのが間近で見てとれた。すげぇなシャマル先生、最近影薄かったけど見なおしたぜ

そう心の中で念じたところ「失礼なこと言わないでね！」と怒られたがあえてスルーした。そしたら泣かれた。いや、アンタ何歳・・・ゴメンナサイ！クラールヴィントでランダム転送しようとしないでください。以前飛ばされた時は日本海溝の底だったから、水圧で死ぬかと思ったから。

女性に年のことは厳禁でしたね申し訳ありません。大丈夫シャマル先生は若くて綺麗で美人ですから転送だけは本当に勘忍して下さいスイマセンデシター！・・・謝ったら許してもらえたことにホロリと来た。

「・・・――それでシャマル先生、彼女の容体はどう？」

「外傷はほぼ完治。内蔵も痛めていたけど処置が早かったから後遺症はないわ。怪我の内訳聞く？」

コクっと頷くと、シャマル先生はアリス嬢の治療前の状態を教えてくれた。

外傷は左右第一から第四までの肋骨骨折、脊椎粉砕骨折（奇跡的に神経は無傷）、両肩脱臼、大腿骨骨頭下骨折、折れた肋骨が刺さったことで気胸と皮下気種と血胸による気管封鎖等だそうだ。うん、やり過ぎた。

「下手したら死んでたわよこの子。一体なにをしたらこうなるのかしら」

「侵入者だったから容赦しなかった。出来ればあまり聞かないでほしい」

「・・・そうね。まぁ今度から気をつけてくれればいいわ。でも殺したく無いなら加減しないと――今回は本当に危なかったわよ？」

「気をつけます。ありがとうございました」

正直俺も説明しづらかったので深く追求してはこなかったシャマル先生には感謝した。俺も正直どう説明すればいいかわからないのだ。侵入者なんだが昏睡しちゃってるし・・・いやまぁ方法はなくもないんだがね。非人道的過ぎてどうなのかと。殺しかけといてなに言ってんだと思われそうだが、戦場じゃよくある事だ。

「しかし昏睡状態か・・・」

「無理に魔法で治癒したようなものだから細胞に負担が掛かり過ぎたのよ。今は細胞を休ませる為に薬で眠らせているわ。本当はすぐにでも尋問したいでしょうけど侵入者でも女の子なんだし傷を残したりしたらダメよね」

「そりゃ、まぁ・・・」

・・・侵入者でも女の子なんだし傷モノにしたらダメ、か。

「シャマル先生も随分と丸くなったようで」

「・・・そりゃ、ね。ほら?はやてちゃんと暮らしてれば自然とそうなるわ」

「・・・それを許容しちゃう俺も丸くなったかもしれませんな」

「それで良いと思うわ。だって今は戦争中とかじゃないんでしょう

？ピリピリしてたら心までイガイガのとげとげになっちゃうわよ？」

――俺の場合は若干手遅れでもあるんですがね。

「それに何度も言うようだけどやり過ぎ」

「いやまぁ、それについては釈明が」

「言ってみなさい」

「武装を強制解除してからの方が安全に捕縛出来たので――」

「はい有罪ね。男の子が女の子を虐めちゃだめなのよ？」

「ええー」

「・・・冗談はさて置き、アナタなら無傷で捕縛くらい出来たんじゃないの？」

シャマル先生は真面目な表情になり、ジッと俺を見つめてきた。

やっぱりやり過ぎだと言いたいらしい。

「出来るには出来たんだけど」

「けど？」

「新兵装の実験がしたくて・・・侵入者だからいいかなーって思って、シグ姉さんが先に与えたダメージが結構深かったのは想定外でして――」

「実験って・・・ハァ」

「いや、死なれたら寝ざめは悪かったのでシャマル先生がいてくれてホント助かった」

そう言ったら流石に命を軽んじ過ぎているとシャマル先生に怒られちった。まぁ戦時下ではない訳だし、流石にやり過ぎたのは自覚してるので反省はしている、後悔はしてないがな。

「まぁ騎士である私たちとかなら事情もわからなくはないからそれ程言わないけど、はやてちゃんとかに知られるとあんまりいい顔はしないわね」

「仕方ない。生きてきた世界が違う。こういう面は彼女は知らない方がいいと思う」

「そうね。確かにそう思いたいわ。でもねフェン君」

「なに？」

「・・・いいえ、何でも無いわ」

シャマル先生は何か言いたそうだったけど結局口を閉じた。どこ

か悲しいという感情が伝わってきたが、まぁ言われても困るので言わないでくれたのはありがたい。

「ああ、そうそうフェン君。これってなんだと思う？」

「・・・？これ？」

「そう、さっき治療していて探査魔法かけた時に気が付いたんだけど、何かの機械らしくて私にはよくわからなくて、フェン君ならわかるんじゃないかなーって」

シャマル先生が指さしたのはアリス嬢の首の後ろ側だった。何だろうかと俺もヴィズに頼んで探査魔法を使ったのだが――

「S型デバイスだとっ・・・？いやもっと発展したヤツか？」

『これは・・・マスター、もしかして彼女は』

「・・・同郷、なのか」

「えーと、S型デバイス？って、なに？」

――USN式デバイスの極地のS型デバイスが彼女の首で煌めいていた。

とりあえずよく判っていないシャマル先生には簡単に説明してお

いた

＊＊＊

Ｓｉｄｅアリスｉｎナイトメア

う～、う～。幽霊の１０００人目になんかなりたくないよ～。

「――ハッ！なんだかすっごく怖い夢を見た気がする。具体的には洋館で幽霊１０００人目として記念パーティー？」

恐ろしい夢だったわ・・・それにしてもここは一体――

「あら？気が付いたの？」

ふと気が付くと、金髪の女性がそこにいた。白衣を纏っているから、お医者さん？

「ここは・・・どこだ？」

「覚えてないの？あなた撃墜されてここにいるのよ？・・・待ってねフェン君を呼んでくるわ」

撃墜？あれ？私が撃墜されたって・・・ああ思い出した。確か兄様のことを調べる為に民家に潜入したら地下に基地があって、探索してたらすごく強い人に目をつけられて襲われて・・・そうか、私は負けたのか。でもあの人は本当に強かったものね。ＰＪを展開して負けるなんてこっちに来てからは初めてだったわ。

あれ？でもあの凛々しいあの人に止めを刺された記憶はないんだけど？どちらかと言えば背後から大きな一撃というか何かを喰らったような・・・あれ？

「っと、こんなことしている場合じゃない。はやく逃げ――」

「やぁアリス嬢、久しぶりだな」

「・・・・・・っ」

「どうした？そんな油が切れかけたぜんまい人形みたいな動きをして？」

嘘、気配、感じなかったんですが？何時の間に後ろに現れたんですか兄様？思わず寝かされていたベッドから降りようとしたままの姿で固まってしまう。あ、そう言えばさっきの金髪の人が呼びに行くって言ってたわね・・・幾らなんでも呼ぶの速すぎるわよ。逃げる暇もないじゃない。

いやまぁ、武装解除されてるから監視されてるみたいだし、逃げ

だせる保証はなかったけどさ。諦めたく無かったと言いますか。

「さて、まぁなんで俺がわざわざ来たのか、用件はわかるよな？」

「・・・くっ」

「アリス嬢は人の土地に不法侵入した訳だ。しかも隠密行動でわざわざ潜入という形で基地の中にいた。つまり機密となる物を見られている可能性がある。ＵＳＮ軍の基地だったなら銃殺されていてもおかしくはない。何か申し開きしたいことはあるか？」

「・・・いや、ない・・・ん？」

確かに無断で侵入したのは事実だし、ここは管理外世界で管理局の法は効力を持たないから、兄様に殺されていてもおかしくはなかったのよね。でも私は兄様の手に掛かるのなら別に・・・とここまで思考がずれ込んだ時、ふと目の前にいるフェン・ラーダーの言った言葉に違和感を覚えた。

――兄様、今あなたＵＳＮ軍とかって言いませんでしたか？

「まぁそう言う訳でアリス嬢に人権はないわけで」

「いきなり話が飛躍してるぞ！――あ、クソ！デバイスがっ」

「既に解析して展開機能をロックしてある。残念だが歩く以外の機

能はないから逃げられんぞ？」

「解析って、私はどれだけ眠って――」

「1時間ちょいだ。実に興味深かった。義足でありながらアームドの様に頑強であるのにストレージの如く処理能力がある癖にインテリジェンスの様に拡張性が――」

「1時間で解析される私のデバイスって・・・」

デバイスを解析されロックを掛けられて逃げられないことを嘆けばいいのか、それとも兄様が急にウンチクを始めてしまったことを嘆けばいいのか判らなかった。だけどこれだけは言える・・・兄様は絶対父様の血を受け継いでいる！その腐り輝く科学への飽くなき探求心は絶対にそうよ。

うんざりしたくなるようなウンチクを聞かされていた私であったが逃げるに逃げられない。正直どうすればいいか判らない。まさかこのような形で兄様と会う羽目になろうとは・・・あれ？でもある意味目的は達してるってことになるのかしら？潜入は情報収集が目的で最終的には兄様に会う予定だったのだし。

「で、聞くがお前さんは何者だ？なぜＳ型デバイスを持っている？所属はＵＳＮか？それともＯＣＵの方か？」

「唐突だな――所属はＵＳＮだった。生れはＯＣＵだったがな」

「・・？どういう事だ」

「文字通りの意味さ・・・母さm――ラプターと呼ばれたエリス・ラーダーの一人息子の小さき英雄さん」

「やはり同郷か・・・目的はなんだ？まさか俺の顔を見に来ただけじゃあるまい？」

ごめんなさい。それがある意味で正解なんです。だけどどう言えばいいのか判らないの。こんな時どんな顔をすればいいの？なに？笑えばいいの？馬鹿なの？死ぬの？絶賛混乱中であります。母様助けてェ。

「とりあえず質問をする。拒否権はない。俺としても同郷の人間を尋問したくはないし、手荒なことをしたくはない。素直に答えてくれれば今ならシランシリーズを一体お土産にしてやってもいいぞ？」

「ブッ！なんだその破格な条件は！？シランシリーズは管理局御用達の支援端末で個人には先ず手に入らないってもっぱらの噂だろう！？なに考えてるんだ！？」

「冗談だが」

「冗談、なのか！」

口では激昂していたが心の中は冷えていた。正直驚き、と言うべきなのかしらね。あの高性能機をプレゼントするとか、まるでスラムで慈善事業のボランティアがパンを配るかのような気軽さでプレ

ゼント出来ると言い放つとか普通はあり得ないわ。でも冗談だったらしいので少し残念。

でもこれで正直に話しても信じてもらえるのかしら？私だって兄様がこんな世界で生きていた何て思いもよらなかったのだ。それに私は彼のことをしてっていても彼は私のことを全く知らない。悲しいけどこれが現実なのに――

「とにかく質問に答えてもらおう。虚偽はなしだ、ＯＫ？」

「うぐ・・・判った。なにが聞きたい？」

そして私は、これまで生きてきた半生のことを話し始めるのだった。

……

……

……

「・・・あー、ちょっとまってくれ」

話を終えると、目の前にいる兄様は額に手を置いて頭を抱えていた。それはそうだ。私が造られた原因は彼が英雄に祭り上げられたことに端を発している。そしてその実験体はどうやって入手したのかは不明な母親のエリスの遺伝子から造られたと話したのだ。

つまり目の前にいる少女――この場合は私のことだけど想像して欲しい。もしアナタの目の前に年上っぽい少女がいて、私はアナタの妹なのですと言われたらやっぱり救急車を呼びたくなるわよね？実際私だったら同じことを平時に言われれば、とりあえずその少女を病院に送ってあげちゃうもの。

だけど、私の場合はあの当時の世界情勢を鑑みてみると、停戦はしたが実質上の冷戦状態だった大国があったのだ。だからあながちあり得ないとも言いきれない状況だった。実際戦争が続いたから再生医療分野、クローニングという技術はどちらの陣営でも普通にあった訳だしね。

「つまり・・・君はある意味でラーダー家の血縁者、ということになるのか？」

「少しばかり語弊はあるがおおむねその単語が意味する通りだ。気持ちは判らなくはない。だがプロジェクトは本当にあった。そして私はその際に造り出された実験体であり、お前の母エリス・ラーダーの遺伝子マップから造られた」

「・・・つまり、どういうことなのだろうか？」

「遺伝子が似通った人間が後から生まれいでたということを指すなら・・・私はお前の妹、という立ち位置ということに――」

「まてまて、まだ早合点してはいけない。とりあえずはタイムマシンの入口を探そうじゃないか。タイムボカンでも構わない」

「お前が落ちつけ！？」

突然換気口に飛びこもうとしたフェンを抱きしめる形で取り押さえ、落ち着くようにいうが相当混乱しているらしく、じたばたと暴れている。あれ？私一応囚われた身だったわよね？なんか立場逆転してませんか？どうなってるのよ、もう。

で、ワームホールに飛び込んでくるとか言いだした兄様を抑えていたところ。

「フェン君。侵入者さんとはいえあんまり乱暴とかは――あらまぁ♪」

さっきの白衣を着た金髪のお姉さんが、何故かとってもいい笑顔を向けて来た。え？なんですかそのとても面白い物を見たって顔。ちょ！ごゆっくり～ってなに！？ねぇ何か誤解してるわよ！別に過激なスキンシップとかそういう訳じゃないですから！お願い戻ってきてー！カムバーック！！

「――ハァ、ハァ、ハァ」

「はぁ、はぁ、お、落ち着いてくれたか？」

「・・・ああ、取り乱して悪かった。正直信じたくはない事柄だったからつい」

「信じたくはないだろうが事実だ。何なら私の細胞から遺伝子コードを読み取って見ればいい。恐らく血縁者ということはすぐにでも証明されるだろう」

そう、一番の説得力は恐らくこれ。私の遺伝子コードは母様の物に手を加えて調整した物。多少変質を受けているけど人間として重要な部分や受け継がれるべき遺伝子コードは変わらずにそこにある。調べればすぐに私がどういう存在なのかは判る筈。

そう私が言うと彼は首を横に振り、「いや信じる」と半ば観念したような感じで信じるという感じに応えていた。何でと私が問う前に彼はその理由を教えてくれた。理由は私の足。正確には足に偽装してある義足型デバイスのグラシリウスだった。

「そんな変なデバイスを作るのは、あの世界では父上くらいのものだろうしな。確証はなかったが、父上の名前が部品の一つに刻印されてたし、新しいデバイスのテストヘッドか福祉関連に意識をシフトしたんじゃないかと思っていた」

何故だろう?変なデバイスを作るというところで妙に納得してしまうのは。というか父様、私の足に自分のサインを見えない位置に刻印しておかないでくださいよ。

「ではこれまでの質問は――」

「一応念の為の確認だ。まぁ一応確認の為に後で遺伝子を調べさせてもらう。しかしシャマル先生め変なことを他の誰かに伝える前に捕まえてＯＨＡＮＡＳＩ・・・もといお話しないと・・・」

「そうかあの人はシャマル先生というのか・・・あーところでだな」

「まだ遠くには言って無い筈だから隔壁を降ろして――ん？なんだアリス嬢」

そのう、何と言いましょうか・・・あう。

「こ、これからも、よろしく？」

「え？！えーっと・・・よろしく？」

どう言えばいいのか判らないが、付き合いは長くなりそうな気がしたので、何時の間にかこんな言葉を告げていた・・・すこぶる恥ずかしかったわ。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

その後アリスは侵入者ではないということで一度地上に戻り八神家の面々にも紹介された。八神家は全員、彼女がフェンの年の離れた?妹だと聞かされた際、思わずフェンが耳を塞ぎたくなったほどに声を張り上げたことは言うまでもない。

あり得んだとか似てないと言われたがそれはある意味仕方がない。フェンは母親の血を色濃く受け継ぎ白人系でありながらも黒い髪をしている。対してアリスはというとフェンとは対照的に金髪であり、地球で言うところの北欧系美少女なのである。

もっともソレはより効率のいい生体兵器として研究された時に、遺伝子調整を受けた結果メラニン色素の減少が起こってしまったという事情がある。実際アリスの顔立ちは髪を黒くしてみればフェンとどこか似ている雰囲気は確かにある。

念の為にフェンも彼女から遺伝子コードを貰い、ヴィズに残された以前の自分の身体の遺伝子コードと一緒に解析しており、その結果はアリスがこの場にいるという結果を生んでいた。

「ふわぁ、フェン君にこんな別嬪さんな妹さんがおったやなんてねぇ・・・ああ、自己紹介が遅れてごめんなさい。私は八神はやて。フェン君の居候先の家主様とでも言えばええんかな。とにかく仲良くさせて貰っとります。よろしく」

「い、いえ。ご丁寧にどうも」

アリスは突然ぺこりと頭を下げつつ自己紹介をしてきたはやてに少し動揺した。もっともそれ以前にシグナムという自分をかなり追いつめてくれた武人がこの場にいたことも動揺している原因でもある。

「シグナムだ。まさか侵入者がそこなフェンの血縁者とはな。地下ではすまなかった」

「い、いや。侵入していたのは事実ですから」

「そうか、許してくれるのか。さすがはフェンの妹だな。理解が速い」

「は、ははは・・・」

正直アリスとしてはシグナムが苦手となっていたが、そう口にすることも出来ずただただ苦笑いを浮かべるだけだった。誰しも襲い掛かってきた相手がいきなりフレンドリーに接してくれれば苦笑の一つでも浮かべるものである。

その後もヴィータやシャマル、人型のザフィーラの紹介も受けたアリスは最後にシグナムと対面していた。みな最初は驚いていたが、フェンがらみのことであったのでまたフェンかの一言で大体納得していた。それでいいのか八神家。

そして八神家とも顔見知りとなったアリスは帰ろうと思ったが、すで日も紐傾いていたので泊まっていってはどうかという、兄であるフェンとより長くいられそうな素敵な提案に思わず首を縦にふっ

てしまった。割と育っている彼女の身体を虎視眈々と眺めていた子狸がいたことも知らずに・・・。

「こちら〇〇〇、施設へと侵入した後編」（後書き）

ううん、なんか美味く文章が書けない。あれ？上手くだったか？旨くだっけ？

もうダメかもしれない・・・頭が痛いです。頭痛薬飲んでから書けばよかった。

体調管理には気をつけましょう。

「にゅうーよーく（入浴）へ行ってきます……寒いな」

「にゅうーよーく（入浴）へ行ってきます……寒いな」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称（お待ちかねの入浴タイムだぜヒャッハー！）

――八神家・浴室

「……良い湯加減だけど、なんでお風呂まで貰ってるのかしら私？」

あれよあれよという内にフェンの現在済んでいる居候先の方々に紹介され、気が付けばご飯を貰い泊まることが確定していた彼女。あまりの素早さに一瞬時間を飛び越えたのではないかと思ってしまった。

そんなアリスは色々あった疲れを癒すためにと八神家の家長に勧められてお風呂を頂くことになっていた。最初は遠慮したものの、はやての攻勢の前には手も足も出ず、結局言いくるめられて風呂に

入ることに。どうしてこうなった？

「はぁ――それにしても……」

彼女は背中を無意識に触る。昔からの訓練で付いてしまった古傷以外、背中はつるつるで肌は彼女がまだうら若き乙女である証明のように真っ白だ。

訓練により無駄な脂肪はそぎ落とされ、それでいて女性としての特徴は成長を続けている身体は、それ自体が黄金律であるかのような魅力を放っている。

だが彼女はもう一度背中をさする。白人特有の陶磁のように白く美しい肌には古傷以外なにもない……だが彼女はつい数時間前に背後から魔法で撃たれたのだ。

それも実の兄に、侵入者であるという理由で――

「……いや別に理解してたからいいんだけどね。覚悟はあったし」

――侵入者、それイコール害を為す存在。

むこうからしてみれば何をしに来たか判らないアンノウンであった自分が、よくも五体満足でいられたものだと彼女は思っていた。曲りなりにも違法研究施設で造られた彼女にとって、侵入者がどういった扱いを受けるのかは知っていたからである。

むしろ生死を問わない排除というのは潜入者相手の対処法としては常識であり、情報漏洩を防ぐ意味で砲撃魔法などで消滅させられなかったという事実の方が奇跡であるとすら考えていた程である。

一見すればタダの人間に見えなくもない彼女もまた、フェンの居た世界で生み出されたある種の生体兵器であることに変わりはなく、その思考は一般人とは相いれない歪みがあるのかもしれない。

そんな常識から逸脱した彼女の思考からすれば、撃墜されたのは無断で敷地内に潜入した挙句、見つかるヘマをした自分なのだ。自業自得という言葉が浮かび、うう～と悔しそうに眉を顰めていた。

「うう、それに潜入した手前なんて話しかければいいのだ～」

ざぶんと湯船に顔を落としながらそう呻くアリス。呻くくらいならやらなければ良かったのにという幻聴が聞こえたが彼女は気にしない。序でにガラガラと浴室の戸が開いたことに考えに夢中だった彼女は気が付かなかった。

「あ～う～、兄様はどう思ってるのかな……」

「会いたいんやったら素直に会った方がええんちゃう？フェンくん回りくどいことはきらいやよ？」

「そうか――――へっ！？」

ここにきてようやくアリスは浴室に自分以外の誰かがいることに気が付く。思わずバッと音が出そうなくらいの速さで振り向いた先には、

「ハロー、アリスー。お客さんのお背中をながしにきたでー」

「え？は、はやて、さん！？」

八神家において色々な意味で最強生物であるはやてがタオル一枚で浴槽の縁に顎を載せ、上目使いでアリスを眺めていた。突然の来訪者に驚いて思わず敬語になっていることに彼女は気付かない。

そして半ば条件反射で手近な武器になりそうな桶に手を伸ばしていた。そんなアリスをクスクスと笑いながら（目はある部位に固定）はやてはこう切り出した。

「日本、というか第９７管理外世界では裸のつきあいっていう文化があってやな？」

「は、はだかのつきあい？ですか」

はやての発した言葉に、何故かとてつもない悪寒を感じたアリスは思わず後に下がろうとしていた。何故かはわからないがこのままでは自分が大変なことになるような気がしてならない。だがこう言った場合どう対処すればいいのか彼女には判らない。

「そう、裸のつきあいや。これまで会えなかったお兄さんをわざわざ探して訪ねてきた妹さんがおるんやし、これまでフェンくんのお世話をしてきた私としては、是非とも妹さんとも仲良うしたいと考えたってわけや。まぁこの世界における客人のおもてなしみたいなもんやから深く考える必要はあらへんよ」

真顔でそう説明されアリスはその迫力に負けたのか「はぁ」と気のない返事を返すことしかできない。もっとも確かに地球には裸のつきあいはあるが、今現在君を狙っている狸が語った事とは全く違うことだといいたい。

「そ、そのわきわきした手はなんなので――ヒアッ！」

「マァマァ　エエガナエエガナ」

「な、なんでカタ事なのですか～！？」

なぜか無理矢理浴槽に突入してくるはやて。困惑して逃げる機会を失ったアリス。

彼女は肉食獣の如く目がランランと如何わしく輝くはやてに身をすくませた。

……あとはどうなるか言わなくてもわかりますね？

「いただきます」

「い、いただくって!?いやぁぁぁ!!」

はやてはおもむろに胸に手を伸ばし、揉む。揉む。揉んで揉みたおしていく!

え?まさかこの子この年でレズビアン?!いいえ兄への態度からして男の子も平気みたいだったからバイセクシャル!?と間違いなようでいて正鵠を射るような思考が走るが、ある部位からの刺激で思考が上手く回らなくなる。

さすがの魔人はやて、異世界の人間だから出鱈目を教えて逃げられないようにしてから獲物(アリス)をむさぼる(揉みしだく)とは、恐ろしい子。

そしてコレ以上は年齢制限に引っ掛かるので描写できません。え?知りたい?

どうしても?じぶんたちは紳士だから知らなくてはならない?

……では、ちょっとだけですよ？音声のみどうぞ。

『ちょ、ちょっとどこをさわってる、キャっ』

『まぁまぁええがなええがな。ただの洗いっこなんやしそう慌てんと、じっくりしっぽりと洗ってあげたるし』

『しっぽりってなん――ヒッ！』

『あっと、手が滑ってもうた。でも恥ずかしがり屋さんなんやなアリス。ほなら密着して洗えば見えへんし恥ずかしくないやろ？ぎゅぅー』

『アアンッ――抱きついて、ぐりぐりしちゃダメでヒャっ』

『ほむほむ、なかなかの弾力と吸い付きで……ええなぁ、初めての感触やけど病み付きになりそうやわ』

『あう、うぐぐ……』

『声出すの我慢するとか、アリスちゃんかわええなぁ』（完全にお

っさん化）

『はうぅ、あっぁ～～っ！』

はい、サービスはこれまで。なにもっと見たい？
これ以上は脳内で補完してください。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

【とんてんかんちん、とんてんかんちん】

【われら～修理シランズわ～、修理がお仕事～なんでもします～】

【切断溶断、アーク溶接お手の物～】

【そう言う訳で、材料ください】

「……簡易ＡＩしか乗せてない筈だよな？――まぁいい頼んだ」

ボロボロになった訓練室の壁に整備シラン達がまるで蜘蛛の様に壁に張り付いて作業をしていた。いやまぁ元々蜘蛛型の多脚戦車なんだけどね。俺は俺でシラン達が持って来た廃材の脇で錬金用デバイスヘルメスを用いて連続錬金を行い修理用の材料を作っていた。

積み上げられた廃車から剛性に優れた合金版を、ＴＶや冷蔵庫などの電化製品から衝撃吸収材や強化ＦＲＰを生成し、電子回路やコード類も新品に変えていく。それらをシランズが運び接続及び溶接するというローテーションをすることで、比較的短時間の内に作業を終えることが可能となっていた。

しかし作業中にシラン達が変な歌を歌い始めた。

量産型がベースで簡易ＡＩしか積んでいない筈なのに、何故メロディとかテンポとかを理解出来るのだろうか？機体アップデートの時に回路増設した記憶とかはない。だが安くあげる為に廃棄世界で拾った人造タンパクニューロチップを幾つか使用したのだがそれが原因かも知れない。

なぜか連中は天然のオイル好きみたいだし、よく判らん。

【とんてんかんちん、とんてんかんちん】

【われら～修理シランズわ～、修理がお仕事～なんでもします～】

【切断溶断、アーク溶接お手の物～】

【そう言う訳で、材料ください】

「……ほらよ。もってけ」

あらえっさほいさっさと、先程出来あがったばかりの鉄骨を複数で集まり持ちあげ、危なげなく運んでいく整備シランズ。面白いのだがなんだかとってもシュールな光景だったと言わざるを得ない。

だが一見ふざけているような感じであっても、修理の方は迅速かつ正確に行われ、傷付いた細胞が自己修復する映像を見ているかの如く、壁に開いた大穴が塞がれていた。ちなみに穴は５m以上のサイズが多い。最大で４０m、どれだけ力込めたのやら。

壁の中の配線も全てやられていたために、訓練室は一度電源を落として全てを再メンテナンスしなければならない。俺は発電機と一体化した非常用サーチライトで照らしだされた大穴を見て、本日何度目になるかわからない溜息を吐く。

幸い瓦礫は消滅することなく散らばっただけなため、集めればどうとでもなる。　変則ピースが自在に変形するパズルのようなものだ。瓦礫を集め錬金で元の姿に戻しはめていけばいい。

だが得てしてこう言った作業は単調で退屈で、それでいて睡魔まで襲ってくる。リニスには夜食とコーヒーを頼んだが、恐らくは部屋に戻れば夜更かしはダメと有無を言わさず寝かされてしまうかもしれないな。

そんなこんなで作業していると、現場指揮をしていた筈のスイセンが此方にきた。

【少佐。蒸発した分も含め隔壁間の衝撃緩衝ジェルが足りません。】

「チッ、アレは流動体で耐熱じゃなかったから蒸発したのか」

衝撃緩衝ジェルはあってもなくても良い様な素材だが、ベルカ式の激しい訓練や修練などで壁に激突することは多々あるため、内部機構の保護的な意味で必要なものだろう。無いと衝撃が壁を伝わって変なところで故障が起こるからこまるよ。

「……外壁の修復を優先。ジェルは後で注入できる」

【了解しました。そのように指示を下します】

「ああそれと補強に必要な分の材料の算出も頼む」

【はい、その為のシランシリーズです】

「では頼んだ。――いけるな？」

【はい、そのつもりです】

これで外壁修理は全てスイセンに任せられるから錬金に専念できる。だがしかし、随分と修理が板についてきたな俺。戦闘よりもその後の後始末の方が出番多いってどうよ？それにしてもここの設備じゃいい加減限界か……。

「ＡＭＦでも手ぇ出してみようかな」

あれならかなりの規模の魔法を使用されても範囲内なら無力化が……ってＡＭＦを展開する機材は一般じゃまだ実用化されてないぞ！？唯一ガジェットドローンが搭載しているけど……スカ山さんとコンタクト取れないかな。マジで。

『ＡＭＦ？ああ、あの広域に使えるマバリアみたいな魔法ですね』

「知っているのかヴィズ……つーかマバリアってＦＦか」

『ですがＡＭＦだと魔導関連機器にも影響が出ますが？』

「ＦＦはスルーなのか……ん？」

その時訓練室のエアロックの解放音が聞えて来た。誰かが訓練室にまで降りてきたらしい。まったく表に現在修理中の看板が置いてあったのが見え――あれ？

「アリス……嬢？ってこの場合どう呼べばいいんだか」

「こんばんは兄様。あとこれまで通りアリスで構わないわ」

訓練室に来たのはアリス嬢だった。はてこの時間は風呂に入っていたのでは無かったか？髪がまだ濡れているあたり入ったのだろうが女性にしては出るのが早い気がするが……ああ、でももしかして。

「さっぱりしたか？」

言外に風呂はどうだったと尋ねると、良い湯だったけどと言い淀んだあたり、どうやら彼女はすでにはやてによって八神家のおっぱい魔人からの洗礼を受けたらしい。まぁあれは最初は困惑することだろうよ。一応性別男の俺でもドン引きだもん。

もっとも実質揉むだけで終わるのでやられた側に物足りなさがあるらしいが――

「兄様（あにさま）？なんだかとっても殴りたくなったんだけど？」

「おっと、すまん……ん？あれ、その口調は？」

「ああ、いつものは外向け。こっちが素なの……他に誰もいないしね」

フムン。普段の凛々しい感じはなりを潜め年相応の少女のような雰囲気が感じられる。口調一つでこれだけ印象が変わるとまるで多重人格だ。しかしあれ演技だったのか……まぁ隙を見せない的な意味ではアリなのかもな。

随分と雰囲気が変わるものだと一瞬思ったが、考えてみればウチの母上もそうだったことを考えると、その遺伝子を受け継いでいる彼女がそうなのも頷ける。

もっとも母上からの遺伝子を受け継いでいる点では、俺もそれが出来る素質は十分にあるのだろうが、素というか根幹がすでに無表情だから一々つくる必要はない。

それにしても何故修理中の部屋に来たんだ？」

「兄様と、もうちょっと語らいたかったからよ」

「口に出していたか？」

「何故来たのってあたりなら」

際ですか。語らいたかった、ね。

「こっちは修理が一段落付くまで手があかないぞ」

「いいわ。どうせ時間はあるし待ってる」

そう言うと適当な大きさの修理用にストックしておいたブロックにアリス嬢は腰かけた。待つんじゃなくて手伝ってほしいとも考えたが、考えてみれば錬金魔法使えないのだし、別に修理終わってからでいいよな。

とりあえず訓練室の修理の為に俺はまた色々な魔法陣を展開する。
錬金並列仕様で複数の素材をギャラリーが一人いる中で黙々とそれを錬金して言った。錬金魔法を見てアリス嬢は何故かちらちらと此方に視線を送ってくる。

どうやら錬金魔法が気になるようだ。まぁこう言った純然たるクリエイティブな魔法というのはミッドでもベルカでも、はたまたＵＳＮでもあまり見ないものであるからして珍しいのだろう。

そこからもしばらく無言タイムが続く、俺は内心はともかく外ではあまり自分から話題を提供することは少ないと思っている。現に今俺はアリス嬢といるが先程の会話以降終始無言である。

錬金魔法の操作はとても繊細だ。なにせ魔法による原子配列変換の真っ最中なのである。常温の中で物質を自在に変えられる核融合炉を展開している様なもので、下手すると何が起こるか判ったモノではない。だからあまり思考をさきたく無かったのだ。

しかし俺にとっては別段気にするようなモノではない無言空間は彼女にはきつかったらしく、この空気に耐えきれなくなったのか、アリス嬢は意を決した感じで俺に対し「修理しているの？」と尋ねてきた。

「結構、壊れたから」

「ふ～ん、そう」

「「……」」

――そして天使が通り過ぎた。ヤベェ気不味い、会話が続かねえ……。

いやまぁ俺だって疑問とかがあるから、色々彼女とお話したいっていうのはあるんですがね。なにぶん彼女にやっちまったことがやっちまったことだしな。勿論判断は間違って無かったし、後悔もしていないと自負している。

だども、知らなかったとはいえ妹撃っちまったことに変わりはない訳で……あ、でもアリス嬢は俺よりも外見年齢が高いから妹としても見れないかもしれない。姉？んな訳ねぇ。何と言えばいいのか本当に判らない。

それよりもだ。魔法で撃墜した人が隣にいる状況ってのは、自分で殺そうとしてライフル撃った相手が実は親戚で、その親戚がいま隣に来ていますくらいに困惑する状況な訳で、普通はなんらかの反応を見せてもいい気もするんだぜ。

「なぁアリス」

「なあに？兄様」

「お前さん、こわくないの？」

「……」

だから聞いてみたくなった。だってさ、俺にとっては唐突なこと過ぎていまだに整理できていないんだ。そりゃ確かに両親との別れ際にもう一人子供作ればとか言いましたけどね？でも本当に妹がいたとか判らんでしょう？

侵入者相手とはいえ俺は相当酷いことをしたという自覚はある。親類に火器を向けるなんて正気の沙汰じゃないことくらい判っている。あの時はアレが最善だったことも判っている。だから判らない。何故アリス嬢は平然としてられるんだろうと。

「普通じゃないの？だって私侵入者だったんだし」

「へ？いや、まぁそうだが……」

あまりにも平然とした、むしろそれが当然のことと言わんばかりの返事に困惑した俺は彼女の方を振り向いた。見れば彼女は頬を掻きながら苦笑していた。

「私だって研究所生まれだし、母様から色々と教わっているから」

「じゃあ――侵入者は？」

「つぶす」

「――不埒者は？」
「お灸をすえる」
「――障害は？」
「実力を持って排除する」
「――これらを教えたのは？」
「母様」
「「……同士よ！」」

思わずガシッと熱い握手をアリス嬢と交わしていた。そうかぁ、そうだよなぁ。母上から教わってたら動じないよなぁ。俺も死にかけたこと何度もあるしね。お陰で第六感が凄いことになったから気持ちは良く解るぜ。トラウマも目じゃ無いもんなぁ……あれは。

そしてそれをきっかけに色々と会話の糸口が出来たので、色々と他愛のないことを話した。だがやはり彼女は俺と同じ世界出身なのだなと今更ながら実感させられた。薄いのだ。自分を含め命に対する価値観というものが。

命は大事なもので守らなければならないものであることも知って

いるし、尊いものであることも知っているが、それは薄い氷の上にある物であることも理解している。たった一発の魔力弾で人は紙切れを破くようにいとも簡単に死ぬ。

軍では命令を重要視する傾向から命に対する拘りはかなり薄くなるって訳で、いや死にたくはないのは同じなんだが、なんというかこう――無意識ってヤツか？とにかく何処かが壊れてしまっているって事なんだろうな。俺達は。

「しかしアリスも良い具合に壊れてる。俺といい勝負だ」

「そりゃね。母様に会う前は戦うための調整の日々。気が付かない内に姉妹も兄弟もこの手で始末したことあるんだから今更よ」

「そんなことが……すまん」

「別にいいわ。もう過去のことよ。あとあの時シグナムさんに見つかったのは私の不手際だし、これで兄様が責められることはないわ。私が逆の立場でも同じことをしたと思うしね」

「それはそれは、さぞかし痛いんだろうな」

「そうねぇ。でも私は多分あんなに沢山撃たないわ。私は狙撃手だから一撃で仕留める自信はあるもの。もっとも苦しめろって命令があれば別だけどね」

「狙った獲物は外さないということか。フムン」

狙撃いいよねー、相手部隊が未熟なら先頭の兵士の手足を撃ち抜けば後は芋蔓だもんという会話で盛り上がる俺らってどうなん？でもうんうんとうなずいちゃう。ＵＳＮ兵士だもん。

「まぁでも俺は三途の川の船頭さんには顔覚えられてるから戻って来れる」

「サンズ？なぁにそれ？」

「難儀なことながら悪運が強くて死ににくいってこと」

「確かに兄様悪運は強そうだものね。誘拐された時も怪我してないし」

「それが良いのか悪いのか。そのお陰で今もこうして生きている」

「良い事でしょう？私という存在に会えたんだしね――――もっとも兄が成長して無かったのは予想外だったけど……」

むむ、そりゃもうあたしゃ諸々の事情があって成長できませんよーだ。

「吹き飛ばされた時に時間軸が相当ずれたのかしら？でもそれだとやっぱりおかしいし、どうなってるのかしら？」

「俺は特殊な事情で成長が止まっている。永遠にこの姿のままだ」

「ずっと若い姿のままなんてうらやましいわね。お肌はずっとすべすべじゃない」

「……結婚も恋愛もできないんだぞ？種として終わっている」

「……ごめんなさい。さすがにそれは哀れだわ兄様」

なんかとても憐れんだ目で見られました。なんか悔しいけど判ってもらえてうれしいぜ。なんせ肉体が8歳児相当で固定だから性欲も何もあったもんじゃないんだよな。だからライクまでは何とかはぐくめても、そこから絶対にラブにまではならないなんて本当に悲しいぜ。

「ああそうそう、昼間の件はお互いに非はあったってことでいいな」

「んー、どちらかと言えば不法侵入した私のほうが――」

「ストップ。お互い気にしてないんだ。この件はもうこれでながそう」

「――了解よ。別に問題に発展させたい訳でもないもの」

お互い水に流す、というか元々彼女が潜入したということが問題な訳だから非はアリス嬢にある。管理局の法律はこの世界では意味を為さないのだから彼女を裁けるのはこの基地を設営した俺以外にはいない。

もういいじゃないかで済むんなら、それに越したことはないな。
しかし法律か……考えてみると八神家地下に勝手に基地を建造した俺は日本の法律に照らし合わせたら土地の不法占拠ってことになるのか？

……。

俺はなにも考えなかった。バレなきゃオールオッケーだじぇ。
この後は寝るまで暇だと言うので、とりあえず親睦を深めることにした。コーヒーのストックはまだあったかな？リニスに聞かないとな。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

アリスがフェンに連れて行かれたのと入れ違うかのように、訓練室に来訪する人物がいた。

「う～、アリスちゃんはどこかいな～」

つい数十分前まで桃色の世界を堪能しまくった淫獣……もとい八神家当主こと八神はやてである。今彼女はアリスに浴室でのことを謝罪する為に彼女を探していた。
幾ら知人の妹さんでも流石に裸のつきあい（嘘）を教え込んで色々したのはやり過ぎたと反省したのである。

おっぱい魔人としては素晴らしい時間であったが、これでは只の変態というか痴女という印象を持たれてしまうのは何となく嫌だった。
自分は痴女でも変態でもバイセクシャルでもない。只単に女性のある部分を愛でる趣味を持つごく普通の魔法を使う美少女なんや！と自己擁護。
被害にあった人々が聞けば、全員そろって何でやねんとこの関西少女に素晴らしい突っ込みをしてくれること請け合いであろう。

「ここもおらん――ってことは別のとこやな」

訓練室にもいないことを見届けたはやては陣頭指揮をとっていたスイセンにフェンの居場所を聞いて言われた場所へとむかう。

だがその先で遭遇したのは――――ちょっと彼女の想像も越えていた。

「ん？この部屋やろか？」

スイセンに教えられた部屋の前まできた時だった。はやては中から声が聞えることに気が付いた。多分フェンとアリスが会話しているのだろう。一瞬兄妹の会話を邪魔しちゃ悪いかなとも思ったが、何と無く悪戯心が働いた彼女は自分の耳を戸にくっつけ中の音を聞き取ろうとした。

（むふふ、何を話してるんなぁ？）

『――なるほど、確かに今の私には必要なことなのね』

『そう、アリス嬢がこれからも成長するには必要なこと。あとは判るな？』

（成長？なんの話やろか。ああん、もっと前に来とったら話の全貌が――）

『ふふ、父様以来ね。私に他の男性が触れるなんて』

（へ？）

『……そうかい。まぁ兎に角脱いで』

『了解兄様』

（なん……やと……？）

ちょっとあり得ない言葉を聞いたはやては思考が一瞬停止した。
その間にも服を脱ぐ着崩れの音が聞こえ、何やらごそごそという音が聞こえ始めた。

（えっ！？ちょっ兄妹な間柄ちゃうん！？それともこれフェン君たちの世界での常識なん！？）

少なからず管理局に務めたはやては数多ある管理世界にはそれぞれ独特の文化があることを知っている。例えばある管理世界では成人の儀において槍や弓などの原始的狩猟道具で狩りをすることが文化として存在していたし、別の世界では生れた時に既に結婚相手が決定されているなどの特殊な文化があることを知っていた。

フェンもアリスも地球とは違う別の次元世界出身者であることをはやては聞かされている。もしかしたらその世界では地球では罷り通らないことが文化として継承されているのかもしれない。具体的には近親相ｋ……ぐふんぐふん。とにかく凄まじい何かがありそうな気がしてならない。

『――ほう、前も見たが素晴らしい。まるでというか、まさに芸術品』

『ニャッ、あんまり優しく触らないでほしいわ兄様……』

『確かに。こう言ったのは手早く済ませるに、限るな』

『ン、あぁ……くぅ――そ、それ、きつい、兄様』

『おっとそりゃスマン――リニス、リン』

『はい、こうすれば楽になりますね』

『主殿の妹様ならリンにとっても大切なので精いっぱい頑張るです、ハイ』

（リニスもリンもおるんかい！そう言えば二人とも夕飯後姿見えへんかったやん！というかリンなにを頑張るやっ！？）

そりゃ、ナニを。という幻聴が聞こえた気がしてはやては頭をふる。

『んぁあっ、お願いっ。もっと、優しくしてください』

『これでも相当、優しいんだが』

『そりゃ神経を直接刺激したらそうなるわフェン君――じゃ私もこうして』

『ひゃっ！そ、それは――ダ、ダメっ』

『ふわぁ、スゴイです。なかはこんなふうになってるんですね。ハイ』

『こらリン。じろじろ見るものじゃないわ――けど、これは確か

に綺麗ね』

（綺麗ってなんなん？中で何が行われとるんや！？）

なにか自分では予想も出来ない（いや、まぁある程度は判るんですが）ことが内部で行われている。自分と彼らとを隔てるのは薄い扉一つだが、その扉がとても恨めしい。流石になかに入る勇気がないのだ。

（も、もしも、ら、乱交とか言うヤツやったらどうないしよ！？）

さりげなく元図書館少女はそんなことを思い悶絶する。知識として知っていたがまさか実際に行われているかもしれない現場に居合わせるとか、ぶっちゃけないわーと心の中で叫ぶはやて。

ちがう、私のポジションはこうモンモンとする側じゃなくてモンモンとさせる側なんや～！と涙が出そうなのだが、こんな時どうすればよいのか十代の少女に判る筈もない。ただただ中から聞こえてくる音に妄想をふくらませ顔を赤くするだけ。

扉に耳を付けてモンモンと言った感じで顔を赤らめて悶絶する少女。他人から見れば何とも滑稽な光景に見えたことだろう。そしてその所為で彼女は近づいてきた第3の人物に気が付かなかった。

「……我が主、一体そこでなにを？」

「はひっ！？――ってリインフォースかいな。驚かせんといて」

「はぁ、ですが通路で主が奇行を取られていたので何かあったのかと思いまして」

「ああ～、えっと……べつになんでもないんよ」

言えない、変な妄想入ってて悶絶してたとか只の痛い子ではないかとはやては思い、リインフォースの問いを流そうとする。リンフォースは主の様子がおかしいとは感じていたが、まぁ特に心配なことではないだろうと片付けた。

「では私はフェンにようがありますので」

「え！ちょっまっ」

はやてが止める間もなく、リンフォースは扉を開けて部屋の中に入ってしまう。思わず目元を手で覆ってしまったはやてだが好奇心に負けて部屋の中を見た。そこにあった光景は――

「い、いたい！いたい兄様っ！せめて麻酔して！」

なにやら台の上に横たわる少女と、何やら工具をもって少女の足を弄る小さな少年がいた。見れば少女アリスの足に大きな四角い穴が開けられ、中の機械的な部分が丸見えとなっている。

はやての失敗はフェン達がいたこの部屋が何の部屋だったかを見忘れたことだろう。その部屋は只の部屋などではなく、フェンが自分の趣味を展開させる研究ラボだったのだから。

「阿呆。全身麻酔にして意識うしなうと勝手にグラシリウスが自閉モードに入るって説明しただろうが。局部麻酔はしてあるから心配するな」

「それでも痛いモノは痛いです」

「まったく……ん？リインフォース、は良いとして。はやて、ナニ固まってるんだ？」

「……いやぁ、なんや私の理解を斜め上にぶっ飛ばす感じやったからつい」

フェンが何をしていたのか。何てことはない。只のアリスの持つ義足型デバイス・グラシリウスの調整を兼ねた整備である。グラシリウスは義足型デバイスというある意味奇妙な分類になるデバイスである。

フェンの父が製作に携わっただけあり色々と機能があるのだが、その内の一つが足をなくし再生治療が出来なかったアリスの成長に合わせてサイズが徐々に大きくなるというものであった。

だがその為の魔導ナノマシンの調子が異世界に渡ってから悪くなってしまい。2年近くちゃんとしたメンテが出来なかったこととグ

ラシリウスが試作機だったことも相俟って拙い機械技術しか持たない彼女では整備も満足に出来なかったのだ。

勿論フェンと同じ類の修理ナノマシンが搭載されているので実質メンテナンスフリーだったはずなのだが、それでも若干不具合が出ていたのである。今回フェンとの会話が盛り上がった時、ついついアリスがそのことをぼやいた。

それを聞いたフェンが父上のデバイスならなんとか出来るかもしれないという話となり、お互いのテンションが高かったこともあり、そのままメンテナンス開催となった。助手として忠実な使い魔のリニスと解析などが得意なリンがサポートに回ったことで色々と作業が出来たのだ。

そしてはやてが扉の向こうで聞いた声は、簡単に言うとグラシリウスとアリスとの神経接合部分を含め回りを精査したことでアリスが発した声だった。種明かしをすれば非常に単純かつ詰まらないものだったが、それを聞いたはやては――

「ま、紛らわしいことは今後禁止やぁー！！」

「「――え？？」」

――色々と誤解したことが恥ずかしかったらしく、そう大声で叫んでいたのだった。

「にゅうーよーく（入浴）へ行ってきます……寒いな」（後書き）

ううう、ボランティアで色々してたら熱中症になりかけました。

お陰で数日頭痛くて全然書けなかったです。

皆さん、夏の水分補給は怠るとマジで怖いですので気を付けましょう。

「時が見える！時計を見れば！――え、違うの？」（前書き）

遅くなって申し訳ありません。
病み上がりなので文章が少し変でもお許しください。
それではどうぞ

「時が見える！時計を見れば！――え、違うの？」

「時が見える！時計を見れば！――え、違うの？」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

フェンと再会したアリスはしばらく八神家に滞在することになった。休暇中だったこともあり、それなりに暇だった彼女は同じく最近部下が育ったお陰で暇になったフェンが、案内を申し出たことで二人はさらに対話の時間を設けることが出来た。

もっとも外に出た時に二人が並ぶと兄妹ではなく、髪の色や外見年齢の差で外国のお姉さんと知り合いの少年か姉弟という感じにしか見えなかったが、二人は別に気にしなかった。お互いさえ認識できていればそれで別に問題は無かったからである。

「俺……兄、だよな」

「そうね。あなたは確かに私の兄よ」

「じゃあ、なんで抱っこされてるの？馬鹿なの？」

「……（ちょうどいい大きさなのよね。収まりもいいし）」

「もしもーし、無言はやめてー」

ほかにもＰＪの調整をした際、グラシリウスの技術に感動したフェンが、勝手に手を加えて未完成だった部分を完成させたということが起きた。調整を頼んだ筈が気が付けば機能がアップしていた。超スピードなんてちゃちなもんじゃないとアリスが驚愕のあまりうろたえてしまったほどである。

「なに？このパワー……凄すぎるっ！？」

「くくく、それはこれまで未完成でＰＪの力を発揮できなかったからだ。まだまだ、伸びるぞ、これは」

「まだ上があるというの！？流石は父様の作品ね」

「……（改造して完成させたの俺なんだけどなぁ）」

彼女のデバイスは義肢を兼ねた大型強化装甲外骨格としての機構を持つ、ＵＳＮにおいても新しい形のデバイスの雛型と呼べるものであった。フェンのＢＡがマクロスのクァドランだとするなら、手足の動きに連動する大型マニピュレーターを持つ彼女のＰＪはアップルシードのランドメイトに近いと言えるだろう。

そしてアリスのＰＪ（パワードジャケット）の何処が未完成だったのかというと、装甲シールドと疑似物質の複合装甲、それと稼働させた際の魔法制御と機体制御のソフトが誤作動を起こしやすいという部分であった。装甲シールドまでは開発していたが、その後より軽く頑丈な複合型までは開発期間が足りなかったのであろう。

「それにしても、本当に未完成。可哀そう」

「父様は要望に合わせて改造する気だったらしいけど、その前に世界が壊れちゃったから……」

「デバイス、可哀そう」

「あ、そっちですか」

アリスの場合は義肢をデバイスにするというある意味で荒唐無稽で狂気を含んだ色モノデバイスであったことも開発を困難にしたと言える。義肢をデバイスにしてしまうという発想を実現したのは、古今東西を例にとっても知られている限りはグラシリウス以外に存在しない。何故なら高価なデバイスを義肢にしてしまうのは正直もったいないからである。

人道的に手足を失った人間が義肢を手に入れるのは問題無い。むしろ求めるべき権利であると言える。だがその義肢がデバイスとなればどうだ。魔導師の大半が軍隊にいたあの世界では、すぐにでも戦場に復帰できることを意味している。つまり生きてさえいれば兵隊として戦場に送ることが可能となってしまう技術でもあった。

だからこそ、フェンの父親であるサイモン・ラーダーはこれを個人的な物品として作り、試作機という形でアリスにプレゼントしたのであろう。研究所で造られ生き残った存在であるアリスは完成されたクローニングアーミーといっても過言ではなく、多かれ少なかれトラブルに巻き込まれることは明白だったからだ。

もっともアリスの義足型デバイスが完成して、あの世界が消え去ってから僅か数年後に、人と機械との融合技術の劇的な発展が起こっているので、遅かれ早かれグラシリウスやS型のような技術は世界に流れ出していた可能性は高いのだが。

「――――……よし回線は繋がった。どう？動きづらくない？」

「なんだか物々しい外見になって困惑中よ。これじゃあ鎧ね」

「……嫌なら元に戻すけど……」

色々と手を加えられたＰＪはより完成系らしい外見へと変化していった。これまで開きっぱなしだった胸部にも装甲を設置したことで、外骨格全体の強度が向上し生残性まで上昇している。パワーアシストも油圧とアポジモーター式からより軽くトルクがある人造筋肉式に換装したことでより人間らしい繊細さを獲得していた。

パワーだけなら重機並であり、繊細な動きはマニピュレーターで卵を割れるほどである。存在自体が管理局の言うところの質量兵器になりそうだが、グラシリウスはデバイスであり、その巨体は杖型デバイスで言うところのデバイスコアを覆うフレームの延長線でし

かない。名目上はグラシリウスもデバイスなのだから質量兵器には抵触しない……筈。

詭弁であるが事実でもあった。

「いやじゃないんだけど可愛くはないわ」

「――……そう言ったのはＢＪに求めて欲しい。ＰＪは切り札なんだろう？切り札を使う段階で可愛いとか言っていていいのかとも思うんだが……まぁ女心は判らん」

「あら、なんなら女性の気持ちが判るまで色々としてあげましょうか？主にリニスと一緒に」

「勘弁してください。自分はきぐるみと違うので――それよりも、肩のそいつを見て、どう思う？」

「すごく、逞しいです……なに言わせるのよ」

また武装を紛失し非武装だったグラシリウスにフェンは失った兵装デバイスの代わりを装備させた。イコライザーと同じく作ったたは良いが、生身では扱えない試作兵装デバイスのフォールディングキャノン（ＦＣＮ）を兵装担架に搭載させている。これはレールブラスターと同じく電荷を付与した魔力弾を電磁加速器で加速させることが出来る大型狙撃魔力砲であった。

元々狙撃手であるアリスにとって、これ程相性のいい装備はない。他にも懐に入り込まれた時用に、胸部装甲にジリーノと同じ魔力散

弾砲が隠されていたり、脚部に秘密のミサイルランチャーが勝手に内蔵されていたりとフェンの趣味全開であった。後に過剰威力な武装に対しフェンは「興味だけが先行して暴走した。反省はしている」とコメントしたとの事。

流石にミサイルランチャーは質量兵器扱いなので、管理局から職を得ている彼女にとってはちょっと困った武装ではあったが、それ以外についてはソフト・ハード両面において強化がなされたのでアリスは満足していた。そしてそれ以上に、自分の特殊デバイスをこれでもかと改造した兄を見て「父様の血だわぁ」と思ったのだった。

「一度熱中すると突き進むのは誰の遺伝なのかしらね」

「む、しかしそれは未完成のままではアリスも大変だろうと思って――」

「はいはい、ありがとう兄様。お礼のハグしてあげる」

「むー」

こうして長い様で短い休暇は終わり、アリスは兄や八神家の面々に別れを告げて、フェンの元を後にすることにした。自分の兄とのパイプを確保出来たという結果に満足した彼女は、この数年間続けてきた己の日常へと戻ったのである。フェンもどうせなら一緒に住むかとも聞いたが、彼女にも彼女なりにこれまで築いてきた絆がある。

自分を助けてくれた人たちや仕事の中で得た仲間との信頼関係を

断ち切ってまで、兄のところに来ようとは思わないとアリスは言った。というか兄様は居候の身であるのだから、そういうことはホイホイ言ってはダメではないかとダメだしをしたほどである。

そういえば俺居候だったと肩を落として落ち込むフェンに、はやてが何時までも居候でもええんよとにっこりと笑って肩に手を置いて止めを刺した。白い灰となって空気と混ざりそうなフェンを鼓舞するリニスとリンの姿を見て、兄様は良い方々に恵まれたと安心したアリスであった。

＊＊＊

そして時間は進み、フェンが妹と別れ元の生活に戻ってからさらに1年が経過した。元の生活に戻ったアリスとフェンは、時折お互いに通信を入れ合う程度でそれぞれ特に干渉はしなかった。それはお互いに既に自立していると考えていたからであり、それぞれの生きる環境が異なる故にお互いに距離を置こうとしたのである。

ただし、それで疎遠になったりしたという訳ではなく、結局のところお互いの距離感を掴め兼ねていたアリスとフェンにとって、この1年の開いた期間は丁度良いモラトリアム期間になった。定期的に連絡を取り合いお互いに相手のことを観察し、より仲を深めることに一役買ったのであった。

そんなこんなで関係を続けた結果、お互いのパーソナリティに不必要に干渉するようなことを起こさず、それなりに仲のいい兄妹のような感じとなっていた。イメージするなら一人暮らしをしている兄と寮に入っていた妹だろうか？結構ドライな関係となったが、アリスもフェンもだがそれが良いという風に収まったのである。

そしてこの二人がそんな微妙な距離感を醸し出していたその頃、広大な世界を管理すると豪語している管理局の勢力拡大は衆目から目立つことなく地味に進んでいた。フェンが肩入れし、管理局に提供されたシランシリーズ、アバローナシリーズ、これらを投入したことで人手不足をある程度緩和出来たからである。

この人手不足を補える力、魔導支援が行える機械を双方が導入したことで、更なる勢力の拡大が地味に進められ、結構な数の次元世界が管理局の手に渡っていた。そのほとんどは無人世界であるが、入植等を進める段階で先に工作機械持ちのシランズが先行して入植地を確保したりして安全を確保していったのである。

この勢力拡大に伴うシランシリーズなどの魔導支援端末の需要は上昇傾向にあり、異世界の開拓を進める本局の次元航行隊からの発注が多く寄せられ、納品待ちという状況が発生する程の売れ行きを記録している。アタッチメントで何処でも活躍できる機械は人手不足の中ではかなり重用されていたということであろう。

また勢力を拡大した際にどうしても増えてしまう犯罪率も、地上を守護する地上警備隊のアバローナ導入により、減少ではないが拡大した勢力範囲から考えると拮抗状態ではあった。勢力を拡大すればするほど犯罪率の上昇は免れなかった管理局においてはある意味で奇跡的な事態である。

――こうして上がっていく需要により、ビジネスは軌道にのっていた。

「はっはっは、右肩上がりの業績だ。インゴットが重たいな」

『その代わりに他に潰されないように企業へ行う裏工作が滅茶苦茶大変みたいですよ』

「……グレーゾーンだもんなぁ。管理局との関係を考えると別な意味で綱渡りだ」

「ＰＭＣの定命ってヤツですねハイ」

さてドミトーリが僅か一年で管理局とこれ程太いパイプを持てたのは、社長フェンの妹であるアリス・ラーダーとの交流。その交流の延長線上でフェンがアリスに紹介されて、通常の企業であるなら決して関われない筈の管理局内でも最高と呼ばれる高官との伝手を得ることに成功したことにある。

アリスの手引きにより時空管理局におけるとても強力なバックヤードとのコネを手に入れられたドミトーリ社は、地味に大きくなっていく時空管理局とのビジネスでさらに業績を伸ばし、企業の力を大きくしていった。その結果、２０名弱であった弱小企業は社員を４０名確保し、以前の倍に至る程度になっていた。

「なんや、あんまり大きくなってないやん」

「ウチは少数精鋭なの。雑務はシランズがやってくれる」

「そーなんやー」

「そーなのだー」

儲けているという噂を聞いたはやてがドミトーリの実績を見た際に、思っていたよりもあまり規模が大きくなっていないことに疑問を持ったことをフェンに問うたところ、彼は以前と同じくこう返していたという。他にも理由としては管理局と関わりの少ないはみ出し者が少なかったという裏理由もあったりするが蛇足である。

このアリスの協力で得た高官との伝手とは、彼女を助け保護し後見人として嘱託であるが仕事の斡旋までしてくれた方々との伝手である。レオーネ・フィルス、ラルゴ・キール、ミゼット・クローベルと呼ばれる管理局内では相談役や栄誉元帥と言った名誉職に付く御仁たちとの、明言された訳ではない非公式的な繋がりであった。

この三名。現在こそ名誉職についているが管理局黎明期を支えた伝説の三提督と呼ばれる御仁たちであり、その影響力は法的な権限こそ持たないが、内輪贔屓な管理局においては絶大な影響力を誇る。これによりドミトーリ社は規模こそ小さいものの、現行の管理局では絶対に無視できない存在となりつつあった。

ちなみにこの時、偶然であるがヴォルケンリッターが管理局の仕事で御仁の一人であるミゼットの護衛任務を受けたことがあった。

アリスの知り合いであり、護衛任務の際ミゼットがヴィータたちを気にいったこともあり、八神家と居候のフェンと三提督はより親密な関係となっていたりする。

どの程親密かというと、休暇で一緒に旅行や釣りに出かける程度であろうか?もっともプライベートでの無礼講を理解しているフェンや元々面識があるアリス、そしてあまり物怖じしないヴィータ以外の人間にとって、伝説とまでよばれた三提督と同じ空間にいるというのは結構きつい物があったらしく最初は委縮していた。

特に偶々休暇で来ていたはやての後見人であるグレアム提督など、ギリー坊やと三人から呼ばれ、もっとはやてと交流くらい持てと叱られ小さくなった程である。仕事上の命令ではなく、あくまでプライベートにおけるお願いではあったが、グレアムを持ってしてもこの御仁たちからのお願いを無視することは出来ないようだった。

こうして強力な後ろ盾を手に入れたフェンであったが、ドミトーリ社はこの伝手に増長するのではなく、以前から管理局と交流があった企業との連携を積極的に行っていく。

特に社長フェンが以前から個人的に交流を持っていたカレドヴルフ・テクニクス、通称ＣＷ社との技術交流が盛んに行われ、両社の技術面がより洗練されていくことになる。

老舗とも呼べる魔導機器メーカー、カレドヴルフ・テクニクスの持つ生産力は新参企業であるドミトーリ社では逆立ちしても手に入らない物であった。何せ量産型シランについては、ブラックボック

ス化されたコアブロック部分以外すべてのパーツを委託加工して貰っていたほどである。

それとは逆に、ドミトーリは若き社長であるフェン・ラーダーを筆頭に、開発局が作りだした新技術、現行技術より頑強でありながら性能を損なわない製品、そしてＰＭＣとして培った戦闘技能を用いて、優先的に企業のセキュリティ・サービスを鍛えたりと、持ちつ持たれつの関係を続けていた。

「会社を長く続けるには、やっぱり横のつながりって大事」

『でも社長が見た目８歳児なので、公式の場では基本的に変身魔法で大人の姿なんですよねー。かわいそー（げらげら）』

「……この時ほど自分のデバイスを叩き壊したいと思ったことはなかった」

――色々あったけど私は元気です。

この一年を言い現わすならこういう感じである。フェンは見た目こそ子供だが、その中身は大人であり元日本人だ。元であろうと、その特質は魂にでも刻まれるらしく、真面目に仕事には取り組み、何かしていないと落ち着かないらしい。

そんな訳で、今日もワーカーホリックの如く働き続けていたフェンであった。

＊＊＊

～時空管理局本局・武装隊控室～

「うう～、えーと、あれぇ？」

第０１３４武装隊の控室。出動要請が出ていないその日はこれまで行って来た任務の報告書作成に当てられ部屋からは唸るような声が響いていた。要請次第では様々な世界に飛ぶ彼らに休日はあってないようなもの。オフシフト？なにそれ美味しいの？２４時間勤務体制部隊にそんな甘いモノはなかった。

「レイニア、どしたの？」

「コルトく～ん！この間の事件で破壊されたのって倉庫１棟だっけ？」

「ＨＡＨＡＨＡ，何を言ってるんだ。倉庫４棟全壊さ！ねぇリビエラさん！」

「……フィエロの大馬鹿の所為でな」

リビエラはそう言うとデスクから胃薬の錠剤が詰まったビンを取り出した。サカタ製薬と刻印されたそれを十錠ほど取り出すとそのまま口の中に放り込む。もう水で飲むのも煩わしいという感じでバリボリ音を立てて飲みほした。彼女の胃はストレスで穴が開く寸前であった。

「あの馬鹿が地上警備隊とやらかさなければ今頃休暇だったんだ。お陰でシランが出るわ、アバローナが出るわ、書類は増えるわ……うう、胃が……痛い」

本当に、本当に稀なことなのであるが、事件によっては本局と地上警備隊の管轄が重なってしまうことがある。本局が追いかけていた次元犯罪者がミッドチルダに降りてしまった等がそれだ。

そうなると犯罪者をほっぽいて仲の悪い両陣営の睨みあいが始まってしまう。やれ最初に追っていたのは本局だ、やれ地上に降りたからは地上の管轄だなどと意味のない論争を繰り返し、犯罪者に時間を与えてしまうという事態に陥ってしまう。

リビエラが胃を痛めてしまったのもこの縄張り争いに起因している。とある次元航行隊からの要請で次元犯罪者たちを追っていたが

ロスト。周辺世界を調べるが見つからず、執務官が血眼になって詳しく調べると、あろうことかミッドチルダに逃げていたことが判明。

当然管轄の違いから生じる語弊を招かない為に犯罪者追跡を行うことを地上に通告したものの、やはりというべきか地上は犯罪者の逮捕は此方の管轄に入った以上此方が引き継ぐと宣言した。これが普通の官僚組織であったなら只の引き継ぎで済んだのだが管理局の確執は相当に根深かった。

とにかくお互いにごねてごねて、引き継ぎが有耶無耶になりかけるほどに引き延ばす始末。上がそんな感じでは下にも影響が出るというもので、次元犯罪者の監視に地上と武装隊双方が協力では無く独自に動いて監視という、これまた効率が悪い事態に発展してしまった。

そんな中でリビエラは頑張った。確執よりも犯罪者の逮捕が優先だと仲間に訴え、なるべくイザコザが起きない様に見て回り、本当ならしなくてもいいような確認をしに地上の部隊の方に行ったりと、その姿まさに中間管理職。その苦労からか段々とやつれていく彼女を見た仲間は目から熱い水がこぼれたという。

奇妙な均衡、それが破られたのは本当に突然であった。捕まえてしまったのだ。騒動の原因であった犯罪者の片割れを管理局員が。それもリビエラの部隊に所属する一番の問題児が。出世確実と言われていた癖にいまだに武装隊に居座っていたあの男が。フィエロ・ソルスティス、犯罪者を捕縛してしまった男の名である。

どうやって捕まえてしまったのか？これがまた滑稽な話なのだ。

陸の捜査官が血眼で潜伏していると思われる場所を捜索中。武装隊は余計なことでイザコザを起さない様に捜査範囲から外れた場所に待機していた。その場所は――なんと只の公園。実働部隊である彼らが活躍するのは突入の時のみなのだ。

だが突入すべきタイミングがいつ起きるか判らない上、彼らがいたのは地上警備隊の縄張りの範疇であり、そんな場所で所属自体は本局の武装隊が待機場所を得られる筈もなく、分隊単位に別れてそれぞれ私服で待機していたのである。当然公園なので普通に人の出入りがある。

そんな中で１０人ほどの集団が公園にたむろしている……周りから見ればなんとも異様な光景に見えたことだろう。回りの視線が痛いことくらい彼らにだって承知の上である。だが底以外に居場所がなかったのもまた事実。正直突入させるなら早くして欲しいとばかりに本を読んだりゲームしてたりと思い思いに過ごしている始末。

唯一真面目なリビエラと変なところで生真面目なフィエロだけがただ静かに時を待っていたのである……その他は何処からか持ちこんだお弁当を食べていたりと割とフリーダムに過ごしていた。そして運命の時、偶々公園の公衆トイレに向かったフィエロが……片手に犯人を捕まえて出て来てしまったのである。

止まる時、流れる沈黙。

なぜに潜伏している筈の犯罪者がこんな場所にいるのだろうか。そして必死になって隠れていた癖に何故わざわざそれなりに離れた

公衆とトイレで捕まってしまうのだという考えが全員に浮かんだのも無理はなかった。犯罪者もなんでこんなとこに管理局員がいるんだよと訴えたげな表情であった。

さすがのフィエロもこれに関しては気まずそうに「これで、退屈な待機任務からは解放されるな」と苦笑いを浮かべていた。そしてその後が大変であった。折角人員を動員していた陸のメンツは丸つぶれとなり、そこからはぶられていた本局の人間が手柄をあげてしまう。

当然陸からは手柄を横取りした泥棒猫という目で見られるし、これまでの苦労はなんだったんだという感じで拍子抜けしてしまった。これで話が終わったのなら、まだ陸との関係が少し険悪になった程度で、リビエラの胃は大丈夫であったことだろう。だが現実は実に厳しい。胃に穴が開く一歩手前になるほどに。

犯罪者にはまだ仲間がいた。それも潜伏先に複数で立てこもっているらしい。その情報は捕まった犯罪者から得た情報であり、すぐさまその場所に急行するリビエラ達。だがその場所にも陸がいた。それもたまたま別件で犯罪者を追っていたアバローナを保有する集団が。

どうやら逃げた犯罪者の潜伏先は、アジトのような場所であり、これまたミッドでも普通に犯罪を起していた為に制圧される運びとなり、地上部隊からアバローナが投入されていたらしい。三つ巴とはこの事か。ただでさえ面倒なことは避けたいと思っていたリビエラが胃薬を飲んだのはこのあたりである。

その時はまだ用法容量は守っていたのであるが……。

結局これまた上の連中が争いはじめ、下っ端である武装隊とアバローナ有する特務隊は、結局どっちがやるのか判らずにアジトに踏み込めずにいた。そしてこの場において両者が協力するという選択肢はほぼあり得ない。それだけこう言った縄張り争い的なモノはお互いに譲り合わないのである。

どっちも管理局員なんだから、垣根を捨てて協力しようよ。相互理解って大事だと思うてなことを武装隊と特務隊は待機している間お互いに話していた。武装隊の面々はエリートではあるが基本的に若手が多く陸と海の確執に興味はない。特務隊に至っては構成人員は年の行ったロートルであり、協力の大切さを知っている人達であった。

そう、ロートル。アバローナの運用部隊には試験的にロートルと呼ばれた世代だけで構成された小隊が存在した。これまで年齢による魔力衰退で窓際に追いやられた老熟者たちが再び戦えるようになったのもアバローナという存在のお陰であったと言える。魔力さえ気にしなければ後は経験を積んだ熟練者たちである。負ける要素が無い。

そんな彼らと突入せよと上から指示されるまで待たされたリビエラ達。そして悲劇はここから始まった。突入せよと合図は来た。但し両方にである。当然両者同時に動いてアジトに突入し、そのまま犯罪者たちとの激しい銃撃戦に突入する。

犯罪者は銃火器を使うわ、アバローナはそれを見てもひるまずに

突撃するわ、それを見たフィエロが面白いとばかりに突撃して、それをフォローする為にリビエラも魔法を連射していくやら乱戦となった。

そしてアジトはこれまたテンプレのように倉庫街にあり、最終的にこの三組が大暴れをし過ぎた所為で、正確には魔法を連発した管理局員達の手によって完膚なきまでに破壊され、同時にその後の事務処理でリビエラの胃袋も破壊されたのである。

「うう、胃が、胃が……薬を――」

「せ、先輩そんなに薬を一気飲みしたらダメですよ！」

「うわ、すっげ。ビンから直飲みしてるよ」

そして今に至る。

この事件でアバローナは大変良く動くことが証明され、エリートである武装隊に引けを取らないという感じで処理されてしまった。折角犯罪者を一人捕まえた手柄は陸に後れを取った的なそれによって相殺。泣きそうなのは誰ばかりという彼らに追い打ちとして始末書の山。

「――……戻ったぞ。胃は大丈夫か？」

「うぅぐ…フィエロか。また呼び出しを受けたのか？」

「ああ、この私に任官試験を受けろと何時ものな」

「で？」

「興が乗らん」

「……自由で羨ましい。私だって上官にハッキリとそう言いたいよ、まったく」

「今のは聞かなかったことにしておこう。リビエラ、まだ仕事はあるか？」

「ああ、テイルドーンになるほどにはな」

そう言うと彼女は紙媒体でドスンと音が出る束と電子媒体をフィエロに手渡した。彼はだまってそれを受け取ると、自分のデスクで黙々と処理していく――――

「くっ、私を舐めるかっ」

「これで、引導を渡す！……これは」

「これほどとはっ…く」

「（データが）万全ではないか……やる価値も無し！だがあえてやらせてもらう！」

――――筈もなく、変なことを叫びながら仕事をしている為。

「……フィエロ」

「なんだ」

「うるさい」

「すまん」

怒られるフィエロであった。今日も武装隊控室は平和で混沌だった。

「やったねフェン！仲間（戦争馬鹿）が増えるよ！」

「やったねフェン！仲間（戦争馬鹿）が増えるよ！」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

ある日リンフォースから俺とリンのデータと地下基地のラボを使わせてくれとお願いされた。最初は何のことか判らなかったのだが、彼女のことだし問題は無かろうと許諾したところ、数日後に懐かしき成長してしまう前のリンの姿が――いや、ツヴァイさんでした。

驚いたことに、リインフォースアインスが自分や俺とリンの生体データを元に、夜天の書に残されている古代ベルカの技術データがどれだけ再現できるかどうかのテストを兼ねて作り上げたらしい。テストは見事成功し、いま地下基地のラボにある試験管には９歳児くらいの少女が浮かんでいる。

いや、流石リインフォースさんッス。人型で俺らと同じってことは人格搭載型ユニゾンデバイスですよね。古代ベルカの技術力は世界一……ってなことを言ってみたら、何故か冷や汗を流し始めた。

おかしいと思い問い詰めたところ、ユニゾンデバイスとしての機能を付けて無かったとのこと。

あわてて再調整が加えられてツヴァイにユニゾンデバイスとしての機能が付与され現在に至る。いやはや建造途中でよかったな。これで意識覚醒して稼働状態に入ったらもう手出し出来なかったところだぜ。そしてそれを僅か数時間で改編出来るアインスさん、魔法に関してはやっぱりパネェですね。

でも本当は妹でも欲しかったんじゃないのと聞いたら、なんか闇の書の時のデータ破損の具合を見る為やら、主はやてを支える存在をもっと作りたかったのだと、本人は真面目な顔をしているつもりで語っていた。だけど視線を泳いでたんで本音がすぐに判っちゃうあたり可愛らしいどすなぁ。

『次は次回出荷分の予備の量産型パーツ発注の件なんですが』

「おいおい、前回から僅か1ヶ月も経って無いじゃないか」

――――さて、現実逃避はそろそろやめにしようか？

『とこぞの陸と海の馬鹿が色々無茶をやらかしたと報告書にありますよ？』

「……じゃあこっちはアバローナの補修パーツの発注書か……」

『どうせなら丸ごと一体買ってくれれば良いのに、流石陸はせこいですねぇ』

「ヴィズ、せめて赤貧と言ってあげなさい」

いま俺はＤＤＳ－１の仕事部屋で事務処理の仕事に追われている。どれもこれも自分自身で決算しなきゃならない物が殆どで、稀に上記みたいな変な物も混ざるがおおむね大切な物ばかりが上ってくる。

部下で事務処理が出来る人間が増えたお陰で負担は減ったが、それでも多いことに変わりはない。リニスがさりげなく入れてくれるお茶が何よりも嬉しかったりするが、それを気にかけるよりも仕事を早く終わらせてリニスのモフモフで戯れたい。

しかしそうは問屋が卸さんとばかりに重要事項が多い。特に生産で必要な希土類、希少金属、希木類の値段が少し高いことなどだ。廃棄世界に捨てられた物を利用すればタダに出来るが、すべてをすべてそれで賄う訳にもいかない。

少しは普通の素材を使っているってことをアピールしないと、材料どこで手に入れたとか聞かれた際に廃品の再利用ですとか言える訳がない。

ちなみに希木類とは、前に次元震起した罰で奉仕活動しに行った無人世界とかに生えていたギョクカシとかのことである。ほかにもザックームやらイルミンスールとかみたいな高価な木材もあるが、

生憎そちらは使っていない。だって高いんだもん。

「主殿ー、今度ヘイゼルでやる訓練キャンプの参加者リストできたですよ。ハイ」

原材料をどれだけ仕入れるかに頭を悩ませていると、リンが新たに作成した電子書類を持ってきた。今度行う長期の訓練キャンプ参加者のリストである。本当は事務が処理するもんなんだろうが、今回のこれは俺がやるヤツだからなぁ。教官役が出来る人間って少ないから例え社長でもやっちゃう。それがドミトーリです。

「ふむふむ5人、いや6人ほど集まったか」

「意外と人気がありますから、ね？ソフィアせんせー！」

「……最初は冗談のつもりだったんだがなあ」

この訓練キャンプ。俺がやるのであって俺がやる訳ではない。意味不明と思われるかもしれないが事実である。何故ならこのキャンプで教官役をするのはソフィア教官に変身魔法で変身した俺であるからだ。

ハルケギニアでギーシュ達水精霊騎士隊候補生を訓練した時と同じく、こっちでも何度か俺の記憶に残っている教官の姿を肖り訓練を行っていた。何故ならどう頑張っても子供の見た目では最初舐められることが多かったからだ。

最初は厳つい教官姿を途中で解除して、ネタバラシした時の訓練生たちの顔ったら、あれほど滑稽なモンはなかったなぁ。まぁ兎に角リンのサポートで変身して仕事してたら何故か指名される機会が増えてしまった。

それもドミトーリ唯一の女性（？）教官であるソフィア教官のがだ。これで大体御察しが付くだろうが、この訓練キャンプは一度訓練を終えた人間が再度鍛え直すのが目的であり、その上で俺がトレースしたソフィア教官をご指名ときたのである。

ちなみにこの変身魔法は俺の記憶からある程度人格までトレースできる。勿論変身元の教官の人生すべてを知っている筈ないので、どうしてもそのトレースはある程度の憶測が挟まってしまう訳で……まぁお察しの通り。

変身した際の人格は俺の憶測が混じった人格で、そして当時の教官は俺にしてみれば悪魔のように意地悪で小悪魔のように悪戯が好きな人だった。俺の給料カードで勝手にケーキ食べ放題行ってた人だしね。

でまぁ、そんな人のイメージがトレスされた変身魔法で出たソフィア教官は……なんていうかさですとだ。サディズムじゃない。さですと、ここ重要。とにかく何処かいたずらっ子的な感じで教官をしてしまうのだ。

でもそんな人が何でそんなに人気なのか今一よくわからない。そ

りゃ口答えしたヤツにワザとパーソナルスペース越えてジーと見つめてみたりとか、笑いながらナイフ突きつけて叩いたりとか色々したけどさ。何ででしょ？

『……戦闘職ってMな人多いですよね（ぼそ）』

「なんか言ったか？」

『いいえー、べつにー』

「――？？」

「主殿、それよりも管理局に無人世界の使用許可申請を出さないといけませんです」

「……一々使用料払わなきゃいけないのがネックだな」

民間軍事複合企業ドミトーリは、営利企業です。決して官ではなく民。だから一々金が掛る。軍隊なら税金だったからある程度は気にしなくて済んだのになぁ……とほほ。それにしてもこの調査書によると今回の参加者は重たい背景を積んでいるようで――ん？

「リン、ちょっと」

「はい、なんですか？」

「ここに見学者って字があるんだけど、なんで？」

「えーと、そのう。はやて様から頼まれまして…」

「はやてに頼まれたならしょうがない。しかし何故に彼女が？」

書類の欄外に近いところに何故かあった見学者の文字。そこに記載された名前は、俺も良く知っている白い魔王さん、高町なのはの文字、Ｗｈｙ？なんで？すでにＳランクに達している彼女が今更研修が必要とは思えんのだが……いや待てよ？

「これは飽く迄見学…でいいんだな？」

「そう聞いています、ハイ」

見学でいい、つまり必要なのは技能の習得では無くもっと別の物。それとなのはは聞いた話じゃ戦技教導官からのお誘いがあるらしい。

そして……、訓練キャンプで……見られるもの！それは……！『鬼教官』だっ！

背景にドドドが浮かんだ気がするが気にしない。

とりあえず何しに来るのかは判ったからそれでいっか。

「そっか……なら問題無いか」

「――？なにが問題ないんです？」

ん？リン気になるの？

「そりゃ……はやて様にお願いされましたけど何の為だか聞いてませんし」

「ん～、なのはが来るのは、とある技能を欲しているからだ。そしてそれは他人が教えるモノではなく、自分で覚えるしかないって事。それが出来るので一番身近だったのがウチ。これで判るか？」

「ああ、そういうことですか」

「真面目なヤツだからな。自分自身の鍛錬を怠らない。いい事だ」

『ちょっとちょっと～二人だけで頷かないでくださいよー。私判んないです』

おろ？ヴィズでも判らないことがあったか。ん～、まぁ要するに彼女に戦技教導官からのオファーが来ているのは知ってるよな？でも彼女は実戦第一で――もとい実践第一でやってきたから教官職のやり方は知らない。だから色んなところを有給休暇を消費しがてら見て回ってるんだそうな。

『へぇー。でもなんでなのはさんが、色んなところを見て回ってる

ことをマスター知ってるんですか？』

「ん？各所にいるシランからの情報」

シランシリーズにも通信装置は存在している。一体の装置ではそれ程出力がないのであるが、周囲にいる機体を中継させることができるため、必要とあらば様々な情報が手に入る。今回もその内の一つだ。たまたまであるが教導隊所属のシランがそれらを送ってきたから知っていたのである。

もっともまさか彼女自身が自ら教導隊や教育隊の見学、果ては管理局のみならずウチにまで見学を要請してくるとはな。

さて、その後管理局への提出用書類を製作していたのだが――

「――ん？ブリッジからか？……俺だ。何かあったか？……うん……うん……判った。いまからブリッジに向かう」

「主殿？」

「なにかあったらしい。ちょっとブリッジまで行って来る。後たのむ」

「はい、わかりまし……あー！後頼むって残った書類全部やるのですか？！」

問題発生。次元空間を航行中のＤＤＳ－１の針路上に未確認（アンノウン）を検知したらしいとの報告が入った。急ぎブリッジに向かうと既にスタッフはそろっていた。

「イーサン」

「おー、社長。いやはや困ったことになりました」

俺はブリッジの艦長席に座る男に話しかける。彼は雇い入れた社員の中で以前次元航行船の船長をしていた男で名をイーサン・アレイという。俺よりも遥かに次元航行船の扱いに長けていたので、今では彼がＤＤＳ－１の運航を指揮しているのだ。

つまり実質上このフネの責任者。もっとも立場的にも彼との関係的にも俺の方が上だけどね。イーサンはこのフネに乗る前のフネをある事故で壊してしまい、その借金で路頭に迷って首吊る寸前だったのを俺が雇ったのだ。

勿論借金は一括で俺が肩代わり。代わりに肩代わり分は働いて貰う契約だからある意味で借金がスライドしただけだったりするが、まぁそれは今はどうでもいい。

「何があった？公海上で問題が起きるとは考えにくいが？」

とりあえず俺が呼ばれた原因を聞くために彼に質問をする。
赤銅色の髪を掻きながらイーサンは少し困った顔をしつつ、俺の問いに応えた。

「針路上にアンノウンの反応があるんですわ」

「アンノウン？次元礫じゃないのか？」

次元空間は決して何もない空間という訳でも無い。何らかの理由で紛れこんだデブリのようなものも漂っていたりする。このデブリに人間が混ざったりすると次元漂流者ということになるんだが、閑話休題。

「いえね、最初はそう思ったんですがねぇ」

「違うと？……元船長としての勘か？」

「いえいえ、コイツを見てもらえば判りまさあ」

そう言って彼が空間モニターに映したのは、なんらかの分析結果。

「スペクトル分析？それに、成分表――金属反応が高いだと？」

「それと、こっちが３０分前のアンノウンの位置。んでこっちが進路変更後の位置」

「これは――なるほどそういうことか」

イーサンに示されたデータで俺は納得した。そこに記されていたのは、針路を変更するごとにわざわざその進路を塞ぐ形で移動するアンノウンを記すグリッドだった。次元世界間の移動でこんなことをしてくるのは、恐らくガジェットドローンくらいだろう。

「――……海賊の可能性は？」

「ここは公海上で、管理局の勢力圏内。頭使える人間ならこんなとこで商売はしないでしょうよ。それにセンサーの感じじゃ大きさは精々が２ｍ前後。コルベットより小さいフネで来るとは考えづらいですがね」

やはり海賊の線はうすい、か……しかし何故だ？このフネには奴らが好みそうなロストロギアはない筈。確かに報酬代わりに使えるのか使えないのか判らないアーティファクトレベルのアイテムはあったが、今は淫獣のところに全部上げてしまったし…。

「……社長？」

「どれだけの数が来ている？」

「えーと、おおよそ６でしょうかね？距離的に１～２くらい変動するとは思うが」

数が6……だとすると偵察の線が高い、かな？

「――警戒を厳として外周警護に無人機をだしておこう」

「それとサーチャー飛ばしてデフコン3で待機ですな。了解」

ふぅ、精々今できるのはこれが限界か。後はイーサン艦長に任せて座って待つとするか。いざとなれば戦隊率いて外でなきゃならんだろうしな。そんな訳で警報が鳴らされ少し船内が慌しくなるのを席について静かに聞く。

ＤＤＳ－１は船足を落とし、アンノウンの動きに注視してなんとか進路から外そうと次元空間を立ち回った。飛ばしたサーチャーは確かに相手の姿を映していた。ガジェットドローン2型、エイみたいな形状の飛行タイプのガジェットだ。

次元空間も飛べたのかとか考えている内に、サーチャーが破壊されて映像が途切れてしまう。サーチャーは個人でも使えるくらい小さい物なのに、それを機銃の一斉射だけで破壊するとは凄まじいＦＣＳであるといえよう。

それはともかくとして、感知して速度を落としたところ、何故かあちらさんも速度を落としＤＤＳ－１とは逆の向きに移動を開始。まるで犬が相手の喉笛を噛みちぎろうとしているかのようにお互いぐるぐると大きな旋回軌道を取ることになった。

こちらを値踏みするかのように一定の軌道を描くガジェット。こちらもこちらで長距離スキャンや次元ソナー全開で向うの挙動一つに反応できるくらいに緊張が高まった。だがそれ以上は何も起きず唐突に向うが去ったことで緊張状態は終局を迎える。

ここまでで遭遇からおおよそ1時間が経過していた。連中の目的は判らなかったが、まるでこちらのことを観察しているようで気味が悪かった。そしてこの日以降、何度かＤＤＳ－１は同じ様にガジェットと遭遇することが多くなっていく。

――それが後にどういう事態を招くのか、この時はまだ判らなかった。

……

……

……

Ｓｉｄｅ三人称

■新暦６８年・第４７管理世界・世界名ヘイゼル■

さて今回彼がやる戦闘レクチャーとは何なのか。在り大抵に言う

のならば戦闘行動を前提とした様々な訓練と考えればいいだろう。技能というよりかはどちらかというと体力の補強を主目的としている面があるため、訓練内容はかなりキツイトレーニングとなっている。

特に今回の場合は訓練キャンプという長期間にわたる本格的な戦闘レクチャーが入ったコースである。複数人の依頼者と共に山、川、海、その他へと泊まり訓練を行う。ちなみに今回は山であり、山籠りに近い生活を訓練生は送ることになる。俗世と離れて強くなる機会と考えればかなり良い訓練となるであろう。

ちなみに長期と言っても日常的に訓練する軍隊とは違い、訓練生は訓練期間が限定されるが故に、その訓練内容は少なからず濃いものとなっている。依頼人の中には荒事に慣れている人間もいるとはいえ、彼らが目指す目標へと至る訓練は過酷を極めていったことは言うまでもない。

「さぁどうしました？これで限界なのですか？」

「「「「「サー！ノウ！マム！」」」」」

「なら走りなさい。力の限り。限界まで。ペースを上げろアップアップアップっ！」

「「「「「うぉぉぉぉぉぉっ！後ろで刃物ちらつかせないでぇぇぇっ！！」」」」」

そしてソフィア教官こと、彼女に変身しているフェンは訓練中は

ずっとその姿で訓練生たちをしごいていた。最初は子供の姿だったので依頼人から少なからず侮りの視線を受けたが、彼はリンのサポートにより変身魔法が使えるため、訓練中は変身することで強烈なプレッシャーを訓練生たちに与え続けた。

ただし時折訓練時も彼はあえて子供である自分の姿を曝して、訓練生達を油断させたこともある。子供の姿にて出される指示に完全に舐め切った所で、再びフェンの記憶にある鬼教官の姿を投影して行われる訓練。あまりのギャップにこれまでの生徒の一人は「詐欺だろこれ」と漏らしたらしい。

ある意味こんな彼の魔導戦闘レクチャーは非常にキワモノであったと言える。だが訓練の中身は非常に理に叶い、また合理的で有効なものが多い。あげるとするなら身体強化魔法使用可のマラソンなどがそうであろうか。非常に単純かつ誰にでもできる基礎訓練である。

だがそれは細かく考えてみると非常に奥が深い訓練方式であった。何故なら最初は己の体力だけで走るが疲れてくると全員身体強化魔法を使い始める。だが魔法を使用し始めてからが本番であり地獄なのである。訓練生たちが魔法を使用すると一つの指示が飛び、内容は魔力の限界まで走り続けることが知らされる。

当然その指示通りに走ろうとするが、限界に近いところまで走り込みで体力が削られていた訓練生たちがデバイス無しで身体強化を維持することは途轍もなく難しい。魔力は精神に呼応し、精神は体力と密接な繋がりがある。どんな魔導師であろうと体力なくては魔力があっても宝の持ち腐れなのである。

訓練生たちがギリギリまで魔力を使いきったところを見計らってゴールの指示が出されるのだが、その際訓練生たちは大抵の場合、このままではゴールまで持たないということを理解する。そうなると人間は自然にゴールに到達できるように体力及び魔力が持続できるように加減を調整していくのである。

この力の加減を肉体が直に覚えることで、大きな魔力を持たなくても長時間の行動を可能とする圧倒的な持久力が生まれるのだ。小手先の技であるが魔力配分をより細かく使えるようになるという点では、魔法を使う際にも応用が効く。この訓練方式は基本にして奥義と言える訓練であった。

――実際体験した訓練生は後にそのギャップからか、困惑する輩も多かった。

「さて、そろそろ――アルアッソー」

≪ズドドドドド――――ッ!!!!≫

「「「「「ひっひぃあぁぁぁぁっ!!」」」」」

「どうです魔力弾が至近距離を通るとこわいでしょう?でも魔力弾の音を聞いて必死になって逃げるような腰抜け野郎は故郷に帰って農作業でもしてください」

――背後から魔法を撃ち込まれる恐怖を叩きこまれ。

「……」

「どうしました？もう倒れるのですか？私の楽しみを増やさないでください。私の楽しみは貴方達が全員しっぽ巻いて泣きながら脱落して絶望する様を見ることなんですから。どうせ腰抜けなんですから何時か死にます。だから死ぬような目にあっても別にいいでしょう？」

「う、ううぅ……」

「おや？泣きますか？泣いてすべてが良くなるとでも？泣いたらヒーローでも駆け付けてくれて悪者を懲らしめてくれるんですか？生憎とクソの掃き溜めにたかるクソ蟲以下のアナタがいくら泣こうがクソみたいな世界にヒーローはいませんよ？それとも泣くことが貴方の家訓ですか？だとしたら何て良い家訓。泣けばすべてが罷り通る赤ん坊のような家訓ですねぇ」

「――クソッ」

「そんな親の仇を見る目で見たところでどうにもならないでしょう。貴方は弱い。とっても弱い。ゴミに沸く蛆よりも遥かに弱い。それとも睨むとビームでも出せると？なら出してみなさい。私を殺してみなさい。できない？睨む暇あったら身体動かしたらどうですか？」

（ううぅ、悔しいでも……ゾクゾクっ！）

――心を折るくらいにまで徹底的に罵詈雑言を言いまくり。

「この中に一つ爆弾があります。さぁ爆弾だと思う物を一つ選びなさい」

「「「「「……」」」」」

「全員退避しましたね？では爆発させてみましょう。イグニッション！」

「「「「「なっ！？木箱の方が爆発した？！」」」」」

「科学ってのは日進月歩。驚くべき速さで進歩しています。形や大きさの先入観を捨てないとかえって貴方達の死期を早めますね。今ではどんな物も爆弾となり得ます。とある暗殺では仔犬の中に爆弾が仕込まれていたくらいですよ？まったく仔犬が可哀そうですよ。考えた人間は是非とも腹の中に自分の爆弾を詰めてあげて起爆すいっちでもポチっとなしてあげなくては――」

「教官。話が逸れています」

――日々進化する質量兵器への対策を教え。

「セイッ！やぁっ！！」

「脇が甘い。大ぶりじゃなくてもっとコンパクトに杖を打ちこむんです」

「ダァァァッ！！！」

「ほらほらどうしました？敵がゴムのナイフでは本気になれないと？女相手では勃ってしまって集中力がそがれると？――ふざけるんじゃないッ！」

「ガッ！」

「それでも戦闘魔導師ですか？それでも戦う力を持つ人間ですか！お前のような腰抜けが魔導師を名乗るなんてちゃんちゃらおかしい！貴方の父親も魔導師だそうですが、上司に尻を振った腰抜けなんでしょうね？きっと」

「うぉぉ！！おやじの悪口を言うなァァァ！！」

≪ドゴンッ！≫

「……術式を使いますか。ＯＫ魔法を撃ちなさい。ガッツがあるところを見せてくださいッ！魔法で私を殺して見せなさい！」

「――っ！！」

「撃たないのですか？人を傷つける勇気もないと？――――そんな腰抜けが」

「ギャァァ！！」

「幾ら杖を向けたところで、私には脅威とならない。これで３回杖を落としましたね？つまり３回貴方は死んだ。ではペナルティで腕立て伏せ３００全員でどうぞ」

「「「「サ、サーイエスマムッ！」」」」

「良い返事です。でも有給休暇はまだ先ですよ？」

――――（死ににくいので）命を張って戦いを教えたり。

「教官！あなたはっ！“戦死”ですっ！！」

「ふむ、残り時間１０分……ギリギリですが貴方がたの勝利ですね。おめでとう」

――――最後の模擬戦でワザと花を持たせて自身を付けさせたりした。

ぶっちゃけ、普通なら誰しも逃げだすだろう訓練が多かった。だがフェンが変身していたのはお姉さま系の美麗な女性である。しかも中身はフェンという男であり、訓練において異性間の羞恥心は介在しえない。

つまりどういうことかというと――――

「サブミッションを決めるなら、相手がすりぬけないようちゃんと絞めないさい！ほらこうやってギューッと！」

（ぐぇぇぇ！首がァ嗚呼ッ！でも柔らかいー！ありがとうございまぁぁぁすっ！）

――こう言うことである。男とは、誰しも変態なのだ。

そして勘の鋭いフェンが時たまこう言った純粋な欲望を感じ取り、思わず身を固くしてキョロキョロしてしまい、それを見られてハッとして、うーなんでもないですー！と取り乱すことがあり……それが人によっては堪らなく愛らしく感じられるそうな。人間とは時として人知を越えた感性を発揮するというが、些か行き過ぎであろう。

――そして、そんなこんなで時間は流れ……。

「教官、お世話になりました」

フェンの目の前にスッと手を差し出す訓練生。この日は訓練キャンプ最終日。誰ひとり欠けることなく訓練生たちはこの地獄すらなまぬるく感じる訓練キャンプの全カリキュラムを乗り越えた。かけがえのない自信を与えられた彼らはどこか誇らしそうである。

「ああ」

彼もスッと手を差し伸べて――変身を解いている所為で背の違いから手を上げる形となっていたが――訓練生と握手を交わしていた。これまで2カ月近くもの間、フェンに苛め抜かれ目が据わっていた生徒たちも、この瞬間だけは何処か神妙な顔つきだ。

生徒と一口に言っても、フェン自身の肉体年齢から換算すれば20も離れた相手である。だが精神年齢はちかくとも、肉体年齢的にその溝はかなり大きなものであった。なにせ変身魔法でＵＳＮ軍訓練学校時代の教官の姿をとることもあったが、今の8歳児相当の姿でも訓練を行ったのである。

生徒側にとってしても戸惑いや唖然。もしくは茫然か摩訶不思議と思われても仕方がなかっただろう。なぜ彼は変身魔法をワザと解いてまで子供の姿を曝したのか？それは今の魔導師は低年齢化が進んでいるため、相手にしたときに出来るだけ躊躇させたくないという彼の指導方針に関係している。

――実際、最初のころは生徒たちにも戸惑いの方が大きかった。

だが例えそうであったとしても、戦いの場ではその一瞬の戸惑い一つで、簡単に命を落としてしまう。そういった事をさせない為に、フェンはあえて子供の姿をとって見せることで、どんな事態でもやるべきことを行える平常心を養わせた。

それに必死にレクチャーを受ける彼らに、手を抜くような真似が出来るはずない。だから彼は一切手を抜かずに、彼自身命を張って

カリキュラムを進めたのである。事実、この訓練における真摯な姿勢は、彼のレクチャーを受けた人間たちから高評価を得ていた。

彼のレクチャーは厳しいが、かなりの力になるとその筋では評判であり、その話を聞いてフェンにレクチャーを受ける人間も少しずつ増えつつあった。最近では管理局員ではない魔導師以外にも、主に輸送船や企業のボディーガードを生業としている魔導師では無い生身の人間に人気があった。

なぜなら、彼の教える技術には、魔導師はない人間が魔導師と渡り合う為に技術。対魔導師戦闘とも呼べる戦闘技術もカリキュラムの骨子として組み込まれていたからだ。管理局では基本的には質量兵器を唾棄すべきものとして扱い、現に所持使用を禁じている。

だが世界は広く、その広い世界において魔導師の数は決して多いとはいえない。当然比率としては魔導師よりも一般の人間の方が多くなる。そしてそういった魔法を使えない人間が魔法という反則的な力を行使する存在と戦う為には、高火力の質量兵器は欠かせない武器であった。

事実次元世界においても管理局の影響力が強い管理世界では、銃火器による犯罪率はそれ程高くはない。だが管理番号が中心から離れれば離れるほど、管理局の持つ影響力は下がってゆき、当然のことながら銃の普及率も上がるのである。警察機構がしっかり働く日本と今だ内戦が起こる中東やアフガン等の違いに似ているかもしれない。

フェンはミッド式に近い魔法体系こそあるが、基本的には管理局

に束縛されていない管理外世界の出身である。ＵＳＮとＯＣＵと呼ばれる超大国同士で行われた戦争は魔法技術すら取り込み肥大化し、休戦になっても絶えず紛争続きであるこの世界では質量兵器禁止等のまやかし、いやさ面倒臭いルールは存在しなかった。

かつて先史時代に行われたベルカとミッドチルダとの戦争の縮図のように、魔法と近代兵器が多用され、幾度となく戦いがあった世界。その世界で生き残るには、魔導師としての技術の他に軍人としての技術。つまりは魔法を持たぬ人間との戦闘を訓練のカリキュラムに組み込むのが必然だったのだ。

魔導師とて神では無い。ちゃんとした戦術を持つ人間がいれば勝てない相手では無い。単機で街一つを壊滅させられるとされた魔導師でも、たった一個小隊の生身の人間による作戦で墜とされ、殺すことも出来るのだ。無論フェンはそう言った魔導師では無い生身の人間との戦闘はあまり経験がない。

基本的に最前線での勤務であったし、最前線では両陣営とも最高の戦力。つまりは自国の戦略兵器である魔導師をぶつける為、生身の兵士は少なかったのだ。その為、技術は知っているし体得しているが実際に使用した事は少ない。

だが彼の世界が失われた今、３０年前に失われた技術。皮肉にも質量兵器による犯罪が増加傾向にある今の管理世界において、彼の教える技術こそ有効な対抗手段となりえる技術である事もまた事実であった。

そして今回、訓練キャンプという短期間の中でみっちり教え込まれた教え子たちは、埋没資源の多さから常に周辺の土地を狙われて

いるという村の出身である。故郷を守りたいが為に電子紹介所を通して自分に連絡を入れてきた人達であった。その利権の関係上、下手すれば管理局も動くかもしれない世界でもある。

つまり、フェンはある意味で管理局に敵対する組織の人間を間接的に幇助したことになりかねなかった。実際それを知った管理局に務める友人から指摘を受けている。だがそれがどうしたと彼は返していた。

彼が教える相手とは相手の背後関係ではなく、生きたい、守りたいと考えている人間に生き残るための術を教えることにある。教えられることはほとんど教え込んだ。後は彼ら次第であることも重々承知である。

――管理局に友人はいるが、それとコレとは別問題だと彼は考えていた。

「では、我々はこれで」

「教官……」

「うっ……」

厳しいレクチャーを耐え抜いた男たちはそれぞれに涙をためていた。彼らは感謝していた。目の前の存在は見た目こそ子供で小さい。しかしその中身は……訓練生である彼らに対し、真正面から命を張って指導を行ってくれた良き師であった。その辛く厳しい訓練は彼らにかけがいのない自信を与えてくれたのである。

彼らの目に涙が溜まっているのを、フェンは何時もの無表情で眺めている。

だが、このままで良いとフェンは思わなかったのか。

「――どうした！また腰ぬけに逆戻りかッ？」

そう、訓練の際に発し続けた力強い声量でそう言った。生徒たちは何度も聞いたその見た目からは想像も出来ない怖い声に身を竦めると、慌てて目元をぬぐいフェンに向けて敬礼し、無言でその場を立ち去っていく。

「いいか、絶対に生き残れよっ」

立ち去る生徒たちの背に、フェンの声が響く。生徒たちは振り返る事はなく、そのまま歩みを続けた。振り返ればまた腰ぬけと罵声が飛ぶだろう。それ自体は怖くないが、こちらがまるで成長していないかの様で真剣に訓練を行ってくれた彼に失礼だ。

「生きていれば望みは必ず叶う。絶対に死ぬな――最後まで生き残れっ」

黙って歩き続ける生徒たちに、生き残れと言い放った声には、彼の外見からは想像もできない程の力が籠っていた。それはフェンがこれまでに経験した中でどんな時も信じ続けたもの。フェンは勝つ事よりも、むしろ彼らに先ずは生き残るための術と力を与えようとしたのだ。

フェンの言いたいことを薄々ではあるが理解している生徒たちの視界が歪む、拭っても拭っても再び涙が溢れかけ、それぞれ押し殺したように天を仰いだ。だが誰ひとり歩みは止めず、そのままフェンの前から立ち去っていった。こうしてまた一つフェンの仕事は終わり、訓練キャンプとして使っていた山が静寂に包まれる。

だが生徒たちは知らない。

彼らが見えなくなるその時まで、フェンが見つめ続けていた事を……彼らを見送る彼の目元には、間違いなく涙が溜まっていたことも、約一名を除いて誰も知らない。

＊＊＊

「さて、ここまでで質問はあるかな？武装士官殿」

「フェン君。その言い方はなんか悪意を感じるんだけど？」

これまでずっと静観していたなのははそう言ってフェンの元に寄る。訓練中は全く口を出さなかったので、ほぼ空気であったが最初や途中、そして最後の時になのはは見学者として訓練を見に来ていた。

「……これが教官って事なんだね。最初から最後まで親身になって、全てを賭けても全力で訓練生にぶつかっていく……今回の見学をはやてちゃんに頼んで正解だったの」

「まぁ、恨まれてナンボが教える側の宿命だしな。実際俺も憎んだし……だけど厳しくした分強くなった筈だ。それで生き残れるようになったのなら、俺はそれで良い」

フェンはそう言って空を見上げている。なのは黙ってハンカチを彼に手渡した。

「これ、使ってもいいよ？」

「……すまん」

「ううん。いいの。本当に心から生徒さんたちを愛していたってこ

とが判ったから」

「……ありがとうさん」

教官役というのは、本当はとても辛い仕事だ。生徒に恨まれるのがというのではなく、送り出した生徒が生き残れるかどうかが結果が出るまで判らないということである。死なない様に教えられることを必死に教え込んでも、世界というのは残酷で絶対は存在しないからだ。

「あの人たち、大丈夫なのかな」

「さて、な。後は神のみぞ知るってとこ――――なのは」

「ん、なあに？」

「戦技教導官になるとしても……覚悟はしておけ、そして気負うな。教官役をやって数年で未熟だけど、俺から伝えられるのはソレだけだ」

「……うん、よくわかった。フェン君、今回は見学させてくれてありがとう」

なのはが何かを決意したことに気付いたフェンだったが、彼はあえて聞くことはしなかった。一人薬草煙管を取り出して帰路へと付く。そしてこれからちょうど1年後、戦技教導隊にエースが所属する事になる。この時の訓練キャンプ見学が彼女に影響を与えたのか

フェンは知らない。

だがこれだけは言える。教導官になったなのははは、笑顔で全力で、親身となって……教導相手を吹き飛ばしたということだ……なまじ相手のことを思ってのことなので、教導相手に南無三と手を合わせた彼女に知り合いが多数いたとかいないとか。

「やったねフェン！仲間（戦争馬鹿）が増えるよ！」（後書き）

夏風邪と夏バテのダブルパンチはきつかったです。
熱いのに寒くて眠たいのに眠れないとかどんな地獄？

「無事に航海が終わると思うたか！前編」（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

例の如くオリジナル展開です。原作との絡みはまた少し先です。

そういったのが嫌な方はブラウザバックお願いします。

それではどうぞ。

「無事に航海が終わると思うたか！前編」

「無事に航海が終わると思うたか！前編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

やぁ人間の皆さん。もはや外見以外人間じゃない気がしてならない転生者のフェンです。いやもはや外見も変わらなくなったから俺は妖怪と同じかもしれないな。

でも翠屋の桃子さんとかも年齢全然変わってないような気がするし、リンディさんも年取らないみたいだから多分大丈夫だと思う――殺気を感じるが無視するぜ。

そう言えば外見が変わらないと言えば、我が家に住みついた（取り憑いた？）エターナル乳児の赤さんと最近会っていない。何時もならなんらかの悪戯（ラップ現象、ポルターガイスト）をしかけてくるというのにどうしたんだろうか。

まぁ、あの見た目よりも遥かに強大な力を持つ亡霊のことだからあんまり心配はしていない。何時の間にか戻ってくるでしょうよ。きっと。

犬猫じゃないけど帰巣本能強そうだし、本人いわくあの地下基地

は居心地が良いらしいし……でも時々友達とか言って人でも動物でもないモノ連れて来ないでほしいな。

最初見た時、ジュエルシードを全部集めていたかどうか不安になっちまった。まぁ見た目だけが怖い程度で触ってみるとめっちゃモチモチしてて癖になったけどね。

それはさて置き、今日も俺はＤＤＳ－１に来ていた。ここ最近昼間は大抵このフネの中で過ごしている。何故なら皆管理局務めで非番でもないと家には誰もいないからだ。

ちなみにリインフォース姉妹は好き勝手に過ごしている。二人でピクニック行って来たとか聞いたときは軽く殺意が沸いたが、仲が良いことはいいことと割り切った。

はぁ、俺だって好き勝手遊びにいきてぇ……だけどまだ社長が好き勝手出来るほど会社が成長できてないんだよな。ううん、ミッドの電気街行きたいです。

デバイス関連のジャンクパーツ漁りたい。もしかしたら前の所有者のデータ残っていてい経験値を稼げるかもしれないというのに……ううん、今は仕事だ仕事。

はやく会社大きくしてもっと自由に出回るぞー！いっその事経営方針だけ伝えて社長譲るのもありか……考えておくことにしよう、ニョホホホ。

「おはようリニス」

「おはようございますフェン君」

さていつも通りＤＤＳ－１の社長室へとやってきた。

「今日の予定は？」

「正午までは執務を、午後からはスクライア一族の船団護衛依頼が入っています」

「そうか、では手早く片付けるとするか」

「種類・系統別に分けておきました」

「パーフェクトだ。リニス」

「感謝の極み」

どこぞの女史と執事とのやり取りっぽいことをやりつつも、デスクに腰かけてマルチタスクを複数展開。右手は思考制御キーボード、左手は事務魔法アタラクシアを使い分けて仕事をこなす。こうした方が早く終わるからだ。若干頭が疲れるがこれが一番早い。

カタカタとキーボードを叩く音がしばらく鳴り響き、通常なら読み取ることさえ困難な速さで項目をスクロールしながら処理してい

く。だてに戦闘系魔導師をやってはいない。視力と思考の速さについては定評があるのだ。これも思考分割術のちょっとした応用さ。

――カタカタ

≪そわそわ≫

――カタカタカタカタ

≪そわそわそわ≫

――カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタンッ！

≪っ！！≫

「おわった」

「お疲れ様でした。本日のタイムは2時間37分でした」

「自己記録2分更新。やったね――さてリニス……おいで」

「は、はい…」

仕事が早く終われば後は自由時間。

そして仕事が終わった後、やる事と言ったら一つだけだろう。

俺は忠実な使い魔のリニスを自らのすぐ近くに引き寄せ――――

「あ〝～～やっぱり毛皮さいこう～～」

「うに～～撫でられるのさいこう～～」

『――似た者主従め』

ヤマネコモードリニスを堪能する！これぞ至福の時！最近ずっと仕事で御無沙汰だったからもうたまりませんがな！仕事を早く終わらせたのはこの為、さぁ心行くまで堪能せねばなるまい！あ～やわらかいな～、あったかいな～、これをもっと良くするにはどうすればいいだろう……そうだ、あの手があった！

「……ねぇリニス」

「なあに？」

「ふと思いついたこと、試してもいい？」

「え？なにを――」

「答えは聞いていない」

「ちょっとぉぉぉ！？」

レイライン全段直結、供給量増加、もっとだ！もっともっていけぇぇぇ！！

「――ふ～、魔力供給量増加成功」

「え、あ……なんなの？」

魔力が晴れるとそこには、ライオンサイズのヤマネコとなったリニスがっ！

「いやはや、大きくなっちゃって。立派だリニスすごいぞリニス」

「え、えぇぇぇぇ！？」

『さすがマスター。突拍子のないことを突然やることに定評がありますね』

「いや、あのう。すごく視界が高いんだけど」

「ぐっ（サムズアップ）」

「グッドじゃないわよー！！」

驚きのあまり大声を出すリニス。常々、以前から使い魔の大きさって魔力供給量大きくしたら結構でかく出来るんじゃないかなぁと思っていた訳だが……なるほどやってみるもんだ。ヤマネコモードのまま大きくなったリニスはまるでライオン。そしてそのモフモフを越えたモコモコの毛皮を見た俺は、それに心奪われた。

「リニスー！」

「わわわっ！？」

ガスィ！グイ！ぐりぐりぐりぐり……。

『おおー情熱的ぃ』

「こらしんぼう堪らん。ふれたくなる柔らかさが包み込まれる暖かさ」

『マスターェ…言語が崩壊してますけど、どうせ聞こえてないですよねー』

ウチに集まるアニマルズのクマ吉とはまた違った感触。ごわごわな毛皮ではなく飽く迄ネコ特有の……何と表現すればいいか判らんがとりあえずネコサイコー！無意識だったがとにかくフカフカなこれを両手一杯抱きしめられただけでも幸せだ。

『ところでリニスさんさっきから静かですが……忠誠心を溢れさせて気絶しているっ』

この状態のリニスはまるでナル○アのア○ラン……だけどヤマネコだから縦髪がないのが勿体ない。だどもこれはこれでＧＪだから俺としては問題無し。

『まぁ何時ものことだし……ヤフオクでも見てよーっと』

＊＊＊

【社長。まもなく船団とのランデブーポイント――おっと、お邪魔だったか？】

リニスと戯れていたらブリッジから連絡が入った。

「いや問題無い艦長。そろそろ時間か…判った。すぐブリッジに向

かう」

そう言うと艦長のイーサンから微妙な顔された。なんぞ？まぁともかく時間を忘れて堪能していたが、楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまう。嗚呼、時を止められればこの至福は永遠なのにーと詩人ぶってみた。キモイな。

さて、因みに今回請け負った仕事は、ウチが良く引き受けている模擬戦やら訓練キャンプとか魔導機器販売などでは無い。ＰＭＣとしての本業と言えばいいか、ドミトーリ社の仕事はなにも訓練を施すだけが仕事ではないのだ。ときには護衛や要人警護の任務を請け負うことがある。

そして今回は護衛任務にあたる仕事で、とある世界に向かう次元航行船の船団を目的地の世界まで護衛するのだ。ちなみに報酬は管理世界共通通貨と貴金属類で賄われるとのこと。割と良い報酬だったので引き受けたが本社ごと護衛に参加する企業なんてウチくらいだろうなぁ。

とりあえずドミトーリ全体の責任者だし依頼を受けた身なんで、依頼主の船団長に顔を見せなきゃならない俺もブリッジに向かうことにする。ブリッジまではそれほど遠くはなく、社長室となっている部屋からでてすぐのエレベーターで向かうことが出来る。元々社長室は艦長室か士官室であり、迅速に艦橋に上がれる配慮からだろう。

んで気絶したまんまのリニスは仮眠用の毛布をかけておき、その

まま部屋を出てブリッジまでやってきた。艦長席の隣が俺の座る位置ってなもんで、トスンと自分の席に腰を下ろす……サイズ的に子供サイズだからチャイルドシートみたいだなこれ。んで座り心地を尻で確かめていると、レーダーを見ていたヤツが声を出し報告してきた。

「レーダーに感あり、数は3、大きさはおよそ２００mと推定。護衛対象の輸送船団と思われます」

「スクリーン投影」

イーサンの一言で空間ウィンドウが開き外部の映像が映る。同じ形状の次元航行船が一隻を先頭に三角形の陣をとって此方へと針路を向けているのが見えた。お互いに航海灯を付けて相手に目視できるようにイーサンが指示を下す。しかしホント艦長してるなぁ。モチはモチ屋だよなやっぱり。

「――船団確認。2時下方、距離２５００。オートクルーズ解除。ユーハブコントロール」

「アイハブコントロール。相対速度合わせ、軌道修正開始。逆噴射3秒…3、2、1…逆噴射停止。軌道X、Y、Z軸、修正誤差0，2で許容範囲内」

「反応室内圧力レベル3から2へ正常に移行。推進粒子供給弁閉鎖。魔導炉臨界室内レベル4から2へ移行確認。余剰魔力を魔力コンデンサーへ充填開始。ベント開けー」

「相手に合わせてゆっくり……相対速度０、停止確認。艦内異常無し」

「よーし、信号発信、通信回線オープン」

「通信回線開きます」

ブリッジに流れる何時ものやり取りを尻目に空間ウィンドウが開く。今回護衛する相手と通信が繋がった。通信に映ったのはゴツイ如何にも船長といった感じの壮年の男性……ではなく、壮年だが物腰柔らかな学者肌な人だった。まぁそれもそうだろう。なにせ護衛を頼んできたのは――

【こちらスクライア一族保有船団、船団長のアスパル・スクライアです】

――発掘バカ一代、スクライア一族だったのだ。

一族総出で発掘に精を出す彼らは調べ終わった発掘品を売買するなどしてそれなりの富を持っている。この輸送船団も彼ら発掘バカ一代一族が所有する備品の一つである。もっともスクライア一族が船を買えるだけの富を得た時に購入した船なので、船齢は軽く１００年を越えているらしい。

良く見れば船体はパッチワーク状に継接ぎが目立ち、データにあ

る元の船と比べると形状すら違う。発掘をする以上未開の世界に降り立つこともあるので過酷な使用状況だったのだろう。だがボロ船という印象はなく、むしろ自分たちで修理するなどして、長い間大切に使われてきた風格を漂わせている良い船であると言えた。

「こちらドミトーリ社所属のＤＤＳ－１、艦長のイーサン・アレイだ」

「ドミトーリ社で社長をさせていただいているフェンです」

ちなみに事前に俺のことは伝えてあるので特に混乱はない。もっとも見た目が見た目なので若干胡乱げな視線が混じっていたがすぐに消えたので別段気にしていない。なにせスクライアも年齢二桁に届かない子が発掘作業に参加しているのだし、年齢に対する差別意識的な物が少ないのかもしれない。

「――…では一応の確認で、今回の任務は発掘する世界への行き帰りの船団護衛、それと発掘中の警護でよろしいか？事前にかわされた契約書の通り、護衛の際に掛かった費用は場合にもよるが其方の負担となるが、異論は？」

【ありません。ですが発掘品の盗難及び破損の賠償は其方が負担です】

「確認した。契約書の通りだ。報酬はミッドの口座に」

【承知しました。それでは短い旅となりますがよろしくお願いしま

す】

イーサンと船団長との話が終わり通信が切れる。正直俺空気でした。なんか寂しい。まぁ楽できるからいいんだけど、だんだん会社が自分の手から離れていくような感じは結構寂しい。まぁ社員が頼れる存在になってきたと考えたほうが健全だな。

俺は後のことを艦長に任せブリッジを後にした。船の運航に関してはすでにイーサン艦長の方が上手いのだ。俺がここで出来ることと言ったら全体的なオーダーを下すだけ。あとは全部部下が考えてやってくれるので実質やることは少ない。

手持無沙汰とはこの事かと実感しつつ、ＤＤＳ－１にある開発室で新製品でも作るかとブリッジを後にしたのだった。今度は何を作ろうかねぇ。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

ＤＤＳ－１とスクライア船団の航海は特に問題が起きるということもなく目的地に無事到着する事が出来た。途中小規模の海賊と思わしき集団や時折ＤＤＳ－１を遠目から観察していくガジェットが出たくらいであるが、もともとが軍用だったと思われるＤＤＳ－１のセンサーは通常のそれとは観測域がケタ違いに広い。

視認できない、それこそアウトレンジの云倍という距離で発見し、警戒用のプローブとＣＭ－９ファントムと呼ばれる無人機を展開し、早期警戒と撃退を行うＤＤＳ－１に隙はなかった。海賊は乗り込んで制圧、もしくは稀であるが艦砲で相手を破壊するという戦法をとるが対空戦は想定してないので無人機に良い様にあしらわれていた。

このＣＭ－９ファントムは元々ＤＤＳ－１に搭載されて修復を受けた６機の無人機Ｄ－９を複製して改装を加えたモノである。本来は母艦からの遠隔操作で動くＵＣＡＶ（Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｃｏｍｂａｔ　Ａｅｒｉａｌ　Ｖｅｈｉｃｌｅ）であり、動力はヘリウム３を使った核融合エンジンで航続距離はヘリウム３が尽きるまで長時間動かせた。

おまけに武装は基本が荷電粒子速射砲×２とミサイルランチャーに微弱ながらもディスト―ションフィールド発生機が内蔵され、アクティブステルスまで装備し、後のち発見され復元した装備にいたっては反応弾を搭載していた。過去におきた戦争の真っ只中で造られた兵器だけはあり、その存在は管理局に真っ向からケンカを売っていた。

さすがにこのままでは管理局の目がある世界で堂々と使用することは出来ない。その為この世界に合わせたチューンアップというか魔改造がドミトーリ社開発部によって施されていくことになった。

まず遠隔操作では母艦に何かあった際の咄嗟自体への対応に難アリと考えられ、シランシリーズのＡＩをＣＭ－９に調整して装備、自律運航を可能とした。また特攻すれば下手すると核弾頭となり得

た核融合炉の主機を魔導炉に変換。核融合炉に比べれば出力は低下したが、核融合炉と違い放射線への防護壁を取り外した為、機動性は逆に向上。

そして最大の問題点であった武装も、シランシリーズで培った魔力式兵装製作のノウハウを生かし荷電粒子砲を速射魔導砲に、ミサイルランチャーをスフィアランチャーに変更することで、シランシリーズのような魔導支援端末の一端に見せかけることに成功していた。

もっともこれは運用できる設備を持つ母艦とスペースがいる為にＤＤＳ－１以外に扱える代物ではない。また仮に他で運用出来てもフェンは売るつもりはなかった。何故なら下手すればＣＭ－９は空戦魔導師の居場所を駆逐できる性能を持っていたからである。それだけならまだいいがそのことを問題にされて質量兵器扱いにされるなど論外だ。

そんなことになれば急成長したドミトーリ社を潰す絶好の機会を与えてしまう。ドミトーリ社は管理局と協力関係にはあるが必ずしも味方という訳ではなく、利害関係の一致からくる協力関係にすぎないビジネス的な間柄である。急成長したドミトーリにはそれだけ敵が多くいるが、その件で管理局がドミトーリをかばうことはない。

敵の敵は敵であり、味方に隙を見せるのは馬鹿のすること。厳しい様だが大抵の世界はそういう枠組みが存在しているので仕方ないこととして処理するしかない。悲しいけど、これげんじつなのよね。

まぁそんな訳で空飛ぶシランシリーズのようなファントムが活躍

したことで船団に敵を近寄らせることもなく、あったとしても有視界よりはるか向こうで処理し、船団はほぼ無傷で目的の次元世界へと到達した。その世界は管理局の観測基地がある以外には遺跡しかない無人世界だった。

船団は世界に降り、ＤＤＳ－１は軌道上で待機。一応スクライアへの護衛としてドミトーリ社の目玉商品であるシランシリーズとアバローナを着込んだ混成部隊、それと暇だったフェンが同行した。とはいっても基本彼らにやることはない。発掘には専門の知識と技術がいる結構繊細な作業である。

いくら何でも屋に近いドミトーリといえども発掘経験のある人材（盗掘経験ならいたがここでは使えない）はいないので、スクライアの発掘現場をただ警護するだけに終わる。もっとも元々の契約では飽く迄も警護が目的であり、発掘作業の手伝いは含まれていないので仕方ないことだった。

まぁフェンだけは一人自由に発掘現場を見て回り、掘り出されたばかりの遺跡の中を許可を貰って見学したりしていた。男の子であるフェンもこういった遺跡というモノに何かしらのロマンを感じるらしい。色んな発掘品の中には恐らく魔法関係の品と思われるモノも多く、それらを見れただけでもフェンとしてはヒマつぶしとなった。

「ほーこれは…なるほど。見たことがない魔法紋様。マーリン紋に似てるな」

「おや社長さん。そういったの解るので？」

「知り合いに一人スクライアがいるもんで考古学は少し。ユーノっていうヤツなんですが」

「おお、あの管理局に人身御供しにいった天才児か」

「アイツのお陰で無限書庫で調べ物が出来るからウチとしては大助かりだよ」

「いや人身御供って…」

「「なーっはっは、言葉のあやだぜ」」

「……（おいおい）」

スクライアの知識欲は身内すら犠牲にするようだ。まぁ言葉のあやであるが。

《ちょいと、ちょいとそこのぼっちゃん》

「……」

《無視しないでよー。こっちゃみえてるんでしょー？》

「――……（ちょいちょい）」

《あん？あっちの物陰にだって？がってんしょうち――――》

――――何かとフェン移動中

《いやー、ここ数年ずっとこの近辺は騒がしいのに、ここに来る連中は誰も気づいてくれなくてねぇ。思わず呪ってやると思ったくらい泣きそうだったよ。死んでるから涙もクソもないけどね！》

「……なんでそんなにハッキリと存在してるんだ。声も掠れてないし、普通長い年月放置されてたら、もっと身体がブレて掠れてるのが普通だろう」

《ええのええの。仕様だから》

「仕様なのか」

『マスターがまた見えない誰かと喋ってますけどもう気にしませんよ。さぁ病院へ戻ろう』

「待て、ヴィズ。俺は正気だ」

《腕輪と痴話喧嘩してるヤツが正気に見えるかという件》

『「……見えないよな」ですね』

こんな風に遺跡の各所に浮かんでいた方々と密かにお喋りし、この遺跡がどんなものかを聞いたりした。ちなみにそのことはスクライアに話してはいなかった。

喋ったところで変な眼で見られること請け合いであるし、ここでそういうことするのはクイズしている人間にそのクイズの答えをバラすようなもので無粋であると考えたからであった。

――こうしてさりげなくスクライアともコネを作る。フェン、嫌らしい子。

……

……

……

【こちらＤＤＳ－１。地上展開中の各員へ通達。２００ｋｍの位置に発掘現場へと高速で移動する小型の動的物を確認。注意されたし】

さて、このままのんびり過ごせるかとも思ったが、そうは問屋が卸さないのが護衛任務の辛いところ。発掘中は発掘現場から動くことは出来ない発掘チームは、外部からの侵攻に関してとても無防備な状態であると言える。

当然そんな隙だらけの状態を見せつけられてただ指を噛んで眺めているような盗人は辺境には存在しない。とはいえ依頼主が護衛を依頼してきた以上、そういった事態が起こることは予定の範疇であ

る。

「こちら社長だ。ＤＤＳ－１へ、この世界の管理局は動くのか？どうぞ」

【我々が自力で対処する旨を送りつけたので静観の構えです】

「よろしい。我々の前ではむしろ彼らは邪魔だ。一応割り込みは監視しておけ」

【了解】

「あとだれが迎撃に？」

【今この方角だと――デルタチームです】

ちなみに警護しているチームは東西南北に一チームずつ配備されそれぞれアルファ、ベータ、ガンマ、デルタとチーム分けされている。全員地上本部に売ろうと思ったが予想以上に経済難の為に買ってもらえなかったアバローナ装備の戦闘魔導師１６名だ。

彼らは遺跡を中心にしてぐるぐる回るように哨戒している。今回は偶々近かったデルタが接近する輩のお出迎えをして貰うことになる。とはいえ管理局に属さない世界のはみ出し者を雇った連中なので、

「警護チームデルタへ厳命。大暴れされると遺跡が崩壊する危険が

ある。発掘チームの視界に入らないように遠くで戦え。それだけ守れば自由戦闘を許可する」

【デルタ了解――――いくぞデルタ。お仕事だ】

【了解。草刈りでもやらされるかと思うくらい暇だったから丁度いいぜ】

【やれやれ休暇並に暇だとか話が上手過ぎると思ったぜ、なぁ】

【ベアード、お前ここに残るか？】

【正気かマーカス。こんなクソ積まんねぇ場所にいたら脳ミソ腐っちまうぜ】

【うぇへへへっ…俺は別にいいけどな。ガタイがいいからスター気分で御機嫌だぜ】

【マジかコール？】

【そういうお前も面倒臭いんじゃねぇかベアード？】

【ああそうだよクソったれ】

【……こりゃ重症だな。ドム先行くぞ】

【おいてくぞ】

【あー、はいはい、冗談ですよ冗ー談。とにかく行こうぜ】

とてつもなく一癖どころか十癖くらいありそうな、なんかドッカの星で暴れ回っているガチムチマッチョなガタイをした部隊の連中っぽいのが通信に混じっていたような気がするが気のせいだ。ちなみにコイツらは先の会社成長により新しく入った連中であることはいうまでもない。

そして発掘現場から遥か遠くでデルタチームの戦闘が始まった。とはいえ何十キロと離れているので戦闘の音が色々と騒がしい発掘現場に届くことはない。精々が時折起こる爆発音くらいで、遺跡の壁を壊す発破の音にかき消されるのでスクライアの方々の殆どが気付くことなく作業を続けていた。

フェンは密かにヴィズが飛ばしたサーチャーで戦闘の様子を覗いてみたが、特に突出するようなことはなくシールドを張って障害物を利用し仲間同士カバーし合う……絵柄的にはとても地味な戦いが行われているのを見て良しとした。華麗な戦い何ぞを望むバカはドミトーリには必要ない。何処までも実用性、それに尽きるのだ。

もっとも実用性を突きつめた結果、ド派手になるというのも好物である。フェンも男の子。浪漫くらい理解出来る度量は持ち合わせていた。そんなことをフェンが考えている間に向かって来ていた盗賊と思われる集団は殲滅されていた。アバローナもシランも管理局に正式採用されたのは伊達ではないのだ。

もっとも盗人たちにとっては災難であった事だろう。遺跡発掘のスクライアが来るというので、わざわざ無人世界に来て、ちょこーっと銃器ちらつかせてスクライアを襲い、高価そうな出土品発掘品、

ロストロギアを奪って売り払おうとか考えていただけなのに、管理局正式採用の支援端末と装甲強化外骨格を纏った魔導師が夢のタッグが待ち受けていたのだ。

一応非殺傷で転がされた彼らが意識が途切れる前に考えたことはただ一つ。俺、生きて帰ったら花屋になるんだ…ガク。ということである。どう考えても怪しいフラグしか立ってないような気もするが、護衛をしているドミトーリには関知しないことなので別段語ることもないだろう。

そしてこういった盗賊やら変な機械がくることは初日以外は起こらず、僅か二週間でＤＤＳ－１はこの地を後にすることになる。普通なら１～２カ月は掛かる工程が作業の妨害が殆ど起こらなかったことと、遺跡自体がそれ程痛んでいなかった為作業が思いの他はかどったからである。

軌道上のＤＤＳ－１へとフェン達は戻り、貴重品を満載したスクライア船団が飛びあがるのを見守り上がってきた彼らと合流、帰路へとついたドミトーリ一行。行きよりも問題がない航海故、無事に何事もなく航海を終えられると誰もが確信していた。

――だが、行きは良くとも帰りが良いとは限らない。

《――ファントム０２よりマザーグースへ、哨戒域においてタイプ２を多数…訂正無数確認。注意を――レーダー照射を受けた。ブレイク、ブレ――ガッガピー――――》

それは唐突の事態だった。テストも兼ねてＤＤＳ－１を中心に哨戒に出していた無人機（ファントム）が突如撃墜された。ファントムが最後に送ってきた映像にはガジェット２型と思わしき陰とファントムに向かう複数のミサイル群。これによりいち早く何者かの襲撃に気付いたＤＤＳ－１の中が慌しくなっていった。

「現在近隣の管理局が駐屯している次元世界までの距離、二日。スクライアの船団より前に出て当艦を中心にアルファ、ベータ、ガンマ、デルタ各部隊を密集配備。外周警護は、ファントムをこれに当てています」

「――……タイプ２、本船に到達までのどれくらいだ？」

「およそ９時間です」

「これは、逃げきれそうもありませんな社長」

空間ウィンドウに投影された二次元表示には、ＤＤＳ－１の針路を塞ぐかのように赤いグリッドが展開している。若干後方にいるス

クライア船団。ＤＤＳ－１単艦であるなら、無人機を囮に針路を変えれば回避できる。だが船足の遅い船団がいる以上、その選択肢は選べなかった。

船団を置いて逃げるのは彼らと交わしたＰＭＣの契約に違反する。違反するだけならまだしも、この手の業界では仕事の失敗はそれだけで信用を失うことに繋がりかねない。そうなれば折角気付き上げてきた会社も倒産。社員は路頭に迷うことになる。社長としてこの会社の責任者であり創始者のフェンはこの状況をなんとかせねばならなかった。

「接触は時間の問題か……」

フェンが空間ウィンドウを見たとき、赤いグリッドはドンドンその数を増していた。何かしらのステルスか空間転送が行われているらしく、どれだけ敵が潜み、また敵が向かってくるのかが予想できない。これまでもタイプ２とは遭遇したことはあったが、このような集団で待ち伏せを受けたことは一度もなかった。

何かがあるのだ。ガジェット達が待ち構えてまで此方に牙を向ける理由が、原因が、何処かにあるはずなのだ。一番手っ取り早いのは恐らくスクライア船団。遺跡から発掘された古代の魔導器か何か。もしくは未発見のロストロギアでも紛れこんでいる可能性が高い。

ガジェットはすべからくロストロギアに反応を示す。その点を考えれば行きの際には現れず、帰りの際に待ち伏せていたという理由も理解出来た。だがフェンはそれに対し何処か引っ掛かりを感じていた。それは所謂勘と呼べる代物で、何か実質的根拠に基づいたモ

ノではない。

だが彼の勘は彼の命を幾度無く助け救っている。だからこそフェンは示された答えが真実であるという風には考えず、頭の片隅に保留しておくことにした。

「スクライアから何故速度を上げたのか通信が――」

「ドンパチに巻き込まれたくなかったら速度下げろと伝えとけ――…で社長？」

艦長を任せた筈のイーサンが、フェンに指示を下すように眼でサインを送ってきていた。船の運航については艦長であるイーサンが全責任を負うが、船の行き先や行動は全ては社長であるフェンに委ねられている。そう彼の眼は述べている。

フェンは、どうしてガジェットに襲われるのかが気にかかるが、それよりもしなければならないことを優先すべく、肺から空気を吐きだすとたった一言述べた。

「――全艦、デフコン１発令」

――ＤＤＳ－１が、障害を排除すべく、動きだした。

「無事に航海が終わると思うたか！中編」（前書き）

※１遅くなってゴメンナサイ。続きです。
※２今回はミリタリー色が強めです。
※３後半に少しＯＶＡ版雪風の描写があります。
※４作者の文才がないので後半すこし視点が何処か判り辛いです。
※５それでもいいという方はどうぞ。

「無事に航海が終わると思うたか！中編」

「無事に航海が終わると思うたか！中編」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅフェン

「全艦（オールシップ）デフコン１！敵の動向を見逃すんじゃねぇっ！」

「艦内隔壁閉鎖、戦闘員は各自手順通り行動せよ――」

デフコン１、それは即時戦闘にはいってもおかしくない。もしくは戦闘が必ず起こることを前提とした防衛体制をここでは示す。イーサンが受話器に怒鳴る様にして各部署に指示を飛ばし、必要のない通路が次々と閉じられていく音が響く。

「機関出力、巡航臨界から戦闘臨界へ移行。魔力生成開始」

「格納兵装偽装解除、ＦＣＳリンクコンタクト。ＣＩＣとのデータリンクオールグリーン」

「――…そうだ。飛ばせるファントムは全部出す。リストを送ってくれ――」

「全部署に発令。総員対空戦闘配置につけ、繰り返す――――」

ＤＤＳ－１が震える。機関出力を上げたことによる微弱な振動。これは少しばかり老朽化しているこのフネが発した戦闘準備の合図。ダメコンパネル上で次々と艦内のエアロックと隔壁の閉鎖状況が示され、施錠完了の文字が赤から緑へと切り替わっていく。

まだ戦闘開始まで８時間強ある為に全ては閉鎖されていないが、バイタルパートの居住区画や生産区画や機関室への隔壁は閉鎖され、戦闘が終わるまで開錠されることはない。そこが被害を受ければＤＤＳ－１は沈むのだし当然の動きだろう。

《ファントム０１、マザーグース（ＤＤＳ－１）後方で待機中、別命があるまで所定針路を維持、撹乱の為ＴＡＬＤ（戦術空間発射デコイ）の射出を要請》

「マザーグース了解。タルドを射出する。各無人機編隊は密集隊形を保持しつつ所定エリアで戦闘空間哨戒にあたれ」

《ファントム１１よりマザーグースへ、空間転移反応多数確認、敵の数が増え続けている》

「引き続き監視を続行――タルド発射準備完了。此方のカウントで発射する。タルド針路と被らないよう注意」

《アイコピー》

「――いまだ。発射、発射、発射」

ＣＭ－９ファントムと違い思考力を持たない飛翔体（デコイ）がミサイル発射管から垂直に撃ち上げられる。最低限の制御装置と次元航行装置、それと熱源発生機を備えたタルドの数は最初は４機であったが途中で５つに別れた為およそ２０。

現在ファントムの後続が発進準備に入っているが、デコイを合わせても無人機部隊は計５０機弱にも満たない…もっとも船内で生産可能なので後６時間もあれば５～７機くらいは増やせるだろう。とはいえ、ジリ貧になること請け合いであるが。

各デコイは現在飛んでいるファントムと合流し僚機として機能する。攻撃機能こそ持たないがミサイルの撹乱は出来る上、数を誤魔化せる。もっとも相手も無人機なので数というハッタリはあまり通用しないのが少し痛い。

「イーサン。周囲の変化は逐一報告してほしい。俺は会議室に向かう」

「アイアイサー、送っときます」

さて、まだ時間はある。ブリーフィングを見に行く事にしようか――。

会議室には既にドミトーリに所属する戦闘魔導師１６名が集まっていた。ガムを噛んだり雑談したりなどして思い思いにリラックスしている。まぁまだ後８時間かそこら時間的に余裕があるのだし、前衛があまり緊張しすぎても困る。

ブリッジ要員の場合はすでにデフコン１が発令されている。ある意味で既に戦闘が始まっているため、彼らは勝手に持ち場を離れられない所為で緊張しっぱなしだが、こっちはそう来ると直接戦闘が始まるまで出番がないのだから気楽なのだろう。

普段の癖でつい気配を消して中に入ったので殆どの人間に気付かれていなかったが、姿を現してもそれ程驚かれることはなかった。クソ、驚いてくれた方がおもろいのになぁ…毎回やれば慣れるか。動じない連中に少しイラッときて煙管を取り出した。

《――――カシュン》

薬草煙管から煙を吐き出し、耳に入りこむ雑多な話を聞いていると、エアロックが解除され野郎どもひしめく会議室に女性たちが入ってくる。リニスとリンだ。デフコン１が発令した時に別行動を取りブリーフィングの準備をしていたのだろう。

彼女らは会議室の後ろにいる俺に気付くが、俺は手を振って彼女らに仕事をする様に合図を送った。

「――概略を説明するわ」

リニスは少し残念そうな顔をしたが、俺の指示に従いブリーフィングを開始する。騒がしかった会議室が彼女の一言でシーンと静まり返った。流石に命を左右するかもしれない情報を聞くかもしれない場なので騒がしくするヤツはいないようだ。

静まり返った会議室を見渡しながらリニスはリンに合図を送った。会議室のプロジェクターが動きだし、そこに周辺情報が映し出される。大きな緑の円が中央にあり、ＤＤＳ－１と書かれている。

「現在、本船の針路上にガジェットと呼ばれる無人機が集結しつつあります」

そう言うと画像が動き、緑円の左側、ＤＤＳ－１の針路上にガジェットと記載された大きなグリッドが現れる。大きいのは広範囲に分布しているからだろう。画面上では左側に線引きがなされ赤い色で染め上げられている。

「詳しい数は不明。ですが光学映像を見る限り最低４００は居ると推測されますし、刻々とその数は増え続けています。一応確認されているガジェットの種類は2型だけですが、1型がいないとも限り

ません」

２型はＡＭＦ装備タイプはまだ確認されていない。基本的に高速高機動なこれらにとってＡＭＦ発生機は重たすぎて彼らの持ち味を殺してしまうのだろう。もっとも持っていないとも断言できないので油断が出来ないことも確か。面倒臭いことこの上ない。

「また本船の目的は後続のスクライアの船団の護衛にあります」

ＤＤＳ－１だけでなく、スクライアの船団が被害を受ければ護衛は失敗に終わる。緑円の右側、ＤＤＳ－１のかなり後方にある三角陣形をした三つの青い円を指差しながらリニスはそう言い放つ。この青い円にはスクライア船団と記載されていた。

一応戦闘中スクライア船団は通常空間に退避して貰うこと手筈になっている。次元空間から通常空間に移行する時、座標が少しでも違うと結構距離がずれる。要するに後方へと敵を逃さないで敵を撤退、もしくは壊滅させられれば任務達成ということになる。

とはいえ、現在確認されているだけでもガジェットの数は最低４００。一人当たり２５機破壊しなければならない計算だ。一見すると簡単そうだが実のところ高くてＡランクな彼らには少し荷が重いかもしれない。疲れを知らない無人機を相手するのだから。

「本船の防衛は収納兵装。それとシラン達を甲板に展開し自走迎撃砲台として機能させますのでそれ程心配しなくてもいいです。但し

管理局の目が何処にあるか判らない為、兵装は魔力稼働型に限定されます。1型などのＡＭＦ搭載機に対してあまり強固とはいえないのでそこだけは注意してください」

一応ここいらは時空管理局の活動圏内。だからどこに管理局の監視衛星とかがあるか判らない。実のところ発掘し起爆できるレベルにまで修理した反応弾とかで殲滅とかも可能っちゃ可能なのだが、もし見られていると後がヤバい。

対空兵装もレーザーと魔力ガトリングどちらも使えるよう調整してあるが、1型が大挙してきたら対処は難しいかもしれないな。長距離攻撃もミサイルではなくＣＭ－９によるスフィアランチャーによる爆撃と強襲くらいだ。

あとは、ＤＤＳ－１にある収納式連装バーストレーザー砲、一応これも魔力稼働可能なハイブリッド魔導砲（機械的なのか魔力を術式変換したかの違い）なので、質量兵器にはギリギリ抵触しない…グレーゾーンだがね。

「各員はこれより6時間後、ファントム部隊と共に戦闘空間哨戒に入って貰います。各員装備の確認を忘れない様にしてください。何か質問はありますか？――フェニックスさん、何か？」

ブリーフィング自体はすぐに終わり、後は各員に情報が伝達されるのだが、どうやらまだ聞きたいことがあったヤツがいたようで手が上がる。手を上げたのは…たしかデルタチームのチームリーダーをしているマーカス・フェニックスだったか…。

「一つだけ。俺らの後ろに社長がいるのですが、ブリーフィングに参加しているということは彼も出るということなんですか？」

リニスが俺に視線を送ってきたので、俺はコクリと頷いた。

「はい、社長自ら出撃なさいます」

そうリニスが答えると、会議室にマジかよとか言う声が響いた。

「ではそちらにも護衛を？」

当然の疑問だ。一応俺はドミトーリのトップである。護衛の為に戦力を割かれれば、より困難な状況で戦う羽目になる。だからこそ俺は彼らにこう答えた。

「必要ない」

「社長…」

「諸君らは諸君らのすべきことをするといい。此方は独自に動かせてもらう。臨機応変な対応に期待する」

「……判りました」

そうこれでいい。ＵＳＮ正規軍ならいざ知らず、彼らは基本的にはミッド式魔導師のＡランクレベルである。技術的にも能力的にも彼らとフォーメーションを組むことはできそうにない。例えアバローナで底上げしていたとしてもだ。

彼らには編隊で参加してもらい、俺は遊撃で対応。戦力の出し惜しみをする訳にもいかない現状ではこうするしかない。ドミトーリの戦力の中で一番の対軍攻撃力を持つであろう戦力が出て来ないってのは、戦略的に考えてもおかしいのだから。

「それじゃあ、後一つ。魔力稼働型に兵装を限定だといいましたが、もしもＡＭＦ搭載機が出てきたら俺達はどうすればいいんで？」

ふむ、確かにその可能性もある。ならば――

「フムン、なら対ＡＭＦ用のアバローナ用追加装備…の試作品でも使ってみるか？」

「……試作品、なんですか」

「試作と言っても既にテストは済んでいる。あとは量産を待つばかりの、先行量産品だな。ただアバローナとのマッチングに少し時間が掛る。すぐ使う気なら今すぐ格納庫に走った方が賢明だと思う」

「――だそうです。社長ありがとうございました。他には何かありますか？」

「ああ、後一つだけ。次元空間におけるアバローナ運用は試験以外では初めてだ。地上と勝手が違うだろうから、溺れない様に気を付けてくれ」

それだけ言うと俺は口を噤んだ。後は彼らが自力でやってくれるだろう。リニスが最後に全員に質問はないかと聞くがそれに対し返事はない、無言こそが返事である。

「それでは各自準備に入ってください」

その言葉が放たれるとほぼ同時に連中は椅子を蹴るように立ち上がり、それぞれ戦闘準備の為に会議室から駆けていってしまった。残ったのはリニスとリンと俺くらいである。あー……なんかリニスからジト眼でみられてるなー。

「リニス、判ってると思うけど…」

「全力で戦域管制でもさせてもらいます。私にはそれくらいしか出来ません」

「ありがとう」

「主の無茶に尽くすのも良き使い魔の証しですから…無事に帰って

来てくださいね」

まるで懇願するかのような彼女に、俺は――――

「ああ、パインサラダでも作って待っていてくれ」

――――我慢できなくて、ついそう言っちゃったんだ。言ってみたかったんだよねコレ。

『それは死亡フラグですよマスター！？』

「うん知ってる」

『ならいい…よくないですよ！？』

「自覚して言ってるなら死亡フラグにはなるまい？」

「では美味しいサラダでも作っておきますね？」

『こっちはこっちで本気にしてる！？もうやだこの人達』

「ヴィズねぇは苦労しっぱなしです。ハイ」

戦局は不利、しかし負けるつもりも死ぬつもりもない。困難な任務も全てこなしてきた。今回も同じように仕事を全うすればいい。

都合よく身体は欠損しても再生してくれる。戦いに向いた、素晴らしい肉体なのだから。

……カッコよく纏めてみようと思ったが、これじゃタダのドMな変態じゃね？

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

――ガジェットを確認してから7時間経過。

ＤＤＳ－１の針路上に突如として現れたガジェットたち。何を考えているのか、またどんな命令を受けているのか判らない冷たい機械達は次元空間に球状の群を作り、まるでハチの大群が犇めき合っているような黒い塊を形成し君臨していた。

そしてこれまでの間に判明したことは、ガジェットの群はスクライア船団とＤＤＳ－１のどちらにも反応を示したということ。だがそれに加えて特にＤＤＳ－１に対する挙動の方が顕著であるということであったということであった。

通常巡航で残り2時間。戦闘速度を最大で出せば数十分も掛から

ない距離。非常灯が灯るブリッジの中でＤＤＳ－１の艦長を任されているイーサン・アレイは敵の動向を窺っていた。

「総員ＢＪ（バリアジャケット）と気密服着用準備急げェ！対空監視を厳としろっ」

イーサンが敵との距離が近づいたことを考え総員に気密服着用を指示した。号令に従いＤＤＳ－１の乗組員たちは、薄手の作業着のような首から上以外をすべて包み込むような服に着替えていた。その首元に呼吸器のようなマスクをぶら下げていた。

マスクから延びるホースは背中にある箱のようなバックパックと繋がっており、それが生命維持装置であることが見てとれる。腰にはひし形の待機状態になったシランが装着されたハーネスを締め、ヘルメットを脇に置いている。

これがＤＤＳ－１で採用している気密服である。宇宙空間ほどではないが呼吸できる空気がない次元空間で戦闘をする際に魔導師資質の薄い人間が着ける生命維持の最後の砦。通常の魔導師の場合はこの気密服の上からＢＪを展開して行動することが多い。

ＢＪでもヴィズのように完全密閉式で全環境対応型の調整がされているモノは少ない。ＢＪというモノは元より防護服なので最低限の生命維持は付いている。だがそのままでは装備無しでエベレストに登るようなものであり、長くは活動する事が出来ないのだ。

ちなみにこの気密服は宇宙開発してた企業からの払い下げ品を複

製したものである。その所為か性能だけはピカイチで小型軽量薄手ながら機能は重宇宙服並らしい。もっとも戦闘が始まればＢＪを展開出来ない人間は、爆風に巻き込まれれば即死しか道がないのであるが。

なにせ作業がしやすいように腕回りの快適さを重視した結果、ただの宇宙服程度の耐片性しか持ち合わせていないのである。ＤＤＳ－１のブリッジあたりにまで被害が及ぶような攻撃を受けたらひとたまりもないことだろう。

「本艦のディストーションフィールドはどうなっている？」

管理局の次元航行艦にも装備されているディストーションフィールド。儀式魔法に分類される結界であり、空間に特殊な歪みを発生させる。運用には外部からの魔力供給が必要で、艦船では魔導炉搭載艦にしか実装出来ない魔導兵装の一つである。

本来なら提督クラスの高ランク魔導師か結界専門魔導師複数名、それと魔力供給源がないと使えない儀式魔法であるが、そこはドミトーリの技術力で補助装置を用いることで多少ランクが低い魔導師でも単体でＤＦを使うことが出来た。

もっともＤＦ使用中、結界魔導師は補助装置にくぎ付けになるので、結界魔導師が生体部品でもない限り長時間の運用は出来ない上、ランクが低いので一部展開のような器用な運用が出来ない。つまり展開すれば攻撃が出来なくなる諸刃の剣であった。

「――…だめです。補助装置の出力計数が安定しません」

「なら光波シールドだけか…不安だな」

相手は無人機、されど数が多い上に少しづつであるがいまも増えている傾向がみられる。ＤＦは攻撃を違う次元へ逸らすとても強固な盾である。使えたなら万が一でも逃げるだけなら可能となったとイーサンは考えていた。

最悪ＤＦを展開して全速力で駆け抜けるだけでいい。そうすれば中央突破の形でＤＤＳ－１だけなら突破出来るのだ。簡単に言うならひき逃げ作戦である。もっともそれはある種の最終手段であり、一応戦力がある内にこの手をとることは出来ないだろう。

光波シールドも部分展開が出来る為にシールド展開をしながら攻撃出来るという利点があるが、防御力という面ではＤＦに遥かに劣る。それがどう出るか静かに艦長席に座るイーサンは腕を組んで脳内シミュレーションを重ねていた。

「哨戒中のファントムより入電。群からブースタータイプの２型が無数突出。到達まで３０分」

「――来たか。最大射程まで時間は？」

「およそ１０分っ」

黒い繭のようになった群れの中から、白い軌跡を残す程高速で動

く無数の機影をセンサーで捉える。辛うじてプローブのカメラに写る姿は、２型に円筒状の筒を６本束ねたような物体をぶら下げた何か。ブースターを装備したガジェットだった。

空気が全く無いこの座標では空気抵抗を気にする必要はない。機体剛性の限界まで加速した２型は十分に加速するとブースターを切り離し、速度を維持したままＤＤＳ－１へと殺到していた。

「総員全周囲警戒を厳とせよ。各砲座は射撃諸元に連動。ＳＡＭ準備っ」

「各砲座、射撃諸元に連動、ＡＢＲ（連装バーストレーザー砲）自動照準」

「撃ちまくれいっ！とにかく近寄らせるなっ」

イーサンの命令が下り、ＤＤＳ－１のセイルの脇に展開を完了していた収納式のＡＢＲが針路上の敵へと自動的に照準を合わせる。砲身を包み込むように環状魔法陣が展開し、光子が粒となり砲門から零れおちたかと思うと大出力のレーザーが吐き出された。

術式により集められた光子を圧縮した凝集光は、淡い緑色に輝きながら２型へと迫り、２型は回避運動をとることもなく飲み込まれ、照射された凝集光が２型を包み込むようにして命中し……弾かれるように掻き消え消滅してしまった。

まだＡＢＲの最大射程に２型は入っていない。だがそれは無駄ではなく２型達の隊列をいとも簡単に崩していた。プログラム通りに

行動する無人機は攻撃を受けた際は回避行動に移ることがあらかじめ決められていたからだった。

それを見てイーサンは次の指示を下すためにＯＰへと顔を向ける。

「いまの内に魔導師を発艦、展開させておけ」

「アイサー、――各チーム発艦準備、命令があるまで待機だ」

そして船体側面にある格納ハッチから、次々とアバローナ装備の魔導師達がカタパルトで艦外に撃ちだされて発艦。それぞれのチームは編隊を組んでＤＤＳ－１の進路方向へと飛翔していく。その後に少し離れてランチが続いた。

「――アルファチーム、アッパーデッキより発艦、ベータ、ガンマ、デルタが続きます」

《――デルタが殴りこみに来たぜぇっ！ヒーハーっ！！》

「いま叫んだ馬鹿はドイツだ？…ああいや、やっぱりいい。そのまま発艦させておけ」

「各チーム前進、本艦前衛部で要撃にあたれ」

《アルファリーダー、了解さ》

《ガンマ了解》

《ベータも了解、財布の紐絞めて待ってろよ》

《こちらデルタ、了解だ。ベータと同じくボーナスに期待するぜ》

軽く冗談を飛ばしながら各チームは要撃の為にアバローナを加速させる。数時間前バックパックを０Ｇ（ゼログラビティ）パックへと換装し、システムを無重力空間へと対応させた巨人たちは魔力式スラスターから延びる魔力残照を輝かせていた。

――そしてそれに続くかのように、左舷カタパルトからもう一機発艦した。

《こちらフェン、コールサインはレッドクリフ１、発艦する》

電磁カタパルトで初速を得て艦外へと飛び出したそれはアバローナとよく似ていたが、それらよりも遥かに小型な子供サイズ人型強化外骨格。かつてのコールサインを述べたそれは、フェンと彼の相棒のデバイスであるヴィーザフの姿であった。

フェンが背中のバックパックを吹かした途端、その小さな身体を翻すと一気に加速する。ジェットパックから砲撃のような魔力残照の排気炎が煌めき、訓練を受けていても気絶するような高機動により、先に発艦したチームに数秒で追い付いていた。

そんなドミトーリのトップを見たイーサンは、彼に通信を送る。

「社長、ムリはするなよ？」

《自分の役割くらい理解しているさ。なに死にさえしなければ問題ない》

「問題あるぞ。だれが給料払ってしかも事務処理するんだ？アアン？」

《……ウチのスタッフって優秀だなぁ》

「トップがこれでウチは大丈夫なんだろうかね？」

《ワンマンは成長しやすいが後に害悪にしかならんよ》

「その外見年齢で言われると、なんとも言えん気持ちになりますなぁ」

まったくウチのトップは聞かん坊だと面映ゆそうに笑みを浮かべ、イーサンは彼との通信を切った。ブリッジのモニターに第４射目のＡＢＲが発射された閃光が写り、ブリッジが少し明るくなる。全員発艦したので次の段階へ移る。

「各チームと社長の発艦を確認。続いてシラン達の発艦を急がせます」

「各チームは編隊を保持しつつ、レッドクリフ１と共にマザーグー

ス（ＤＤＳ－１）をエスコートしてください――頑張ってねフェン君」

《了解した。頑張ることにしようか》

さりげなくフェンに激励を送るリニスとそれに機嫌よく返す社長。それを見て仲睦まじい主従だなとイーサンは微笑ましく見る一方。美人な使い魔もっていて少し妬ましいわなぁとか考えていた。

「Ｆ（ファントム）－０１無人機編隊、ガジェットの先鋒と接触します」

だがすぐに次の報告が来たことで思考を引き締めた。外周警護に当てていたＣＭ－９は魔導師よりも先にガジェットと接触する様子が立体スクリーンに概略図で投影される。無人機を示すグリッドとＣＭ－９ファントムを示すグリッドが、重なる。

「始まったか…」

「Ｆ－０１、交戦開始」

高速で移動しているガジェットに合わせる為に、ファントムたちは一度ガジェットを通過すると後方からアフターバーナーを全開にして加速。ブースター加速により運動性が著しく低下している２型の背後にスフィアランチャーを放った。

ランチャーから放たれた蒼白いエネルギー弾はロケット弾と同じく直進しかできないが、ＣＭ－９の加速が加えられた魔力弾頭は２型の速度を軽く凌駕する。ＣＭ－９ファントムの持つ優秀な火器管制も相俟って、まるで吸いこまれるかのように命中した。

魔力爆発の閃光が煌めく中、突如生き残ったガジェットの弾幕がファントム達の下方から放たれる。何機かが巻き込まれ火球となって爆散していた。ＤＤＳ－１へと向かう２型とは別に反転し、迎撃に残った２型たちは戦術ＡＩにのっとってミサイルによる飽和攻撃を開始。

二機編成（ロッテ）を組んだＣＭ－９ファントムは人が乗っていないというアドバンテージのもとマンパワーを無視した回避行動に入る。バラける様にダイブし、追尾してくるミサイルをチャフで撹乱。同時にスフィアランチャーをばらまき完全に破壊。

一方でミサイルにロックされなかった機体が機首を２型へと向ける。マズルフラッシュ、機首に装備された速射魔導砲が唸り声をあげ高速魔力弾頭が２型を食いつくす勢いで２型を貫通。迎撃に残った２型は大半が真っ二つに折れて爆散していった。

「一部の２型がファントムを突破っ！」

「間もなく各チームと接触、要撃に――っ２型の反応が分裂っ！いえミサイルです！」

「来たぞっ対空ＡＢＲ撃ぇっ！各砲座自律照準っ！光波シールド展開、砲座と連動だっ」

突っ込んでくる2型と2型が放った対艦ミサイル。ＤＤＳ－１は再びＡＢＲを照準して発射する。先程と違いＡＢＲのレーザーは空間に現れた魔法陣により途中で光子をまき散らして拡散。花火のように広範囲に広がった凝集光が迫るミサイルを迎撃する。

およそ2型とミサイルの４割を撃破。さらに対空仕様の魔力式ＣＩＷＳとデコイも発射されミサイル達はその数を減らしていく。だがミサイルは減ったが2型が直進を止めようとしないのを見て、イーサンはブリッジで叫んだ。

「回避しろっ！ドテっ腹に突っ込んでくるぞっ！」

「嘘でしょォォォ！！」

操舵手が必死でＤＤＳ－１に回避運動を取らせようとする。

「クソっ！もっと早く動けこのドン亀ッ！」

だがその巨体故に動作は遅く、ＣＩＷＳも唸るが数が多すぎて対処しきれていない。被弾するかという瀬戸際、白い影がガジェット編隊の上方に出現する。

《させんっ！》

彼の者の肩に展開されたガルヴァドスから大量の魔力弾頭が一斉発射される。それらは2型へは直接向かわずその進行方向へと発射され――――

《――爆破ァ！》

――――閃光、爆発、轟震。

戦闘に特化した無人兵器を百単位で破壊できる威力を込めた高圧縮弾頭の炸裂。その火球を前に殆どのガジェットは飲み込まれ四散していく。しかしそれすらくぐり抜けた2型は突進する事を止めなかった。

加速した2型の一機が光波シールドに接触。爆散する。それにより弱まったシールドを別の機体が特攻を掛けて完全に穴をあけてしまった。このままでは突破した2型の防御の内側への侵入を許してしまう。被害確定。この状況では誰しもそう考えた。

〔やらせないっ！インターセプトだよっ！〕

〔了解了解〕

その時ＤＤＳ－１の甲板の上を自慢の多脚で滑走してきた一機のノーマルシラン…通称ボタンが自身の腕を上げたと思うと、そこに取り付けられた魔力機銃から大量の弾幕がこじ開けられた穴に目掛けて放たれていた。

収納式故に対空用のＣＩＷＳが少ないＤＤＳ－１の最後の防衛の要であり、損傷した際の応急修理の為に艦外の甲板に出ていた量産型を統括する為に、上位機種であるノーマルシランたるボタンも出撃していたのである。

シランズ達が放つ攻撃は、見かけは小さく見えていても立派な魔導兵装である。ＡＭＦを持つ１型であるならいざ知らず、対空力用シールドくらいしか持ち合わせない２型であったなら、魔力機銃の威力は軽量で脆い２型を破壊するのに十分すぎた。

ボタンと同じように量産型たちも機銃を光波シールドに開いた穴目掛けて乱射し、光波シールドに開いた穴を潜ろうとした２型をなんとか撃破。殺到してくる前に復旧した光波シールドにより穴が塞がれるというループが完成していた。

だが例え撃破したとしても２型の脅威は終わらない。彼らの速度は恐ろしく早く、撃破して爆散した破片すらもＤＤＳ－１にとっては脅威となっていた。十分に加速を得ていた破片は２型の爆散をも運動エネルギーに変えて装甲板を蹂躙したのである。

量産型達は背部ポッドに積んでいた多重シールドビットによりことなきを得たが、何機かが巻き込まれて小破してしまう。さらに降り注ぐ２型の破片がＤＤＳ－１を揺らしていた。３００ｍある船で

あっても至近距離での衝撃波はそれなりにダメージを受けていた。

「右舷に被弾！損傷軽微なれど損害不明！」

「エア漏れは確実だろう。整備シランとボタン、ダメコン出動っ！」

〽もうやってるよー！パテで塞いどいたから大丈夫ー！〽

右舷側に降り注いだ２型の破片は装甲板を幾つか貫通し内部にまで達していた。自動砲台と化したシランの間をすり抜けて、整備ポッドを搭載しているシラン達が急いで応急修理に掛かる。戦闘中なため空気漏れを防ぐ程度で済ませ修理を終えた。

「敵第２波確認！数は先の倍以上と推定！到達まで３００ですっ」

そして息をつかせんとばかりに第２波が到達する。

「射程内だっ！ＡＢＲは使えるかっ？」

「現在砲身冷却中っ！冷却完了まで３６０っ！」

「ええい！遅いわッ！魔導師チームは何をやっている！」

物量による波状攻撃、単純かつ効果的な戦法をとるガジェットに

いら立ちを隠せないイーサンは声を荒げていた。だがアルファチームなどの魔導師チームも、第2波の接近を感知して既に要撃の為に空域へ急行していた。

「アルファチーム第2波と接触！交戦しますっ」

《すこし数が多い。レッドクリフはこれより支援砲撃を開始するぞ。牽制にはなる》

今度もブースター装備型、しかも先の倍である。今度は2型の針路上にアルファチームが展開し、遊撃の為に動いていたフェンが近かったのでフォローを行う形へ自然となったが、フェンが流石に相手が多いと判断し砲撃を行う旨をＤＤＳ－１に伝えた。

「マザーグースからアルファチーム。レッドクリフが支援砲撃をしてくれるわ。砲撃の影響圏座標を転送します」

《アルファ1座標を受けた。了解した。ありがてぇな》

アルファ1がそう答えた直後に周囲を照らす極光のような光が2型目掛けて発射される。見れば両肩に装着して使用するバズーカ型兵装ツイングロムを展開したフェンから放たれた砲撃魔法が2型の進路を塞ぐようにして撃ち出されていた。

加速中の2型は何機かがこれに突っ込み蒸発。他は四散散り散りとなり停滞した瞬間、そこを更に光の奔流によって薙ぎ払われる。

フェンがツイングロム用の大型カートリッジを用いてクイックチャージをした砲撃がかなりの数の2型を落としていた。

《ヒュー、流石社長。ぶっといの出すなぁ》

《ありゃ砲撃ってよりか社長砲だな》

《んだんだ――つーかこのまんまだと社長に全部食われちまう！ボーナスが減るぞ！》

《半分は残ってんだ。平らげるぞ！》

フェンの攻撃により数を減らした2型目掛けて、ＯＧパックをオーバーブーストさせて急加速したアルファチームが杖を掲げて編隊を組んで2型の群へと突っ込んだ。

《左旋回……今！》

リーダから斜めに一列になるエシュロンを組んだアルファチームは、右旋回して回避しようとした2型の機動に合わせて、絡みつく蛇のように逃げた2型を狙う。杖から放たれるシューターがブーメランのように次々と2型をハチの巣に変えた。

《ラストターゲットスプラッシュ！――…って社長もうあっちに？》

《あっちでも始まった！》

彼らが対艦ミサイル発射前のガジェットを落としていた時、すでにフェンは別のチームが散開している戦域へと足を延ばしていた。アルファチームに見えているのは彼のバックパックから流れる排気炎だけ。そして彼が戦域に突入した途端、火球が辺りを照らしているのが遠くからでも見えていた。

《……長い一日になりそうだ》

「こちらマザーグース、さらに敵増援を確認。アルファチームはいけますか？」

《アルファ1了解！すぐ向かう！》

《こりゃ、ボーナスの日が楽しみだな》

《そうだな。帰ったらドッカの次元世界で一杯おごるぜ》

「上からきます！アルファチーム！ブレイク！！」

強襲してきた2型を散開して振り払い乱戦へ突入する。すでにブースタータイプの姿はなく、魔力を持ち距離的に近い魔導師達へとターゲットがシフトしたガジェットが次々と増援を送り込んでいた。

白い砲撃と爆撃が周囲を染め、再び発射された淡い緑の閃光が敵を分断して破壊。残党へファントムが群がって破壊していた。戦い

は長い。何故ならまだこれは序の口。今戦っているのはガジェットの先鋒で、その向こうで本隊が不気味に沈黙を守っていた。

「無事に航海が終わると思うたか！中編」（後書き）

あぅ、明日から仕事、また投降遅れそう。
そして文才をください。

「無事に航海が終わると思うたか！中編２」

「無事に航海が終わると思うたか！中編２」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

■次元航行艦ヘクトール艦内・ミッド標準時１９：４３■

フェンが社員引き連れ、機械兵器相手にひいこら言っていたちょうどその頃。辺境次元世界で任務を終え、補給と整備を兼ねて一路本局へと帰還する途中の次元航行艦があった。その一室では一人の少女が本局に提出する書類の作成に精を出していた。

彼女はフェンからマルチタスクを応用した仕事のやり方を教えてもらい、それによって大人でも大変な作業である書類作成を比較的楽に行えていた。執務官になってからそうやって過ごしてきた彼女にとってはもはや手慣れたものなので問題はない。

さて、彼女一人だけが黙々と報告書作成を行っている筈の客室には、もう一人別の人間の声が響いていた。見れば彼女が書類作成を行っている机の上に書類作成用空間モニターとは別の小さな通信ウィンドウが浮かんでおり、彼女がどこかの誰かさんと通信中である

ことを示していた。

『フェイトちゃん仕事中だったのにごめんね、邪魔だった？』

「ううん、どうせ片手間で出来るから問題ないよ」

彼女クラスの魔導師ともなると、友人と通信でおしゃべりしながら仕事をすることくらい朝飯前であった。普通の人間がテレビ見ながら本を読む程度のことをより高度に実践していると考えてくれれば良い。意外と難しいが出来ない事はない。

そう、部屋の主である少女フェイトは空間投影の疑似キーボードを叩きながらマルチタスクを展開し、親友とのプライベートな通信に勤しんでいた。画面の向こうにいるのは高町なのは。彼女の初めての友達で親友と呼べる同年代の少女である。

学校では一緒だが基本的に配属されている仕事場が全然違うので、こうして世界を飛び回っている時に連絡が取り合えることは非常に珍しかった。普通の少女たちがするような他愛のない会話すら、今の彼女たちには貴重な時間であった。

そんな彼女の部屋にしばらく電子音だけが響いていたが、一区切りついたのだろう。フェイトは手を止めるとグゥーっと伸びをしながら背もたれにもたれ掛かった。彼女は優秀な執務官であるからして、きっと既に仕事の半分程度を終わらせたのだろう。

「あ～、全部終わった～」

『お疲れさまフェイトちゃん』

訂正…この少女は半端ではなかった。流石は十代前半という若さで難関である筈の執務官になった少女と言うべきか…地球では学校に通っている年齢だというのに顔色一つ変えず仕事を終わらせる。こう言うのをスーパーガールと呼ぶのであろう。

フェイトはすこしだけ凝った肩をポンポンと叩いてほぐしつつ、通信ウィンドウへと顔を向け、画面の向こうの親友をその視界に収める。教導官の制服を纏っている親友は何時もの可愛らしい笑顔を彼女に向けていた。

「なのはの方は、きょうのお仕事終わったの？」

『うんと、終わったという訳じゃないんだけど…』

「だけど？」

『教導以外だと事件発生まで待機か魔法の研究しかすることがないの』

画面の向こうでクターと項垂れて机によりかかり、まるでダリの柔らかい時計の如く垂れてみせる彼女にフェイトは苦笑していた。背景からして親友がいるのは教導官の控室であり、何時スクランブルが掛ってもいい様に待機しているらしい。

仕事中だけどやることがないので連絡を入れてきたのだろう。ちょっと不真面目に見えるかも知れないがなのはとて人間であり、ずっと緊張している訳にもいくまい。それにこうして他愛ないお喋りが出来ることは彼女たちにとって至福でもあった。

「ところでなのは、何かいいことでもあったの？」

『えへへ、きょうの教導で教えた人達と模擬戦したんだけど、わたしが最初教えた頃と比べたらずっと強くなってたんだ』

仕事が終わっても次元間通信は終わらず、そのまま彼女たちのお喋りは続行された。だが話の内容は主に管理局での仕事の話が中心であり、十代の少女たちが喋るような内容ではない。だが仕事に大忙しな彼女らの持つ話題ネタは乏しく、必然とこうなってしまっていた。

『それにしても私は鬼教官を肖(あやか)って厳しく教導しているのに、なんでみんな訓練終了後は笑顔なのかなぁ？』

「それはきっと、なのはが真摯に教導をしているからだよ」

『でも普通は痛めつけてきた相手にいい感情は持たないと思うの…』

「う～ん何でなんだろう？」

ちなみにこの話に出てくる連中は全員が元第４陸士訓練校から出てきた新人で、しかも一時期彼女らと一緒だったことがある…あの模擬戦の中ありがとうございまーすと叫んで吹き飛ばされていたあの連中であった。知らぬが仏であろう。

一時期しか一緒にいなかった上、彼女らは短期の集中コースというシード枠ですぐに卒業し現場に入ったので、訓練校で顔見知りになった人間は数えるほどしかいなかった。ましてや訓練の時にしか顔を合わさなかった人間のことなど、言わずもがなである。

「地力を鍛えられたんだし結果オーライじゃない？」

『う～ん、なんか違う気もするんだけどなー…フェイトちゃんの方はどう？』

「私の方は…」

ふとフェイトは先程まで書いていた報告書を見る。これはつい先日、違法な研究を行っているというタレこみがあり、その研究所の捜査を行った時のモノだ。その際、彼女は研究所において実験を受けていたと思われる４歳くらいの赤い髪をした少年を保護する事に成功していた。

潜在的に高い魔導師の資質を持ち、電気の魔力変換資質を有したその少年は、魔法的な肉体改造などの様々な非人道的ともいえる魔法実験を受けさせられた為に衰弱こそしていたものの、少年自身の意識ははっきりとしており、救出した時に自分をジッと見つめてきたことを彼女は覚えていた。

その眼にはハッキリと救出してくれたことへの感謝の意が籠められていたとフェイトは思っている。だからという訳でもないが、今は現地で体力回復をさせている少年の体力が回復次第、何の目的で実験を受けたか調べた後に管理局の保護施設へと護送できるように手配していた。

「――うん、いい仕事ができたとおもう」

フェイトは管理局員…なにより執務官としての誇りを持っていた。自分自身の生い立ちもあり、そう言った意味でも違法な魔導研究を行う者たちを立件できたこと、そして実験対象を最悪の環境から救い出せたことが何よりもうれしかったのである。それゆえ彼女の表情は自然と笑みを湛えていたのだった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

発艦してから他の連中のところに合流しようとしたら、思ってた以上に加速して異常な速力が出て焦ったフェン君です。いやー、次元空間を飛ぶのと空を飛ぶのは勝手が違い過ぎたね。戦闘速度本気で出そうとするとスピードが上がり過ぎて反応しきれんわ。

普段地球の空とかで飛ぶ際、俺は友達であるユーノくんの助言に従い身体を重量軽減術式で軽くして、溢れる魔力を断続的・連続的に噴射して推進力にしてたんだけど、次元空間って無重力だから重量軽減術式が変な風に働いちゃったのか、ものすんごい勢いで撃ちあげられちゃったんだわ。

すぐに術式への魔力供給をカット。推進にのみ魔力を絞って供給する事でことなきを得たけど下手したら次元の彼方へさぁ行くぞっ的な感じになってたかも知んなかったので、マジでくわばらくわばら。

まぁそれはさて置き、今の戦況は初戦はなんとか防ぎきったと言ったところ。

あれだけの数を相手にして被弾は一、脱落者が零というのは正直すごいと思う。流石は俺の持っていた膨大な基礎データを元に造り上げたアバローナだぜ、と自画自賛してみた。

だが実際は消耗が激しいのが実情か……いくら魔導師の力のテコ入れ出来たとしても中の人の魔導師ランク的は低いのだから、地力的な意味で限界がすぐに訪れてしまう。一応ある程度は内蔵されているバッテリーと魔力コンデンサにより補ってはいるがそれにも限界はある。

いまアルファからデルタまでが補給用ランチからバッテリーと魔力コンデンサへの充填を行っている。戦闘終了時には半分以上容量が残っていたが、念の為というのと彼らを休ませる為の処置だった。

バイタルデータを見る限りまだ危険域になった社員はいなかったのが幸いか。

魔力はコンデンサから、体力とかは訓練とか云々である程度なんとかなるけど、今回のようにミサイルや銃弾の嵐の中を戦うといった状況では、魔力や体力では無くて強靭な精神力が求められる。だがこういう精神的な方はその事象に慣れないことにはどうにもならんのだ。

アルファからデルタの連中も魔導師同士の魔法戦はいくつも経験し、場数を踏んでいただろうが、こういう無人機相手の戦闘をこれまで経験したことはほぼ無い。戦闘中は興奮によって恐怖を忘れられるが、休んでいる魔導師チームの感じを見た感じでは憔悴している連中が見受けられた。まぁ例外もいるけど、デルタとか。

――ともかく、この先長丁場は危険だろうと俺は焦りを感じた。

敵の攻勢が少し弱まったので魔導師チームが一時帰還している間、俺は疲れを知らないＣＭ－９ファントムたちの編隊と共に周辺警戒にあたっていた。実質相手は疲れ知らずの無人兵器なので常に気を張る必要があったからだ。

そう言う俺は無人兵器相手は自分の世界で慣れていたので、巡航速度を保ったまま通常基本装備（アルアッソー、Ｗ－シールド）に切り替えて、両肩にはガルヴァドススフィアを何時でも撃てる状態で敵が出て来ないかを監視していた。

魔法術式維持及び周辺感知の為の探査魔法の使用は疲れるが、手を抜く訳にもいかず先行するＣＭ－９のケツを追いかける。それと並列してＤＤＳ－１の被害状況もリニスから聞いていた。幸い被弾はしたがバイタルパートまでは到達しておらず、応急修理でこと足りるということだった。

《――以上…ＤＤＳ－１の…現在の状況…す》

「了解した…しかしノイズが酷いな」

『デブリの影響では？』

「この程度の残骸でノイズが起こるような安モンは買って無い筈だがね」

現在位置はＤＤＳ－１からさほど離れてもいない場所であるが、通信にはジジジと行った感じのノイズが発生していた。どうやら無人機の装置がまだ生きているヤツがいるらしく、そこから妨害電波を発信されているらしい。

【妨害電波を出している元を叩けばいいですけど……大量の残骸の中での発見はほぼ不可能ですね。ハイ】

俺とユニゾン中のリンがそう呟いていた。まったくこのガジェットという無人兵器を作り上げたヤツは嫌な野郎的な意味で天才だろうな。壊してもまだ影響が残るとか勘弁して欲しい。まぁ誰が造ったのかは知っているが何処にいるかわからんから文句の言い様もないがな。

《――ピピ》

その時、俺のヘルメットから電子音が鳴った。ＨＵＤを見ると先行偵察をしていたファントムの内の一機が、敵本隊へと接近することに成功したらしい。ＤＤＳ－１へと中継して欲しいのか俺にも映像が転送されてきていたので、どんな具合か見ようと通信ウィンドウを展開……してみたが、開けなきゃよかったと後悔した。

「……黒い、デカイ、ヤバい」

『デカイですね。何百機いるのか見当も付きませんねマスター』

【しかもうじゃうじゃ動いてるです。気持ち悪いです、ハイ！】

次元空間という広大な空間に球状に配置されたガジェット本隊は、まさしく群という言葉が似合う様相を呈していた。アレだけ叩いたのに初戦は前座と言わんばかりに群全体を覆うほどの２型が前衛に付き、後衛は全く見えない為に後詰めがなんなのか見当もつかない。

つーか増援が転送されてきていた。なにこのいじめ？

ヴィズがそのデータを既にＤＤＳ－１へと転送していたが、前哨戦以上に気張らないといけないことは明白だった。魔力はカートリッジが使えるし、体力は十分に余力を残してあるが用心に越したことはない。折角ここまで大きくした会社をつぶしてなるもんかいな。

……ふむ、気力だけはまだある様だ。

それにしてもここまで大規模な戦闘になるとは流石に予想外である。先の戦闘が最後の戦闘という感じなら、今頃フネの中で祝杯でもあげているところだが、残念ながらガジェットの本体はこの針路上に動かずに鎮座している。

しかし何故ガジェットたちは動かないのだろうか？今ＤＤＳ－１は戦闘で出来た敵機の残骸の衝突を抑える為にフネの速度を落としている。狙うなら戦術的に考えて今だろう。何かを待っている？それとも只単に戦術プログラムが未だお粗末な状態なのか？出来れば後者である事を願いつつ、俺はそのまま外周警戒を続行した。

しばらくしてＤＤＳ－１が追い付いてきたのをレーダー上で確認した。実を言うとＤＤＳ－１から離れすぎてて望遠でも見えなかったのだ。離れ過ぎ？いやいやこの距離でもガジェットが全速出せばモノの十数分の距離なんだぜ？ギリギリ遠くで撃ち落とすのは戦術的に正しいと本官は愚考致す次第ですね。

まぁそいつはさて置き、閃光が見えたことから恐らく周辺の残骸をＡＢＲ（連装バーストレーザー）で吹き飛ばしたのだろう。進路確保の為とはいえイーサンも良くやるなと思っていたら、戦域管制をしているリニスから俺に通信が入った。

《こちらマザーグース、レッドクリフ1聞こえますか?》

「バイカル湖の水の様にクリアーに聞こえる。何かあったか?」

《イーサン艦長の提案で最大射程に入り次第最大出力で砲撃を行いたいとの事です》

ふむ、距離的にはあと少しで射程に入るのか……よし。

「構わん。ぶっ放せと伝えて。座標はこっちから送る」

正直、相手の数はまだ増えている感じがした。近づかれれば対応が難しくなるのは明白。遠距離攻撃でもっとも威力があるのは反応弾であるが、こればっかりはバリバリの質量兵器である上にＮＢＣ兵器、大量破壊兵器なのである。

ちなみに純粋水爆なので放射能の危険は少なく、半減期がきわめて短い燃料を用いているので残留放射能の危険は低い筈……ではあるが、これらの保管や使用には当然ながら細心の注意が必要であることは言うまでもない。

そして反応弾の入手元は何時ものように廃棄世界である。何時ものように発掘でリサイクル可能な品を探していたときに発見し、当初は氷漬けで埋まっていた兵器群に紛れこんでおり、核が半減期を迎えていて使用不可能な状態だった。

本体自体が無傷だったことと、ハルケ式の魔法の力で核分裂に使う核燃料も核融合に使う重水素やトリチウムも自力で生成可能であった為に、こういうの作れるか実証してみたくなって、つい……錬金魔法便利ですとここで言っておくことにしよう。

とはいえ流石に管理局の御膝元でそれらをぶっ放す訳にもいかない。通常艦船も航路として使用してる場所を僅かとはいえ放射能で汚染したことがバレたら営業停止どころか下手したらもっとヤバい事に！てな訳で造ったけど死蔵してます。無駄だねホント。

それはさて置き、俺もガジェット本隊が見えるギリギリの位置にまで移動した。レーダーやセンサーも正確だがそれに観測情報も入れればさらに正確な砲撃が行える。タスクの一つに観測用を追加し、次元空間という何もないようで実は空間の歪みやら時間の流れが違うなどのデータを観測。リンのサポートで統合しＤＤＳ－１へ送りつけた。

『高エネルギー反応、方位はＤＤＳ－１から……流石は戦闘艦。魔導師何人分ですかねぇ』

魔導師なら言わんでも判るクラスの魔力反応を検知する。恐らくハイブリッド魔導砲でもある連装バーストレーザー砲に魔導炉からの魔力を収束しているのだろう。単純な威力や着弾範囲はアルカンシェルに遠く及ばないだろうがそれでも高い。

そう考えるが早いか数秒後、人なら数人は同時に飲み込めるほど大きな収束魔力弾頭が周囲の残留魔力素子と反応しプラズマを発生させながら数マイル隣を通過する。最大望遠で捉えたガジェットの群は着弾前に検知したのだろう。この膨大な量の魔力奔流に驚いて……いや違う？

そもそもガジェットは無人機であり驚くといったような感情的行動プログラムは元々持っていない。ならあの突然前衛の2型が慌てる様に“同時に後退”するのはどういう訳か？攻撃されることは読んでいた？――そこまで思考した時、ガジェットには厄介な機構があった事を思い出した。

「マザーグースへ、先の砲撃は失敗だ。繰り返す――――」

結果を予想した俺は魔力弾頭が到達すると同時に、そうＤＤＳ－1に通信を入れていた。着弾した魔力弾頭は2型の後に現れた何かを少し巻き込んだが、すぐに壁のようなモノにぶち当たるが如く放射状に四散して、そのままタダの残留魔力へと消えてしまったのだ。

「ちっ、ようやく登場ってわけか…」

『これまではウォーミングアップってわけですね』

【本選開始…プレイボールって感じですか？ハイ】

忌々しく睨んだ画面には、最大望遠によって映されたカプセル型の機械が投影されていた。破壊された機体が発した煙の中でセンサーアイが不気味に赤く発光し、蠢いているのが見える。カプセル状の機械…ガジェット１型というＡＭＦ搭載型無人機の満を持しての登場であった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ三人称

《マザーグースへ、先の砲撃は失敗だ。繰り返す――》

「社長はいったい何を言ってるんだ？」

――レーザー、着弾。

「レーザーがかき消された！？」

「そんなっ！威力は十分な筈じゃ！？」

「落ちつけ！仕事しろぉっ！」

――ＤＤＳ－１の中では動揺が広がっていた。

十分なチャージを行って最大出力で発射された砲撃が幾分か敵を巻き込んだモノの、思っていたほどの効果もなく霧散してしまったからである。

確かに最大射程ギリギリで威力は多少減衰することは予想されていたが、それでも高だが２ｍくらいしかない機械を破壊しつくすには十分すぎる威力を持っていたと誰もが思っていた。

「艦長！停船命令を！」

「いや…しかし…」

《そいつは止めておいた方が良いぞ》

船員の一人が停船することを叫んだが、開いたままだった回線にフェンの顔が写る。無表情だが彼の赤い目は鋭く細められて真っ直ぐと前を見据え、イーサン達には目もくれていなかった。だが冷たく感じるその視線は、見た者の背筋に水を垂らしたかのような感じを与えていた。

「どういうことだ社長？」

《――そっちからじゃまだ見えんか…１型だ。１型が馬鹿みたいに

いるぞ。その所為で2型が大量に生きている。今止まれば集中攻撃されるだろう》

「1型!?たかだか1型に艦船クラスの砲撃がとめられたってのか!?なんてこったい…」

イーサンは思わずパチンと自分の額を叩いた。確かに1型はアンチ・マギリンク・フィールド発生装置という魔導機器を搭載しており、それによって魔導師の使う魔法を完封することが出来る為、低位の魔導師にとっては鬼門であった。

だが高出力の砲撃魔法や質量のある物理攻撃には無力であるので、幾らなんでも艦船搭載魔導砲の高出力砲撃を抑えきるとは思えなかった。戦闘力的には魔導師一人でも数体は倒せるのでそれほど高くなかったことも彼らを困惑させる原因だった。

《――数と時間が連中に味方したんだ。ＡＭＦが高濃度・広範囲に、分厚くなるまで奴らは待っていたんだ。2型は1型を隠すだけの張り子のトラ。俺達は機械共にまんまと騙されたってことだな》

「こっちの砲撃は管理局の監視があるかもしれない手前、魔導砲タイプしか使用できないぞ…ホントどうすんだ社長?」

ＡＢＲもハイブリッド魔導砲なのでやろうと思えばすぐにでも機械式のレーザーへと切り替えることが出来る。だが当然環状魔法陣での収束やチャージが効かない分威力は劣る上に潜熱も溜まりやすく、おまけに質量兵器であるため八方ふさがりであった。

イーサンは別に管理局が掲げる質量兵器撤廃に全面賛成している訳ではないので、社長から許可さえ下りれば保管庫にて埃を被っているであろう数々のソレらを使う覚悟はあった。とはいえ流石にそれらを使えばＤＤＳ－１が、しいてはドミトーリがどうなるかは想像に難くない。

艦長を任された身として、一社員として、もはやホームと呼べるＤＤＳ－１（このフネ）が無くなってしまうことは戸惑われたのである。そのことを感じ取ったのか、フェンは少しだけ、本当に少しだけ口角を緩めて笑みを作った。

《心配しなくてもいい。フネは落とさせないし、任務…仕事も達成させる》

「だがどうする？魔導砲じゃ砲撃は効かないんだろ？かといって社長の方針じゃ質量兵器の使用はご法度。方針転換でもするのか？」

《それが何を意味するのか判っているようだからとやかく言わんが方針は変えない。それに攻撃、効いてない訳じゃない。ただ凄まじく威力が減衰されただけだ》

ＤＤＳ－１からの砲撃は一見すると完全に防がれたように見えていたが、実際は威力を減衰させられただけであり、その証拠に減衰しきれなかった魔力砲撃にあの壁のように大量に浮かんでいるガジェットが巻き込まれていた。

相手の数が大量であり、先の砲撃はバーストモードで単発だった

為に効いていない様に錯覚してしまっただけなのである。魔力結合・魔力効果発生を無効にするＡＭＦだが、ＤＤＳ－１の撃つＡＢＲの魔力結合を解除するにはまだ濃度が足りなかったのだろう。

「――なら、攻撃は続行で？」

《それが無難だろう…撤退はまだ出来ないし――魔導師チームは？》

「全員休息を終えて発艦準備に入っています」

フェンからの問いに戦域管制をしているリニスはそう返していた。アバローナにはこういう時の為に対ＡＭＦ搭載兵器用試作武装を事前にマッチングさせたのだ。ＡＭＦが高濃度であるがアバローナは物質として存在している鎧のような物。解除される恐れはない。

ただＡＭＦ下では魔導技術で動かしている機器が機能停止や作動不可になる可能性があったが、中枢部は内部の魔力で満たされた部分にある上、アバローナ自体は機械で動かしているので精々がＡＭＦ影響下で放出タイプの魔法が使えなくなり、０Ｇパックが作動しなくなる程度であろう。

伊達に強化外骨格として作られている訳ではない。確かに駆動方式は魔導と科学のハイブリッドだがそれは地上での話であり、無重力空間において重量軽減に使われている魔法はあまり意味がないのだ。人工筋肉は科学によって動いているのでＡＭＦ影響下でもキチンと作動する。

……狙ってたわけじゃなくて、魔導回路系に使われるレアメタルを使用しない様にコスト抑えたらそうなったらしいのでまったくの偶然なのだが、それが今回生かされているとなるとドミトーリの技術力は馬鹿に出来ないであろう。

《それじゃあ全員試作武装装備で出るようにと伝えてくれリニス》

「了解です。ただバイタルを見るに全員まだ回復しきっていませんので注意を」

《……社長が踏ん張るところだな…通信終わ――なにっ!?》

フェンは通信を終えようとしたその時である。これまで様子を見るかの様に浮かんでいたガジェット1型達が突如として移動を開始。球状であった陣形が変化し、ボウルのような凹レンズのような陣形へ変わっていった。

一体何がとドミトーリの誰もが思ったその瞬間。ＤＤＳ－１に船外温度急上昇の警報が鳴り響いた。船外温度の上昇は止まらずに装甲板が融解して消滅する。だれもが何が起きたのか判らずに、フネに走る何かが爆散した衝撃でたたらを踏んでいた。

「どうしたぁっ！何が起きたっ！状況を報告しろ！」

「て、敵の攻撃により第一第二装甲板融解！左舷側で船外作業にあたっていたシランが消滅！」

「ＡＢＲ大破っ！魔導式ＣＩＷＳの半数が中破及び消滅！使用できないっ」

次々と上がる損害報告。どれもこれも多勢に無勢の状況下では最悪に近い状況。だが次の報告が上がる前に船内の照明が急に消え非常用電源に切り替わった。

「次元航行炉、緊急停止（スクラム）！！」

「補機（サブ）の魔導炉はどうした！」

「こっちは無事です。すぐに切り替えを――」

「第２２ブロックに火災発生！犠牲者多数！ダメコンと救助急げっ」

相当なダメージを負ったＤＤＳ－１は次元航行炉が緊急停止をおこしたことで立ち往生に近い状態となる。攻撃を受けたと思われる左舷側の装甲は殆どが剥がれおち、其処彼処から黒煙が上がり、時折爆発まで巻き起こっていた。

これ程のダメージを与えた原因は何か？それはガジェット１型の放ったレーザーである。但し、タダのレーザーではなくアルキメデスの鏡の原理を応用した収束凝集光であった。鏡を凹型に並べて光を集中させると集中させた点が熱くなるのと同じ原理。

出力的には艦船搭載のレーザーには遠く及ばないシロモノしか搭載していない１型であったが、戦場が特に何も障害物のなかった次

元空間であった事、そして大量のガジェットが集まっていた事、この二つがＤＤＳ－１に大打撃を与えたのだった。

《マザーグース！応答しろ！マザーグース！》

「こちらマザーグース、此方は無事です。レッドクリフ１は？」

先の攻撃で途切れた通信機の回線にフェンの通信が入る。リニスは衝撃で外れかけたヘッドセットを直しつつも彼からの通信に応じていた。フェン自体はレーザーの交差した位置から大分手前であった為に装甲シールドで防ぐ事に成功し無傷だった。

《こっちは無事……だがまずい事に敵が動きだした。迎撃は出来るか？》

「っ！ガジェット本隊が移動開始？！第一波接近…速いっ！」

「チッ！魔導師チームと修理に戻っていた機体も全部出せ！もたもたしてると食われるぞ！――社長、少し戻ってくれ、手が足りない」

イーサンからの要請にフェンはフムと表面上は冷静を保ちつつ、数秒だけ思考した。そしてすぐに答えを出したのかイーサンの方を見据えると――

《――いや、そっちはそっちでなんとか頑張ってほしい》

――淡々とそう言い放っていた。

「なっ！――いや、まてよ。そういうことか社長？」

タダでさえフネが大変な事態に陥ってしまった時なのに、最上の戦力である社長が自分たちだけで頑張れという。その事に一瞬激昂しかけるイーサンであったが、位置情報を表示している画面を見てすぐに怒りが鎮火した。

《まさか連中の侵攻ルートと重なるとはな。なんとか撹乱してみる》

「――仕事の撤回は、出来ないのか社長」

《生憎、まだマザーグースは落ちていないからな。修理する時間を稼ぐ…集中したい。通信を切るぞ？幸運を祈る》

「ちょっとまて！社長っ！」

「通信、切られました」

あんのやろう、とイーサンは艦長席の肘置きにガンと手を叩きつけていた。自分の雇い主であるあの幼い姿をした存在は自分の価値というのを判っているのだろうか。無茶ばかりして…それ以上にお前死んだら給料でねぇだろう！とイーサンは心の中で叫ぶ。

「リニス！魔導師チームは本船のダメコンが終わり次第。社長の援護に向かわせろっ」

「全員？」

「全員だっ！アレが死んだら給料でないだろう？それにアンタの場合は死なれたらもっと困るだろう？」

「確かに…魔導師チーム全員発艦！ここが正念場よ！全員気張りなさい！」

まるで竜のように陣形を伸ばし突撃してくるガジェット本隊。ＤＳ－１のクルー達は先に接触した社長フェンの戦闘による閃光に目をやりつつ、己のやるべき仕事を果たすべく動き出す。彼らは民間軍事企業、何よりも仕事の達成こそが彼らの誇りであった。

例え、それにより同僚が死んでも彼らは戸惑わない。

会社が無くなるよりマシだから、給料が無くなるよりマシだからだ。

ドライだが合理的な意識の元に統合されたドミトーリが今、反撃を開始する。

「無事に航海が終わると思うたか！中編2」（後書き）

……遅れて申し訳ありませんでした。

いやホント8月一杯執筆出来ず、書き方忘れてたのを掘り起こして書きましたぜ。
しばらく書かないと書けなくなるってマジ辛いです。

まぁそれはさて置き、今回もガジェット無双です。
ガジェットの強さは原作と変わらないのですが、人海戦術の脅威推参って感じです。
つか、数集まるとＡＭＦの濃度上昇ってやっぱり詐欺だよね。魔導師勝てないじゃん。

それではまた次回にノシ

「無事に航海が終わると思うたか！中編3」（前書き）

※遅れてすみません。それと長い割に話は進んでいません。ゴメンナサイ。

「無事に航海が終わると思うたか！中編３」

「無事に航海が終わると思うたか！中編３」

――妄想戦記２ｎｄ　Ｍｉｓｓｉｏｎ――

Ｓｉｄｅ三人称

ＤＤＳ－１がガジェット達の収束レーザーにより中破する少し前。ガジェットとの戦闘空間から離れた場所からＤＤＳ－１を観察している存在がいた。

「んー、予想外に頑張るわねぇ。アレだけの大軍なのに落ちないなんて」

だれもいない筈の空間。ＤＤＳ－１が見えている位置にいることから確実にＤＤＳ－１の策敵圏内に居る筈のその存在は、観察対象に気付かれることなくそこに居た。光学・機械式センサー・魔法式センサーのいずれにも引っ掛からない完全なステルスを纏った状態で目の前の戦闘空間を眺めていた。

飛び交う光線、爆発するミサイルの閃光、デブリに変えられるガジェットたち。数的に有利な筈のガジェットが徐々に数を減らして

いるのだが、彼女は眉一つ動かさず、成り行きを見守る様に戦場での情報収集に努めている。時折大まかな指示をガジェットに出すが、あとは戦術ＡＩに任せて参加する気はないようだ。

キュイインと彼女の目に内蔵されたズームレンズが細められ、戦闘の状況を事細かに映しだし、その情報を彼女は纏めていく。常人では見ることは叶わない筈の戦況も、機械化された視力を持つ彼女にとっては隣の庭樹にとまる小鳥を見るよりも遥かに容易い。

「ブースター付きガジェットに追随できる対空砲。複数の対象をも巻き込む主砲クラスの魔導砲。無人戦闘支援機に加えてシランシリーズにアバローナまでいる」

そんな常人を遥かに超えた機能を持ちつつ、見た目は普通の眼球と変わらないセンサーアイが捉えていたのは、刻一刻と変化していく戦場の光景である。圧倒的な数の無人機《ガジェット》を叩き落とす少数の魔導師たちの戦い。題目でも付けるならこうであろうか。

ただの護衛程度なら容易く数の有利で押し切れるそれを、ただ冷静に、倒すべき敵、いやさ障害として排除しようとする意思。機械的に効率よく障害を排除していくその姿は、感情に左右されやすい魔導師という存在が闊歩する次元世界では少しばかり異質である。

もっとも彼女らも別な意味でとても機械的なのだが……それはさて置き、この光景を見ていた彼女はほぅと溜息を吐いていた。

「流石はドミトーリの移動する本社、戦力が違うわねぇ。あわよくばガジェット達を使って拿捕とでも思ったけれど……」

どうやらガジェットを当て馬に用いてドミトーリの戦力評価を行っていたらしい。これにより失われていくガジェットはかなりの数だが、次元世界に派遣されているガジェットの規模で考えれば極一部なので問題はない。ぶつぶつとまるで一人ごとのように見たままを口ずさんでいく。

「う～ん、やっぱりガジェットは所詮機械ってことかしらね～。このままじゃどうあがいても相打ちがいいとこ。それに例えあのフネに反応があった遺失物を手に入れたとしても、このままじゃ割に合わない。――それにしてもただの一企業にしては随分と手ごわいじゃない」

相手が通常の輸送次元航行船なら、例え管理局の護衛がついていても、この戦力なら押し切れる。特に飛行技能を持たない魔導師にとって闘い辛いことこの上ない次元空間内戦闘なのだ。数で押し切ってなだれ込み、フネの内部に侵入させるなり破壊するなりして制圧すればいいのだ。

ＤＤＳ－１のように次元空間内で対空弾幕を張りつつ、外骨格装備とはいえ魔導師と無人機を外に出して対抗するという方がおかしいのである。近づけようが飛びこませようが、取りつかれる前に豊富な魔導火器で落とされ、あわよくば近くまで取りついても甲板にいるシランシリーズ達によって撃破される。

しかも今回、時折小さなアバローナのような白い機体が、中距離と遠距離において絶大なる火力を発揮し、かなりのガジェットを残骸に変えていた。ガジェット達もプログラムに従い最大脅威に設定したのか集中しているが落とせそうもない。新型か試作機か、とにかく彼女はその白いヤツのデータを集めていった。

それにしても、あまりの身持ちの固さにこれまで集めたデータを見ていた彼女は溜息を吐いた。必要なデータは徐々に集まりつつあり、データ収集だけが目的なら殆どの目的を達したとも言えた。だが、データ収集は正直二の次。本命は別のところにある。

「用意した千機の内、すでに前衛２００機を破壊。ドクターの命令で襲ってみたけど、アレから遺失物の発現する兆候は無し。もう少し追い詰めないと無理なのかしらねぇ」

そうわざわざ各次元世界に散っている戦力を集めてまで出張ってきた理由は、ドミトーリ社が所有しているＤＤＳ－１から感知された遺失物、すなわちロストロギアが放つ固有な反応をガジェットに搭載された特殊な装置がキャッチしたからである。

過去何度目かの衝突でＤＤＳ－１からキャッチされていた反応であったが、その反応が妙に不安定であったり検知できないことも多々あった。反応がもっとも強く検知されたのが戦闘時に限られていたので、戦力を集めて調査をしに来ていたのである。

戦闘などのなんらかの因子により検知されるロストロギアの反応。それらの収集を次元世界規模で密かに行っているガジェット操る彼

女らとしても、数少ないロストロギアがあるとするならそれを手に入れようとするのは当然であった。

「――調べるのも私たちの仕事だろう」

ぶつくさ言っている彼女のすぐ近くから、ステルスを張っていた彼女の喋り方とはまた違う感じのする口調が届いたことで彼女は端末を操作していた指を止める。

姿は隠されているため見えなかったが、この場にはもう一人存在していたようだ。次元空間内であるのに言葉が聞えるというのも変な話だが、念話か通信か何かなのだろう。

「引き続き攻撃は続行だ」

「え～、そろそろ面倒臭いから一気に片を付けたいんですけどぉ」

「それでは意味がない。クアットロ、ドクターからの命令を忘れたか？」

「まぁトーレ姉様がそうおっしゃるのなら」

目的の為とはいえ、ある意味で生ぬるい戦闘というのはやる方も疲れる。

「……でも少しくらい難易度をあげてもよろしくて？」

「それくらいなら良いだろう。どの道あの程度では終わらんようだ」

「了～解～♪」

クアットロと呼ばれた彼女はトーレから許可を受けて、最大出力と思われる砲撃が防がれたことで動きを止めていたＤＤＳ－１を破壊するように、ある戦術を直接ガジェット達に送った。これまで様子見が優先命令だったガジェット達の命令が一斉に書き代わりＤＤＳ－１へ一点集中レーザー攻撃を行ったあと進攻を開始する。

ガジェットからの一点集中攻撃によりかなりのダメージを負ったＤＤＳ－１は、レーザーの熱により融解した装甲をまき散らしながらも後退。アレだけの攻撃を喰らってまだ動いているのと驚く半面、思いつきながら中々良い攻撃が出来たわ、とＤＤＳ－１の被害状況を見て彼女は口角を歪ませて笑っていた。

「このままだとすぐに堕ちるわねぇ。期待はずれだったかしら～」

大部分の魔導兵装を失ったであろうＤＤＳ－１の回りには、アバローナや無人機が集結しつつあるが、光波シールドすら失った次元航行船は動かないカモと同じだ。狩る側は落ち着いて引き金を引けばいいのである。とくに数的有利が揺らいでいない今、ＤＤＳ－１の生存は絶望的だと言えた。

いっその事フネを放棄して脱出してくれれば色々と楽なんだけど、とクアットロは考えていた。実のところ彼女は戦わずにして勝つ方

が好みであり、こういった戦闘などはあまり好かないのである。策を巡らして勝つ軍師とか参謀という感じであろうか。そういった考えを持つ彼女は幾ら指示されたとはいえ、やはり戦闘は嫌だった。

降伏勧告でもガジェットを通じて出してみようかしらと彼女が思ったその時。

「あれは――さっきから飛びまわっている高性能機。囮のつもりなのかしら？」

白いアバローナに似た小さな外骨格、ヴィズを展開しＢＡ（バリアーマー）を纏ったフェンがガジェットの大軍が進む進路上に飛びだしてきた。それを見たクアットロが思わず呟いたのも無理はない。

外骨格というモノコックにＢＡの運用データをブチ込み、単機能パーツ重視構想を元に調整を受けたアバローナは、言わばＢＡの廉価板にちかい。それ故、外見的特徴はアバローナの外見と非常に似通っているのである。

だがどちらが先に表に出ていたかと言われれば、公式にはアバローナの方が先であり、彼女がＢＡをアバローナの新型か試作機か何かと勘違いするのも致し方ないことだった。時間さえあればアレがアバローナとは別物である事が調べられたであろうが、今戦闘をしているこの時に見ただけで判る筈もない。

というか彼女の脳内で、ＢＡの大きさが子供サイズなので、管理局に勤める少なくない子供の魔導師用に開発した新型なのかもとい

う勘違いに発展していたりするが、関係がないので置いておくことにする。流石にそれは幾ら人手不足とはいえ人道的に認めないだろう。

「まさか、単騎で殿を務めるつもりなの？幾らガジェット相手でも舐められたものね」

「――――……どうだろうな。あれは全部判った上での行動ではないのか」

足止めの為に進行ルートに迷うことなく躍り出たフェン。普通なら無謀とも言えるし、自殺行為と言われても仕方がない行為だった。クアットロの目には苦し紛れの自己犠牲的な行動にしか見えず、人の感情を忌避している彼女にとっては見ていて気持ちが悪い。

「トーレ姉さま、判るのですか？」

「なんとなくだが、な――――接触するぞ」

彼女たちから見てあの白い外骨格の力は、これまで防衛の時に発揮されていた時とは一線を画していた。魔導師にとって天敵であろうＡＭＦの中をまるで従者のように追従する無人戦闘支援機の編隊と共に飛びまわり、怒涛のごとき魔法攻撃で数十ものガジェットを破壊していた。

その派手さに多くのガジェットが反応し、飛びまわるソレへと殺

到していくが、それを見てもまるで速度を落とさずに、それこそ踊っているかの様に隙間を駆け、飛び、爆炎の中を動き続ける。防衛よりもむしろこっちの方が得意なのではと見ている者に思わせるほどだった。

ＡＭＦ影響下の中で魔導師が無人機を引き連れているとはいえ、単騎で駆けまわり魔法を使うことがどれだけ無謀で愚かしい事か。だがその中であえて魔法を使いＡＭＦに当てて中和し、それによって一瞬だけできた“道”のような隙間の中に攻撃を潜らせ、あるいは周囲のファントムたちがその“道”を使いガジェットを破壊する。

ＡＭＦにより有効範囲が以上に狭められる為に、必然的にガジェットのすぐ近くへと接近する必要があるが、レーザーにミサイルに機関砲が雨あられと降り注ぐキルゾーンをくぐり抜けて、懐とも呼べるＡＭＦ濃度がさらに濃い空間で魔法を使うという勇気。いやもはや狂気を持つ人間が世界にどれだけいることだろう。

「それにクアットロ、見ろ。当て馬の調査は無駄ではなかったらしい」

「これは――遺失物反応がアレから？」

キュイインと機械的な響きを挙げ、再びクアットロの視線が飛びまわるフェンへと向いた。遺失物を探知できる全てセンサーの反応が、あの白い魔導鎧から発せられている事実。なるほど遺失物ならあの強さも…と勘違いする。

「しかも複数の反応。やはりドクターの予想は当たりか」

「……では捕縛しますか？それともお姉様が戦ってみます～？」

「戦ってみたいが、ドクターの指示の方が優先だ。まだ姿を見られる訳には行くまい」

「そうですねぇ、それではそのように」

＊＊＊

Ｓｉｄｅフェン

ＤＤＳ－１との通信を切った後、俺はこれから何をすべきかを思い浮かべた。

やること自体は簡単だ。一斉に動き始めたガジェットたちの足止めをするだけである。足止めを行うにはこっちに連中の注意をひきつける必要があるが、それはカートリッジなり収束砲を撃ち込むなりして魔力を強めれば問題無い。

それよりも問題なのはＡＭＦだが、アルアッソーとグロウタスクの魔力弾頭は多重弾殻にできるしＣＭ－９ファントムも僚機として追従している。高濃度ＡＭＦ影響下では装甲シールドの強度が下がるか無力化があり得るだろう。だが気を付ければ何とかなると俺は

考えていた。

『エネミータリホー、１１時下方より接近。敵数は暫定２００、近い順にマークします』

【ＡＭＦ影響圏に入りました。主殿、濃度の高い場所への接近のし過ぎに注意してくださいです】

すでにこの位置からでもＡＭＦの影響が出始めていた。だが距離があるからか濃度が薄い為、影響は最小限で済んでいた。となれば、まずは此方に注意を引きつけてやらねばなるまい。装備はアルアッソーと……そうだな、アルアッソーと同じくレールブラスターが使える長距離兵装デバイスのグロウタスクがいいか。

左腕のＷ－シールドを収納し、格納領域からグロウタスクを呼びだす。この左手に持っていたシールドは結構大きい盾ではあるが、材質的には初期頃のＢＡを形成していた複合材で造られた板である。装甲シールドを纏わせていないので、実質タダのフェイクであるともいえ、装備していてもしょうがなかった。

Ｗ－シールドに魔法陣が浮かび光を放ちながら消え、その光が消えるとＷ－シールドの代わりに左手に自分の身長と比較すれば大きなライフルが出現した。重さこそ感じないが自分用に調整されたそれは収まるべき場所に収まっているという感覚を与えてくれる。混沌とした戦闘の中でも感じられるそれは実に頼もしいと思う。

「――――いくぞ！」

『【了解！】』

背中の加速用バックパックであるジェットパックが唸りをあげるように魔力を噴き出して一気に加速した。追従しているファントムも視認出来た敵へ目掛けダイブする。

『敵機散開』

「…遅い」

【ガルヴァドス・スフィア、オートエイム】

両肩のスフィアからガルヴァドスが射出され、敵編隊の中心へと飛びこみ炸裂して敵を数機巻き込んで破壊した。だが魔力爆発がＡＭＦにより減衰されて威力は大幅減。

しかし魔力爆発による魔力の拡散により一時的にＡＭＦ濃度の低下が起こり、魔導兵装しか搭載していないファントム達でも攻撃に移れるようになる。

「――ゆけっ！ファントム！」

それを待っていたかのように飛び出したファントムたちがすれ違いざまに速射魔導砲を撃ち込み、瞬く間にガジェット２型が爆散してゴミへと代わっていく。ファントムはその名の示すように亡霊の

ように俺に追随し、邪魔な敵、死角の敵を屠っていった。

だが大量にいるガジェットを数機落とそうとも、全体から見れば埃を払ったようなもの。四方八方、上下左右、あらゆる方向から迫る2型をグロウタスクで撃ち、アルアッソーで薙ぎ払い、魔法で強化した脚部で蹴り穿ち、時にオートクレールで引き裂き、ガルヴァドスで焼き払ってもほとんど減らない。

ＡＭＦ影響圏の中をファントムと共にただひたすら飛び続けた。止まれば集中砲火を浴びせられる。恐らく死ぬことはないが、ここで足止めが出来なければ後方にいるＤＤＳ－１を砲火にさらしてしまう。それ故ひたすら派手に、無謀に、敵陣の中を飛び続けた。

「――――らぁッ！！」

速度を限界まで出したまま1型に体当たりをかまし、力任せにアルアッソーをブチ込んで内側からぶっ放す。銃型デバイスだからって遠距離だけしか使わねぇってわけじゃねぇぞ！内側からぶち破られてスパークするガジェットは、爆発せずに部品と血のようなオイルをばら撒いて分解した。

還り血のようにオイルを全身に浴びながらも、壊した1型の残骸を蹴り上げて八艘飛びしつつスラスター全開。上方へと飛びあがった途端、ちょうど今居た場所を赤い物が通り過ぎる。背面を狙った別機体のアームケーブル。その先端のアンカーが1型に食い込むのを横目に、目に映った2型にグロウタスクを撃ち込んだ。

命中、爆散。敵編隊の何機かを巻き込んだ2型の爆風を突き破り、

さらに敵機を落とすためにファントムと共に同時攻撃。ガルヴァドスを周囲にまき散らした。多くの敵機を巻き込めたが、反撃と言わんばかりのミサイルとレーザーの雨あられが、運悪く僚機のファントムの一機を食い散らかす。

標的を失った撃ちっぱなし迷子（ミサイル）がすぐ近くの俺に照準、ロックオンされた。固形燃料を燃焼させ爆発的な加速で迫るミサイルが接近してくるのを、マルチタスクで分けた思考で確認。魔力残照の排煙が止まらないグロウタスクを正面の敵に撃ち続けながら、アルアッソーを背面へ向けて迫るミサイルを狙う。

多数の思考を同時に処理し、行くべき道を判断する技術。限界起動・戦神楽を使い敵とミサイルを同時に撃破し、予想される敵レーザー射線の網をくぐり抜けた。時折装甲シールドを焼くレーザーにより、ヘルメットの中にバチバチというシールドと反応したレーザーのプラズマが走る音がより意識を戦闘に、戦いに集中させた。

だがそれでも網の目のようなレーザー弾幕と、敵味方ほとんど識別することなく放たれる追尾ミサイルが止むことはない。執拗に追いかけてくるミサイルのキルコーンから逃れる為にファントムと共にビーム機動をとる。速度を落とさないままの９０度真横へのスライドに、魔法で抑えているとはいえ全身の骨が悲鳴を上げた。

それでも別方向から来るミサイルを迎撃しつつ、さらに垂直に飛びあがるような機動をとった事でアバラから嫌な音と痛みが走った。これまで生きて来て何度目かになるかわからない骨折もこの身体になってからはすぐに治るが痛みは変わらない。何処までも痛みは痛み、特殊な性癖でもないと痛いモノは痛い。

『上方、下方に高熱源！ミサイル！』

「ふぅっ、ぐぅ……」

痛みがあっても止まることは許されない状況。立て続けに行った連続ループに似た回避機動。迫るミサイルに無意識の内にＥＣＭを使い、それでもダメな物をガルヴァドスをばら撒いて撃ち落としつつ止む事のないレーザーの網を躱す。

それは魔導師でなかったなら…いや魔導師であっても誘導ミサイルを使うような無人機に対して慣れていなかったら、数秒も持たずに命が絶たれる世界。一つの操作ミスがたちどころに自分が手にかけて来た連中と同じ運命を辿らせる刹那の時間。

常人ならば恐怖して発狂してもおかしくないこの時間。だがそれを肌で感じた時、俺はどこか安堵感に包まれたように感じていた。やはり戦場はいい。自分で吐いたものだが血の匂いと硝煙と戦闘による魔力残照が漂う空間、実にいい。

――うっすら感じていた乾きにも似た苦痛が癒される。

「――オーバーブースト、全開っ」

視界外に察知していたミサイルが爆発する直前に、背中に背負っ

たジェットパックのリミッター回路を解放する。戦闘の興奮で昂った魔力がジェットパックの魔導推進機に流れ込み蒼い噴出炎を吐きだして爆発的な推進力を発揮する。

途端全身からギシッと嫌な音がした。強化魔法で強化していても瞬間的な負荷が許容範囲を越えたようだ。その直後迫っていたミサイルが一斉に爆発。その衝撃波をもろに浴びることは避けたが、意識が一瞬飛ぶほどの加速と全身の骨にひびが入ったような痛みに悶絶する。

されど止まらず、動き続けながらサイトにロックした敵にアルアッソーを向けていた。ＡＭＦで阻害されたのか威力が減衰した攻撃だが、電磁加速を与えられた多重弾殻弾はその本懐を遂げてガジェットを破壊する。だがヘルメットに表示されたＨＵＤは止むことのないミサイルの所為で警告表示のまま真っ赤のままだった。

『高熱源反応。レーザー照射を受けています！装甲への熱ダメージ上昇！』

【ＡＭＦの影響で多重プロテクションも装甲シールドも不安定ですっ】

警告音が鳴りっぱなしのヘルメット、思考操作で警告音のボリュームを下げながら、表示されているレーダーを見て舌打ちした。ＤＤＳ－１が思っていたよりも後退していない。これだけ濃い戦闘をしてきたのに、時間的には数十分も経過していない。イライラで無性に薬草煙管が吸いたくなる。

だがそれもピシピシという音が響いてくれれば、嫌でも現実に目を向けねばならない。まるでガラスにひびが入る様に攻撃を受ける度に亀裂が走る防御魔法。術式がＡＭＦの所為で不安定になり、敵の攻撃で限界に来ていたのは俺もわかっていたので、すぐに貼り直せるようにカートリッジを一発消費する。

直後シールドにミサイルが接触し吹き飛ばされる。防御魔法で無傷だったか質量的に軽い身体は衝撃を吸収しきれない。バランスを崩すのを待っていたかのように、交差するレーザー攻撃や納豆の糸でも敷いたかのような濃密ミサイル攻撃が次々と着弾。防御魔法の許容範囲を越えたことで術式が強制解除された。

『高熱源、２時方向からミサイル！』

被弾した事でバランスを崩した俺は姿勢制御で手一杯。迫るミサイルの警告音が響くが俺に出来たのは手に持ったアルアッソーを向けるくらいだった。つかやっぱり数多いよ！死なないけど死んじゃう！色んな意味で死んじゃうわっ！

だがミサイルは止まらんし、直撃食らうと痛い。なので仕方なしにレールブラスターをぶっ放して迎撃しようとしたその時――

《――――バァンッ》

「うぎっ！」

一瞬解けた多重プロテクション、そして途切れた瞬間飛び込んだ近接信管で炸裂したミサイルの破片が複数左手に命中。破片はＡＭＦでもろくなっていたＢＡに穴をあけ、より小さな破片がその穴に上手い事飛びこみ腕を抉った挙句貫通。激痛が走る。　音速は軽く超えていたであろう破片により、３センチほどの穴が腕に空いてしまった。

うわぁ、親に貰った身体に傷がぁ～というのは今更である。最大で腹に大穴開けたことがあるからな。それよりも身体は子供のままである以上、千切れて落ちなかったことが僥倖だった。こんな乱戦の中で腕を落っことしたら、絶対に二度と見つからないだろう。

どっちにしても今の身体ならこの程度の傷はすぐに自然治癒される筈なので、俺は痛みを意識しない様に意図的に遮断、まぁ焼け石に水であったが痛みから思考を逸らすことで痛みを緩和し、特に傷口を見ないでそのまま戦闘機動を行った――そして、その直後違和感を覚える、異常が発生した。

（……なおって、ない？）

敵の攻撃から回避しようとした時に、まるでシャボン玉を吹いたように浮かぶ水玉が見えた。だがその水玉は全て赤黒い色をしている。当然だ。それは俺の腕から噴き出していた血液なのだ。それを見た時、背筋に氷柱が突き刺さったような感じを覚えた。

普段ならば消えている筈なのに、消えぬ違和感を覚えたのは気圧の差でＢＡからまるで水風船に穴を開けた時のように、貫かれた腕から噴き出す血のせいだった。すぐに治る筈の傷が治癒されない。

意識した事で痛みも緩和されず、驚きと共に痛みが再発する。

『マスターッ！？』

激しい戦闘機動をとった事で、凄まじいGで血液が治癒されず開きっぱなしだった傷口に集中し、それこそ蛇口を思いっきりひねる様に傷口から血液が噴き出していた。頭へ回る血液が減る。この間、時間にして僅か数秒であったが、失血量がレッドゾーンに突入した事で意識がズンと暗くなる。

この今まで起きたことがなかった異常事態にうろたえたが、それよりも噴き出した血液の量が思いのほか多く、すぐに視界が歪み始めた事に動揺した。元が人間であるこの小さな身体の血液量はそれ程多くはない。それ故、失血時における許容範囲も狭い。

自身の持つレアスキルの特性と偶然により、闇の書の意思を取り込んで融合し、そのプログラムにより魔力による欠損部を再生し治癒する力を持つにいたった。その事で傷がすぐに治る事を当然と思いこんでいた。さらにハルケ式による水流操作を怠った。そのツケが回ったのか……。

『――――リンもフィードバックで…クッ、血がコレ以上漏れないようＢＡ直さないと拙いッ！――――目を覚ましてください、マスター！』

ヴィズが何か叫んでいたが、何と叫んでいたのか俺には聞えなか

った。止血し忘れて意識が朦朧としていたのだからしょうがない。一応何が起きていたのか見ていたが、手足が鉛のように重かった。制御を失った俺はまるでボールが跳ねるように、周囲のガジェットに激突し錐揉み回転しながら明後日の方向へとぶっ飛ぶ。

幸い貼り直した多重プロテクションが間に合い、ヴィズが魔法の術式維持を肩代わりしてくれていたお陰で防御魔法無しで放り出されるという事態は起きなかった。色んなガジェットに激突して規則性のない動きを意図せずとれた事も幸いしたのだろう。１型が放ったレーザーが掠ったものの直撃を受けなかったのだ。

その僅かな時間にヴィズがＢＡに開いた穴を修復し、血の流出が止まるのと同時に瞬く間に腕に開いた穴が消え意識が回復する。その刹那視界に捉えたのは、上下左右前後ろ全ての逃げ道を塞ぐガジェットの群だった。完全に囲まれて逃げ場がナッシング。冗談抜きでヤバい。

そうして俺が姿勢を整える前に包囲していた群から１型が４体飛びだし、ケーブルを伸ばして四肢を拘束した。ギリギリと絞めつけているようだが装甲があるのでそれは平気だった。問題は引っ張られるのと曲がってはいけない方向に関節へ力が加わっている事だ。超痛い。

そのガジェット達の向こうでは、俺の攻撃が途切れた事でＡＭＦ影響下での攻撃が行えず、回避機動しかとれないファントム達が２型によって次々と撃墜されていた。爆散する閃光により包囲している敵ガジェットの姿がハッキリと目に写り、ガジェット達が一斉にパイロンのミサイルを解き放ったのを見た。

『――2型からミサイル！全方位からミサイルッ！よけきれません！』

――――ヴィズからの警告にもはや返答する猶予も無い。

意識がなんとか戻った事で再び動き出していた戦術用に張ったマルチタスクが、次々と「もうダメだぁ、おしまいだぁ」「逃げ道はない…」と白旗を上げていくのを俺は冷静に処理していた。極限にまで昂った集中力は大量のミサイルの内のどれが一番早く自身に到達するのかを見つけ出し、無意識の反射とも呼べる域で身体が動きだす。

両肩にガルヴァドス・スフィアの形成、グロウタスクの収納とジリーノの展開、そしてラージカートリッジの使用による魔力強化と身体強化を行いつつ、強化された肉体でケーブルを一気に引きちぎってまだ腕にケーブルがついていたがそのままアルアッソーを構え、多重弾殻でも何でもないただの魔力弾を乱射した。

――――この一連の動作をコンマの中で終えて、迫るミサイルの迎撃をする。

だがこれ程の数、一人で押し返せるだろうか？――――いや“だろうか”じゃない“やる”のだ。でなければここで俺は引き裂かれゴミへと変わる。タダの怪我であなったということは、もし今身体を引き裂かれるような、もしくは致命傷と呼べる傷を負えばどうな

るか想像に難くなかったからだ。

しかし、一斉発射された全てのミサイルを叩き落とすことは不可能だった。人型である以上手は二本。いくら迎撃の速度を上げようが限界があった。防ぎきれない波状攻撃を前に、俺は逆噴射で後退しつつ迎撃を諦めて多重プロテクションへの魔力を高め身構える。

弾幕が途切れたところへ、ミサイルが集中し――――炸裂。

だが衝撃は思っていたより少なかった。ミサイルは直撃せずにはるか手前で“迎撃”されて爆散したからだ。そして俺の目の前には金属質な壁と防御魔法の魔法陣。え？なんで？と思ったが、よく見ればその金属の壁は良く知っているもの。

《……よう小さな社長（リトル・プレジデント）。まだ生きているか？》

それはアバローナの背中だった。気が付けば自分を守る様にして、円錐の突撃槍に似た対ＡＭＦ兵装を手に並ぶアルファチームのアバ

ローナ達が浮かんでいる。ＤＤＳ－１の守りについていたコイツらがここに来ているということは、どうやら俺は時間を稼ぐことに成功したらしい。間一髪だった。

とはいえこの恐ろしく長く感じた戦闘も、実際にかかった時間は僅か十数分。随分と濃い時間を過ごしたようだ。しかしリトルか…そう呼ばれるとなんだか思いだしちまうなぁ。つーか接触通信してきたってことは通信繋がって無い？ああ、そういや通信封鎖したままだった。

「――ようやく来たか……遅いぞ馬鹿もの共、め……」

《すいませんな。社長が通した鉄屑をジャンク屋に引き渡せるようにするのに手間取りましてね。給料カットとかは勘弁してくだせぇ》

アルファチームの隊長は、手に持った槍で此方に近寄って来ていたガジェットを貫きながら謝ってきた。頑丈さとベルカ式お得意の武器強化魔法、槍を基点に発生させる鋭い三角錐状のシールドにより貫く事に主眼を置いた試作兵装。またカートリッジ機構を取り入れたことでＡＭＦ影響下でも動作する。

アバローナの持つ質量と推進力が組み合わさる事で、１型２型なら数体並んでも撃破できるらしい。現に目の前で実践されているので、試作兵装ランスタイプは問題ないようだ。そして遠目には他のチームも個々に違った試作の魔導兵装を手にガジェット達を翻弄している。

ベータチームの試作兵装は、一言で言うなら大砲だ。二人一組になって戦車砲サイズの円柱を抱え、二人分の魔力コンデンサーから魔力を供給し発射する。ただこれにより発射される魔導砲は二人分の魔力が籠った砲撃魔法という訳では無く、内部術式で魔力素子の励起作用を起す事で威力を二乗化している。

簡単に言えば、威力が倍プッシュなのだが、その分制御がアホみたく難しく、機械的な補助を加えてあるとはいえ、発射には通常の二乗分時間がかかったりするので、色々トントンだったりする。しかも瞬間発揮魔力量も同程度じゃないと励起できずに二乗化が起こらない……のだが、何故か普通に使ってるね。すごいね。

ガンマチームの試作魔導兵装は……あー、なんていうかな。まずボーリングの玉の二周り位大きいのを想像して欲しい。ソレに魔力タービンロケット内蔵して長い合金製のチェーンを付けたシンプルかつセクシーな……すごく、ガン◯ムハンマーです。ちなみにスパイクは魔法で代用。

チェーン部分は召喚魔法・錬鉄召喚なので伸ばそうと思えば魔力が続く限り伸びる。ハンマーの挙動もアバローナに動作プログラムが装備されているし、物質加速魔法の応用で操作できる。ぶん回したり絡みつかせたりと結構多彩な攻撃が可能らしく、三体ほど纏めてガジェットをホームランしていた。

そしてデルタチーム、ベースはアルアッソーと同じ銃型デバイス。但しアバローナからの魔力供給が可能で電磁加速可能なように補助する機能を搭載している。これにより中距離での連射性能と命中精度は格段に向上。多重弾殻弾の形成は術者の技量によるところが大きいので2～3発が限度だが、フルではなくセミオートなら問題無

い。

また特筆すべき点はもう一つある、彼らの銃型デバイスの銃身部分。銃ならちょうど銃剣を装備する位置に、超硬質合金製の刃が何十と連なった鎖鋸が装備されている。アバローナのバッテリーから供給される電力で高速回転させる鎖鋸は、下手な金属板ならば切断してしまう威力を持っていた。

元々対ＡＭＦ用に設計したのだし、それくらい出来て当たり前。銃型デバイスであるが銃ではないので質量兵器ではないし、銃剣ではなくチェーンソウが付いているだけなのでデバイスと工具を組み合わせたという感じで逃げ道はいくらでもある。むしろアルファやガンマの方が質量兵器っぽいかもしれない。

――そしてこれらの矛先はガジェットに向けられ、遺憾なく威力を発揮した。

《社長、一時後退してください。ここで支えるのは――》

「判っている。ベータチーム、マザーグースへの道を開け、ベータ攻撃後アルファが先行しソレをデルタが援護。ガンマは殿を頼む」

《《《《給料出るなら喜んで》》》》

こうして時間稼ぎは終わり、俺は消耗した身体を引き摺り一時ＤＳ－１の元へと帰還する。装甲シールドはひび割れだらけ。絶え間ない攻撃に修復される時間がなかったんだろう。ＡＭＦというジ

ャミングもあったわけだしな。むしろ腕に穴が開いた程度だったからまだマシだったんだろうな。

撤退する俺を守るアバローナ部隊の中心で飛行しながら、俺はあのＡＭＦ影響圏で起こったあの事態について思考していた。なるほど、ＡＭＦはあらゆる魔力結合、魔法効果発生を阻害及び無効化する。そして俺の身体は一見すれば人と変わらないが、実際は使い魔の肉体と同じく魔力で造られた身体とそう変わらない。

あの異常な再生力は魔力があるからこそのものなのだ。しかしＡＭＦ影響下ではこの再生という行為が魔法効果とみなされるのだろう。ＢＡに穴が開いていた事でＡＭＦの影響が直に肉体に作用した。仮説だがこう考えればＢＡがふさがった時に傷も治った…いや再生したのも理解できる。

果たしてＡＭＦの影響が全身に及んだ時、俺は再生可能なのだろうか？ＡＭＦの影響が消えれば再生されるのだろうか？塵一つ残さず消える死が訪れる可能性があるので実験する事はできない。最近色々とあったからか死ぬことに対しての恐怖が殆ど無いが、俺が死ぬとリンが死ぬ。リニスが消える。

それにはやてやヴォルケンズ、なのはやフェイト、クロノにユーノにあいすべきドミトーリの社員達。彼らと別れてしまうことに対する恐れがある。ある意味で死なない身体になった事で死よりも彼らを悲しませることの方が怖い。何よりも、年が離れた妹のアリス。彼女を一人にしたくない。

あはは、ありがとうよガジェット。俺の弱点を教えてくれて。

ありがとうよガジェット、死なないから死ぬわけにはいかない身

体に変えてくれて。
――――これでまた、生きる意味が見つかるというものだ。
……何だかまたこんなんかよと、目から心の汗が噴き出したのだった。

「無事に航海が終わると思うたか！中編3」（後書き）

あ～う～、だれか、だれかオラに時間と元気とモチベーションを分けてくれ。

そう思わずベランダから叫びたくなった人、それが私です。

しかし生活リズムの変化でまさか一カ月も書けなくなるとは思わなかったです。

モチベーションの低下ってのは恐ろしいですね。

書けなくてイラついて書こうとして書けなくてを繰り返してたような気がしますハイ。

次回の分も書けていないので、こんな小説でも待っていて下さる方がいると思うと泣けてきます。

なるべく頑張りますが、また間隔が開いてしまったら御免なさい。

ソレでは失礼。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1752n/

妄想戦記2nd Mission

2011年10月21日19時10分発行